

牛頸川治水ダム関係埋蔵文化財調査報告

# 牛頸窯跡群

I

大野城市大字牛頸所在窯跡群の調査

福岡県文化財調査報告書

第 80 集

1 9 8 8

福岡県教育委員会

# 牛 頸 窯 跡 群

大野城市大字牛頸所在窯跡群の調査



1. 牛頸窯跡群 全景 1 (北上空から) 1980年撮影



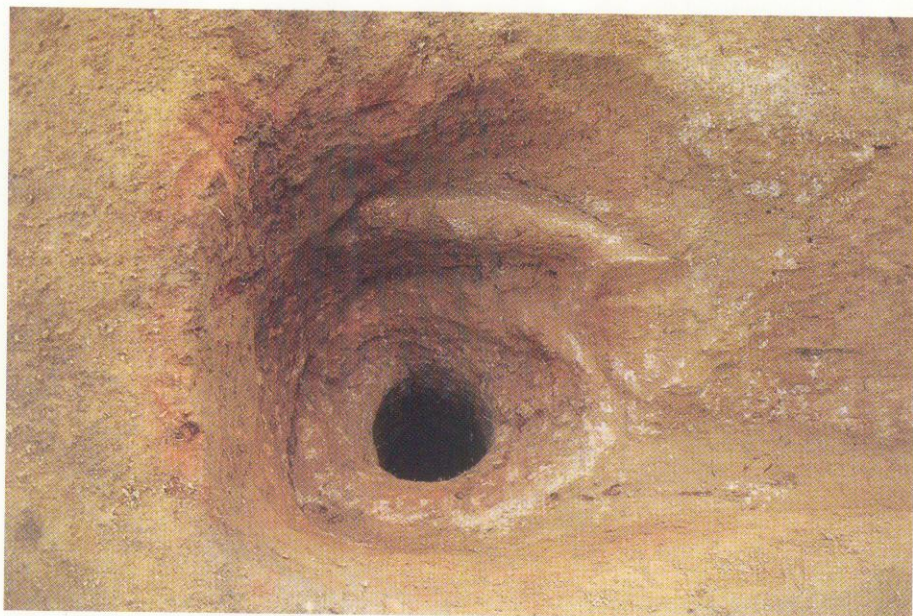
2. 牛頸窯跡群 全景 2 (南上空から) 1984年撮影



1. B-2地区 全景（北上空から）



2. B-2地区 23号～26号窯跡



1. A-3地区 4号窯跡煙出し部



2. A-3地区 4号窯跡焼成部天井補修状態



1. A-3地区 5号窯跡



2. C地区 36号窯跡燃烧部左侧石組

## 序

この報告書は、牛頸川治水ダム建設に際し、福岡県土木部河川開発課と協議の結果やむなく開発される地域の埋蔵文化財を昭和57年度から発掘調査した記録の一部であります。

今回の報告は、昭和57年度から昭和60年度まで実施した井手窯跡群・足洗川窯跡群・道ノ下窯跡群を内容とするもので『牛頸窯跡群Ⅰ』として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のいくものではありませんが、本報告書を通して埋蔵文化財に対し、一層の御理解と御協力をいただければ幸いです。

なお、窯跡の保存と調査に対して御協力をいただいた牛頸ダム建設事務所、大野城市教育委員会、牛頸区、地元の方々をはじめ、関係各位の御援助と、御配慮により本書を発刊することができましたことを心から感謝申し上げます。

昭和63年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 竹井 宏

## 例 言

1. 本書は、昭和57年10月26日から昭和61年7月4日までに、福岡県教育委員会が福岡県土木部河川開発課の執行委任を受けて、牛頸川治水ダム建設に伴い破壊される埋蔵文化財を発掘調査した1冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県大野城市大字牛頸所在の牛頸窯跡群で、A-1・2・3地区、B-2地区、C地区、G地区、J地区、K地区、L地区を、『牛頸窯跡群Ⅰ』として報告するものである。
3. 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

I	池辺元明
II	池辺元明
III - 1	池辺元明
2	川述昭人
3	川述昭人
4	森田 勉
5	赤司善彦
6	川述昭人
7	池辺元明
8	川述昭人・池辺元明
9	池辺元明
4. 地形図・実測図の作製にあたっては、福岡県那珂土木事務所作製の測量成果表を利用し、基準点を設け、国土調査法第Ⅱ座標系で示した。本書に用いている方位は座標北である。
5. 整理作業・報告書作製は、九州歴史資料館で行ない、担当者のほか、遺物整理に岩瀬正信、遺物実測に若松三枝子・鬼木つや子、整図に豊福弥生・鶴田佳子があたった。遺物写真の撮影は、九州歴史資料館技術主査石丸洋とその指導により須原悦子があたった。また、B-2地区・C地区の空中写真は(有)空中写真稲富の撮影による。
6. 巻頭図版のうち1-1は牛頸ダム建設事務所、1-2は(有)空中写真稲富の提供による。
7. 本文中の遺物番号は、窯跡群(地区)ごとに通し番号とし、挿図・図版・遺物一覧表の番号と統一した。
8. 本書の編集は、池辺元明があたった。

〈題字 與田英昭〉



# 本文目次

## 序

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の経過と組織	2
II	窯跡群の位置と環境	12
III	遺構と遺物	17
1	A-1地区（井手窯跡群）の調査	18
(1)	調査の概要	18
(2)	1号窯跡	19
(3)	灰原	20
(4)	小結	26
2	A-2地区（井手窯跡群）の調査	27
(1)	調査の概要	27
(2)	2号窯跡	27
(3)	3号窯跡	27
(4)	小結	34
3	A-3地区（井手窯跡群）の調査	34
(1)	調査の概要	34
(2)	4号窯跡	36
(3)	5号窯跡	38
(4)	6号窯跡	39
(5)	7号窯跡	41
(6)	8号窯跡	42
(7)	9号窯跡	44
(8)	灰原	45
(9)	小結	49
4	B-2地区（井手窯跡群）の調査	51

(1) 調査の概要	51
(2) 23号窯跡	52
(3) 24号窯跡	57
(4) 25号窯跡	60
(5) 26号窯跡	62
(6) 27号窯跡	65
(7) 28号窯跡	66
(8) 灰原	70
(9) 小結	102
5 C地区（足洗川窯跡群）の調査	103
(1) 調査の概要	103
(2) 34号窯跡	103
(3) 35号窯跡	107
(4) 36号窯跡	108
(5) 37号窯跡	112
(6) 灰原	114
(7) 小結	122
6 G地区（道ノ下窯跡群）の調査	123
(1) 調査の概要	123
(2) 10号窯跡	124
(3) 11号窯跡	125
(4) 12号窯跡	128
(5) 13号窯跡	131
(6) 灰原	132
(7) 小結	134
7 J地区（道ノ下窯跡群）の調査	135
(1) 調査の概要	135
(2) 50号窯跡	137
(3) 灰原	138
(4) 小結	142
8 K地区（道ノ下窯跡群）の調査	143
(1) 調査の概要	143
(2) 14号窯跡	143

(3) 15号窯跡 .....	147
(4) 16号窯跡 .....	149
(5) 17号窯跡 .....	151
(6) 18号窯跡 .....	154
(7) 灰原 .....	156
(8) その他の遺構 .....	166
(9) 小結 .....	167
9 L地区（道ノ下窯跡群）の調査 .....	168
(1) 調査の概要 .....	168

## 図 版 目 次

		本文対照頁
巻頭図版 1	1. 牛頸窯跡群 全景 1 (北上空から) .....	1
	2. 牛頸窯跡群 全景 2 (南上空から) .....	2
巻頭図版 2	1. B-2 地区 全景 (北上空から) .....	51
	2. B-2 地区 23~26号窯跡 .....	51
巻頭図版 3	1. A-3 地区 4号窯跡煙出し部 .....	36
	2. A-3 地区 4号窯跡焼成部補修状態 .....	36
巻頭図版 4	1. A-3 地区 5号窯跡 .....	38
	2. C地区 36号窯跡燃烧部左側石組 .....	108

### A-1 地区

図 版 1	1. A-1 地区伐採後全景 (南から) .....	18
	2. A-1 地区 1号窯発掘前 (南から) .....	19
図 版 2	1. 1号窯遺構・灰原検出状態 .....	20
	2. 1号窯発掘後 .....	19
図 版 3	A-1 地区出土土器 1 .....	22
図 版 4	A-1 地区出土土器 2 .....	22
図 版 5	A-1 地区出土土器 3 .....	22

### A-2 地区

図 版 6	1. A-2 地区伐採後全景 (北から) .....	27
	2. A-2 地区裾部確認調査状況 (北から) .....	27
図 版 7	3. 3号窯灰原検出状態 .....	27
	4. 3号窯灰原土器出土状態 .....	27
図 版 8	A-2 地区出土土器 1 .....	27
図 版 9	A-2 地区出土土器 2 .....	29

### A-3 地区

図 版 10	1. A-3 地区調査前全景 (北から) .....	34
	2. 4号窯跡陥没状態 .....	36
図 版 11	1. 4号・5号・7号窯跡 .....	36

	2. 4号窯跡焚口	36
図版 12	1. 4号窯跡天井部補修状態	36
	2. 4号窯跡天井部補修部分拡大	36
図版 13	1. 4号窯跡排水溝	37
	2. 4号窯跡煙道部	37
図版 14	1. 5号窯跡	38
	2. 5号窯跡燃烧部	38
図版 15	1. 7号・8号・9号窯跡	41
	2. 7号・8号・9号窯跡	41
図版 16	1. 7号窯跡	41
	2. 燃烧部右側立石	41
	3. 燃烧部左側立石	41
図版 17	1. 8号窯跡	42
	2. 9号窯跡	44
図版 18	A-3地区出土土器 1	45
図版 19	A-3地区出土土器 2	46

## B-2地区

図版 20	1. B-2地区全景(空中写真)	51
	2. B-2地区発掘区近景(空中写真)	51
図版 21	1. 23~28号窯全景(東から)	51
	2. 23~28号窯全景(東南から)	51~66
図版 22	1. 23~28号窯全景(空中写真)	51~66
	2. 23~28号窯全景(東から)	51~66
図版 23	1. 23~26号窯(空中写真)	51~62
	2. 23~26号窯近景(空中写真)	51~62
図版 24	1. 23号窯全景(東から)	52
	2. 25号窯全景(東から)	52
図版 25	1. 27号窯全景(空中写真)	63
	2. 28号窯全景(空中写真)	66
図版 26	B-2地区出土土器 1	56
図版 27	B-2地区出土土器 2	57・60
図版 28	B-2地区出土土器 3	60・62・63・66

図版 29	B-2地区出土土器 4	69・70
図版 30	B-2地区出土土器 5	70・72
図版 31	B-2地区出土土器 6	70・72
図版 32	B-2地区出土土器 7	70・72
図版 33	B-2地区出土土器 8	70・72
図版 34	B-2地区出土土器 9	72
図版 35	B-2地区出土土器 10	72
図版 36	B-2地区出土土器 11	72
図版 37	B-2地区出土土器 12	72
図版 38	B-2地区出土土器 13	72・98
図版 39	B-2地区出土土器 14	98
図版 40	B-2地区出土土器 15	98
図版 41	B-2地区出土土器 16	98・100

## C地区

図版 42	1. C地区伐採後全景 (南から)	103
	2. C地区全景 (空中写真)	103
図版 43	1. 34~37号窯跡	103~112
	2. 34~37号 (空中写真)	103~112
図版 44	1. 灰原調査状態	114
	2. 灰原堆積状態	114
図版 45	1. 34号窯跡	103
	2. 34号窯床面遺物出土状態	103
図版 46	1. 35号窯跡	107
	2. 35号窯燃焼部断面	107
図版 47	1. 36号窯横断面	108
	2. 36号窯跡	108
図版 48	1. 36号窯燃焼部右側石組 1	109
	2. 36号窯燃焼部右側石組 2	109
図版 49	1. 36号窯燃焼部左側石組 1	109
	2. 36号窯燃焼部左側石組 2	109
図版 50	C地区出土土器 1	107・110
図版 51	C地区出土土器 2	113・114

図版 52	C地区出土土器 3	115・117・119
図版 53	C地区出土土器 4	119・120
図版 54	C地区出土土器 5	120・121

## G地区

図版 55	1. G地区伐採後全景（南西から）	123
	2. G地区裾部確認調査全景（西から）	123
図版 56	1. G地区調査全景（南西から）	123
	2. G地区灰原検出状態（南から）	123
図版 57	1. 10号窯跡	124
	2. 10号窯置台検出状態	124
図版 58	1. G地区発掘後全景	123
	2. 11号・12号窯跡	125・128
図版 59	1. 11号窯跡	125
	2. 11号窯須恵器出土状態	125
図版 60	1. 11号窯跡	125
	2. 12号窯跡	128
図版 61	1. 12号窯置台須恵器出土状態	129
	2. 13号窯跡	131
図版 62	G地区出土土器 1	128
図版 63	G地区出土土器 2	131
図版 64	G地区出土土器 3	134

## J地区

図版 65	1. J地区調査前全景（西から）	135
	2. J地区50号窯検出状態（西から）	137
図版 66	1. J地区50号窯跡灰原除去後（西から）	138
	2. J地区50号窯跡	137
図版 67	J地区出土土器 1	138
図版 68	J地区出土土器 2	142

## K地区

図版 69	1. K地区発掘前全景（南西から）	143
-------	-------------------	-----

	2. K地区発掘後全景（南から）	143
図版 70	1. K地区灰原検出状態	156
	2. 灰原縦断土層	156
図版 71	1. 14号窯跡検出状態	143
	2. 14号窯跡	143
図版 72	1. 14号窯煙道部	143
	2. 14号窯煙道部須恵器出土状態	143
図版 73	1. 14号窯B煙道部内の置台	143
	2. 14号窯B煙道部検出状態	143
図版 74	1. 15号窯跡	147
	2. 15号窯跡焚口	147
図版 75	1. 16号窯跡	149
	2. 16号窯跡煙道部	149
図版 76	1. 17号窯跡	151
	2. 17号窯置台須恵器出土状態	151
図版 77	1. 18号窯跡	154
	2. 楕円形土壇	166
図版 78	K地区出土土器 1	147
図版 79	K地区出土土器 2	151
図版 80	K地区出土土器 3	154
図版 81	K地区出土土器 4	158
図版 82	K地区出土土器 5	158
図版 83	K地区出土土器 6	158
図版 84	K地区出土土器 7	166

## L地区

図版 85	1. L地区調査前全景（西から）	168
	2. L地区調査前全景（東南から）	168
図版 86	1. L地区確認調査北斜面全景	168
	2. L地区確認調査南斜面全景	168



## 挿 図 目 次

第 1 図	牛頸窯跡群地形図 (1/4,000)	折込
第 2 図	牛頸ダム建設地及び発掘調査地点 (1/6,000)	10
第 3 図	窯跡群分布図 (1/25,000)	13
第 4 図	窯体各部の名称・計測点模式図	17
第 5 図	須恵器各部名称・計測点模式図	18

### A-1 地区

第 6 図	A-1 地区地形図 (1/400)	19
第 7 図	1号窯跡地形図 (1/250)	20
第 8 図	1号窯跡実測図 (1/40)	21
第 9 図	1号窯跡灰原土層図 (1/80)	22
第 10 図	灰原出土土器実測図① (1/3)	23
第 11 図	灰原出土土器実測図② (1/3)	24
第 12 図	灰原出土土器実測図③ (1/3)	25

### A-2 地区

第 13 図	A-2 地区地形図 (1/750)	28
第 14 図	3号窯跡灰原土層図 (1/80)	29
第 15 図	灰原出土土器実測図① (1/3)	30
第 16 図	灰原出土土器実測図② (1/3)	31
第 17 図	灰原出土土器実測図③ (1/3)	32
第 18 図	灰原出土土器実測図④ (1/3)	33

### A-3 地区

第 19 図	A-3 地区地形図 (1/400)	35
第 20 図	A-3 地区窯跡配置図 (1/250)	36
第 21 図	4号窯跡実測図 (1/40)	折込
第 22 図	4号窯出土土器実測図 (1/3)	37
第 23 図	5号窯跡実測図 (1/40)	39
第 24 図	7号窯跡実測図 (1/40)	40

第 25 図	7号窯跡土層図 (1/40)	41
第 26 図	8号窯跡実測図 (1/40)	43
第 27 図	9号窯跡実測図 (1/40)	45
第 28 図	7号・8号・9号窯出土土器実測図 (1/3)	46
第 29 図	5号灰原・6号窯東一括出土土器実測図 (1/3)	47
第 30 図	4～9号窯灰原出土土器実測図 (1/3)	48

## B-2地区

第 31 図	B-2地区地形図 (1/400)	50
第 32 図	23号～28号窯跡地形図 (1/250)	51
第 33 図	皿の法量	52
第 34 図	高杯の法量	52
第 35 図	土器分類 (1/4)	53
第 36 図	23号窯跡実測図 (1/40)	54
第 37 図	23号窯出土土器実測図 (1/3)	55
第 38 図	24号窯跡実測図 (1/40)	56
第 39 図	24号窯出土土器実測図① (1/3)	58
第 40 図	24号窯出土土器実測図② (1/3)	59
第 41 図	25号窯跡実測図 (1/40)	61
第 42 図	26号窯跡実測図 (1/40)	63
第 43 図	27号窯跡実測図 (1/40)	64
第 44 図	25～27号窯出土土器実測図 (1/3)	65
第 45 図	28号窯跡実測図 (1/40)	67
第 46 図	28号窯出土土器実測図 (1/3)	68
第 47 図	B-2地区灰原割付図 (1/300)	69
第 48 図	灰原土層図① (1/80)	70
第 49 図	灰原土層図② (1/80)	71
第 50 図	灰原出土土器実測図① (1/3)	73
第 51 図	灰原出土土器実測図② (1/3)	74
第 52 図	灰原出土土器実測図③ (1/3)	75
第 53 図	灰原出土土器実測図④ (1/3)	76
第 54 図	灰原出土土器実測図⑤ (1/3)	77
第 55 図	灰原出土土器実測図⑥ (1/3)	78

第 56 図	灰原出土土器実測図⑦ (1/3)	79
第 57 図	灰原出土土器実測図⑧ (1/3)	折込
第 58 図	灰原出土土器実測図⑨ (1/3)	80
第 59 図	灰原出土土器実測図⑩ (1/3)	81
第 60 図	灰原出土土器実測図⑪ (1/3)	82
第 61 図	灰原出土土器実測図⑫ (1/3)	83
第 62 図	灰原出土土器実測図⑬ (1/3)	84
第 63 図	灰原出土土器実測図⑭ (1/3)	85
第 64 図	灰原出土土器実測図⑮ (1/3)	86
第 65 図	灰原出土土器実測図⑯ (1/3)	87
第 66 図	灰原出土土器実測図⑰ (1/3)	88
第 67 図	灰原出土土器実測図⑱ (1/3)	折込
第 68 図	灰原出土土器実測図⑲ (1/3)	89
第 69 図	灰原出土土器実測図⑳ (1/3)	90
第 70 図	灰原出土土器実測図㉑ (1/3)	91
第 71 図	灰原出土土器実測図㉒ (1/3)	92
第 72 図	灰原出土土器実測図㉓ (1/3)	93
第 73 図	灰原出土土器実測図㉔ (1/3)	94
第 74 図	灰原出土土器実測図㉕ (1/3)	95
第 75 図	灰原出土土器実測図㉖ (1/3)	96
第 76 図	灰原出土土器実測図㉗ (1/3)	97
第 77 図	灰原出土土器実測図㉘ (1/3)	折込
第 78 図	灰原出土土器実測図㉙ (1/4)	98
第 79 図	灰原・包含層出土土師器 (1/3)	99
第 80 図	重ね焼き・穿孔土器実測図 (1/3)	99
第 81 図	B-2 地区出土須恵器拓影① (1/3)	100
第 82 図	B-2 地区出土須恵器拓影② (1/3)	101

### C 地区

第 83 図	C 地区地形図 (1/1,000)	104
第 84 図	C 地区窯跡配置図 (1/250)	105
第 85 図	34号窯跡実測図 (1/40)	折込
第 86 図	34号窯出土土器実測図 (1/3・1/6)	106

第 87 图	35号窯跡実測図 (1/40)	108
第 88 图	36号窯跡実測図 (1/40)	折込
第 89 图	36号窯土層図 (1/60)	109
第 90 图	36号窯出土土器実測図 (1/3・1/6)	110
第 91 图	36号窯前面堆積土出土土器実測図 (1/3・1/6)	111
第 92 图	37号窯跡実測図 (1/40)	113
第 93 图	37号窯出土土器実測図 (1/3・1/6)	114
第 94 图	灰原土層図 (1/80)	115
第 95 图	灰原出土土器実測図① (1/3)	116
第 96 图	灰原出土土器実測図② (1/3)	117
第 97 图	灰原出土土器実測図③ (1/6)	118
第 98 图	灰原出土土器実測図④ (1/3)	119
第 99 图	灰原出土土器実測図⑤ (1/3・1/6)	120
第 100 图	灰原出土土器実測図⑥ (1/6)	121

## G地区

第 101 图	G地区地形図 (1/400)	123
第 102 图	G地区窯跡配置図 (1/250)	124
第 103 图	10号窯跡実測図 (1/40)	125
第 104 图	11号窯跡実測図 (1/40)	126
第 105 图	11号窯出土土器実測図 (1/3)	127
第 106 图	12号窯跡実測図 (1/40)	129
第 107 图	13号窯跡実測図 (1/40)	130
第 108 图	12号・13号窯出土土器実測図 (1/3)	131
第 109 图	G地区灰原土層図 (1/60)	132
第 110 图	灰原出土土器実測図 (1/3)	133

## J地区

第 111 图	J地区・I地区地形図 (1/1,000)	折込
第 112 图	J地区地形図 (1/250)	135
第 113 图	50号窯跡実測図 (1/40)	136
第 114 图	50号窯灰原土層図 (1/80)	137
第 115 图	窯内・前庭部・灰原出土土器実測図① (1/3)	139

第 116 図	灰原出土土器実測図② (1/3)	140
第 117 図	灰原出土土器実測図③ (1/3)	141
第 118 図	灰原出土土器実測図④ (1/3)	142

## K地区

第 119 図	K地区地形図 (1/400)	144
第 120 図	K地区窯跡配置図 (1/250)	145
第 121 図	14号窯跡実測図 (1/40)	折込
第 122 図	14号窯出土土器実測図 (1/3)	146
第 123 図	15号窯跡実測図 (1/40)	148
第 124 図	16号窯跡実測図 (1/40)	折込
第 125 図	16号窯出土土器実測図 (1/3)	150
第 126 図	17号窯跡実測図 (1/40)	152
第 127 図	17号窯出土土器実測図 (1/3)	153
第 128 図	18号窯跡実測図 (1/40)	155
第 129 図	18号窯出土土器実測図 (1/3)	156
第 130 図	灰原土層図 (1/80)	157
第 131 図	灰原出土土器実測図① (1/3)	159
第 132 図	灰原出土土器実測図② (1/3)	160
第 133 図	灰原出土土器実測図③ (1/3)	161
第 134 図	灰原出土土器実測図④ (1/3)	162
第 135 図	灰原出土土器実測図⑤ (1/3)	163
第 136 図	灰原出土土器実測図⑥ (1/3)	164
第 137 図	灰原出土土器実測図⑦ (1/3)	165
第 138 図	土壙・不明遺構実測図 (1/40)	166
第 139 図	円形土壙出土土器実測図 (1/3)	167

## 表 目 次

表 1	牛頸川治水ダム建設地内発掘調査地区一覧表	11
表 2	牛頸窯跡群発掘調査一覧表	14・15
表 3	遺物一覧表	171~246

# I はじめに

## 1 調査にいたる経過

牛頸<sup>うしくび</sup>ダムは、御笠川水系牛頸川の福岡県大野城市大字牛頸に治水ダムとして建設されるものである。

牛頸川流域は近年急速に都市化が進み、商工業、住居地域として発展しているが、梅雨期、台風期にはしばしば洪水による被害が発生している。特に昭和48年7月の局地的集中豪雨では、死傷者5名を含め、家屋の流失や浸水は3,800戸におよび田畑の流失、公共施設等に大きな被害を与えた。このため河川改修工事が計画されたが牛頸川下流の沿岸には、一般家屋・住宅団地・倉庫・工場等が密集し、拡幅による全面改修は困難であるため上流にダムを建設することによって洪水調整を行なうと共に既得用水の補給等流水の正常な機能の維持と増進が計られた。

ダム建設に伴う、文化財保護法第57条の3の規定による通知書は、福岡県知事亀井光から昭和53年8月29日付で提出され、同年10月17日付文化庁長官犬丸直から、事前の発掘調査、保存に十分配慮する旨通知があった。これを受けて福岡県教育庁管理部文化課と福岡県土木部河川開発課と協議が開始される。

牛頸一帯に須恵器を生産した窯跡が分布していることは、大正年間より知られていた。過去数回の分布調査や、人口増加による宅地造成、道路建設、学校建設等の開発によって100基をこえる窯跡の発掘調査が実施され次第にその全容が明らかにされつつあった。

しかしダム建設予定地の窯の分布については、山・谷が深く、市道・林道に面した谷の分布状態しか判明しておらず不十分であった。昭和54年4月と昭和55年3月に文化課職員を派遣して予定地の詳細分布調査を実施した。その結果、窯跡の実数は把握できないがほぼ全域の谷の沢内には須恵器の散布がみられ、また広範囲にわたる灰原の存在から約100基前後の窯跡が予想された。特に土捨場では小さく入り込んだすべての谷に灰原を確認した。立地条件も良好で、少なくとも30基～50基の窯跡が推定された。

この分布調査をもとに昭和55年9月18日、同10月13日に河川開発課、牛頸ダム建設事務所、県文化課、大野城市教育委員会の間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議及び現地打合せが行なわれ、市道付替・工事地区・土捨場の現地保存が不可能な地域の記録保存措置を行なうことになり、発掘調査は福岡県教育委員会が県土木部河川開発課の執行委任を受けて昭和56年度から実施することになった。

また、水没池、常時満水位（標高117,700m）から上位の窯跡の保存問題、出土品の整理・保管、報告書作成については別途協議を行うことになった。これを受け文化課では予算書の作成、

現場事務所設置場所の選定、作業員の手当等を行ない調査体制を整えた。しかし用地交渉、樹木の伐採その他の調整が不十分なため昭和56年度の発掘調査は見送られた。昭和57年9月4日になって、福岡県と大野城市・牛頸区との間で牛頸川治水ダム建設に関する協定が締結された。これを契機に調査も実施可能となり、調査地点、経費等の打合せを行い10月26日から現地調査を開始した。また協定と同時に覚書がかわされ、今後の協議、検討する事項の中に「文化財の保存」がおりこまれた。

## 2 調査の経過と組織

### (1) 昭和57年度（第1次）の調査

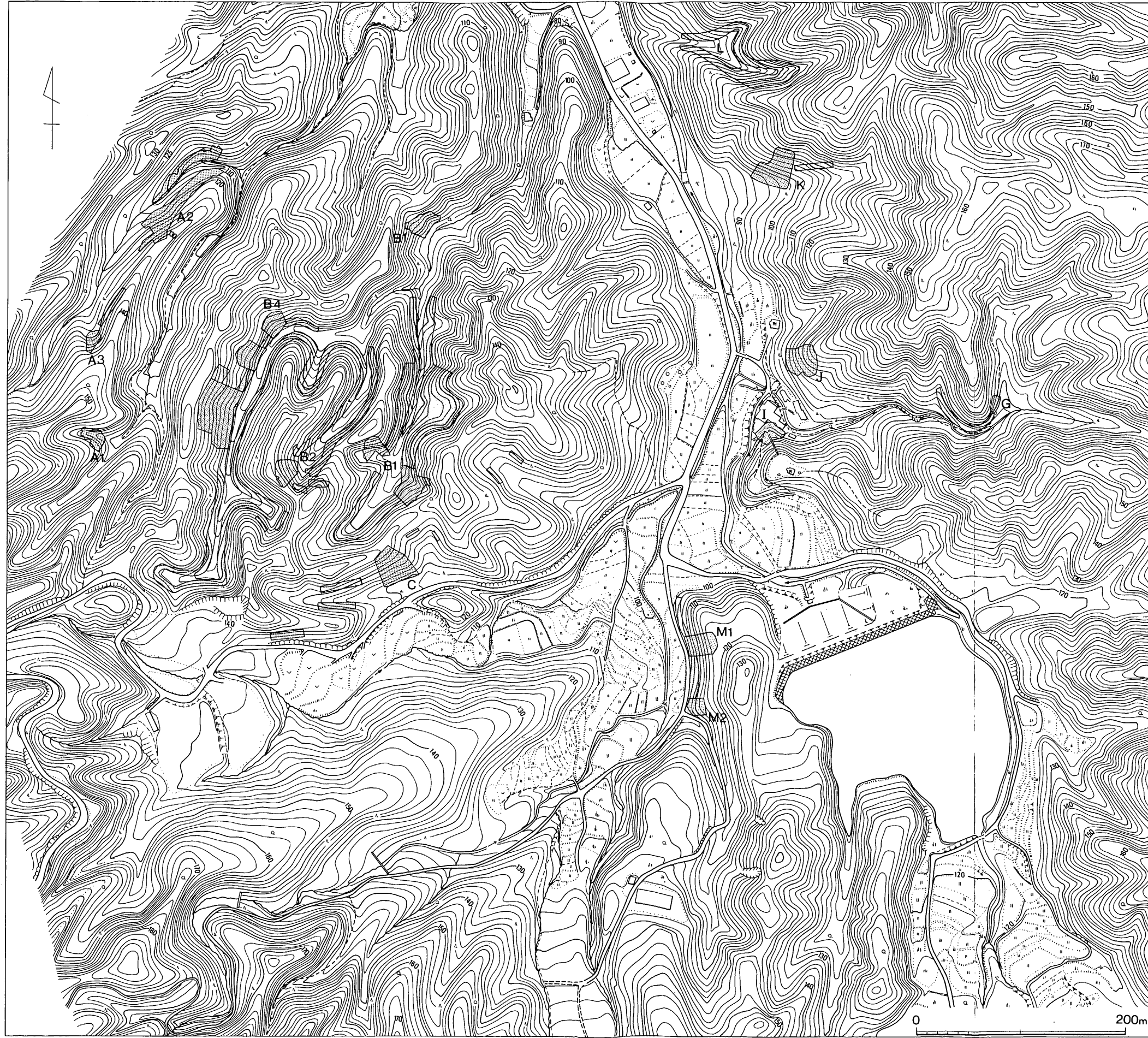
ダム建設事務所との協議の結果、本年度の調査は、ダム建設に伴って行われる付替市道304号の路線内の発掘調査を昭和57年10月26日から昭和58年3月7日まで実施した。

付替市道は牛頸川左岸の大野城市第1浄水場から足洗川林道に取り付けられるもので全長1.16kmである。第1浄水場から大きな谷が入りこれが二股に分れそれぞれ小谷をもつ。路線はこれらの谷を縫うように走る。A-1地区は東側の谷の一番奥の部分で須恵器片が最も多く散布していた所である。当初窯跡の位置が皆目見当がつかず苦慮したが、トレンチ調査の結果やつのことで斜面下部の凸部に1号窯跡を検出することができた。A-2地区は1地区の西側の谷の入口部分で灰原を2ヶ所確認した。窯の本体は路線外のため調査しなかった。A-3地区はA-2地区と同じ谷の奥の地点に位置する。路線外の斜面に広範囲に広がる灰原を確認したため斜面上部の路線内を詳査した所、地表が陥没し窯体から露出しているのを発見した。調査の結果6基の窯跡を検出することができた。内6号窯跡は路線外に遺存するため未調査。また4号・5号窯体の一部も路線外であったが地権者の承諾を得て完掘した。

昭和57年度の調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野 隆
	教育次長	森 英俊
	管理部長	安倍 徹
	文化課課長	藤井 功
	同課長補佐	中村 一世
	同参事補佐	内山 孝之
庶務	庶務係長(兼)	内山 孝之
	同主任主事	古賀 秀幸



第 1 図 牛頭窯跡群地形図 (縮尺 1/4,000)



発掘調査	同調査第一係長	宮小路 賀 宏
	同主任技師	川 述 昭 人
	同主任技師	池 辺 元 明
	調査補助員	高 田 一 弘
	同	日 高 正 幸

なお、下記の協力があつた。

二宮親卯・船越美直・後藤秀規・舟山良一（大野城市教育委員会）・戸渡茂（牛頸区長）・森山鉄男（牛頸ダム対策委員会）谷啓輔・八尋義則・村田俊昭・広瀬三郎（県河川開発課）・立野義幸・下川洋行・中村誠一・衛藤蒸二・堤晴夫（牛頸ダム建設事務所）・篠原幸次郎・高田繁雄（調査協力者）

## (2) 昭和58年度（第2次）の調査

58年度当初ダム建設事務所との協議の結果では、牛頸川左岸の付替市道について優先順位をつけられた土捨場の調査に入る予定であつたが杉・檜および雑木の伐採の進行が遅れ、調査開始予定の5月には実施できないという状況が生じた。このため再度協議を行ない、本年度の調査は牛頸川右岸の仮施設工事地区（G地区）、仮排水路・洪水吐建設予定地（K地区）、周辺市道（L地区）と左岸の工事用道路（C地区）の確認調査を行なうことになった。

G地区はダム内東北側の牛頸川右岸に位置し、東から西側の牛頸川に向つて開く谷の奥の南東側斜面上に4基の窯跡を検出した。K地区はダム堤体の北側に位置し牛頸川右岸では最も大きく開いた谷の北側の急斜面上部に5基の窯跡を検出した。L地区は調査対象地の最も北側に位置し谷は東から西に向つて開く。調査前の分布調査で谷の入口部分の沢に多くの須恵器が散乱しており数基の窯跡の遺存が推定されたが、裾部のトレンチ調査の結果路線内には、窯跡および灰原の確認はできず散乱した須恵器片の窯跡は路線外の南側斜面に存在することが判明した。C地区は牛頸川左岸の足洗川林道沿いに位置する、以前牧草地造成の際数基の窯跡が削平されその一部が牧草地の崖面に露出している。ここから東側のダム堤体に向つて工事用道路が建設されるため、トレンチ調査を行なつた。この結果須恵器が出土したため59年度に本調査を実施することになった。11月に入つて伐採の終了した土捨場（B-1地区）の地形測量と磁気探査を来年度に備て実施した。調査は5月6日に開始し12月20日に終了した。

昭和58年度の調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会

総 括	教 育 長	友 野 隆
	教 育 次 長	安 倍 徹

	管理部長	伊藤博之
	文化課課長	藤井功
	同課長補佐	中村一世
庶務	同庶務係長	松尾満
	同主任主事	古賀秀幸
発掘調査	同調査第一係長	宮小路賀宏
	同技術主査	柳田康雄
	同主任技師	池辺元明
福岡県教育庁南筑後教育事務所		
	社会教育課 技術主査	川述昭人
	調査補助員	日高正幸
遺物整理		岩瀬正信

なお、下記の協力があつた。

栗原和彦・佐々木隆彦（文化課調査二係）・西村康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）・賀川光夫（別府大学）・二宮親卯・船越美直・後藤秀規・舟山良一（大野城市教育委員会）藤井彊・森山鉄男（牛頸区）・谷啓輔・八尋義則・村田俊昭・伊藤国臣・原俊樹（県河川開発課）・立野義幸・下川洋行・古賀英樹・中村誠一・衛藤蒸二・堤晴夫（牛頸ダム建設事務所）・篠原有照・高田繁雄（調査協力者）

### (3) 昭和59年度（第3次）の調査

いよいよ窯跡が最も多く遺存すると推測される土捨場の調査開始である。前年度末の伐採後の分布調査の結果、須恵器片は沢内・斜面ともに多量に散布しており、当初の調査期間を修正する必要が生じていた。その中で4月行なつた、河川開発課・ダム建設事務所との協議では、土捨場（B地区）、および進入路（C地区）の調査は本年中に終了してほしいとの要望が出された。文化課は公共事業、受託事業を含め年間計画はその限度に達し調査人員の増員配置は困難な状況下に置かれ、現勢力での本年度調査終了は望めなかつた。このため文化課は、大宰府関連遺跡の調査に従事している九州歴史資料館調査課に調査を依頼したところ、牛頸窯跡群は大宰府関連の重要遺跡であるとの判断から、B-2地区の発掘調査の承諾を得ることができた。

B-1地区の発掘作業は急斜面のため非常に困難でかつ危険であつた。命綱・安全ベルトを用いて伐根・表土ハギ・遺構検出作業を続けた。その結果谷の一番奥の部分に7基と2基の窯跡のグループを検出した。急斜面のため灰原は地すべりをおこし残存状態はあまりよくなかつた。谷の入口付近では2基分の灰原を確認したが窯本体は土捨場用地外のため調査しなかつた。

B-2地区は、B-1地区に比べて須恵器片の散布は少なかったが裾部のトレンチ調査で谷の奥に灰原を確認し斜面上部で6基の窯跡を検出した。灰原の残存状態は良好で多量の須恵器が出土した。B-3地区は土捨場の中で最も小さな支谷であるが入口付近の沢で須恵器の散布が見られたので裾部のトレンチ調査を実施したが、窯跡や灰原は検出できなかった。B-4地区はB-1地区と同様に多量の須恵器が散布していた。丘陵裾部のトレンチ調査の結果、西側の急斜面に4ヶ所の灰原が検出された。灰原の一部の調査を実施して、他は来年度継続して調査を行なうことになった。C地区は足洗川林道に沿った南側の斜面で前年度のトレンチ調査で須恵器が出土している。トレンチを拡張した所、地すべり跡の崖面に窯体の一部を検出し調査の結果4基の窯跡を確認した。この内34号窯跡と36号窯跡は6mをこえる規模のもので、A-1地区4号窯跡と同様に大形品専用の焼成窯と考えられる。本年度の調査は4月24日から昭和60年2月28日まで行なった。

また11月3日の「文化の日」には大野城市教育委員会・福岡県教育委員会の共催で「市内遺跡巡り」を実施し、牛頸窯跡群の山の中の現場にも多数の市民が訪れ、急斜面をロープを使って登り窯跡をまのあたりに見学できることもあって熱心な人の列が終日つづいた。

昭和59年度の調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野 隆
	教育次長	安倍 徹
	管理部長	伊藤 博之
	文化課課長	前田 栄一
	同課長補佐	中村 一世
庶務	同庶務係長	松尾 満
	同主任主事	竹内 洋征
発掘調査	同調査第一係長	宮小路 賀宏
	同技術主査	柳田 康雄
	同主任技師	池辺 元明
	同技師	赤司 善彦
九州歴史資料館	調査課課長	石松 好雄
	同主任技師	横田 賢次郎
	同主任技師	森田 勉
福岡県教育庁福岡教育事務所		
社会教育課	技術主査	浜田 信也
	調査補助員	日高 正幸

調査補助員

中 島 達 也 (現小郡市教委)

遺物整理

岩 瀬 正 信

なお、下記の協力があつた。

久野英彦・船越美直・高橋裕司・舟山良一 (大野城市教育委員会) ・藤井彊・森山鉄男 (牛頸区) ・谷啓輔・八尋義則・村田俊昭・脊戸俊介・伊藤国臣・原俊樹 (県河川開発課) ・立野義幸・下川洋行・古賀英樹・中村誠一・衛藤蒸二・堤晴夫 (牛頸ダム建設事務所) ・間組・フジタ工業・竹中土木・松本組建設共同企業体・高田繁雄・空中写真稲富 (調査協力者)

#### (4) 昭和60年度 (第4次) の調査

B-4地区は、昨年度の裾部の確認調査で西側の急斜面裾で灰原が検出され、一部灰原の調査を実施した。今年度はこの継続で4グループ10基の窯跡および灰原の調査を行なった。すでにB-1・2・3地区の谷は土捨てが開始され、B-4地区のすぐ間際までダンプカー・ブルドーザー・スクレーパー等の騒音の中で急斜面に身体のバランスに気遣いながらの調査であった。J地区は牛頸川右岸、法照寺の北側の丘陵先端部に位置しておりダム堤体の建設のため削平される。調査の結果、斜面上部に窯跡1基を検出した。M-1地区は当初水没地としてあげられていたが、今年度になって工事計画の見なおしで、大野貯水池解体工事の際に削平されることになり、急遽発掘調査を実施し、斜面最上部で窯跡2基を検出した。灰原の残存状況はよく多量の須恵器が出土した。

この時点で、ダム建設に伴って消滅する窯跡群の調査は法照寺裏のI地区を残してすべて終了した。このためI地区の調査の時期、調査前からの懸案事項である水没地区の取り扱いについてダム建設事務所との協議をもった。その結果、I地区は法照寺の移転・解体が昭和60年度末をもって終了するため来年度早々調査に着手する。水没地は、常時満水位 (標高117,700m) 以下のM-2地区については調査を行ない、それ以上の高所にあるF・H地区の窯跡は調査せずに現地保存することになった。本年度の調査は5月7日から11月27日まで行なった。

昭和60年度の調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会

総 括

教 育 長

友 野 隆

教 育 次 長

安 倍 徹

管 理 部 長

大 鶴 英 雄

文 化 課 課 長

前 田 栄 一

同 課 長 補 佐

平 聖 峰

同 課 長 技 術 補 佐

宮 小 路 賀 宏

	同参事補佐	栗原和彦
庶務	同庶務係長(兼)	平聖峰
	同主任主事	竹内洋征
発掘調査	同調査第一係長(兼)	栗原和彦
	同技術主査	浜田信也
	同技師	飛野博文
	同臨時職員	日高正幸
福岡県教育庁福岡教育事務所		
	社会教育課 主任技師	池辺元明
	遺物整理	岩瀬正信

なお、下記の協力があった。

橋口達也(福岡県教育庁福岡教育事務所)・久野英彦・船越美直・高橋裕司・舟山良一(大野城市教育委員会)・藤井彊・森山鉄男(牛頸区)・権藤一夫・吉海透・脊戸俊介・長浜圭司・原俊樹(県河川開発課)・広瀬三郎・下川洋行・塚本稔男・永田利彦・衛藤蒸二・重松和行・畑野早猛(牛頸ダム建設事務所)・間組・フジタ工業・竹中土木・松本組建設共同企業体・高田繁雄・児島土太・空中写真稲富(調査協力者)

## (5) 昭和61年度(第5次)の調査

今年度の発掘調査は、牛頸川右岸法照寺裏(Ⅰ地区)と、大野貯水池西側の水没地(M-2地区)の2ヶ所を実施した。

Ⅰ地区は丘陵突端部の斜面上に位置する。窯体・灰原は寺の建設時に大きく削平され残存状況はわるい。窯跡は16基検出された。他の窯跡群が4～6基で構成されることを考えると、面積の割に非常に数が多い。窯の構築、操業上の好条件が整っていたためであろう。灰原は寺建設時に削平されほとんど残っていない。M-2地区は昨年度調査したM-1地区の隣接地で2基の窯跡を検出した。70号窯跡は斜面に並行し、等高線上に構築され、斜面下側の側壁に4個の補助燃焼孔を有する形態で、いわゆる木炭窯といわれるものである。本年度の調査は、4月22日から7月4日まで行なった。

Ⅰ地区調査中には、福岡県教育庁福岡教育事務所社会教育課指導班の諸氏が来られ、熱心に文化財の研修が行なわれた。また調査終了後、牛頸ダム事務所・河川開発課の諸氏、地元協力者、作業員の皆さんにスライド映写・調査概要の説明を行なった。

昭和61年度の調査関係者は次のとおりである。

福岡県教育委員会

総括	教育長	友野 隆
	教育次長	竹井 宏
	指導第二部長	淵上 雄幸
	文化課課長	窪田 康徳
	同課長補佐	平 聖峰
	同課長技術補佐	宮小路 賀宏
	同参事補佐	栗原 和彦
	同参事補佐	柳田 康雄
庶務	同庶務係長(兼)	平 聖峰
	同事務主査	竹内 洋征
	同主任主事	沢田 俊夫
発掘調査	同記念物係長(兼)	栗原 和彦
	同技術主査	浜田 信也
	同技師	飛野 博文
	同臨時職員	日高 正幸
	福岡県教育庁福岡教育事務所	
	社会教育課 主任技師	池辺 元明
	遺物整理	岩瀬 正信

なお、下記の協力があつた。

石松好雄・横田賢次郎・森田勉（九州歴史資料館）・高橋章（県文化課調査第二係）・橋口達也（福岡県教育庁福岡教育事務所）・久野英彦・船越美直・高橋裕司・舟山良一・徳本洋一（大野城市教育委員会）・森山鉄男（牛頸区長）・矢野光夫・前原晴賢・木村勝・脊戸俊介・長浜圭司・原俊樹（県河川開発課）・広瀬二郎・森田大・塚本稔男・永田利彦・重松和行・畑野早猛（ダム建設事務所）・間組・フジタ工業・竹中土木・松本組建設共同企業体・高田繁雄・児島土太・空中写真稲富（調査協力者）

## (6) 昭和62年度の整理

昭和57年度から61年度まで継続して行なつた発掘調査によつて出土した遺物総数は、プラスチック製パコンテナ（横×縦×深：39.7×60.9×14.9cm）で約1,200箱に達した。この整理作業は、58年度にA地区、59年度にG・K地区、60年度にB・C地区、61年度にB・J・I地区、62年度にB・M地区の遺物復原・実測、遺構の図面・写真整理を実施し、本年度末をもつて終了する予定である。また本年度は、報告書作成のため、遺物の写真撮影、遺構・遺物の挿

図製図等の作業も合せて行なった。

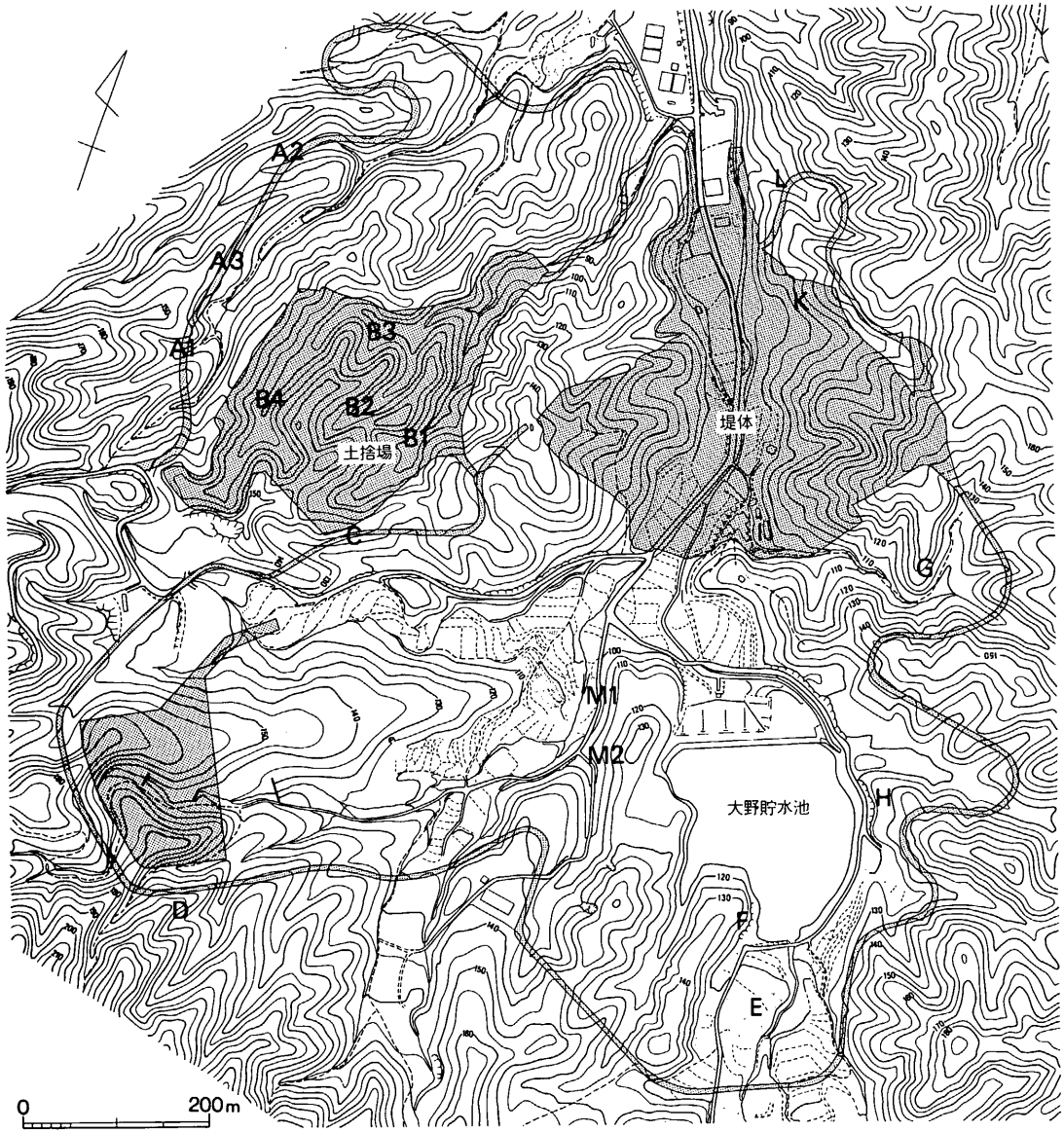
昭和62年度の関係者は、次のとおりである。

福岡県教育委員会

総 括	教 育 長	竹 井 宏
	教 育 次 長	大 鶴 英 雄
	指 導 第 二 部 長	大 平 岩 男
	同 参 事 (兼) 文 化 課 課 長	窪 田 康 徳
	文 化 課 長 補 佐	平 聖 峰
	同 課 長 技 術 補 佐	宮 小 路 賀 宏
	同 参 事 補 佐	栗 原 和 彦
	同 参 事 補 佐	柳 田 康 雄
庶 務	同 参 事 補 佐 (兼) 庶 務 係 長	加 藤 俊 一
	同 事 務 主 査	竹 内 洋 征
	同 主 任 主 事	沢 田 俊 夫
整 理	記 念 物 係 長 (兼)	栗 原 和 彦
	同 技 術 主 査	浜 田 信 也
	同 臨 時 職 員	日 高 正 幸
福岡県教育庁南筑後教育事務所		
	社 会 教 育 課 技 術 主 査	川 述 昭 人
福岡県教育庁 福岡教育事務所		
	社 会 教 育 課 技 術 主 査	池 辺 元 明
	九 州 歴 史 資 料 館 調 査 課 課 長	石 松 好 雄
	同 技 術 主 査	横 田 賢 次 郎
	同 技 術 主 査	森 田 勉
	同 主 任 技 師	赤 司 善 彦
	同 学 芸 第 一 課 技 術 主 査	石 丸 洋
		岩 瀬 正 信

なお、下記の協力があつた。

豊福弥生・鶴田佳子・若松三枝子・鬼木つや子・有馬信子・鬼木美知子・植山洋子・若松和子・森山シズ子・砥上トシ子・武藤睦子・関久江・原カヨ子・須原悦子・矢野明美・大田育子（九州歴史資料館）・舟山良一・向直也（大野城市教育委員会）・広瀬三郎・塚本稔男（牛頸ダム建設事務所）



第 2 図 牛頭ダム建設地及び発掘調査地点 (縮尺 1/6,000)



表1 牛頸川治水ダム建設地内発掘調査地区一覧表

地区	窯跡名	所在地	窯数	調査年・月	調査担当者	備考
A-1	井手窯跡群	大字牛頸字井手 487-2	1	57年10月	川述 昭人 池辺 元明	
A-2		大字牛頸字井手 405-1 405-2	2	57年11月	川述 昭人 池辺 元明	2・3号窯は、路線外のため未調査。
A-3		大字牛頸字井手 488-2	6	58年1月	川述 昭人 池辺 元明	6号窯体・4～9号窯灰原は路線外のため未調査。
B-1	井手窯跡群	大字牛頸字井手 481-1 481-4 482-1	11	58年11月 59年4月	池辺 元明	38・39号窯は区域外のため未調査。
B-2		大字牛頸字井手 482-2	6	59年7月	横田賢次郎 森田 勉	
B-3		大字牛頸字井手 482-2	0	59年9月	池辺 元明	遺構・灰原なし。
B-4		大字牛頸字井手 481-1	10	59年12月 60年5月	池辺 元明 赤司 善彦 飛野 博文	
C	足洗川窯跡群	字足洗川 613-6 613-11 613-14	4	58年11月 59年9月	赤司 善彦 池辺 元明	
D		字足洗川 569		59年11月	赤司 善彦 池辺 元明	窯跡群は区域外。 灰原の規模から推定5基。
E		字笹原 636-1 638 644		60年8月	池辺 元明	工房跡・住居跡を推定したが試掘の結果遺構なし。
F	笹原窯跡群	字笹原 667-130		58年5月	川述 昭人 池辺 元明	現地保存。常時満水位より上部に遺存。推定2～3基。
G	道ノ下窯跡群	字道ノ下 770-5	4	58年5月	川述 昭人 池辺 元明	
H	長者原窯跡群	字長者原 670-66 670-70		58年4月	川述 昭人 池辺 元明	現地保存。常時満水位より上部に遺存。推定5基。
I		字長者原 670-57 字道ノ下 728-1	16	61年4月	池辺 元明 赤司 善彦 浜田 信也	
J	道ノ下窯跡群	字道ノ下 731	1	60年8月	池辺 元明	
K		字道ノ下 764-1 764-2	5	58年6月	川述 昭人 池辺 元明 宮小路賀宏	
L		字道ノ下 763-3		58年5月	川述 昭人 池辺 元明	窯跡は路線外に遺存。 推定2基。
M-1	笹原窯跡群	字笹原 667-12	2	60年10月	池辺 元明 飛野 博文	
M-2		字笹原 667-12 667-127	2	61年5月	池辺 元明	70号窯は炭窯。

## II 窯跡群の位置と環境

牛頸窯跡群は、大野城市牛頸の牛頸川を挟む地域を中心に、北は春日市、南は太宰府市の一部を含む東西4 km、南北5 kmの広範囲に及び数百基の窯跡が分布している。

その中心を流れる牛頸川は、南部の牛頸山（標高448m）に源を発し、大野城市牛頸字胴ノ元付近で左支川である平野川と合流し、春日市南部および市内中心を北東に流下して、大野城市瓦田において御笠川本流と合流する。この両河川の開析によって狭長な谷を中心に、無数の支谷をつくり、低い丘陵が樹枝状に発達し複雑に入り込んだ地形をつくり出している。土質も花崗岩バイラン土で、登窯を構築し、操業するには恰好な地形である。

この牛頸窯跡群の分布する地域は、福岡市のベットタウンとして、周辺の春日市・那珂川町太宰府市とともに、昭和40年以降急激に人口が増加した。県道福岡筑紫野線・九州縦貫自動車道等を初め都市計画道路の整備、また、西鉄大牟田線・JR鹿児島本線・国道3号線の沿線に位置し、交通の利便性がよく、民間の大型宅地造成や土地区画整理事業等の開発が相次いだ。このため緑豊かな丘陵は、次々に削り取られ、開発の波は山奥へと進んでいった。また、これに伴って発掘調査が実施され削減した窯跡は、一覧表に示すとおり昭和63年2月現在で201基にも達し、その速度は衰えを知らない。

窯跡群の構成もこれらの調査等で次第に明らかになった。牛頸川両岸地帯に分布する、笹原・長者原・道ノ下・足洗川・井手・原・ハセムシ・中通窯跡群等の牛頸川支群。平野川両岸地帯に分布する石坂・月ノ浦・大谷・小田浦・胴ノ元窯跡群等の平野川支群。上大利から南ヶ丘にかけての丘陵地帯に分布する野添・大浦・平田・東浦・上平田窯跡群等の上大利支群。牛頸丘陵西端地帯、春日市内に分布する大牟田池・惣利・春日平田・浦ノ原窯跡群等の春日支群。東方の丘陵端部周辺に分布する神ノ前・長浦・向佐野・宮ノ本窯跡群等の大佐野支群に分けられる。年代的には6世紀中頃から8世紀後半までの約300年間にわたって操業されたと考えられ、平野川・牛頸川の奥に行くほど新しい時期の窯跡が多くなる傾向が見られる。今回実施した牛頸ダム建設地内の窯跡群は牛頸川支群の上流域に含まれ、奈良時代を中心に構成されたことが明らかとなった。

これまでに発掘調査された窯跡群は、表2のとおりである。

### 第3図窯跡群名

- |            |            |             |            |            |
|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 1. 大牟田池窯跡  | 2. 惣利窯跡群   | 3. 春日平田窯跡群  | 4. 梅頭窯跡    | 5. 出口窯跡    |
| 6. 神ノ前窯跡   | 7. 尊田窯跡群   | 8. 長浦窯跡     | 9. 向佐野窯跡   | 10. 宮ノ本窯跡  |
| 11. 華無尾窯跡群 | 12. 野添窯跡群  | 13. 大浦窯跡群   | 14. 谷蟹窯跡   | 15. 浦ノ原窯跡群 |
| 16. 平田窯跡群  | 17. 東浦窯跡群  | 18. 上平田窯跡群  | 19. 畑ヶ坂窯跡群 | 20. 後田窯跡群  |
| 21. 小田浦窯跡群 | 22. 大谷窯跡群  | 23. 月ノ浦窯跡群  | 24. 石坂窯跡群  | 25. 胴ノ元窯跡群 |
| 26. 城ノ山窯跡  | 27. 中通窯跡群  | 28. ハセムシ窯跡群 | 29. 原窯跡群   | 30. 井手窯跡群  |
| 31. 足洗川窯跡群 | 32. 道ノ下窯跡群 | 33. 長者原窯跡群  | 34. 笹原窯跡群  |            |



第 3 図 燻跡群分布図 (縮尺 1/25,000)

表2 牛頸窯跡群発掘調査一覧表

(昭和63年2月現在)

	窯跡名	所在地	調査年月 (昭和)	員数 (調査窯数)	調査主体者	調査の起因	報告
1	大浦窯跡群	大野城市上大利字大浦	43年6月	2(2)	県教委	宅地造成	1
2	東浦窯跡群	〃 牛頸字東浦	43年12月	4(3)	国士館大学	宅地造成	2
3	野添窯跡群	〃 上大利字野添	44年10月	10(2)	県教委 九州大学	宅地造成	1
4	大谷窯跡群	〃 牛頸字大谷	44年12月	6(4)	国士館大学	宅地造成	2
5	上平田窯跡群	〃 牛頸字上平田	47年2月	4(4)	県教委	宅地造成	3
6	平田A・B地点窯跡群	〃 牛頸字平田	47年8月	A地点 1(1) B地点 4(3)	立正大学	宅地造成	4
7	向佐野窯跡群	太宰府町向佐野	47年10月	3(3)	県教委	九州縦貫道 土取場	5
8	長浦窯跡	〃 向佐野字長浦	47年12月	1(1)	県教委	九州縦貫道 土取場	5
9	小田浦窯跡群	大野城市牛頸字小田浦	51年10月	A地点 2(2) B地点 2(2)	大野城市教委 立正大学	宅地造成	6
10	浦ノ原窯跡群	春日市春日字浦ノ原	53年1月	8(8)	春日市教委	福岡市南部 清掃工場	7
11	神ノ前窯跡群	太宰府町吉松字神ノ前	53年10月	2(2)	太宰府教委 県教委	宅地造成	8
12	惣利窯跡	春日市春日字惣利	53年11月	1(1)	春日市教委	春日土地 区画整理	9
13	中通窯跡群	大野城市牛頸字中通	54年5月	A・B・C 地点 4(4)	大野城市教委 県教委	宅地造成	10
14	宮ノ本窯跡群	太宰府市向佐野字宮ノ本	54年10月	3(3)	太宰府町教委 県教委	学校建設	11
15	中通窯跡群	大野城市牛頸字中通	54年12月	D地点 2(2)	大野城市教委	宅地造成	12
16	平田D地点窯跡	〃 牛頸字平田	55年1月	D地点 1(1)	大野城市教委	南ヶ丘土地 区画整理	13
17	惣利窯跡群	春日市春日字惣利	55年1月	4(4)	春日市教委	春日土地 区画整理	14
18	惣利東窯跡群	〃 春日字惣利	55年6月	I地区 3(3) II地区 1(1)	春日市教委	春日土地 区画整理	
19	平田E地点窯跡	大野城市牛頸字平田	55年12月	(2)	大野城市教委	南ヶ丘土地 区画整理	15
20	平田F地点窯跡	〃 牛頸字平田	56年11月	(1)	大野城市教委	南ヶ丘土地 区画整理	16
21	月ノ浦窯跡	〃 牛頸字月ノ浦	57年5月	(1)	大野城市教委	牛頸土地 区画整理	17
22	春日平田窯跡	春日市春日字平田	57年8月	21地点 (15)	春日市教委	春日土地 区画整理	
23	井手窯跡群	大野城市牛頸字井手	57年10月	A地区 9(6)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	本書

	窯 跡 名	所 在 地	調査年月 (昭和)	員 数 (調査窯数)	調査主体者	調査の起因	報告
24	石 坂 窯 跡 群	大野城市牛頸字石坂	58年2月	(2)	大野城市教委	中央電園 拡張工業	18
25	道ノ下窯跡群	〃 牛頸字道ノ下	58年5月	G地区 11(9)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	本書
26	春日平田窯跡	春日市春日字平田	58年5月	23地点 (4)	春日市教委	春日土地 区画整理	
27	小田浦窯跡群	大野城市牛頸字小田浦	58年12月	2(2)	大野城市教委	牛頸土地 区画整理	17
28	井手窯跡群	〃 牛頸字井手	59年4月	B地区 17(15)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	
29	宮ノ本窯跡群	太宰府市向佐野字宮ノ本	59年7月	(5)	太宰府市教委	学校建設	
30	春日平田窯跡群	春日市春日字平田	59年8月	24地点 (1)	春日市教委	春日土地 区画整理	
31	足洗川窯跡群	大野城市牛頸字足洗川	59年9月	C地区 (4)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	本書
32	篠振窯跡群	太宰府市吉松字篠振	59年12月	(2)	太宰府市教委	歴史スポ ーツ公園造成	
33	井手窯跡群	大野城市牛頸字井手	60年5月	B地区 (10)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	
34	春日平田窯跡群	春日市春日字平田	60年8月	25地点 (1)	春日市教委	春日土地 区画整理	
35	道ノ下窯跡群	大野城市牛頸字道ノ下	60年8月	J地区 (1)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	本書
36	笹原窯跡群	〃 牛頸字笹原	60年11月	M地区 (2)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	
37	小田浦窯跡群	〃 牛頸字小田浦	60年11月	(7)	大野城市教委	牛頸土地 区画整理	
38	後田窯跡群	〃 牛頸字後田	61年2月	(6)	大野城市教委	牛頸土地 区画整理	
39	長者原窯跡群	〃 牛頸字長者原	61年4月	I地区 (16)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	
40	後田窯跡群	〃 牛頸字後田	61年4月	(10)	大野城市教委	牛頸土地 区画整理	
41	笹原窯跡	〃 牛頸字笹原	61年5月	M地区 (1)	県教委	牛頸川治水 ダム建設	
42	野添窯跡群	〃 上大利字野添	61年8月	(3)	大野城市教委	造成工業	19
43	ハセムシ窯跡群	〃 牛頸字ハセムシ	62年7月	(15)	大野城市教委 大谷女子大学	宅地造成	
44	ウトグチ瓦窯跡	春日市上白水字ウトグチ	62年12月	(2)	春日市教委	上白水土地 区画整理	
45	井手窯跡群	大野城市牛頸字井手	63年2月	(3)	大野城市教委	造成工事	

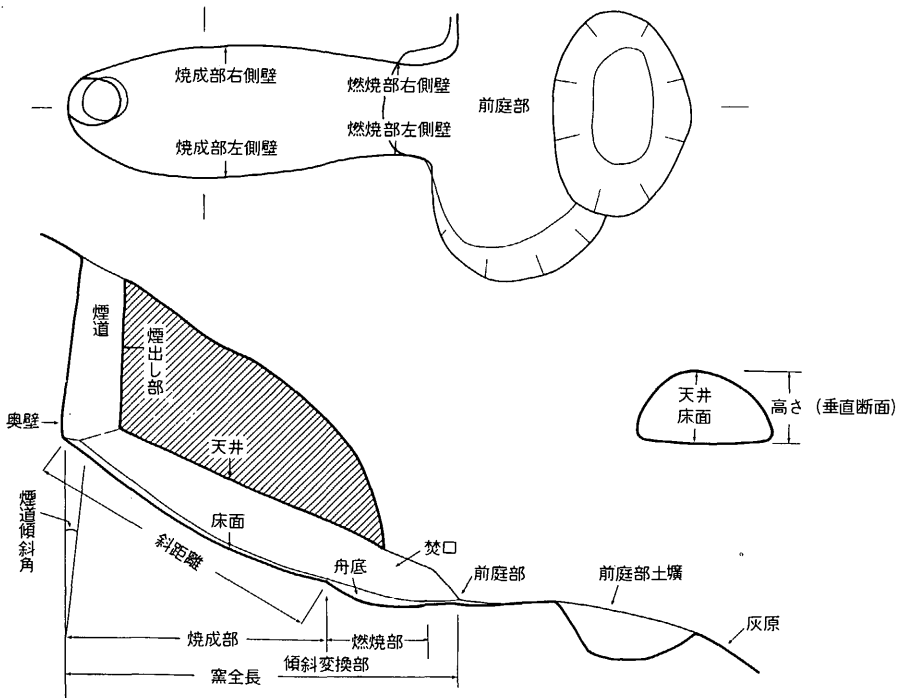
報告書

1. 福岡県教育委員会 『野添・大浦窯跡群』 福岡県文化財調査報告書 第43集 1970
2. 大野町教育委員会 『大野町の文化財』 第2集 1971
3. 大野城市教育委員会 「上平田窯跡群」 『牛頸中通遺跡群』 大野城市文化財調査報告書 第4集 1980
4. 坂詰秀一編 『筑前平田窯跡』 雄山閣 1974
5. 福岡県教育委員会 「向佐野・長浦窯跡」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 VI 1975
6. 大野城市教育委員会 「小田浦窯跡特集号」 『大野城市の文化財』 第9集 1977
7. 春日市教育委員会 『浦ノ原窯跡群』 春日市文化財調査報告書 第11集 1981
8. 太宰府町教育委員会 『神ノ前窯跡』 太宰府町文化財調査報告書 第2集 1979
9. 春日市教育委員会 『春日地区遺跡群Ⅰ』 春日市文化財調査報告書 第12集 1982
10. 大野城市教育委員会 『牛頸中通遺跡群』 大野城市文化財調査報告書 第4集 1980
11. 太宰府町教育委員会 『宮ノ本遺跡』 太宰府町文化財調査報告書 第3集 1980
12. 大野城市教育委員会 『牛頸中通遺跡群Ⅱ』 大野城市文化財調査報告書 第9集 1982
13. 大野城市教育委員会 『牛頸平田窯跡－D地点－』 大野城市文化財調査報告書 第5集 1980
14. 春日市教育委員会 『春日地区遺跡群Ⅱ』 春日市文化財調査報告書 第14集 1983
15. 大野城市教育委員会 『牛頸平田窯跡－E地点－』 大野城市文化財調査報告書 第7集 1981
16. 大野城市教育委員会 『牛頸平田窯跡－F地点－』 大野城市文化財調査報告書 第8集 1982
17. 大野城市教育委員会 『牛頸地区遺跡群Ⅰ』 大野城市文化財調査報告書 第16集 1985
18. 大野城市教育委員会 『牛頸石坂窯跡－C地点－』 大野城市文化財調査報告書 第14集 1985
19. 大野城市教育委員会 『野添窯跡群』 大野城市文化財調査報告書 第22集 1987

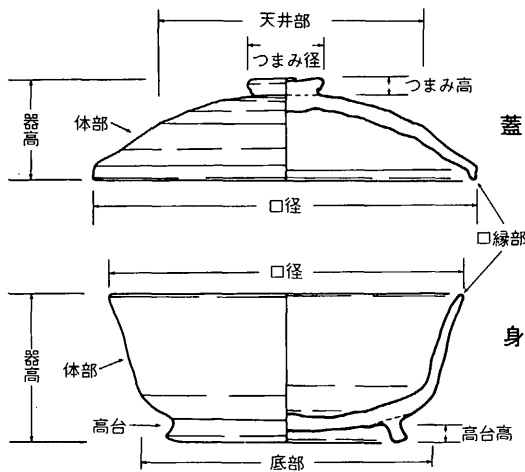
### III 遺構と遺物

牛頸ダム建設に伴って発掘調査を実施した窯跡は15地区で70基を数える。今年度の報告は、このうち、A-1地区1基、A-2地区2基、A-3地区6基、B-2地区6基、C地区4基、G地区4基、J地区1基、K地区5基の8地区29基について行なう。各地区に記入している窯跡群の名称は小字名を採用した。

窯跡群の説明は各地区ごとに、位置、立地、窯体、窯の付設遺構（前庭部土壙、焚口横土壙等）、灰原の順で行ない、説明に使用する名称は第4図のとおりに統一した。遺物については、窯内出土遺物、当該窯の前庭部及灰原出土の遺物、灰原出土遺物の順で行なう。灰原が数基の窯で構成される場合は現場で一応層位の検討を行なって取り上げたが、遺物の復原作業の段階で土層名をこえて接合し、層位的な意味が認められないため、確実に窯に伴うと判断できる遺物を除き一括して取り扱うことにした。各遺物の説明は文章では行なわず、蓋杯（蓋・身）、無高台杯、皿、盤、高杯、短頸壺、長頸壺、鉢、瓶、甕の順で遺物一覧表に掲載した。なお、表に使用した名称及び計測点は第5図に示すとおりである。B-2地区では、出土遺物が多量の



第4図 窯跡各部の名称・計測点模式図



第 5 図 須恵器各部名称・計測点模式図

ため蓋杯は形態、皿は法量、高杯は口径・脚高、短頸壺は大きさにより A～C に分類して説明した。

挿図での土器表現は、回転ヘラ削り調整の両端を実線で、他は破線で表現し、側面観での高台・つまみの接合部は、稜線より濃く表現し、断面では破線を用いた。

15地区全体の出土土器の詳細な検討と、特殊遺物の説明は『牛頸窯跡群Ⅱ』に掲載する。

## 1 A-1地区(井手窯跡群)の調査

### (1) 調査の概要(図版1、第6・7図)

牛頸ダム建設地内の井手窯跡群の分布は、牛頸山からヤツデ状に派生した丘陵斜面上に位置し、A-1地区、A-2・3地区、B-1地区、B-2地区、B-4地区と大きく五本の谷に分けることができる。

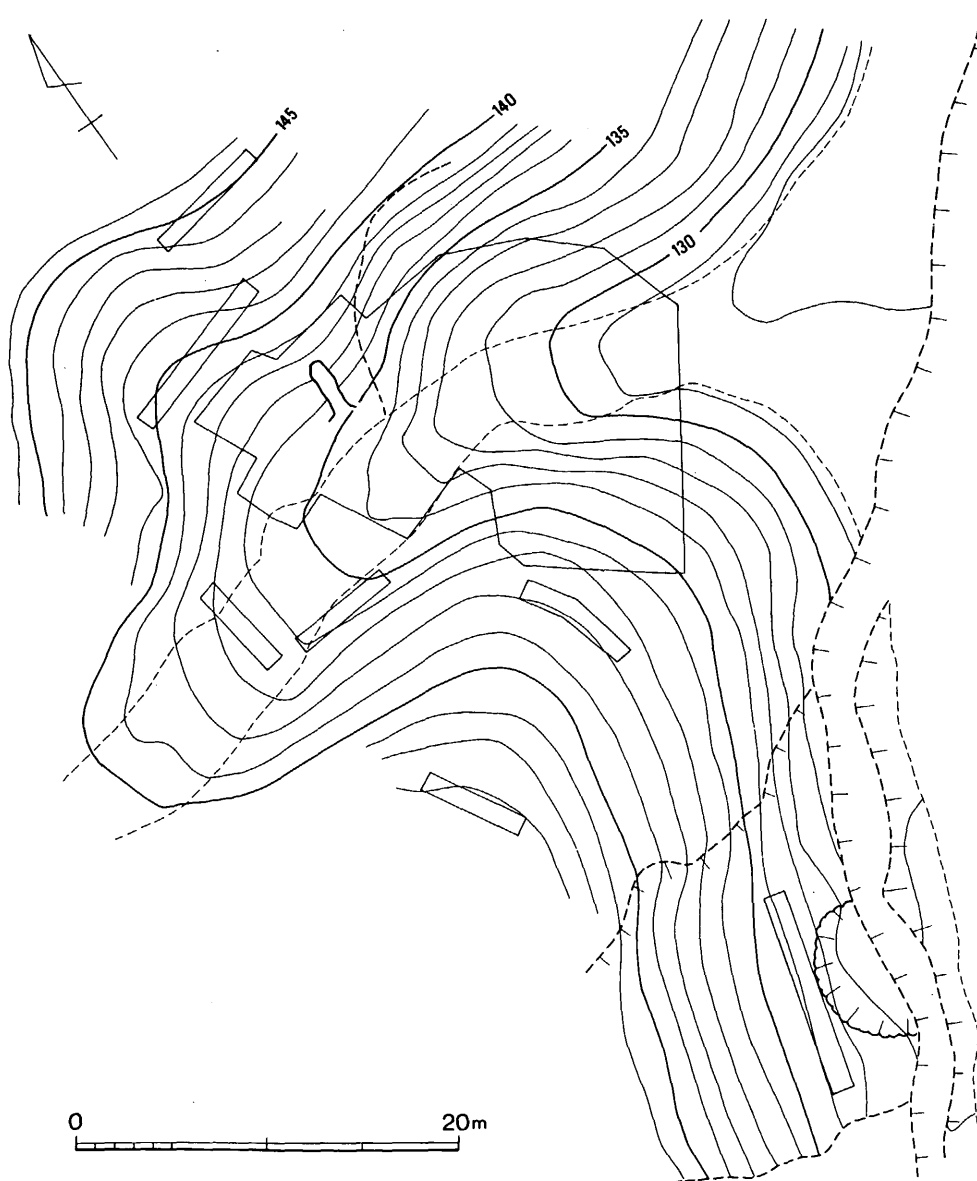
A-1地区の調査は、牛頸川左岸の市道付替に伴うものである。大野城第一浄水場から、南西に入る谷は、入口から約300m付近で、A-2・3地区のある西側の谷と二股に別れ、この地点からさらに350m程で谷頭になる。谷頭から約50m程もどった部分に西側に入る短い小谷がある。谷を形成する斜面は谷頭部分を除き急である。発掘前の踏査で谷間の沢にはほぼ全面に須恵器片の散布が認められ、窯跡の位置を特定するには非常に困難な状況であった。調査着手時期になって樹木の伐採・運搬、排水管工事、発掘調査のため若干沢を拡げて、仮設道路が設けられた。これによって丘陵裾部に灰原の有・無を把握し、窯跡の位置は谷の奥部に集中するものと判断できた。しかしながらダム建設地内での最初の調査地区であり、窯跡の規模・立地状態はまったく見当がつかず、加えて窯跡は天井が崩壊し斜面中腹の凹部に存在するという先入観も働き10数ヶ所にトレンチを設定することとなった。このうち前述した西側に入る小谷の裾部に設定したトレンチから灰原と多量の須恵器片を検出した。この部分を拡張して発掘したところ、北側斜面下部の凸部に立地している1号窯跡を発見することができた。北側の尾根を越



えたA-3地区(4号~9号窯跡)とは直線距離で約100mある。

(2) 1号窯跡(図版2、第8図)

北側斜面下部の花崗岩パイラン土を割り貫いて構築された地下式無階無段の登窯である。窯体の主軸方向は $N-5^{\circ}-E$ で丘陵の高等線に対してやや斜交する。下の裾部までの比高差は2



第6図 A-1地区地形図(縮尺1/400)

m程である。焚口付近の床面での標高は134.3mを測る。天井はすでに崩壊している。焚口前面も自然崩壊していた。窯の主軸長は3.18m。床幅は焚口付近から徐々に広がり、焼成部ではほぼ一定の幅で奥壁までつづく。焚口の右横に不整土壌を有す。

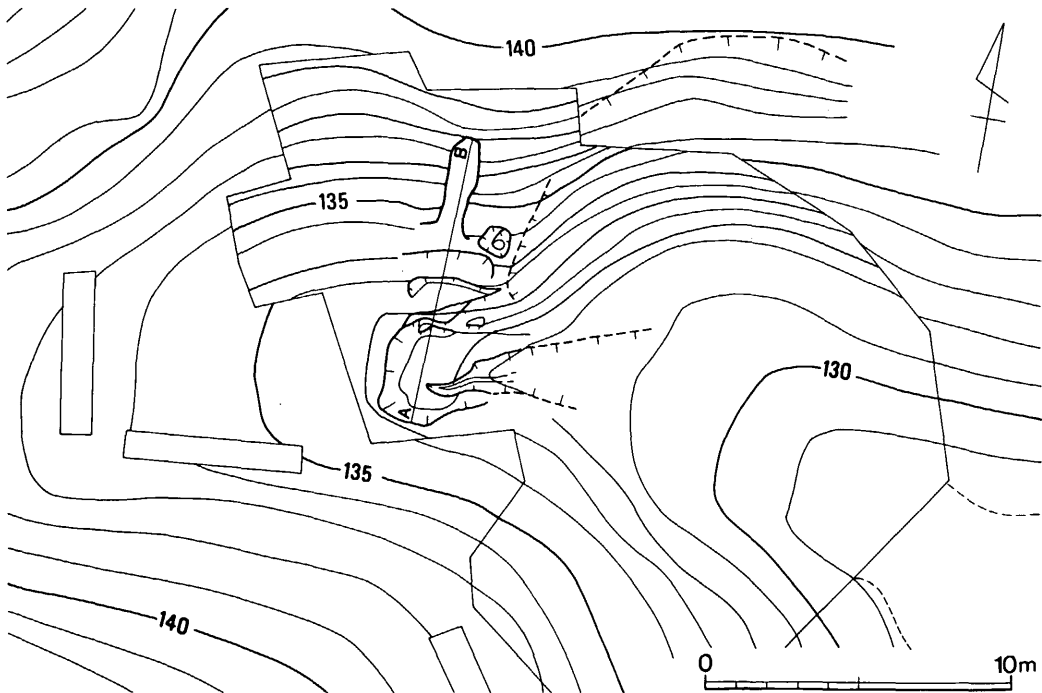
**燃焼部** 焚口は床幅0.9mを測り外側へ大きく開く。焚口から傾斜変換部までの燃焼部は0.9mを測り、床面はわずかに傾斜する。床幅は中央部で約0.6m、側壁は外傾し直に立上る。

**焼成部** 燃焼部との境から奥壁までの主軸長は2.05m、斜距離で2.6mを測る。床幅は中央部で0.97mを測るが、奥壁に向って徐々にせばまる他の窯とはちがいで奥壁までほぼ一定である。床面の傾斜は中央部までは約26°、中央から奥壁までは約45°と急である。側壁はドーム状に立上り中央での垂直断面の高さは0.6mほどと推定する。現地表までは約0.8mある。床面の貼り替えは認められない。土製置台は焼成部の奥壁よりで集中して検出したが規則性は認められない。

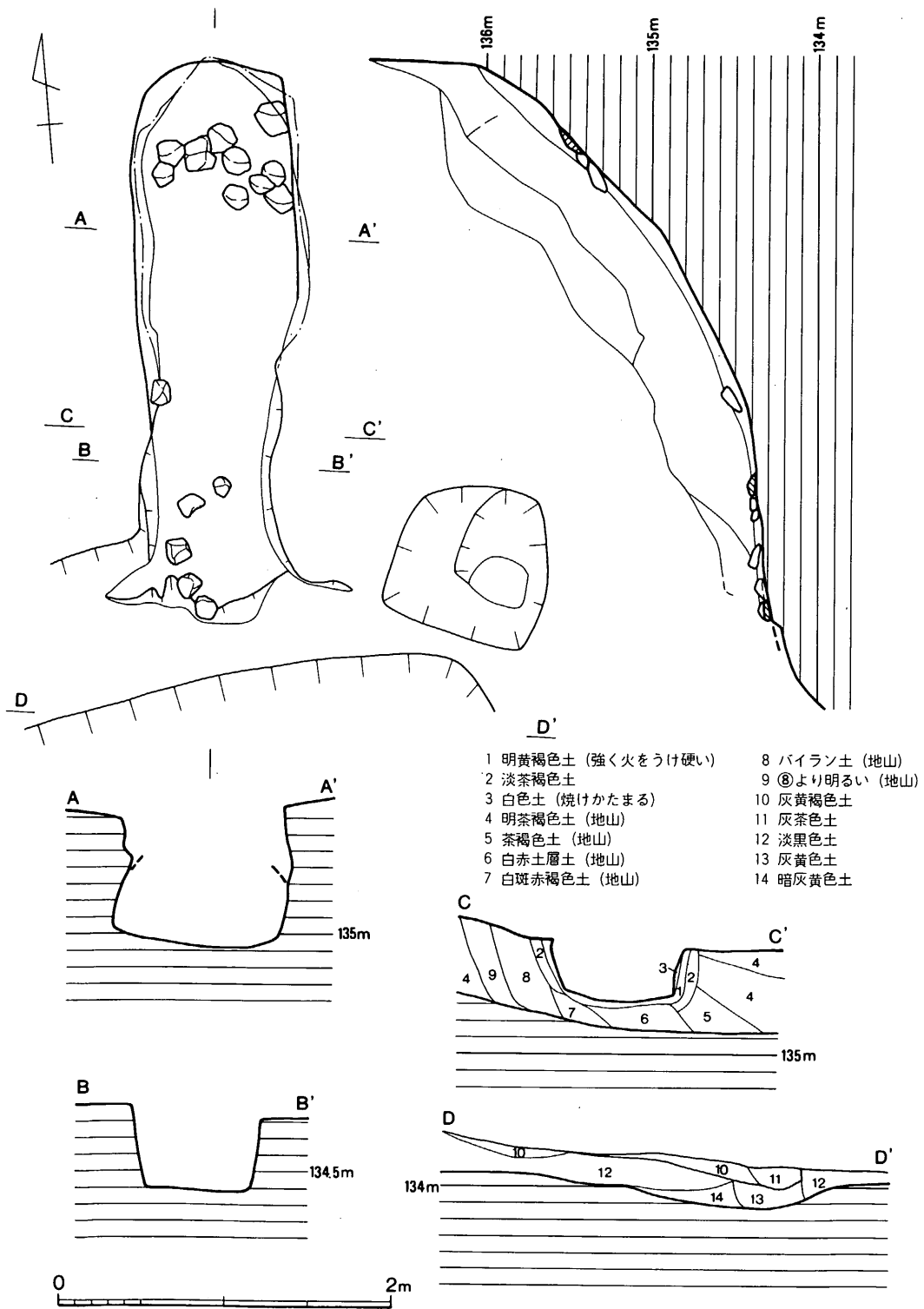
**煙出し部** 崩壊のため詳細は不明である。奥壁側で現高は0.75mある。

### (3) 灰 原 (図版2-1、第9図)

焚口の前面0.4m付近から裾部の沢まで灰原が広がる。沢に落ちた須恵器片は、この小谷を出て約600m下った谷の入口まで流出し散布している。1号窯跡の主軸に合せて土層の観察を行った。灰層は大きく二層に分れる。I層は炭化物が混入した黒色土、II層は淡黒色土で灰白色



第7図 1号窯跡地形図 (縮尺 1/250)



第 8 図 1号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

や黄褐色のブロックが混入している。須恵器片はⅠ・Ⅱともに含まれるが、沢内の攪乱土層からの出土が最も多い。須恵器片は復原段階で土層に関係なく接合し、層位から新・旧関係は分けられない。

**出土遺物** (図版3～5、第10～12図)

灰原からは、蓋杯、盤、皿、高杯、短頸壺、長頸壺、鉢が出土した。

**蓋杯・蓋** (1～17) 口径は1～3が12.5～13.6cmと小形で、4～12は15.3～16.5cmとほぼ同大、16.17は20cmを越える大形品である。7・12～16は天井部が低く平らである。20の天井部は高く丸みをもつ。いずれも天井部外面は回転ヘラ削りされ、扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。

**蓋杯・身** (18～40) すべて高台をもつ。18～21は口径10.9～11.7cm小形品、13.0～15.0cmものが多く、39.40は18.5cmをこす。体部・口縁部は外反気味にのびるものが多い。39の体部は丸味をもつ。29の体部は深く、高台も0.7cmと高く端部は外側へつまみ出される。

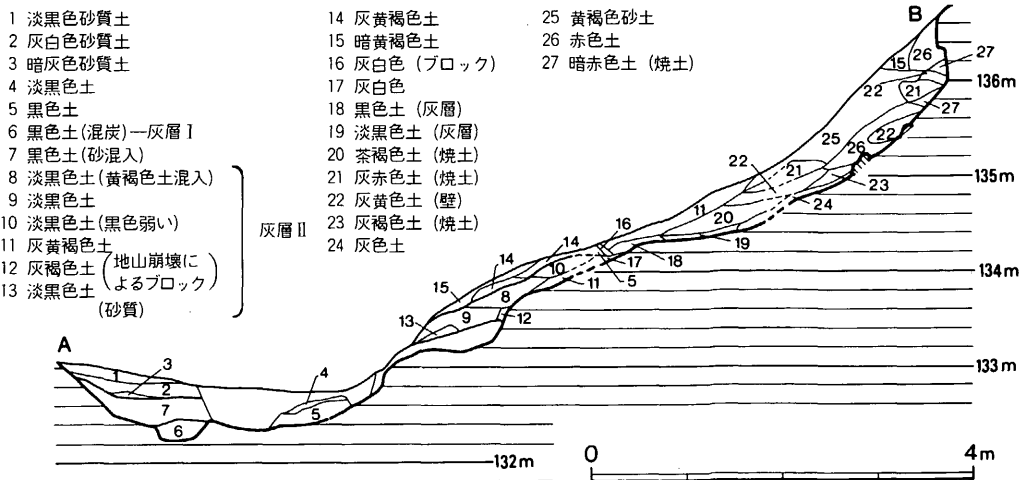
**盤** (41・42) 口径が26cmをこす大形品である。体部・口縁部は41が外反し42は外傾する。高台は底部のやや内側につく。

**皿** (43～46) 45は破片で、46は焼きひずみで変形する。口縁部は短くわずかに外反する。43・44は口径13.2～14.8と小形で、45・46は18cmを越す。

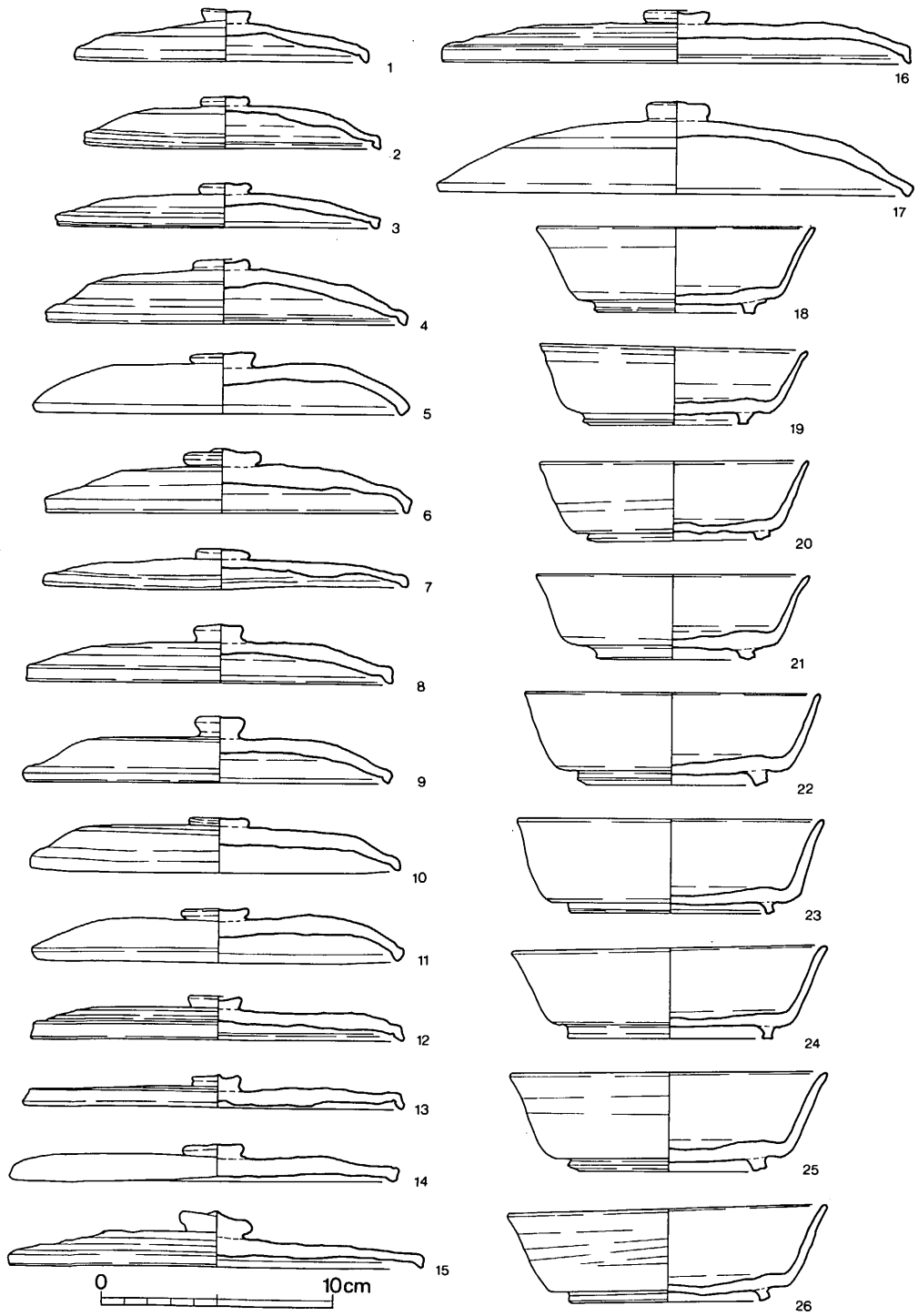
**高杯** (47～52) 無蓋高杯で杯部は浅く、口縁部を短く直立させ端部は平坦で内傾する。脚部は短い。49の口径は28.3cmと大形で、52の脚部は長い。

**短頸壺・蓋** (53) 頂部に高さ3cmのノブ状のつまみをもつ。天井部は平坦で回転ヘラ削りされる。体部は直線的に下り、端部は外傾し平坦である。

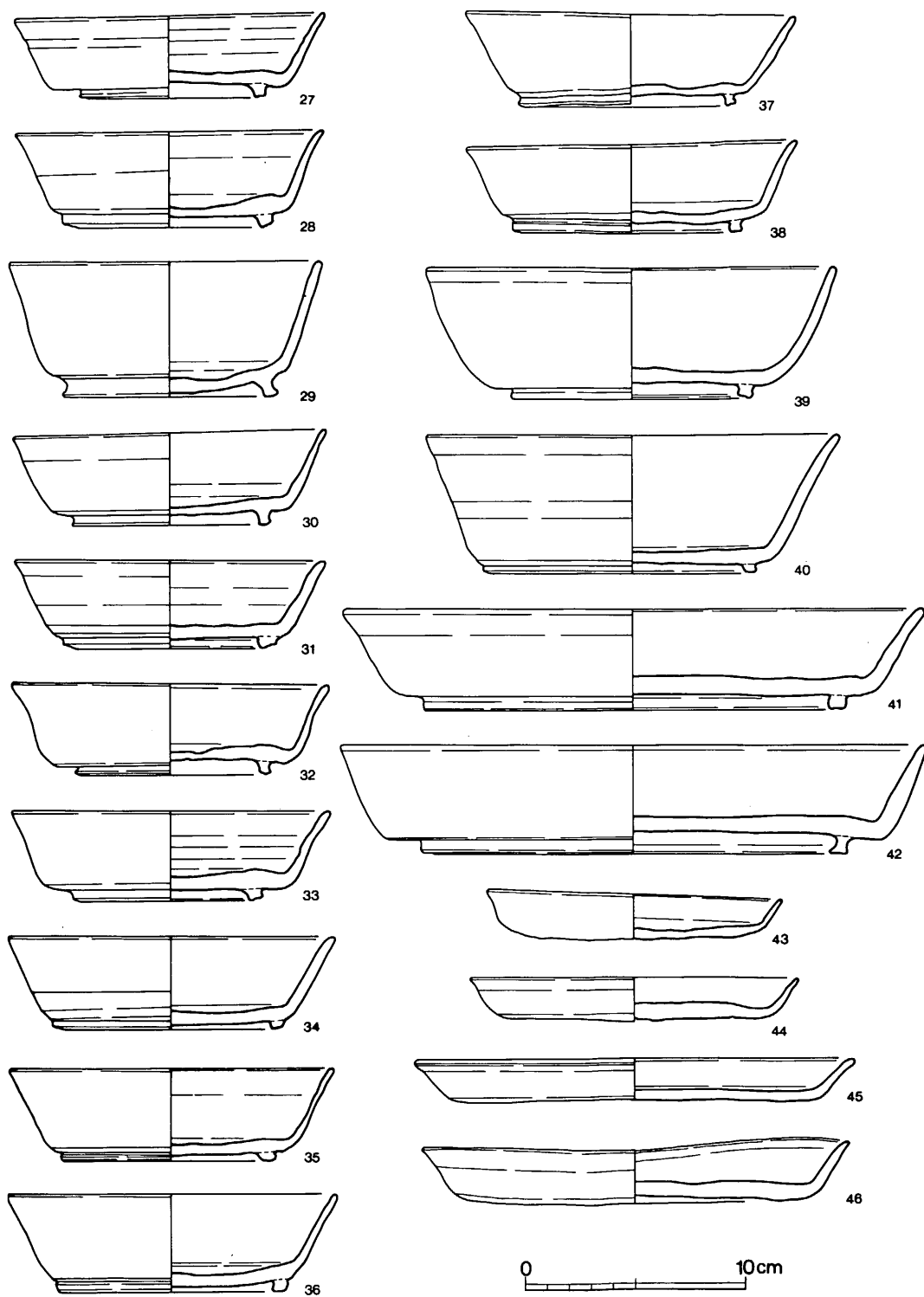
**短頸壺** (54) 底部を欠く。焼きひずみで頸部・肩部が歪む。短い頸部をもち端部はやや外



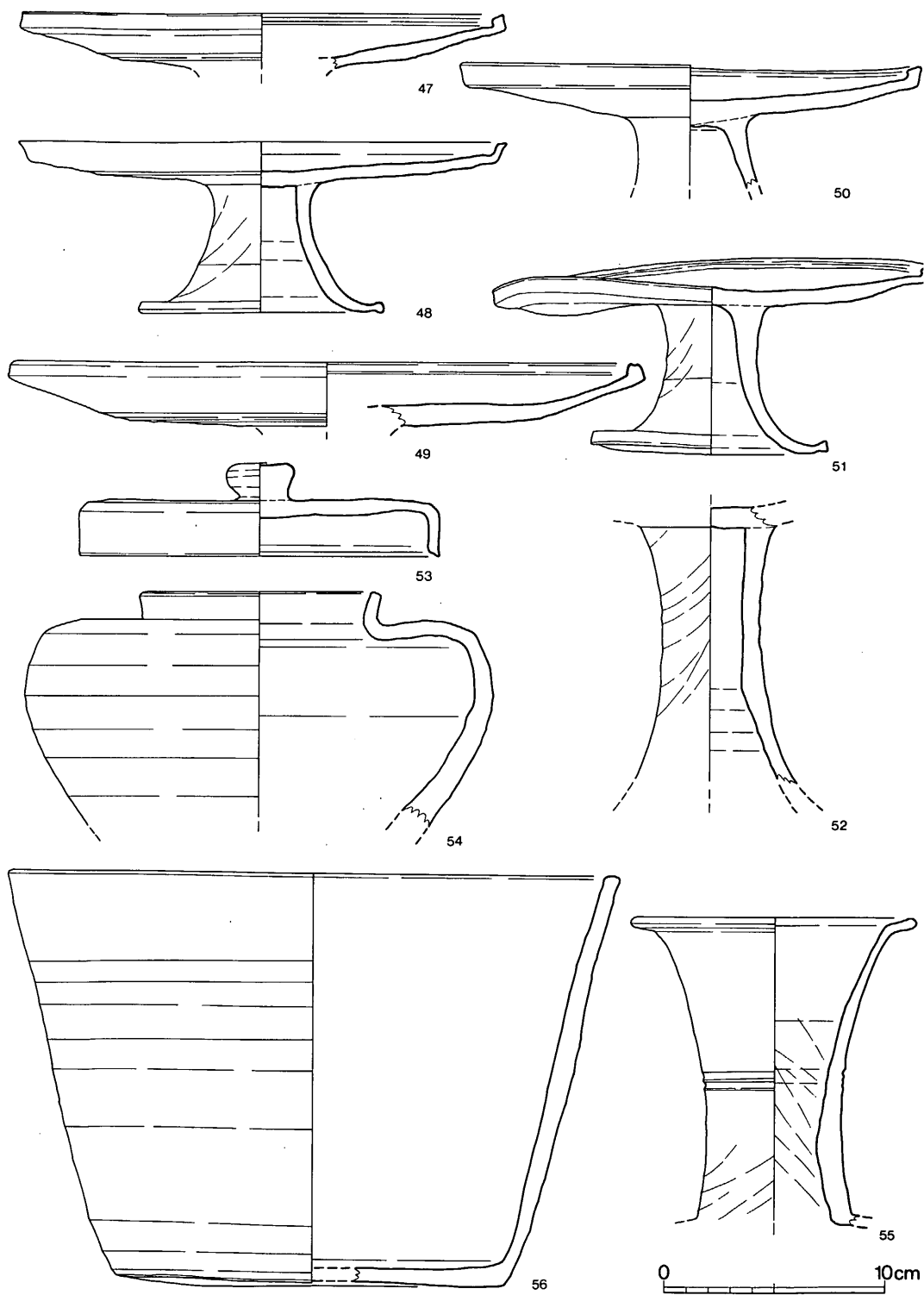
第9図 1号窯跡灰原土層図 (縮尺 1/80)



第 10 図 灰原出土土器実測図① (縮尺 1/3)



第 11 图 灰原出土土器实测图② (縮尺 1/3)



第 12 図 灰原出土土器実測図③ (縮尺 1/3)

傾し平坦面をもつ。胴部最大径から下は回転ヘラ削り調整される。

**長頸壺 (55)** 長頸壺の頸部である。口頸部は外反し、口縁端部を外方へ屈曲させる。中央に2条の沈線を配している。

**鉢 (56)** 体部は外傾、口縁端部は水平である。外面胴部中位以下は回転ヘラ削り調整。

#### (4) 小 結

本地区は、前述した如く、谷の入口から約600m、A-2地区の入口から約300mの谷頭に近い位置の西側に小さく入った谷の北側斜面にあたる。

この間の沢内には多数の須恵器片の散布が認められ、当初複数の窯が存在しているものと考えていたが、調査の結果、1基が存在しているだけであった。A地区・B地区の井手窯跡群の立地は共通性が見られる。谷の奥まった部分で左右いずれかに若干入り込んだ場所を選んで築かれており、谷を吹き抜ける強い風が直接あたらない様に配慮されたものと考えられる。

1号窯は標高134mの斜面下部に築かれ、裾までの比高差は、他と比べて最も低い。また単独で操業されているのも本窯だけである。

窯体は、地下式無階無段の登窯で長さ3.18m、最大幅0.97mを測る平均的な大きさである。焼成部のプランは、奥壁に向って、徐々にせばまる形態とは違い、一定の幅を保ち奥壁がやや角ばる特徴がある。灰原出土の須恵器量から見て、数回の操業が考えられるが、床面では重なった灰層は認められず、焼成の回数を確認することはできなかった。

灰原の遺物は、蓋杯、盤、皿、高杯、短頸壺、長頸壺、鉢の器種があり、大形の壺・甕は出土していない。主体は蓋杯である。出土遺物から本窯跡は8世紀後半代に操業されたものと思われる。

(池辺元明)



## 2 A-2地区(井手窯跡群)の調査

### (1) 調査の概要(図版6、第13図)

井手窯跡群は、沢を挟んで両側に横たわる丘陵の斜面中腹までが調査対象区域である。このため、調査に先立ってまず、当該地に植林された杉、檜からなる樹木の伐採作業から始った。沢内には灰原から流出した土器があるため、これらの土器を採集し、沢内に暗渠を設けて、斜面の表土剥ぎ作業を行なった。この範囲は沢基部から約10m程の高さであり、丘陵の傾斜がきついため作業はかなりの困難を伴った。調査の結果、沢東側の丘陵では窯本体は路線外となる灰原を2基分検出した。沢西側の丘陵からは若干の土器を検出しただけで窯跡、灰原等は検出されなかった。

### (2) 2号窯跡

若干の黒色土層のひろがり、須恵器片をわずかに検出しただけである。したがって、この部分を2号窯跡の灰原とするには問題がある。

### (3) 3号窯跡(図版7、第14図)

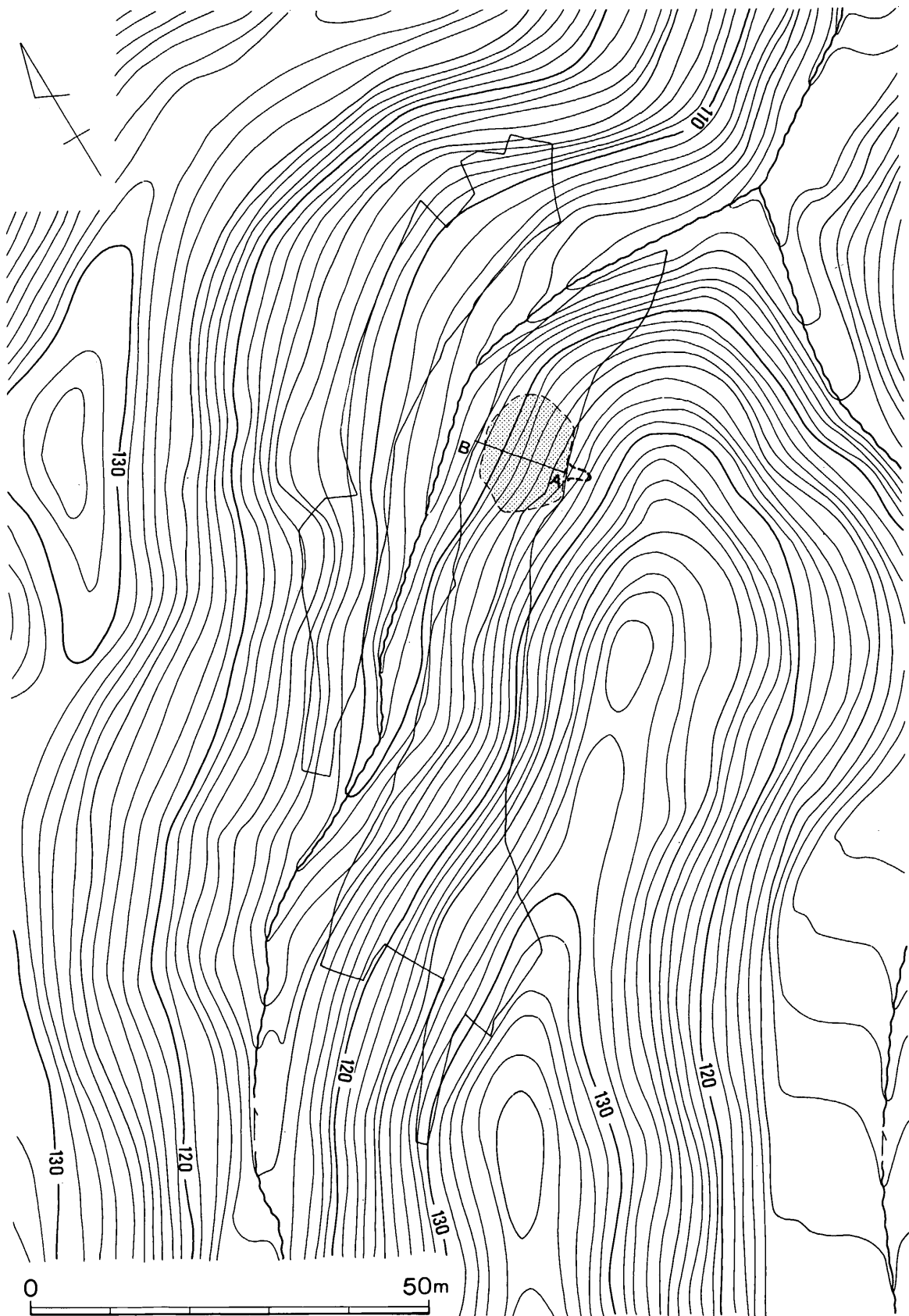
灰原のみの調査であり、窯本体は調査区域外の高所に位置すると思われる。灰原は、標高116mの丘陵中腹から、107mの沢まで広がるもので、その規模は幅15m、長さ10mを測る。灰原は最も深い場所で、厚さ60cm程であり、窯壁のくずれたものが灰層に混ざり、上層部から多量の須恵器を検出した。

なお、当該灰原内のやや上部に近い箇所地山を掘りくぼめたピットを検出した。このピットは、長径40cm、短径34cmで楕円形を呈しており、深さ17cmを測り、壙底からはセットで据えられた蓋杯が2個体検出された。窯業に関する祭祀と思われる。

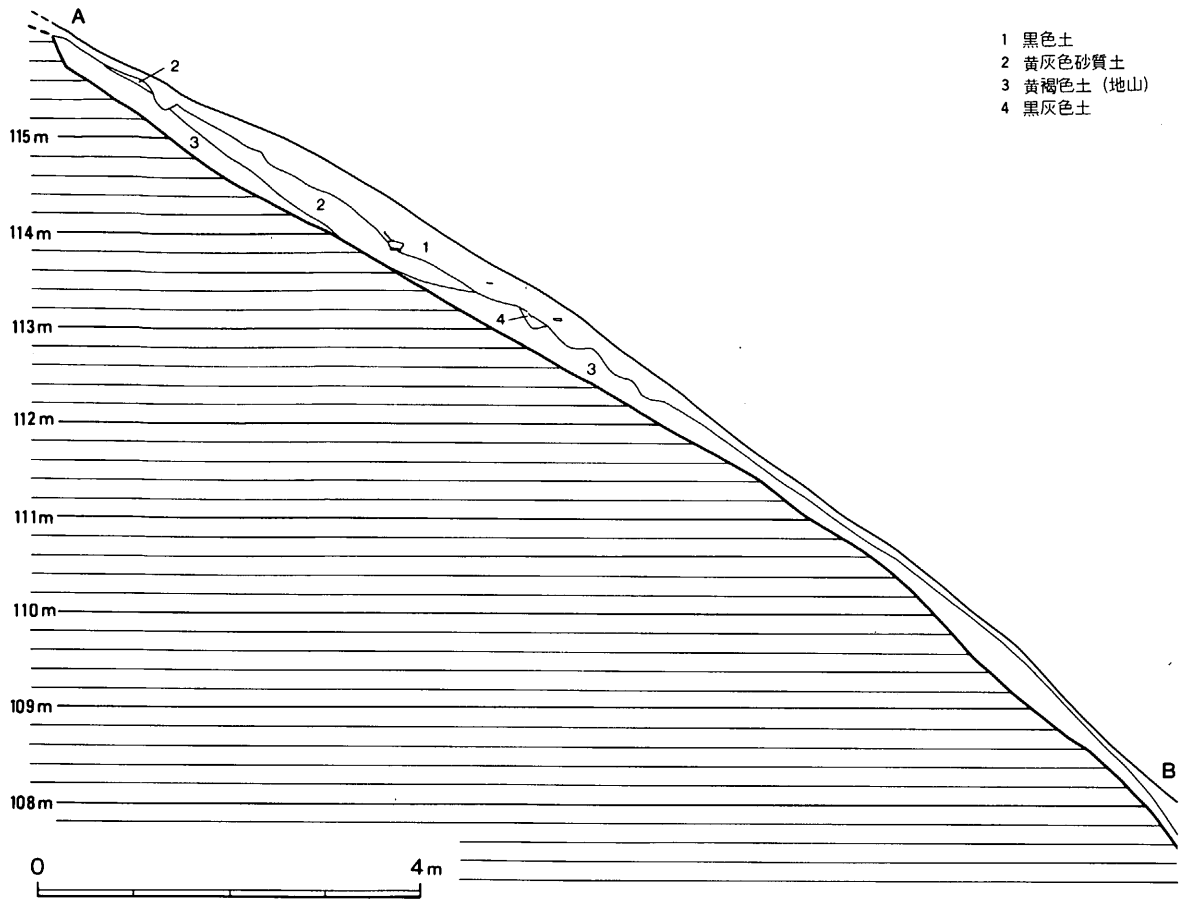
### 出土遺物(図版8・9、第15~18図)

灰原からは蓋杯、皿、無蓋高杯、短頸壺、長頸壺、鉢、瓶などの器種が見られ、多量の出土品の中から52個体を図示した。

**蓋杯・蓋(57~82)** 蓋は身受けのかえりを有するものと、かえりのつかないものとに大別される。身受けのかえりがつかないものは、頂部につまみがつくものと、少量であるがつかない



第 13 图 A-2 地区地形图 (縮尺 1/750)

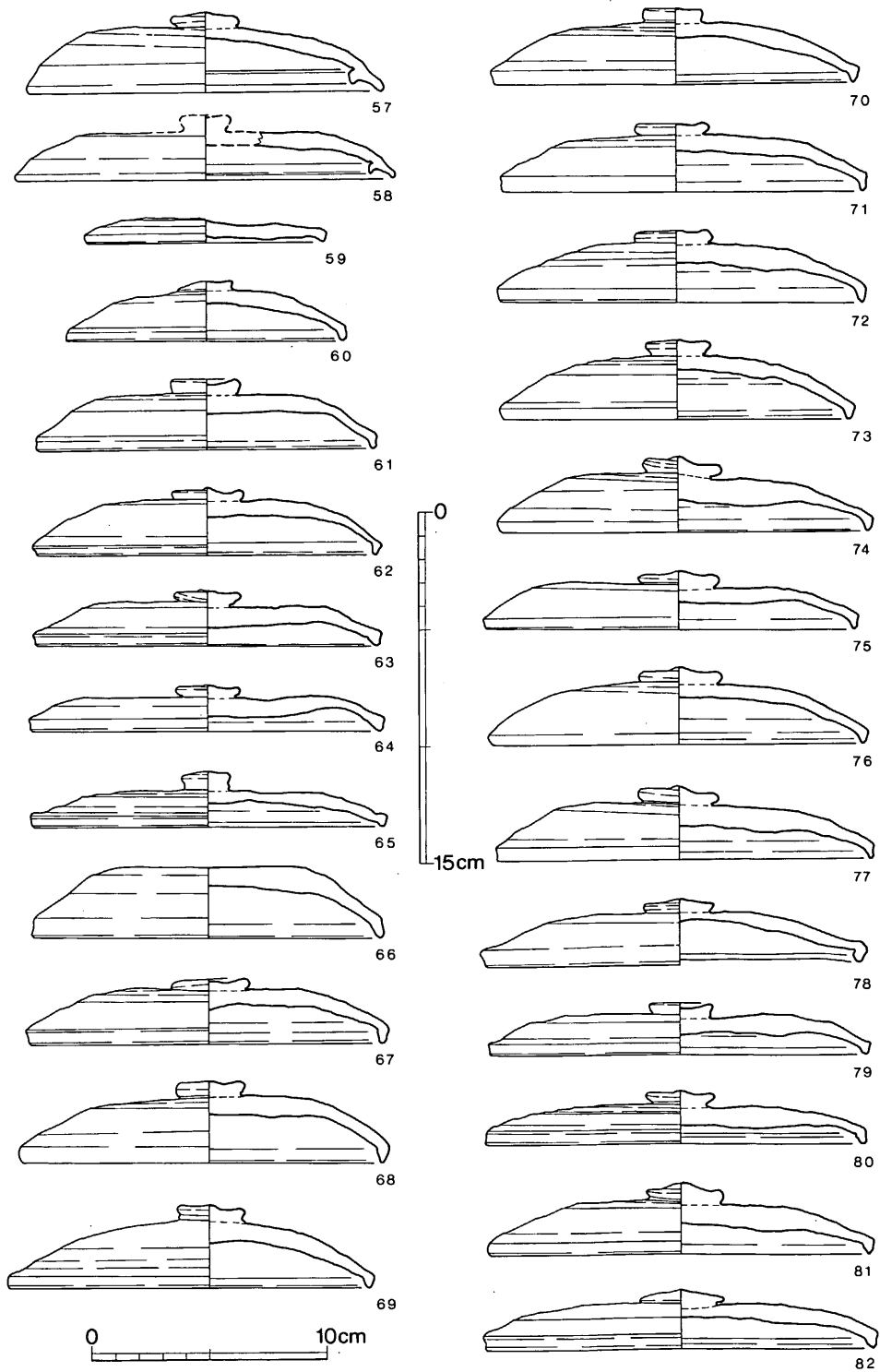


第 14 図 3号窯跡灰原土層図 (縮尺 1/80)

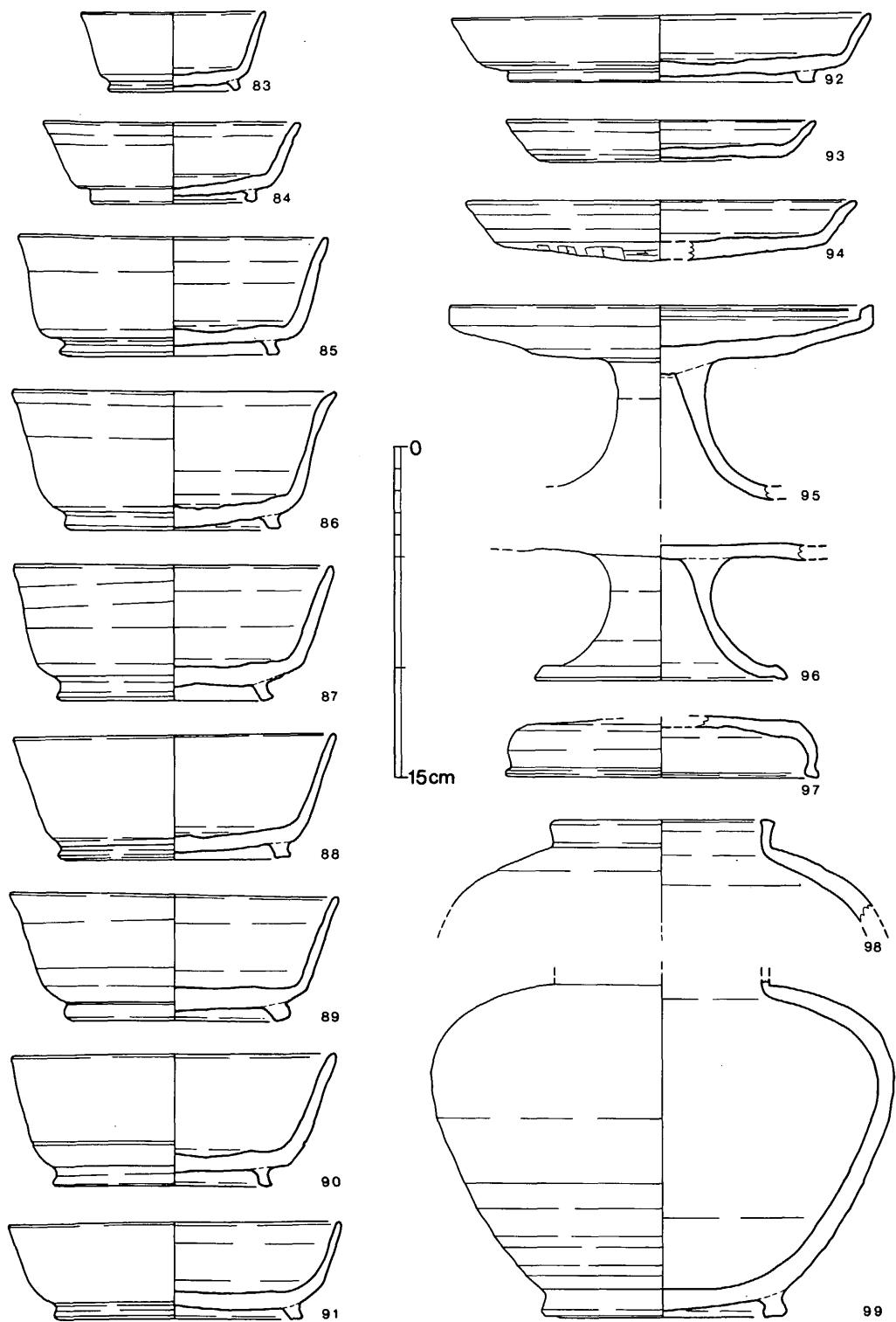
いものことがある。

57・58は口縁部内面に身受けのかえりがつくものであり、かえりは口縁端部より内側におさまる。頂部には、径の大きな擬宝珠様のつまみがつき、つまみ接合部は横ナデ調整し、天井部外面は回転ヘラ削りする。59・66は身受けのかえりをもたず、頂部につまみのつかないもので、59は口径10.3cmを測る小形品である。天井部外面は回転ヘラ削りし、口縁端部は平坦面を有する。器高が低い。66は口径14.8cmである。66を除いた60～82は頂部につまみがつくものである。60は口径11.8cmの小形品である。天井部外面は回転ヘラ削りする。61～82は口径14.1～16.5cmと大形である。頂部のつまみは58のみ径が小さく台形状を呈するが、他は径が大きく扁平なつまみの中央部をとがらせるものである。天井部外面は回転ヘラ削りしている。

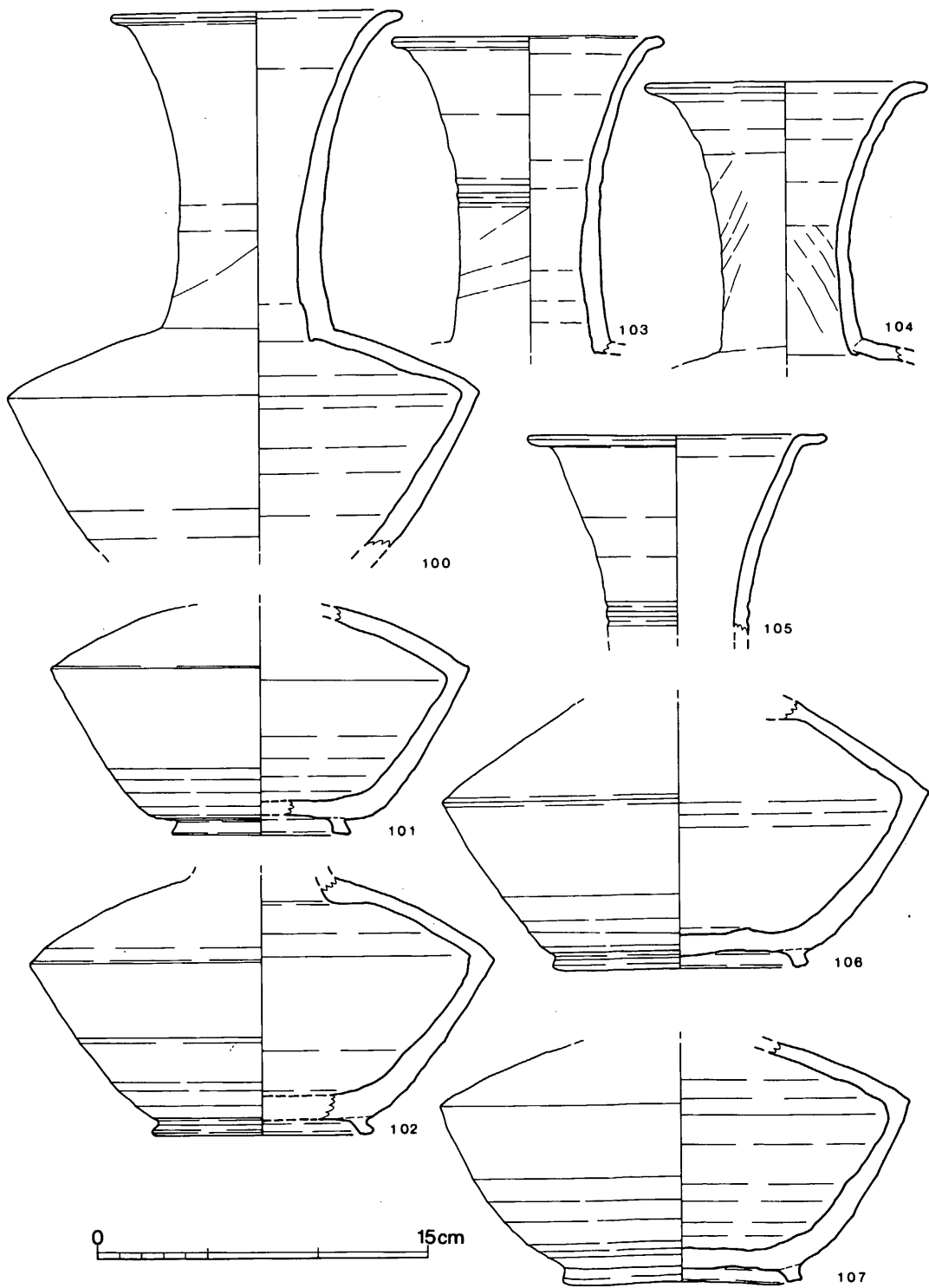
**蓋杯・身 (83～91)** いずれも高台付杯であり、口径により3分類される。83は口径8.3cmと非常に小形品であり、ハの字状を呈する低い高台がつく。84は口径11.4cmと中形であり、底部やや内側に高台がつく。85～91は口径13.8～14.7cmと大形であり、概して体部は深いものが多い。体部は直線的に外反し、口縁部をさらに外反するもの85・86もみられる。高台はやや長目



第 15 図 灰原出土土器実測図① (縮尺 1/3)



第 16 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



第 17 図 灰原出土土器実測図③ (縮尺 1/3)

のものがつき、底面すべてが接地するものと、端部内側を接地するものとがみられる。

**皿 (92~94)** 92は底部内側に高台がつくものである。口径18.8cmを測る。93は口径13.9cmの小形品であり、底部外面は回転ヘラ削りする。94は口径17.4cmであり、口縁部を外反させる。底部外面は静止ヘラ削りする。

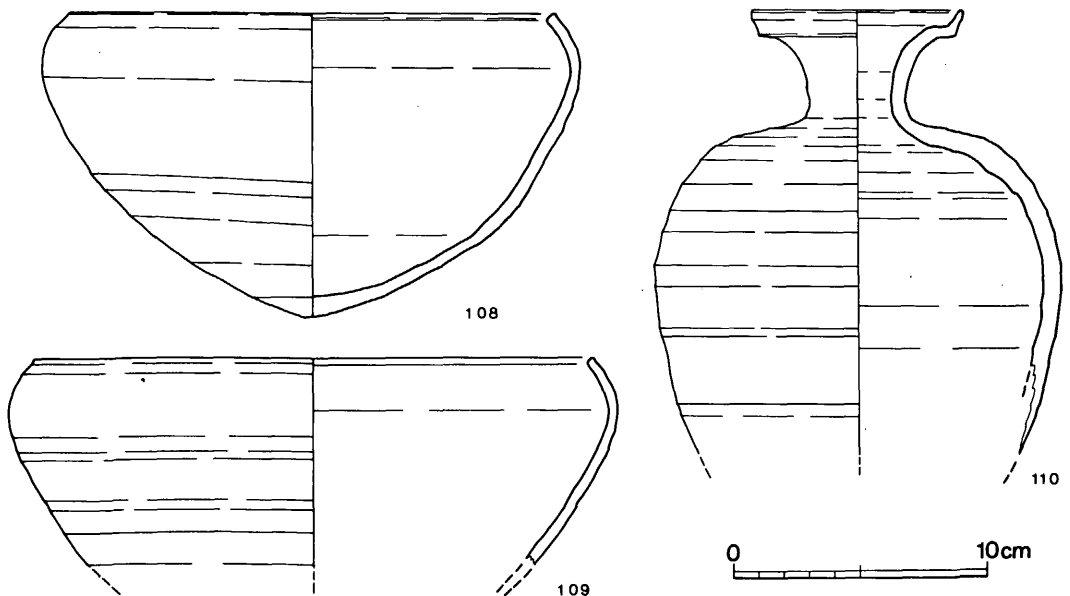
**高杯 (95・96)** 無蓋高杯の杯部は浅く、口縁部を短く直立させ、端部は平坦で内傾する。脚部は丈の低いもので、脚裾部内面は段がつく。

**短頸壺 (97~99)** 97は短頸壺の蓋である。天井部は回転ヘラ削りし平坦面を有する。体部との境は鋭く、稜がつく。口縁端部を短く外反させ、平坦面を有する。98は短く直立する頸部を有し、口縁端部は平坦面を有する。胴部上位が肩となり、丸くつくられている。胴部下半は回転ヘラ削り調整である。底部の外側端部近くに高台を貼付する。

**長頸壺 (100~107)** 口頸部は長さ12~14.5cmであり、大きく外反し、口縁部となる。頸部中央に2条の沈線を配したものの103もある。口縁端部の形態は105の如く、水平に屈曲させるものもみられる。肩部と胴部の境は体部中央よりやや上方にあり鋭く稜線が入る。胴部下半以下に回転ヘラ削りを施す。底部外端部に比較的低い高台を貼付する。

**鉢 (108、109)** 鉄鉢形の鉢で大きく外反した体部を口縁部近くで急激に内傾させるものである。口縁端部は平坦面を有し内傾している。底部は尖り底である。体部下半に回転ヘラ削りする。

**瓶 (110)** 短く、細い頸部を有し、口縁部は大きく外反させ、端部を短く立てる。肩部に稜はなく丸くつくられている。体部中央よりやや上位以下を回転ヘラ削りする。



第18図 灰原出土土器実測図④ (縮尺 1/3)

#### (4) 小 結

A-2地区の調査は、付替市道建設に伴うためのものであり、沢を挟んだ両側の丘陵の裾部から中腹までの比高差10m程の範囲であった。調査の結果、沢の東側斜面の2カ所で灰原を検出し、北から2号、3号窯灰原とした。2号窯灰原は、斜面下部から中腹にかけての位置で黒色土の薄い堆積が見られたが、須恵器片を若干検出したのみで、上位に窯跡が所在するとも思えないため、欠番とする。

3号窯灰原は、標高116mの丘陵斜面中腹から、幅15m、長さ10mで扇形に広がるものであり、この灰原直上部には窯本体が所在する事は明らかであった。灰原の層位を検討したが、遺物を含む層を新・旧に区分することは困難であった。

興味深い資料としては、灰原範囲内に地山を掘りくぼめて蓋杯の蓋と身をセットで納めたピットが検出された。このピットは窯内の灰をかき出す以前に掘られたもので、窯の火入れに関する祭祀の一例として把握することができよう。

当該灰原から蓋杯、皿、高杯、短頸壺、長頸壺、鉄鉢、瓶の器種が出土しており、他の窯跡に比して長頸壺が出土する割合が大である。出土土器の中には蓋に身受けの短いかえりを有した古式のもの、これに伴う深い体部の杯等もみられる。

したがって、本灰原の出土遺物は7世紀終り頃から8世紀前半代に比定され、今回調査した牛頸窯跡群中、最も古い資料と言える。

### 3 A-3地区（井手窯跡群）の調査

#### (1) 調査の概要（図版10、第19・20図）

A-3地区はA-2地区3号窯灰原より、南へ150m程沢を分け入った地点にある。当該調査地点も付替市道にかかる部分であり、限られた範囲の調査となった。調査地点は平坦面の少ない地形であり、道からもかなり内奥へ入り込んだ場所であるため、当時の工人達が、土器の搬入、搬出を行なうにあたっての苦労が偲ばれた。窯跡は丘陵の北側斜面中腹に5基構築されており、標高は133～138.5mの間にある。発掘区域は標高135m以上の高さのため、窯本体については土地所有者の協力を得て完掘する事ができたが灰原については未調査であり、表面採集のみを実施した。





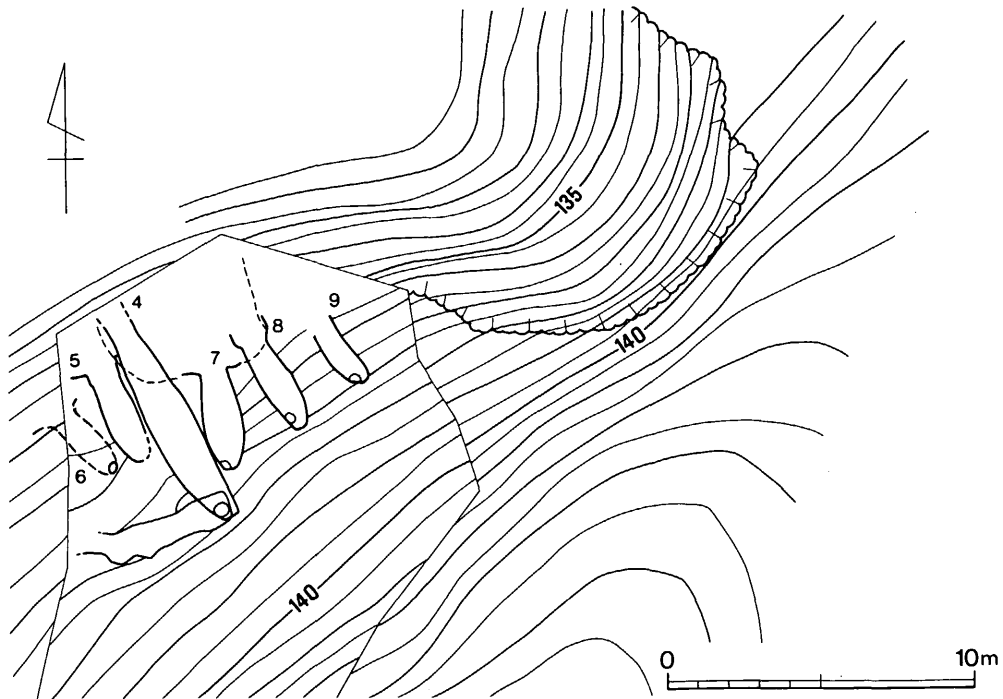
第 19 图 A-3 地区地形图 (縮尺 1/400)

(2) 4号窯跡 (図版11・12・13、第21図)

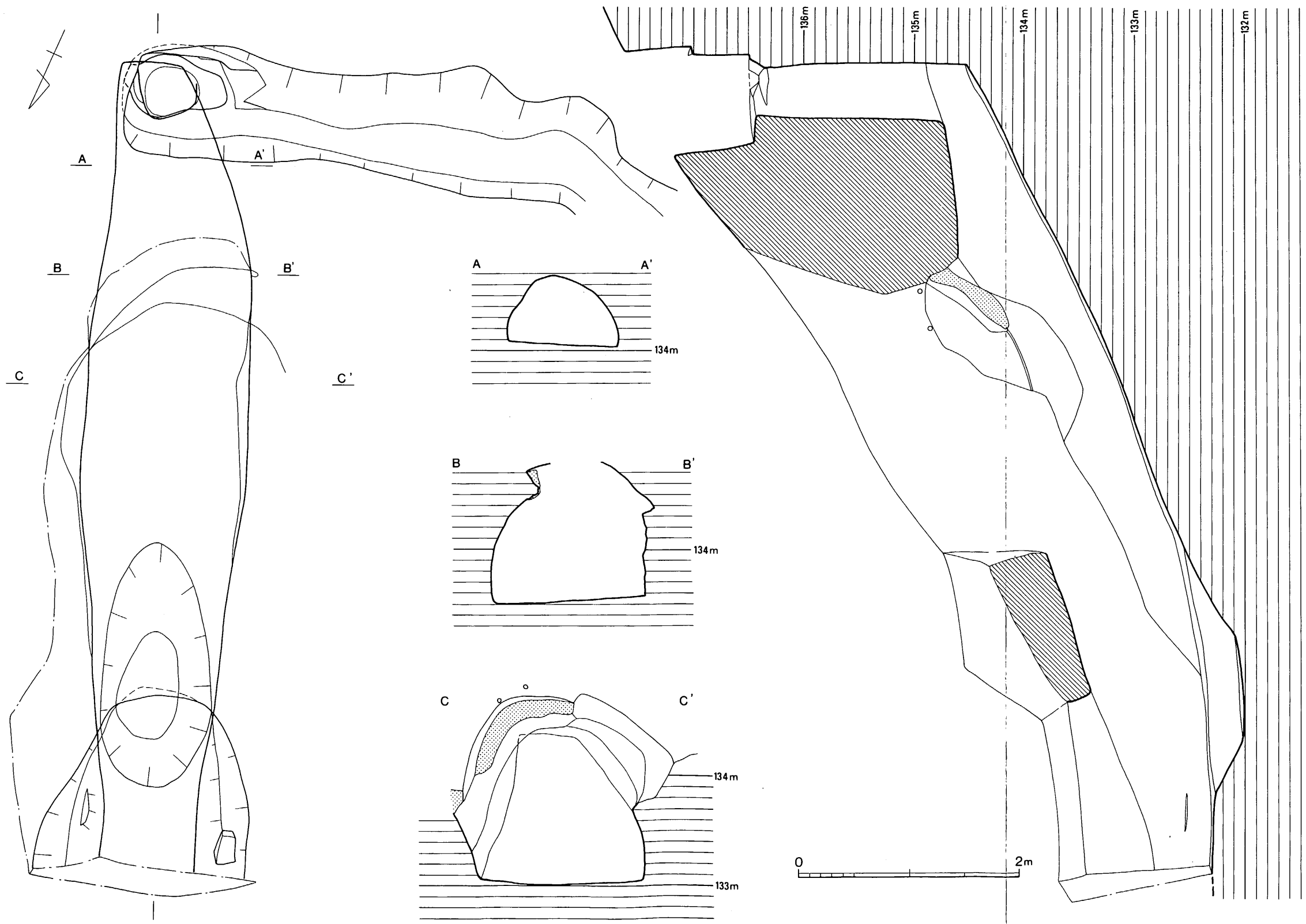
本窯は、今回発掘調査を実施した窯跡群のうち最も長大なものであり、この時期の窯が小型化する中で注目されるものである。窯は、標高133~138mの間に等高線に対して直交して構築されている。窯体は焼成部の天井部の $\frac{1}{2}$ と、燃焼部の上半分が崩壊している。現地表から床面までの深さは、焚口付近で約1.5m、奥壁際で約3.5mを測る。窯は燃焼部は花崗岩パイラン土の地山をオープンカットして下半部を造り、天井部はスサ入り粘土で形成されるが、焼成部以上は地下式無階無段登窯である。床面の形態は焚口部が狭く、焼成部中央で最も幅が大となる胴張りの長方形を呈するものである。

窯体の主軸方位はS-24°-Eであり北北西に焚口が開くものである。窯体の全長は、主軸線上で7.6m、床面の最大幅1.5mを測る。床面は1次と2次の床面が見られ、窯内からは須恵器甕の大形品が出土しており、大形品を専門に焼成したことがうかがえる。なお前面の灰原採集品の甕口縁部内面にはヘラ状工具で刻した文字が書かれていた。文字は別個体の甕2個体にみられ一つは「那智郡」、一つは「天神部所国養」とあり、「天」は「矢」かも「養」は「着」「差」かも知れない。文字の問題と大形品については次年度報告にまわすことにする。

**燃焼部** 焚口部前面は区域外のため未調査である。焚口は床面の幅82cmであり、燃焼部には



第20図 A-3地区窯跡配置図 (縮尺 1/250)



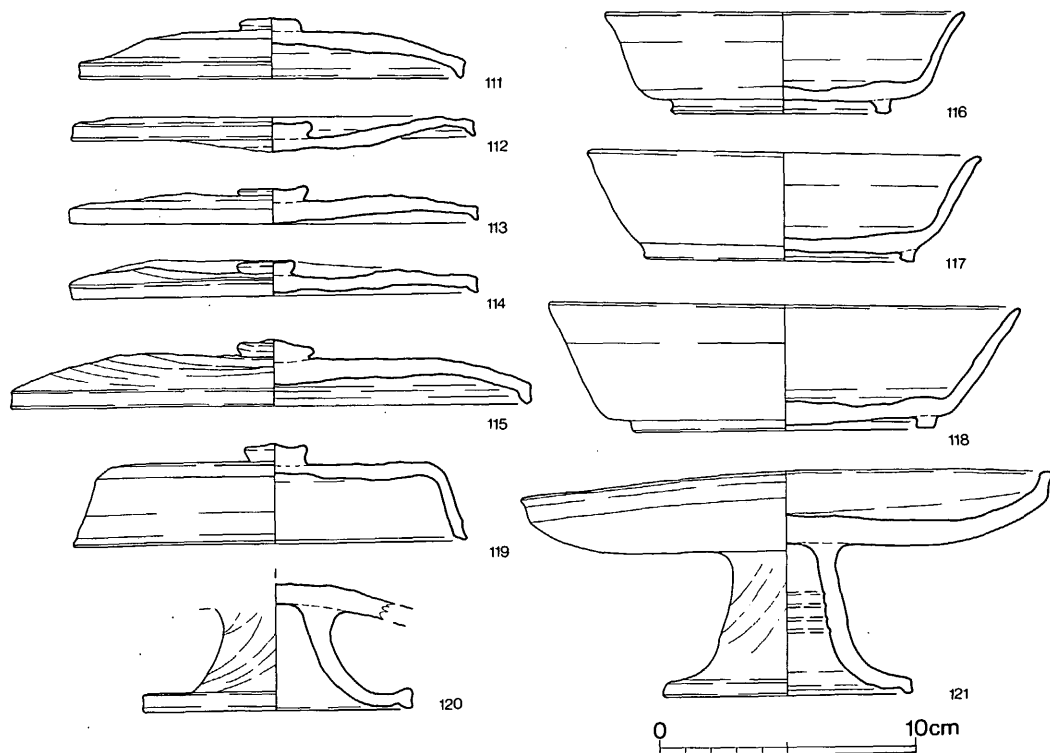
第 21 图 4号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

長さ2.2m、幅1mで楕円形を呈する深さ0.35mのピットがあり内部には灰と土砂が詰っていた。このピットは底面に厚さ3cmの明灰色を呈した焼成面があり、上方には厚さ0.3m程火熱を受けた土をかき出しているのが堆積していた。

**焼成部** 燃焼部の楕円形ピットの直前部からが焼成部が始まると思われ、長さ4.80mを測る。床面の幅は中央部が最大となり1.5m、奥壁部は0.55mを測る。床面は平坦面を有して上昇しており、傾斜角は約25°である。天井部までの高さは、奥壁から1mの位置で0.63m、2.3mの位置で1.25m、3.3mの位置では1.7mを測り、断面の形態はドーム状を呈している。焼成部中程の天井部に近い側壁左側部分は崩壊した後、スサ入り粘土で補修して壁を造り直しているのが見られた。

**煙出し部** 奥壁は基部から煙道径0.5mで高さ1.95m程垂直に立ち上がり、上面には幅0.85mで深さ1.5mの排水溝につながる掘り込みを有する。煙道部上面には、蓋杯の蓋2個と高杯1個で蓋をしていた。

**排水溝** 煙道部先端から、窯体に対して直角に近い角度で西側に屈曲した排水溝である。上幅約0.9m、深さ0.3~0.45mで逆梯形の断面形を呈しており、底面は西側先端部へと下降気味に約4.5m程延びている。この排水溝先端部からは蓋杯6個体と短頸壺の蓋、高杯がまとまって



第 22 図 4 号窯出土土器実測図 (縮尺 1/3)

出土しており、祭祀と関係があるものと思われる。

### 出土遺物（図版18、第22図）

煙道部からは111、113、121が、排水路先端部からは112、114～118が出土した。窯内からは大甕の破片が検出された。

**蓋杯・蓋**（111～115） 111～114は口径15.1～15.9cmを測り、116は口径20.2cmと大形品である。頂部には扁平な擬宝珠様のつまみがつく。

**蓋杯・身**（116～118） 116・117は口径13.8～15.2cmを測り、蓋111～114とセット的である。118は口径18.3cmと大形品であり115とセット的である。116、117の体部は口縁部の外反度が高い。118の体部は直線的に外反する。高台は四角形の低いものである。

**短頸壺・蓋**（119） 頂部に扁平な擬宝珠様のつまみがつき、天井部は平坦である。体部は直線的であり、口縁端部は外傾する平坦面を有する。天井部外面は回転ヘラ削りである。

**高杯**（120・121） 杯部の底部は丸味を有しており、回転ヘラ削り調整する。口縁部は短く直立気味に屈曲させており、口縁端部上面は平坦面を有する。脚部は丈が低く、脚裾部で大きく外反し、端部内面に段がつく。

### (3) 5号窯跡（図版14、第23図）

4号窯の西に隣接しているが、4号窯が地中深く掘り込まれているのに対し、本窯は上位に位置している。標高134.5～136mの間に等高線に対して直交して構築されている。窯体は天井部の全てを崩壊しており、左壁は、4号窯の天井部が崩壊した上層に落下し堆積していた。現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約0.8m、奥壁際で約1.2mを測る。窯は花崗岩パイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の平面形態は、焚口に比して、焼成部中央がわずかに幅の広くなる胴張りの長方形を呈しており、奥壁は丸味をもつ。窯体の主軸方位はS-25°-Eであり、焚口は北北西に開いている。窯体の全長は3.9mを測る。床面には重なりが見られなかったが、燃烧部の補修跡から1回限りの操業とは思われない。

**燃烧部** 焚口は床面の幅1.0mであり、床面はほぼ平坦である。この平坦面と上昇面との境が焼成部の境と思われ、長さ約0.8mである。燃烧部には、2次操業時に左・右壁に2個ずつ花崗岩の割り石を立てて補修している。

**烧成部** 長さ約3mを測り、床面の幅は中央部が最大となり1.15m、を測り、先細りとなる。烧成部先端での窯体の断面形はカマボコ型を呈し、天井までの高さ0.7mを測る。床の縦断面は、中央部が弯曲しており、この最大に弯曲した地点から奥壁基部の傾斜角は約40°と急勾配である。この部分には土製の置台が10数個床面に貼り付いていた。

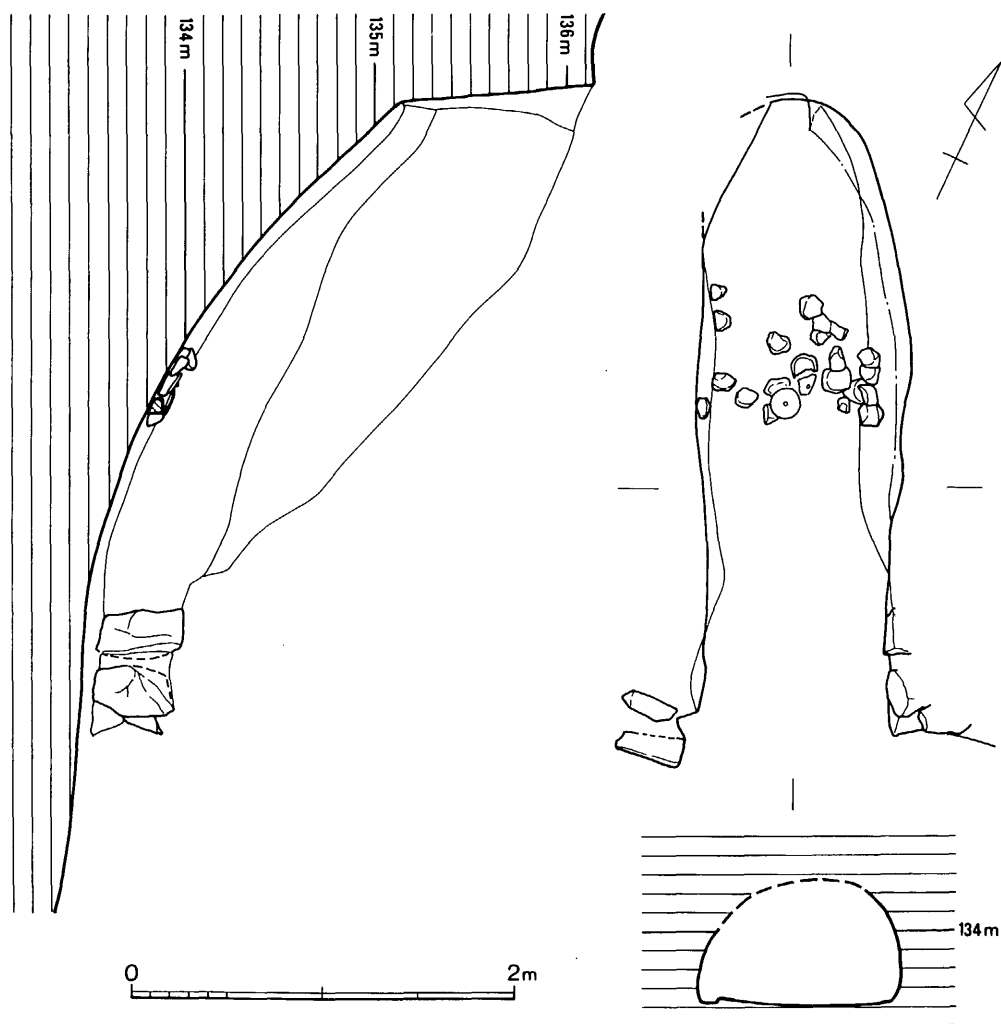
煙出し部 奥壁の基底部から外側へ5°の傾斜を有して煙道が立ち上っている。円筒形の煙道はわずかに筒形をとどめており、径は0.3m、高さ1mのものである。

### 出土遺物

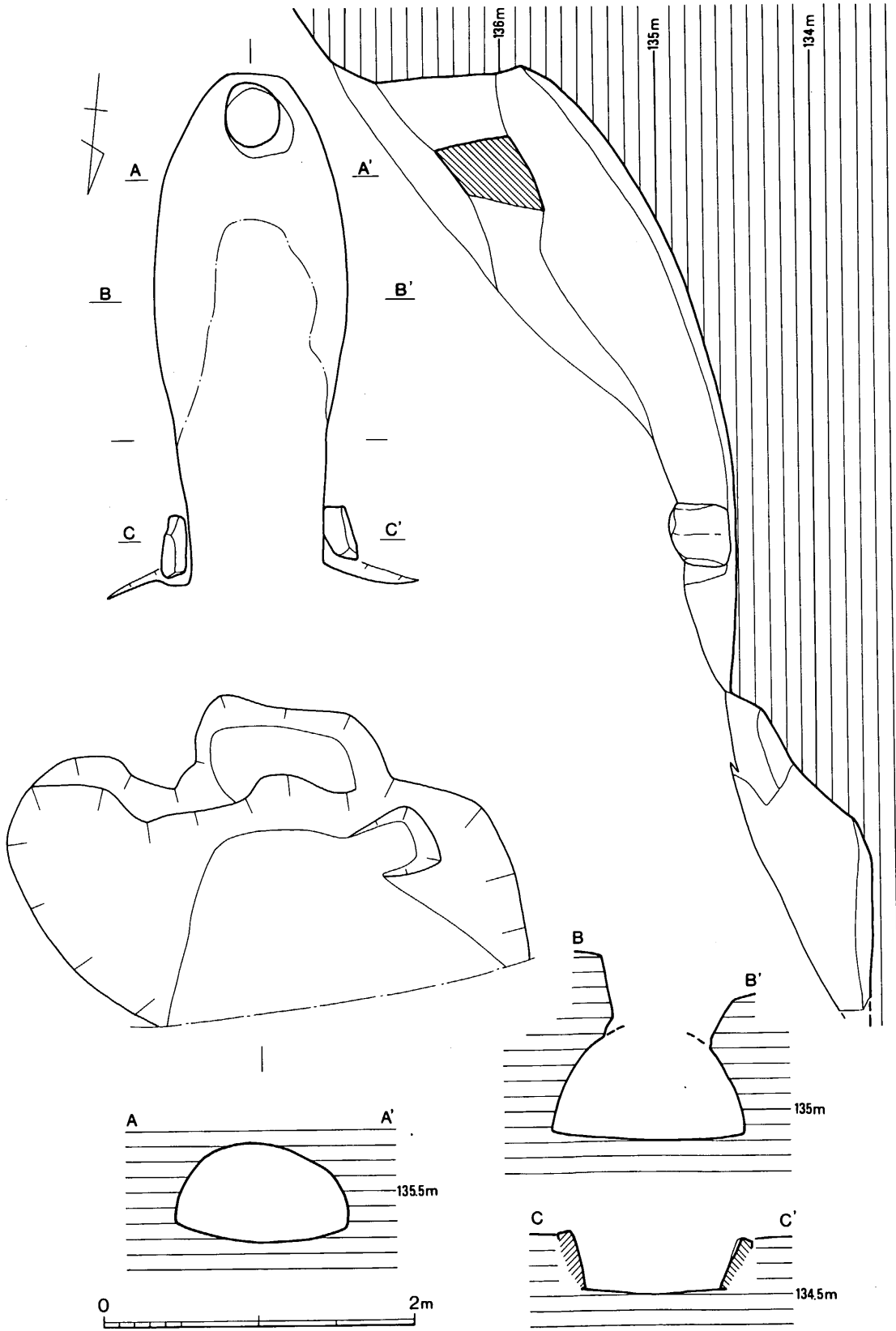
窯内から蓋杯の蓋が2個体出土したのみである。

### (4) 6号窯跡

6号窯跡は5号窯跡の煙道部の西側に隣接して、煙道部上面を検出したが、本体部分は区域



第 23 図 5号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第 24 图 7号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

外となるため発掘調査は行なわなかった。

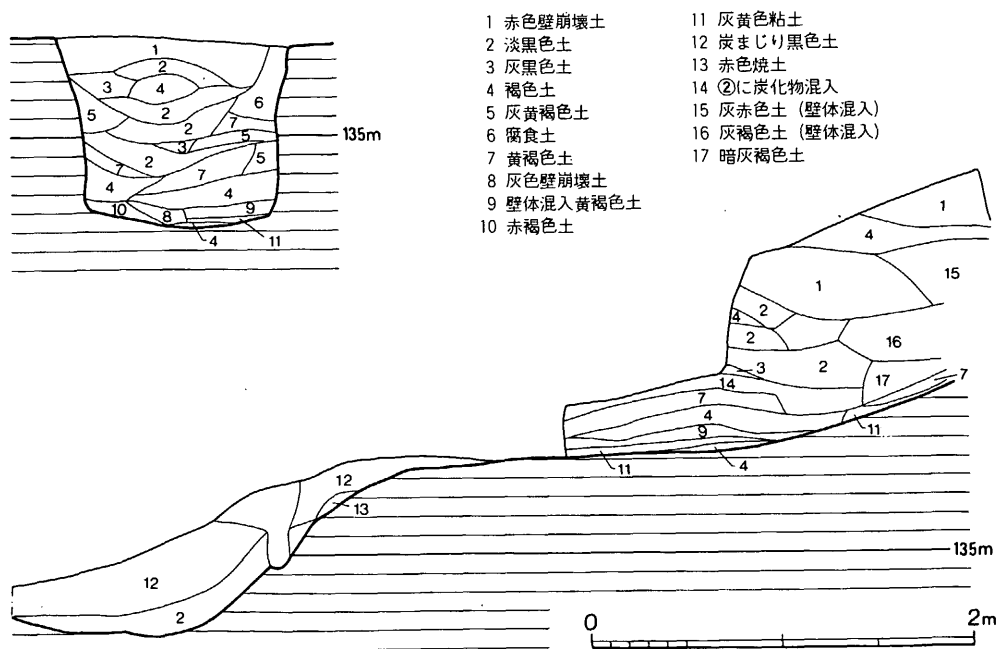
(5) 7号窯跡 (図版15・16、第24・25図)

本窯は5基の窯跡群の中央部に位置したものであり、丘陵にやや斜行して構築されている。窯体は、焼成部と燃焼部の天井部が崩壊している。現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約60cm、奥壁際で約1.5mを測る。窯は花崗岩パイラン土を割り貫いた地下式無階無段登窯であり、燃焼部は半地下式に構築されたと思われる。床面の平面形態は、焚口部が最も狭く、焼成部中央が胴が張って幅を広める胴張り形態であり、奥壁は再び幅を減じ、直線である。

窯体の主軸方位はS-6°-Eであり、焚口はほぼ北向きである。窯体の全長は約3.65m、床面の最大幅は1.25mを測る。床面は1次面のみであり床の重なりは見られなかった。窯内の焚口部付近から蓋杯、皿が出土した。灰原からは蓋杯、長頸壺、壺が出土した。

**燃焼部** 焚口は床面の幅0.85mで、長さは、左壁で1.05m、右壁で0.95mを測り、左壁が若干長い。燃焼部前面はハの字に開いており、左壁、右壁とも長さ0.5~0.6m間が火熱により赤変している。基部には操業当初から左・右壁に花崗岩の自然石を各1個埋め込んで補強している。床面は、ほぼ平坦であり、焼成部との境近くは緩く上昇する。

**焼成部** 燃焼部との境付近から床面は急激に上昇しており、焼成部の全長は約2.75m、床面



第25図 7号窯跡土層図 (縮尺 1/40)



の幅は中央部が最大で1.25m、奥壁幅0.35mを測る。焼成部の平面形は左・右に均衡のとれた胴張り形態であり整っている。煙道部から0.7mの位置での床面から天井までの高さは0.65mでありカマボコ型の断面形を呈する。奥壁から1.5mの位置では高さ約0.75mでドーム型を呈する。床の縦断面を見ると弯曲しており、焼成部先端から奥壁までは29°であるが、焼成部中央から奥壁までは37°と急勾配となる。

**煙出し部** 奥壁は基部から高さ0.2m程内傾気味に立ち、この部分からやや内傾気味ながらも垂直に近く立ち上った円筒形のもので、径は基部で0.4m、端部で0.5m、奥壁基部からの高さ0.95mを測る。

**前庭部** 燃焼部前面には、端部から0.7m程の平坦な前庭部がつき、直前部には幅3.25m、深さ0.8mの不整形をした段付きの掘り込みがみられる。

#### 出土遺物 (図版18、第28図)

室内の焚口部付近から蓋杯122・123と皿124が出土した。

**蓋杯・蓋 (122)** 口径15.7cmを測り、中央部には頂部をくぼませた扁平なボタン状のつまみがつく。

**蓋杯・身 (123)** 口径12.8cmを測る。短か目の体部を直線的に外反させ、端部内面を接地させた丈の低い高台がつく。

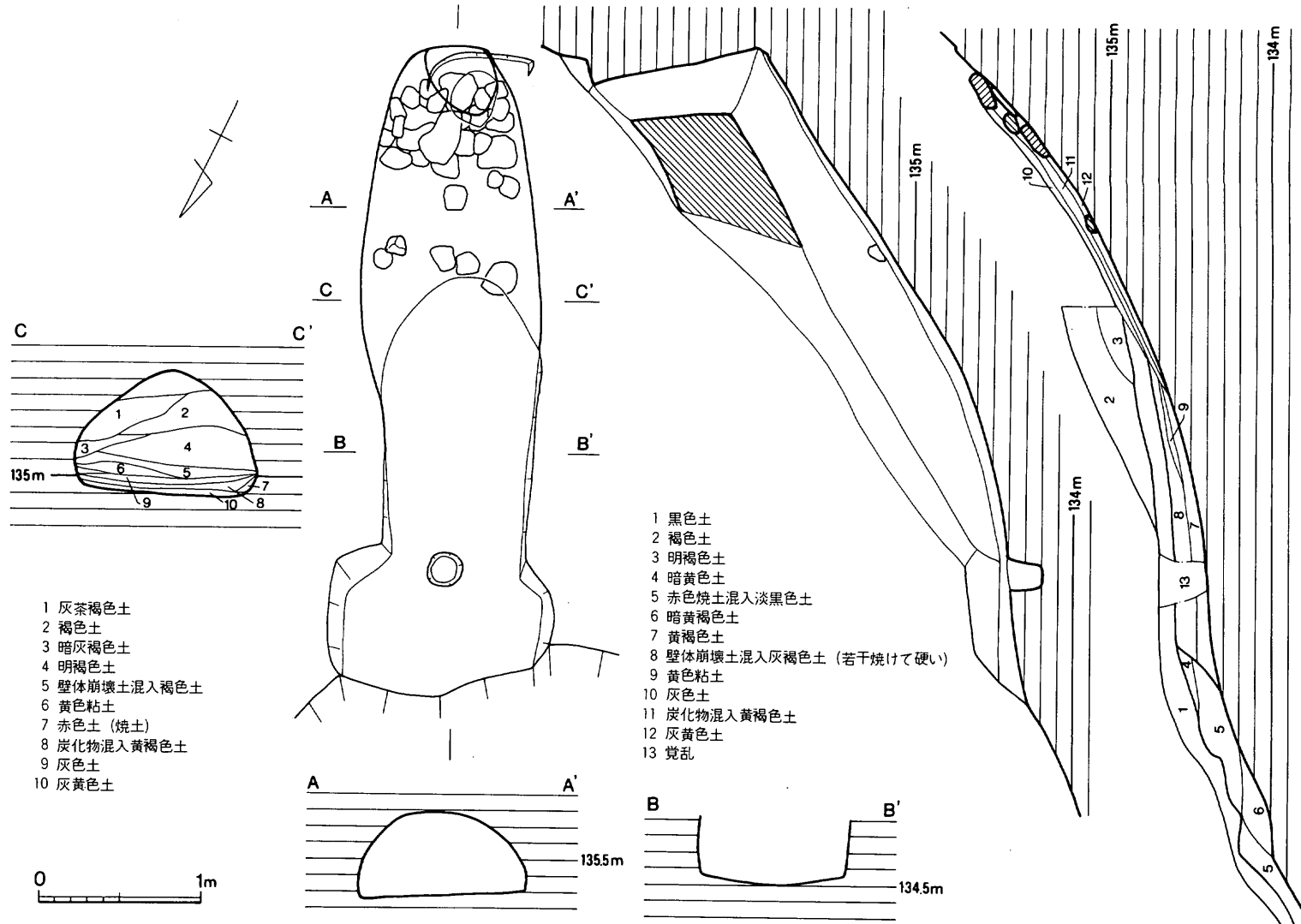
**皿 (124)** 口径20.8cmを測り、体部は短か目で、大きく外反させる。底部外面は回転ヘラ削りを施す。

#### (6) 8号窯跡 (図版17-1、第26図)

本窯は7号窯の東、9号窯の西の略1mの間隔に位置しており、等高線に対して直交して構築されている。窯体は、焼成部中央から燃焼部までの天井部が崩壊しているものの比較的遺存状態は良好であった。現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約0.7m、奥壁際で約1.5mを測る。窯は、燃焼部は現存する丘陵の傾斜と天井部の高さから半地下式と思われ、焼成部、煙出し部は花崗岩パイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の平面形態は、焚口部が狭く、直線に造られるが、焼成部は左壁が顕著に胴の張る長形状を呈する。

窯体の主軸方位はS-25°-Eであり、焚口は北北西に向く。窯体の全長は4.3m、床面の最大幅は1.1mを測る。床面は1次～3次までの3層が観察され、少なくとも3回の操業が行なわれたことがわかる。窯内からは蓋杯が検出された。灰原は前面の斜面で確認され、上層には7号窯の灰原がこれを覆っている。

**燃焼部** 焚口は、床面の幅0.8mであり、側壁部が直線から曲線へと変換する位置を焼成部の



第 26 图 8号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

境と考えると、長さ約0.95mを測る。焚口直前部の主軸線上の床面には径0.2m、深さ0.22mのピットがある。燃焼部前面には、左・右壁に両肩を付設した掘り込みの前庭部がつく。

**焼成部** 燃焼部との境は不明瞭であるが長さ約2.7m程と思われ、床面の幅は、焼成部前面部が最大で1.1m、奥壁部では0.45mを測る。床面は弯曲せずに平坦面をなし、奥壁基部までの角度は35°である。奥壁から1m下方の窯体の横断面はカマボコ型を呈しており、天井部までは0.5mの高さである。1.5mの位置では、天井部まで0.75mを測り、断面形はドーム型となる。窯の上方部、煙出し部近くにはスサ入り粘土の置台が各層の床面に貼り付いている。3次面の床は1次面の床の8cm上方につくられている。

**煙出し部** 奥壁は基部から13°程内傾して立ち上がり、口辺径0.26m、底辺径0.35mの円筒形の煙道が基部から1.05m程のびる。この煙出し部の口辺から10cmの位置に幅0.6mで半月形を呈する掘り込みが見られ、斜面を伝って煙出し内に流入する水切りの役目を果たしたものと思われる。

#### 出土遺物（図版19、第28図）

窯内からは蓋杯132が出土した。

**蓋杯・身（132）** 口径15cmであり、体部は低い。底部の端部近くに幅の広い、低い高台を貼付する。

#### (7) 9号窯跡（図版17-2、第27図）

本窯跡群中、最も東側に位置し、丘陵の等高線に対して直交して構築されている。窯体は、焼成部の $\frac{1}{2}$ 強と煙出し部を完存するが、燃焼部を一部崩壊している。現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約0.7m、奥壁際で約0.9mを測る。窯は花崗岩パイラン土を剥り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の形態は、右壁は胴張りであるが、左壁はほぼ直線であり、平面形は良くない。

窯体の主軸方位はS-34°-Eである。窯体の全長は2.8m、床面の最大幅は80cmを測る。床面は1次面のみであり重なりは見られなかった。窯内からは蓋杯が出土した。

**燃焼部** 前面部は崩壊しているが現存する焚口床面の幅は0.75mである。床断面を見ると、現存する燃焼部先端から0.6m内側に傾斜変換点があり、焼成部の境と判断できる。

**焼成部** 前述の変換点を境とすれば、焼成部は長さ2.05m、床面の幅は中央部で0.8m、奥壁部では0.3mを測る。焼成部中央での窯断面はカマボコ型を呈しており、天井部までの高さは0.55mと極めて低いものである。床の縦断面を見ると焼成部中央部が最も弯曲している。焼成部先端から奥壁基部までの傾斜は40°であり、中央部から奥壁基部までは50°と急な勾配である。

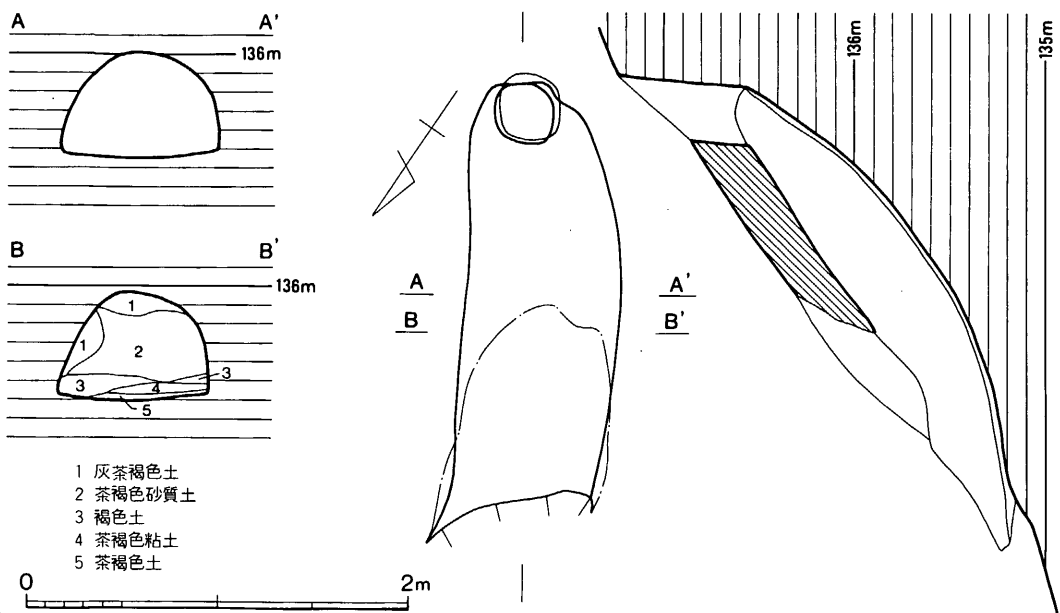
**煙出し部** 奥壁は基部から垂直に立ち上って煙道となっている。煙道は直径0.3mの円筒形で

あり、高さ0.65mである。本窯は奥壁基部と煙出し下端部のレベルが同一であり、それだけ天井部が低いことがわかる。

### 出土遺物（図版19、第28図）

窯内からは蓋杯133が出土した。

**蓋杯・蓋（133）** 口径14.4cmであり、天井部中央に、頂部をややとがらせた扁平なつまみがつく。天井部外面は回転ヘラ削りしている。



第 27 図 9号窯跡実測図（縮尺 1/40）

### (8) 灰 原

発掘区域は丘陵の斜面中腹から高位部分であり、このため窯体が一部区域外に延びるものについては地権者の同意を得て完掘することができた。灰原についてはその大部分が区域外となる斜面下部から裾部に位置しているため、表面採集を実施しただけである。したがってこの部分から採集した土器は4号～9号までのものが含まれており特定できない。ただし、大甕等の大形品については、4号窯のみで焼成されているため特定は可能である。

4号窯の焚口部付近のセクションでは、上層に5号窯の灰原が薄くのっており、蓋杯134～137が採集された。

6号窯は区域外となり煙出し部のみを確認しただけであるが、同窯跡の東部で一括して土器

が採集されているので、6号窯に関係する資料として紹介しておく。土器138~149。

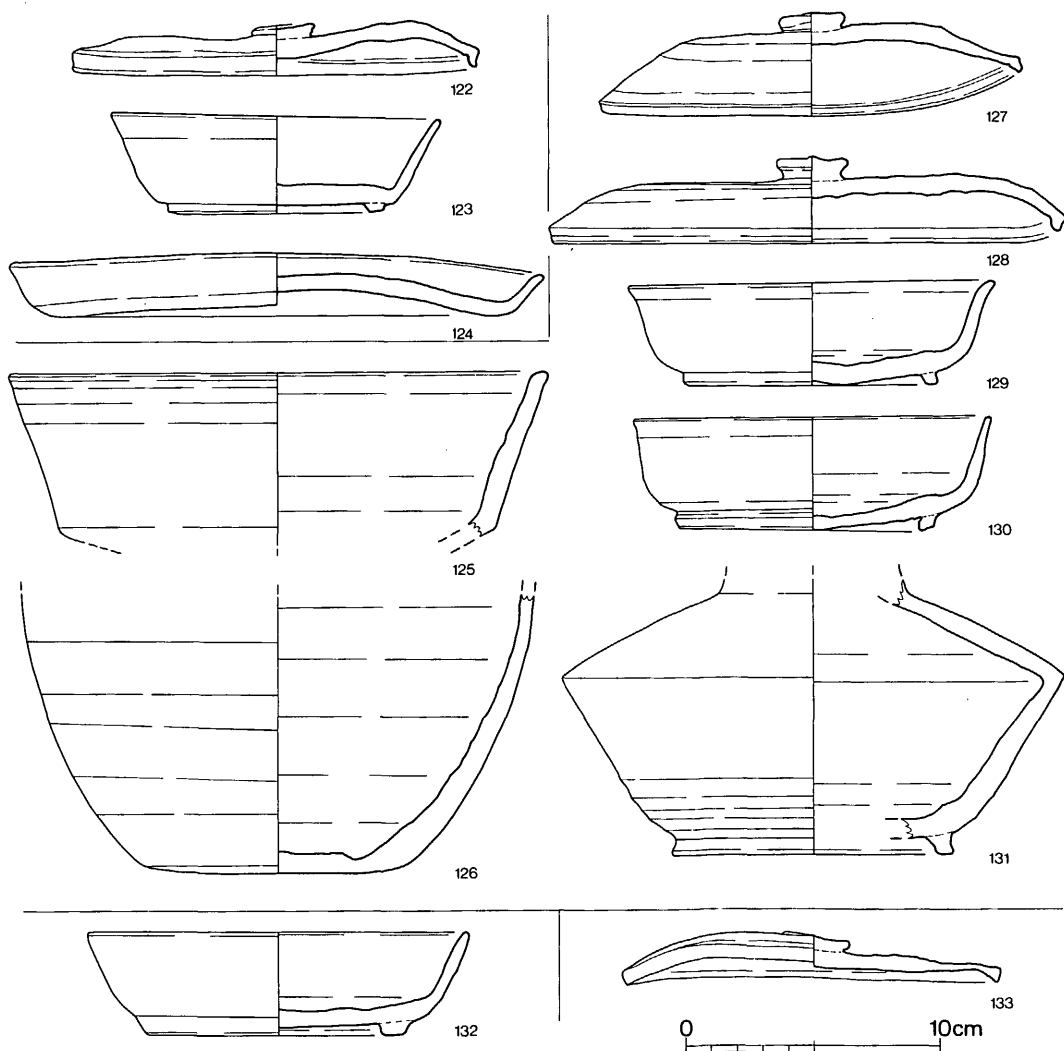
8号窯中軸線上のセクションでは、8号窯灰原に7号窯灰原がのっており新旧関係がわかる。

### 出土遺物（図版18・19、第28~30図）

5号灰原出土品は134~137である。

**蓋杯・蓋（134~136）** 134・136は口径13.2~15.0cmであり、135は口径17.6cmと大形である。いずれも中央部には扁平なつまみがつき、天井部外面は回転ヘラ削りし、体部との境に稜線が入る。

**蓋杯・身（137）** 口径14.0cmである。体部中ほどに凹みをもち、口縁部は外反気味にのびる。



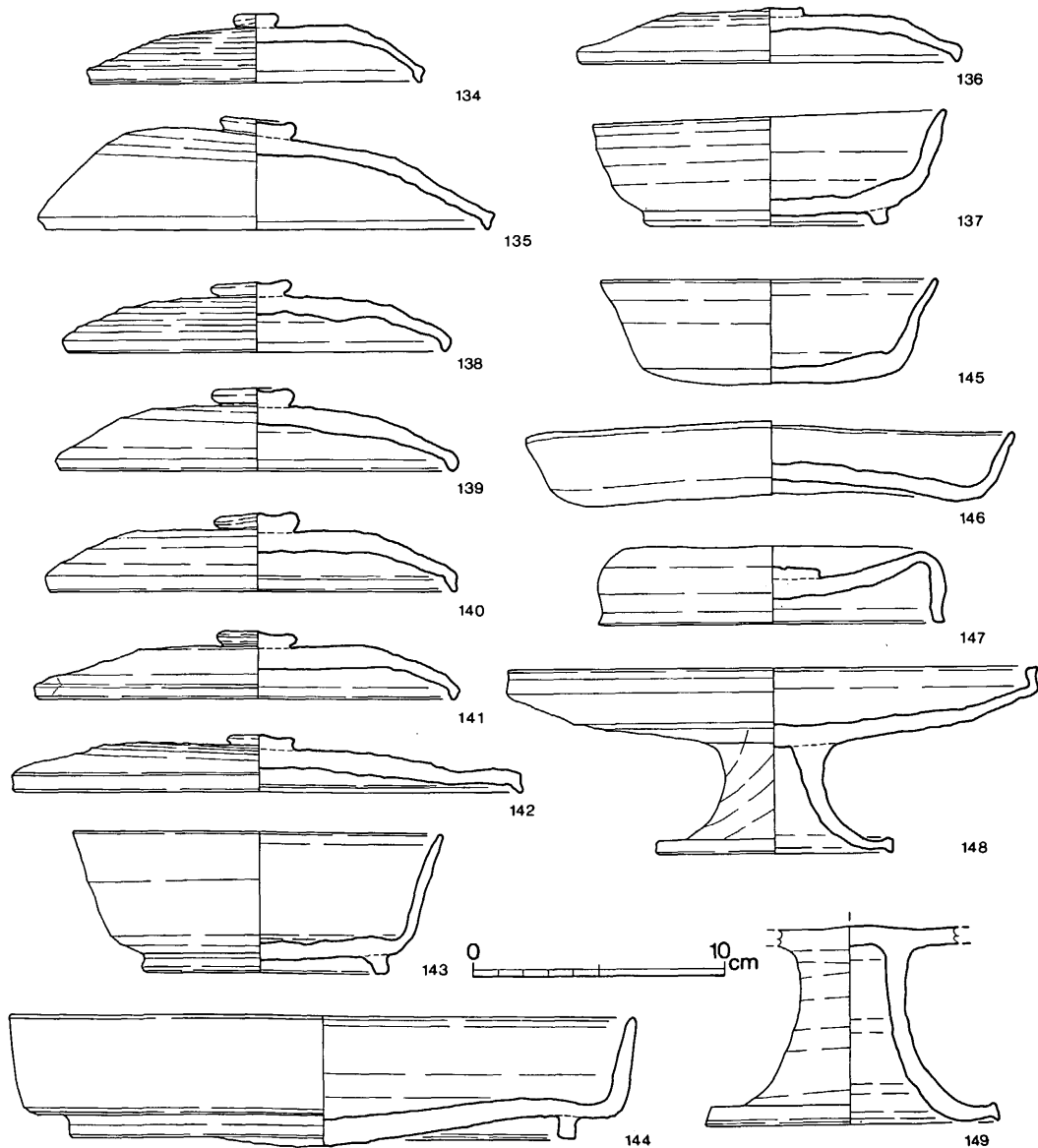
第28図 7号・8号・9号窯出土土器実測図（縮尺 1/3）

全体に厚手造りであり、底部外端部近くに高台がつく。

6号窯東一括土器は138～149である。

**蓋杯・蓋 (138～142)** 138～141は口径15.1～16.5cmであり、142は口径20.1cmと大形品である。中央部にはいずれも扁平な擬宝珠様のつまみがつく。天井部外面は回転ヘラ削りし、天井部はやや丸味を有する。142は器高の低いものである。

**蓋杯・身 (143・145)** 143は高台付杯である。口径14.8cmであり、体部の外反度は小さいも



第 29 図 5号灰原・6号窯東一括出土土器実測図 (縮尺 1/3)

のである。145は無高台杯であり、口径13.2cmを測る。体部中位に屈曲面を有して口縁部は外反している。

皿 (146) 器形は歪んでおり、口径19.3cmを測る。底部外面は回転ヘラ削りする。

盤 (144) 焼きひずみにより、底部が外側へ突き出しており、このため本来外反する体部が直立気味になっている。口径24.7cmであり、底部のやや内側に長めの高台がつく。

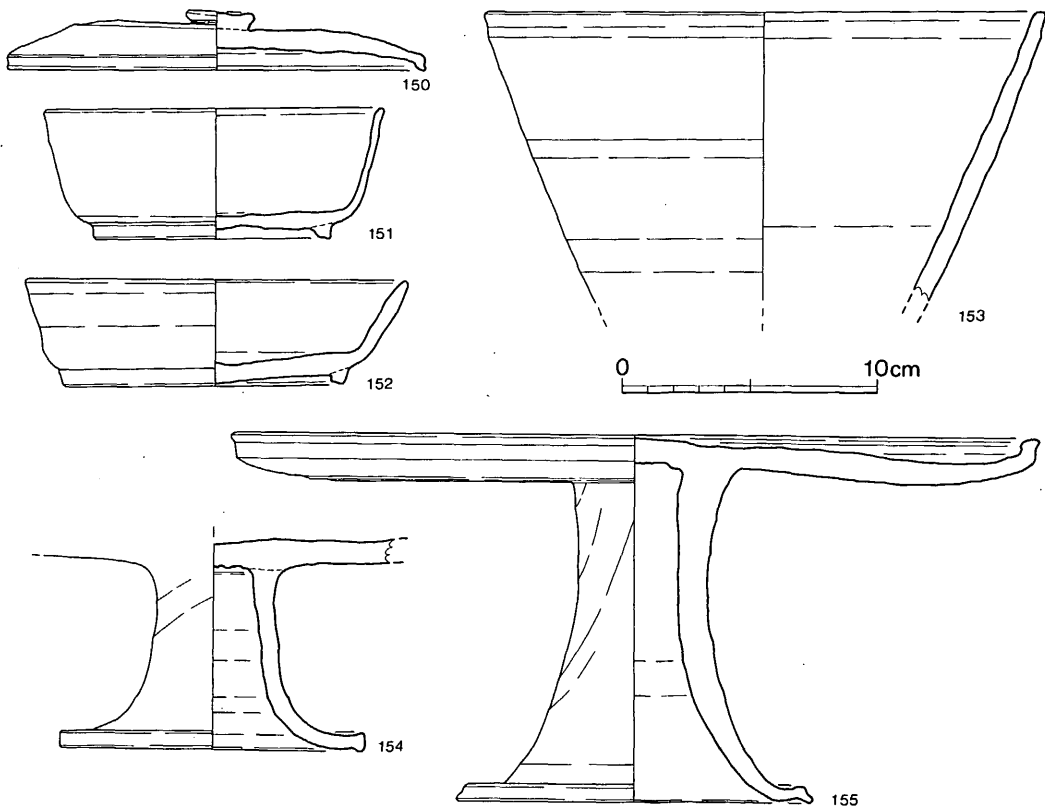
蓋 (147) 短頸壺の蓋である。天井部が陥没して内方に落ち込んでいる。中央部には扁平なつまみがつく。口縁部を外反させており、端部は平坦である。

高杯 (148・149) 杯部は浅く、口縁部は垂直に短く立ち上がり、端部は平坦で内傾する。底部に一部回転ヘラ削りする。149の脚は器高、底径が大であり、杯部も大形品となろう。

4号～9号灰原出土品は150～155である。

蓋杯・蓋 (150) 口径16.2cmとやや大形品である。中央部に扁平な擬宝珠様のつまみがつく。器高は2.3cmと低い。

蓋杯・身 (151・152) 口径13.1～14.8cmである。151は体部の外反度も少なく、器高も高い。



第 30 図 4～9号窯灰原出土土器実測図 (縮尺 1/3)

いずれも底部外端付近に、外端部を接地させた高台がつく。

**鉢** (153) 体部、口縁部は直線的に外反するもので口径21.8cmを測る。体部下半は回転ヘラ削り調整である。

**高杯** (154・155) 155は杯部口径31.4cmと大きいのが、浅いものであり、口縁部は垂直に短く立つ。口縁端部は平坦で、内傾させる。脚部は丈が長いもので、脚裾部を外反させ、端部内面に段がつく。

## (9) 小 結

A-3地区の調査では6基の窯跡の所在が確認されたが、このうち6号窯跡は窯本体が発掘区域外となるため、その煙道部の確認だけにとどめた。

窯は、丘陵北側斜面の中腹の標高133~138.5mの間に構築されている。5基の窯跡のうち4号窯跡は他の4基に比して地中深く造られた長大な窯で、この時期の窯が小形化する傾向の中で特異な存在である。これは、4号窯内から大形甕の破片が出土している事と前面灰原の表採品に多数の甕片が見られることから、大形品を専門的に焼成したことがわかり、窯によって大形品、小形品の分業生産体制が確立していたことがうかがえる。

5・7~9号窯までの4基はこの時期通有の小形の窯であり、特徴は以下の様である。

規模は、全長3.65~4.3m、幅1.1~1.25mとほぼ似通っているが、9号窯跡のみさらに小形で、全長2.8m、幅0.8mである。平面形態は、焚口部の幅が最少で、胴張りの焼成部中央が広がる長形状を呈する。焼成部床面は勾配が29°~40°と急であり、なおかつ中央部が湾曲するため焼成部中央上位からは10°程傾斜がきつくなる。この様に、煙道部近くの傾斜を大きくするのはそれだけ火熱の引きが良くなる事を意識したものと思われる。燃焼部と焼成部の境は不明瞭なものが多く、その境を決定するのに判断に苦しむものが多いのが一つの特徴である。

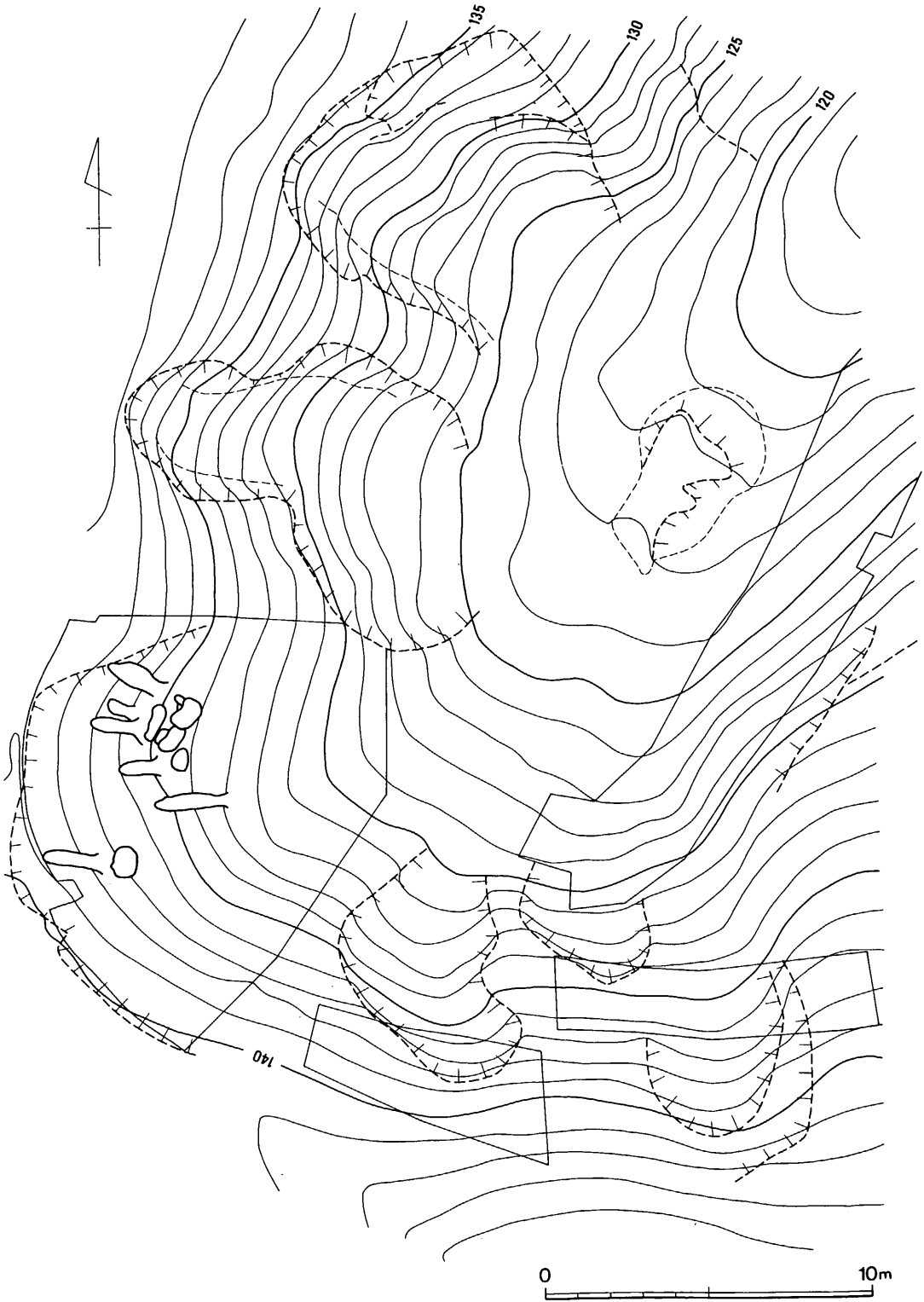
操業の期間及び焼成の回数については7・9号窯は床の重なりが見られないため短期間の操業と思われ、4・5号窯は壁の補修痕などから少くとも2回の、8号窯は3層の床重なりが見られるため少くとも3回の操業が考えられる。

各窯跡間の先後関係は、4号窯より5号窯の方が新しいと判断できる。8号窯と7号窯灰原の土層セクションからは7号窯が新しいことがわかる。この様に、窯跡間の先後関係と窯体の特徴や立地から、本窯跡群ではまず4号窯があり、次いで5・6・8号窯がほぼ同時期に造られ、その後7号窯が構築されたものと思われる。9号窯については、本窯跡群の西端に位置し、規模が更に小形となり、平面形態もいびつな点から最も後出するものと判断される。

いずれにしても出土遺物からは、そんなに大きな年代の開きは見られず、8世紀後半代に相次いで操業されたものと思われる。

(川述 昭人)





第 31 图 B-2 地区地形图 (縮尺 1/400)

## 4 B-2地区（井手窯跡群）の調査

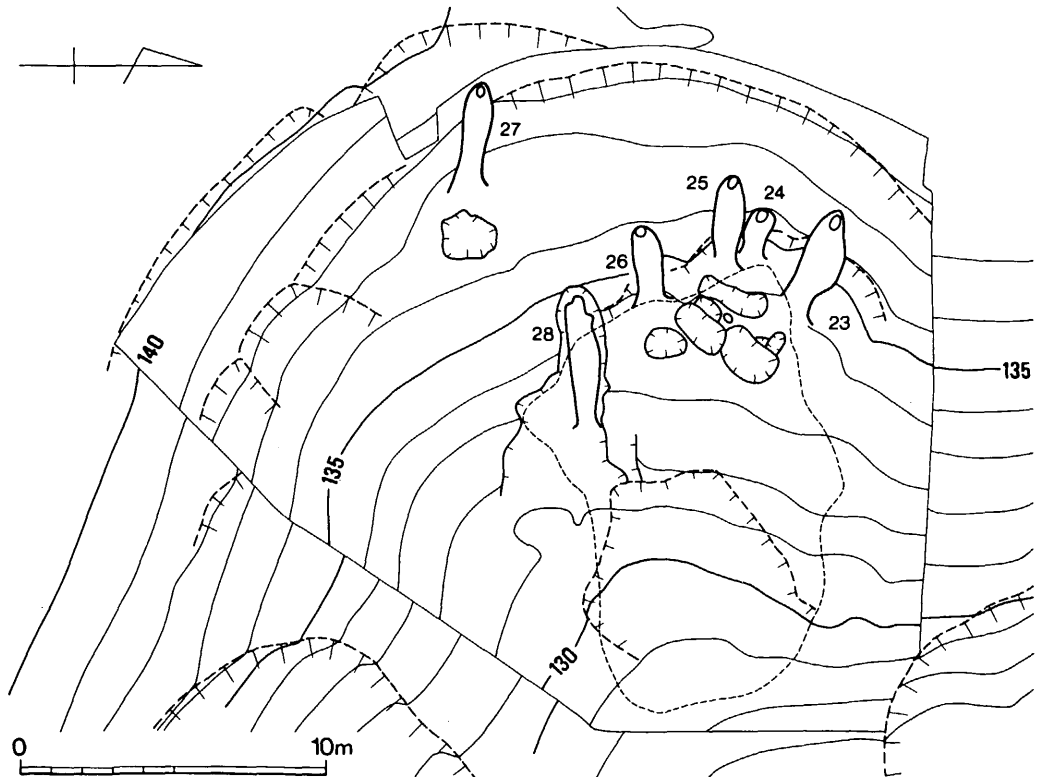
### (1) 調査の概要（図版20～22、第31・32図）

B-2地区は東西にB-1・B-4区がある谷に挟まれた谷の奥部に位置する。この谷は比較的狭長で、谷奥部を除くとその傾斜は急であり、窯の存在を想定しにくい状況であった。しかし、念のため踏査し、また可能性のある部分も調査したが、その痕跡すら皆無であった。

窯は谷奥部の西側斜面に計6基存在した。23・25・26号窯は同時に窯を構築するために地山を削平整形していた。27号窯は単独、28号窯は須恵器を焼成したような痕跡はなかった。24号窯は25号窯と一部重複しており、また出土資料からみると、このB-2区最期の単独窯であったことが知れた。

以下、窯の個別説明とそこからの出土遺物について述べ、灰原出土品については27号窯を除いて窯それぞれに分別が不可能なため一括して報告する。

また、遺物の説明については下記のようなした。



第32図 23号～28号窯跡地形図（縮尺 1/250）

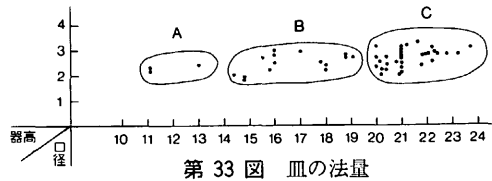
出土した遺物は、蓋杯・杯・皿・高杯・壺・瓶・鉢などがあり、このうち最も多いのが蓋杯であり、中形品の鉢などは極くわずかししか出土しなかった。つまり、小形品を中心として焼成した窯であるといえる。

蓋杯は形態によりA～C、皿は法量によりA～C、高杯は口径・脚高によりA～C、短頸壺は法量によりA～Cに分かつことが可能であるが、他の器種には大きな形態的变化は見出し得ない。

蓋杯（蓋）A～C Aは天井部が低く扁平、Bは天井部が平坦であるが、体部が立ち上がり、天井部と体部との境界が明瞭、Cは天井部が丸味を有し、体部との境が不明瞭なものをさす。

蓋杯（身）A～C Aは体部が直線的に外上方へ延び、底部との境界が明瞭であり、しかも高台は外底端部に貼付される。Bは体部と底部との境界が不明瞭ながら判断でき、高台は外底端部付近につく。Cは体部と底部との境は丸味を有し、不明瞭である。高台は外底端部から離れた位置に貼付される。

皿A～C 小形の皿は杯との分離が困難なため、原則して器高3.0cm以下とした。Aは口径11～13cm、Bは口径14～19cm、Cは口径20cm以上とした。Aが少なく、Cがもっとも多く出土した。



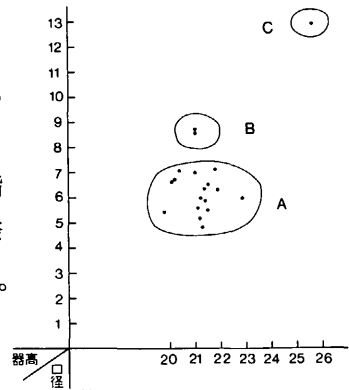
第 33 図 皿の法量

高杯A～C Aは口径20～23cm前後、脚高5～7cm、Bは口径21cm前後、脚高8～9cm、Cは25～27cm、脚高10～16cmである。このように、脚高によりA～Cに分かれる。

短頸壺A～C 大・中・小に分割できる。胴高指数・径高指数（黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報 第38冊 1980）については後述する。

以上の分類を基に説明する。

なお、図および表については、法量を基準にした。

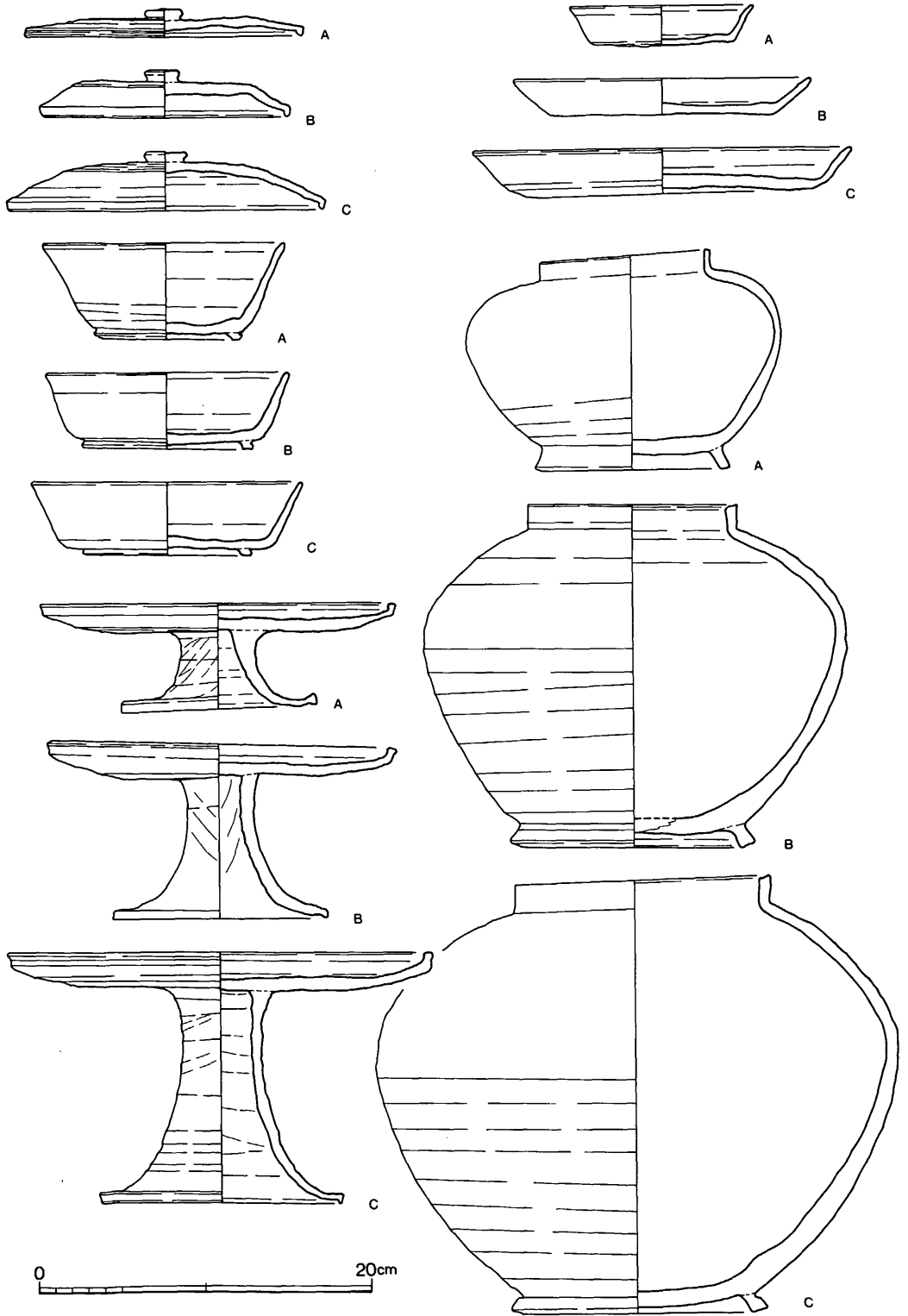


第 34 図 高杯の法量

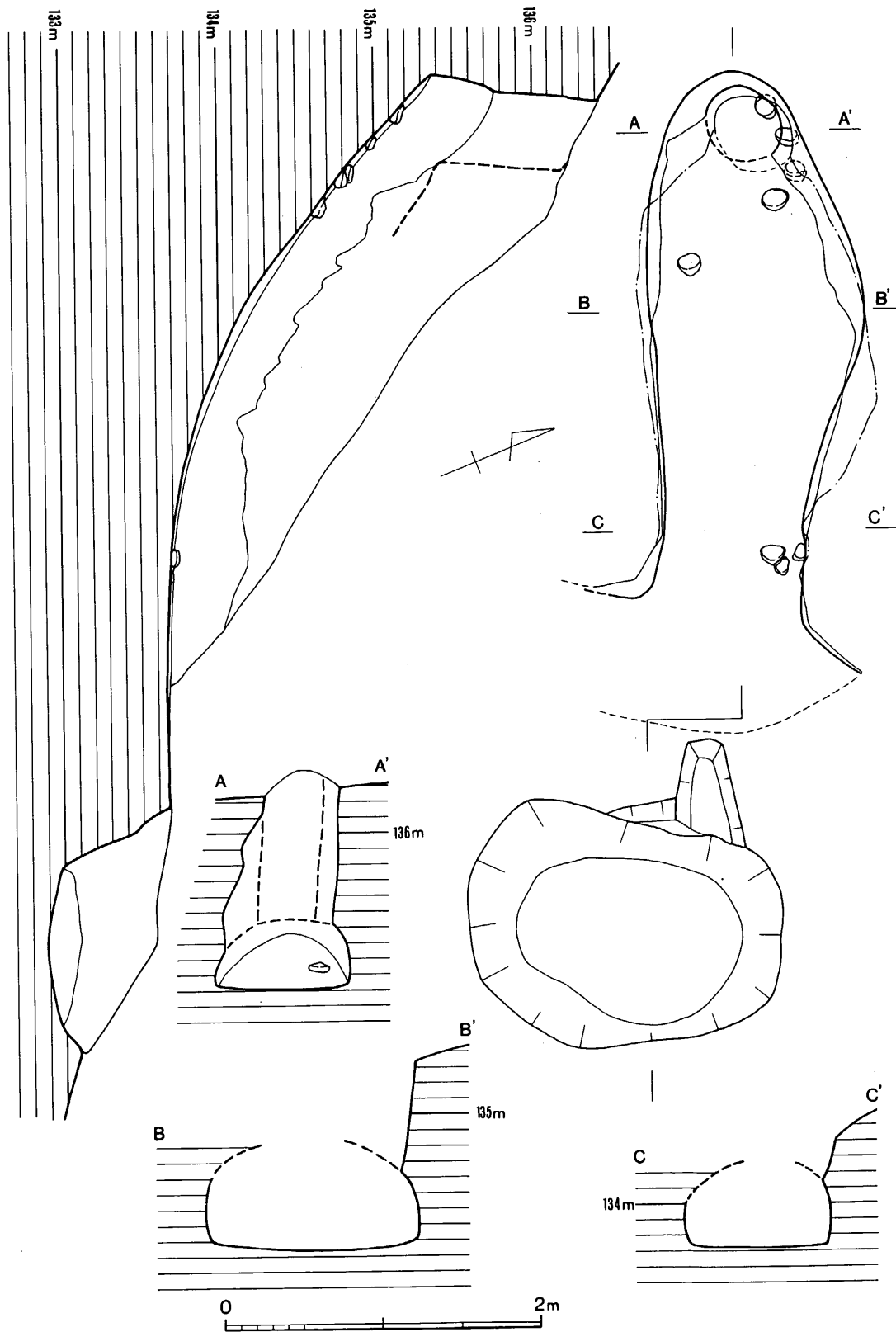
## (2) 23号窯跡（図版24-1、第36図）

尾根の中腹上位に位置し、等高線にほぼ直交する。本地区で検出・調査した窯のうち、もっとも北に位置する。天井部は落下し、床面、側壁が残存していた。窯の構造は地山割り貫きの地下式無階無段登窯である。主軸長3.5m、床面最大幅1.3m、主軸方向N-77°30'-Eである。貼壁・貼床などはなく、地山である花崗岩バイラン土を直接使用している。焚口床面の標高は133.6mである。

燃焼部 焚口は床幅1.0mで、外に向って大きく開く。焚口前面は0.8mにわたって床が焼け



第 35 図 土器分類 (縮尺 1/4)

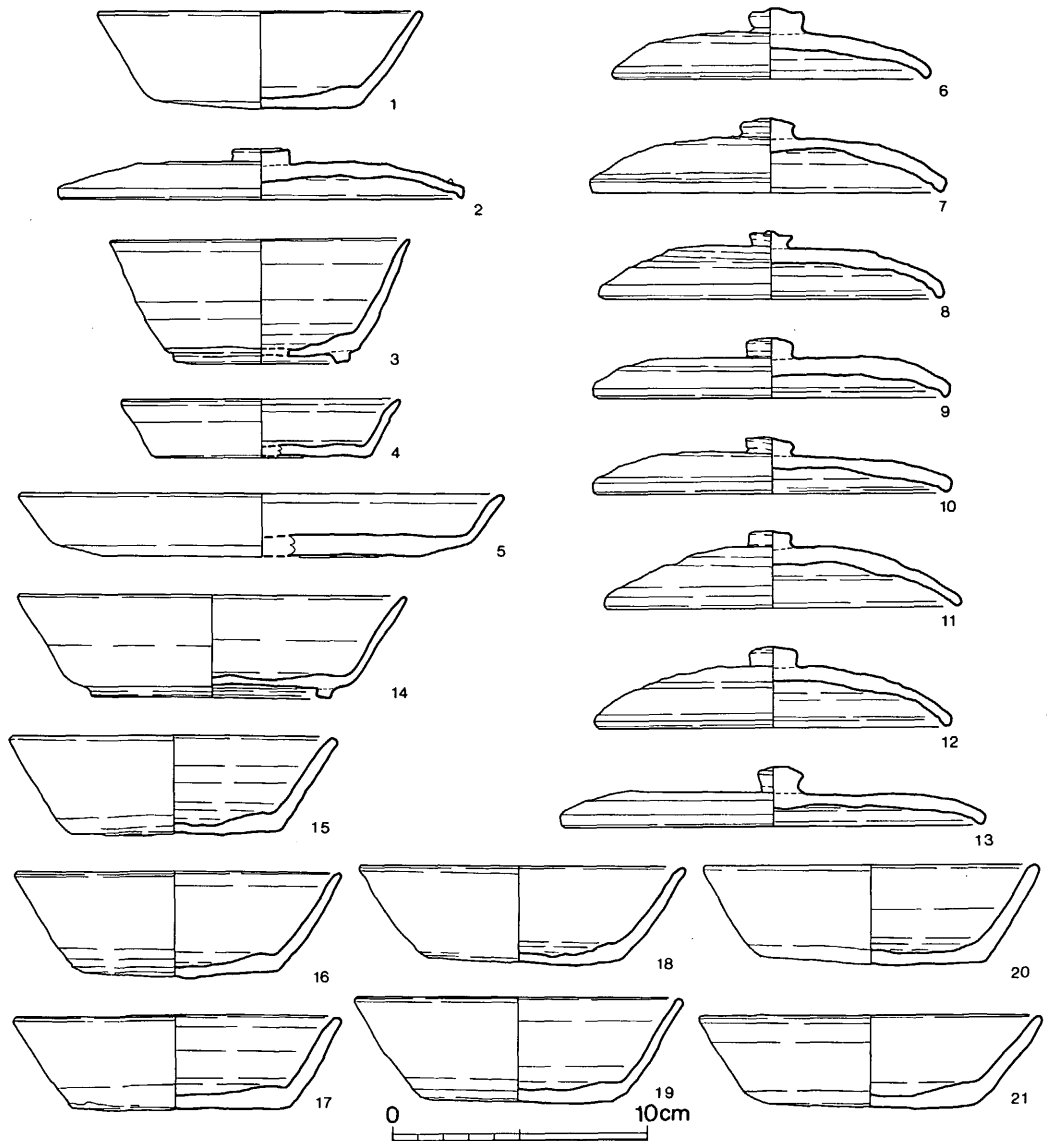


第 36 图 23号窟跡実測図 (縮尺 1/40)

ている。燃焼部と焼成部との区別は困難であるが、両壁の変換部を重視すると奥行0.5mとなる。天井部が崩壊しているため正確な高さは明らかでないが、残存部から復原すると、約0.7mになる。燃焼室の床面で3個の置台を検出したが、本来の位置を示しているのではなかろう。

**焼成部** 主軸長3.0m（主軸斜距離3.4m）、床面最大幅1.3m、傾斜角度は29°である。側壁は40~50cm程の高さまで残存している。床面は1枚だけで、貼床、修復等の痕跡はない。

**煙出し部** 径0.5m程、高さ0.7mの円筒形で、やや窯側に傾斜して立ち上がっている。奥壁との境は明瞭である。



第 37 図 23号窯出土土器実測図（縮尺 1/3）

**前庭部土壌** 焚口から1.5m前面の地点に土壌端があり、約1.5×2.0m、深さ0.7mの不整長円形を呈する。中には灰や須恵器が入っていた。

**出土遺物** (図版26、第37図)

23号窯に関する資料は窯内、前庭土壌および前庭部に分かれる。

**窯内** 窯内から出土した資料はわずかで、蓋杯(身)、杯、皿だけであり、図示できるのは1の杯だけである。

**蓋杯・身** (1) 原位置での出土ではなく、燃烧部内の床上か埋土中からの出土である。

**前庭土壌**

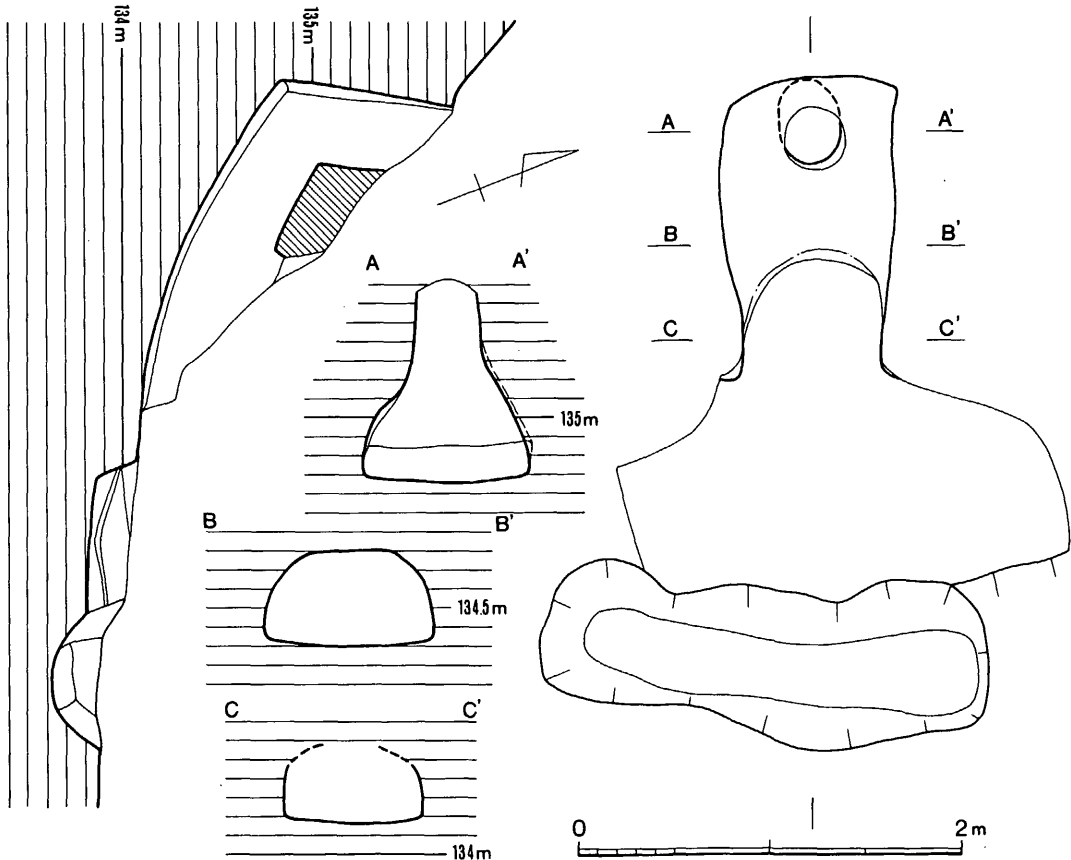
**蓋杯・蓋** (2) 天井部が低く、かつ平坦であるBタイプに属する。杯の口縁部と考えられるものが外縁部に付着している。

**蓋杯・身** (3) Aタイプの蓋杯の身である。

**皿** (4・5) 4はAタイプで、外底部の一部にはナデがみられる。5はBタイプである。

**前庭部**

前庭部から数多くの資料を得たが、これらは23号窯に伴う例は少なく、24号窯に属するもの



第 38 図 24号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

が多くを占めていると思われる。

**蓋杯・蓋** (6～13) 13はA、8～10はB、他はCである。いずれも口縁部は退化している。Cがその典型例である。6～13はいずれも外天井部をヘラ切り離しのままである。13は板状圧痕を伴う。

**蓋杯・身** (14) Bのタイプで、外底部に板状圧痕かとも思われる痕跡が僅かに残っている。

**杯** (15～21) いずれも体部と底部との境が明瞭である。外底部はヘラ切り離しのままで、16～18は板状圧痕を伴う。

### (3) 24号窯跡 (図版23、第38図)

23号窯のすぐ南に位置し、25号窯と重複する。24号窯が25号窯よりも後出する。また、窯の前庭部には厚さ0.2m程の整地がみられ、この整地層上面から土壌が穿かれたれている。この整地層から多くの資料を得た。窯の構造は地下式無階無段登窯である。主軸長は1.6m、床面最大幅0.9m、天井まで高さ約0.5m、主軸方向はN-65°-Eである。貼壁・貼床はなく、地山面を利用しているだけである。焚口床面の標高は134.1mである。

**燃烧部** 焚口の幅は0.7mで、大きく外方へ開く。燃烧部と焼成部と境は不明瞭であるが、焚口部から0.5m程奥まった部分に若干の床面傾斜がみられる。

**焼成部** 主軸長1.2m (主軸斜距離1.4m)、床面最大幅0.9m、高さ0.5m、傾斜角度は29°である。壁は若干ふくらむが、長方形に近い平面を呈する。貼床・貼壁等はなく地山を割り貫いて構築しているだけである。

**煙出し部** 奥壁から一直線に割り貫いている。上面径0.3m程で、床面から0.9m分残存している。

**前面部土壌・整地層** 南北2.9m、東西0.8m、深さ0.4mを測る不整形な土壌である。他の例と同様に炭や須恵器が出土した。焚口部から東へ4.0～4.5mの範囲にわたって、焼土・灰・黄色土によって整地され、この整地層上面から土壌が掘られている。

### 出土遺物 (図版26～28、第39・40図)

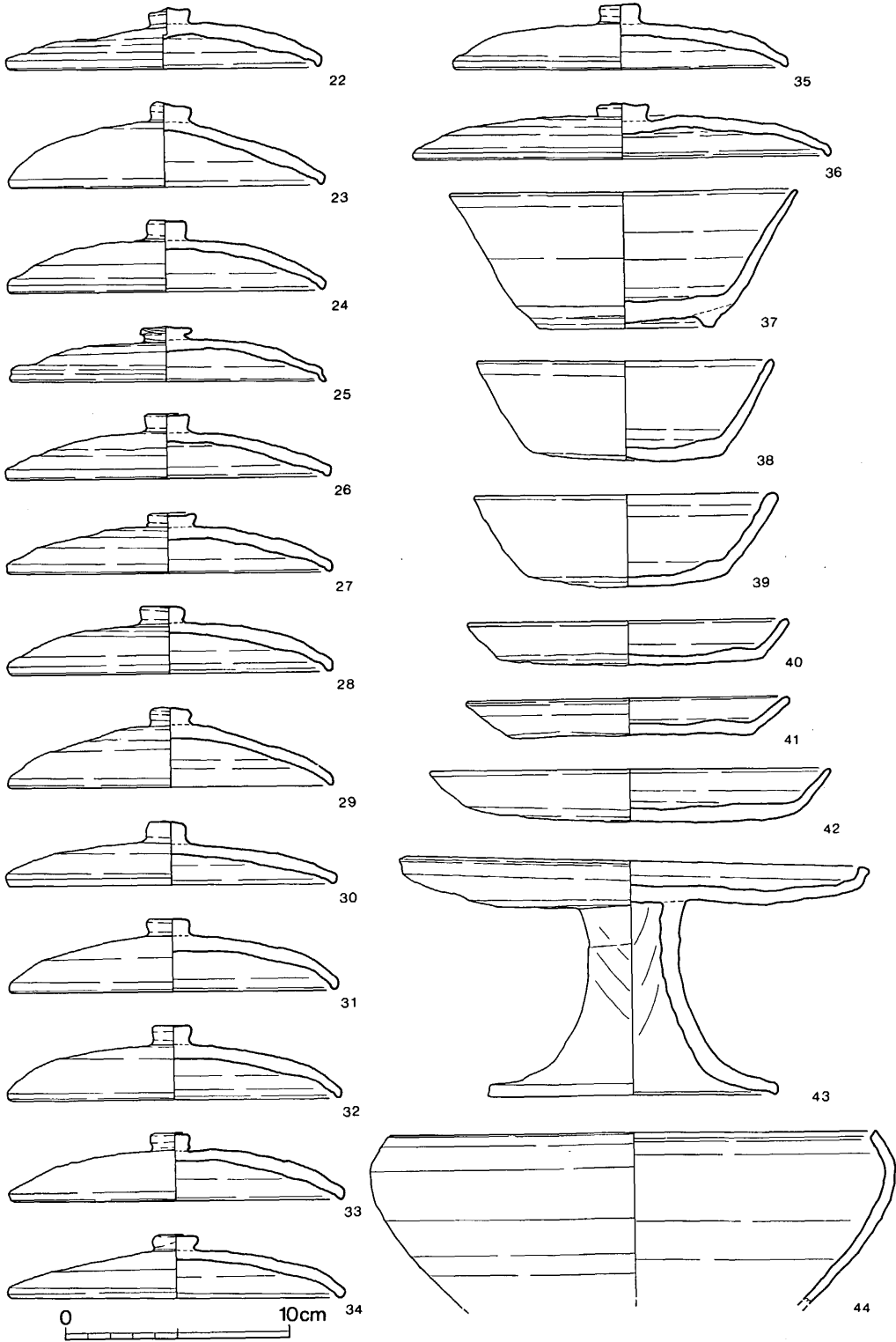
窯内、前面灰原、窯造成時の前庭部整地層出土に分けられ、整地層出土のものは24号窯以前、23・25・26号窯に伴うと考えられる。

窯内

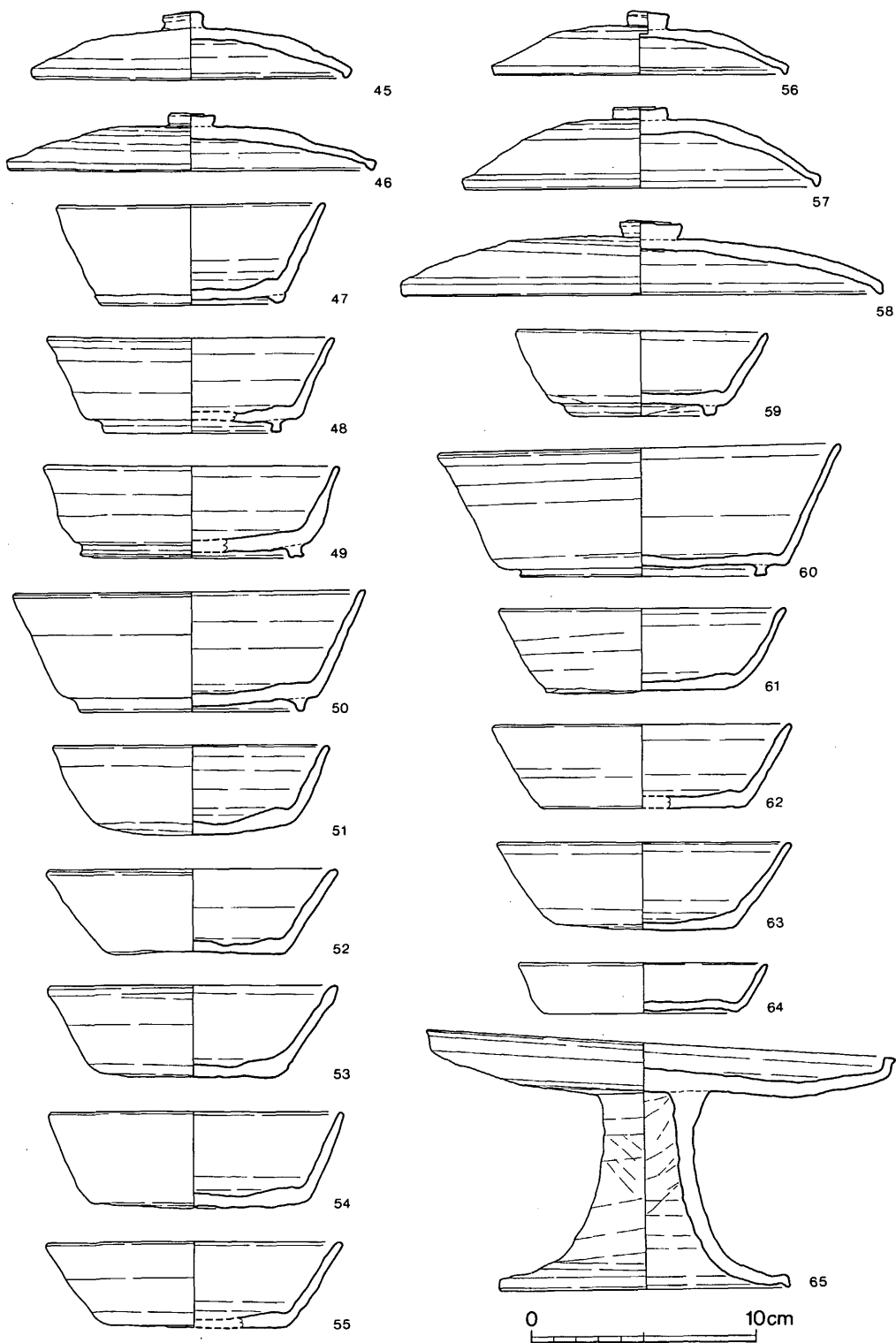
蓋杯・杯・皿・高杯・鉄鉢形鉢が出土した。

**蓋杯・蓋** (22～36) 全てCタイプである。25を除いて他は全てヘラ切り離しのままであるが、若干のナデはある。23号窯前庭部出土のものと共通する例が多い。





第 39 图 24号窯出土土器実測図① (縮尺 1/3)



第 40 图 24号窯出土土器実測図② (縮尺 1/3)

蓋杯・身 (37) 典型的なAタイプの杯身である。

杯 (38・39) 体部と底部との境界は明瞭である。外底部はヘラ切り未調整である。

皿 (40～42) 40・41はA、42はBに属する。外底部はヘラ切り離しのままで、未調整であり、41の外底部には板状圧痕を伴う。

高杯 (43) 脚高8.6cmを測るBタイプのものである。脚端部は鈍化している。シボリ目が顕著である。

鉄鉢形鉢 (44) 26号窯中出土のものと接合した。口縁端部は内傾し、面を成す。

灰原

蓋杯・蓋 (45・46) Cタイプである。46の外天井部は回転ヘラ削り調整されている。両者ともに口縁部は退化している。

蓋杯・身 (47～50) 47はA、48～50はBである。外底部はいずれも未調整。

杯 (51～55) 体部と底部との境界は明瞭である。51はヘラ切り離しのままであるが、52～55の外底部には若干のナデがみられる。

整地層

蓋杯・蓋 (56～58) 大・中・小形のCタイプが出土し、いずれも外天井部は回転ヘラ削り調整である。口縁部は退化しているが、窯内・灰原出土品よりも顕著ではない。

蓋杯・身 (59・60) いずれもBタイプに属するが、60の高台の位置はCタイプに類似する。60の外底部には板状圧痕を伴う。

杯 (61～63) 体部と底部との境は比較的明瞭である。

皿 (64) Aタイプの皿である。外底部はヘラ切り未調整である。

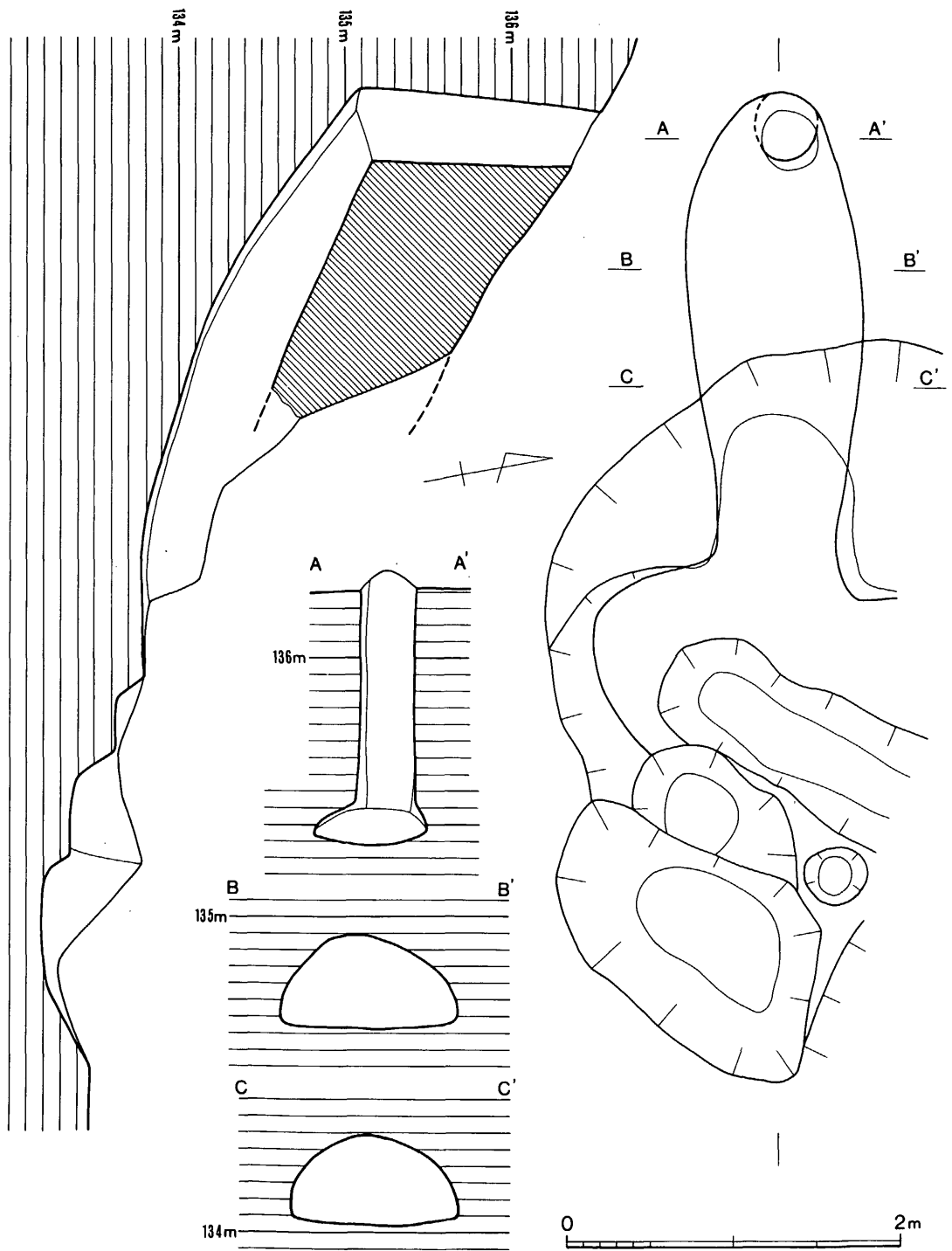
高杯 (65) 脚高8.7cmを測るBタイプのものである。脚部のシボリ目は顕著であり、脚端部は退化しつつも古様を残存している。

#### (4) 25号窯跡 (図版24-2、第41図)

23・25・26号と3基並び、その中央に位置している。天井は燃焼部の全部および焼成部の一部が崩壊している。窯の構造は無階無段登窯である。主軸長3.1m、床面最大幅1.0m、主軸方向N-89°30'-Eである。花崗岩パイラン土が床面となり壁面となり、二次的な手は加わっていない。焚口床面は標高133.8mである。

**燃焼部** 焚口は床幅0.8mで、外に開くと同時に南側では弧を描いている。北側部分は24号窯構築時に破壊され明らかでない。24・25号と同様に焼成部との境は不明瞭であるが、焚口部から0.5m奥に若干の傾斜の変化が認められる。ここがそれらの境である可能性もある。

**焼成部** 主軸長2.6m (床面斜距離2.9m)、床面最大幅1.0m、天井高0.5m、傾斜角度は27度



第 41 图 25号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

である。床面は1枚だけである。

**煙出し部** 奥壁から一直線に立ち上がる。上面径0.34m、床面からの高さ1.5mを測る。

**前庭部土壌** 三段にわたって遺存しているが、窯に近い方は24号窯の土壌の底部付近が残っているのである。本来二段と考えられ、上段は1.0×0.6m、深さ0.25m、下段は1.2×2.7m、深さ0.5mの不整形を呈する。

#### 出土遺物 (図版28、第44図)

窯内、前庭土壌、それに灰原・窯前面出土にわかれる。

窯内からの出土は僅かで、図示できるのは杯だけである。

**杯 (66・67)** 体部と底部との境界は明瞭であり、体部の立ち上がり傾斜は急である。

前庭土壌

**皿 (68)** 口径11.1cmの小形の皿でAに属する。

**長頸壺 (69)** 口頸部片で体部以下を欠失する。24号窯前面整地層出土の破片と接合した。

灰原

**杯 (70)** 体部と底部との境界は明瞭であり、外底部はヘラ切り未調整である。

**皿 (71)** Bタイプの皿で、外底部はヘラ切り離した後、若干のナデを行なっている。

#### (5) 26号窯跡 (図版23-1、第42図)

天井部は煙出し部付近が残存している他は崩壊している。地山割り貫きの地下式無階無段登窯である。主軸長は2.5m、床面長大幅は1.0m、主軸方向N-83°30'-Wである。貼壁・貼床・補修などはない。焚口床面標高は134.0mである。

**燃焼部** 焚口は床幅0.8mで、外方へ「ハ」字状に開く。燃焼部は奥行0.5mである。両壁は0.3m程残っており、これから天井高を復原すると、0.5m程度になると考えられる。

**焼成部** 主軸長2.0m (主軸斜距離2.2m)、床面最大幅1.0mである。天井部の表面の剝落を除外し、復原すると天井高は0.5mになる。床面傾斜角度は26°である。

**煙出し部** 奥壁は床面から0.15m程しかなく、ここから天井部は始まる。0.24×0.30mの長円形を呈し、高さ0.8m程残存している。壁面に幅5～7cm程の掘削時に出来たと考えられる工具痕が、上下方向にみられる。

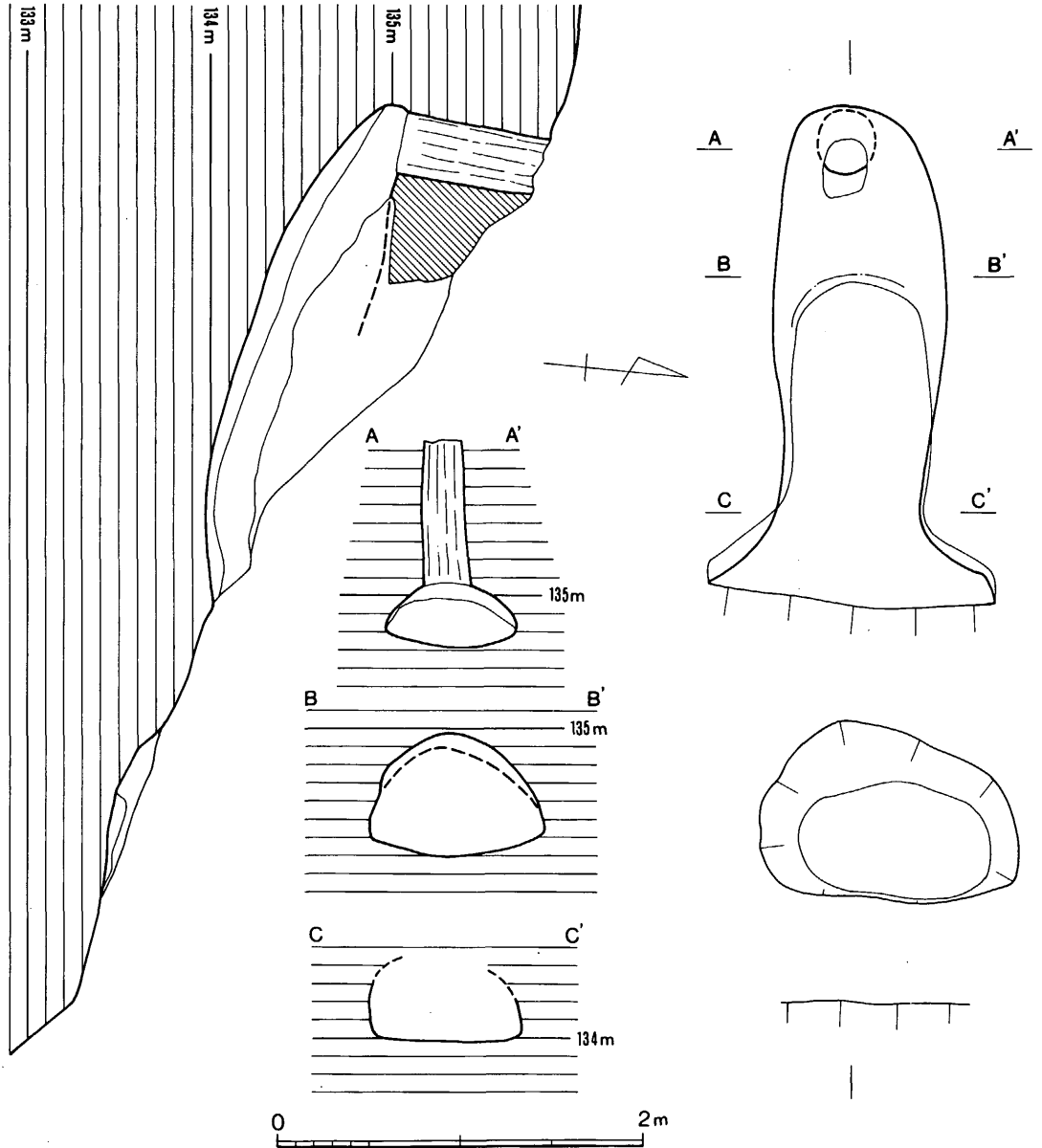
**前庭部土壌** 0.9×1.5m、深さ0.3m程の浅い土壌である。

#### 出土遺物

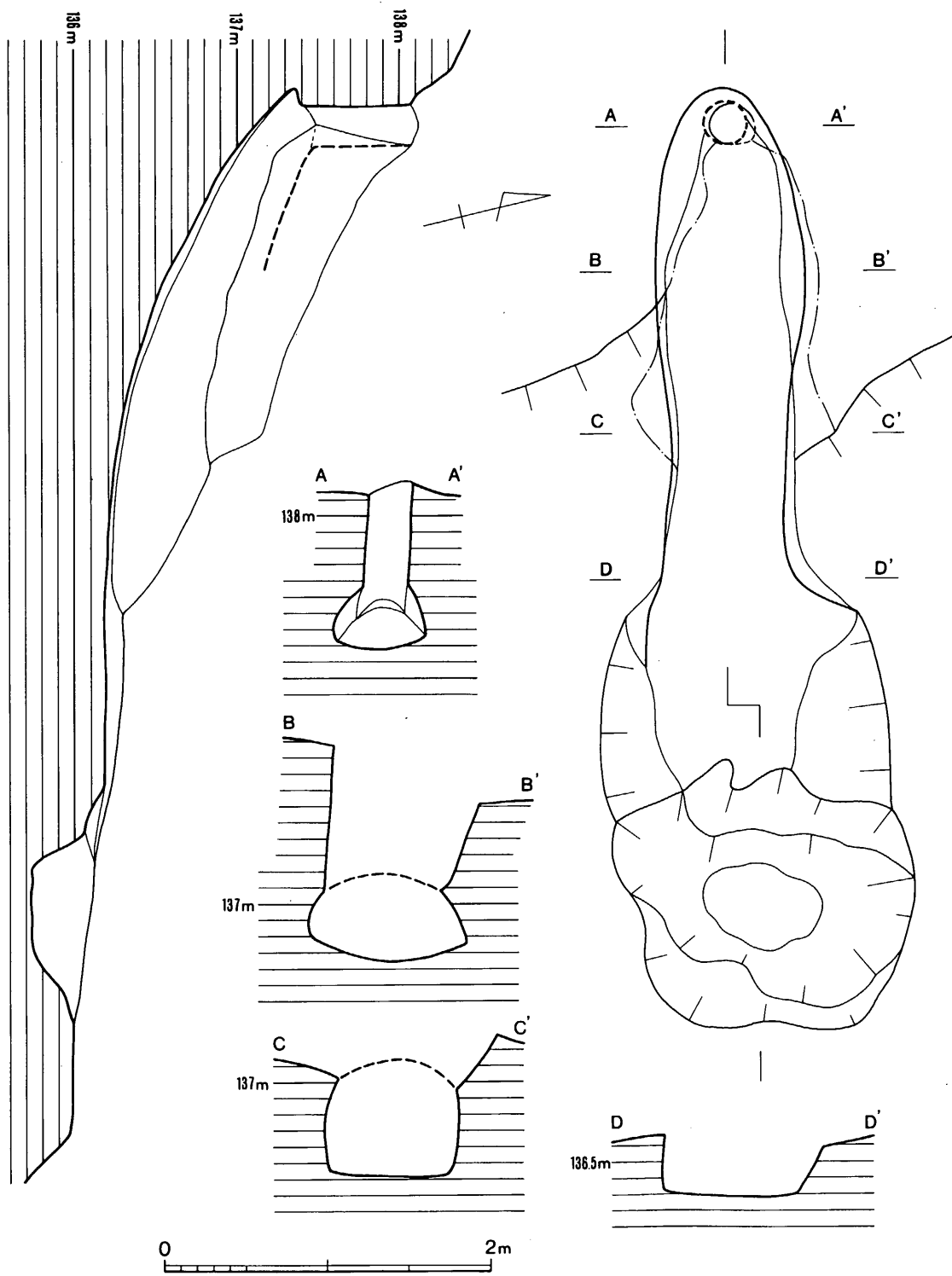
図化できるのは蓋杯の蓋だけで、それも窯内出土のものである。

窯内

蓋杯・蓋 (72・73) 72はC、73はBである。73の口縁部は古様を残すが、72は退化している。両点ともに外天井部はヘラ切り未調整である。



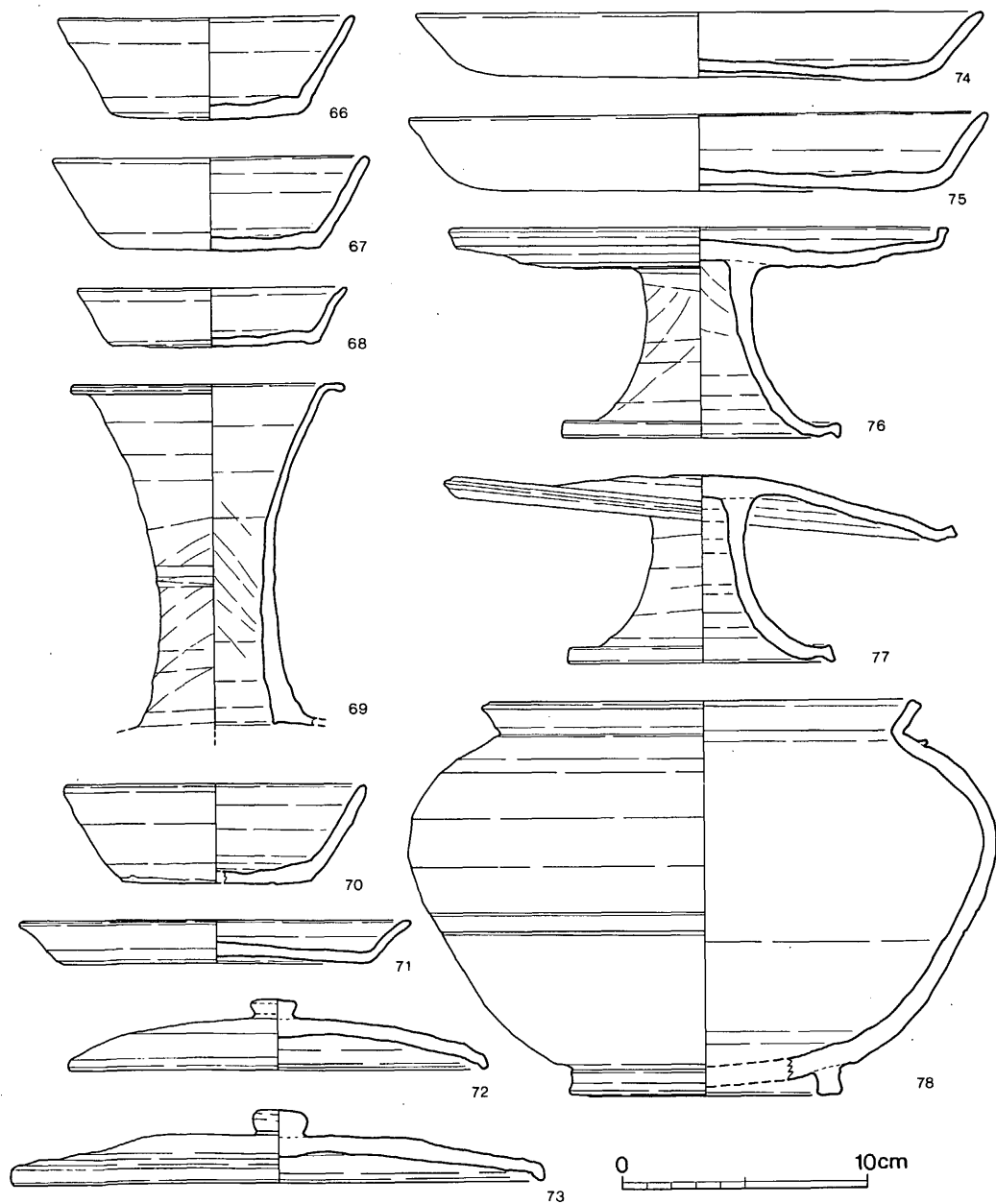
第 42 図 26号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第 43 图 27号窠迹实测图 (缩尺 1/40)

(6) 27号窯跡 (図版25-1、第43図)

窯跡群の南端に1基単独で、尾根上部斜面に構築されていた。等高線に直交せず、やや斜め



第 44 図 25~27号窯出土土器実測図 (縮尺 1/3)



に存在する。天井部は全て崩壊している。構造は他と同じく、地下式無階無段登窯である。主軸長3.6m、床面最大幅0.9m、主軸方向N-76°-Eである。ここでも、他と同様に貼壁・貼床等は見られない。焚口床面の標高は136.3mである。

**燃烧部** 焚口は床幅0.8mで、北側は外方へ大きく、南側は僅かに開くだけである。燃烧部は焚口から1.0m奥までかと思われるが定かでない。焚口付近は0.7m程の高さに天井部を復原できる。

**焼成部** 主軸長2.2m（主軸斜距離2.4m）、床面最大幅0.9m、傾斜角度は27度である。天井部の高さは最大幅の所で0.5mに復原できる。奥壁は無に等しい。床面は1枚だけである。

**煙出し部** 径0.25m、高さ0.7m、を測る円筒形のもので直立する。

**前庭部土壌** 約1.5×1.8mを測る不整形な二段掘の土壌である。前庭部は周囲より一段低く、土壌に接続する。

**灰原** ほとんどが流出し、僅かに残っているだけであるが、南北2.0m、東西は2.5mにわたっている。残存状態の良い所では厚さ0.4mを測る。

#### 出土遺物（図版28、第44図）

窯内

**皿（74・75）** 両者ともに大形のC類に属し、外底部はヘラ切り未調整。

**高杯（76）** 口縁端部は若干丸味を有し、脚部にはシボリ目がみられる。脚端の退化は著しくはない。A類。

灰原

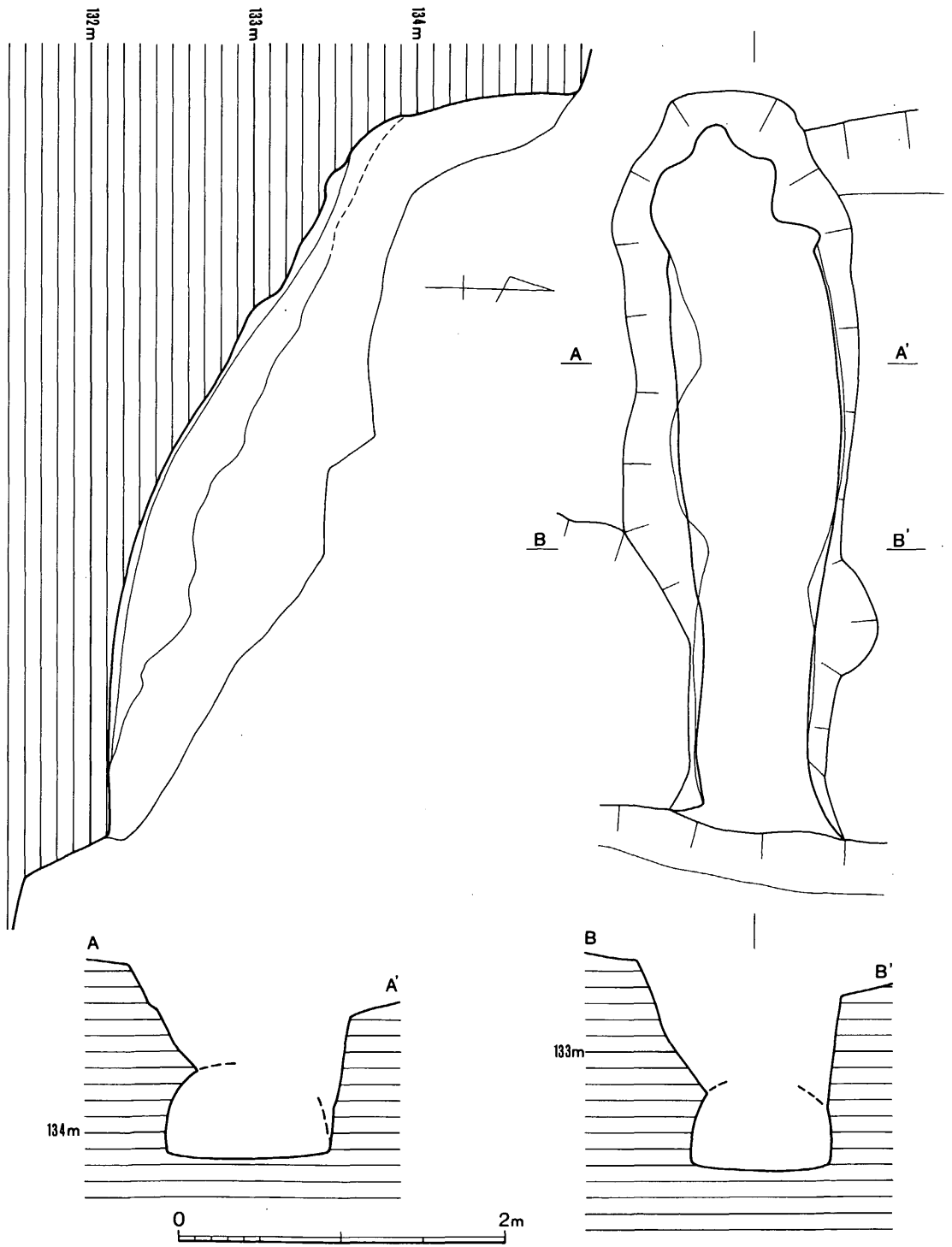
**蓋杯・蓋（73）** Cに近いBである。

**高杯（77）** 7・8包含層出土品と接合した。歪な図を提示したが、本来の姿に復原すると、口縁部は直立し、端部は平坦で面を成すと考えられ、脚端も古様を残存している。

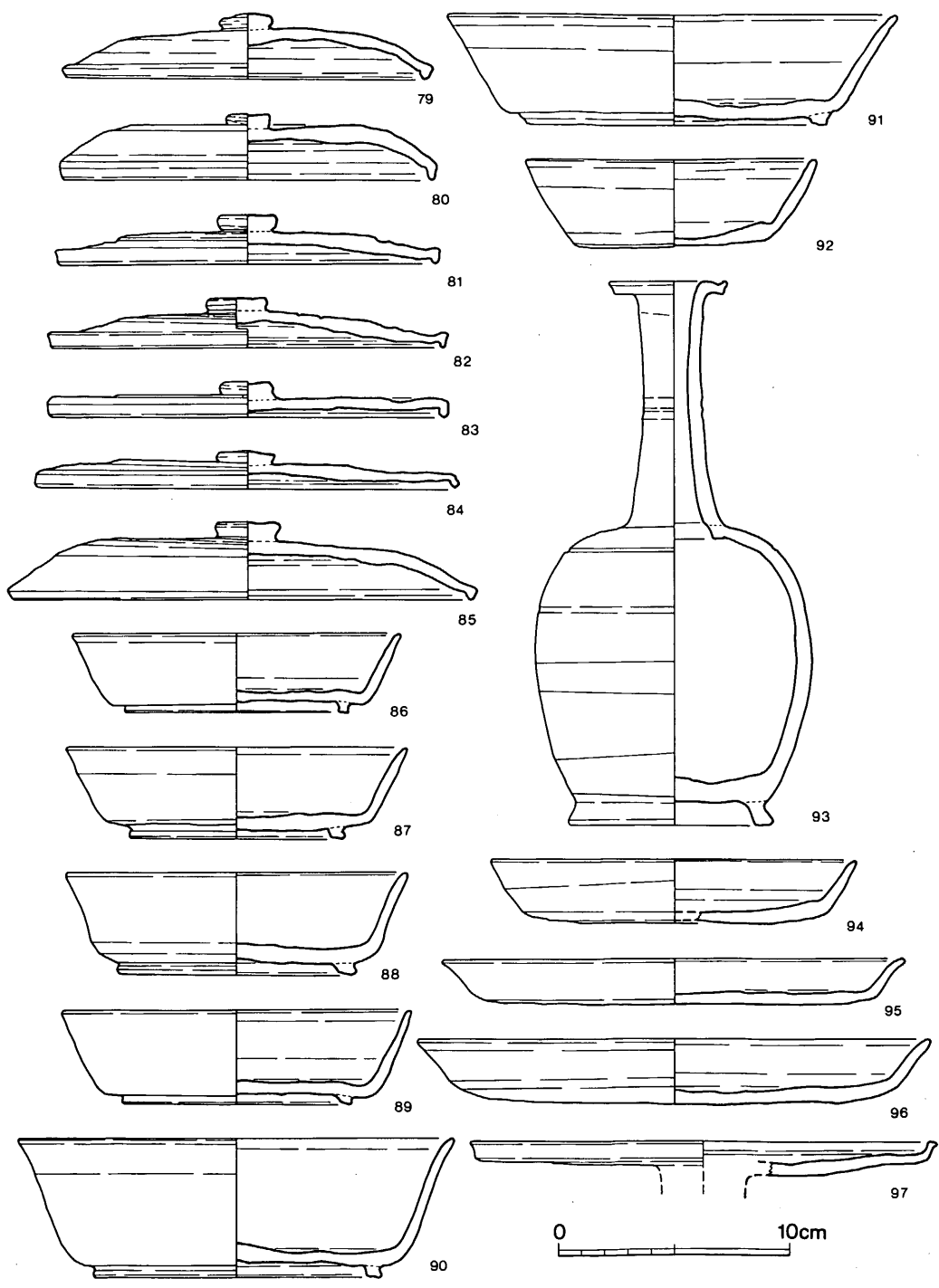
**短頸壺（78）** 口縁部が歪なため外開きの姿で図示したが、本来は直口すると考えられる。直口した姿に戻すと口径は16.8cmになる。また、胴部最大径から口縁端部までは6.4cmである。この数値を基にすると胴高指数は39.5、径高指数は67.5になる。

#### (7) 28号窯跡（図版25-2、第45図）

26号窯の南に位置する。地下式の無階無段登窯である。主軸長は奥壁が崩壊しているため明らかでないが復原すると4m程になると思われる。床面最大幅は1.0m、主軸方向はN-88°-Wである。床面・壁はほとんど焼けていない。窯内から生焼けの土器が数点出土した。焚口付近の標高は132.1mである。



第 45 图 28号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第 46 图 28号窯出土土器実測図 (縮尺 1/3)

**燃烧部** 焚口は約0.7mで、外方へ「ハ」字状に開く。燃烧部と烧成部との境はないが、傾斜変換点を重視すると奥行1.2mになる。もっとも残存状態の良い部分で壁は0.45m残っている。

**烧成部** 奥壁が遺存していないため、主軸長は明らかでない。床面最大幅は1.0m、傾斜角度は27度である。天井部までの高さを復原すると0.6mになる。

煙出し部は遺存していない。

以上のことを総合すると、この窯は水分を抜くために空焼きをした際に何らかの理由で窯の天井部が崩壊し、それに伴って放棄されたものと思われる。生焼け資料の出土は、偶然に入り込んだものか、あるいは試し焼きをしたものか、どちらとも判断できない状態であった。

### 出土遺物（図版29、第46図）

まとまった資料を得たのは窯内出土のもので、他は細片化し、また僅少であった。

窯内

**蓋杯・蓋（79～85）** Aは81・83・84、Cは79・80・82・85である。Aの81は烧成時に器高を減じたのかも知れない。とすると、Cに属する可能性もある。80・82も同様に烧成時の変容がみられ、ここではCとした。特徴的な資料は82で縁部を屈曲させている。総体的な特徴は口縁部にみられ、古様を残している。

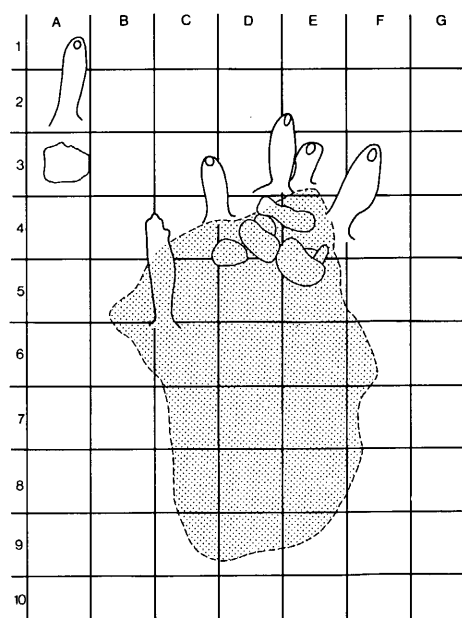
**蓋杯・身（86～91）** 89・90はC、91はBである。86・87はB、90はAに近似しており判断に苦しむ。

**杯（92）** 外底部に板状圧痕を伴い、ヘラ切り離し未調整である。

**皿（94～96）** 94はB、95・96はCである。94は口径に比して器高は高い。95の外底部に板状圧痕を伴う。

**高杯（97）** 脚部を欠失し、杯部を残存するだけである。若干歪なため口頸部が外傾するが本来は直立に近いと思われる。

**瓶（93）** 頸部が長く、中位に凹線が二条走る。胴部の最大径は中位にあり、それ以下は回転ヘラ削り調整である。口頸部と胴部の接合方法は胴部上に口頸部を載せ、接合部外面を粘土で補強する方法を採っている。



第 47 図 B-2 地区灰原割付図  
(縮尺 1/300)

(8) 23～26号窯灰原 (図版21、第47～49図)

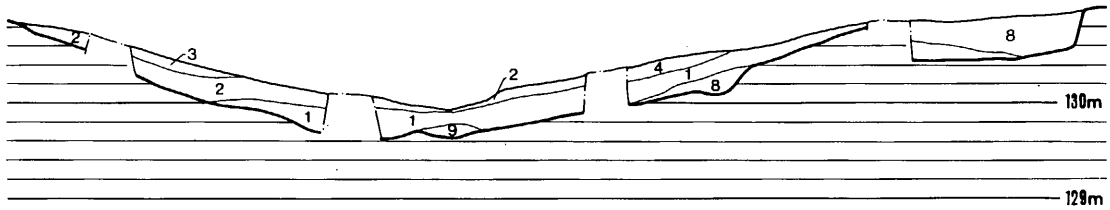
西から東へ傾斜し、東西27m、南北20mの広がり有する。南北方向の横断面をみると南北が高く、中央部が凹む。東西方向の土層をみると、23・25・26号の3窯を構築する際出た土を東に向かって投棄しているため、厚さ0.7m程の堆積層がみられる。勿論灰原部分も事前に整形されており、旧表土等はなかった。灰層は厚さ0.2～0.3mで、層位を新旧に分離することは出来なかった。

出土遺物 (図版29～41、第 図)

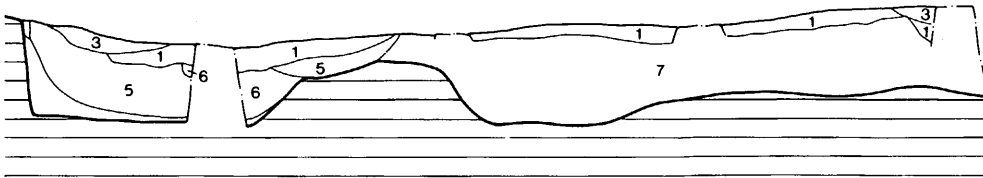
蓋杯・杯・皿・盤・高杯・壺・瓶・鉢が出土した。甕と確定でき得る資料は1点もない。

蓋杯・蓋 (98～346) Aは98～100・119～121・123・127・141～143・157～159・177・182

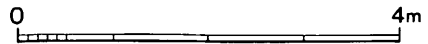
グリット西壁



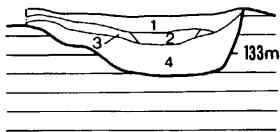
5ライン西壁 1 炭層 2 包含層 3 茶褐色土 (包含層) 4 黒褐色土 (包含層) 5 黄茶褐色土 (くされ土)  
6 赤褐色土 7 暗茶色土 (整地層) 8 くされ土 9 焼土



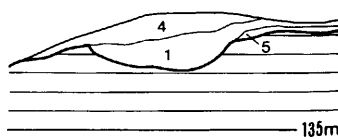
131m



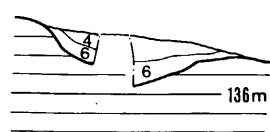
23-25



27 東西北壁



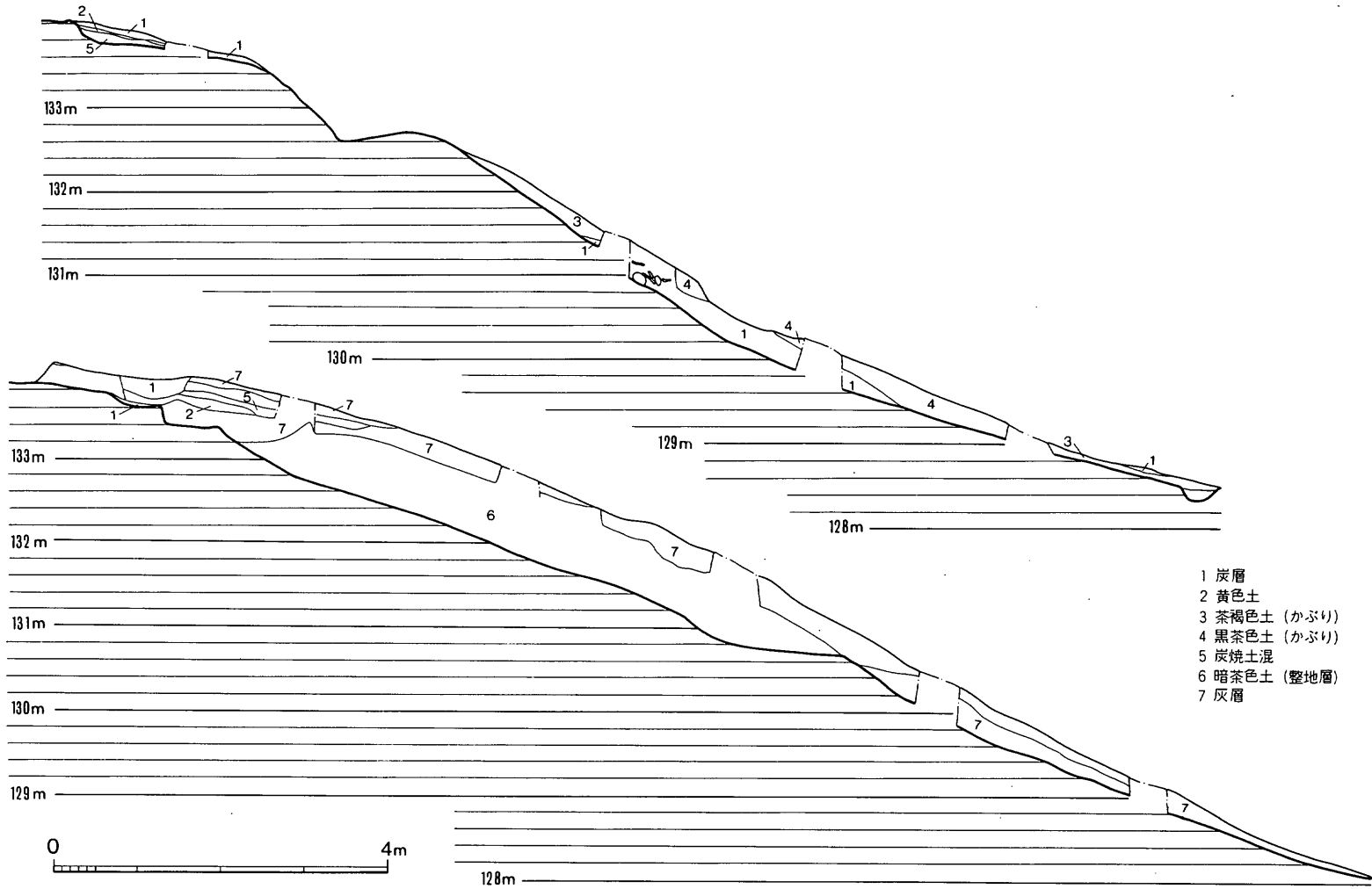
27 南北東壁



1 炭層 (上層) 2 黄色土  
4 黒茶褐色土 5 暗黄色土

3 茶灰色土  
6 炭層

第 48 図 灰原土層図① (縮尺 1/80)



第 49 図 灰原土層図② (縮尺 1/80)

・184・188・189・195・196・198・211・213・214・228・229・232・240・241・244・246・256  
・257・258・266・269～282・295・298・300・309・311・312・315・317・327・329・338・340  
の計52点、Bは104・106・111・117・118・126・130・131・137・138・146・147・152・153・  
155・160～164・168・178・181・183・197・200・206・212・215・217・219・221・225～227・  
230・231・234・236・238・243・245・247・248・259・260・263・268・273・277・283・287・  
290・307・313・318・321・326・328・331・334・339の計62点、Cは101～103・107～110・115  
・116・122・124・125・128・129・132～136・139・140・144・145・149～151・154・156・165～  
167・170～175・180・185～187・190～193・199・201・202・204・205・207～210・218・220・  
222～224・233・235・237・239・242・251～253・255・261・262・264・265・272・274～276・  
278～280・284・286・288・289・292～294・296・297・299・301～303・306・308・310・314・  
319・320・322～325・330・332・333・335～337・341～346の計114点、それにAかC、BかC  
どちらに属するのか明らかでない資料もあり、前者が4点、後者が15点を数える。不明な資料  
を除外して割合を求めると、Aは22.8%、Bは27.2%、Cは50.0%となり、Cが約半分を占め  
る。120・129・134・135・188の外天井部に板状圧痕を伴う。155・310の外天井部にはヘラ記号  
がみられる。

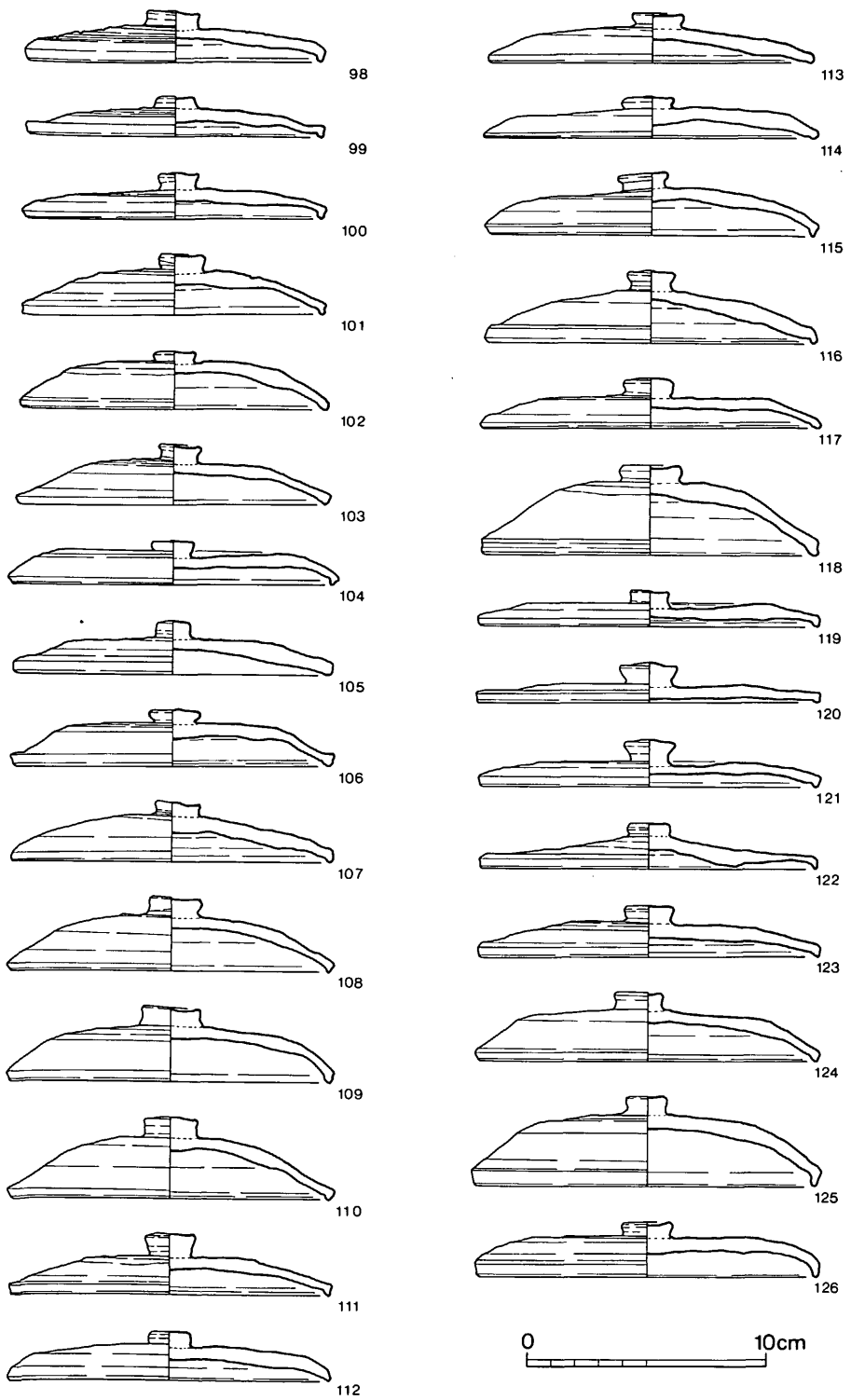
**蓋杯・身** (347～543) Aは410、1点、Bは347～370・373～375・378・381～387・389～404  
・406～408・411・412・414・415・417～419・421・423・435～430・433・435・441・444・445  
・448・451・454・466・473・480・485～489・492～495・498～509・511・513～525・527～531  
・535・539～541の計124点、Cは376・377・413・431・432・436～439・443・446・447・452・  
453・455～465・467～472・474～479・481～484・490・491・496・497・510・512・526・532～  
534・536～538・542の計55点、BかCのどちらかに属するか明らかでないものが16点、不明1  
点である。Aが0.5%、Bが68.9%、Cが30.6%を占め、Bが7割を占める。369・430の外底部  
には板状圧痕、519の体部および外底部にはヘラ記号が観察できる。

**杯** (544～583) 器高を重視すると544・545・546・560は皿とする方が妥当かも知れない。  
549・552・555・557・561・567・573・582・583は器肉が薄く、端整な形を成している。547・  
549・555・563・567・578の外底部には板状圧痕を伴う。火ダスキを伴う例が多くみられること  
から、杯を相互に重ねて焼成したと考えられる。

**皿** (588～628) Aは588、Bは589～598、Cは599～628であり、Cが多くを占める。器高を  
みると2～3cmの間に概ね収まる。589・601・615外底部に板状圧痕がみられる。火ダスキが  
観察できる例もある。

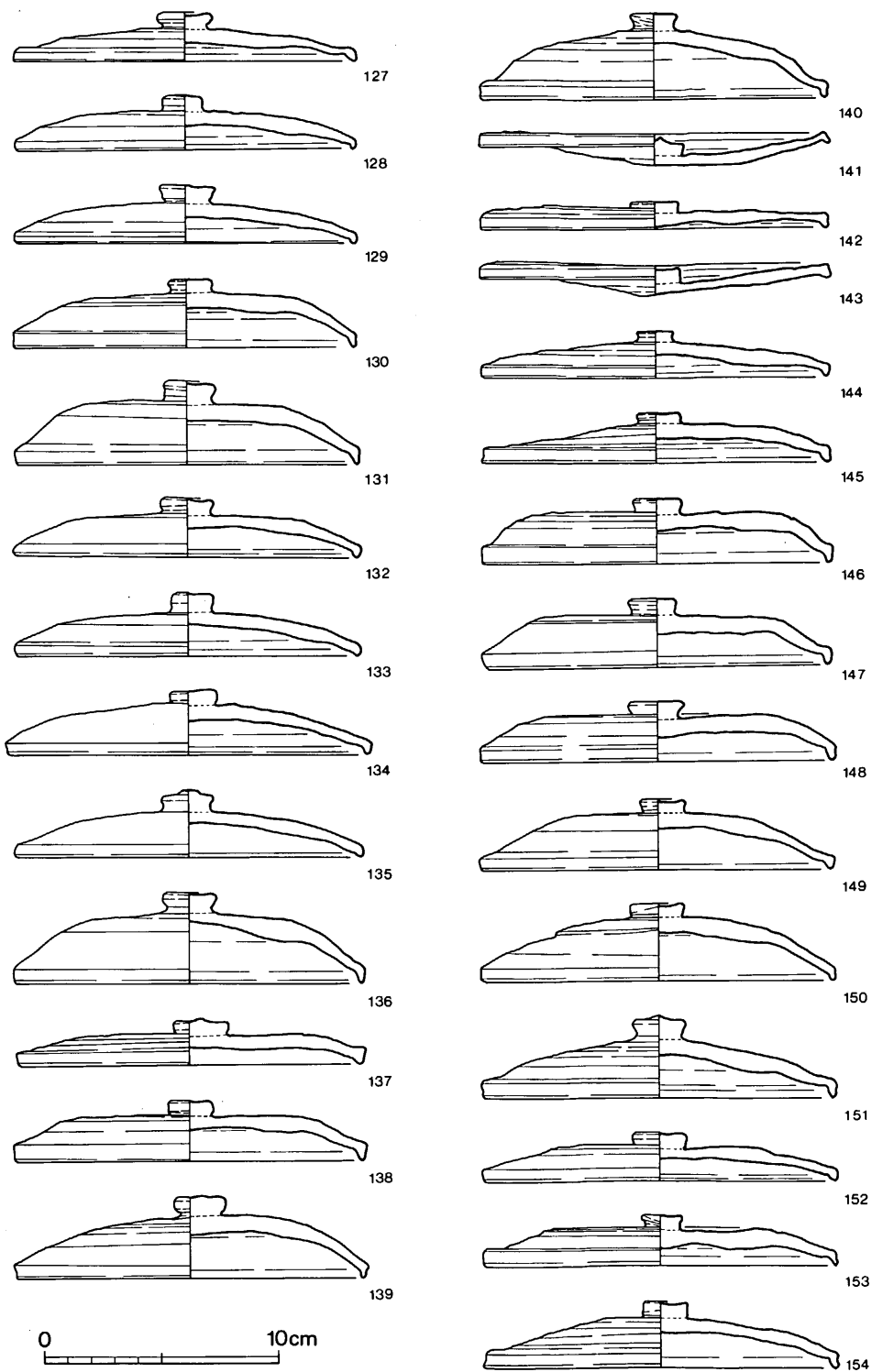
**盤** (629～642) 外底部は全て回転ヘラ削り調整を行なっている。

**高杯** (643～676) Aは648～657・661～675で25点、Bは659で1点、Cは647・658・660・  
676で4点。脚高が低いものが圧倒的な割合を占める。

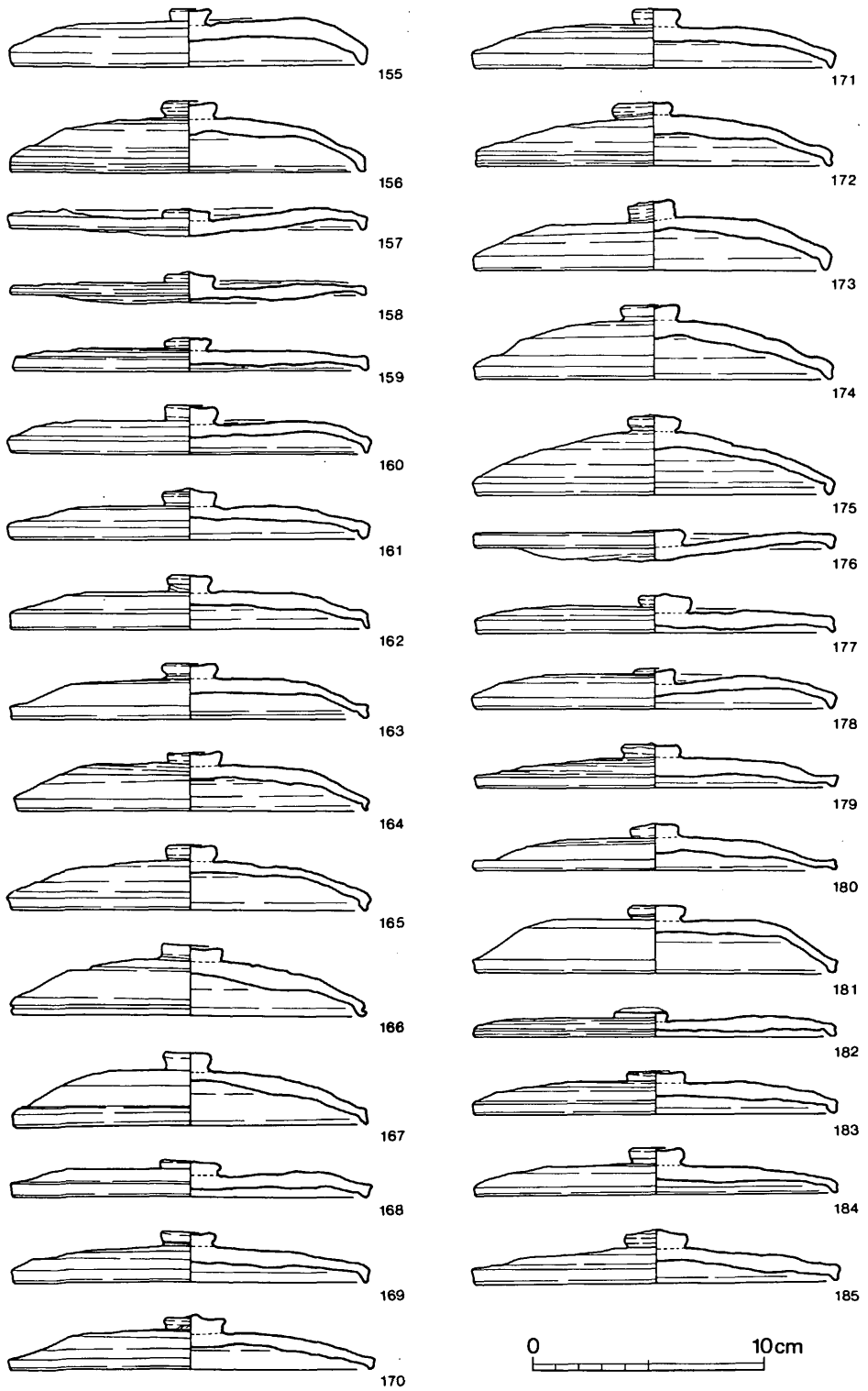


第 50 図 灰原出土土器実測図① (縮尺 1/3)

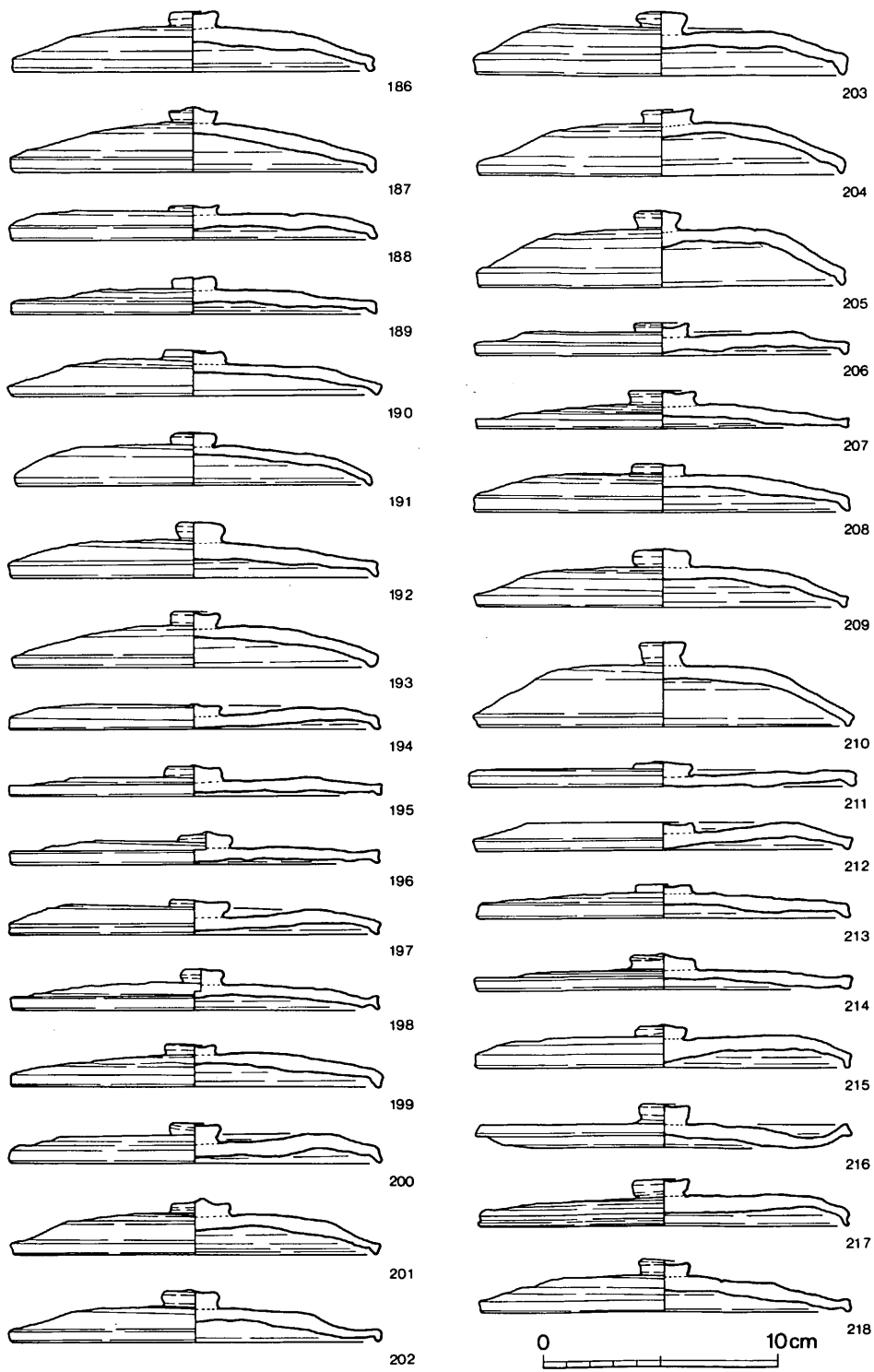




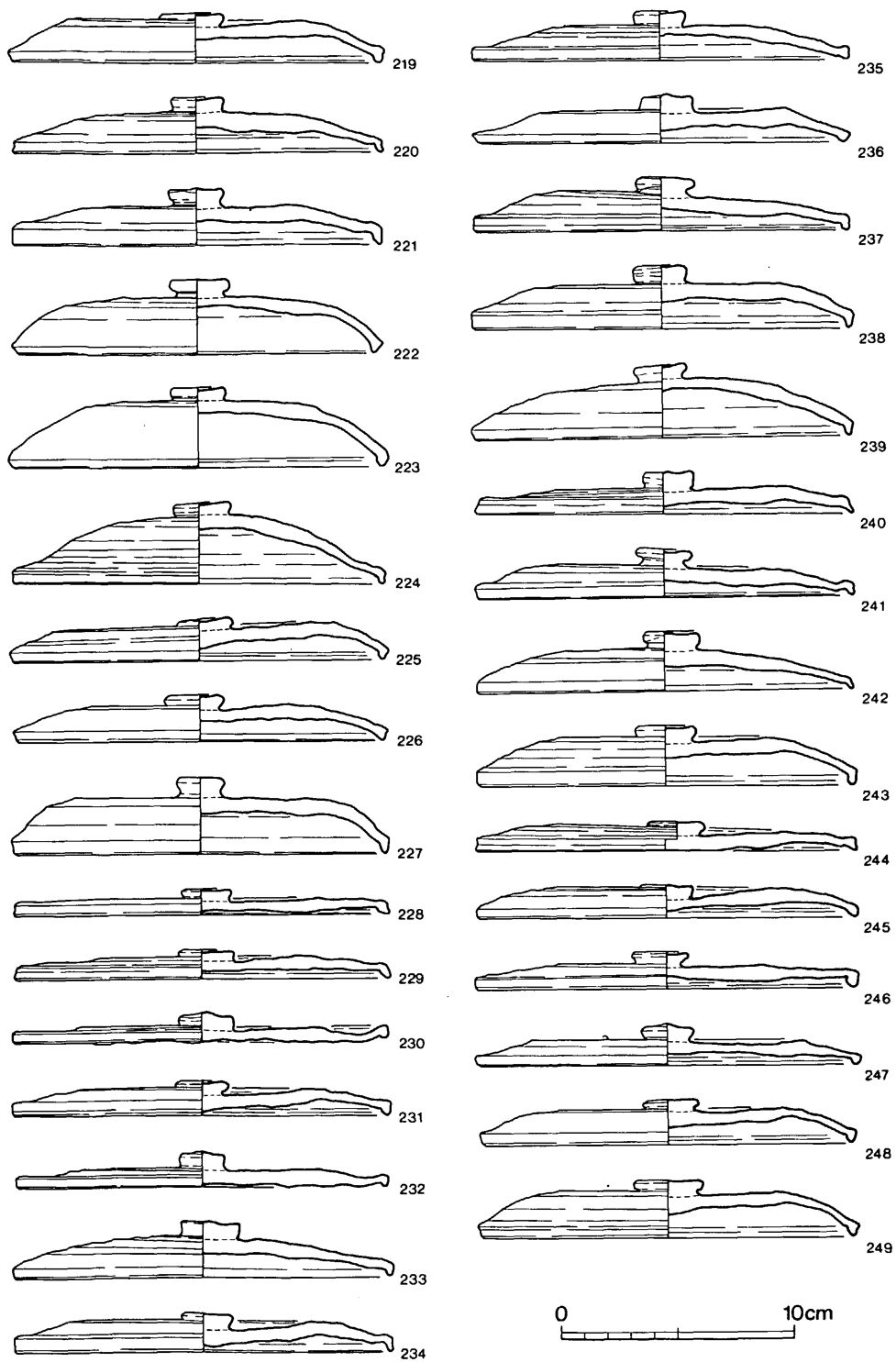
第 51 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



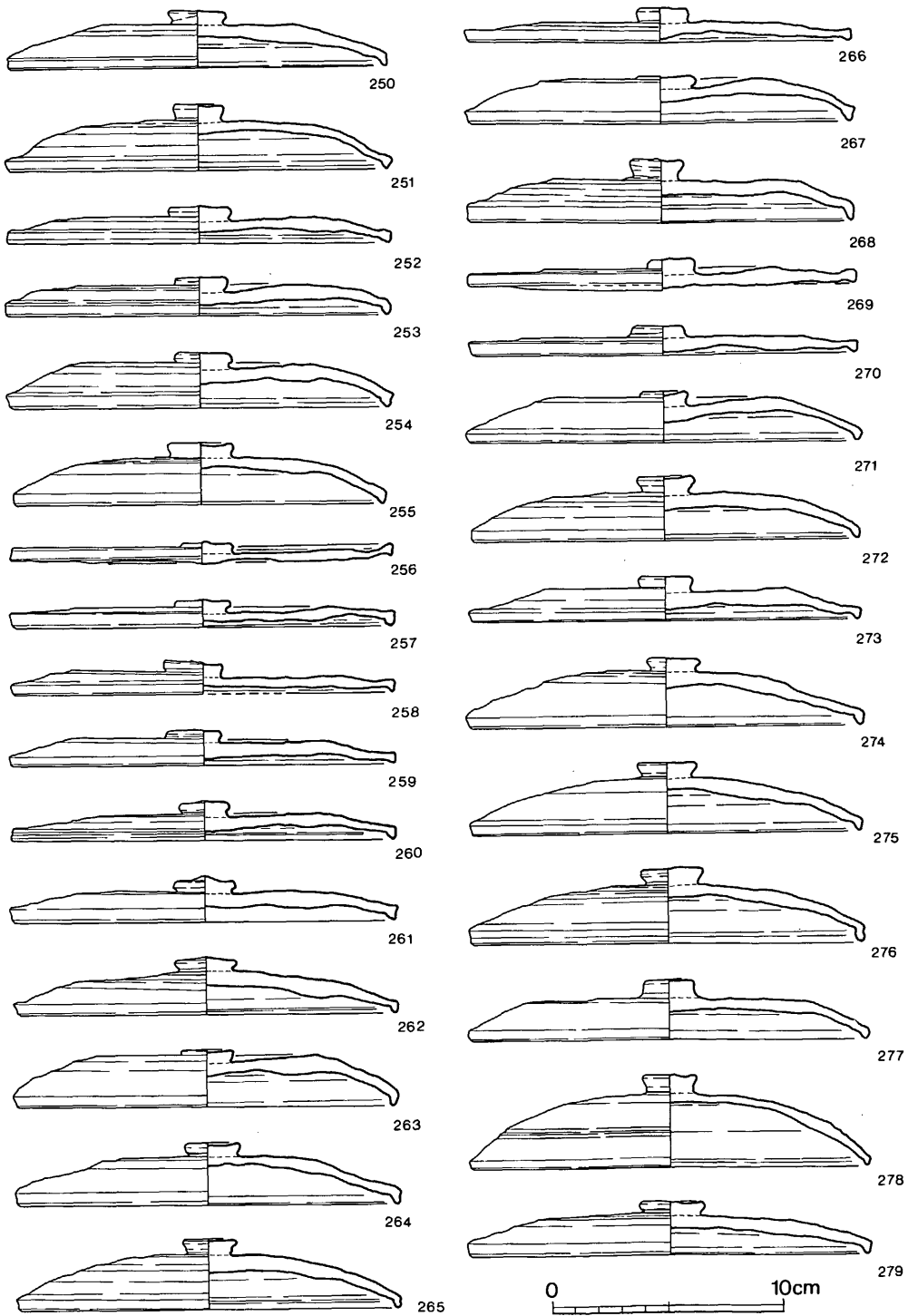
第 52 図 灰原出土土器実測図③ (縮尺 1/3)



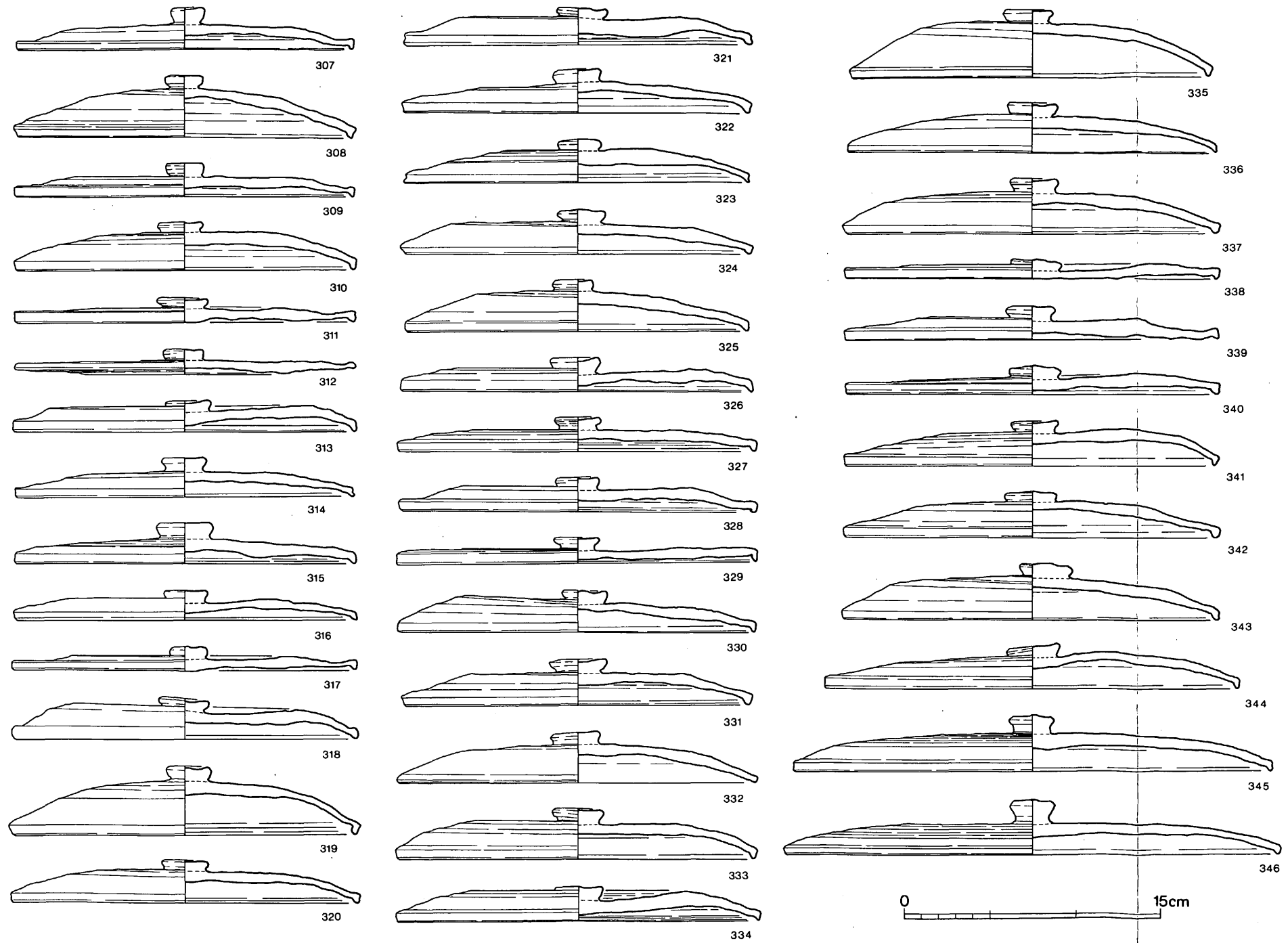
第 53 图 灰原出土土器实测图④ (縮尺 1/3)



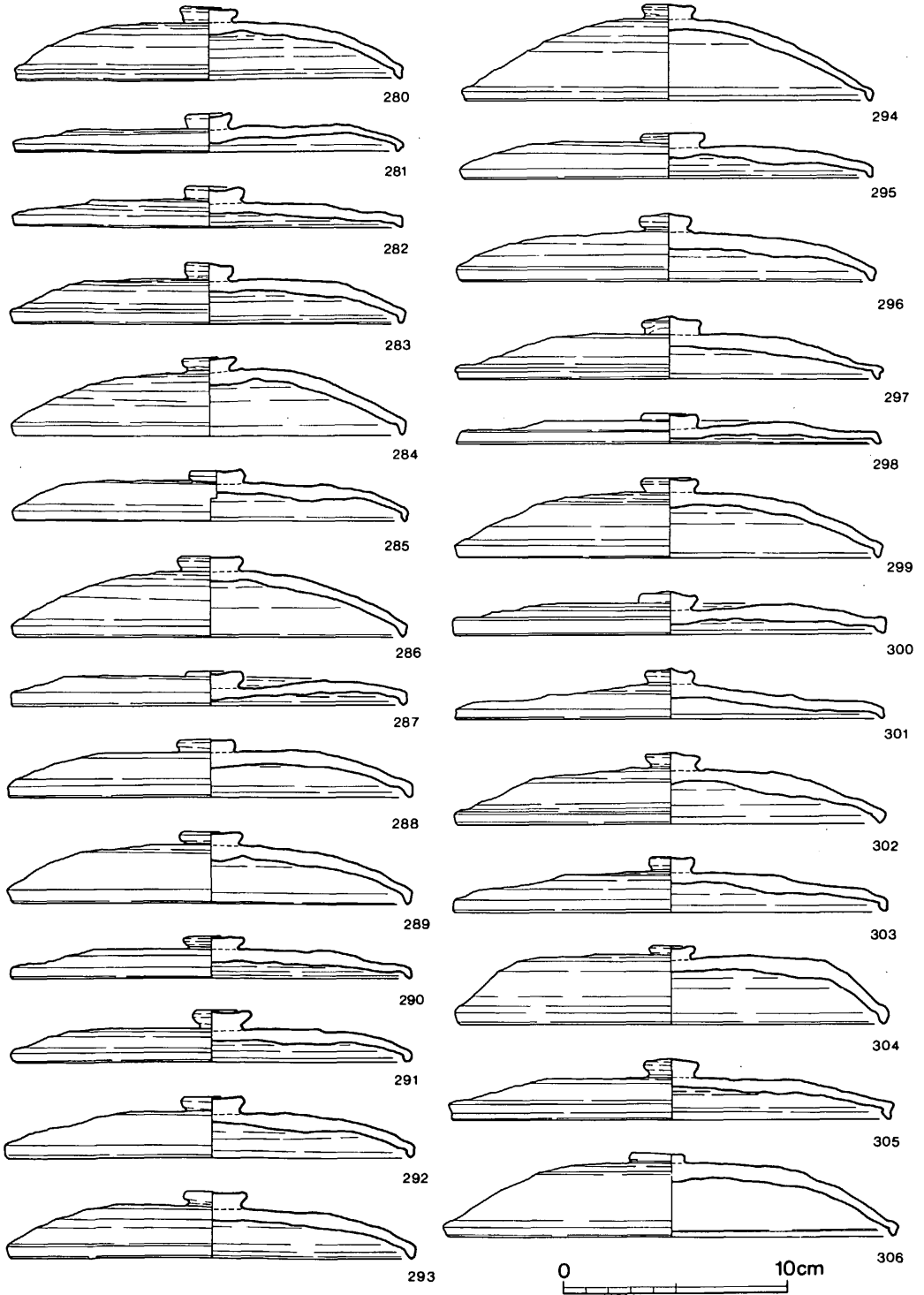
第 54 図 灰原出土土器実測図⑤ (縮尺 1/3)



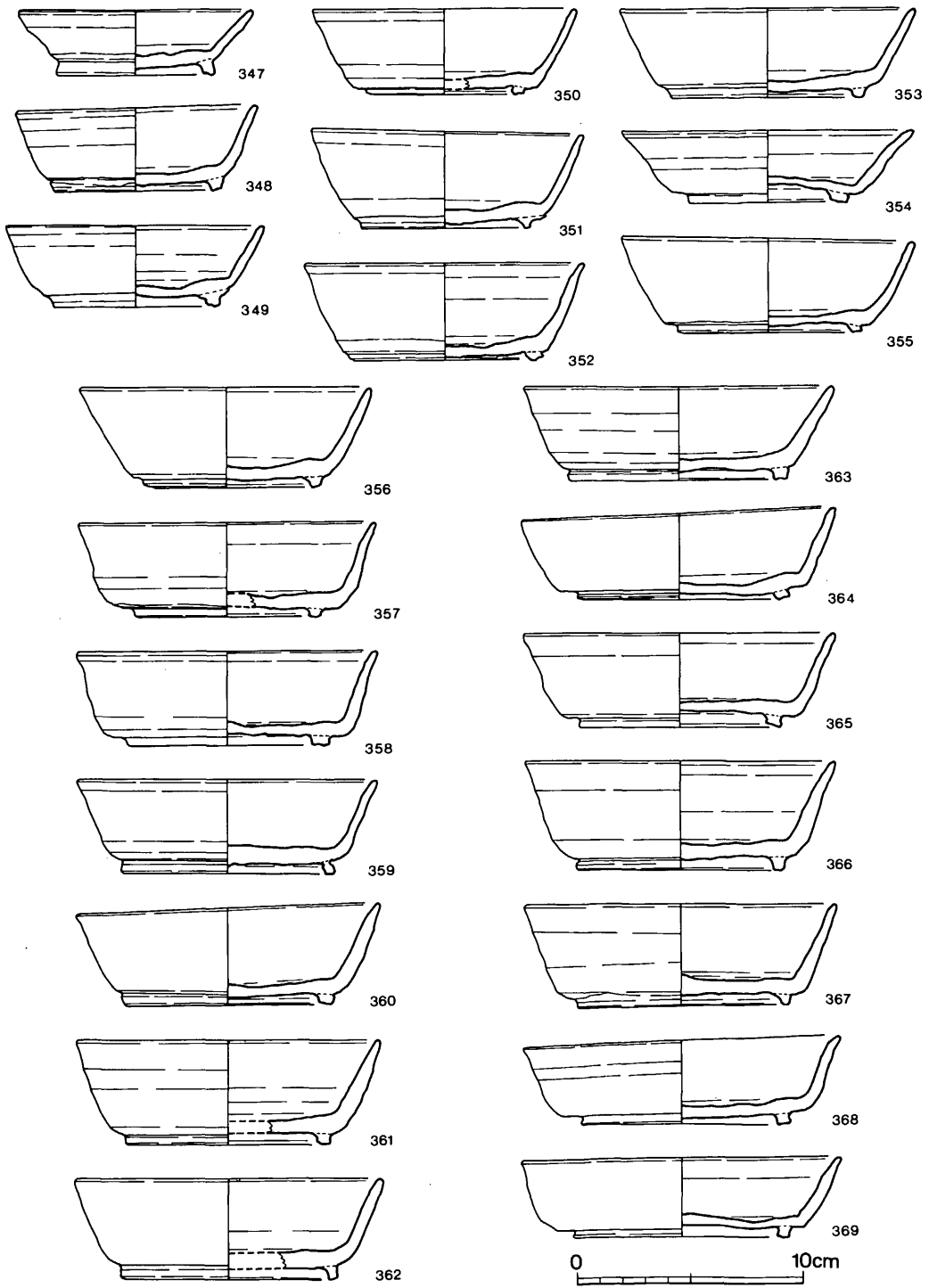
第 55 図 灰原出土土器実測図⑥ (縮尺 1/3)



第 57 图 灰原出土土器实测图⑧ (縮尺 1/3)

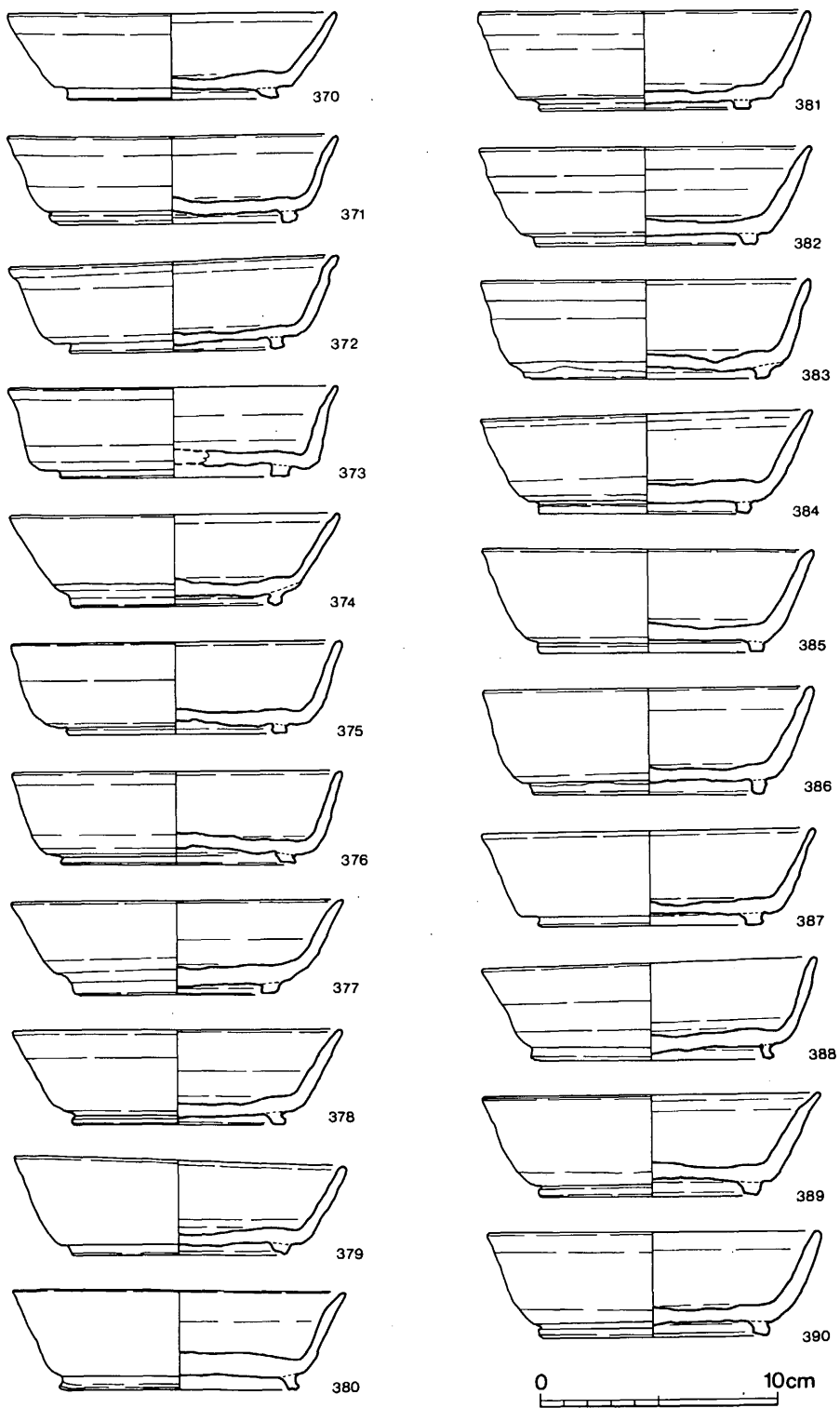


第 56 図 灰原出土土器実測図⑦ (縮尺 1/3)

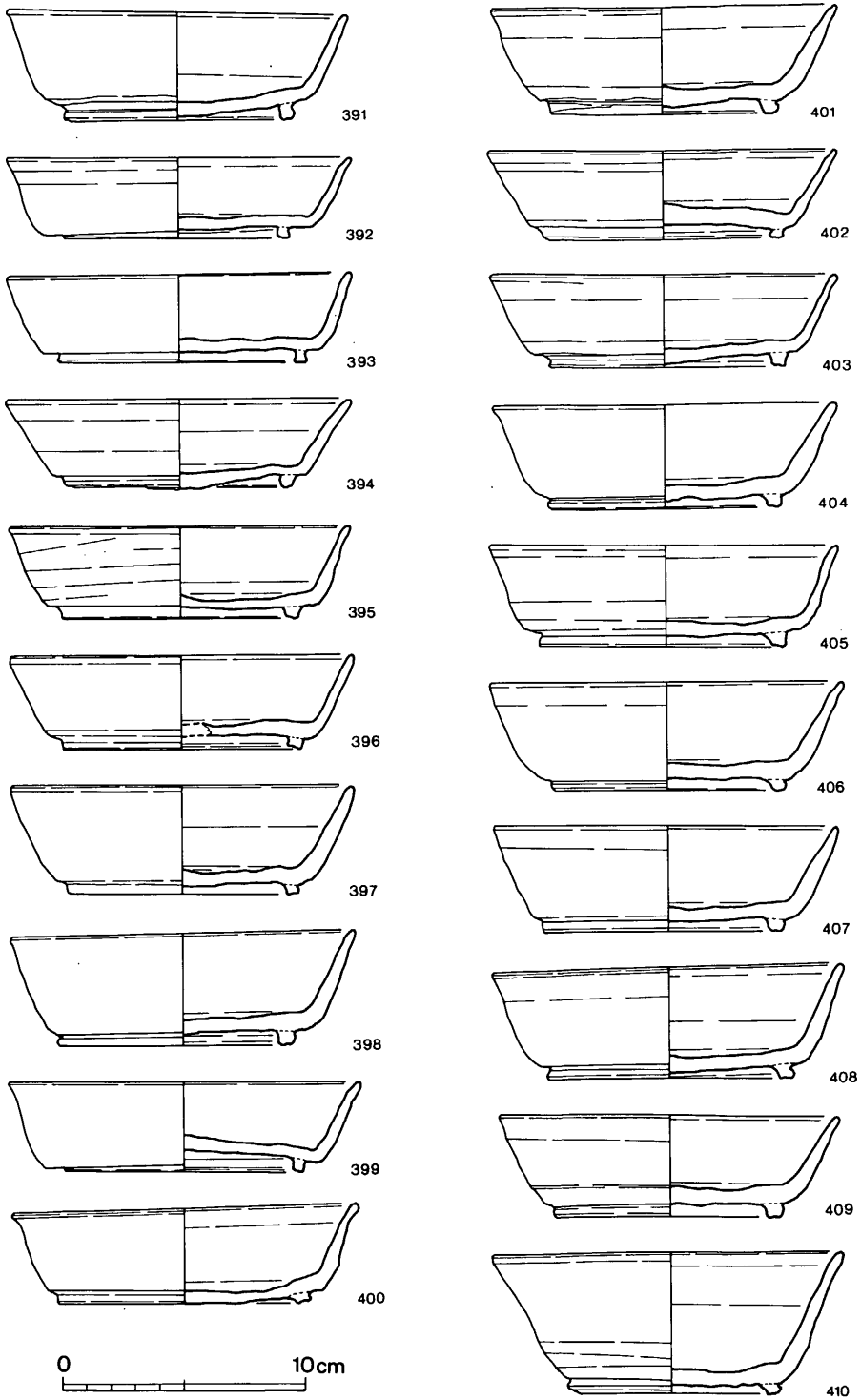


第 58 図 灰原出土土器実測図⑨ (縮尺 1/3)

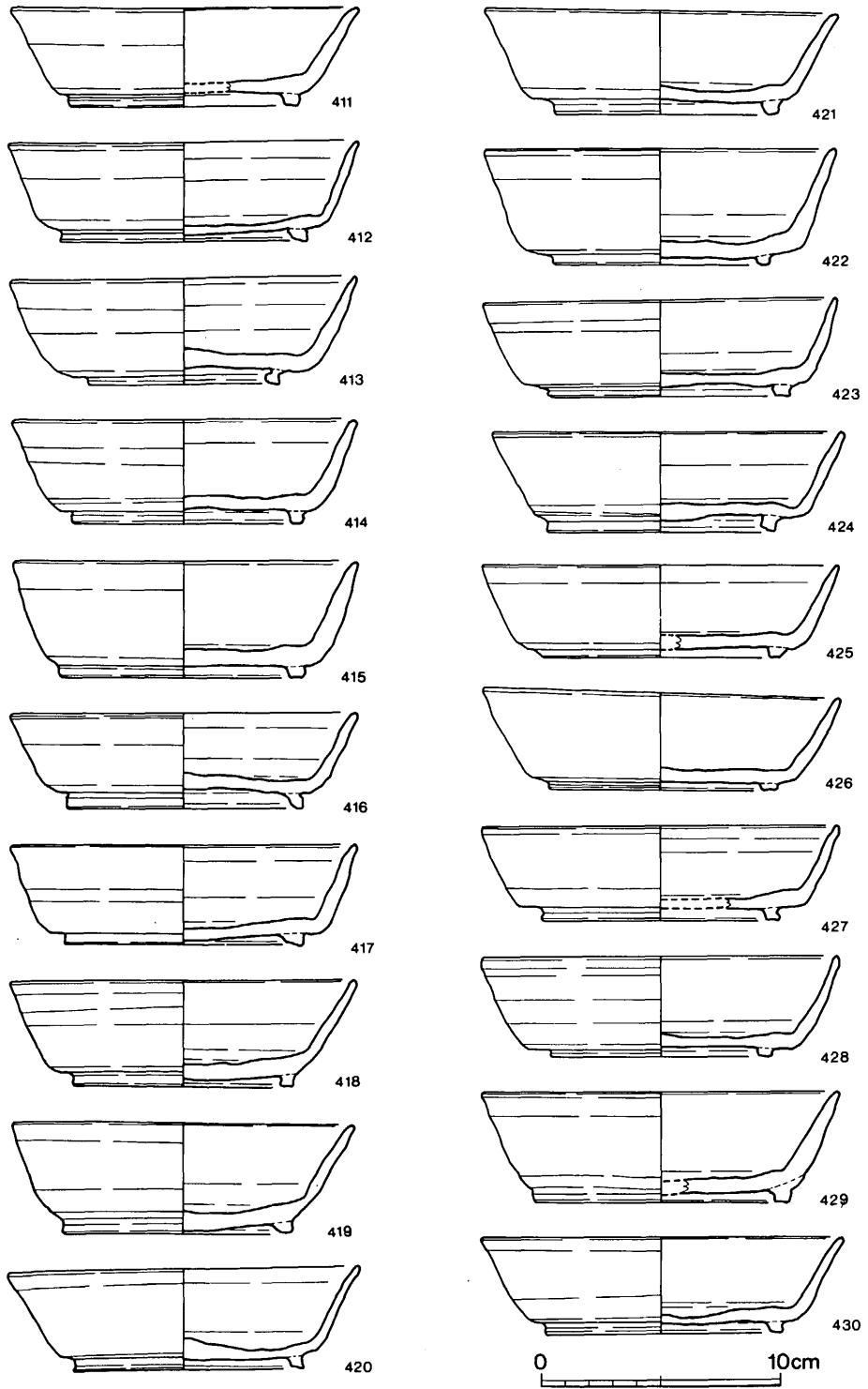




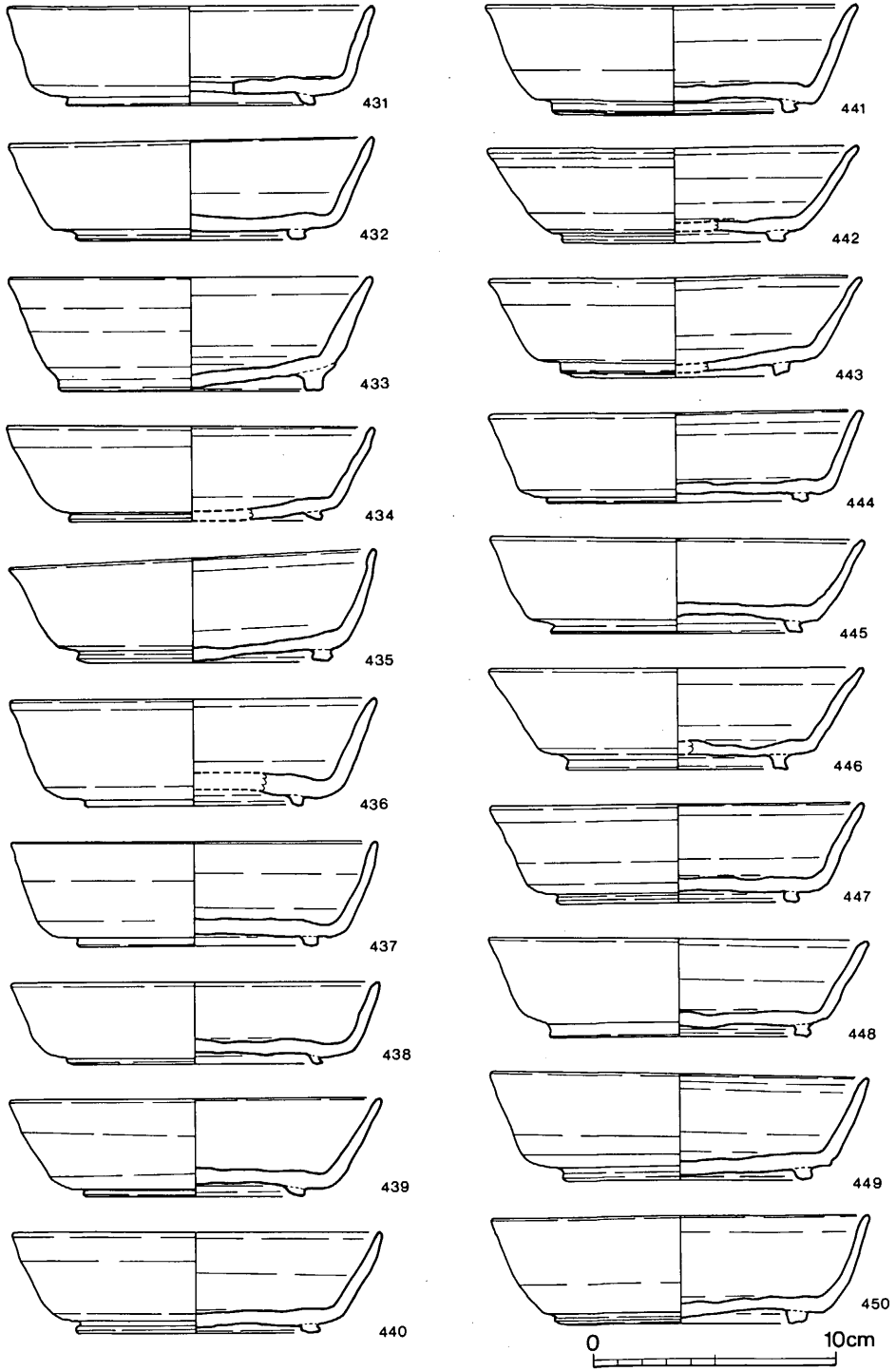
第 59 図 灰原出土土器実測図⑩ (縮尺 1/3)



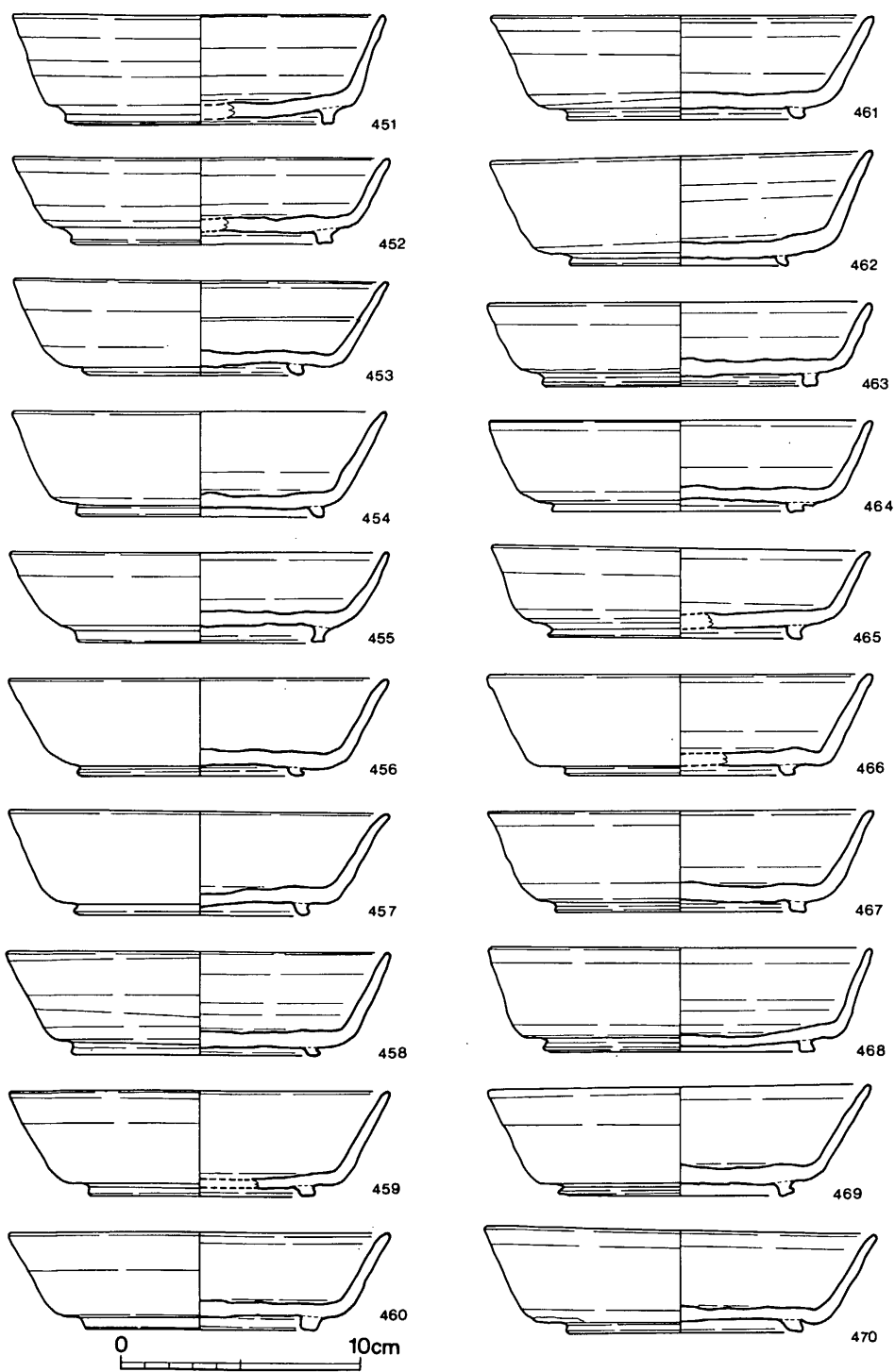
第 60 図 灰原出土土器実測図⑩ (縮尺 1/3)



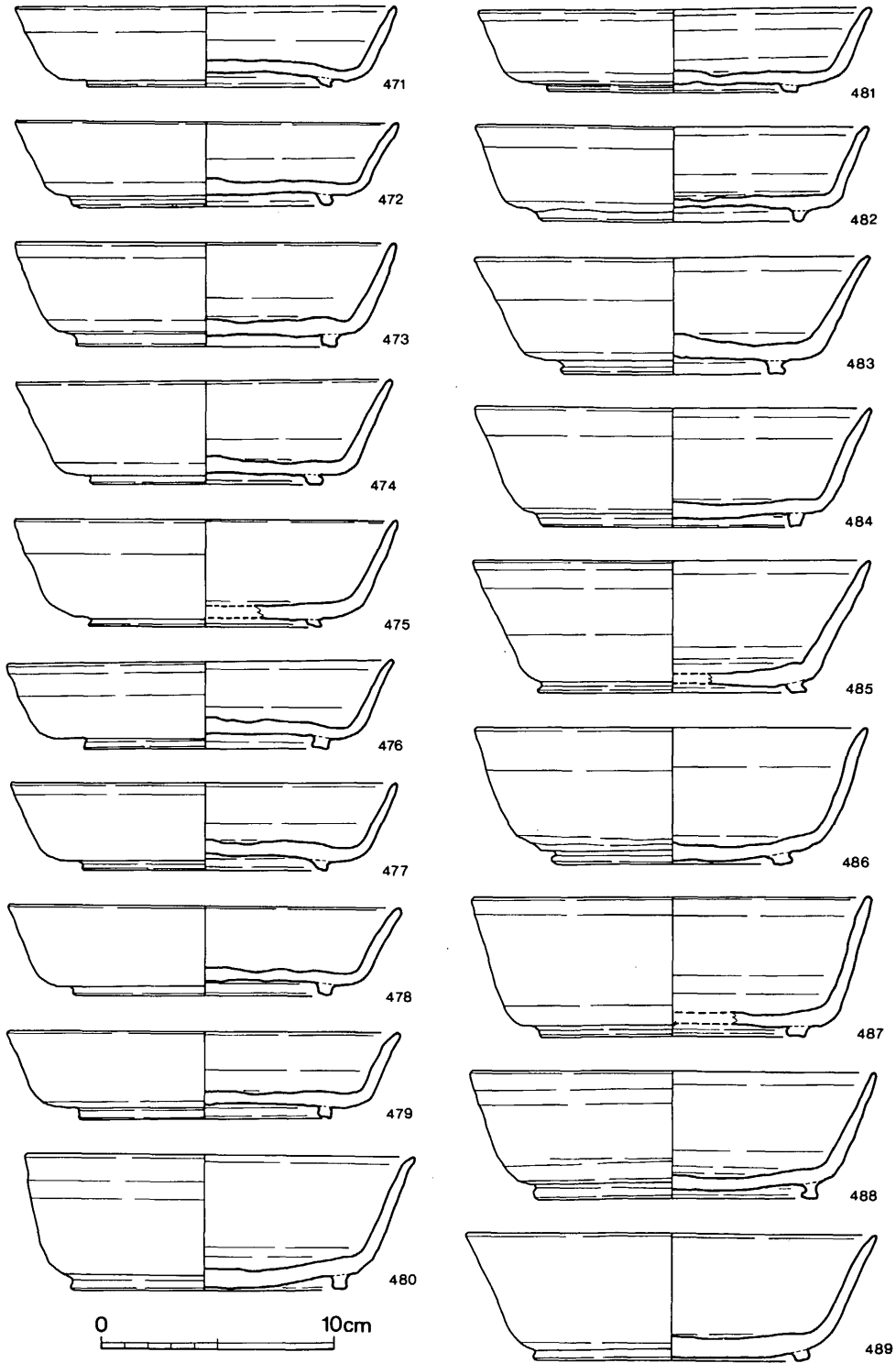
第 61 図 灰原出土土器実測図⑫ (縮尺 1/3)



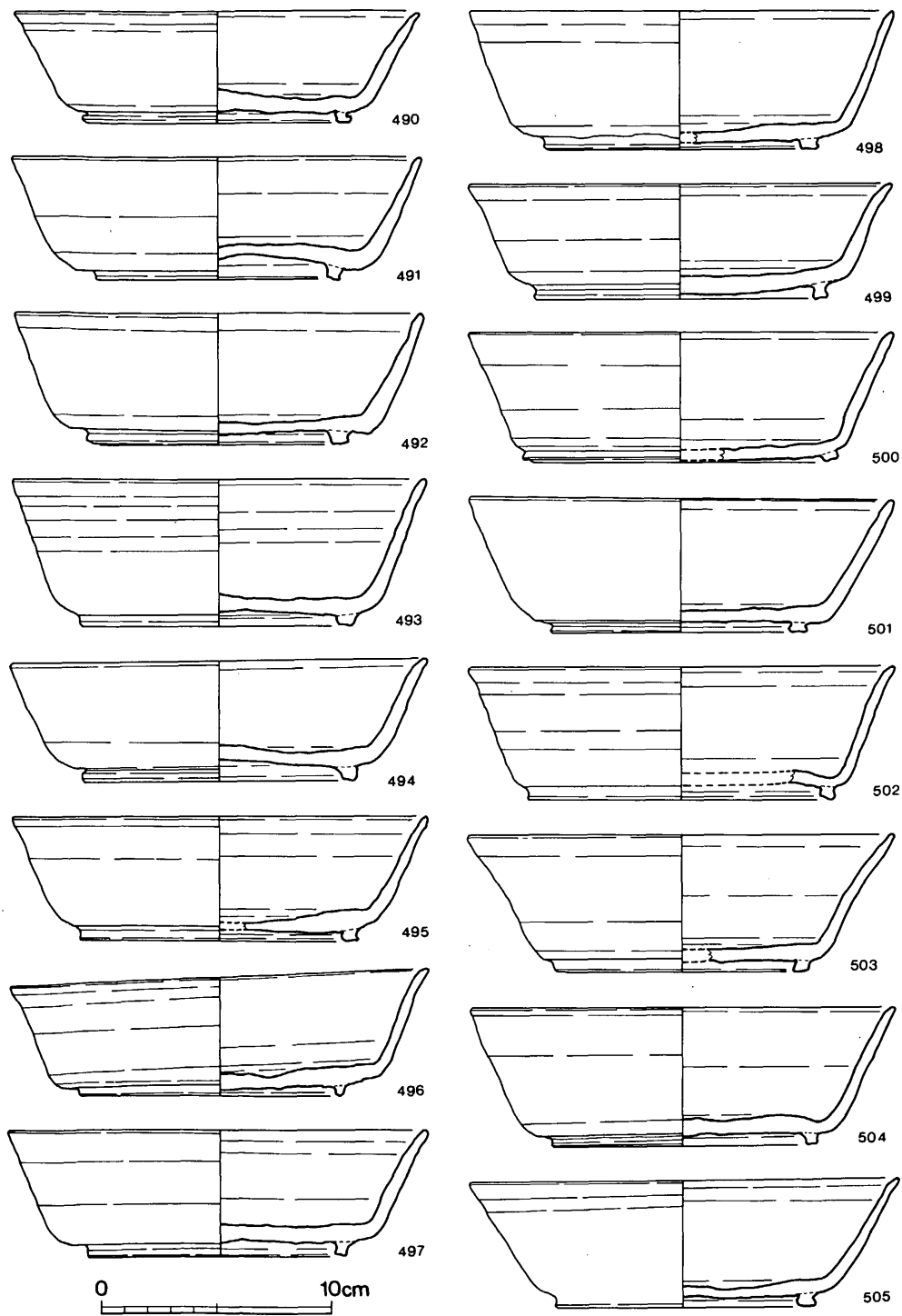
第 62 図 灰原出土土器実測図⑬ (縮尺 1/3)



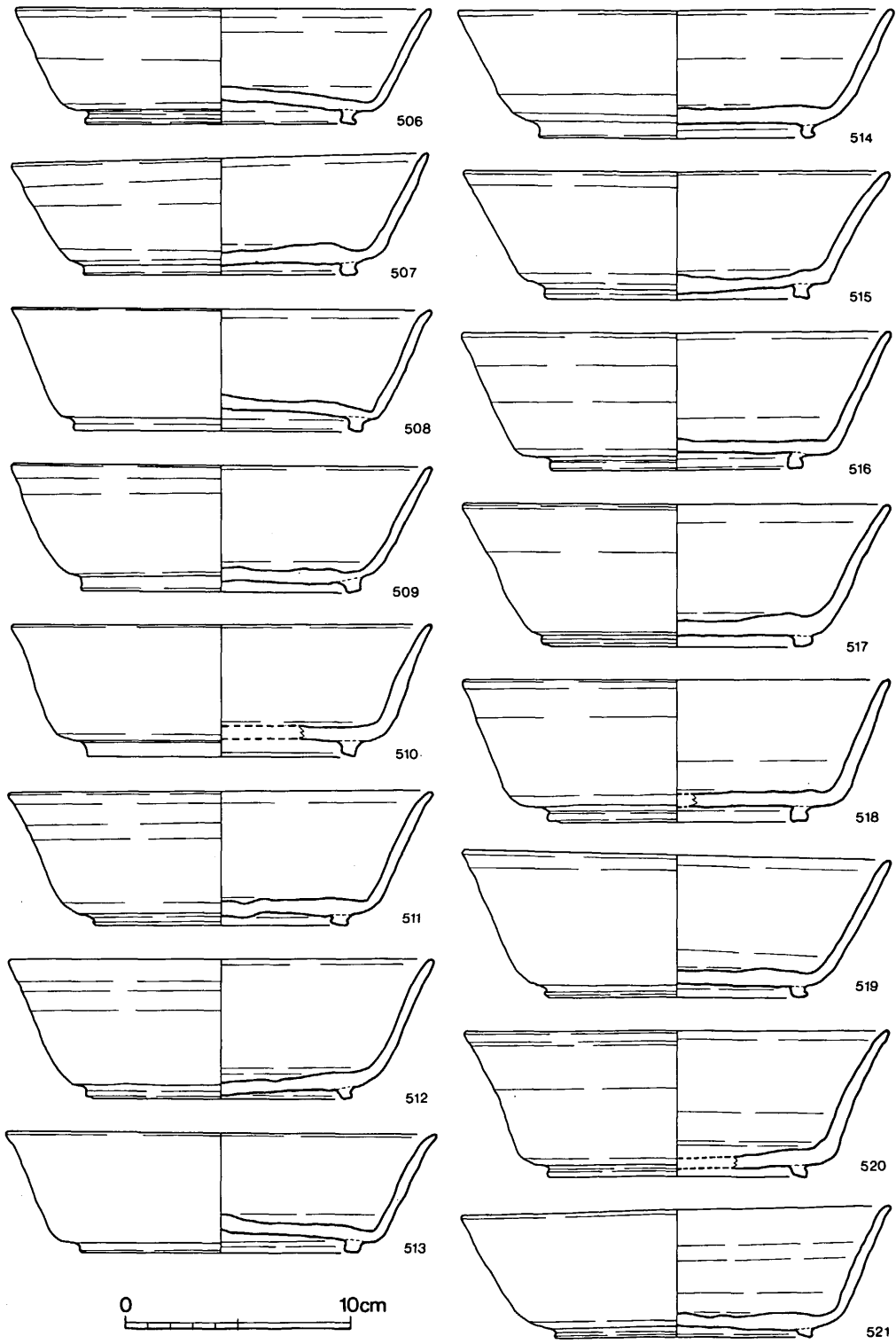
第 63 図 灰原出土土器実測図⑭ (縮尺 1/3)



第 64 図 灰原出土土器実測図⑬ (縮尺 1/3)

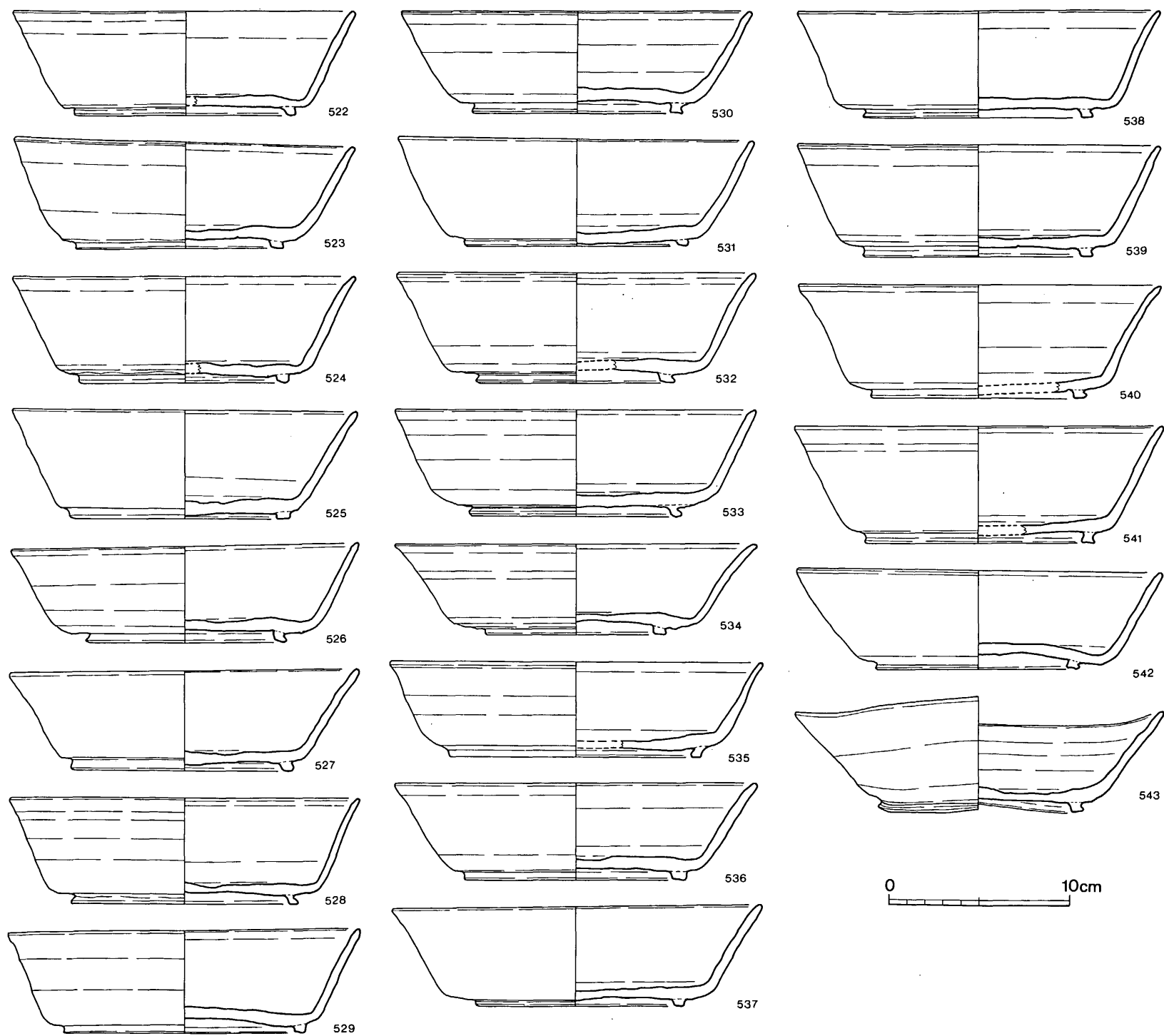


第 65 図 灰原出土土器実測図⑩ (縮尺 1/3)

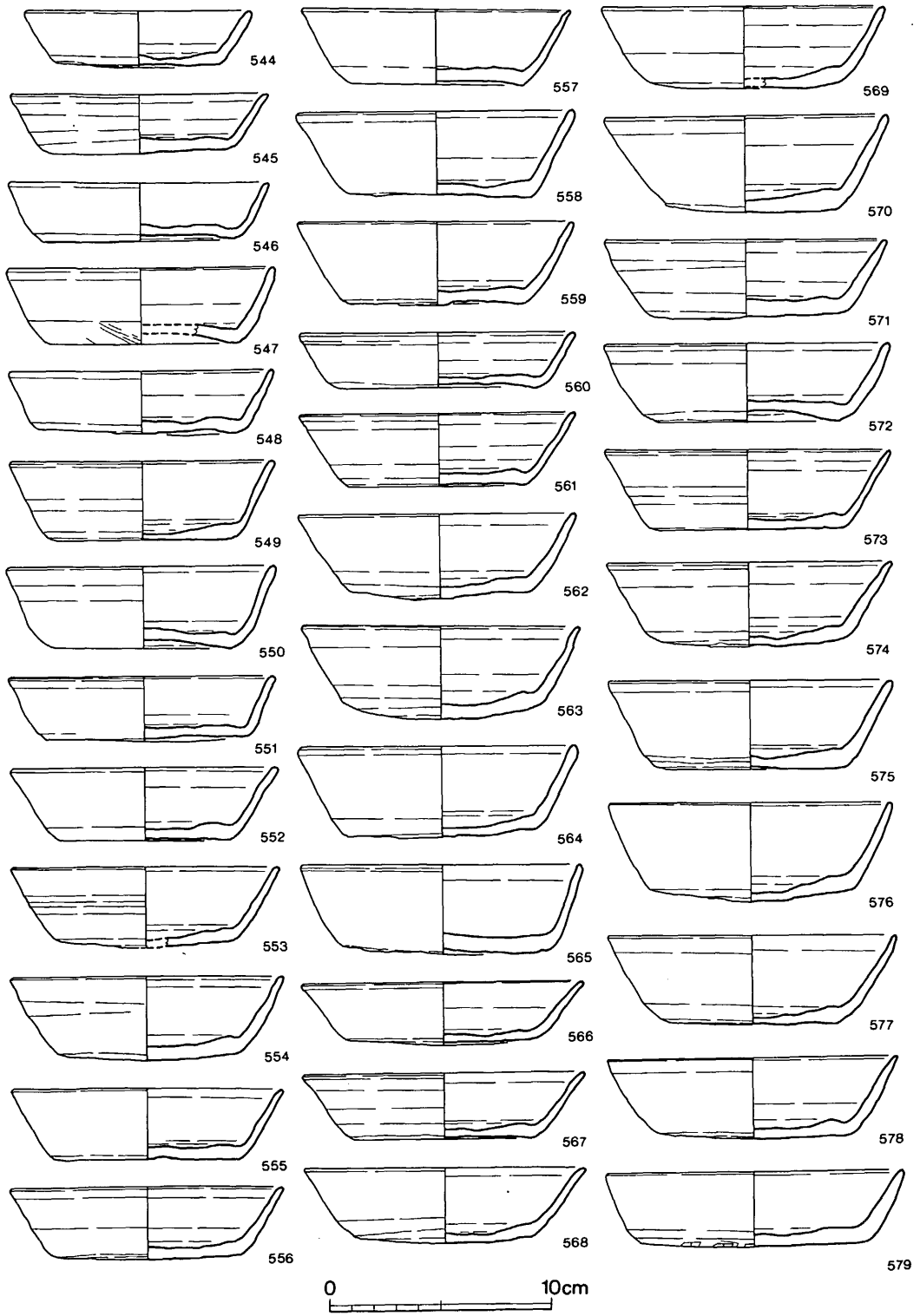


第 66 図 灰原出土土器実測図⑬ (縮尺 1/3)

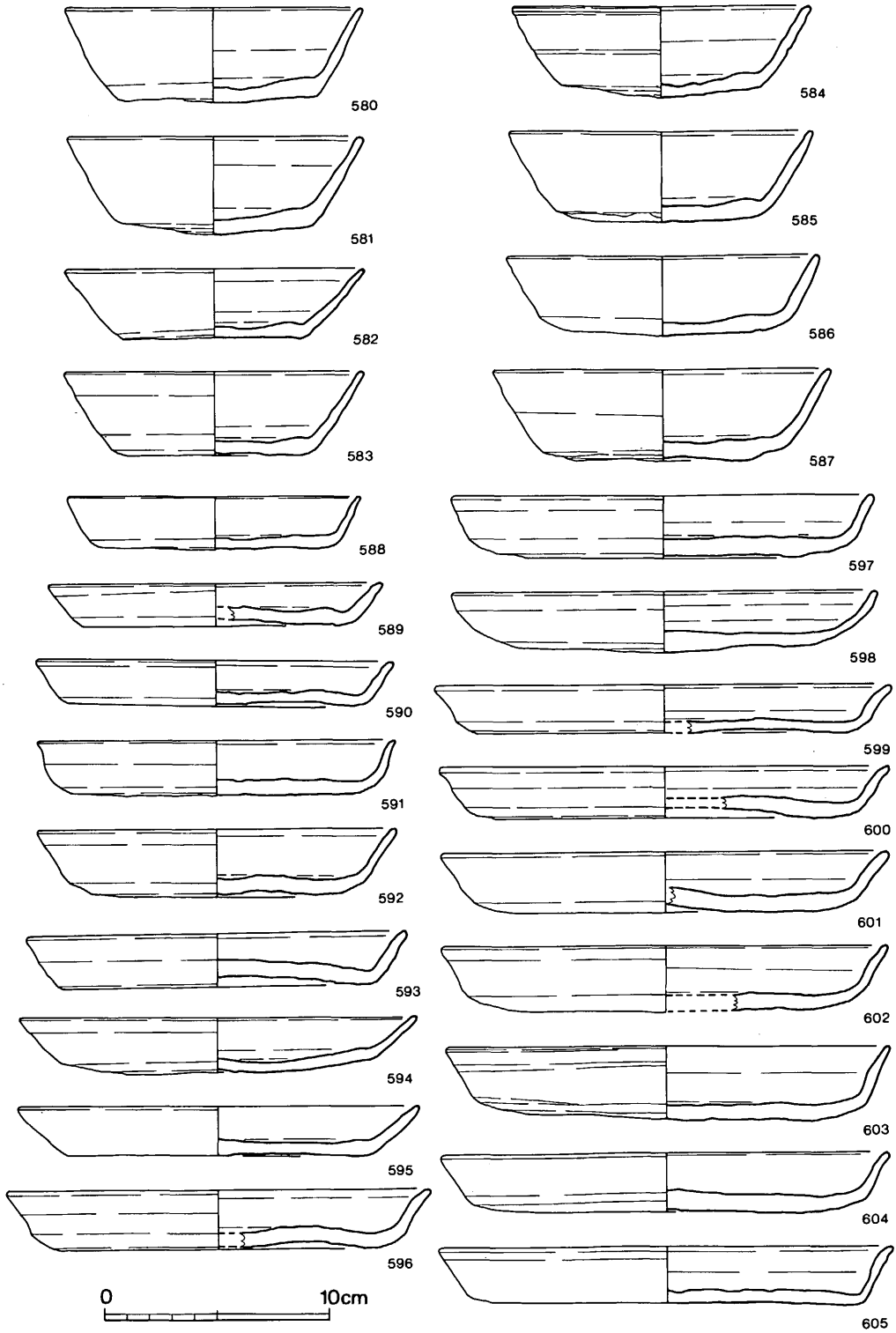




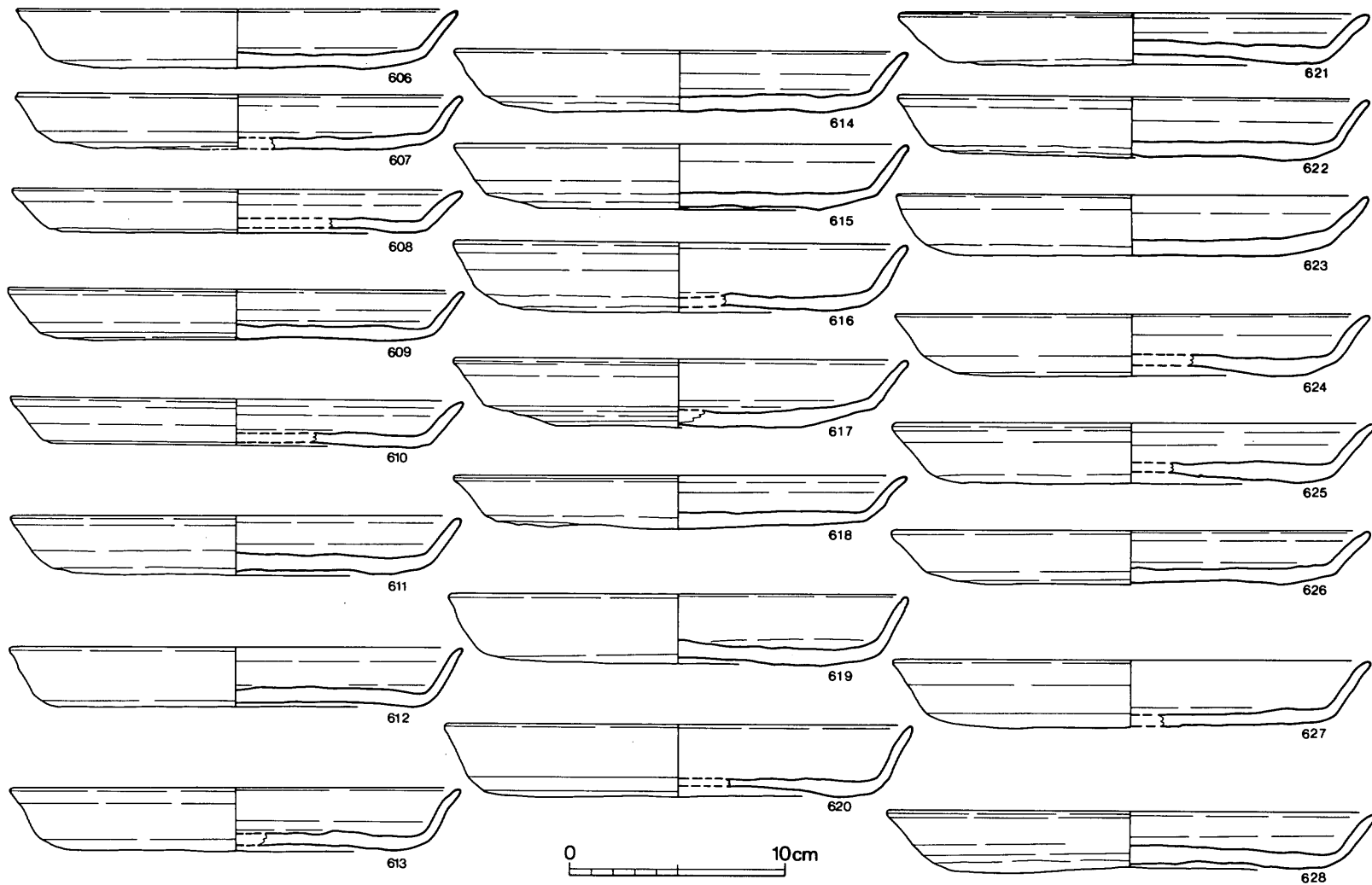
第 67 図 灰原出土土器実測図㉑ (縮尺 1/3)



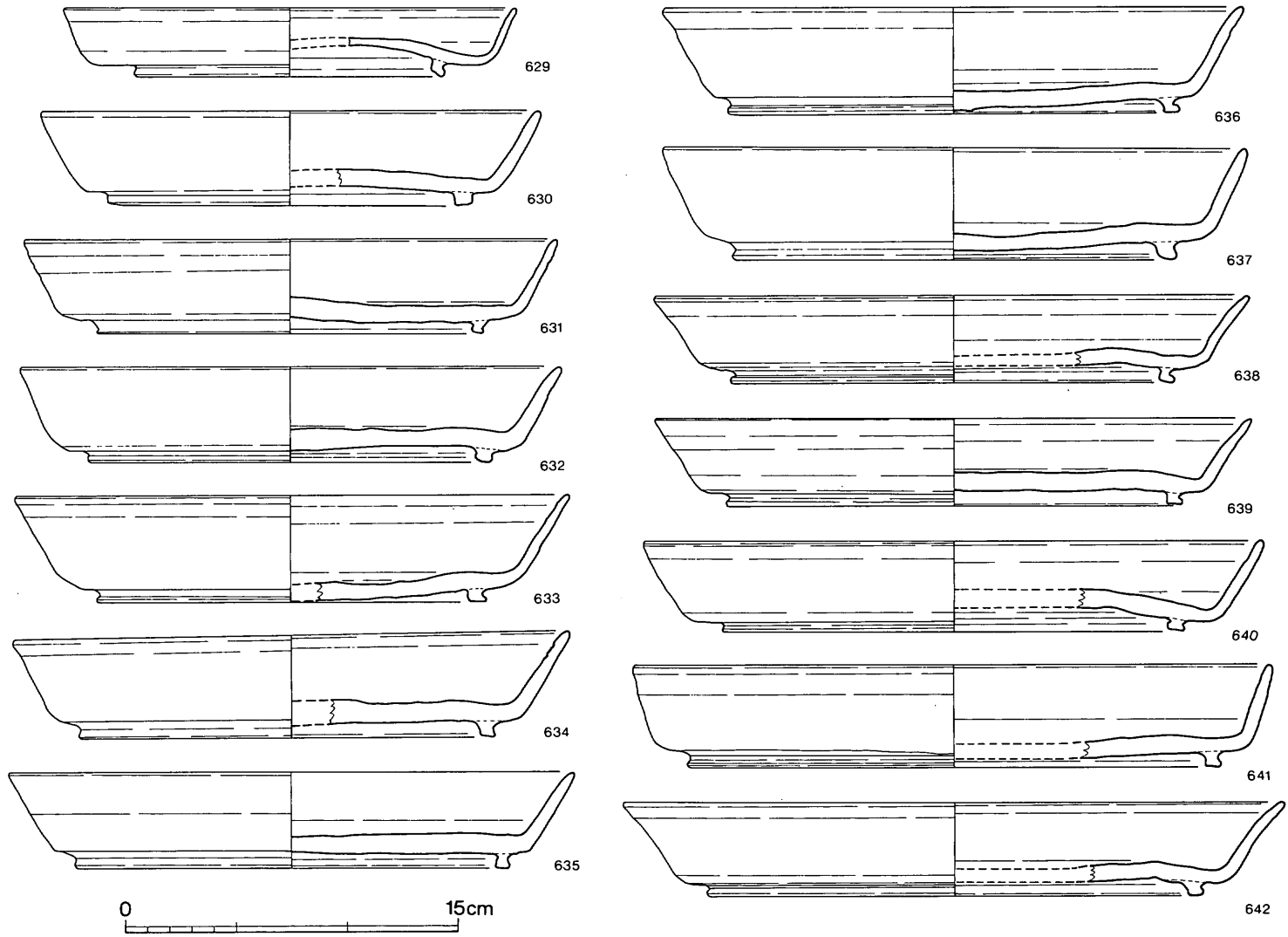
第 68 図 灰原出土土器実測図⑱ (縮尺 1/3)



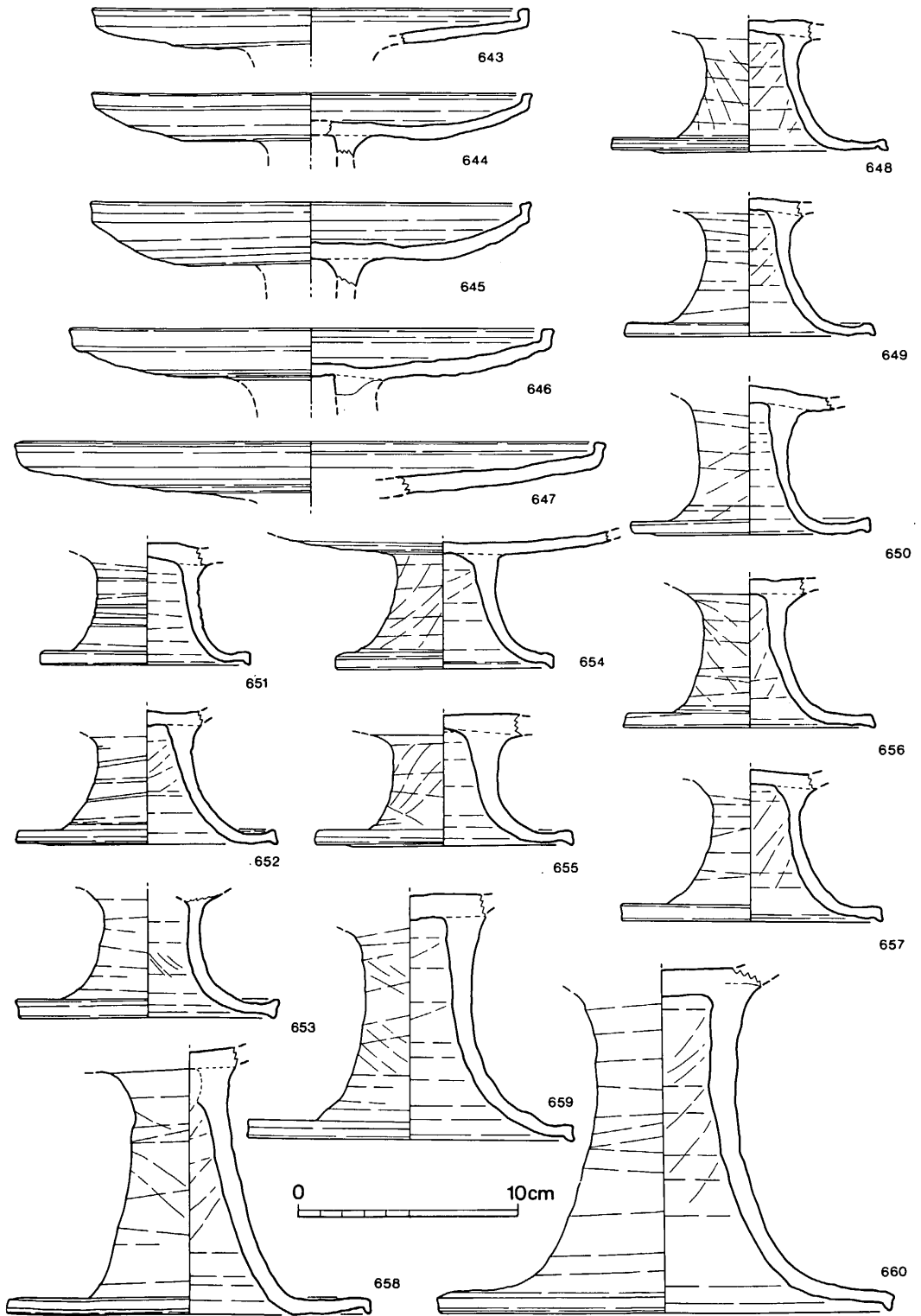
第 69 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



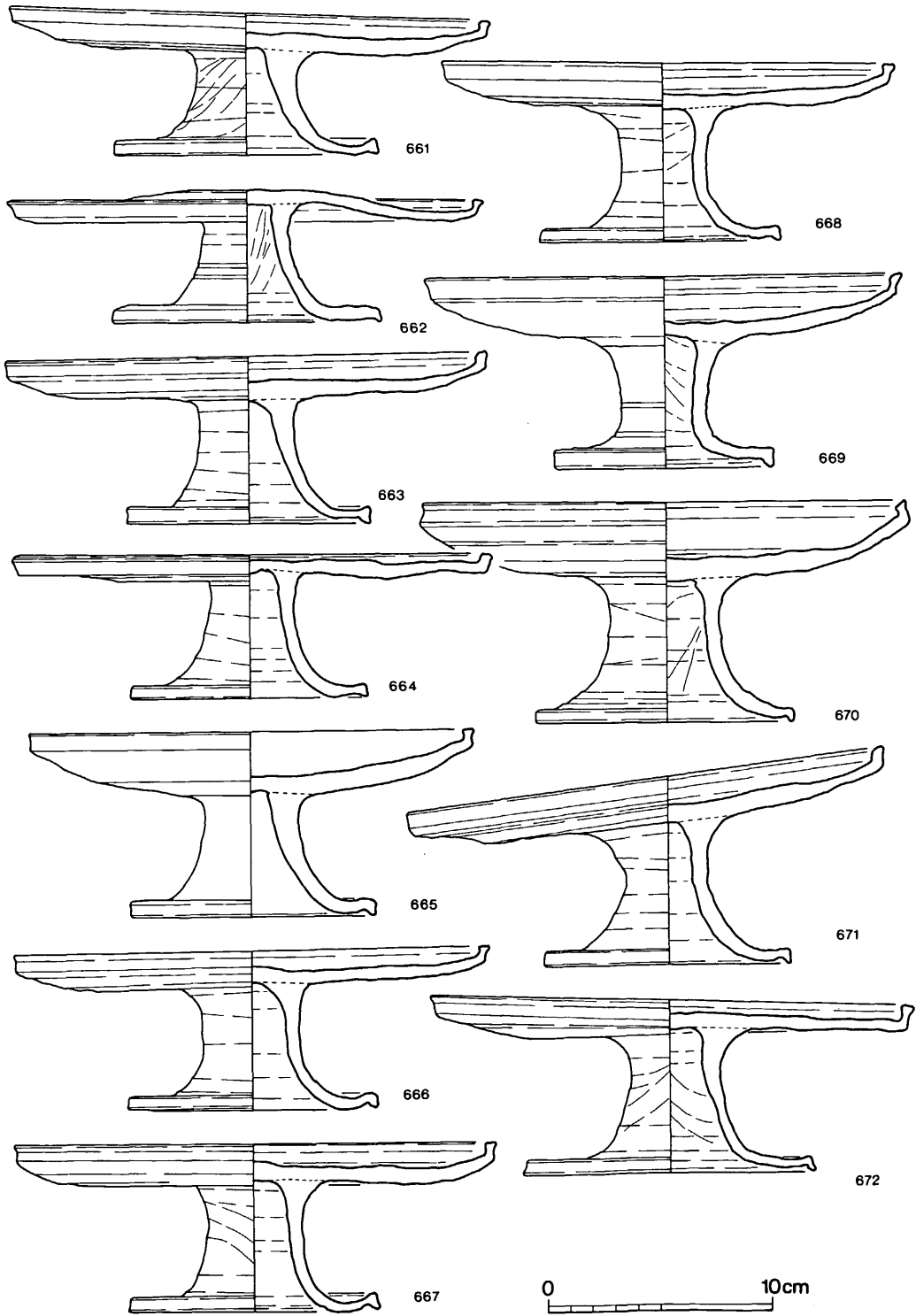
第 70 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



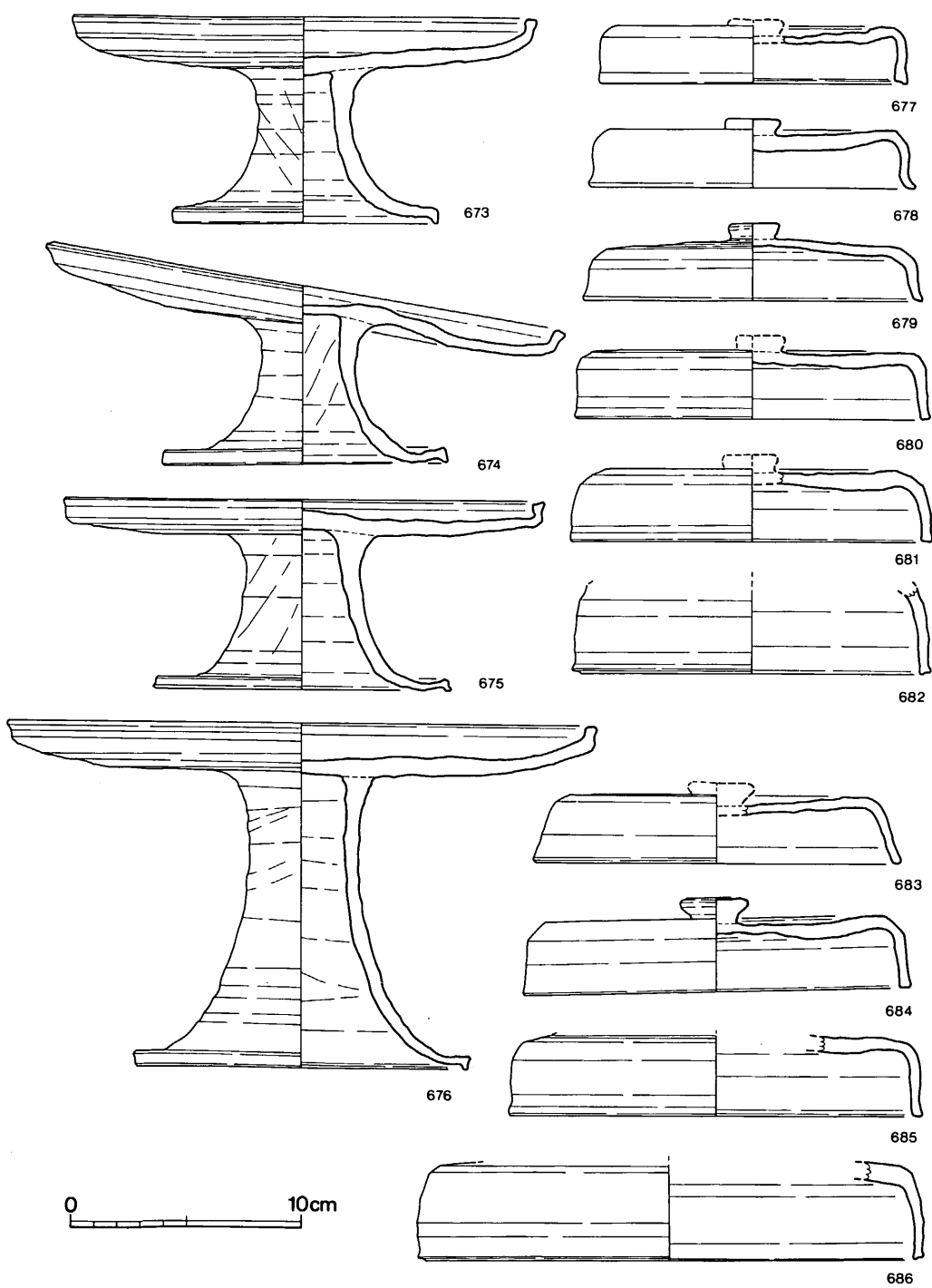
第 71 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



第 72 图 灰原出土土器实测图② (缩尺 1/3)

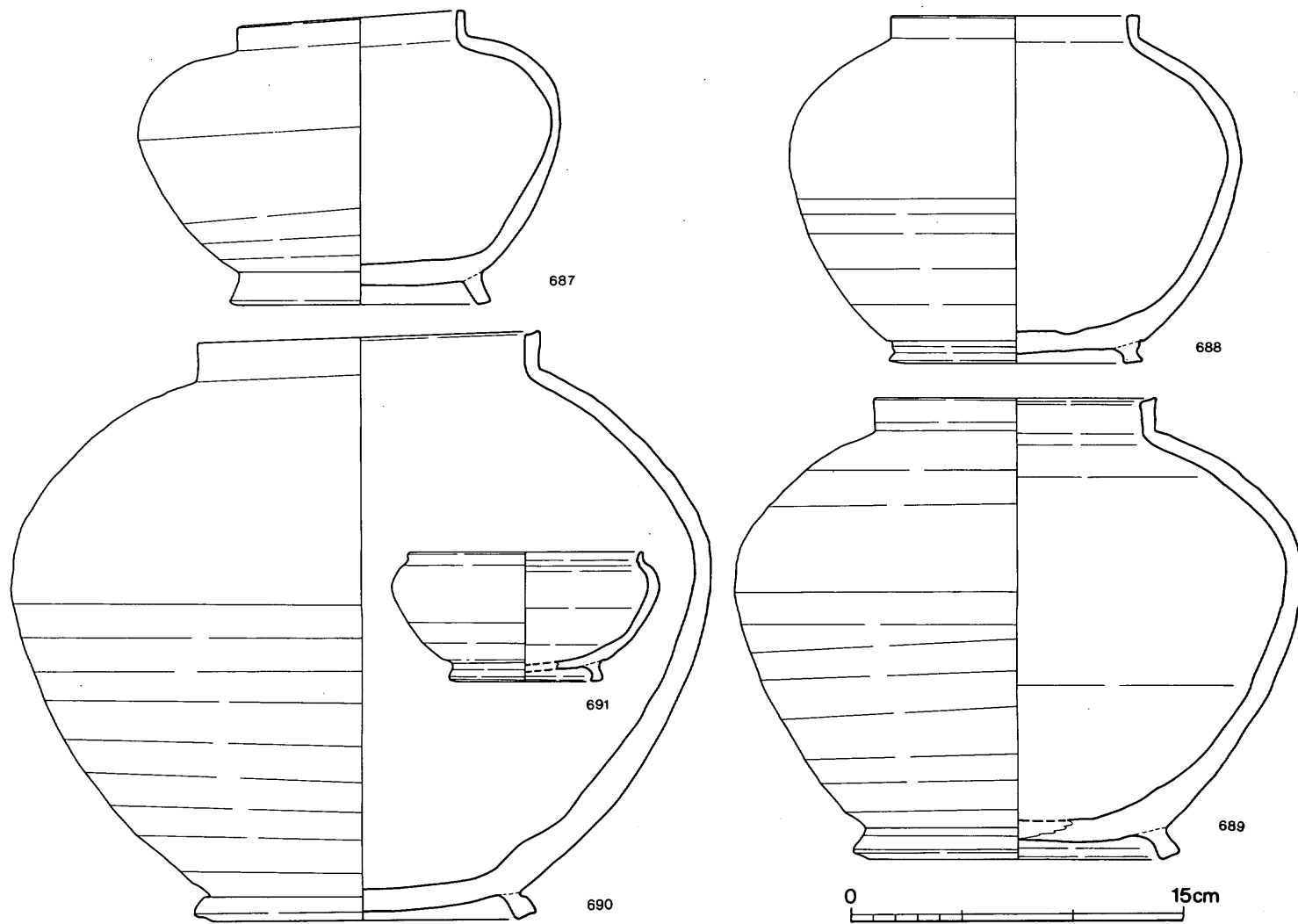


第 73 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)

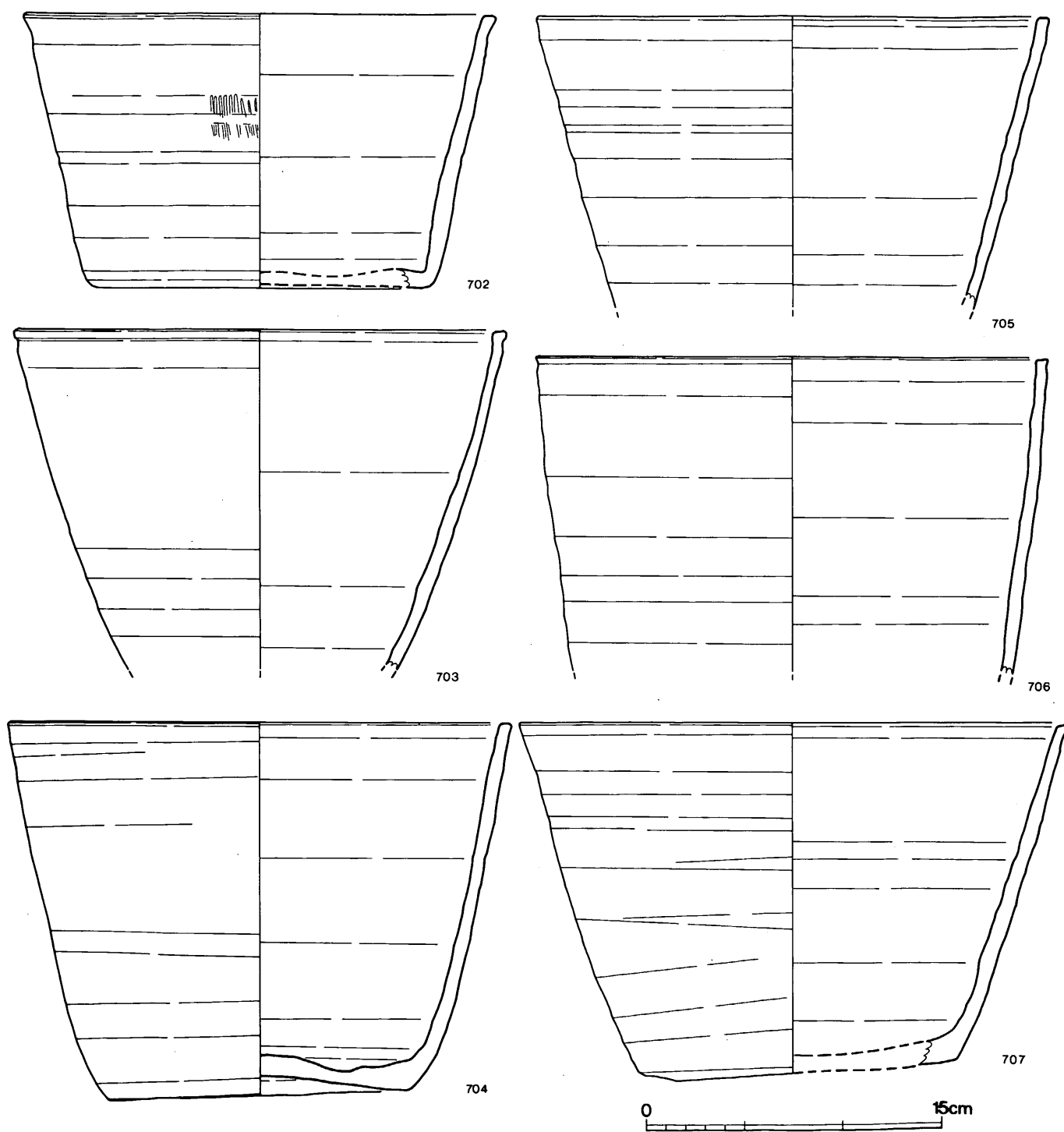


第 74 図 灰原出土土器実測図㊸ (縮尺 1/3)

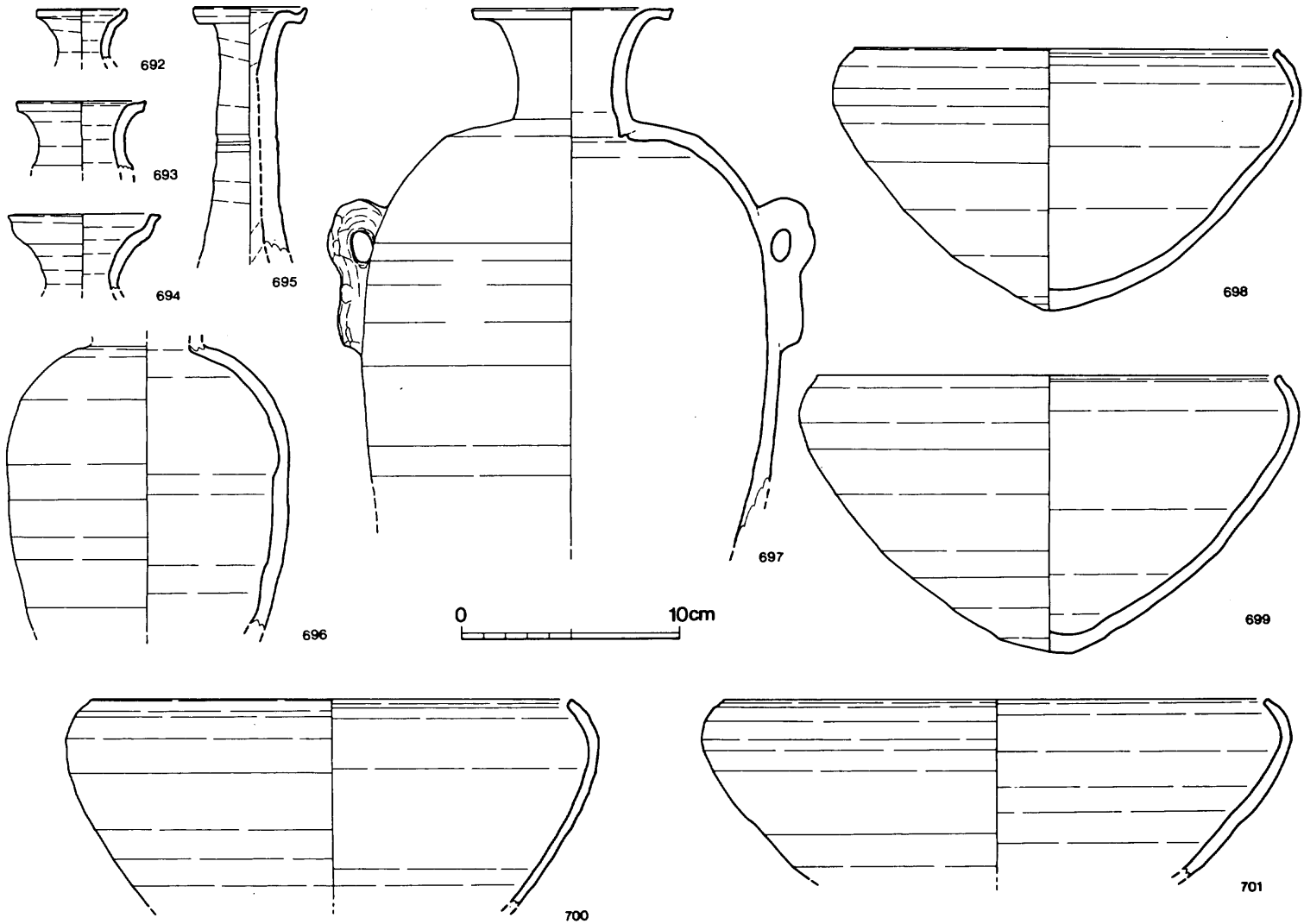




第 75 图 灰原出土土器实测图② (縮尺 1/3)



第 77 图 灰原出土土器实测图② (缩尺 1/3)



第 76 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)

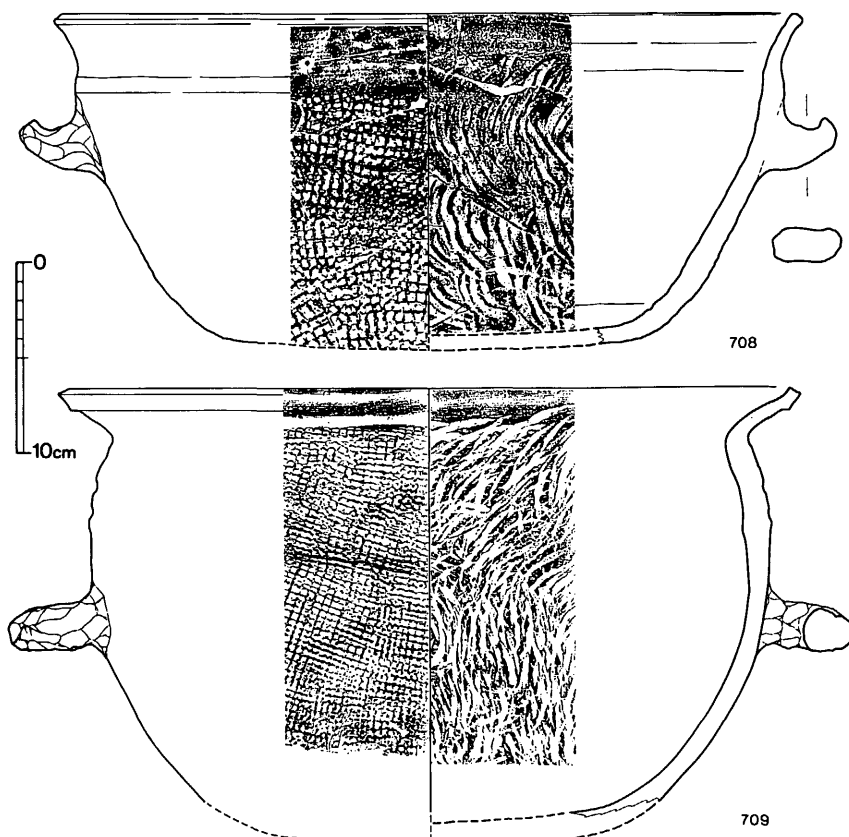
**短頸壺・蓋(677~686)** 壺自体に小・中・大あるように蓋も677・678・679~684・685・686とに分かれる。678・683・685は口縁端部を丸く仕上げている。外天井部は全て回転ヘラ削り調整。

**短頸壺・身(687~691)** 葉壺形の687~690と広口小形品である691とに分かれる。胴高指数は687が37.5、688が41.9、689が41.6、690が41.4、器高指数は687が68.8、688が76.0、689が82.0、690が83.1である。黒崎直氏前掲論文と照合すると687が8世紀中頃から後半、他は9世紀前半となる。

**瓶(692~697)** 692~694・697の短頸瓶と695の長頸瓶とが出土した。697は双耳瓶で、口頸部を体部の上に載せて接合している。

**鉄鉢形鉢(698~701)** 全形を知り得るのは僅かに2点だけで、尖底を有する典型的な鉄鉢形鉢である。口縁端部は僅かに面を成すが、シャープさはない。

**鉢(702~707)** 口縁部の差異は認められるが、形態的・手法的な面からみると大きな変化は認められない。



**中形鉢**

(708・709)

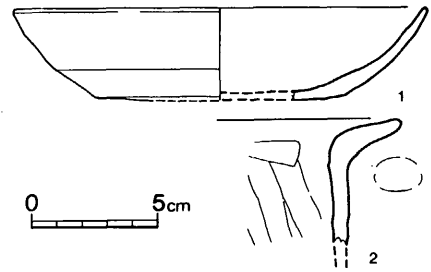
鉢と思われる破片は少数ながらまとまって出土した。しかし、図化できるのは2点だけである。両点ともに外面は格子文様の叩き目、内面は孤状の痕跡を残す当て具痕がみられる。

第78図 灰原出土土器実測図㊹(縮尺1/4)

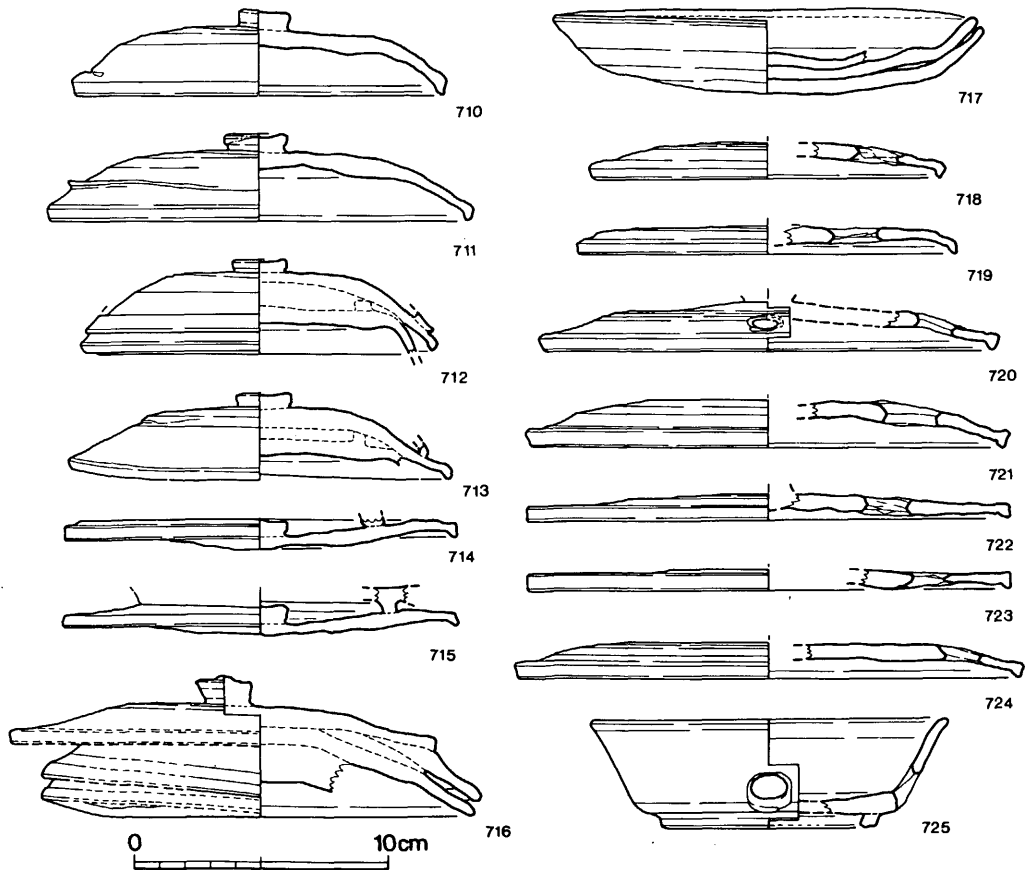
土師器 (第79図)

出土した土師器は極めて少なく、また、この期の土器は生焼けの須恵器と土師器の区別は相当の慎重さを有する。峻別でき、しかも図示できたのは杯と甕の少片だけである。

杯 (1) 内外面ともに器面の摩滅が著しく、かろうじて体部外面中位から外底部にかけて回転ヘラ削り調整を確認できるだけである。しかし、この種の土器に通例なヘラミガキ調整はあったものと推定される。器面が摩滅しているため胎土中の砂粒が浮き上がっている。淡赤茶色を呈する。小片から復原すると口径16.3cm、器高3.6cm、底径9.6cmとなるが、幾分口径、底径が大きく復原されたようである。24号窯灰原 (3 d) 出土。



第 79 図 灰原・包含層出土土師器 (縮尺 1/3)



第 80 図 重ね焼き・穿孔土器実測図 (縮尺 1/3)

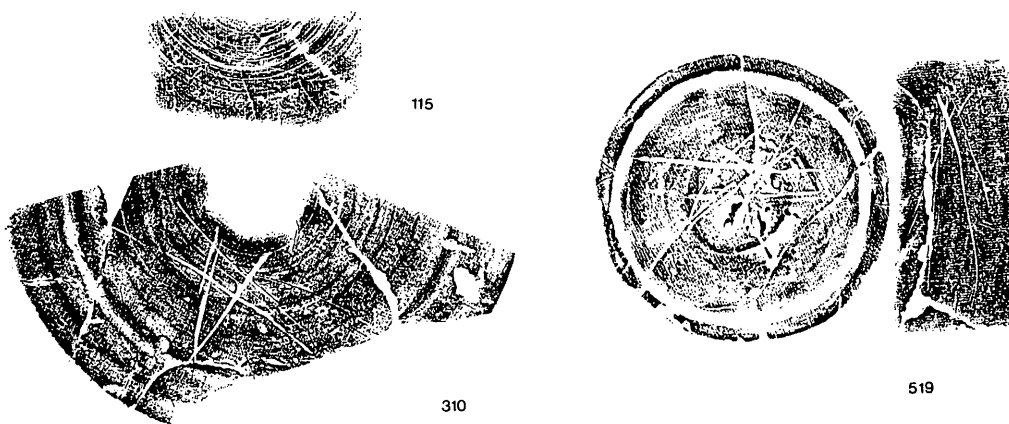
甕(2) 体部は丸味を有することなく下降し、丸味を有する底部に到るタイプに復原できる。体部と口縁部の境には口縁部成形時の指押え痕が一部に残存している。内面にはへら削り調整か認められる。胎土中の砂粒は多く、器面にも目立つ。小片のため正確な口径を示し得ないが、復原すると25cm程になる。包含層(8C)出土。

以上、2点の土師器ともに8世紀後半代の特徴を有し、須恵器焼成時に使用された遺物と見做し得よう。

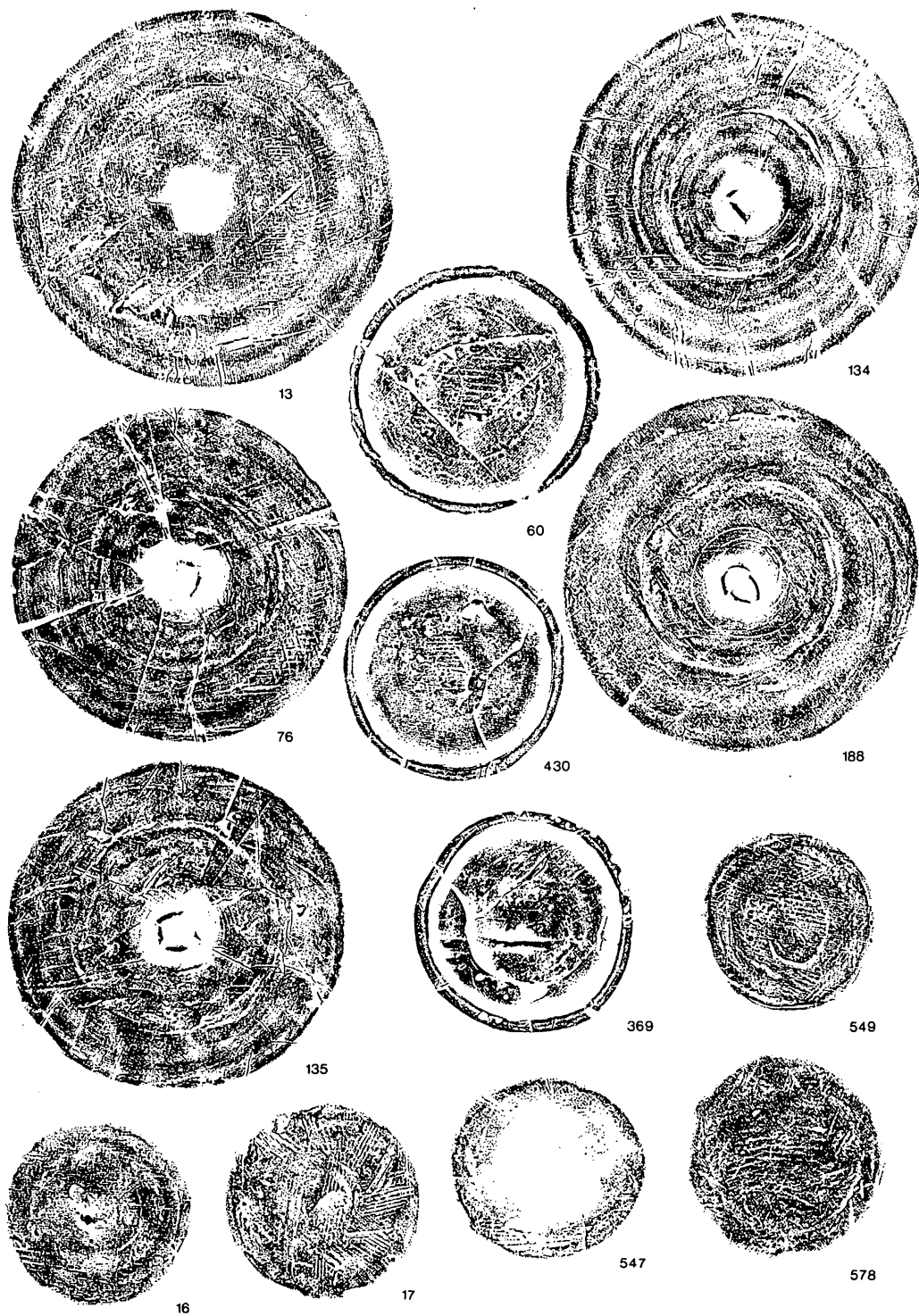
### 重ね焼き・穿孔土器

**重ね焼き土器** (710~717) 重ね焼き土器は同器種同志Aと異器種同志Bとがある。Aでは皿形土器を3枚組み合わせた717の例がある。Bでは杯身と蓋との組み合わせ710~715、蓋と皿との組み合わせ716がある。もっとも多くみられる例は当然のごとく、多数出土した蓋と身の例である。全て灰原出土。

**穿孔土器** 焼成前に穿孔された土器は蓋と杯に穿孔された例が多く、かつ蓋の例が多い。小片が多く、幾つ孔を有するか明らかでないが、1個を基本としているようである。しかし、複数の例も存しているようである。図示した資料は全て灰原出土。このような穿孔土器は消費地遺跡では出土していないことから、窯関係の資料と考えられる。この場合、1. 窯構築時における試し焼き、2. 置台、3. 窯祭祀、に焼成されたか使用されたが考えられる。穿孔土器と普通の土器(破片)との出土例も1点あり2の可能性も考えられるが、相互が破片のため明らかでない。とすると1・3の場合が残るが、明らかに祭祀を示すような出土例もなく1の可能性が一番高いように思われる。しかし、この地区だけの判断では不十分であり、考察時に譲る。



第81図 B-2地区出土須恵器拓影①(縮尺1/3)



第 82 图 B-2 地区出土須惠器拓影② (縮尺 1/3)

## (9) 小 結

この地区に所在する6基の窯を調査し、報告してきた。牛頸窯跡群は九州最大であり、6基の調査をもって窯が有する問題について十分論ずることは困難であるため、ここでは事実のみを述べるに留める。

窯は谷最奥部の西側斜面中腹上位および上部に位置している。位置および先後関係から3群に分かれる。1は23・25・26号窯で、尾根斜面を成形し、窯のための穴を穿ち易いようにしている。3基は25号窯を中心に「ハ」字形に開くように構築し、規模は北から南へと小さくなる。3基の窯の灰原は短時日短期操業を示すかのように灰原の堆積は薄く、しかも層位の区分を十分することはできなかつた。2は27号窯で、1の南に単独で尾根斜面上部に構築されている。ここに形成された灰原の範囲は狭く、しかも、薄い。1との時間的關係は出土遺物からは判断が困難である。3は24号窯で、25号窯と重複関係があり、後出する。ここから得られた資料はもっとも新しく、恐らくはこの地区において、単独で操業されたものと思われる。28号窯は前述したように試し焼きの時崩壊し、未使用に終わったと考えられる。検出窯内もっとも長大であった。23・25・26号の灰原との関係から、構築は先行する。つまり、 $28 < \frac{23 \cdot 25 \cdot 26}{27}$ の順になる。いずれにしても全ての窯は小規模であり、また改修はみられず短時日の操業を想定できる。

窯の特徴は主軸長が短く、幅は狭く、高さは低く、かつまた焼成部の傾斜は急であることである。この時期においては大形品と小形品を焼成する窯の区分が十分に行なわれていたことを示し、ここでは小・中形品のみ焼成であった。焼成部の特徴は燃焼室との境は明確ではなく、かろうじて、傾斜角度の変換部を持って理解するしかない。また、床面は直線的ではなく彎曲するため、燃焼室近くは緩やかで、煙出し部近くは急になる。熱効率を考えた為の構造的特徴であるのかも知れない。

出土遺物からみるとこの窯群は8世紀中頃から後半代にかけて操業されていたと思われる。

(森田 勉)



## 5 C地区（足洗川窯跡群）の調査

### (1) 調査の概要（図版42、第83・84図）

C地区は、牛頸川上流域の左岸で最も大きく開いた谷に存在する。牛頸川に沿って走る市道から分かれ牛頸山山麓を走る足洗川林道沿いで、谷の入口から約250m登った南側斜面上に位置する。昭和55年3月福岡県教育委員会から発刊された『福岡県遺跡等分布地図』に記載されている190203足洗川第3号窯跡の位置から東へ約130m程下る。この部分はダムの工事用道路の敷地内にあたり当初の分布調査では須恵器の散布は認められなかったが、足洗川第3号窯跡と同様の地形で窯の構築に適していると判断し、路線内にトレンチを設定し確認調査を実施した。このうち一本に須恵器片が出土したため周囲を拡張し発掘調査を行なった。調査の結果、斜面上部（標高130m）の部分に窯4基（34～37号窯跡）を検出した。

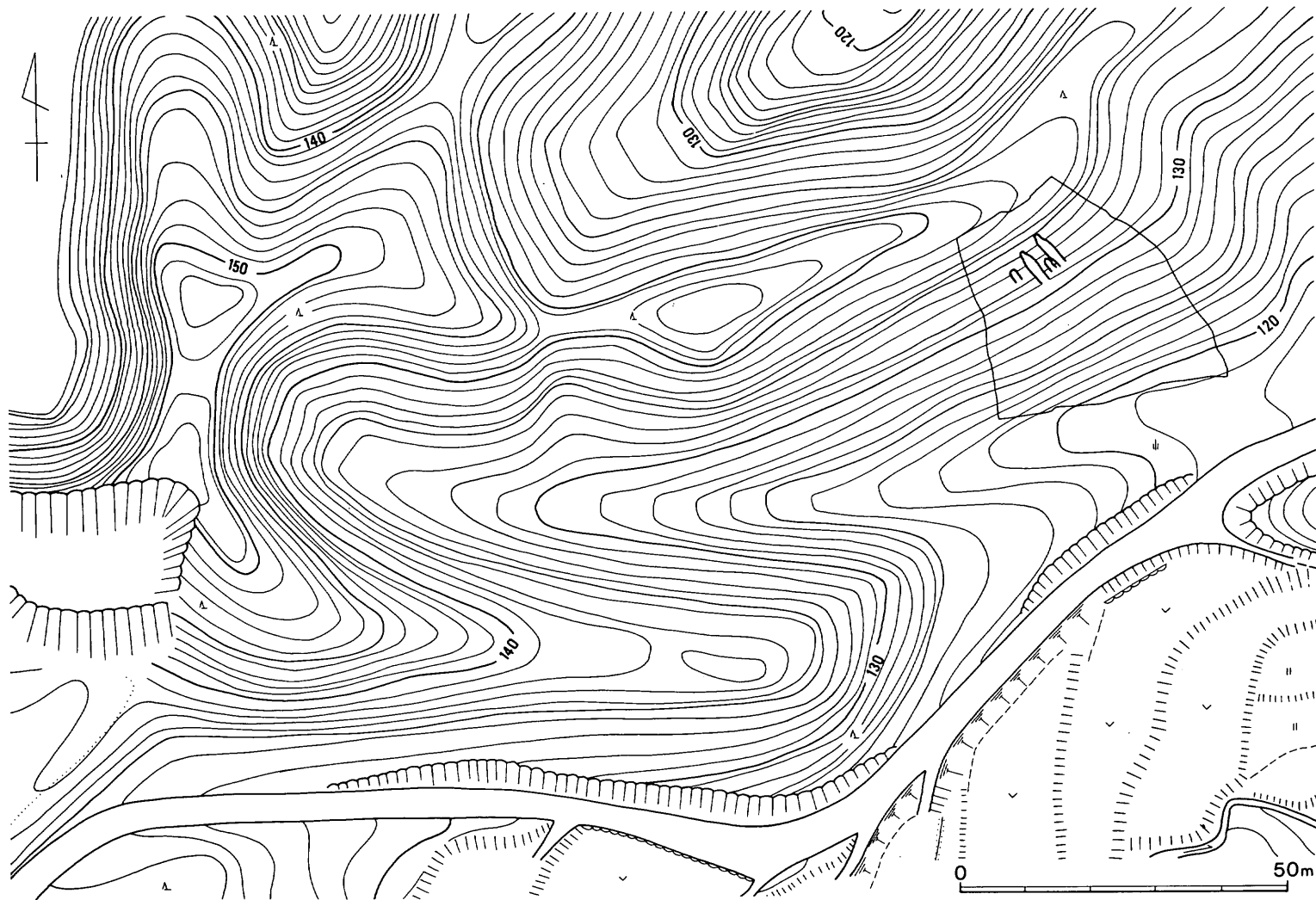
### (2) 34号窯跡（図版43・45、第85図）

丘陵尾根線近くの南斜面中腹に位置し、等高線に直交して構築された窯である。本窯の西には35・36・37号の窯が近接して並んでいる。窯体は、すでに焚口以下を流失し、窯の全容を明らかにすることはできない。現地表面から床面までの深さは、焚口付近で約1m、奥壁際で約3mを測る。窯の構造は花崗岩パイラン土の地山を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面基底部の幅は、焚口付近から焼成部にかけて徐々に広がり、中央付近から再び狭くなっている。

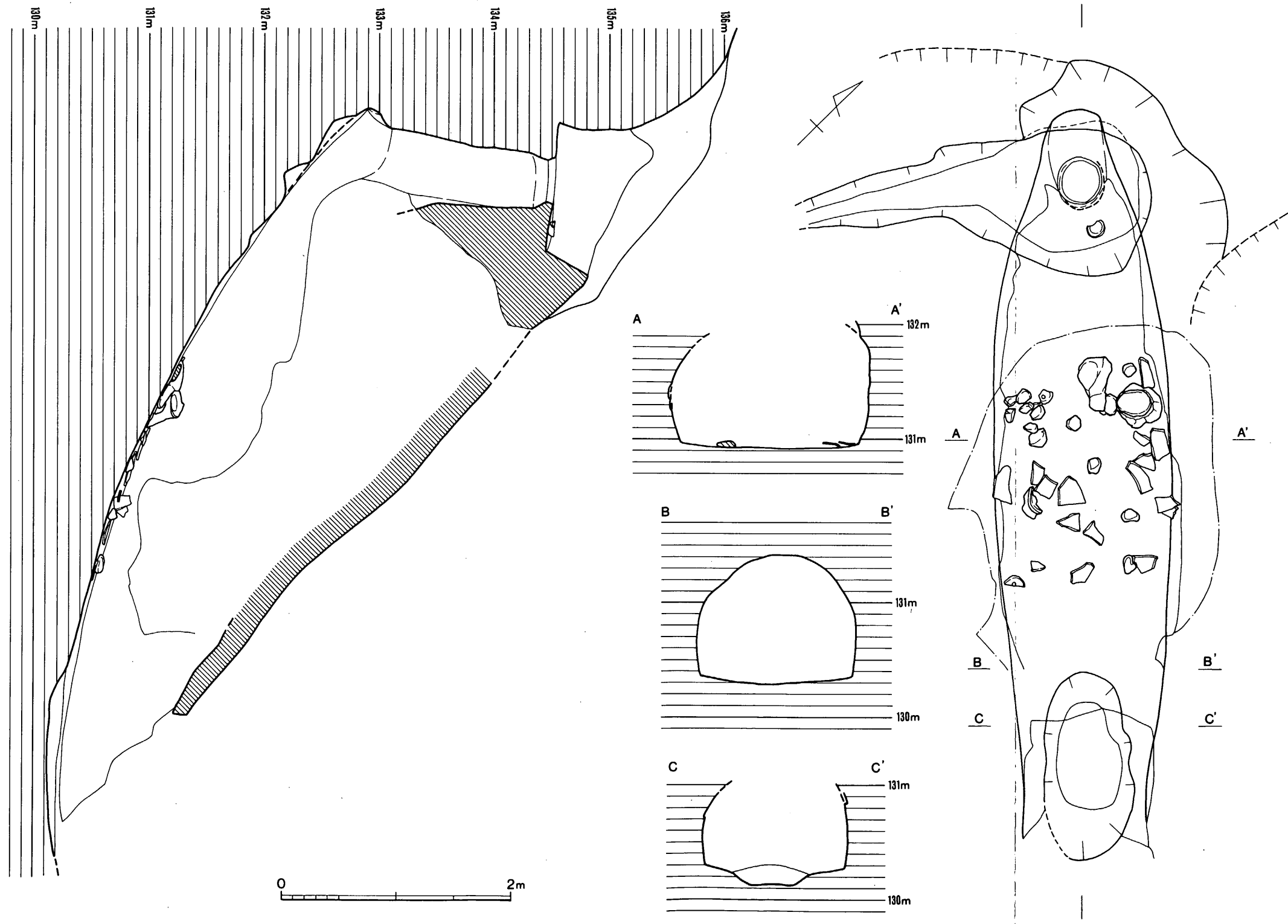
窯体の主軸方位はN-45°-W。主軸上での残存長約6.5m、床面の最大幅1.55m、焚口付近の床面での標高は130.20mを測る。床面の断面観察では、貼床等は認められず、地山層をそのまま床面として利用している。灰原はすでに流失していた。

**燃焼部** 焚口は自然崩壊ですでに流失しているが、残存する燃焼部端の床幅は1.05m、これより傾斜変換部までの主軸線上の長さは1.65mである。また、変換線における床幅は1.3mとなり、徐々に床幅を広げている。床面の中央には1.5×0.8mの長円形舟底状ピットが掘り込まれている。このピットには炭灰土がつまっていた。たちわりを設定し下層の検討を行なったが、作りかえはなかったようである。このことは左右両側壁についても同じであった。舟底状ピット床面から天井までの高さは約1.1mである。

**焼成部** 傾斜変換部から奥壁までの主軸線上の斜距離は5.6m、最大床幅は焼成部中央で1.55mである。床面基底部のプランは、上方に行くにしたがって徐々に幅を広げ、中央付近から、



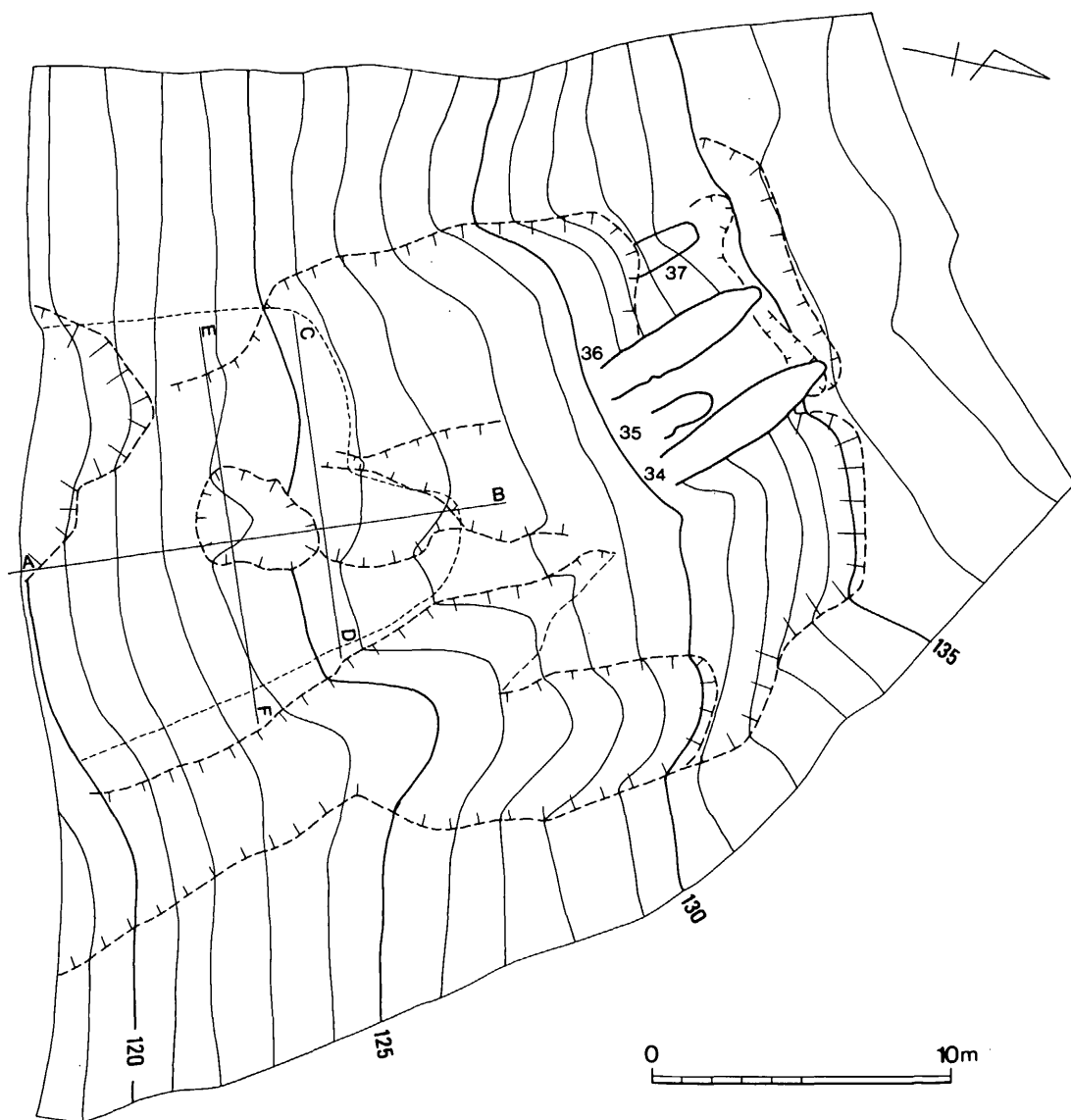
第 83 图 C 地区地形图 (缩尺 1/1,000)



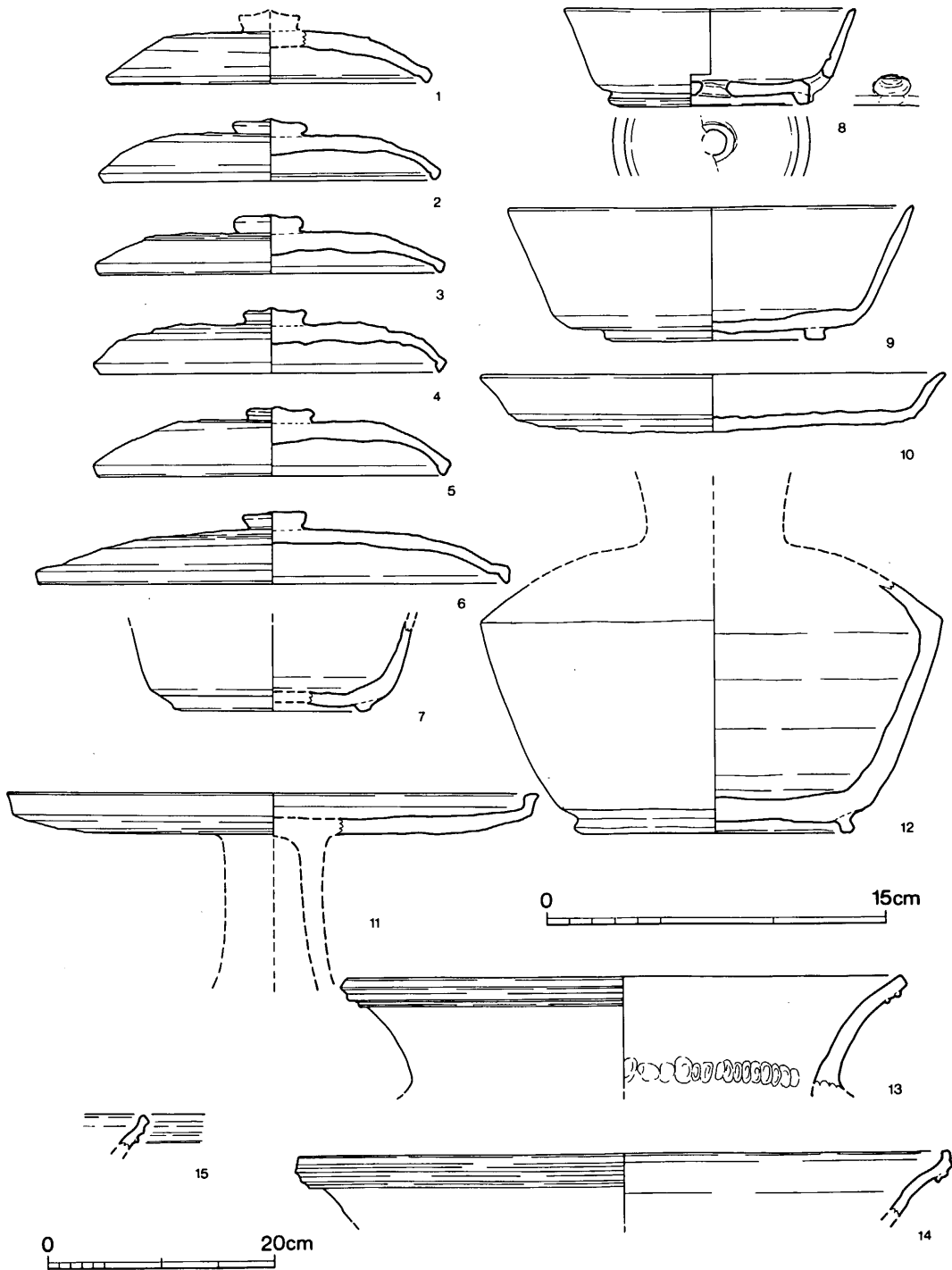
第 85 图 34号窑跡表測图 (縮尺 1/40)

今度は徐々に幅を狭め、奥壁近くで急速に幅を減じている。床面の傾斜角は約 $15^{\circ}$ ～ $45^{\circ}$ と奥壁に進むにつれて急角度になっている。明瞭な変換線はなく弓なりである。傾斜変換部付近での垂直断面はドーム状で、天井まで1.1mの高さである。床面は全て青灰色に還元凝固した地山が一枚で、貼床は認められなかった。側壁も同様である。さらに床面には、円形の土製置台や、須恵器甕、杯蓋片を利用した置台が貼付いて散乱していた。これらの置台は焼成部の中央に集まっていたが、特に規則性は認められなかった。

**煙出し部** 奥壁は、途中で段をつくり、そこから弯曲して床面にほぼ直角に立上り、煙道に



第 84 図 C地区窯跡配置図 (縮尺 1/250)



第 86 图 34号窑出土土器实测图 (缩尺 1/3 · 1/6)

至る。煙道は、径0.5m、長さ約1.7mの円筒形で、約7°程内側に傾いて上方へのびている。先端部分はややすぼまっており、このあたりは赤褐色に酸化していた。おそらく還元作用が上部にまで及ばなかったのであろう。さらに、上面には長軸1.5m、短軸1.4m規模の土壌が掘り込まれている。したがって煙道先端部はこの床面の中央に開口する形になっている。この土壌の左方には長さ1.6m程の排水溝が続いている。なお、煙道先端部のすぐそばに杯が1点置かれていた。

#### 出土遺物（図版50、第86図）

床面から、1～5・8が出土し、特に2・4は他の甕破片といっしょに置台として使用されていたもので、焼成部床面に貼りついていていた。煙出し部上面から7・9・12・15が出土し、9は煙出し口のそばに置かれていたものである。

その他、窯埋土中から6・10・14が、すぐ前面の堆積上から11・13が出土した。

**蓋杯・蓋（1～6）** 1～5は口径14.4～15.7cmの小形のもの、6は20.9cmの大形のものである。いずれも天井が低く、中央に扁平なつまみを付ける。外天井部は全てヘラ削りを加える。

**蓋杯・身（7～9）** 7・8は口径が13cm前後の小形のもの、9は18cmの大形のものである。8には二ヶ所の穿孔が認められるが、あらかじめ焼成前に内外からヘラで開けられている。

**皿（10）** 扁平な底部に短い口縁部をそなえたもので、外底部をヘラで削る。

**高杯（11）** 浅い杯部をそなえた器形で、口縁部は短く直立する。

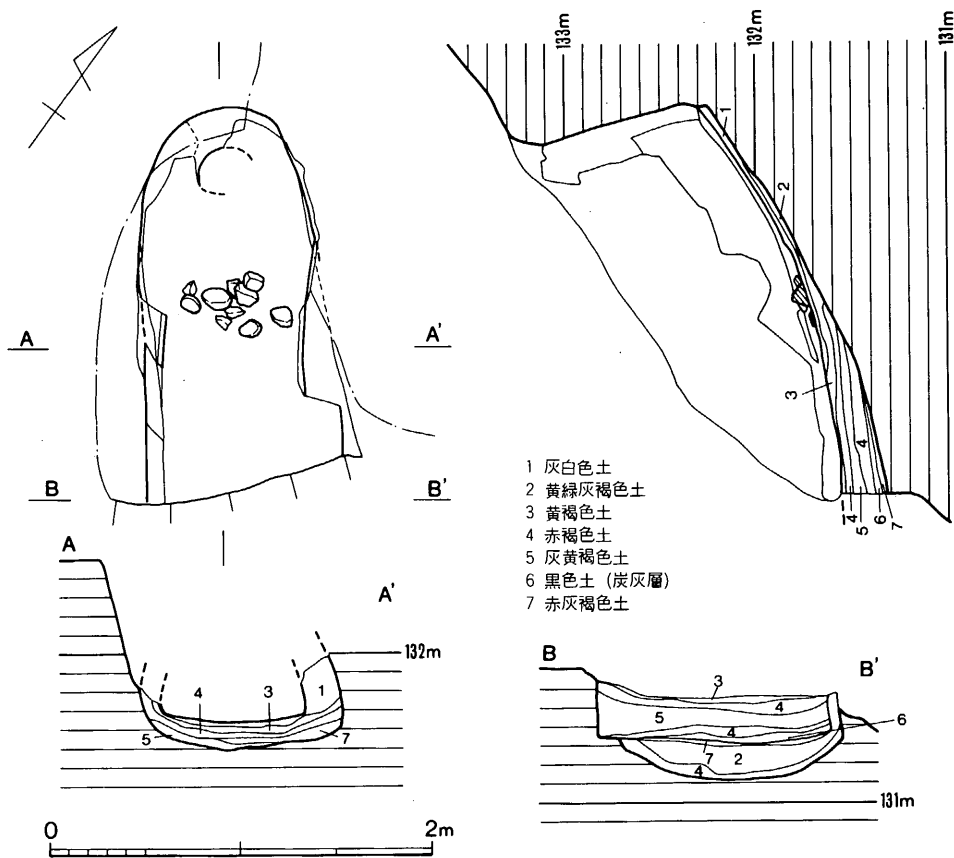
**長頸壺（12）** 口縁部がラップ状に広がる器形のもので肩部以上を欠失する。

**甕（13～15）** 14・15は口径が50cmをこえる大形品。口縁直下に二条ないし三条の凸線が巡る。

#### (3) 35号窯跡（図版43・46、第87図）

丘陵斜面の中腹で等高線で直交し、34号窯の左側に重複するようにして構築された無階無段登窯である。窯体は斜面の地すべり等で崩壊し、大半が失なわれており、遺存状態は良好ではなかった。特に焼成部の下半は崖面を形成するように全て流失していた。また、現地表面から床面まで、奥壁付近で約1.3mを測るが、天井は崩落している。窯体の主軸方位はN-37°-W。主軸上での残存長は2.05m、最大幅1.02m、残存する焼成部端の標高は約131.5mである。

**焼成部** 主軸上の床面残存長は2.05m、最大床幅1.2m、奥壁に向って徐々にすぼまってゆく。床面の傾斜角度は10°～30°と奥に向うにつれ傾斜の度合を強めるが、このまま下方に延長すると燃焼部はほぼ水平であったと考えられる。たちわりAと崖面部分での断面観察では、4枚の貼床と1枚の貼壁が認められ、大きく1度の作りかえが行なわれている。このうち一次窯には炭灰層が残っていることから、それらをほとんど除去せず砂を敷きつめて二次床としていたこ



第 87 図 35号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

とが理解しうる。最終の床面には、奥壁から 1m 程下った位置に土製のものと、須恵器杯片を利用した置台が残存していた。

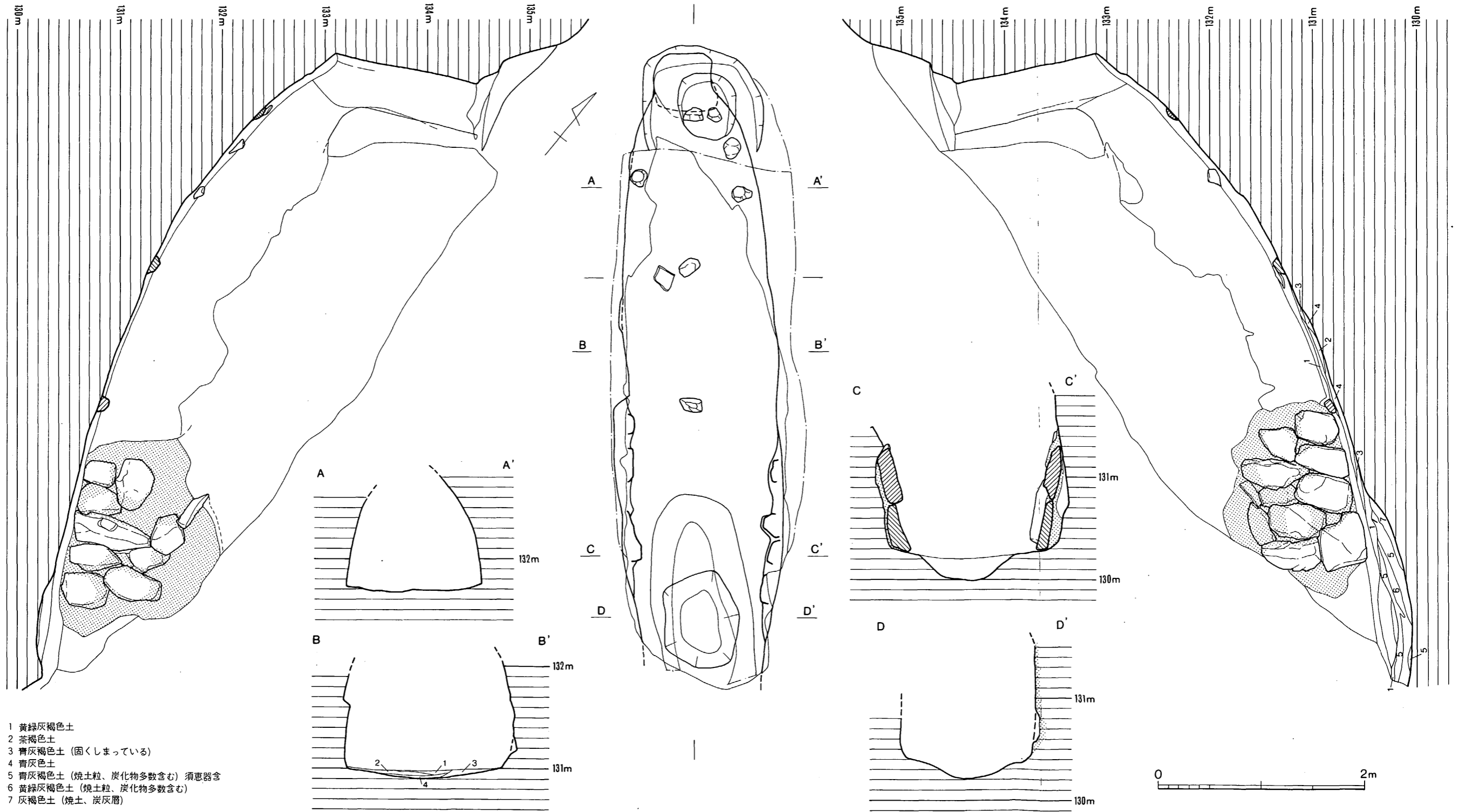
**煙出し部** 奥壁は、焼成部床面からほぼ直角に立ち上り、そのまま煙道へと続く。煙道は半壊しているが、推定径 0.3m の円筒形で 0.8m 程残存していた。約 18° 程斜面下方に傾く。

### 出土遺物

床面より数点の須恵器が出土したがいずれも破片の為図示できなかった。

### (4) 36号窯跡 (図版43・47、第88図)

丘陵斜面の中腹で、等高線に直交し、35号窯と37号窯にはさまれて構築された無階無段登窯である。34号窯と同様に窯本体の残りは良いが、前庭部・灰原は流失していた。発掘開始時点



第 88 図 36号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



で天井はすでに落下し内部は二次堆積土に覆われていた。現地表面から床面は燃烧部で約1.4mの深さである。床面基底部のプランは34号窯と同じくやっこ形を呈する。

窯体の主軸方位はN-39°-W。主軸上での床面残存長は6.8m、最大幅1.6m、焚口付近の標高は129.70mである。窯本体は大きく1度の作り変えを行なう。

**燃烧部** 焚口は流失し崖面を形成している。燃烧部残存端の床幅は1.2m、傾斜変換線までの残存長は一次窯が1m、二次窯が1.8mであり、床幅は二次窯で1.4mを測り、徐々に床幅を広げてゆく。中央の舟底状ピットは一次窯が1.5×1.0mの長円形をなすが、立ち上りが明瞭でない。この上層に0.95×0.7mの二次窯舟底状ピットが存在する。一次窯の舟底状ピットにはたちわりの結果二枚の貼床が認められた。

**焼成部** (図版48・49) 傾斜変換線までの主軸線上の斜距離は一次窯が5.05m、二次窯で5.8m、最大床幅は焼成部中央で1.4mを測る。床面の傾斜角度は17°~50°と変化し、特に奥壁から2m程下った位置から傾斜の度合いが強くなる。床面のたちわりによる検討の結果、貼床が3枚みられる。最下層は地山をそのまま利用し、その上に砂を敷いて床を構築している。天井はすでに崩落しているが、側壁があまり張らないドーム形を想定できる。

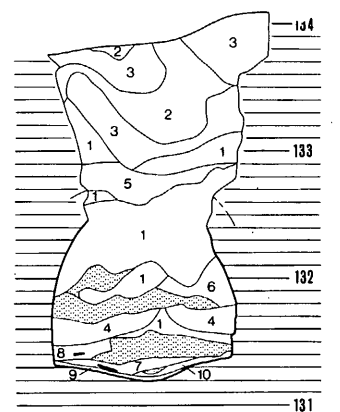
ところで、窯体の作り変えは、両側壁、床面にスサ入り粘土を貼るだけではなく、改修にあたっては、石を組んで強度補強材としている。これは、燃烧部と焼成部の境に1.8mの幅にわたって認められるもので、左側壁に四つ、右側壁に五つの縦長な腰石をすえ、その上に一つないし二つの石を積み上げて側壁の崩壊を防いでいる。そして、仕上げにこの表面をスサ入り粘土で覆うわけだが、その際、須恵器甕の破片をいっしょに塗り込んでいる。このように石組を並べて補強する方法は、牛頭窯跡群では他に数例存在する。

最終床面には土製のものと須恵器甕の破片を使った置台が密着している。奥壁寄りでは、右側壁から15cm離れて小ぶりの置台が3個縦に並んでいる。その間隔は約40cmであった。

**煙出し部** 奥壁は、焼成部床面からほぼ直角に立ち上り、そのまま煙道へと続く。煙道は0.6×0.5mの楕円形のプランで、約11°内傾する。先端部まで1.4mの長さであった。

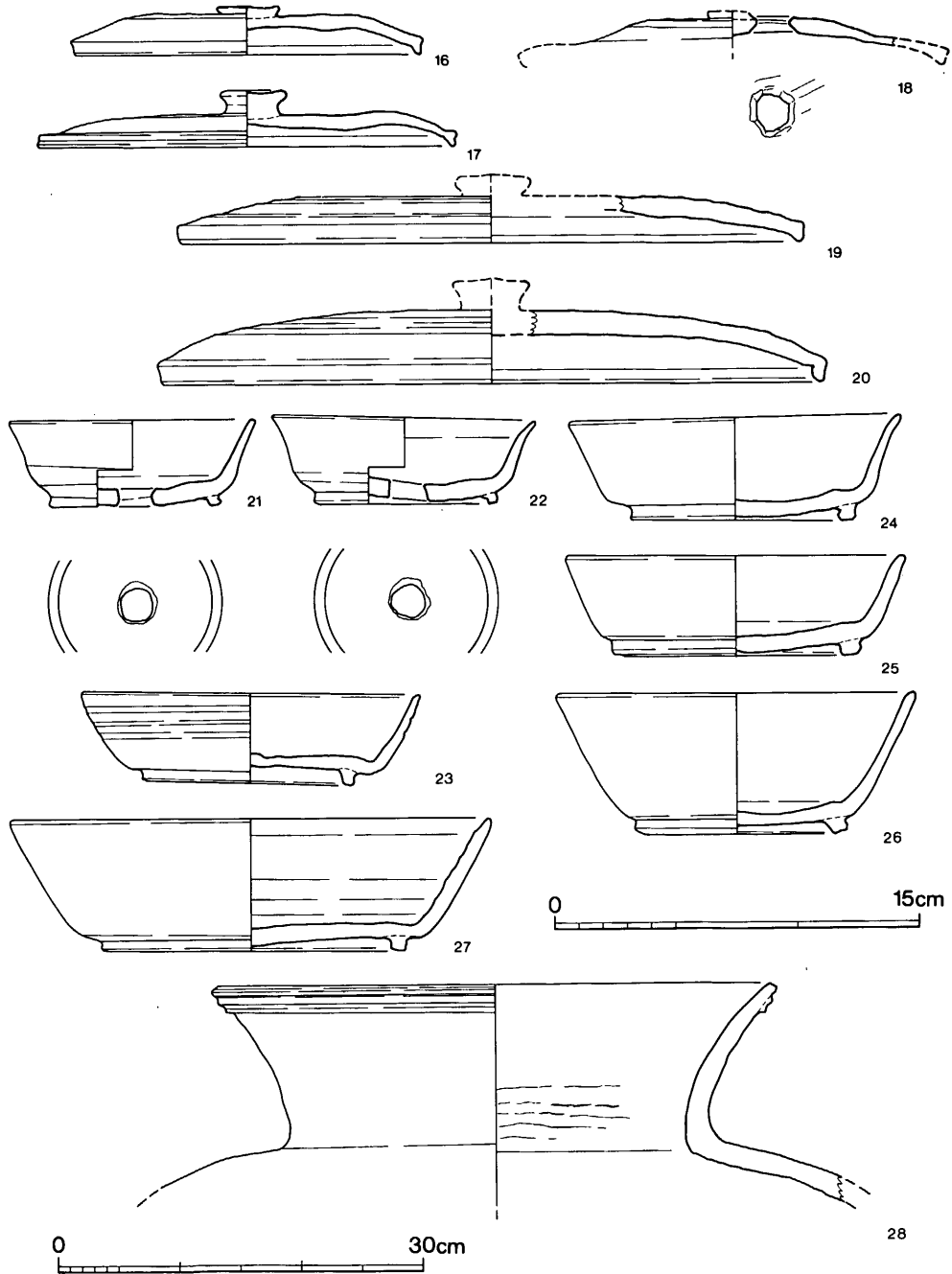
#### 出土遺物 (図版50・51、第90図)

床面からは、甕の胴部破片が1点出土したのみであった。図示した土器は全て、窯埋土中より出土したものである。

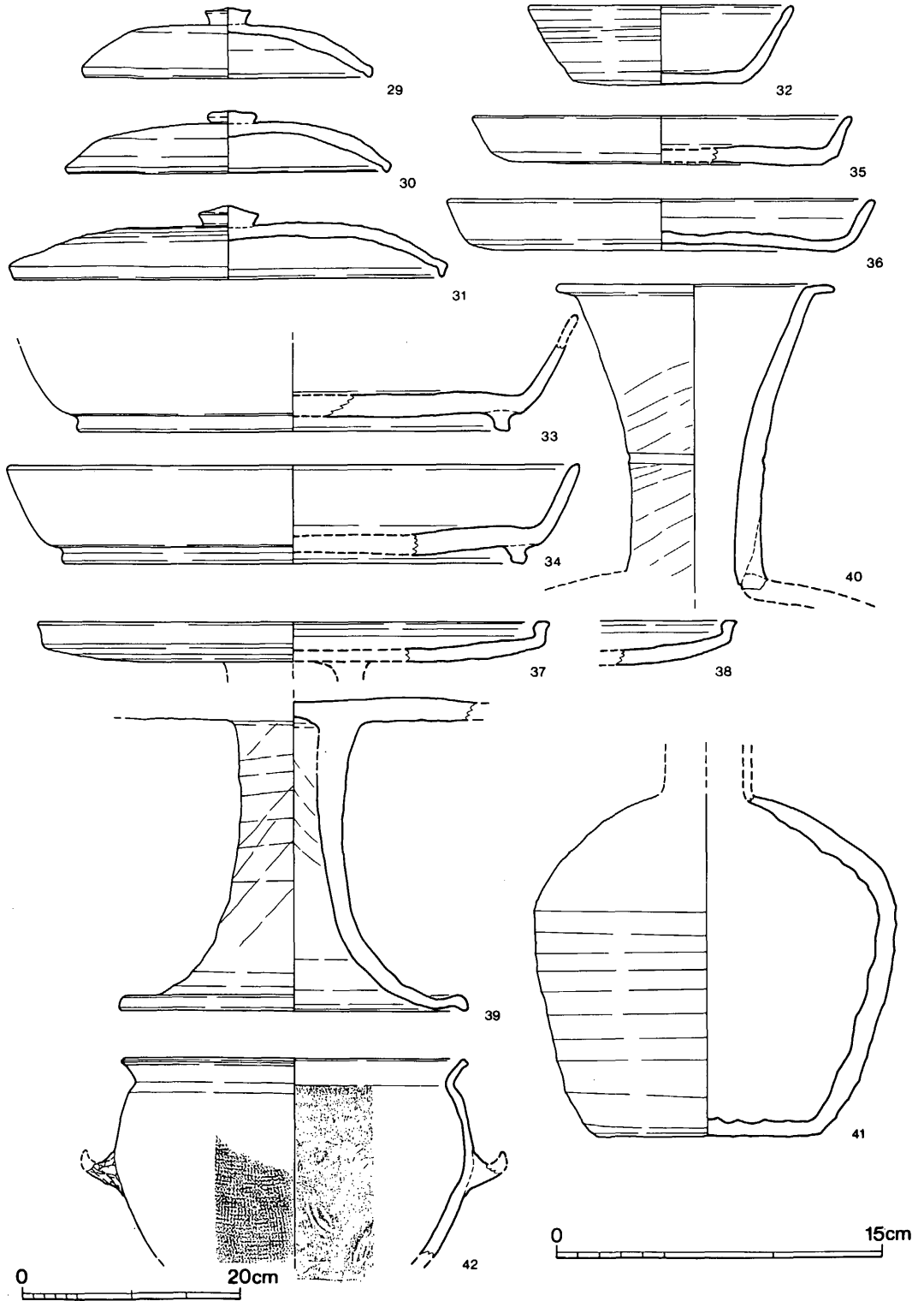


第 89 図 36号窯土層図 (縮尺 1/60)

蓋杯・蓋 (16~20) 16・17は口径14.4cm、17.3cmの小形のもので、19・20は口径が25cmをこえる大形のものである。いずれも天井部は低くおさえられ、扁平なつまみをつける。小形の外天井部はヘラ切りのままである。18には両面から穿孔をうけ、外表には焼成時の砂が付着する。



第 90 図 36号窯出土土器実測図 (縮尺 1/3・1/6)



第 91 図 36号窯前面堆積土出土土器実測図 (縮尺 1/3・1/6)

**蓋杯・身 (21~27)** 21・22は口径10.2・10.5cmの小形のもの23~26は13.7~14.8cmの中形のもの、27は19.8cmの大形のものである。いずれも高台が付くが、形状・帯付位置は大きく二つに分けられる。すなわち、21・22・26は底端部近くに貼付し、高台端部の接地面が傾斜するが、他は底端部からやや離れた位置に貼付し、接地面は水平である。外底部は21・22を除きヘラ切りのままである。21・22は胎土・色調・手法が同一で、また底部中央に穿孔している。興味深いのは、どちらも穿孔箇所を通して分割する様に縦割れしていることである。

**甕 (28)** 埋土中から出土した以外に灰原から出土した破片が接合し、口縁部が全周した資料である。欠失部分が大形の部類に入るものである。

#### 36号窯前面堆積土 (図版51、第91図)

ここで出土したものは主に36号窯前面崩壊土より出土したものであるが、近接して位置する37号窯のそれとを識別して取り上げるのは困難であった。したがって、ここではそれらを一括して36号窯前面堆積土出土遺物として取り扱う。杯蓋・杯身・皿・高杯・長頸壺・把手付甕の器種が認められた。

**蓋杯・蓋 (29~31)** 29・30は口径が13.3cm・15cmの中形のもので31は19.8cmの大形のものである。いずれも縁部に明瞭な屈曲が認められない。29・30の外天井部はヘラ切りのまま、31は回転ヘラ削りを加える。29の口縁端部には、杯身の口縁端部がさかさまに溶着し、さらに、内天井部にも杯身高台端部がさかさまに溶着しており、身と身の間に蓋を裏返しにふせて重ね焼きしたことをうかがうことができる。

**蓋杯・身 (32)** 無高台のもので、外底部はヘラ切りのままである。

**皿 (33~36)** 33・34は口径25cmをこえ底部が深く底端部近くに高台をそなえる。35・36は無高台のもので底部が浅い形態である。外底部は全てヘラ削り調整をおこなう。

**高杯 (37~39)** 杯部が浅く、大きく広がる裾の端部が杯蓋と同様に屈曲して下方に突出する形態の高杯である。

**長頸壺 (40)** 肩が張り平底の底部に高台を貼付ける形態のものであろう。

**壺 (41)** 口頸部がそのまま垂直にのび口縁部が折れて水平に開く形態のものと考えられる。

**甕 (42)** 相対する二方の胴部最大径部分に把手をつけたものである。把手は幅が狭く、上方に屈曲する。

#### (5) 37号窯跡 (図版43、第92図)

丘陵斜面中腹で等高線に直交して位置する。4基の窯の最も西側で、36号窯とは約1.8mはなれて構築された地下式無階無段の登窯である。焼成部以下を欠失しており、遺存状態は良くない。窯体の残存長3.0m、最大幅1.1mを測る。主軸方位はN-33°-Wを示す。

窯体の作りかえは、残存部分では認められなかった。

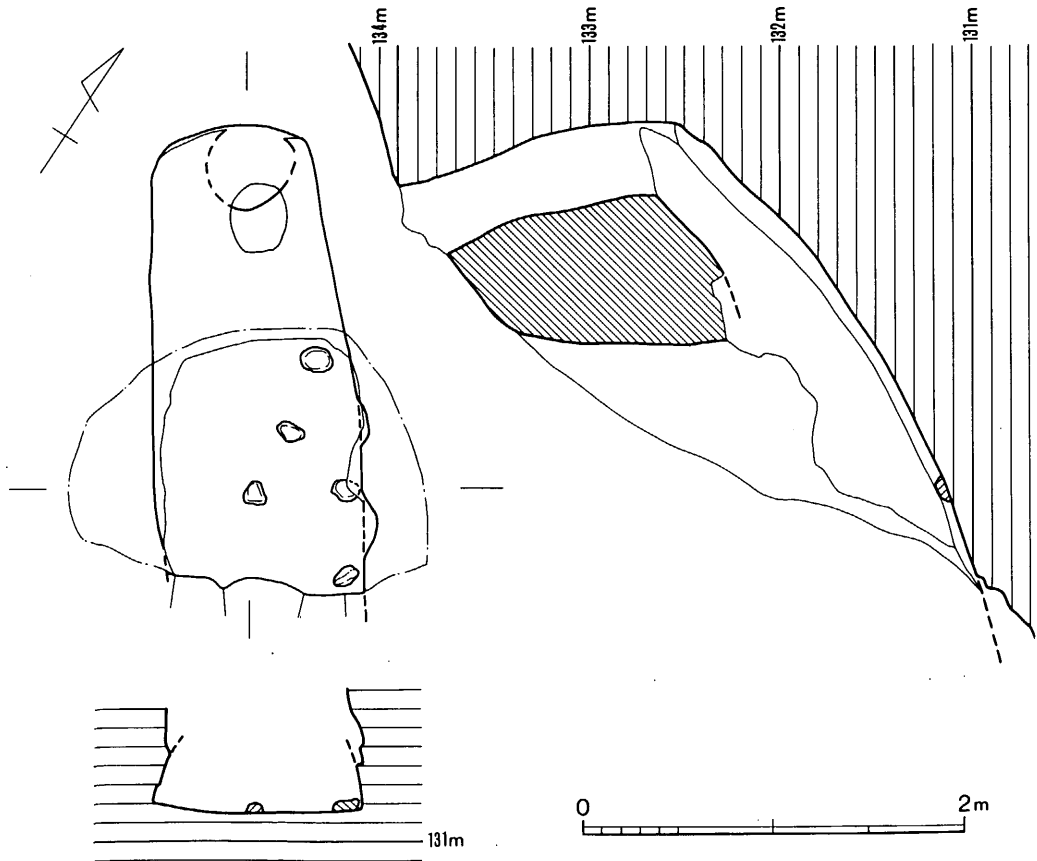
**焼成部** 床面の残存長は主軸線上で3.0m、床幅は残存部端で1.1mを測る。床面基底部のプランは奥壁に向かって少しずぼまる逆U字形を呈している。床面の傾斜角度は残存する部分で $23^{\circ}$ ～ $45^{\circ}$ と内弯して急激に立ち上る。天井はほとんどが崩落しており、煙道が取りつく付近でかろうじて遺存するにすぎない。たちわりの結果、貼床はなされておらず、地山層をそのまま利用している。この床面には6個の小ぶりの置台が密着していたが他に遺物は検出していない。

**煙出し部** 奥壁からそのまま煙道へと続く。焼成部床面と奥壁との傾斜角は $130^{\circ}$ で、0.2mの立ち上りをはかる。煙道は下端径0.4m、上端は $0.35 \times 0.3$ mの長円形である。傾斜角度は $17^{\circ}$ 上半は還元せず赤色に焼けていた。

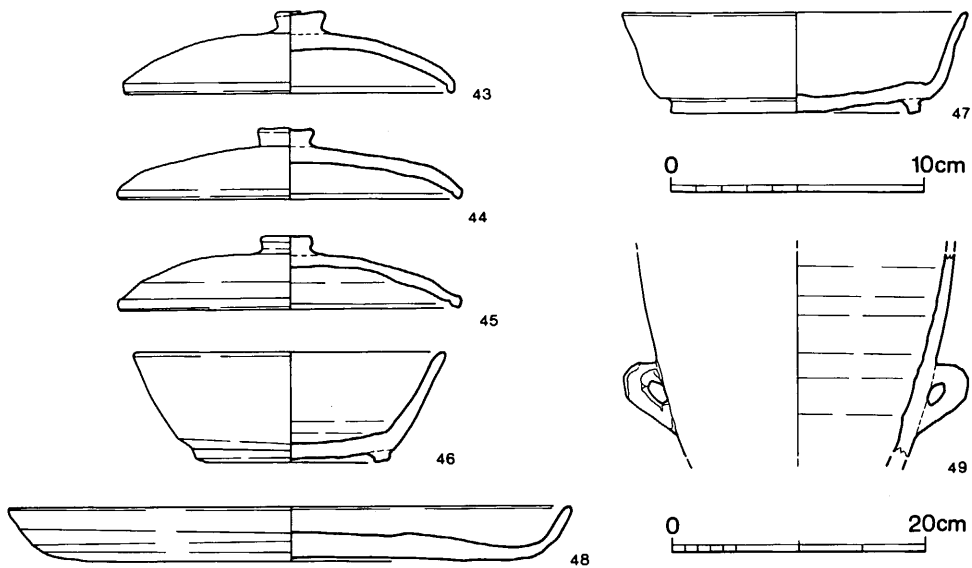
### 出土遺物 (図版51、第93図)

全て窯内埋土中より出土したものである。杯蓋・杯身・皿・甕の器種が出土した。

**蓋杯・蓋 (43～45)** いずれも口径 $13.2 \sim 13.7$ cmの中形品であり、天井部と体部の境は不明



第 92 図 37号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第 93 図 37号窯出土土器実測図 (縮尺 1/3・1/6)

瞭である。天井部はヘラ切りのままである。45には体部中位に重ね焼の痕跡が認められる。

**蓋杯・身 (46・47)** いずれも高台を有す。46は47にくらべ器肉が厚く、高台は底端部に近づいて貼付けている。

**皿 (48)** 広い平らな底部に斜めに短く立ち上る口縁部をそなえたもの。外底部は丁寧な回転ヘラ削り。

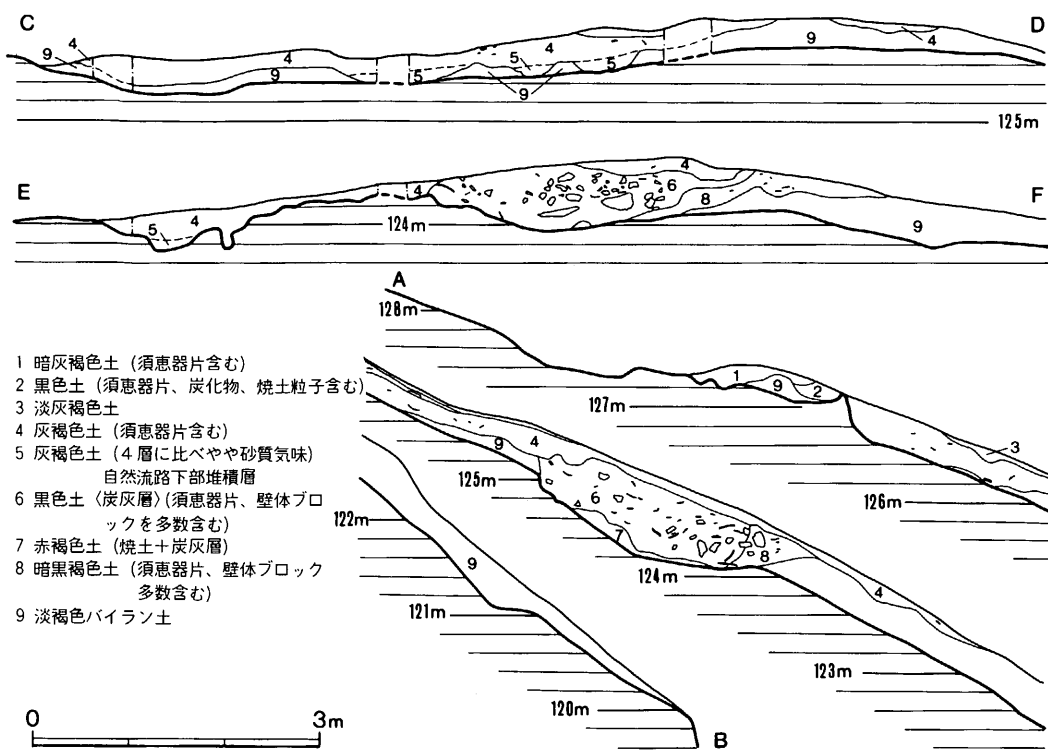
**鉢 (49)** 体部の上方ではなくやや下方に耳状の把手をつける。おそらく双耳であろう。

#### (6) 灰原 (図版44、第94図)

灰原は焚口から離れた丘陵斜面の下方で広範囲に認められた。しかしながら、窯本体とは連続せず大部分が流出しており、窯の特定は不可能であった。黒灰層も断続的ではあるが、一定の広がりをもち、焚口から斜距離で約12m程下った位置に最も堆積しているところがあった。東西幅約4m、南北幅約2.5mの規模をもち、縦穴状の浅い落ち込みに溜っている。黒灰層の厚さは約0.7m程である。この黒灰層には焼土・窯壁残滓、土器等が含まれているが、土器の量は他と比較するとそれ程多くない。

灰原の土層は、黒灰土以外に土器、炭化物等を含む灰褐色土からなるが、永年の自然流出等により、土層の逆転が生じており、層位的な意味づけは出来ないと考えられる。

#### 出土遺物 (図版52~54、第95~100図)



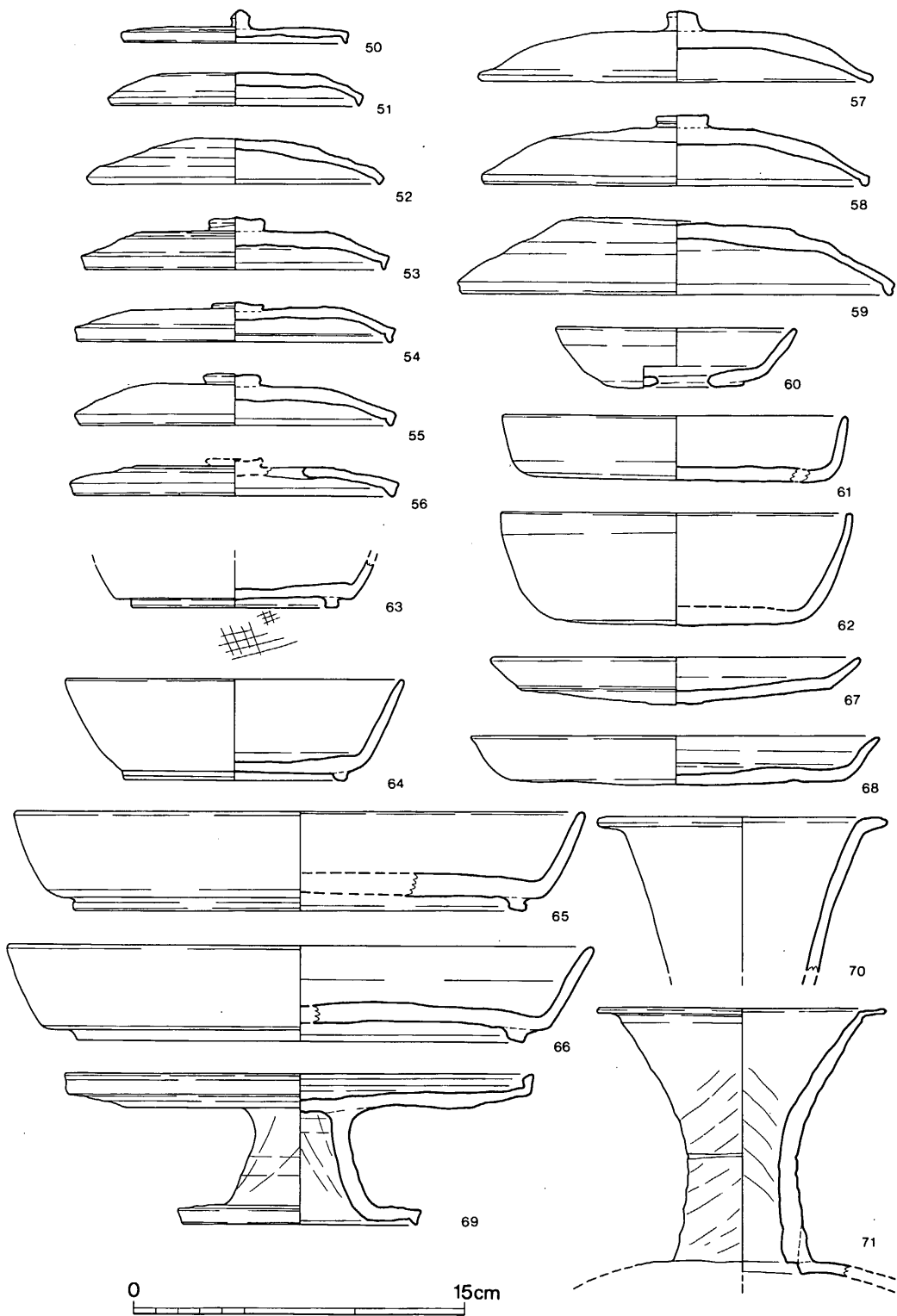
第 94 図 灰原土層図 (縮尺 1/80)

黒灰土・灰褐色土等から出土しているが、土器はこれら土層をこえて接合しており、また遺構の項でも記したように層位的な意味が認められないので、ここでは一括して取り扱う。出土した土器は、杯蓋・杯身・皿・高杯・長頸壺・短頸壺・鉢・甕の各須恵器。皿・甕の土師器が出土している。

#### 須恵器

**蓋杯・蓋 (50~59)** 口径に大きく大中小の三種類があり、それぞれ10.1cm、11.4cmの50・51、13.4~14.7cmの52~56。16.9~19.8cmの57~59に分けられる。天井部は口径の大きいものを除いて比較的扁平となっている。口縁は屈曲する側面が内弯するものや、52・57の様にわずかに突出する程度のものが認められる。また天井部のつまみにはバラエティーがあるが、つまみを付さないものも見られる。外天井部は50・56のみ回転ヘラ削りを施し52・54・55・58・59がヘラ切り未調整。その他は不明。

**蓋杯・身 (60~64)** 各種の器形が出土している。外底部は61・62が回転ヘラ削り調整、その他は未調整。60は底部に穿孔を施し、63は板状痕が認められる。このうち61は器形と調整が短頸壺の蓋と良く以ているが、通有の蓋が口縁部を平坦に整えているのに比べてそのまま丸め



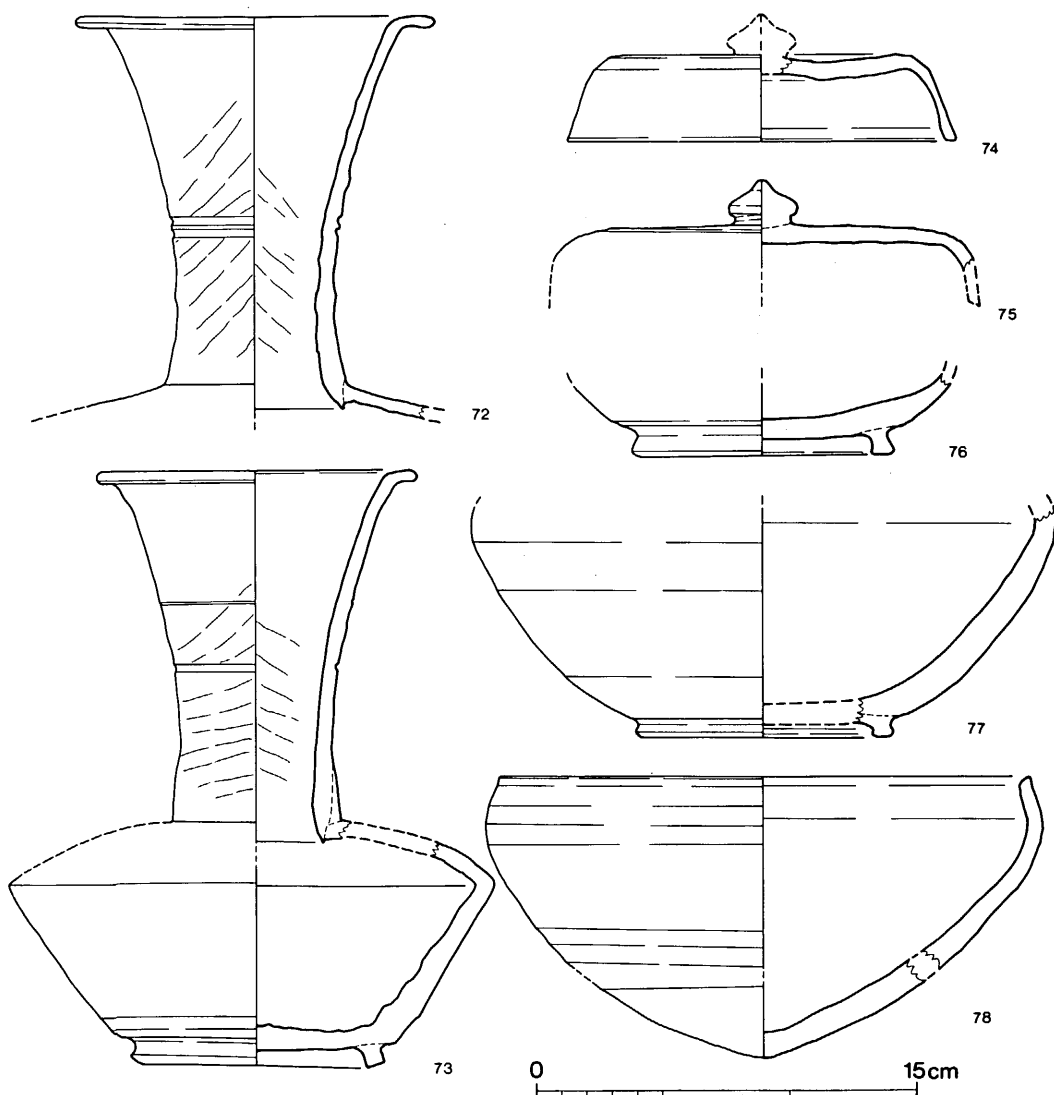
第 95 图 灰原出土土器実测图① (縮尺 1/3)



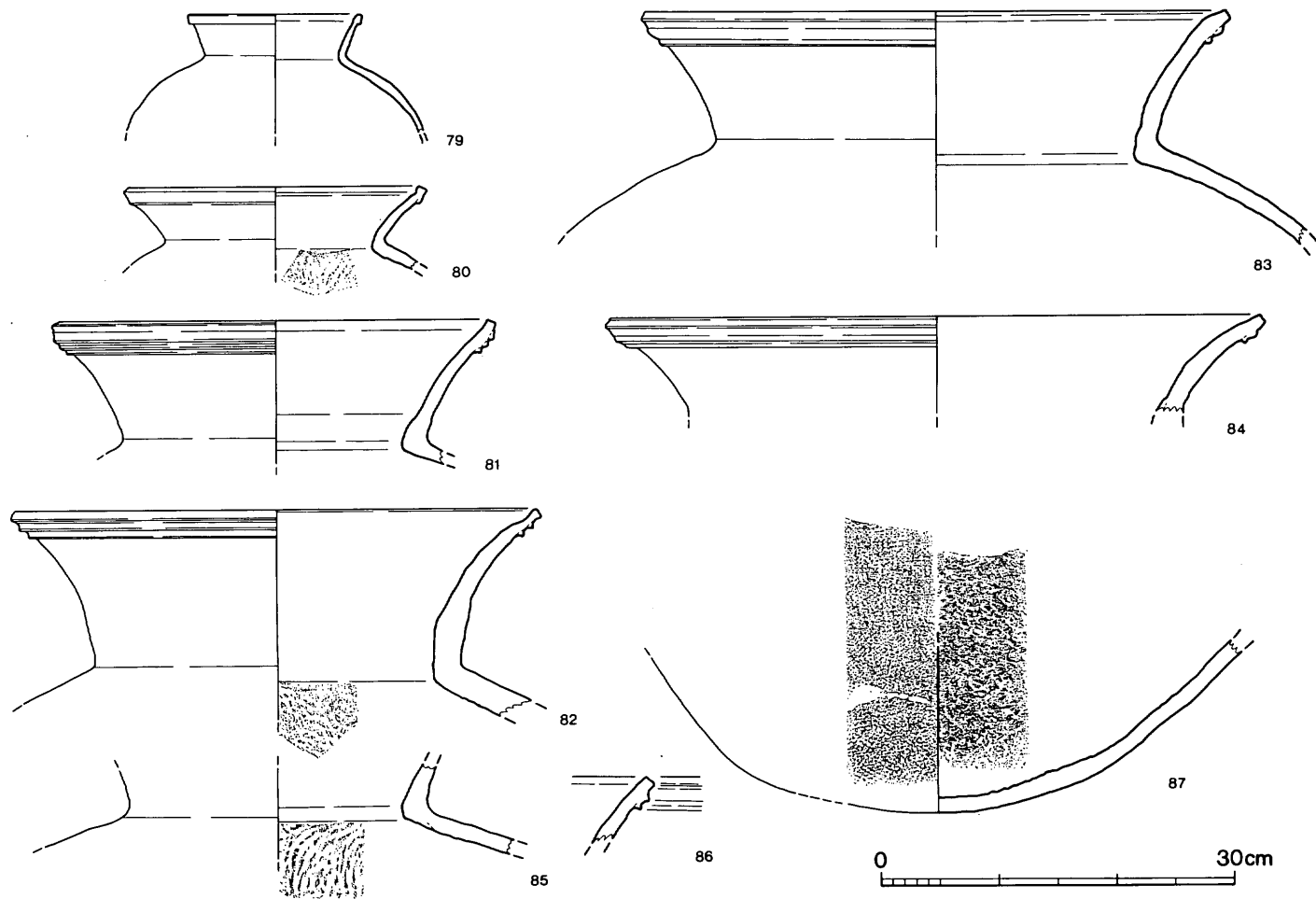
ていることから杯と考えた。62は深目のもので、椀形をなしている。この内側にはガラス質に溶解した粘土が多量に隔着していた。その量とあり方からすると、焼成中に窯壁が落下し内部に入り込んだとするには不自然さがあり、用途は不明だが人為的な行為であったかもしれない。

**皿 (65~68)** 口径が26cm以上で底部が深く、有高台のもの (65・66) と口径が17cm前後で底部が浅く、無高台のもの (67・68) の二種がある。前者の外底部は回転ヘラ削りを施すが、後者は未調整である。

**高杯 (69)** 短い脚部の上に浅い皿状の杯部がのる。口縁端部は内傾し、脚端部は、杯蓋同様下方へ突出している。



第 96 図 灰原出土土器実測図② (縮尺 1/3)



第 97 图 灰原出土土器実測图③ (縮尺 1/6)

**長頸壺** (70~73) 口径部の器高が体部の器高をはかるかに越えるもので、口径は頸基部径より大きい。底部にはハの字形の低い高台を持つ。口頸部に一条ないし二条の沈線を巡らす。

**短頸壺** (74~77) いわゆる葉壺形と呼称される壺で、74・75はそれに被さる蓋である。天井部は高く水平で中央に比較的高い擬宝珠様のつまみがつく。天井部端からやや開き気味に下りる口縁部の端部は平坦にカットしている。口頸部を欠失するが体部下半は丸味を帯び、底部に比較的短くハの字形の高台を付す。

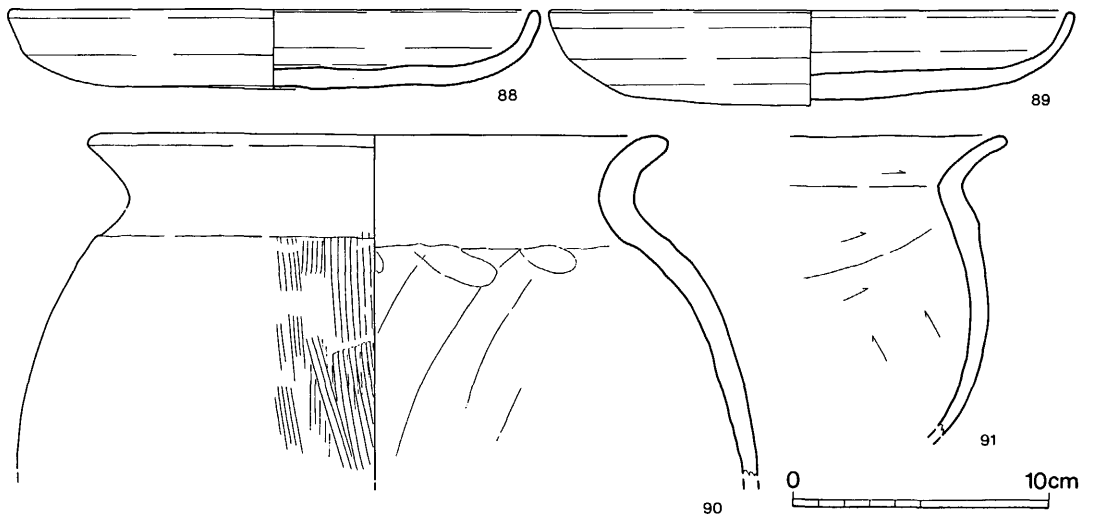
**鉢** (78) 口径部が短く外反し、体部が底部にかけてすぼまる鉄鉢形である。

**甕** (79~87) 量的に杯に次いで多いのがこの器種である。全形を知りえないが、口径から大きく三種に分けられる。小形の79、中形の80、大形の81~84である。量的に大形品が目立つ。小形品は口頸部が直線的に短く外反し、端部が肥厚する。中形品は口頸部がやや内弯気味に外反し、口径部が内側に屈曲し、内面に強い稜をもつ。小形品同様に外下方へ肥厚する。大形品の口頸部は内弯しつつ外上方へのびる。口縁部が内側へやや屈曲するものとしないものがある。いずれも外端部下面に二条ないし三条の三角凸帯を巡らす。外面の叩き痕は正位の正格子と平行条線がある。

土師器 (第98図)

**皿** (88・89) 口径は20.6・21cmの同形の皿で、体部と底部の境は丸味を帯びる。ともに外底部は未調整。

**甕** (90・91) 口縁部が体部にくらべ器肉が厚く、ゆるやかに外反するものと、器肉の厚さはそのまま、内側に強い稜の巡るものがある。90の外表には煤が付着しており工人の生活用具として使用されていたことをうかがわせる。

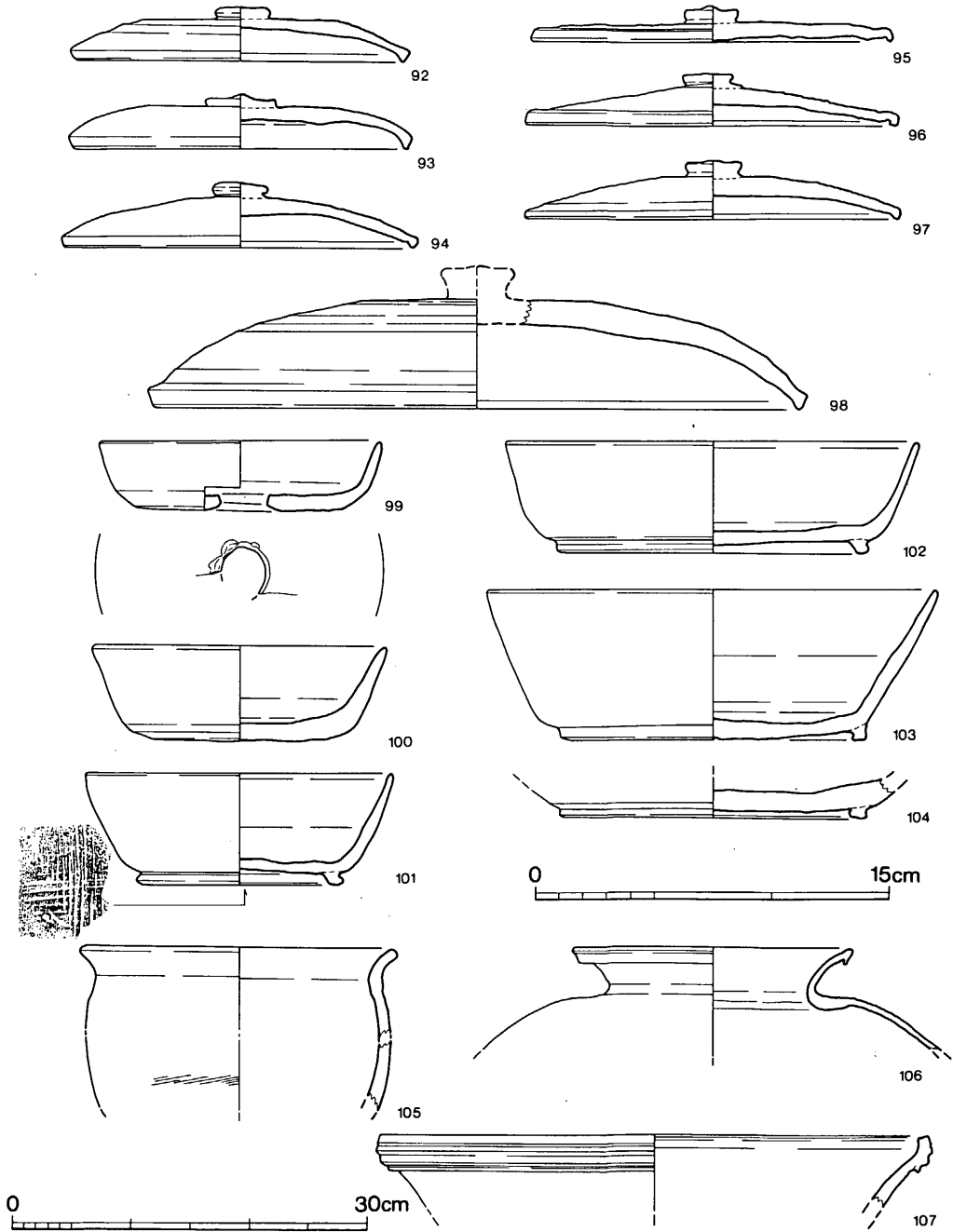


第 98 図 灰原出土土器実測図④ (縮尺 1/3)

表土出土土器（図版53・54、第99・100図）

表土剥ぎの段階に出土したものと調査前に沢付近で採集したものを含む。器種には杯蓋・身、短頸壺、甕がある。

蓋杯・蓋（92～98） 口径が14.0～15.9cmの中形（92～97）と27.6cmの大形のもの（98）の



第99図 灰原出土土器実測図⑤（縮尺 1/3・1/6）

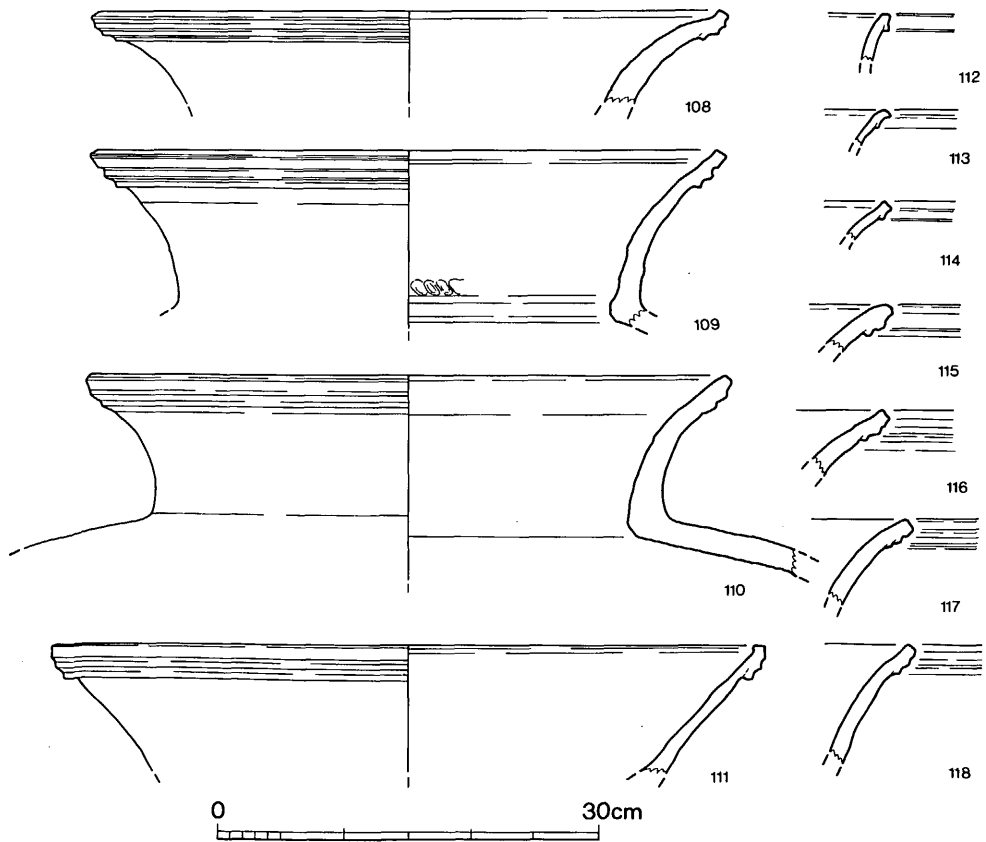
二種が出土。中形のものは、いずれも天井部は低く、扁平なつまみを付す。特に94は内天井部が接地する程低い。98の外天井部に $\frac{1}{4}$ 回転ヘラ削りを施す他は、全て未調整のままである。

**蓋杯・身 (99~103)** 口径12~13cm前後の99~101と、17.6~19.1cmの102・103の二種に分けられる。高台は底端部近くでハの字形に貼り付くものと、底端部にそって貼り付けたものがある。後者の体部は直線的にのびている。高台のつかないものは体部と底部の境が不明瞭であり、特に底部に穿孔のある99は丸味を帯びている。99~101の外底部は未調整のままで、103は回転ヘラ削りを施す。102は磨滅し不明。

**壺 (104)** 壺形の底部で、高台は低く、ハの字に開かない。

**甕 (105~118)** 112~118は口縁部破片の資料である為、口径不明だが、器肉の厚さから大きく分けると、小形品は112~114、中形は105・106、大形は107~111・118の三種になる。

小形甕の口縁部は、外側に肥厚し、下方に一条の凸線を巡らすものもある。中形甕は105の様に、土師器の甕を模したような器形である。106は体部の肩が張り、口縁部外側に下向きの凸線を巡らしている。大形の甕は、口縁部だけについていえば、端部付近を内側に屈曲させるもの、そのまま終るもの、外端部を肥厚させるものが認められ、いずれも二条ないし三条の凸線を外



第100図 灰原出土土器実測図⑥ (縮尺 1/6) G地区

口縁部に巡らす。また、口頸部は、ほとんど内湾しながら外反するが、ありま内湾の度合いが強いものもある。

## (7) 小 結

C地区窯跡群の窯体と遺物について以下かんたんにまとめてみる。

窯体は全て丘陵南斜面の等高線に直交して構築された無階無段の登窯で、微弱で吸水性に富む花崗岩パイラン土の地山を掘り貫いた地下式である。焼成部付近に最大幅が認められ、平面形はやや胴張りである。煙出し部は一孔のみである。

また、燃焼部と焼成部の境目は床面に掘り込まれた舟底状のピット上端をその境とみなすことができるが、36号窯では窯の改修に際し当初の位置より内側に移動している。しかしながら後述する側壁の石組はその境目に対応していない。したがって燃焼部と焼成部の明確な区別はつけることができないようである。

焼成部の床面は基本的には地山をそのまま利用しているが、35号窯の様に数回の貼り変えを行なったものも存在する。いずれの窯跡からも床面に貼りついた状態で置台が出土したが、これらは粘土塊、甕破片の再利用あるいは、杯の蓋や底部に穿孔したものを混在して使用している。それらは、窯づめに際して各器種ごとに用途が決められていたのかもしれないが、今回は具体的に復原するにはいたらなかった。

以上挙げたいいくつかの特徴はC地区4基に共通する要素であるが、36号窯跡に認められた燃焼部と焼成部の側壁の石組は特異な構築の一例として興味深い。現在のところ壁体側面に石材を使用した窯が牛頸古窯跡群中に数例みられるが石を積み上げず、一列に並べられているものが多い。技術的な関連性は認められるところで、牛頸古窯跡群の窯構造の変遷を知るうえで注目すべき事例といえよう。

今回出土した土器量は、他の窯跡調査例にくらべると比較的少量であった。これは斜面が崩落し、遺構の残存状態が良好でなかった点に起因する。その為下方で検出した灰原層も、どの窯に対応するのか特定できなかった。その上、土器破片も、窯埋土出土の土器と、灰原上下層の土器が、接合することが判明した為出土遺構別に土器は報告したが、良好な一括資料を得るには至っていない。

C地区全体を通して出土した器種を列記すると、蓋杯・杯身・皿・高杯・鉢・長頸壺・短頸壺・甕である。これらの詳細な検討は次回にゆずることとするが、今回甕が多量に出土したことは、注目すべき点である。

最後に、C地区の操業時期であるが、出土した土器は杯にみられるように数型式含んでいる。主体を占めるものは8世紀半ば～後半である。

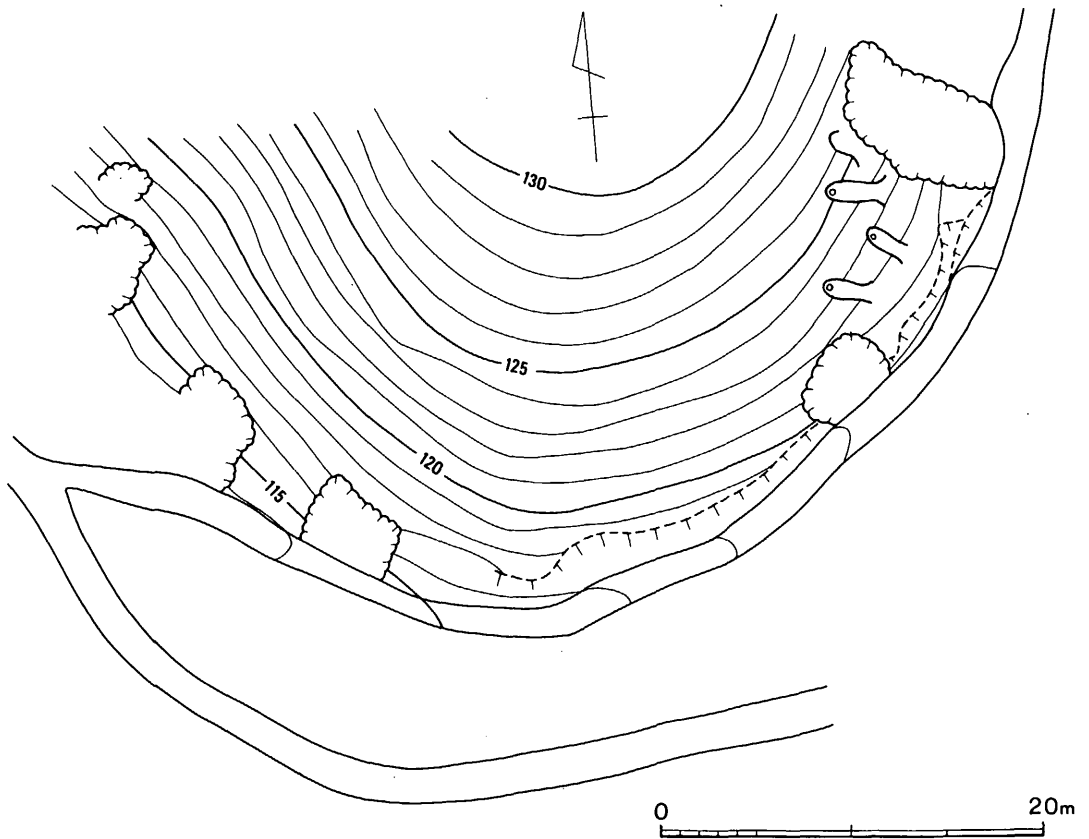
(赤司善彦)

## 6 G地区（道ノ下窯跡群）の調査

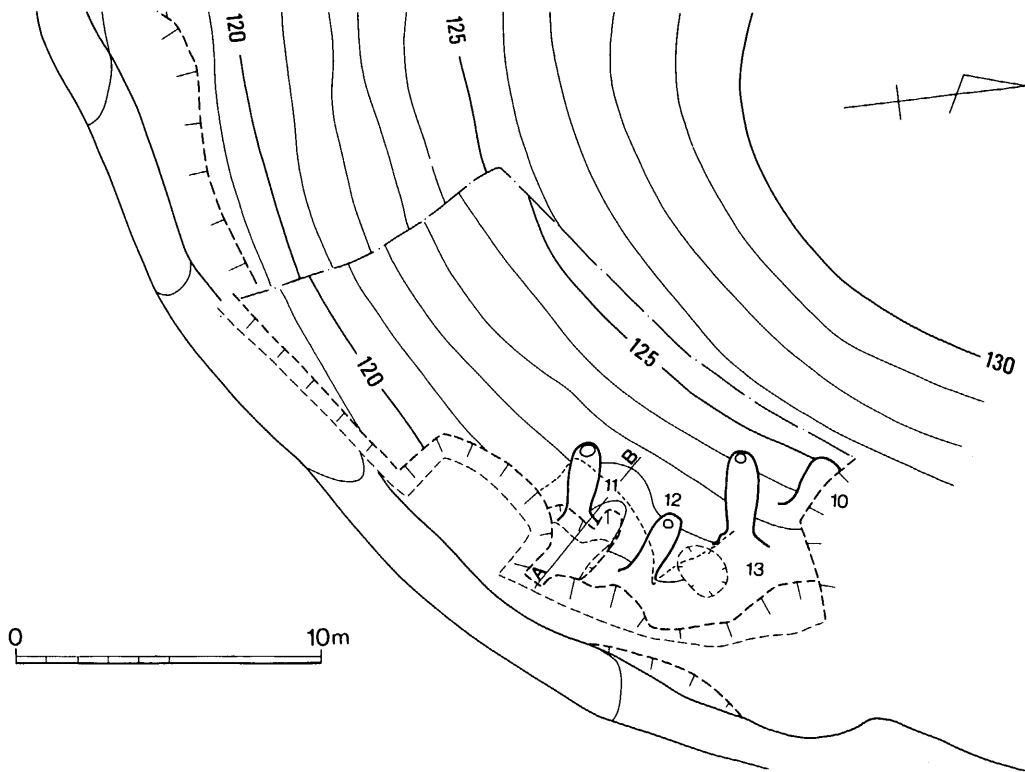
### (1) 調査の概要（図版55・56、第101・102図）

道ノ下窯跡群は、ヤツデ状にのびた牛頸の小丘陵間の裾部を縫う様に、牛頸神社から南北に狭長に延びた谷筋の道路を緩やかに南へ登り詰めた大野貯水池の堰堤近くに位置している。当該窯跡は、この谷筋の幹線道路から枝わかれして、更に東方へ小谷を250m程入った南傾する丘陵の東側裾部から斜面下部にかけて構築されたものである。窯跡群は南へ突き出した丘陵のやや東側で、標高126m～121m間で、等高線に直交する形で造られており、標高119mの丘陵裾部とは2～7mの比高であり比較的低所に築造されている。

灰原等の検出により窯跡の有無を探るため、丘陵裾部に幅約4m程のはち巻き状のトレンチを設定したが他の場所からは何ら検出されず、G地区内では当該部分にだけしか窯跡は所在しないことが判明した。



第101図 G地区地形図（縮尺 1/400）



第102図 G地区窯跡配置図（縮尺 1/250）

(2) 10号窯跡（図版57、第103図）

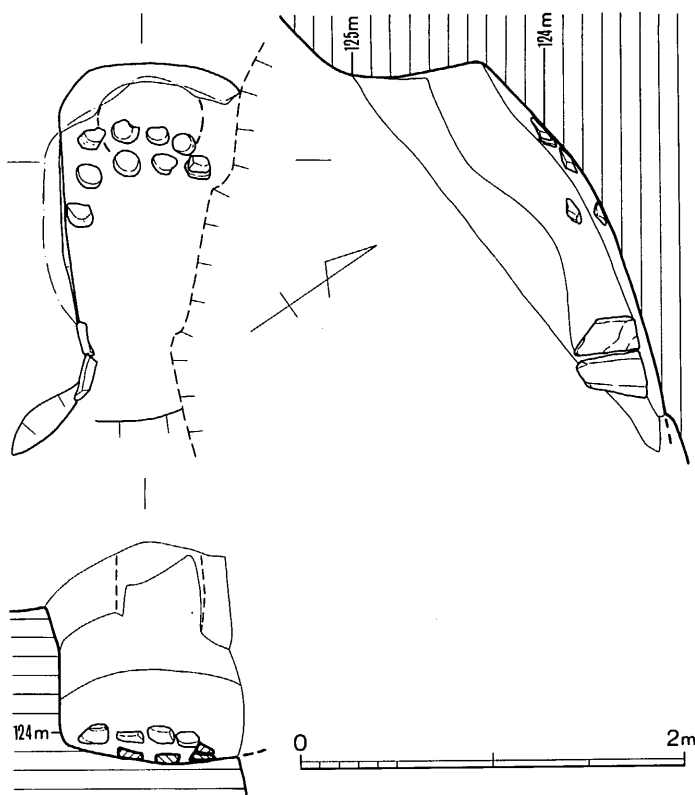
丘陵の斜面下部近くに位置したもので、4基所在する中では最も北側でしかも、高所にある。当該窯跡は、現況での等高線124～126m間に納まるもので窯はこの等高線に直交して構築されている。現地表面から床面までの深さは、焚口部付近で約0.6m、奥壁際で約1.7mを測る。本窯跡の東方には幅5m程の採土目的と思われる陥没があり、窯本体も東壁部分が破壊されている。窯は花崗岩バイラン土を割り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の平面形態は焚口部が最も狭く、焼成部の奥壁近くが最も幅の広い羽子板形を呈する。

窯体の主軸方位はN-56°-Wであり、焚口は南東に向く。主軸上での全長は2.3m、現存する床面の最大幅0.95mを測る。床面には複数回操作による嵩上げや窯壁の修復等見られず、短期間の操作であったと思われる。灰原は確認されなかったが、本窯跡前面で掻き出しによるとと思われる土器が若干検出された。

**燃焼部** 燃焼部は右壁を欠損している。残存する左壁は、高さ35cm、幅15～25cm、厚さ5～8cm程の花崗岩の板材を2枚並べて立て、壁の補強として用いている。幅は焚口部が最も狭く、



現存幅0.4mである。床面のレベルは一様に緩やかに上昇しており、燃烧部と烧成部の境となる変換線をもたないため、その境は不明瞭であるが、壁面に立てられた石材の先端部が、その境となるものと思われる。焚口前面はハ字状に開いており、壁と床面は赤変し硬化している。



第103図 10号窯跡実測図(縮尺 1/40)

**烧成部** 板状石材の端部から奥壁までの主軸上の斜距離は1.55m、現存する最大床幅は奥壁部から30cm付近で0.95mである。床面のプランは、焚口から奥壁に向ってわずかに幅広となる羽子板形であり、奥壁コー

ナー部分は隅丸となる。床面の傾斜角は約 $31^{\circ}$ であるが床縦断面は平坦でなく弯曲している。このため、烧成部中央部付近から奥壁までは角度が大となり約 $40^{\circ}$ を測る。床面には径10~15cm、厚さ3~5cm程の円形状の土製置台が見られる。この置台は燃烧部全面にはなく、中央部より上位の奥壁際に集中して、かなり規則性をもって貼り付いていた。

**煙出し部** 奥壁は内傾気味に高0.5mまで立ちあがり、煙道となるのが確認された。天井部が崩壊しているため、形状や規模は不明である。内傾角度は $12^{\circ}$ である。

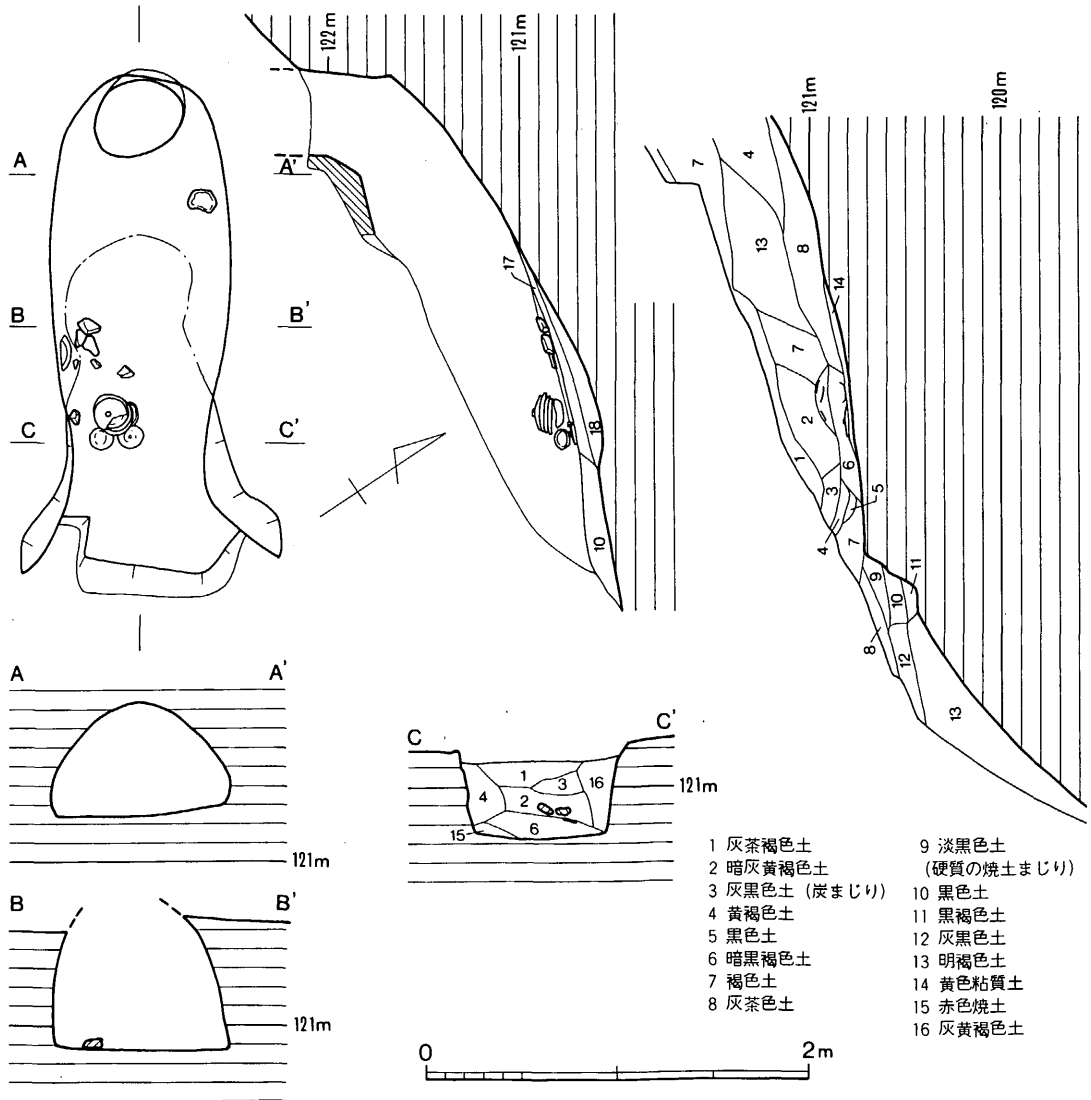
### (3) 11号窯跡(図版58・59・60-1、第104図)

丘陵の裾部近くに位置したもので、標高120.5~122.2m間に等高線に直交して構築されている。窯体は天井部の大半が崩壊しているものの、遺存状態はまずまずのものであった。現地表面から床面までの深さは、焚口付近で約0.4m、奥壁際で約0.6mを測る土被りの少ないものである。窯は花崗岩バイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の平面形態は、焚口部が最も狭く、烧成部中央が最も幅の広い、胴張りの長形状を呈するもので、奥壁部は隅

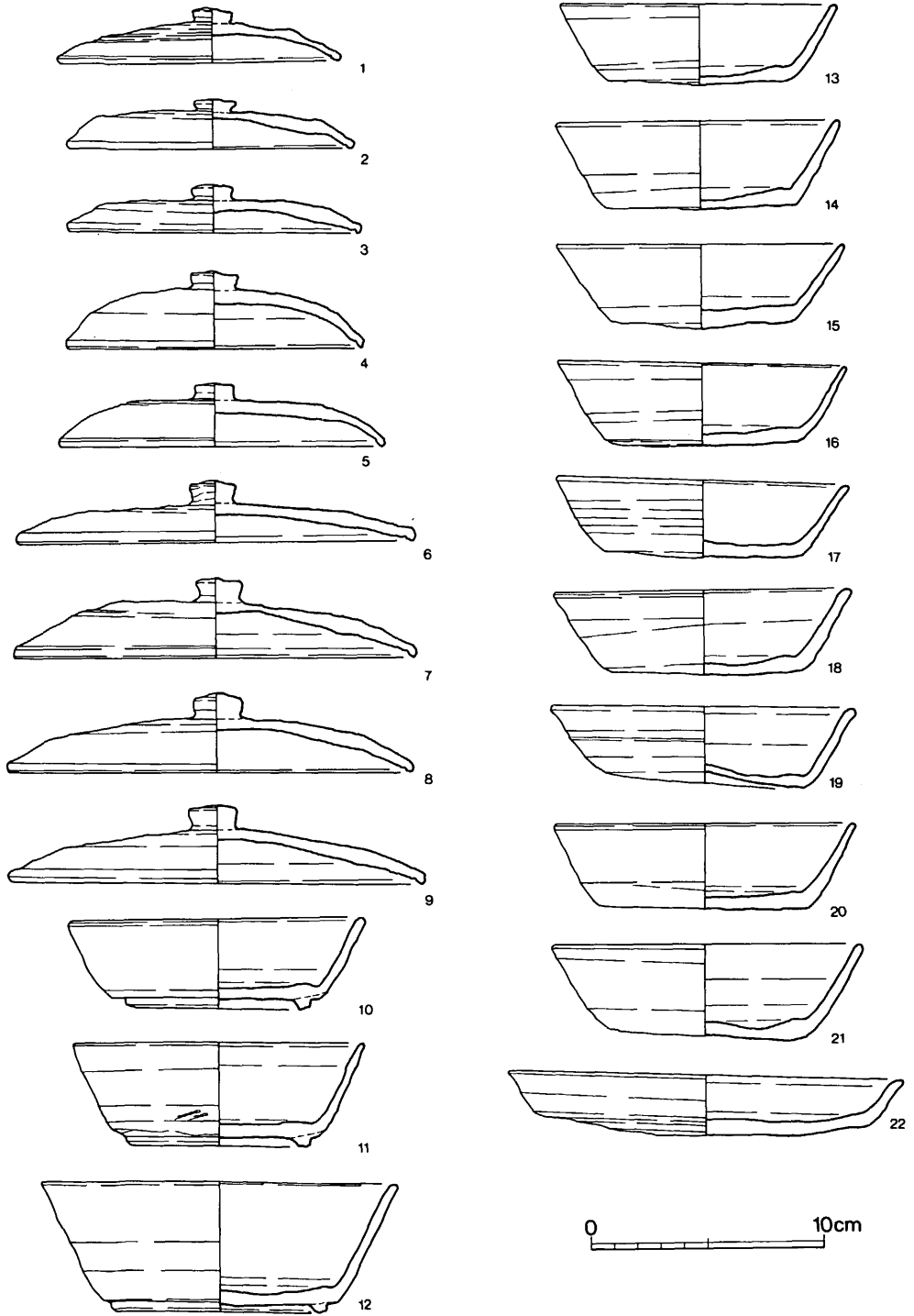
丸となる。

窯体の主軸方位は、10号窯と同じくN-56°-Wであり、焚口は南東に向く。主軸上での全長は2.85m、床面の最大幅0.95mを測る。床面は1次の床面上に一層が見られ、最低2回の焼成が行なわれていることがわかる。本窯に伴う灰原は特定できなかった。土器は2次床面から蓋杯が検出されたが、1次操業の床からは遺物の出土はなかった。

**燃烧部** 焚口は天井部が崩壊していたが、左右壁の残りは良好である。焚口は床面の幅70cmであり、緩く上昇する。壁の断面はドーム型を呈し、右壁の内傾度が大である。現存する壁の高さは70cmを測る。焼成部との境は床面が一段低くなる位置と思われる。燃烧部前面は、ハの



第104図 11号窯跡実測図 (縮尺 1/40)



第105图 11号窑出土土器实测图(缩尺 1/3)

字状に開き、壁は赤く焼けている。

**焼成部** 燃焼部との傾斜変換点から奥壁までの主軸線上の距離は2.35m、最大部幅は焼成部中央で0.95mである。床面のプランは、胴張りの隅丸長方形を呈するもので、中央部が最も幅が広い。床面の横断面は平坦であるが、縦断面は弯曲しており凹む。このため床面の傾斜角は焼成部先端と奥壁基部では38°であるが、焼成部中央と奥壁基部では46°と急勾配となっている。煙り出し直前部での焼成部の断面はカマボコ型を呈し、床面幅0.9m、高さ0.6mと低いものである。床面は、初操業時は地山が青灰色に還元凝固しており、焼成部前半部分は、深い所では15cm程嵩上げて2次床面としており、2～3cmの厚さで青灰色に環元して床面が見られる。側壁には補修痕は見られない。床面には土製置台が数個貼付いていた。焼成部の手前部分からは蓋杯の蓋4個が重なり、下面からは杯が2個体いずれも生焼けで検出された。

**煙出し部** 奥壁基部から垂直に立ち上がる煙出しは、直径0.45m、現存高0.5mを測る円筒形のものであり、平面形態は楕円形に近い。

#### 出土遺物（図版62・63、第105図）

2次床面からは杯蓋1・8・9と杯身12・16が出土した。燃焼部の黒色土層からは11・14・17・18・22が出土した。他は床面に近い窯内埋土中から検出されたものである。11号と12号窯の煙道間の中間から短頸壺34が出土した。

**蓋杯・蓋（1～9）** 1～5は口径12.2～14.1cmの小形のものであり、6～9は口径17.3～17.9cmの大形のものである。いずれも天井部にはやや丈の高い擬宝珠様のつまみを貼付する。天井部外面は回転ヘラ削り調整である。

**蓋杯・身（10～21）** 高台付杯と無高台杯の2種類がある。高台付杯は、11は口径12.5cmと小形であり、12は15.3cmと大形である。いずれも底部にはやや外方に断面四角形で低い高台を貼付する。無高台杯は口径12～13.5cmの小形品であり、杯蓋1～5に伴うものである。底部はヘラ切り未調整のものが多く、13・16は板状圧痕が残る。

**皿（22）** 口径16.8cm、器高2.6cmである。体部は外反し、口縁部を短く外傾させる。底部の縁辺部は回転ヘラ削り調整する。

**短頸壺（34）** 前述した如く、11・12号間の斜面から34が据えられた状態で出土しており、ここでとりあげておく。34は直立する短い頸部を有した短頸壺で、高台は接合部から剥げ落ちている。体部中央よりやや上位に胴部最大径を有し、肩は丸味をもつ。体部下半は広範囲に回転ヘラ削りを施している。

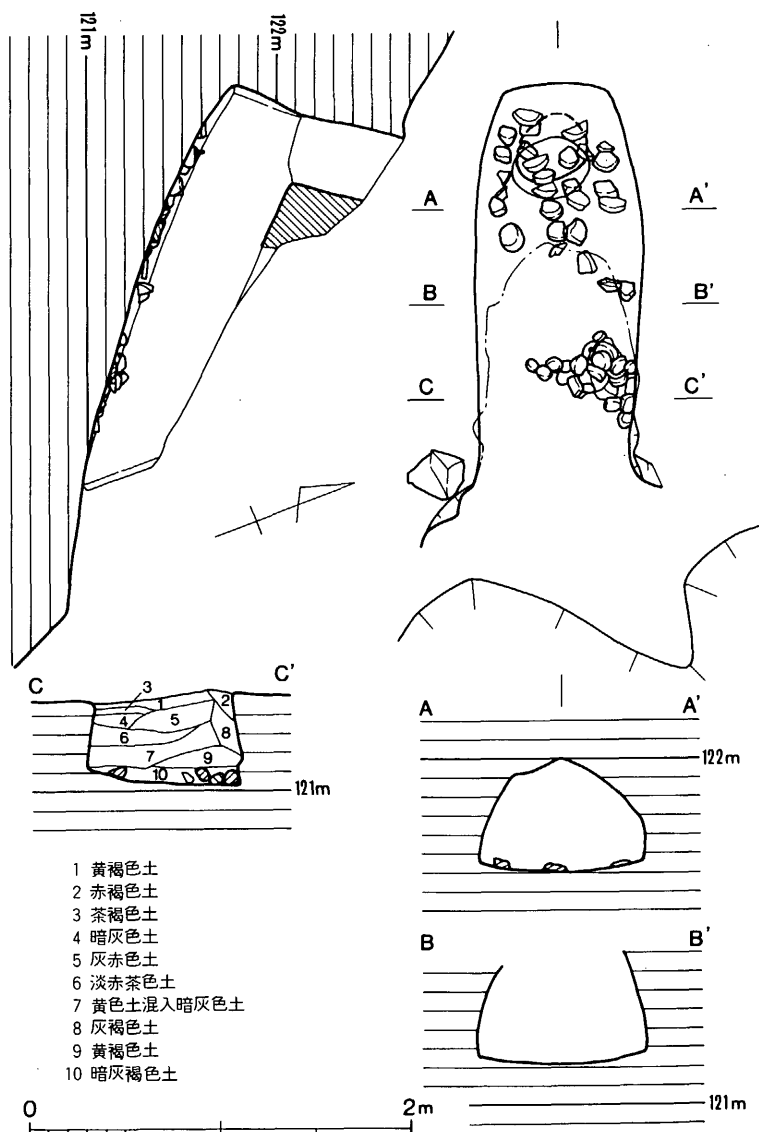
#### (4) 12号窯跡（図版60－2・61－1、第106図）

本窯は、4基からなる窯跡群の最も南側で検出されたもので、標高122~123.5mの間に等高線に対してやや斜交して構築されている。窯体は、焼成部前半以下の天井部が崩壊している。現地表から床面までの深さは、焚口付近で約0.5m、奥壁際で約1mを測る。窯は花崗岩パイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の平面形態は、11号窯跡とほぼ似通ったもので、焚口部が最も狭く、焼成部中央で最も幅が大となる胴張りの長方形を呈するものである。

窯体の主軸方位はN-69°-Wである。窯体の全長は主軸線上で2.5m、床面の最大幅0.85mを測る。床面は1次面のみであり、窯内からは蓋杯、皿が出土した。灰原からは蓋杯、皿が、多く検出された。

**燃焼部** 焚口は天井部が崩壊しており、床面の幅1.2mである。燃焼部前面はハの字状に開くが、左壁は花崗岩の石材を1個立てて壁を補強しており、右壁に比して20cm程長くなる。

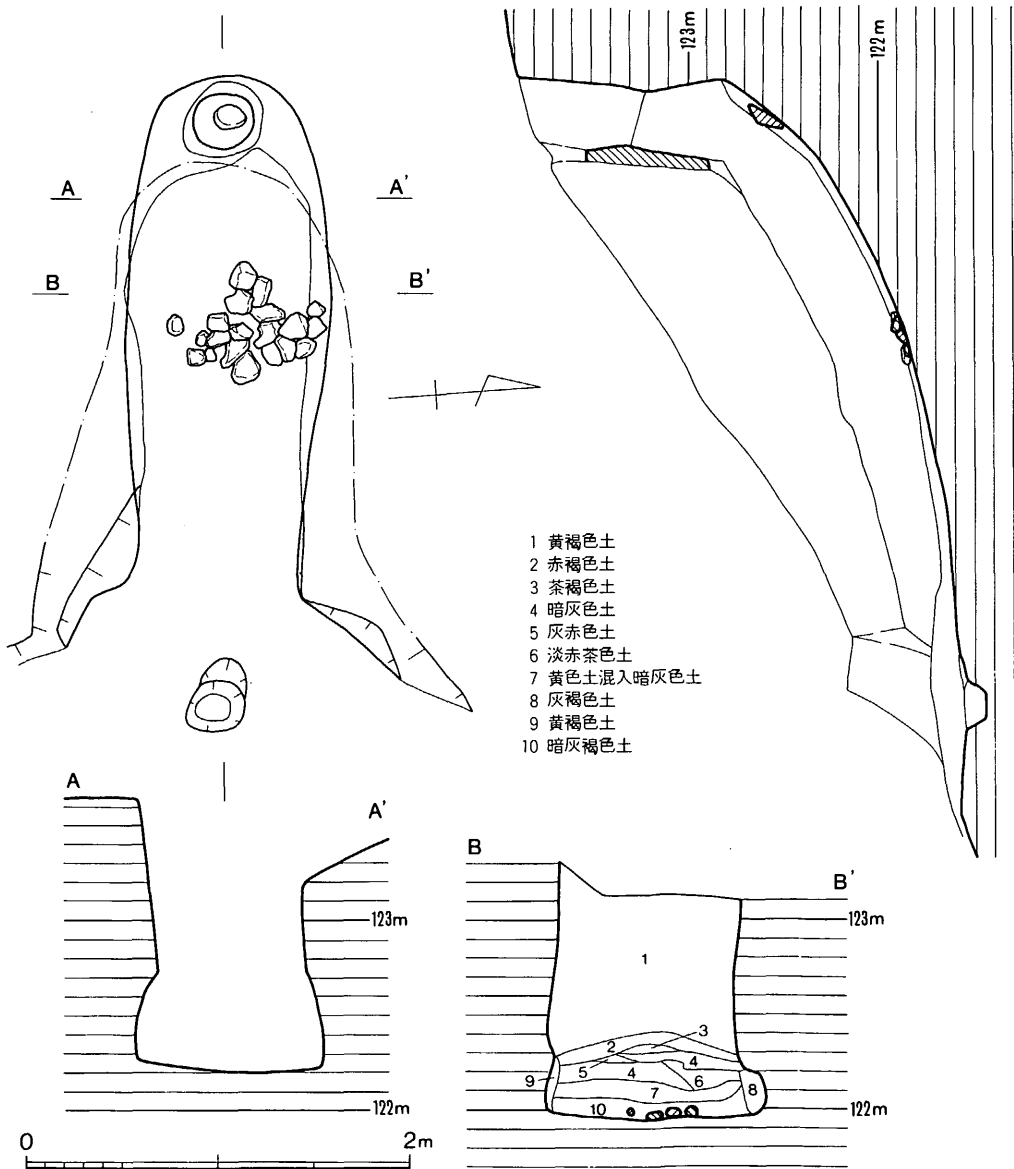
**焼成部** 焼成部は長さ1.75m、床面の最大幅は中央部で0.9m、奥壁で約0.5mを測る。奥壁から0.65m下位の窯体の断面形はカマボコ型を呈し、高さは0.6mである。床横断面は中央部がやや凹んでおり、縦断面もわずかに凹む。床面の傾斜角は22°であり、4基の中では最も



第106図 12号窯跡実測図(縮尺 1/40)

緩傾斜である。窯内奥壁寄りの床面には、円形の土製置台が10数個程床に貼付いており、焼成部前面部には、上部床面からすべり落ちた置台がかたまって検出された。この他、破損した杯も置台として使用されている。

**煙出し部** 奥壁は基部から高さ0.4m程は約27°の角度で内傾気味に立ち上がり、途中で緩く角度を変え、ここからは煙道が0.55m程立ち上がる。煙道は直径0.35~0.38mの円筒形を呈し、床面からの高さ0.95mを測る。



第107図 13号窯跡実測図 (縮尺 1/40)

出土遺物（図版63、第108図）

窯内からは23～25の蓋杯と、26～29の皿が出土した。

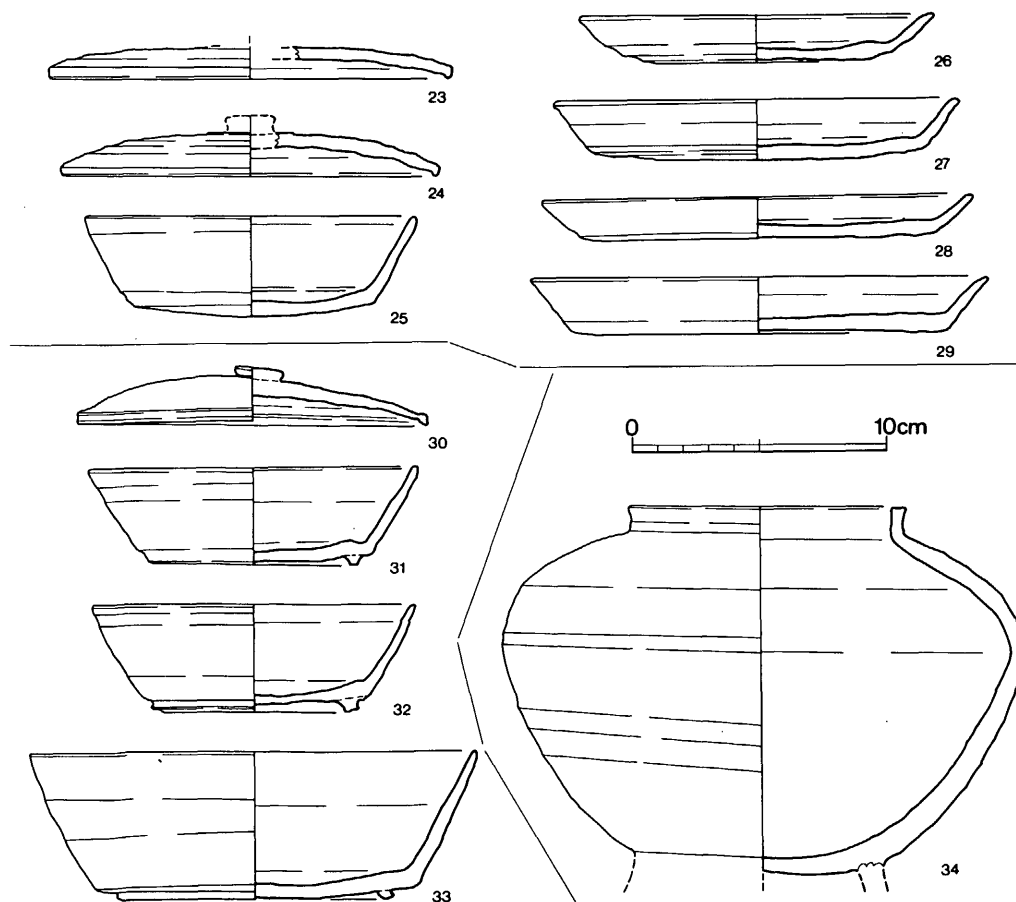
蓋杯・蓋（23・24） 口径14.9～15.9cmのやや大形品である。つずれもつまみが付くものであり、口径に比して器高が低く、天井部と体部の境は不明瞭である。

杯（25） 無高台杯である。口径は13cmを測る。

皿（26～29） 26・27は口径14～16cmと小形であり、28・29は口径17～18cmと大きくなる。底部の外周は回転ヘラ削りし、中央部分は未調整。器高は低く、口縁部は大きく外反する。

(5) 13号窯跡（図版61-2、第107図）

4基からなる道ノ下窯跡群中、最も大きな窯であり、標高123～126mの間に等高線に対してやや斜交して構築されている。窯体は煙道部周辺を除く全域にわたって天井部が崩壊している。



第108図 12号・13号窯出土土器実測図（縮尺 1/3）

現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約1m、奥壁際で約1.6mを測る。窯は花崗岩パイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯であり、4基中、最も地中深くに構築されたものである。床面の平面形態は、11・12号窯と近似しており、焚口部が最も狭く、焼成部中央で最も幅が大となる胴張りの長方形を呈するものである。

窯体の主軸方位はN-86°-Wであり、焚口はほぼ東向きである。窯体の全長は3.3m、床面の最大幅は1.05mを測る。床面は1次面のみであり、窯内からは蓋杯が出土した。

**燃焼部** 焚口は、床面の幅0.9mである。燃焼部前面はハの字状に開いており、右壁は左壁に比して20cm程長い。床面は、焼成部に比して緩く傾斜しており、ハ字状壁よりも前面の位置には、中軸線上に径0.25m、深さ0.1mを測り窯構築時と思われるピットがある。

**焼成部** 燃焼部と焼成部の境は明瞭でないが、焼成部は長さ約3m程と思われ、床面の幅は中央部が最大で1.05m、奥壁部では0.7mを測る。壁が良く残った煙道部近くの窯断面はカマボコ型を呈している。床の縦断面を見ると、焼成部端部から窯体中央部までは約15°位であるのに対し、中央部より上位は40°と急勾配となる。窯の中央部の床面には円形の土製置台が20個程まわって出土したが、上位に置かれたものがすべり落ちたものと思われる。窯中央部では壁の崩壊土が35cm程床面上に推積している。

**煙出し部** 奥壁は基部から高さ0.4mまでは約10°の角度で内傾気味に立ち、この部分に段を有して、上方へは外傾気味に0.65m程立ち上がって煙道となる。煙道は口径0.3~0.35m、高さ1.05mの円筒形を呈する。

**出土遺物** (図版63、第108図)

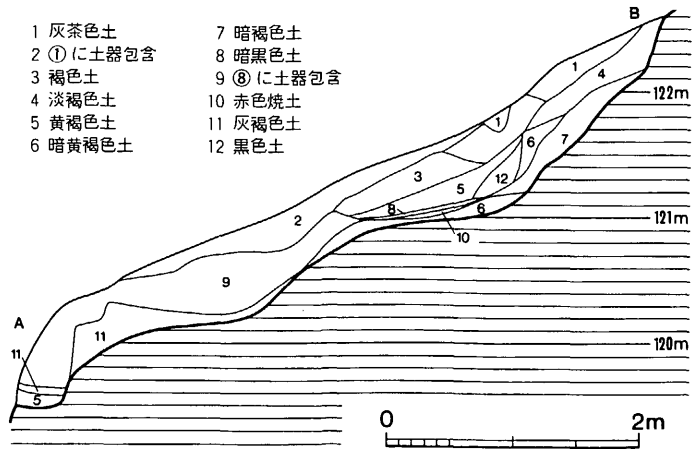
窯内からは蓋杯30~33が出土した。

**蓋杯・蓋 (30)** 口径13.8cmと小形品であり、頂部に扁平なつまみがつくもので器高は低い。

**蓋杯・身 (31・32)** 口径12.9~13cmと小形品であり30とは器種的にはセットとなるものであろう。体部は直線的に外反し、底端部近くに、低い高台がつく。33は口径17.6cmの大形品であり、底部の内側に丈の低い高台を貼付する。

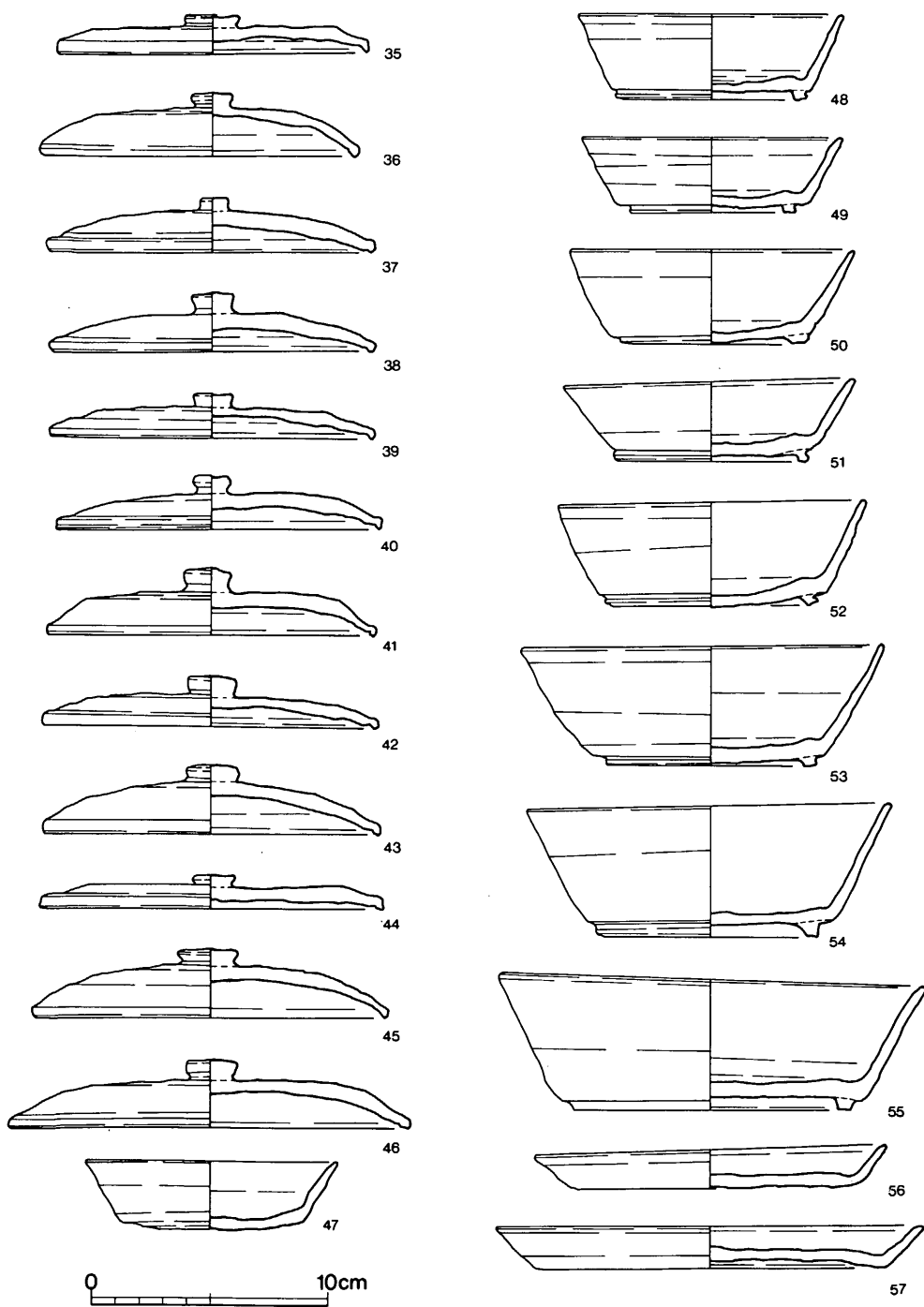
(6) 灰原 (図版56-2、第109図)

灰原は10号窯前面の小範囲と、11・12号間の5×3mの範囲にみられた。11・12号間の灰原は斜面裾部から底面にかけて、厚さ0.2~0.4mの堆積であり、土器は裾部近くで



第109図 G地区灰原土層図 (縮尺 1/60)





第110図 灰原出土土器実測図（縮尺 1/3）

多く検出された。11・12号灰原遺物は区別できるものでないが、現地での区別けに基づいて、11・12号窯灰原として説明する。

10号窯灰原出土品は蓋杯35・40・41・43・52である。11号窯灰原出土品は蓋杯50、12号は蓋杯36～39・44～47・51・54・55、皿56・57である。

#### 出土遺物（図版64、第110図）

**蓋杯・蓋（35～46）** 35～44は口径13～14.4cmと小形であり、45・46は口径15～16.9cmとやや大きくなる。頂部にはいずれもつまみが付き、つまみは扁平で頂部をわずかにとがらせたもの、37の如く径が小さく台形状のもの、丈が高く頂部をややとがらせたものの3種類が見られる。天井部外面は回転ヘラ削りを施す。

**蓋杯・身（47～55）** 無高台杯47と高台付杯48～55がある。無高台杯は口径10.7cmの小形品であり、底部はヘラ切り離し後未調整である。高台付杯は48～51は口径11.2～12.2と小形品であり、器高も低い。52は中間的なもので口径13cmを測る。底部のやや内側に内端部を接地する高台を貼付する。53・54は口径15.2～15.3cmと大形であり、体部は直線的に外反する。55は口径18cmと更に大形であり、底部外端部近くに低い高台がつく。体部は外反ぎみにのびるものである。

**皿（56・57）** 口径14.8cm、17.9cmであり、体部は大きく外反する短いものである。

#### (7) 小 結

G地区からは4基の窯跡が検出された。窯は南傾する丘陵斜面下部近くに構築されたもので標高133～138.5mの間に位置している。

遺構の上からは、窯跡間の先後関係を表わす層序は見られず、11・12号の灰原についても上・下層に明瞭に分けることが困難であり、同時共有していたとの感を受ける。10・13号窯については灰原はほとんど流出してしまっており特定できる様な遺物の採集は不可能であった。

窯の立地は、北側のものが高く、南へ行くに従って低位置に構築されている。

窯は4基とも小形のものであり、平面の形態は、北側最高所の10号窯だけが若干異なるが、他の3基はそっくりの平面形態である。規模は全長2.3～3.3m、幅0.85～1.05m、天井までの高さ0.58～0.6mであり、このうち13号窯が最も大きい。焼成部床面の勾配は12・13号窯は22°、24°と比較的緩く、10・11号窯は31°、38°と急勾配である。さらに10・13号窯の床面は平坦でなく中央部を彎曲させ、煙道部にかけてはさらに急傾斜の構造であり、熱効率をあげるための工夫が見られる。燃焼部には板状の花崗岩を用いて壁を強固にしたものも見られるが、いずれも焼成部との境が不明瞭である。



第111图 J地区·I地区地形图(縮尺 1/1,000)

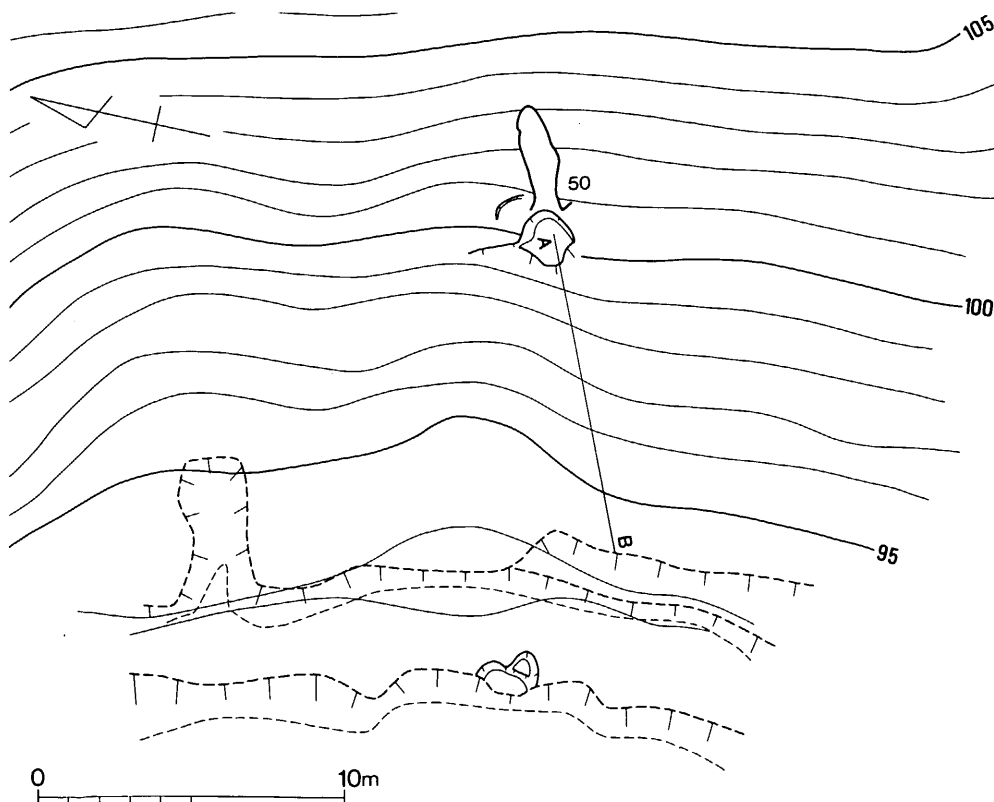
操業の期間及び焼成の回数については、11号窯のみ床面は2層あり、2次の操業が考えられるが他の3基は、床の重なりが見られないため、短時の操業と思われる。灰原を見ると10・13号窯は短時期操業を示唆する如く、灰原は流出してしまう程の薄いものと思われた。11・12号窯の灰原も丘陵裾部の狭い範囲に厚さ20~40cmの堆積が見られるだけであり、出土遺物にも長期間の操業を思わせる様な年代の開きが見られない。

出土遺物から、本窯跡群は8世紀後半代に操業されたものと思われる。(川述昭人)

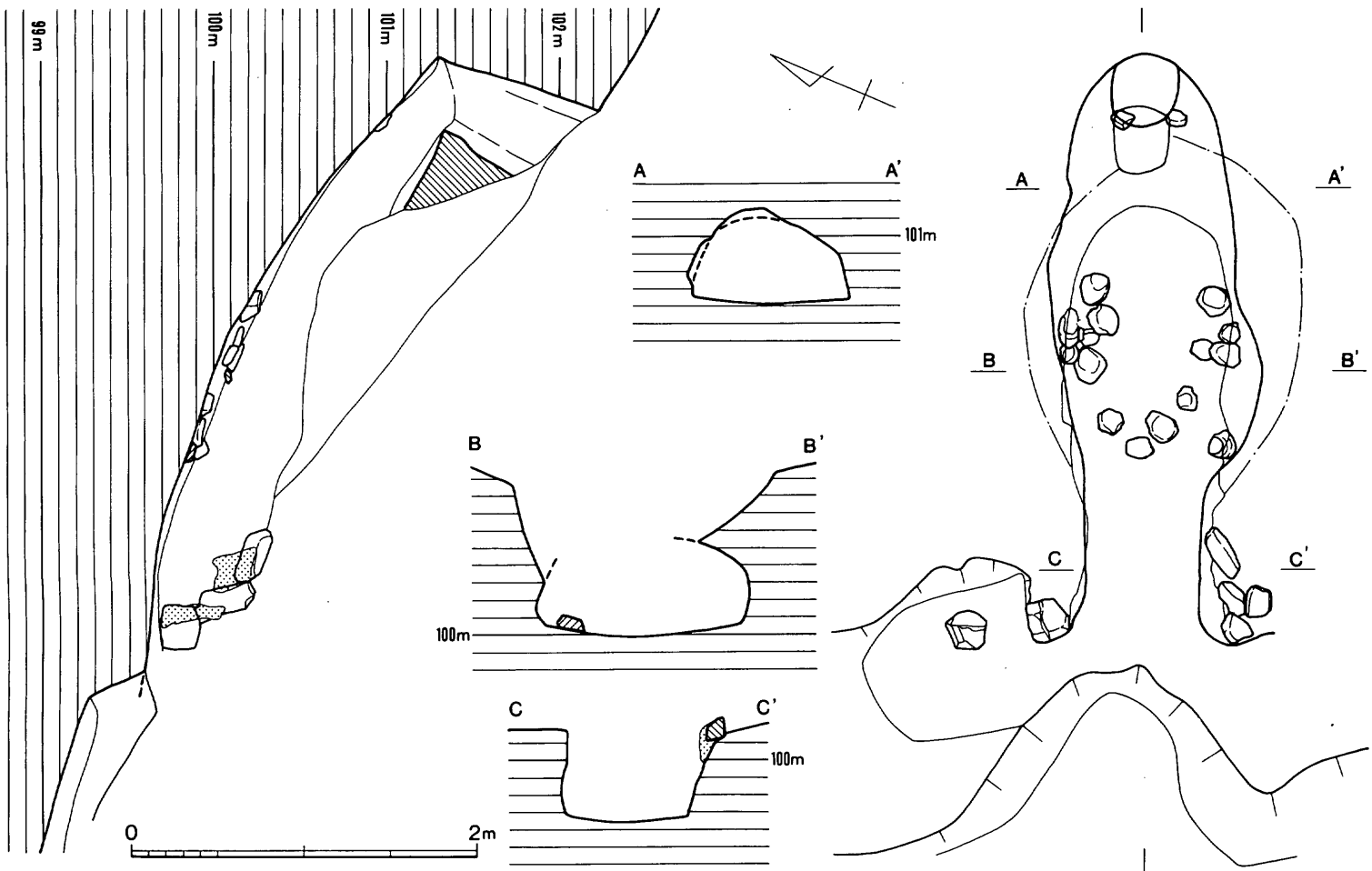
## 7 J地区(道ノ下窯跡群)の調査

### (1) 調査の概要(図版65、第111・112図)

J地区は、ダム堤体建設に伴う調査である。牛頸川右岸、法照寺(I地区)の北側丘陵先端



第112図 J地区地形図(縮尺 1/250)



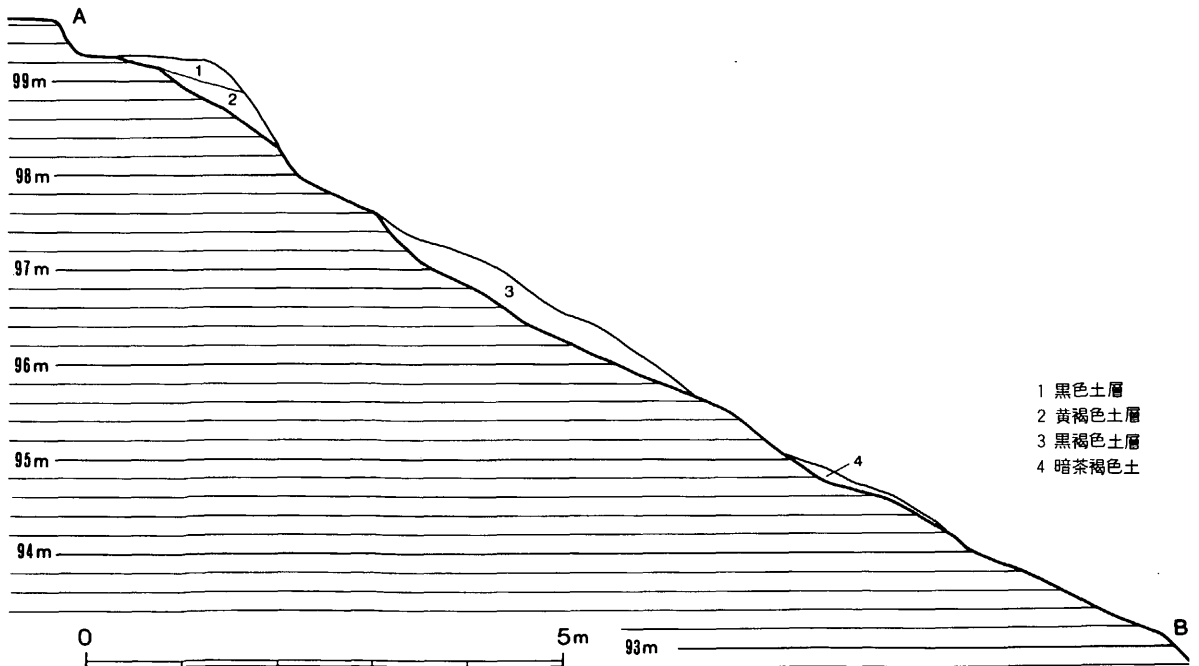
第113图 50号窑址实测图(缩尺1/40)

部に位置する。昭和59年度の分布調査で丘陵裾部に灰原と須恵器片を確認した。調査の結果、東側斜面中腹で須恵器窯跡1基を検出した。

(2) 50号窯跡 (図版66-2、第113図)

丘陵先端部の東側斜面中腹に花崗岩バイラン土を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方向はN-67°-Eで丘陵の高等線に対してやや斜交する。尾根までの比高差は約18m、裾部の畑まで約14mで、焚口付近の床面での標高は99.65mを測る。天井部は煙出し部付近を除き崩壊しているが他はほぼ現状を保っている。窯の全長は3.4m。床幅は焼成部の中央付近で1.10mを測るが幅は一定していない。削り貫きの段階で硬い岩層にあたったためと考える。貼床等は認められず地山層をそのまま床面として利用している。

**燃烧部** 焚口の床幅は0.75mを測り、外側へ大きく開く。焚口の前面0.2mあたりで0.3mほど段差がつくが焼成部の岩層からにじみ出る水によって0.5~0.6mは自然崩壊したものであろう。焚口の左横には土壌状に削り出され底部に灰の堆積が認められた。焚口から傾斜変換部まで主軸線上0.8mが燃烧部で床はわずかに傾斜する。床幅は中央部で0.66m、焼成部との境で0.7mを測る。右側壁は斜めに立上り、左側壁は床から0.3mほど内弯気味に立上る。また、左右側壁の補強には石が使用され、スサ入りの粘土で固定されていた。



第114図 50号窯灰原土層図 (縮尺 1/80)

**焼成部** 燃烧部との境から、奥壁までの主軸長は2.62m、斜距離で3.05mを測る。床幅は中央で1.1mを測るが、岩脈が斜めに走っているため、右側壁は奥壁から1.8m、左側壁は1.2mの地点で最も膨らむ。床面の傾斜は約20°～40°で奥壁に近づくにつれて急角度になっている。中央部の側壁は内弯して立上り、天井は崩壊して明確ではないが床面からの高さは約0.6mと推定される。天井部が残る奥壁から0.8m付近では0.5mを測る。床面には貼床は認められない。土製置台は数個検出したが奥壁近くの2個は壁・置台との間隔15～18cmと一定しているが、他は規則性がみられない。

**煙出し部** 上部は削平を受け明確ではない。煙道下端0.45×0.4m、上端は現状で0.37×0.32mを測りやや角ばった筒形を呈している。現存長は床面から上端まで約1mである。

### (3) 灰 原 (図版65-2、第114図)

50号窯跡の主軸に合わせて土層観察をした。灰原は、そのほとんどが流出しており、須恵器片は裾部の畑から出土したものが多し。斜面では中央部付近の地山面がわずかに窪んだ部分に約30～35cmの厚さで黒褐色土層が堆積していた。

### 出土遺物 (図版67・68、第115～118図)

#### 前庭部・窯内

**蓋 (1)** 天井部は平坦で中央に擬宝珠様のつまみをもつ。口縁端部は平坦面を有す。

**蓋杯・蓋 (2)** 口径15.4cmを測る。1とともに前庭部黒色土からの出土である。

**皿 (3・4)** 窯内焚口右側からの出土である。口径は22cmをこす大形品で、3の底部に一部回転ヘラ削り。4は未調整、ともに磨滅が著しい。

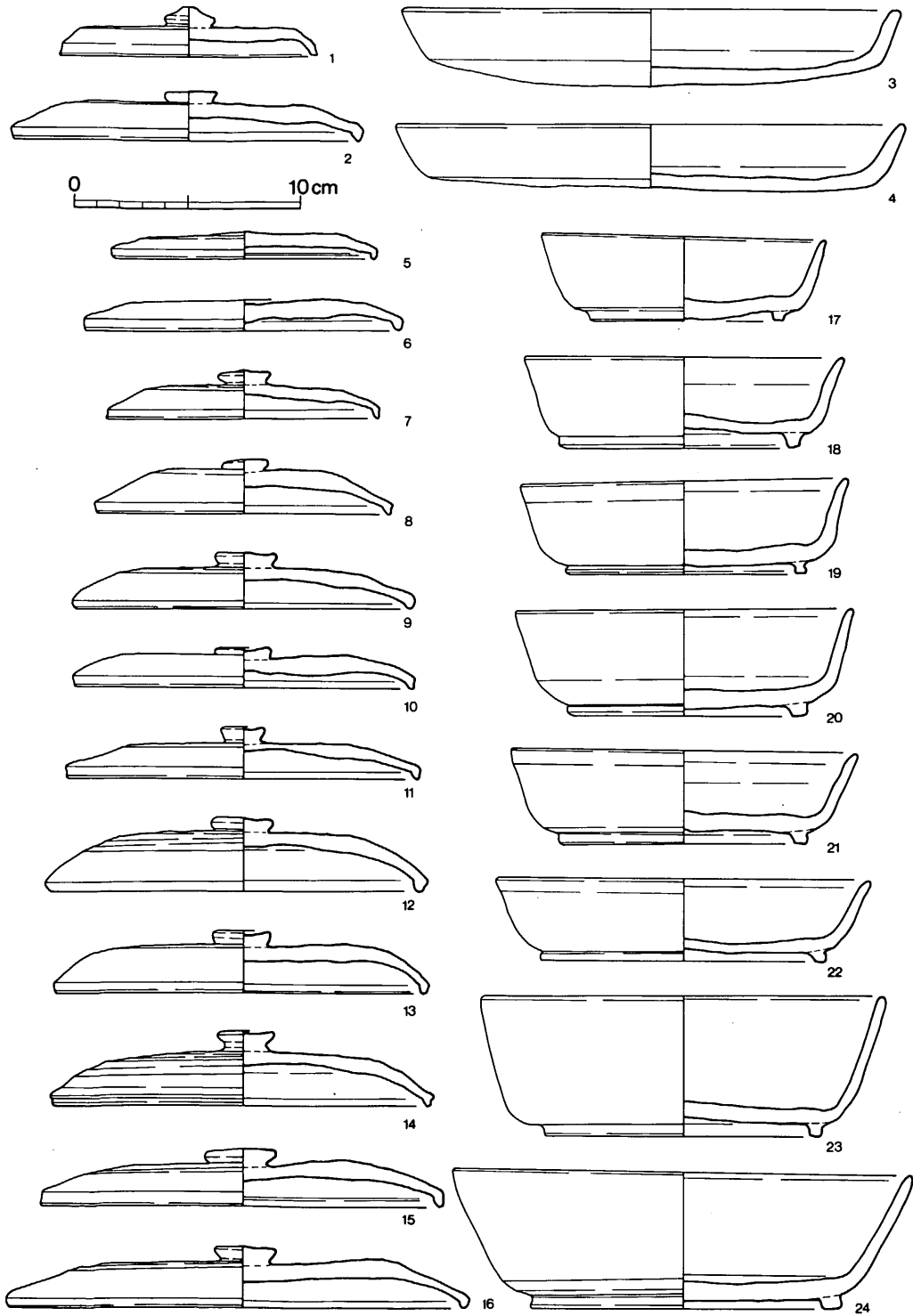
#### 灰 原

**蓋杯・蓋 (5～16)** つまみのつかないもの(5・6)とつまみを有するものがある。5・6の天井部は低く未調整。7・8は口径12.1～13.1cmの小形である。9～14は14.9～16.6cmでほぼ同大。16は20cmをこす大形品である。天井部は平坦である。

**蓋杯・身 (17～24)** 口径12.6～20.3cmの大形品が出土した。体部から口縁部にかけてわずかに外反し端部は丸く仕上げられる。22は体部が低い。いずれも底部やや内側に高台をもつ。

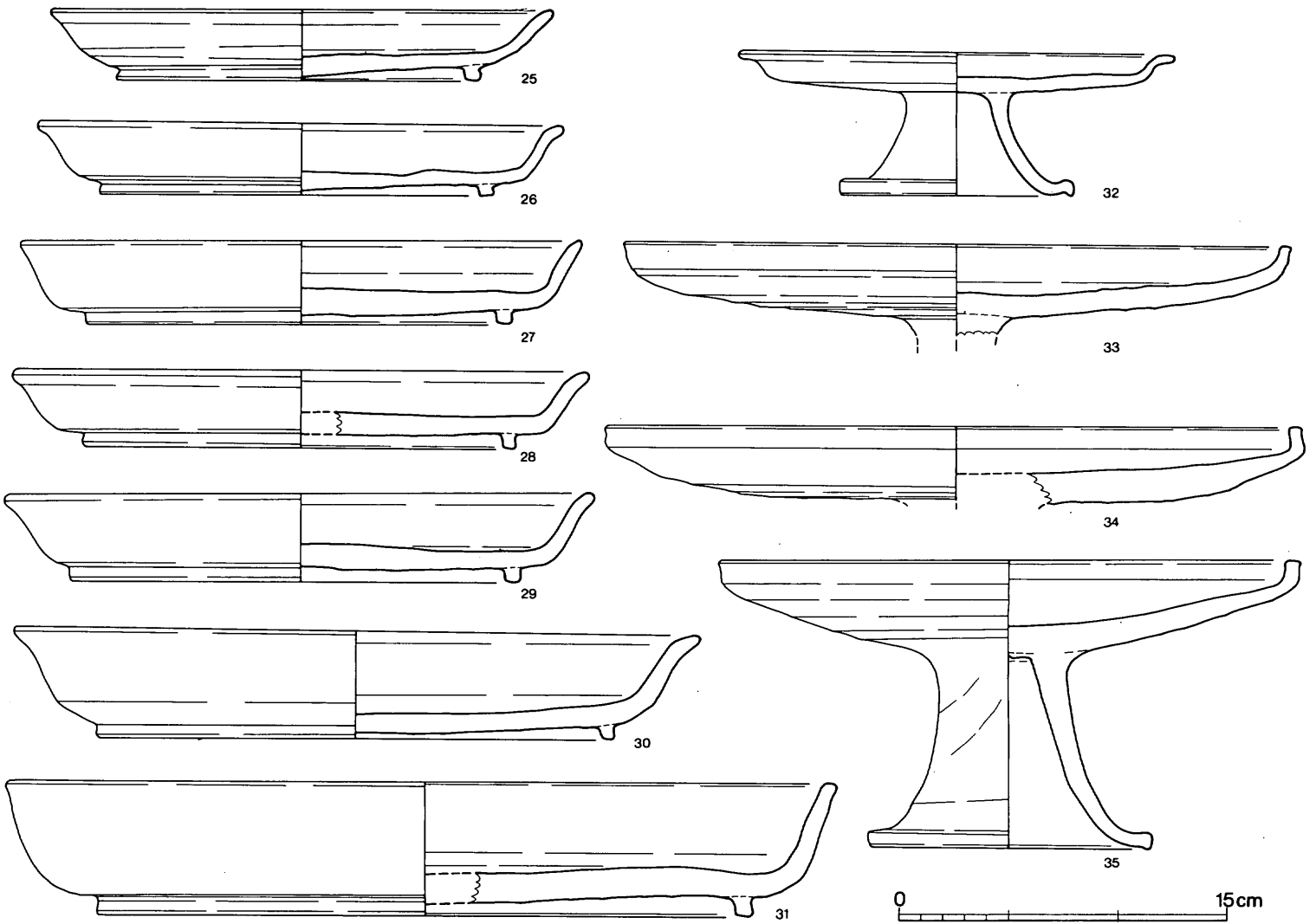
**盤 (25～31)** 口径23.1～37.95のものまで出土した。25～30の体部は外傾し、口縁部は外反し端部は丸く仕上げられる。30の体部・口縁部は外傾する。いずれも底部の内側に高台がつく。

**無蓋高杯 (32～35)** 杯部は浅く、口縁部は短く立上る。32は口縁部を屈曲させ端部は丸い。他の端部は平坦面を有す。杯底部は回転ヘラ削り調整される。34は口径31.7cm、35は脚部が長く、裾部は短く仕上げられている。

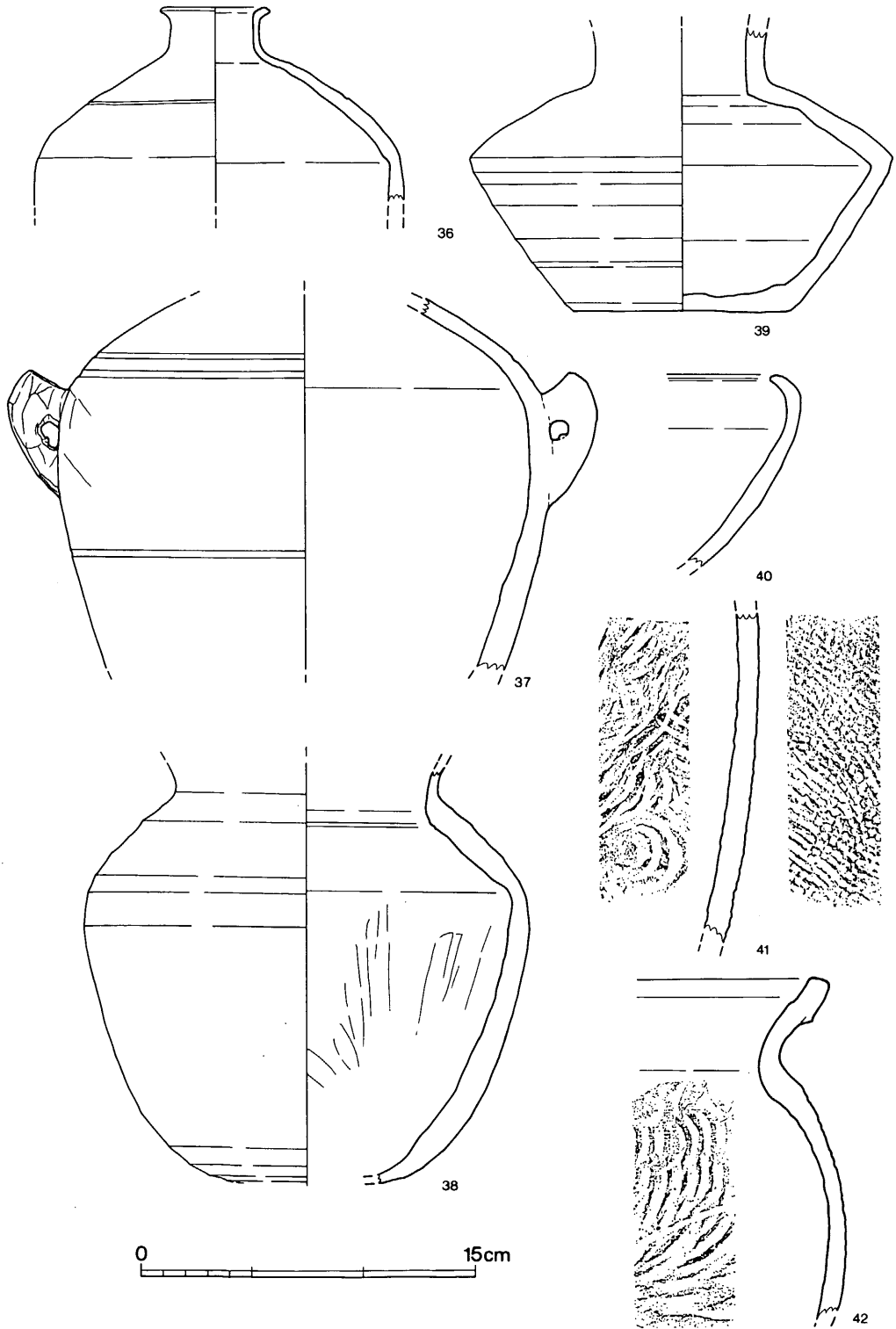


第115図 窯内・前庭部・灰原出土土器実測図①(縮尺 1/3)





第116图 灰原出土土器实测图② (缩尺 1/3)



第117图 灰原出土土器实测图③ (縮尺 1/3)

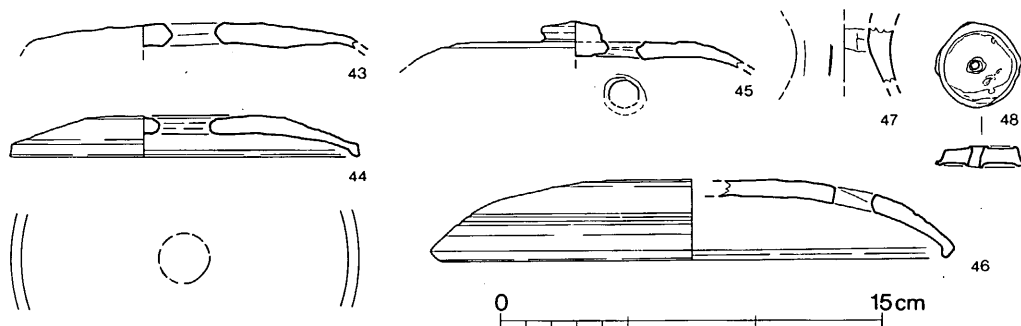
壺 (36~38) 36は口縁部端を短く屈曲させる。肩部に沈線を有す。37は把手付の壺である。肩と胴下部に沈線を施す。38は肩部の位置が低い。胴部外面中位は格子タタキ後ナデ調整。

長頸壺 (39) 肩部と胴部の境は体部中央よりやや上にあり稜線が入る。胴部は回転ヘラ削り調整される。

鉢 (40) 鉄鉢形鉢の口縁部片である。口縁は内弯させ端部は丸い。

甕 (41・42) 41は大甕の胴部片である。外面格子タタキ、42は短く外反する口縁部をもつ。胴部外面は平行タタキ。復原口径43cmある。

穿孔土器 (43~46) 43は50号窯前庭部黒色土層内、他は灰原からの出土である。ともに杯蓋で焼成前に穿孔されている。43・44は天井部中央に径2.0cm前後の穿孔、45は擬宝珠様つまみの横に径1.7cmの穿孔。穿孔の際につまみの一部が削り取られている。46は、天井部と体部の境付近に径1.5cmの穿孔。焼成は44がややあまく、他は良好。



第118図 灰原出土土器実測図④ (縮尺 1/3) K地区

不明整品 (47・48) 47は、現存長約2.1cm、高杯脚状を呈する。外面はヨコナデされ、一部縦位に工具痕が認められる。内面は上部がヘラ削り、下部はヨコナデ。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。48は紡錘車状を呈する。最大径3.4cm、最大厚0.8cmを測る。周囲はヘラ切り、上・下面はナデ。径0.45cmを測る斜めの穿孔がある。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

#### (4) 小 結

丘陵先端部の東側急斜面に1基の窯跡を検出したのみである。南側に位置するI地区では狭い範囲に16基の窯が築かれたのに比して対象的である。焼成部で岩層にあたったことや、斜面に露出した多くの岩から判断して、窯を削り貫くには適していなかったようである。

灰原からの須恵器の出土量も少なく、短期間の操業であったと考える。須恵器では盤の大形品が目についた。出土遺物から本窯は8世紀後半代に操業されたと思われる。(池辺元明)

## 8 K地区（道ノ下窯跡群）の調査

### (1) 調査の概要（図版69、第119・120図）

K地区は、牛頸川右岸で最も大きく開いた谷で、ダム建設に伴う仮排水路・洪水吐建設地で提体北側の位置になる。谷の入口は約50mあり、谷頭まで約150mある。窯跡群を検出した斜面以外は緩斜面を呈し、分布調査と一部試掘を実施したが灰原等は検出できない。窯跡群は谷の入口から約40cm入った北側の急斜面中腹に位置している。標高は100～106mで下の沢との比高差は約12mを測る。灰原は裾部まで達し大きく広がり出土遺物も多い。また下の沢には良質の粘土層が厚く堆積しており窯との関係も興味深い。

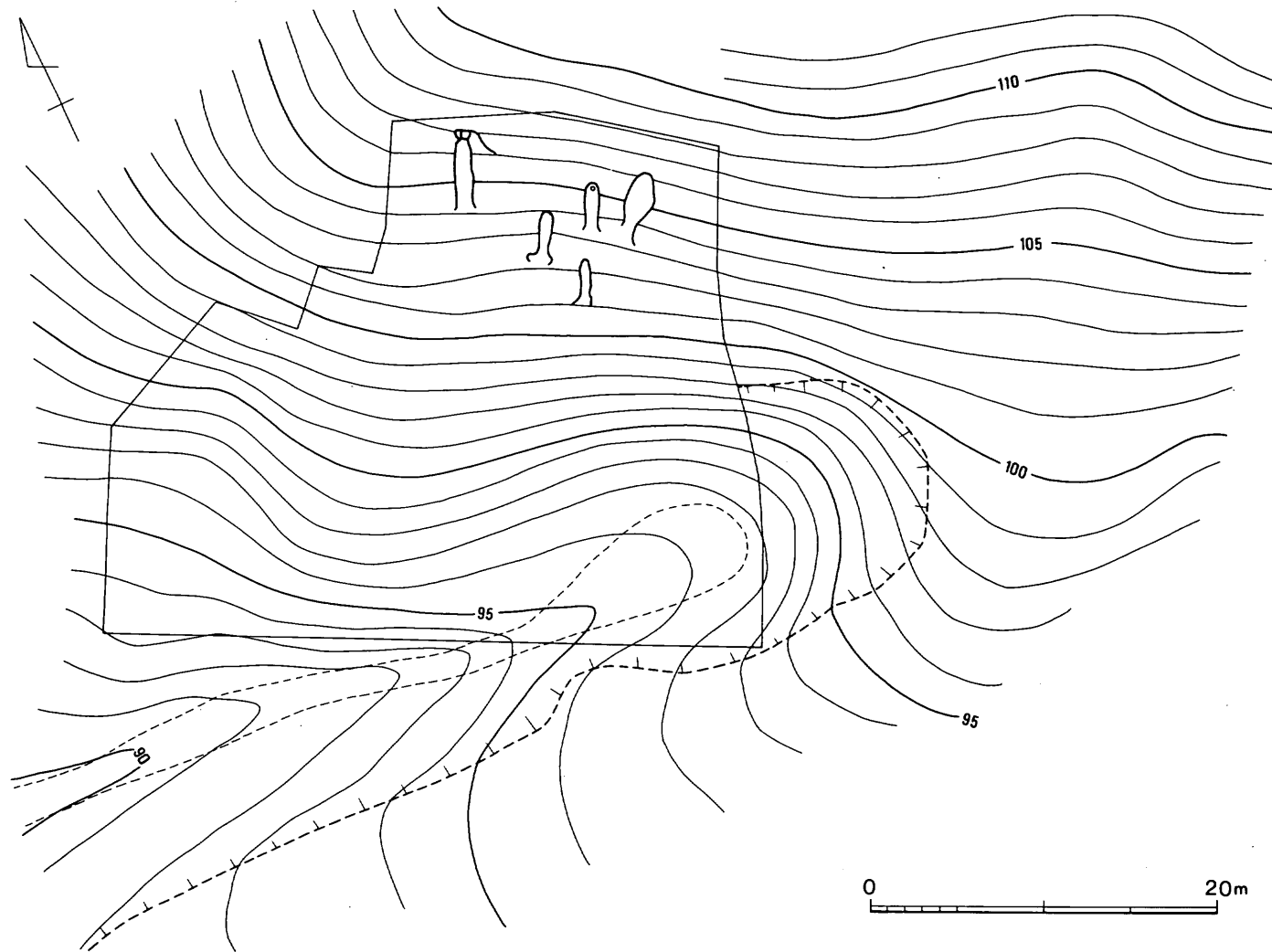
### (2) 14号窯跡（図版71～73、第121図）

斜面中腹に位置し、高等線にほぼ直交して花崗岩バイラン土の地山を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯跡群では最も西側にある。天井は煙道付近の一部を除いて崩壊し窯内に堆積していた。現地表から床面までの深さは、焚口付近で約0.7m、奥壁側で約1mを測る。床面基底部の幅は傾斜変換部から0.7m付近で最も広がるが他は一定の幅を保って奥壁部で急にせばまる。窯体の主軸方位はN-20°-E。主軸長は5.4m、床面の最大幅は1.2m、焚口付近の床面の標高は103.10mを測る。床面の断面観察では、貼床等は認められない。

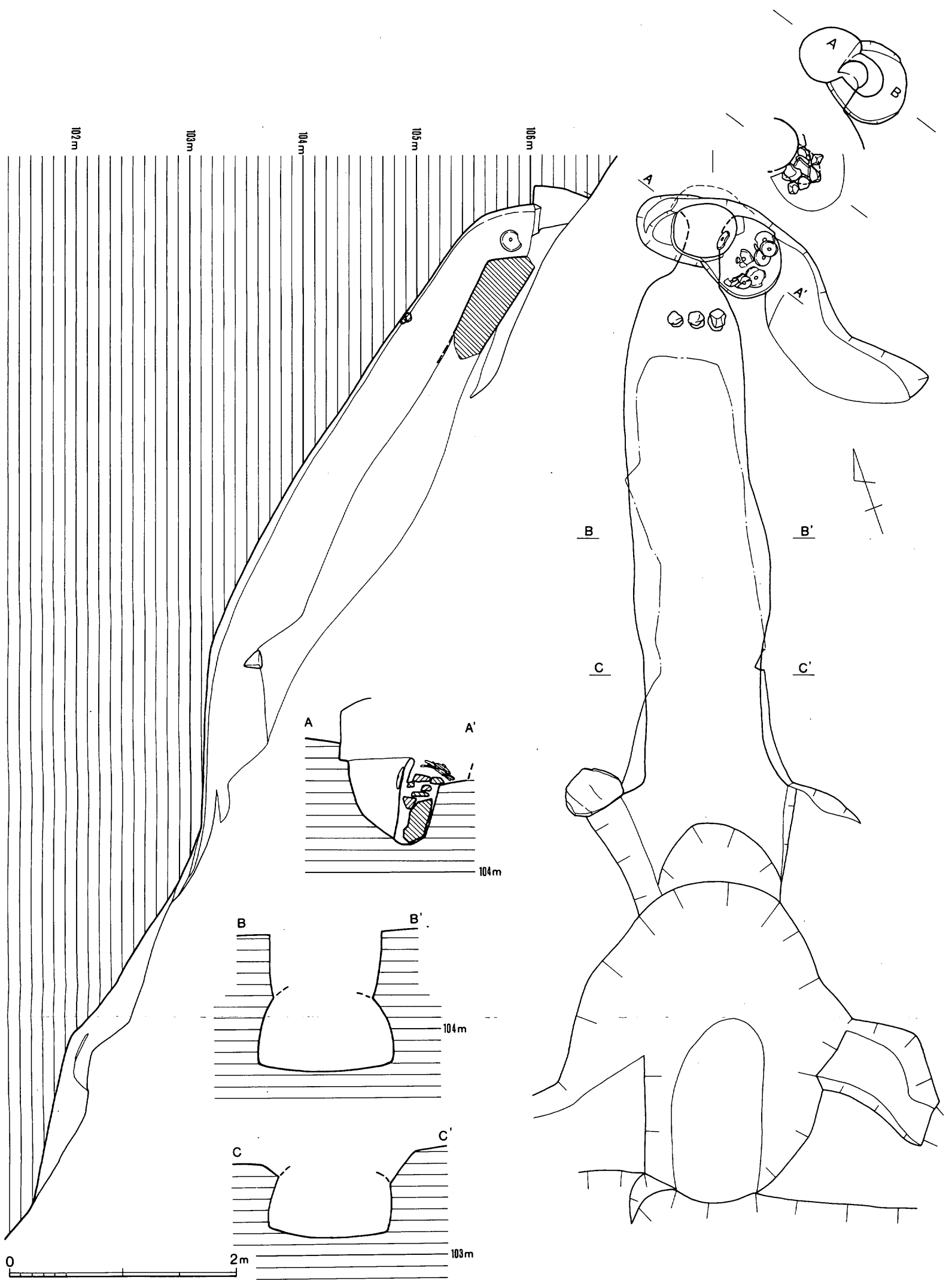
**燃焼部** 焚口の床幅は0.75mを測り外側へ大きく開く。傾斜変換部までの主軸長は1.35mで床はわずかに傾斜する。床幅は中央部で1.02m、焼成部との境で1.03mを測る。側壁は外側へ斜めに立上るが、傾斜変換部付近では内弯気味に立上る。

**焼成部** 天井はすでに崩壊し窯内に堆積している。燃焼部との境から奥壁までの主軸は3.93m、斜距離で4.6mを測る。床面の傾斜は約24°～36°と奥壁に近づくとつれて角度を増すが、他の窯に比べて急ではない。床幅は傾斜変換部から0.7m付近が最も広く1.2m、中央部で1.07mを測り、奥壁に向って徐々にせばまる。奥壁部分の形態は他の窯とは異なる。煙道を本来の位置より0.7m程上部に設けたため、これに合せて奥壁から0.4～0.3mの幅で延長したものと考えられ、この部分は煙出し部としてとらえたほうがいいかもしれない。焼成部はこの部分を除くと3.4mになる。側壁は内弯気味に立上る。天井までの高さは中央部で0.8mと推定できる。奥壁では0.45mを測る。床面には貼床は認められない。土製置台は3個検出した。5cm間隔で並べられ上面が水平を保つ様に二段重ねで調節されている。

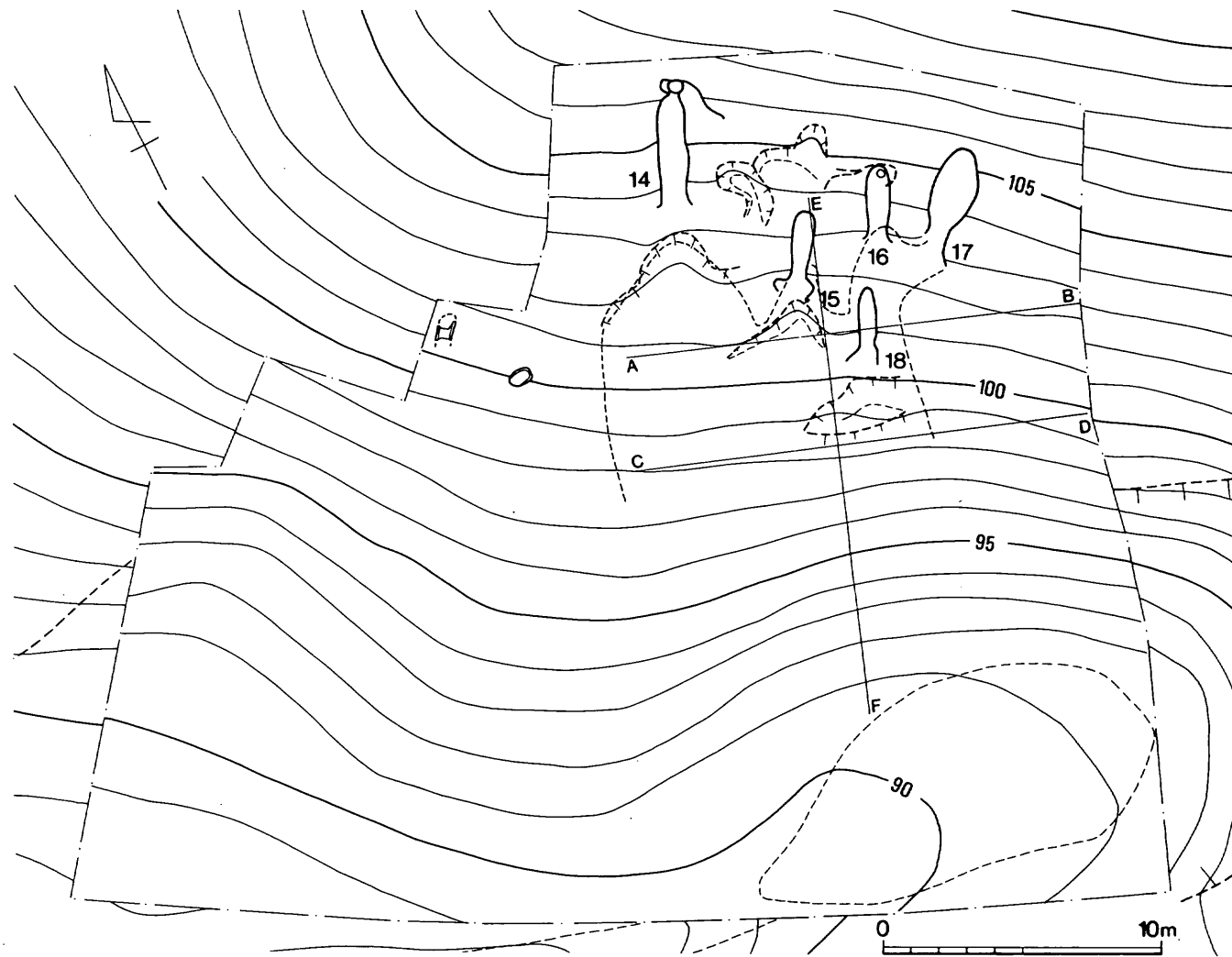
**煙出し部** A・B二本の煙道を検出した。B煙道は埋められていた。燃焼部・焼成部の中軸



第119图 K地区地形图 (縮尺 1/400)



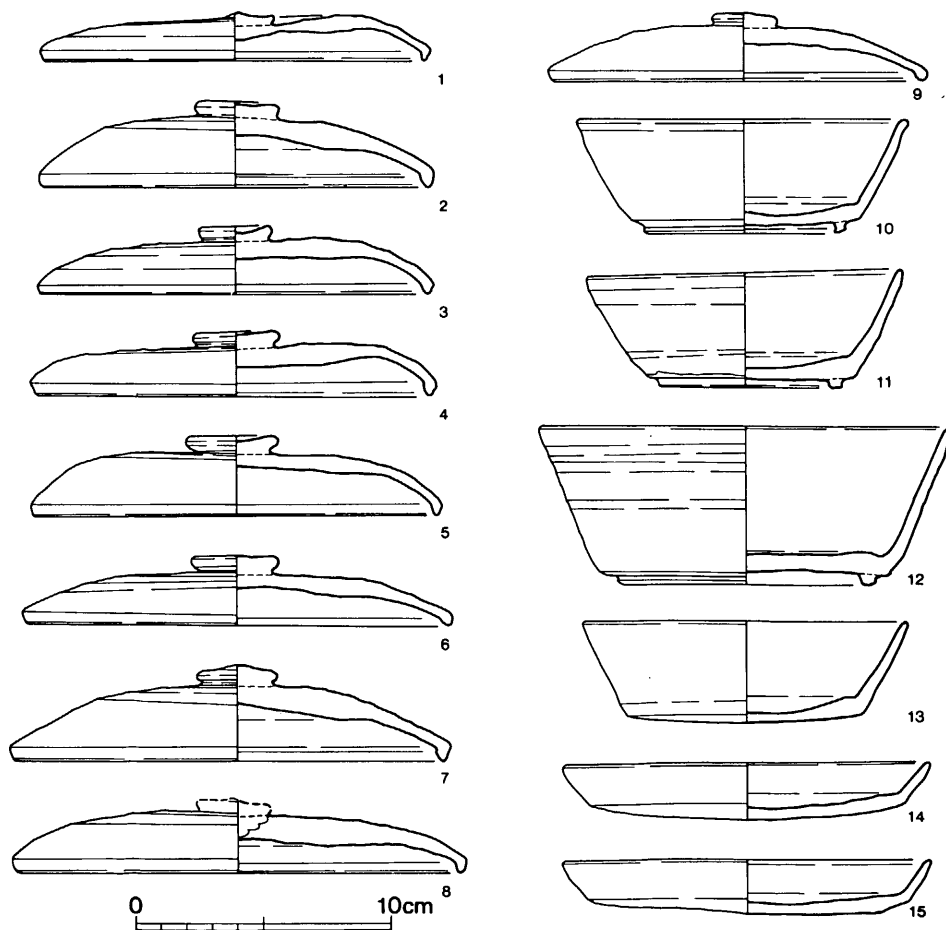
第121图 14号窑迹实测图 (缩尺 1/40)



第120图 K地区窠跡配置图 (縮尺 1/250)

線から煙道の中心は、A煙道が15cm、B煙道が50cmほどずれた位置にある。B煙道の位置をA煙道に修正したものか、A煙道右側が崩壊してB煙道部分が修復されたものであるか判断はつげにくい。周囲の壁は整形され、焼け赤変しており、いずれにしてもB煙道も使用されていたことは間違いない。B煙道の上部は二段掘りになっている。下段の径30cm、上段は径50cmある。下段の埋め戻しは下層に20×45cm大の花崗岩、上層には10数個の土製置台が使用され、間隙は粘質土で固められている。この後、上段の最上層に焼のあまい蓋杯の蓋が7枚並べられる。配置は中央部に1枚、左右に3枚づつ並べ、一方は完形品、他は破片で検出した。またA煙道の右側壁には杯蓋1枚が上面に並べられた中軸線に合う様に貼りつけられている。修正後・修復後で意義は違うが、石・置台・杯蓋の使用は窯の祭祀と関連することは間違いない。A煙道は45×55cmの楕円形を呈する。煙出し部の上面右側には排水のための削り出しがみられる。

**前庭部** 前庭部床面は焚口付近からわずかな傾斜がつき0.5m付近から下は弧状に削り出され、



第122図 14号窯出土土器実測図（縮尺 1/3）



急斜面の灰原へとつづいている。

### 出土遺物（図版78、第122図）

1～7は、B煙道上面出土の一括土器、8はA煙道右側壁の貼り付き土器、9～15は窯内埋土からの出土土器である。

**蓋杯・蓋（1～9）** 1～7の口径は15.0～16.7cmとほぼ同大である。天井部は高くやや丸みをもつ。つまみは擬宝珠様で、径は2.8～3.6cmと大きく扁平である。口縁部は内傾し端部は丸味をもつ、1・4を除き焼きはあまい。8はつまみを欠く。口径は17.3cm。9は1～7に比べて小形である。

**蓋杯・身（10～13）** 10・11・13はほぼ同大、12の口径は16.3cm。13は高台をもたない。底部は未調整。体部は外傾し、口縁端部は丸く仕上げられる。

**皿（14・15）** 口径14.5cmの小形の皿で、外傾する短い口縁部をもつ、底部は未調整。

（池辺元明）

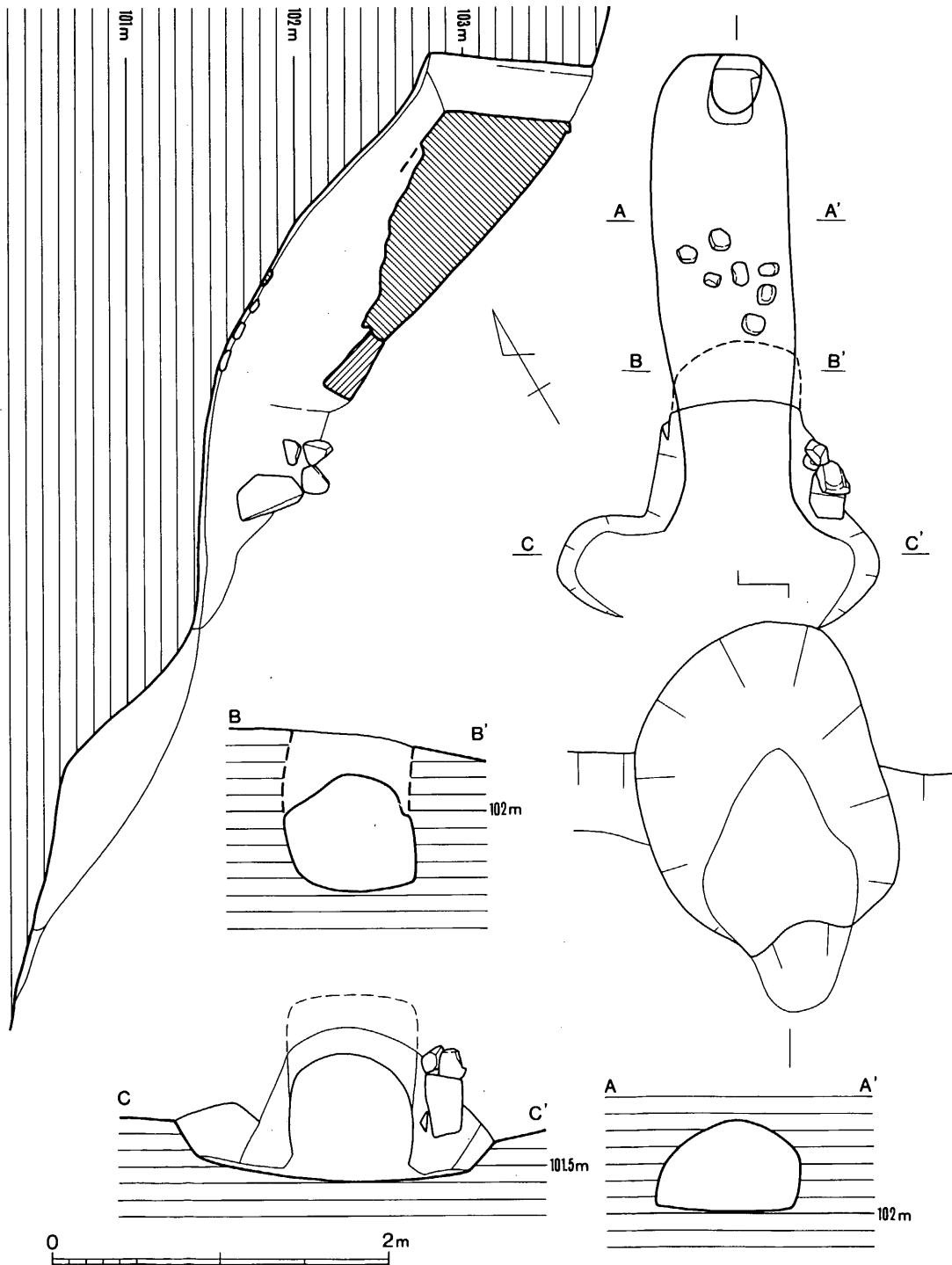
### (3) 15号窯跡（図版74、第123図）

K地区の窯跡群中ほぼ中央部に位置し、標高102～104mの間に等高線に対して直交して構築されている。窯体は、最も遺存状態の良好なものであり、焚口が一部崩壊しているだけであった。現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約80cm、奥壁際で約1.2mを測る。窯は花崗岩パイラン土を割り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の形態は、焚口が最も狭く、焼成部中央が幅の広くなる胴張りの長方形状を呈するものであり、奥壁は隅丸である。

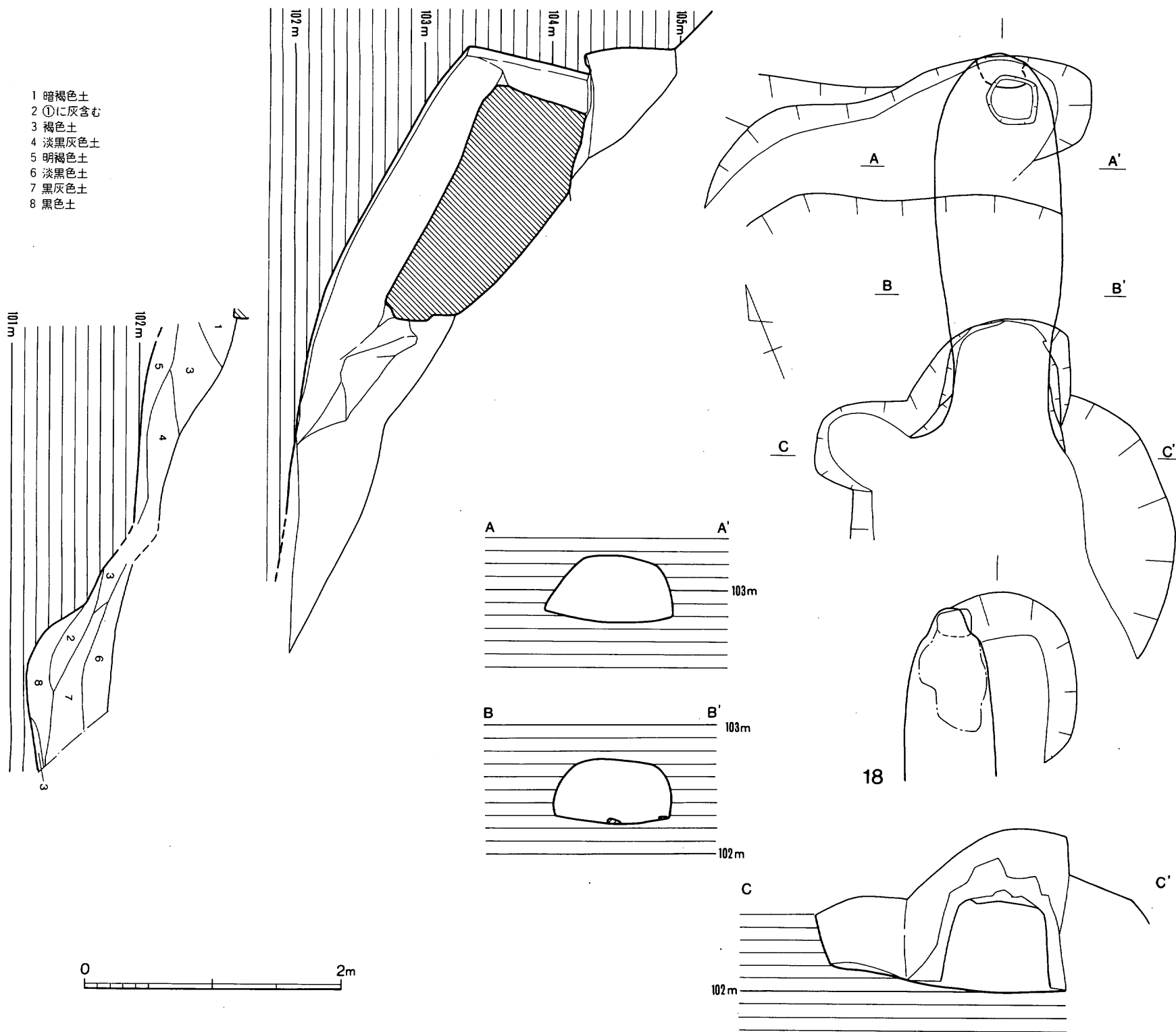
窯体の主軸方位はN-30°-Eであり、焚口は南西に開いている。窯体の全長は3.2m、床面の最大幅0.8mを測る。床面には複次操業による床の重なりは見られなかったが、焼成部の天井部を補修している事から数次の操業が考えられる。

**燃焼部** 焚口は床面の幅0.6mであり、平坦な床である。燃焼部と焼成部の境は不明瞭であるが、燃焼部先端から0.65m入った床面に傾斜変換点が見られるため、この位置を境と判断できよう。燃焼部右壁には、壁の途中に花崗岩の自然石4個を用いて二段積みして、壁の補強をしている。

**焼成部** 前述の境部から奥壁までは長さ約2.65mを測り、床面の最大幅は0.8mを測る。焼成部の左壁は中央部がふくらむ胴張りであるが、右壁はほぼ直線的である。奥壁は両側壁から隅丸につくられており、幅0.4mを測る。焼成部中央（A-B）の断面形はカマボコ型を呈し、天井までの高さ0.55mを測る。床の縦断面は、中央部が湾曲している。焼成部端部から奥壁基部までの傾斜は31°であるが、中央部から奥壁基部までは40°の傾きである。焼成部中央より前面



第123图 15号窑迹实测图 (缩尺 1/40)



第124図 16号竈跡実測図 (縮尺 1/40)

部にかけて7個の土製置台が床面に貼り付いている。天井部はかなりの範囲で剥落し、落下しているが、焼成部前面部では奥行き0.4m、厚さ0.2m程天井部をスサ入り粘土で修理、復原しており、この部分の天井までの高さは0.7mである。焼成部中央から前面部にかけては土製の置台7個が床面に貼り付いていた。

**煙出し部** 奥壁の基底部から若干内傾気味(約5°)に、筒形の煙道部がつく。これは径0.35mで、基底部からの高さ1mであり、煙道周囲の地山は厚さ5cm程が赤色焼固している。

**前庭部** 燃焼部前面の両袖は左・右に削り込みをもうけ、幅1.65m、長さ0.6m程の平坦面を有する前庭部を造る。前庭部直前には2m×1.5mで楕円形を呈するピットを設けている。

#### (4) 16号窯跡 (図版75、第124図)

15号窯の東側に並設されたもので、15号窯より若干高位置にある。本窯は標高103~105mの間に等高線に対して直交して構築されている。窯体は15号窯と同様に残りの良いものであり、焚口が一部崩壊しているだけであった。現地表から床面までの深さは、焚口部付近で約90cm、奥壁際で1.8mを測る。窯は花崗岩パイラン土を削り貫いた地下式無階無段登窯である。床面の形態は、焚口が最も狭く、焼成部中央が幅の広く胴張りの長方形状を呈するものであり、奥壁は丸くつくられている。

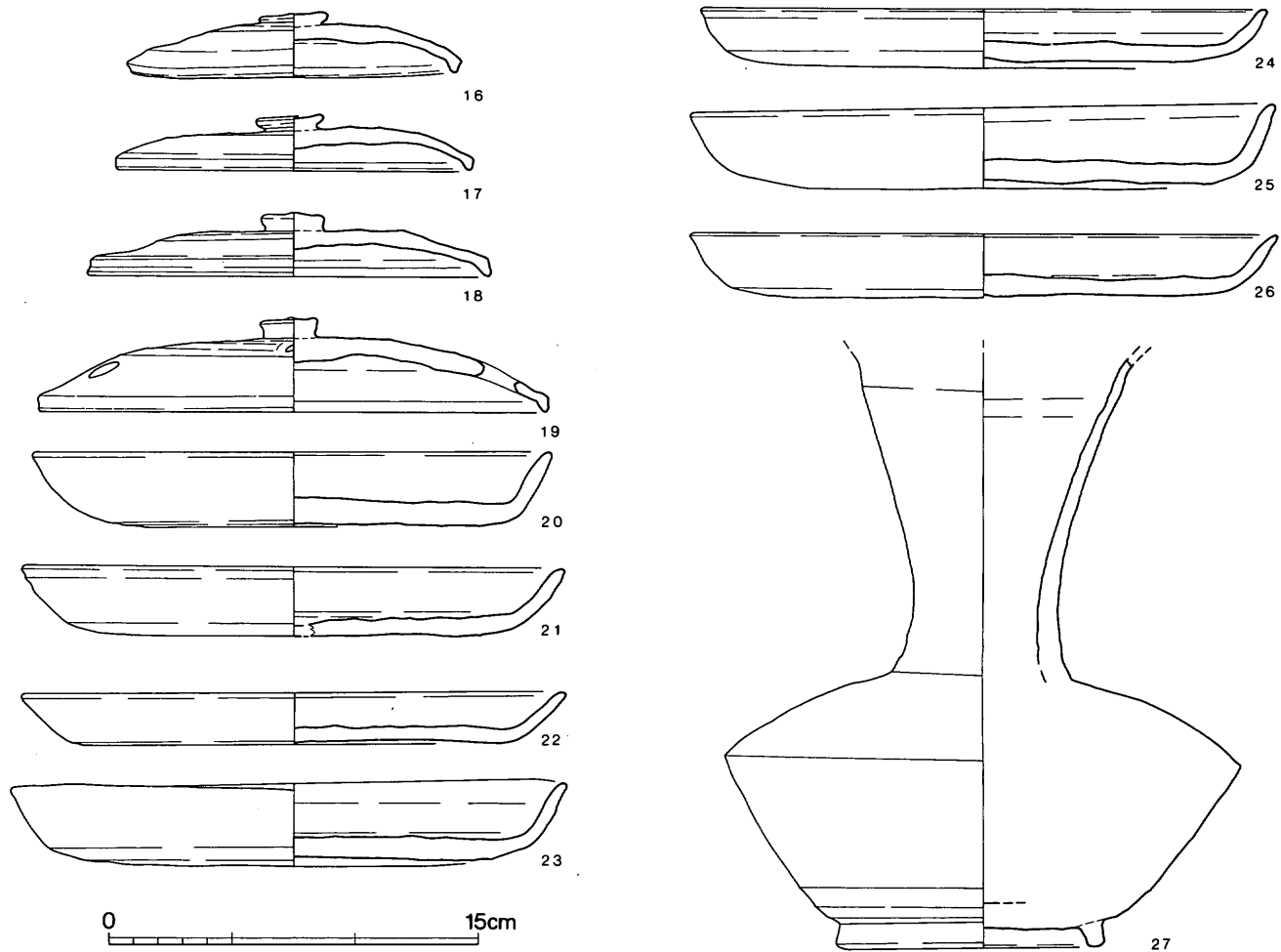
窯体の主軸方位はN-23°-Eであり、焚口は南南西に開いている。窯体の全長は3.25mであるが、右壁は10cm程長い。床面の最大幅1mを測る。床面には重なりは見られない。

**燃焼部** 焚口の床面幅0.75mであり、床面は緩く傾斜している。燃焼部と焼成部の境は、平面、断面を見ても不明瞭であり、特に目立った違いは見出しえない。現存する天井部直下までを燃焼部とすれば、長さ0.9mを測ることができる。

**焼成部** 現存する天井部直下の床面から奥壁までを焼成部とすれば、長さ2.4mであり、床面の最大幅は焼成部中央付近で1mを測る。焼成部は、左右壁とも緩くカーブを描く胴張り形であり、奥壁は直線部分がなく丸くつくられている。奥壁から0.9m前面部の窯体断面形は、天井部が平坦に近いカマボコ型を呈しており、床面からの高さ0.5mと低い。焼成部先端部近くでは、同じく天井部が平坦なカマボコ型を呈しており、高さは0.5mである。床の縦断面は直線的に上昇しており、傾斜角度は35°である。

**煙出し部** 奥壁の基底部から13°内傾させた筒形の煙道部であり、基底部からの高さ0.95m、直径0.25~0.3mである。煙道の平面形は円形というより五角形に近い形状である。煙道上端部は、丘陵の斜面を高さ0.7m、幅0.8m程を溝状あらかじめカットして、斜面を伝った雨水が直接流入しない様に工夫している。

**前庭部** 燃焼部前面は、左・右壁短部から連続させて不整形に掘削した前庭部がつくが、床



第125图 16号窯出土土器実測図（縮尺 1/3）

面は平坦でなく緩く下降している。

#### 出土遺物（図版78・79、第125図）

窯内の焼成部からは蓋杯18・19と皿23が出土したが置台として使用されていた可能性が強い。他の土器はすべて、燃焼部の堆積土中から出土したものである。

**蓋杯・蓋（16～19）** 16・17は口径13.1～14.2cmと普通のサイズであり、18は口径16.2cmと大きくなる。19は口径20.4cmと大形品であり、盤の蓋になるものかも知れない。16・17は扁平な、18・19はやや高いつまみがつく。天井部外面は回転ヘラ削りしている。19は体部に等間隔で4個の穿孔をもつ蓋であり、孔は焼成前に穿たれているが焼成不良品である。

**皿（20～26）** 口径21.7～23.5cmを測るものであり、体部、口縁部は外反し、口縁端部内面に甘く稜線が入るものが多い。底部外面の外周は広範囲に回転ヘラ削りする。

**長頸壺（27）** 口縁部を欠損するが、くの字状に短く外反させるタイプと思われる。肩部は胴部上位にあり、鋭く尖って稜がつく。底部の外端部にハの字に開く四角形の高台が貼付される。

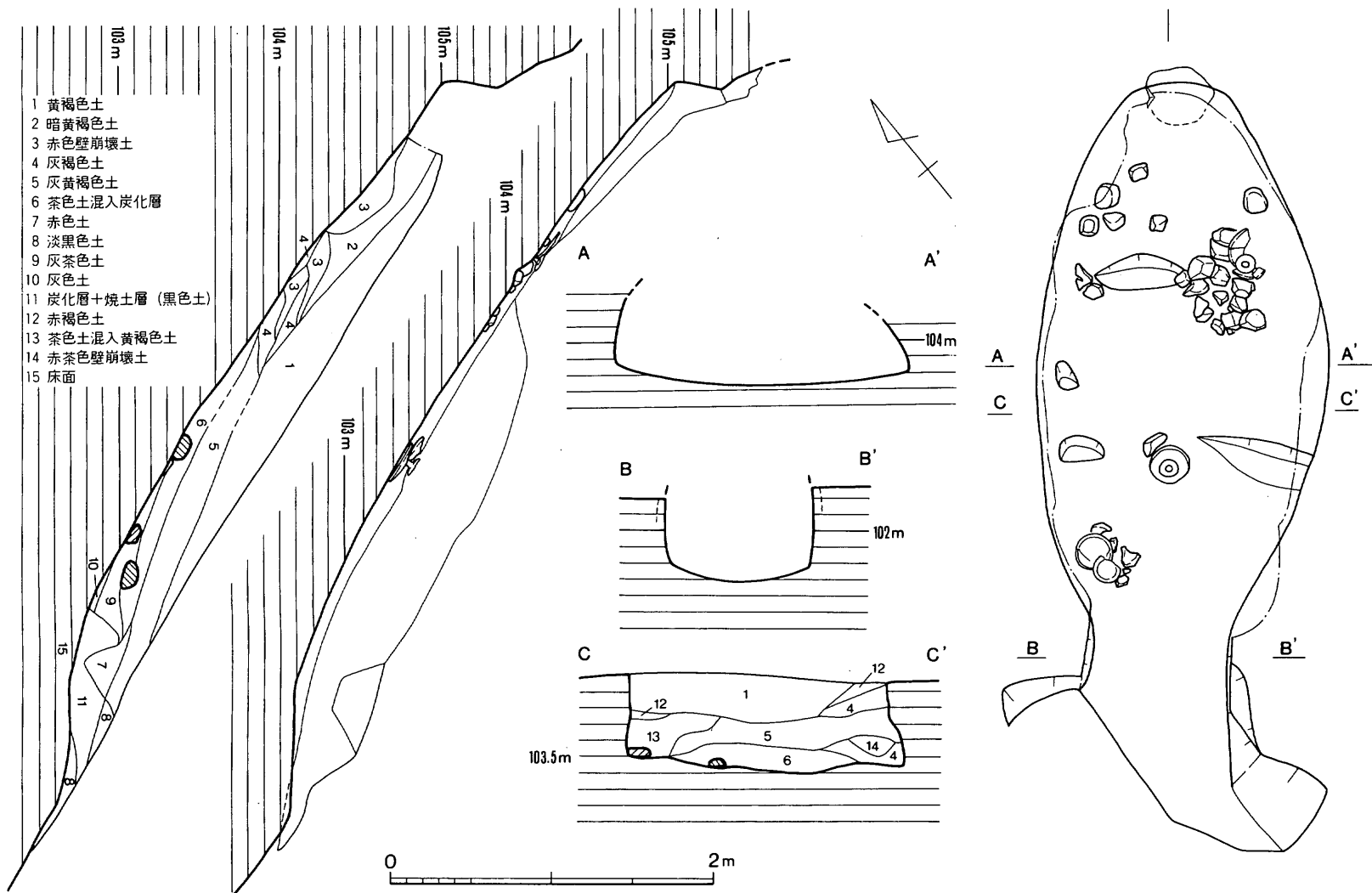
#### (5) 17号窯跡（図版76、第126図）

5基からなるK地区窯跡群の中で、最も東側に位置したものであり、標高103～106mの間に等高線に直交して構築されている。窯体の左・右壁は高さ0.4～0.5m程遺存するが、天井部はすべて崩壊している。現地表から床面までの深さは焚口部付近で70cm、奥壁際で約70cmを測る。窯体の残存状況や旧地形を復原してみると本窯は半地下式無階無段登窯であることがわかる。床面のプランは、焚口部が狭く、焼成部は他の窯跡に比して胴張りが強く、幅が大となるものである。

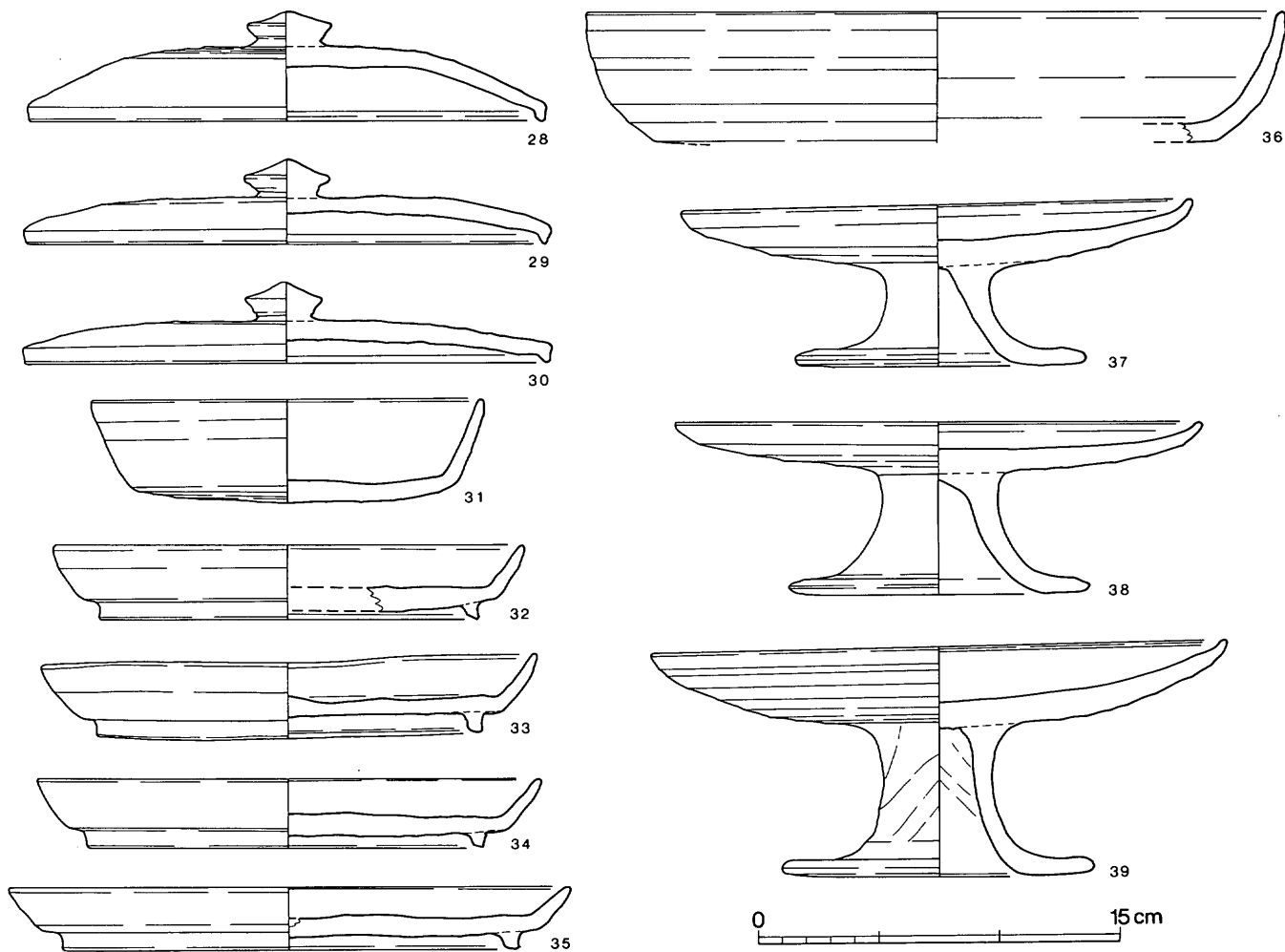
窯体の主軸方位はN-39°-Eであり、焚口は南西に開くものである。窯体の全長は5.35m、床面の最大幅1.8mを測り、この時期の窯としてはやや大き目のものである。出土遺物には蓋杯が少なく、高杯や盤が多く見られるため、本窯は蓋杯以外のこれらのものを専門に焼成したものであると思われる。床の重なりは見られず短期間の操業であったことがうかがえる。

**燃焼部** 左壁の先端部は地すべりにより崩壊している。右壁よりみた燃焼部は、床面の幅0.84mで、長さ1m程直線に壁がのびる。床断面は左壁の先端部より0.6mまでは平坦であるが、これを境に上昇し始めるため、この平坦面までを燃焼部と考えることができよう。

**焼成部** 傾斜変換点から奥壁までは長さ4.45m、床面の最大幅1.8mを測る。奥壁は幅0.6mでやや丸味を有する。窯体の断面形は、焼成部中央部では右壁の内傾度が強いカマボコ型を呈している。床の縦断面は中央部が緩く弯曲しており、焼成部先端から奥壁基部までの傾斜角は33°である。床面には3カ所に土器を置くための浅い掘り込みが見られたが、階段としてとらえる



第126图 17号窑迹实测图 (缩尺 1/40)



第127图 17号窯出土土器実測図(縮尺 1/3)



ほどのものでもない。土製の置台は中央より上位に多数見られた。

**煙出し部** 天井部の崩壊の際に煙道部も壊れている。現存した部分から見て煙道は、直径約0.35mであり、奥壁基部から10°内傾して立つと思われる。

#### 出土遺物（図版79・80、第127図）

窯内から蓋杯、盤、高杯が出土した。

**杯（31）** 無高台杯である。口径16.3cmを測り、緩く外反する口縁部を有する。底部はやや丸味を持っており、回転ヘラ削りする。

**盤・蓋（28～30）** いずれも中央部に大形の擬宝珠様つまみがつくものである。天井部外面は回転ヘラ削りし、体部との境は不明瞭である。口縁部を短く屈曲させる。口径21.3cm。

**盤（32～36）** 32～35は器高の低い皿に高台を貼付したものである。口径19.3～23.2cm、器高2.6～3.1cm。底部の端部よりやや内側に、外端部を接地させた高台がつく。36は口径28.8cmと大形で、器高の高い皿に高台がつくものである。体部は内彎気味に立ち、口縁端部を内傾させる。体部下半から底部にかけ回転ヘラ削りする。

**高杯（37～39）** 無蓋高杯である。杯部径21.2～23.8cm、器高6.7～9.5cmである。杯部はいずれも浅く、口縁部はわずかに内傾気味に立ち、端部を丸くおさめる。外底部下半は回転ヘラ削りしている。

（川述昭人）

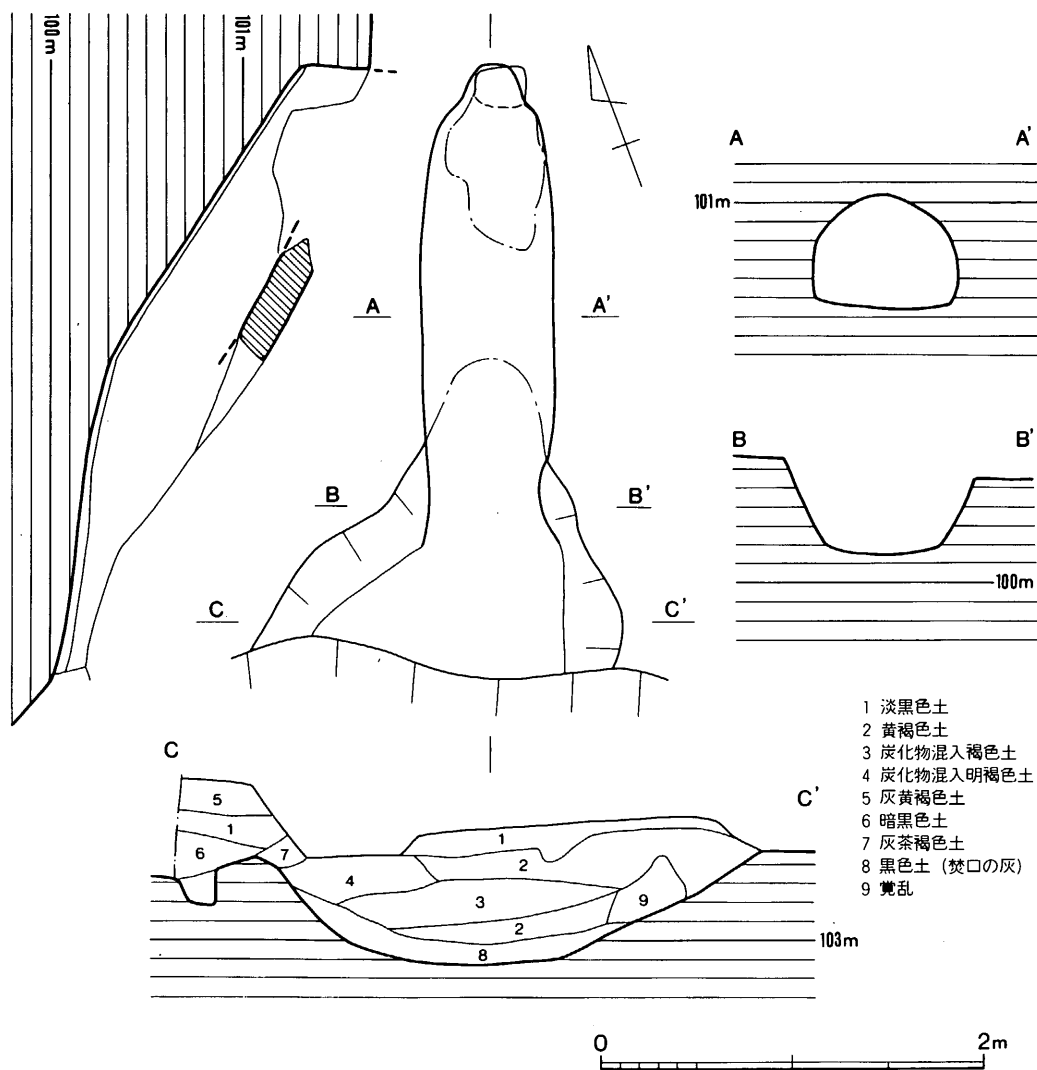
#### (6) 18号窯跡（図版77-1、第128図）

5基の窯跡群の最も下部に位置する。上面には16号窯跡・17号窯跡の灰原が堆積していた。花崗岩バイラン土を削り貫いて構築された地下式無階無段登窯である。窯体の主軸方向はN-20°-Eで丘陵の高等線に直交する。焚口付近の床面での標高は100.10mを測る。天井は焼成部の一部を残すのみで、焚口前面と煙出し部上面は削平をうけている。窯の全長は2.5m、最大幅は0.7mを測る。貼床等は認められない。

**燃烧部** 焚口の床幅は0.72mを測る。焚口から傾斜変換部までの0.52mが燃烧部で床面はわずかに傾斜している。床幅は中央部で右側壁が張り出し0.6m、焼成部との境で0.66mを測る。両側壁は斜めに立上る。

**焼成部** 燃烧部との境から、奥壁までの主軸長は2.0m、斜距離2.3mを測る。床面は中央で0.7mを測り奥壁に向かって徐々にせばまる。床面の傾斜は燃烧部との境から50cmまで17°、これから奥壁までは32°で床面は直である。垂直断面はカマボコ型を呈し、高さは0.6mを測る。

**煙出し部** 上部は削平を受け明確ではない、残存状態から断面形は0.2～0.25mの隅丸長方形と推定される、奥壁床面からの現存長は0.35mを測る。



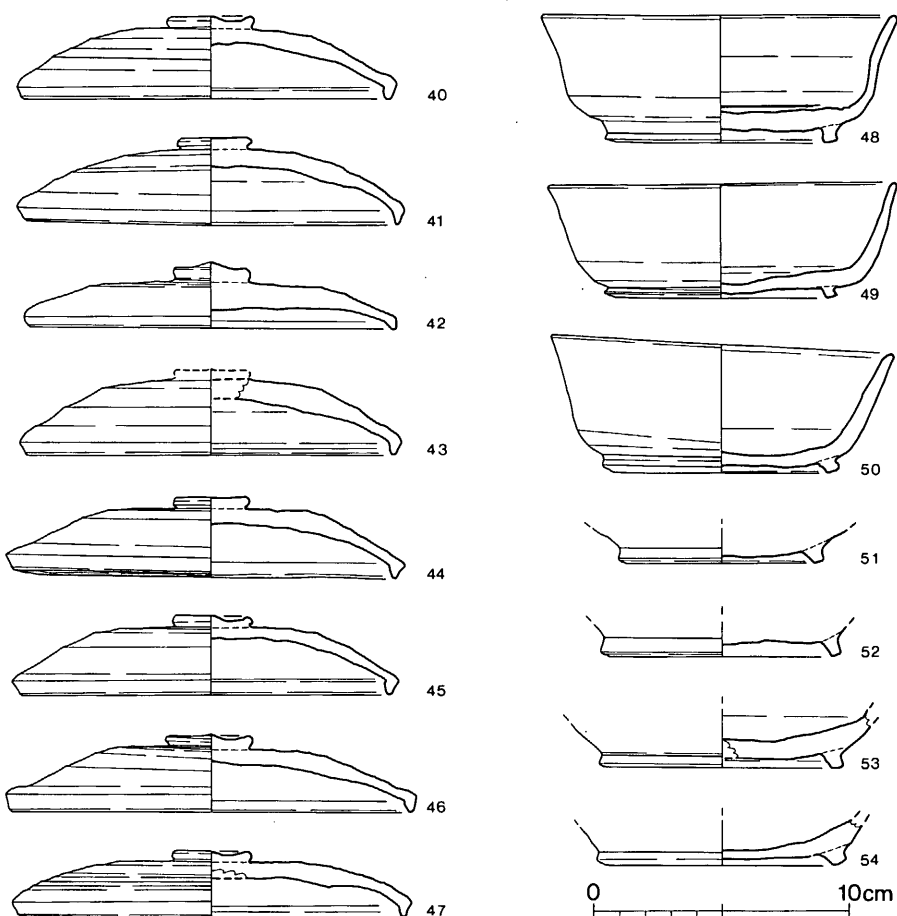
第128図 18号窯跡実測図（縮尺 1/40）

**出土遺物（図版80、第129図）**

いずれも窯内焚口出土の土器である。

**蓋杯・蓋（40～47）** 天井部が高く丸味をもつもの（40・41・45）と平坦面をもつもの（42・44～47）とがある。口縁部は内傾し端部はやや丸い。径3cm前後の扁平な擬宝珠様のつまみをもつ。

**蓋杯・身（48～50）** 口径は13.3～13.8cmでほぼ同大。48は体部中央から外傾し、49はやや外反する。50は体部が深く底部は丸味をもつ。底部は50がナデ、他は未調整である。



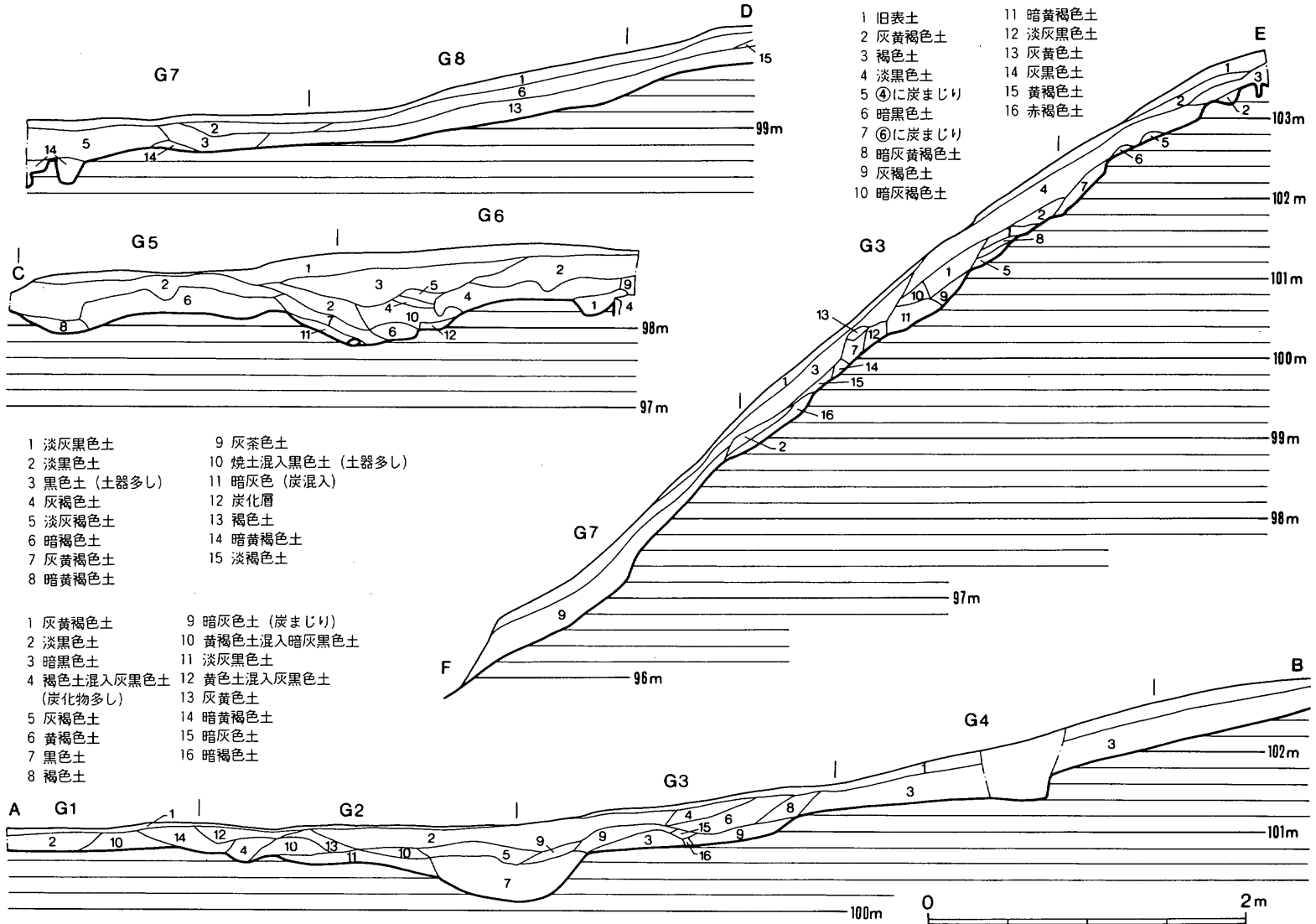
第129図 18号窯出土土器実測図（縮尺 1/3）

(7) 灰 原（図版70、第130図）

灰原は、標高103m付近の焚口前面から、標高91mの裾部の灰内まで達し、標高99m付近では幅約15と最も広がる。全体に4mグリットを設定し層位の検討を行なった。

灰原検出段階の遺物観察では、14～17号の焚口前面から扇状に広がる黒色土が認められ、15号窯の前庭部を横切る線で横断面A-Bの観察を行なった。G1・G2の境付近で14号窯の灰原、G2・G3の境付近で15号窯の灰原、G3で16・17号窯の灰原を確認した。

その結果、14号窯の灰原は15号窯灰原の上面にわずかではあるが重なることが判った。16・17号窯灰原の新旧は明らかにできないが、15号窯より新しい様である。これより下の斜面の灰原は、自然流出等により窯を特定することはできない。



第130図 灰原土層図 (縮尺 1/80)

灰原出土土器（図版80～84、第131～137図）

**蓋杯・蓋**（55～108） 55～68はつまみをもたない。64は貼り付けが施されるが未完成である。55～62は口径10～10.9cmとほぼ同大で、63はやや大きい。64～67は口径13.6～14.7cmである。天井部は丸味をもつもの（58・65・68）と平坦面を呈するものがある。口縁部は58・65・68は垂直に下り、他は内傾する。天井部の調整は55・59・60・62が回転ヘラ削り、63がナデ、他は未調整である。69～108はつまみをもつ蓋で、69以外は扁平な擬宝珠様を呈する。口径は69の11.35cmから108の21.7cmの大形までであるが、14.5cm前後のものが最も多い。全体的に天井が高く丸味をもつものが多い。口縁部の形態・整形の手法は同一である。

**蓋杯・身**（109～147） 高台をもつ杯身である。109～118は口径が8.6～10.3cmの小形品。119～144は中形品で口径は11.9～15.5cmで、13.5cm前後のものが多く、145～147は大形品で147は19.3cmある。体部は深く、口縁はわずかに外反し、底部は丸味をもち、やや内側に高台をもつ。整形の手法は同一である。

**盤**（148～151） 体部・口縁部は短く、やや外反する。底部は平坦で内側に高台がつく。151は復原口径33.9cmを測る。

**杯**（152～164） 高台をもたない杯身で、口径9.5cmの小形から、19.2cmの大形品までである。152～158の体部・口縁部は、外傾・外反し、底部は丸味をもつ。159～160はやや内弯気味に立上る。161～164の大形品は、体部が深く丸味をもち、底部は平坦である。

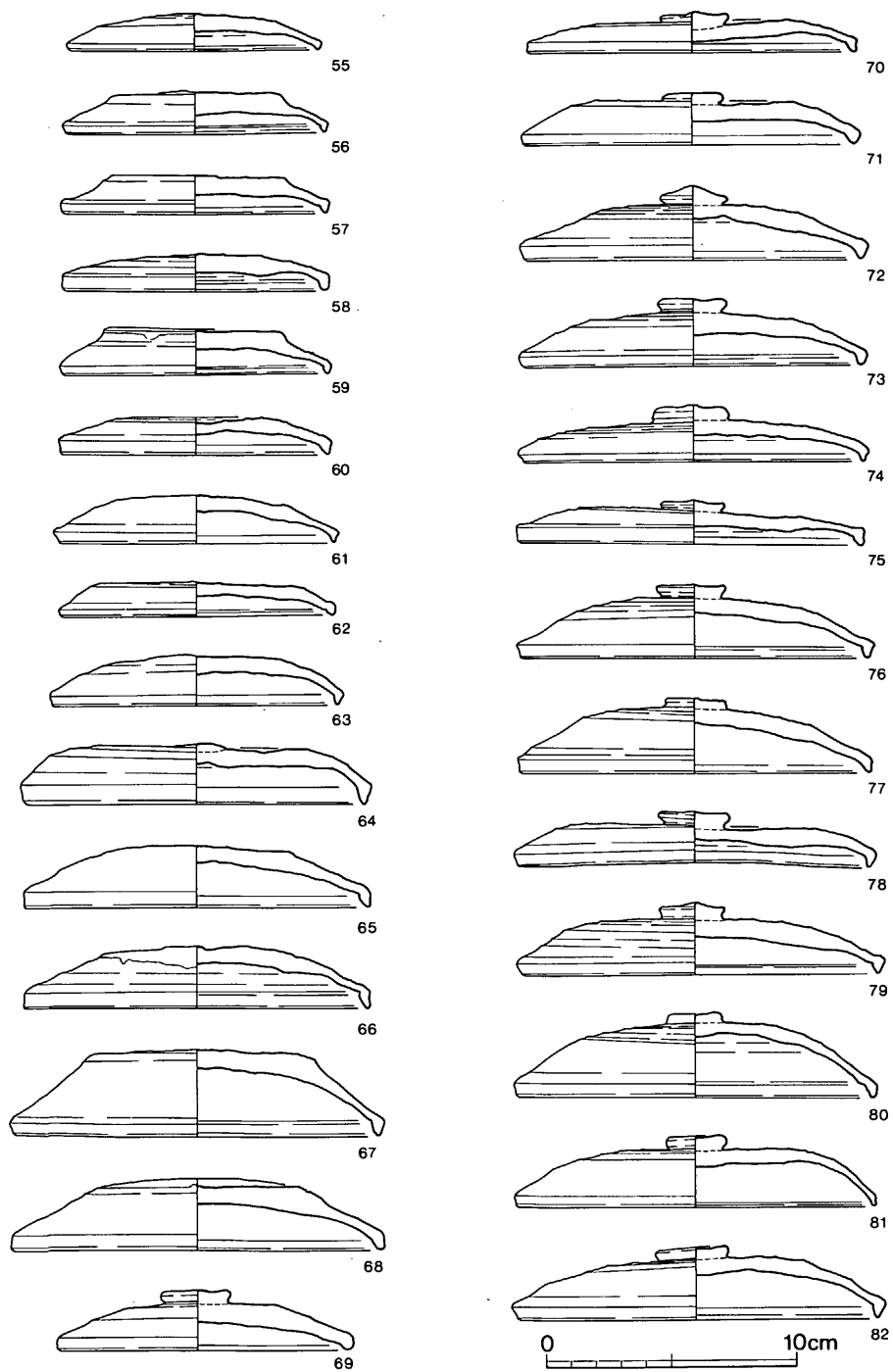
**皿**（165～167） 165・166の体部・口縁部は短く、外反する。166・167は焼ひずみで変形している。

**高杯**（168・169） 無蓋高杯である。杯部は浅くやや外傾する。168は焼があまり、器壁は磨滅する。169は口縁下に段をもつ。杯底部は回転ヘラ削り調整される。脚部は短く、端部に段をもつ。口径22.1cm。

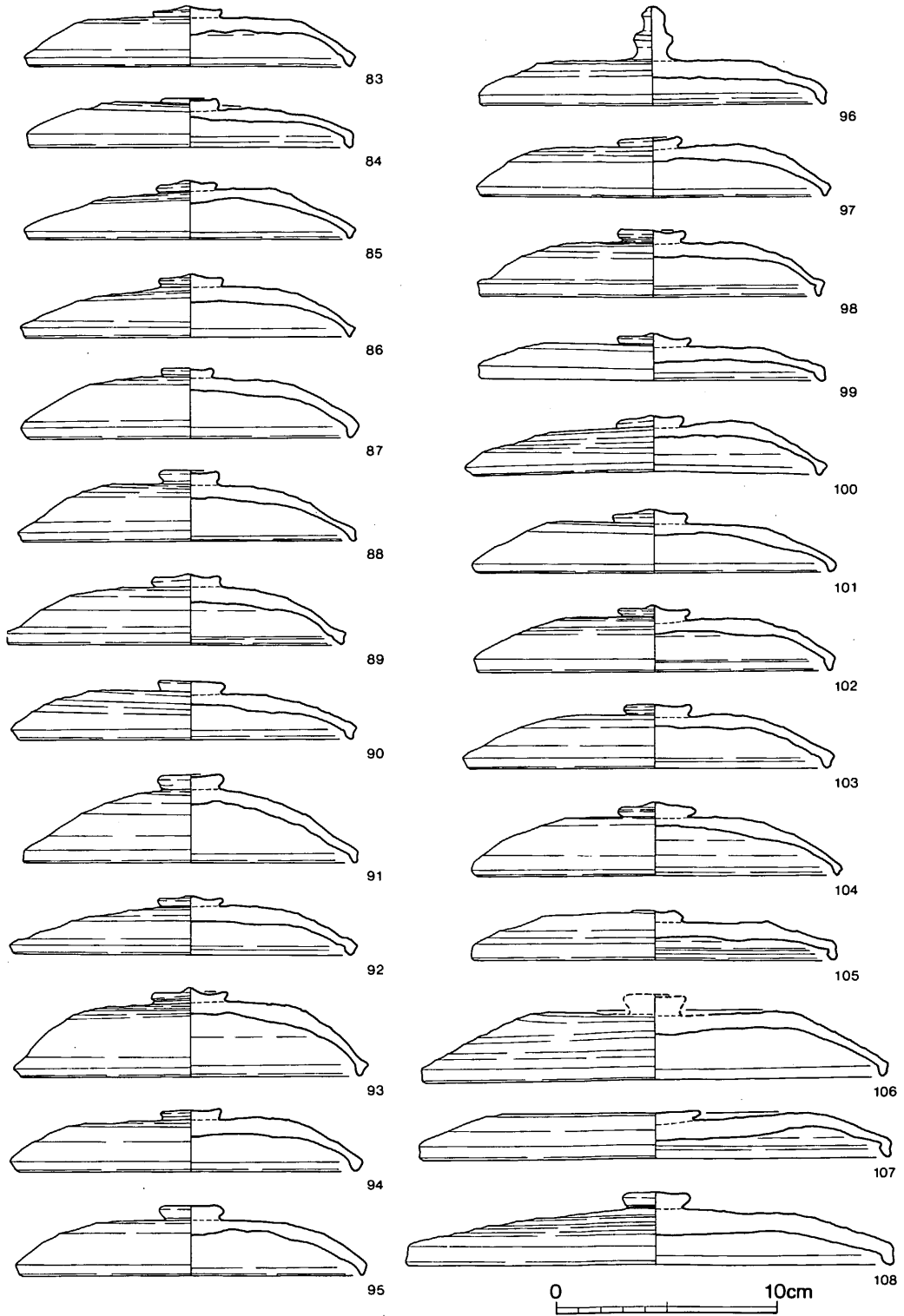
**蓋**（170～174） 短頸壺の蓋である。170・171は口径7.8～8.05と小形で、天井は平坦でつまみをもたない。172は歪である。173は天井部を欠く。体部は丸味をもち、口縁端部は外側へつまみ出される。174は口径15.5cmを測る径4.1cmの擬宝珠様のつまみをもつ。

**短頸壺**（175～177） いずれも底部を欠く。176は頸部は外反する。176は内傾し、胴部は丸い。177は胴部上位の肩は屈曲し稜線が入る。

**長頸壺**（178～184） 178～182は口頸部片で、大きく外反し口縁部となる。口縁端部の形態は、外反し丸く仕上げるもの（178・181）、外傾して、平坦部を有するもの（179）と丸く仕上げるもの（180）、水平に屈曲されるもの（182）がある。183・184は肩部と胴部との境が体部中央より上方にあり鋭く稜線が入る。183は胴部下位、184は屈曲部以下を回転ヘラ削り調整する。底部端にハの字形の高台をもつ。



第131图 灰原出土土器実測图① (縮尺 1/3)

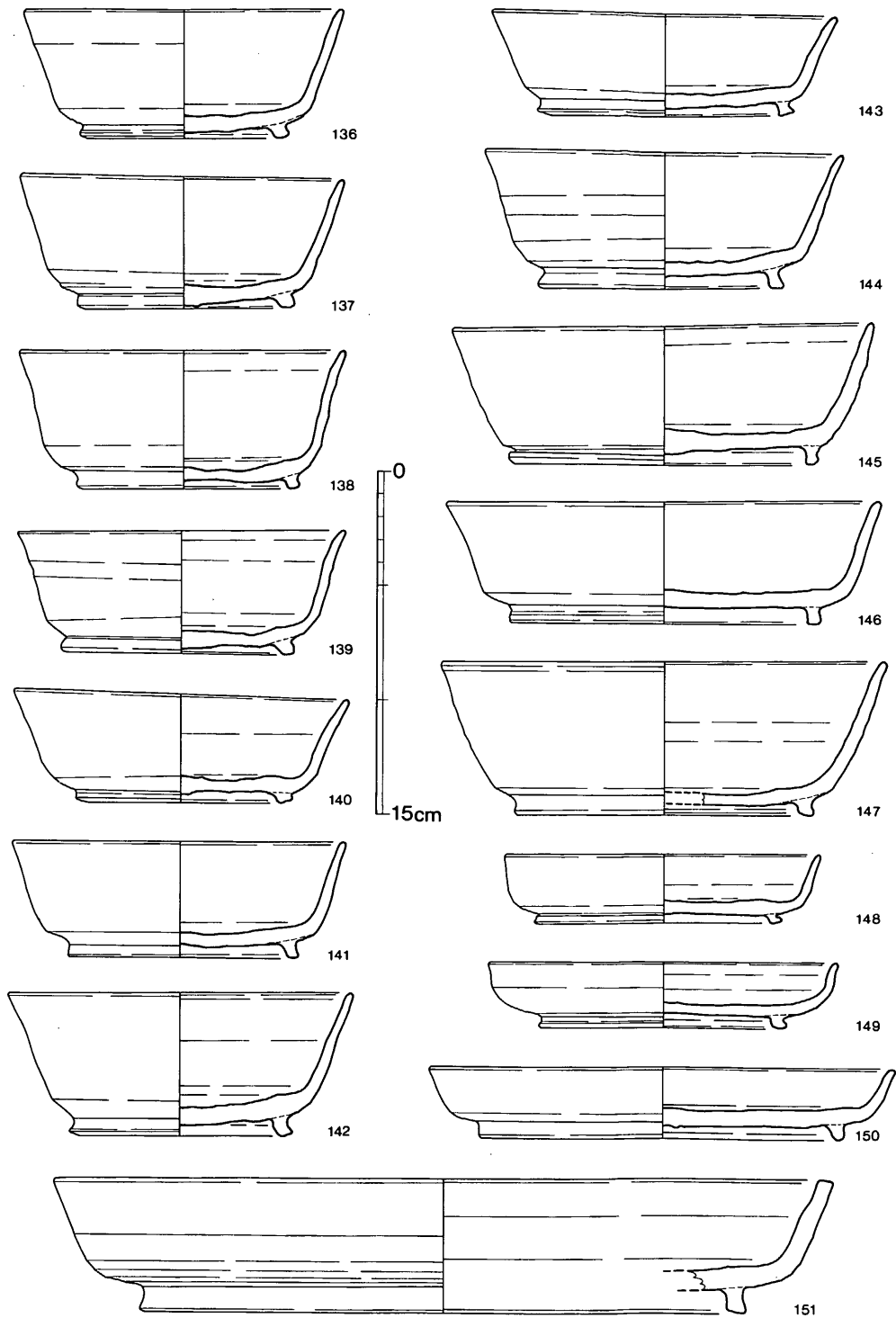


第132图 灰原出土土器实测图② (縮尺 1/3)

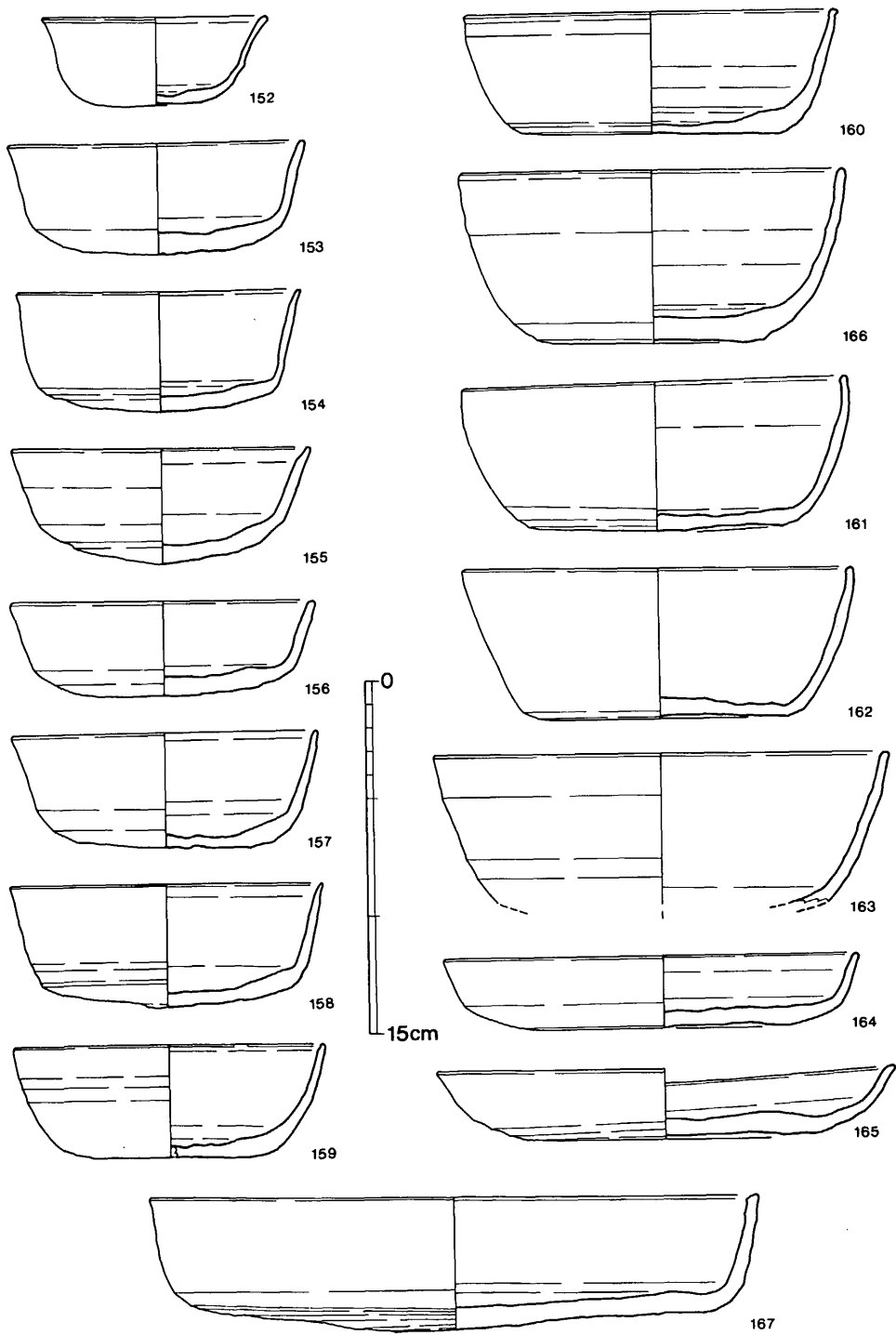


第133图 灰原出土土器实测图③ (縮尺 1/3)

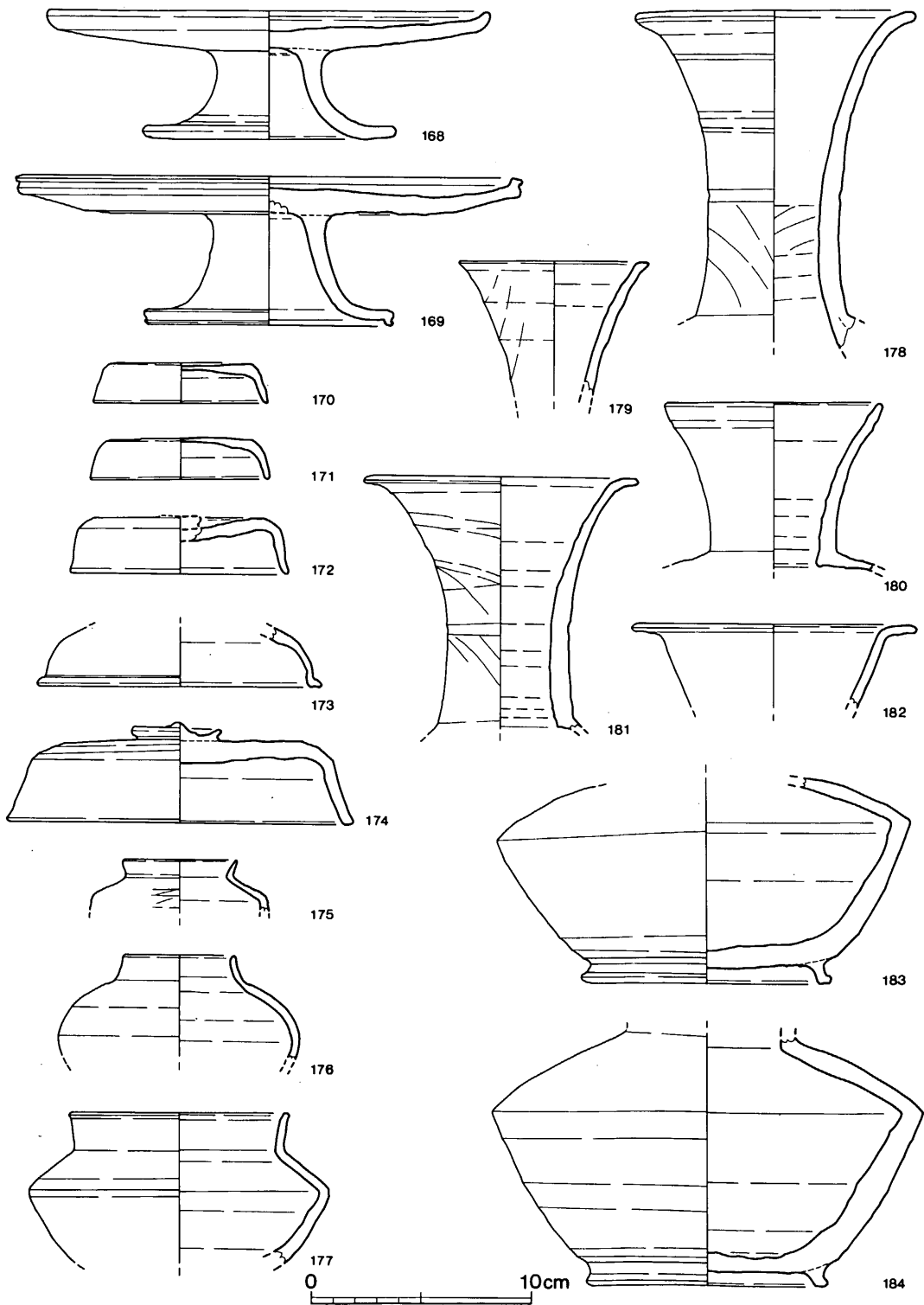




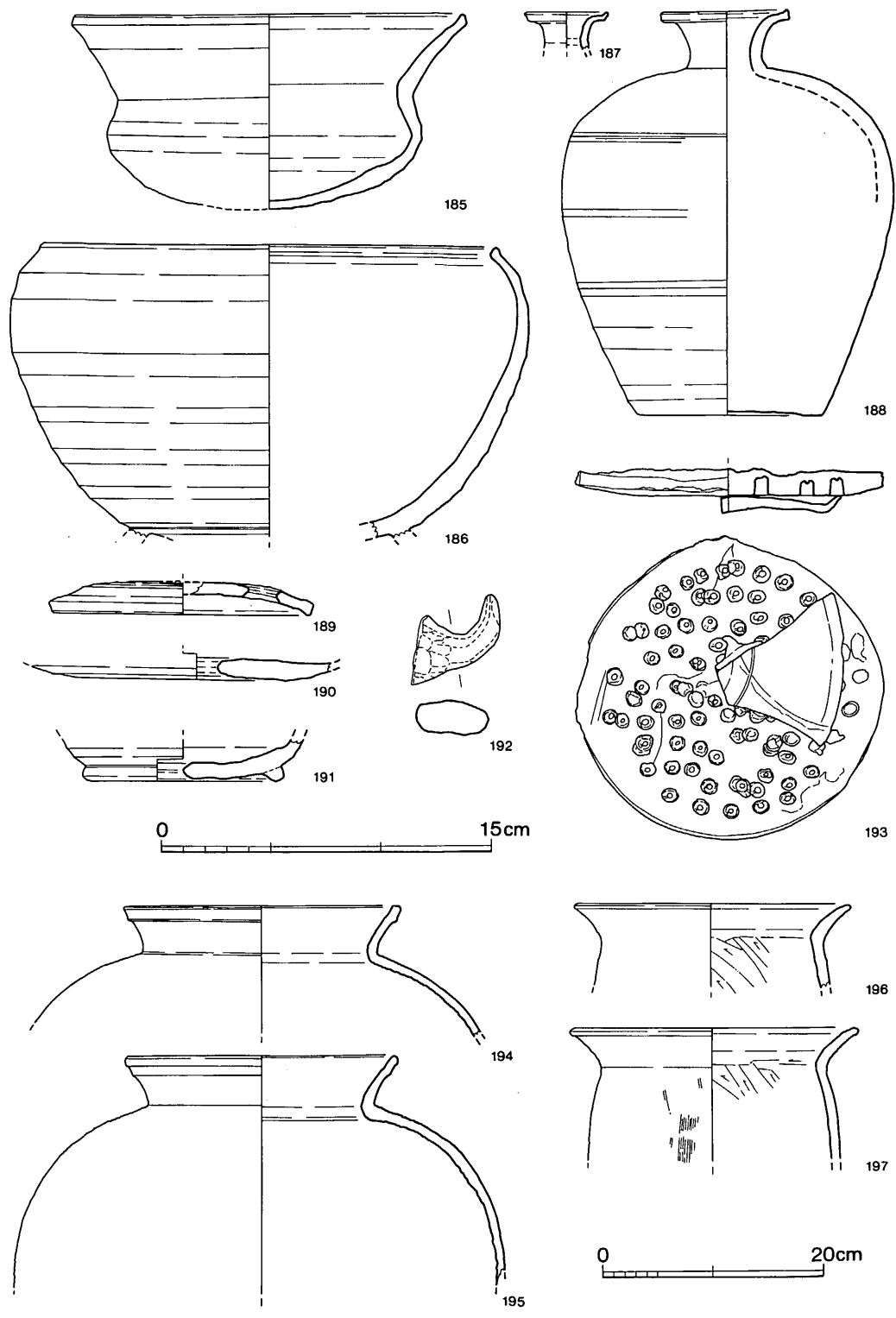
第134图 灰原出土土器実測图④ (縮尺 1/3)



第135図 灰原出土土器実測図⑤ (縮尺 1/3)



第136图 灰原出土土器実測図⑥ (縮尺 1/3)



第137图 灰原出土土器实测图⑦ (缩尺 1/3)

壺 (185) 口頸部は、くの字に曲り、外傾して大きく開き、端部は鋭い。底体部は丸味をもつ。口径17.6cm。

鉢 (186) 口縁部は内弯し、端部はわずかに直立する。体部は丸味をもつ。胴部中位以下は回転ヘラ削り調整される。高台がつく。

瓶 (187~188) 187は口頸部片。端部は外傾する。口径3.65cm。188は完形品。口頸部は外反し、端部上部をわずかにつまみ出す。肩部から胴部にかけて丸味をもち、底部は平坦である。肩に一条、肩部と胴部の境に二条、胴部中央に一条、下部に二条のにおい沈線を施す。胴部下位から底部外端は回転ヘラ削り調整。

穿孔土器 (189~191) 焼成前に穿孔された土器で、189は杯蓋の天井部と体部の境に径1.4cmの穿孔がある。190は皿の底部径1.8cmの穿孔。191は杯身の底部に径約2.4cmの穿孔。

把手 (192) 壺あるいは鉢の把手であろう。

不明土器 (193) 片面は剝離している。もう一方はナデ調整の後、径約0.7cmの穴が竹管であけられる。深さは約0.6~0.9cmを測る。この面に土器片が付着している。

甕 (194・195) 甕の口頸部から肩部にかけての破片である。短く外反し、端部が肥厚する。肩部外面は格子文様の叩き目、内面は弧状の具痕が見られる。

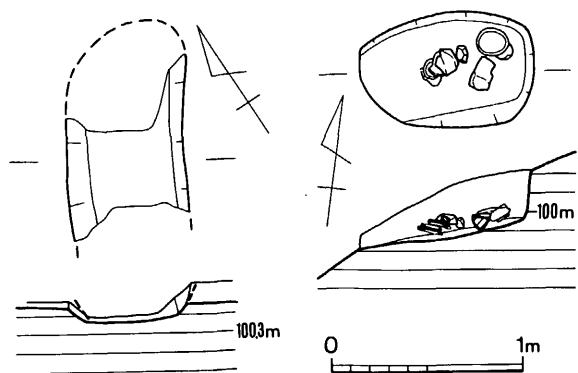
#### 土師器

甕 (196~197) 口頸部はくの字状を呈し、口縁部は短く外反する。端部は丸い。196は外面ナデ、内面は頸部以下をヘラ削り調整。197の外はハケ目後、横方向のナデ調整。

### (8) その他の遺構

土壙 (図版77-2、第138図) 調査区西側の標高約100m、灰原の西側上部で検出した隅丸長方形の土壙で西側壁は削平されている。長辺0.9m、短辺0.6m、深さ0.3mを測る。中には杯蓋・杯身、土製置台、窯壁片が収められ窯の祭祀遺構と考える。

不明遺構 (第138図) 調査区西側隅の標高100.40mで検出した。上部は削平を受け詳細は不明である。現存幅0.57m、深さ数cmで、長辺が丘陵の等高線に直交



第138図 土壙・不明遺構実測図 (縮尺 1/40)

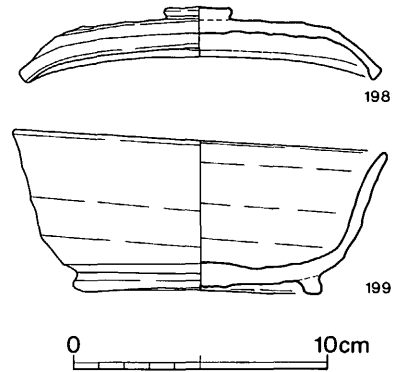
することから小形の窯跡の可能性はある。

この他に、14号・15号窯跡の間、15号窯跡上部に不整形の窪みがあるが性格不明である。

#### 出土遺物 (第139図)

蓋杯・蓋 (198) 焼きひずみで変形する。

蓋杯・身 (199) 高台つきのもので蓋と同様に变形している。外面は磨滅が著しい。焼があまく、白灰色を呈する。底部外面は未調整である。



第139図 円形土壺出土土器実測図 (縮尺 1/3)

### (9) 小 結

K地区の調査では5基の窯跡が検出された。窯跡群の所在する谷は、牛頸川右岸で最も大きく開いた谷である。しかし登窯を築くのに適した急斜面は、入口付近の北側斜面のみで、奥に行くほど谷は浅く、緩斜面となる。

窯は、丘陵北側斜面の中腹標高100～106mの間に構築されている。14号窯・17号窯は全長5.4mほどでやや大形である。14号窯は、煙道が2個検出されたが、一方は埋めもどされ、下層に石・置台、上面に杯蓋が並べられており、窯の祭祀を考える上で貴重な例である。17号窯は、他の窯跡に比して胴張りが強く、最大幅1.8mを測る。また現地表から床面までは0.7mを測るが窯体の残存状況や旧地形を復原すると、地下式ではなく、半地下式の登窯と判断でき、今回調査した中では唯一の形態である。出土遺物は、蓋杯が少なく、高杯・盤が多く見られ、これらを専門に焼成したものと考えられる。15号・16号窯は、3.2mほどの平均的な規模である。15号窯の焼成部前面の天井は、スサ入り粘土で、修理、復原されており興味深い。16号窯煙道部上面は、あらかじめ斜面を溝状に削り出しており、雨水の流入に対して配慮している。18号窯は全長2.5mと小形である。

操業の期間及び焼成の回数については、14・16・17・18号は床の重なりは見られず短期間の操業と思われる、14・15号窯は補修等から少なくとも2回の操業が考えられる。

各窯の先後関係は、灰原の堆積状態から、15・16・17号窯は18号窯より新しく、14号は15号窯より新しいと考えられる。

本窯跡群の操業は、8世紀前半代から半ばにかけて行なわれたと思われる。

## 9 L地区（道ノ下窯跡群）の調査

### (1) 調査の概要（図版85・86）

周辺道跡建設予定地内の調査で、調査対象地区のうち最も北側の平野部に近く、谷は東から西に向って開く。調査前の分布調査では谷入口付近の沢に須恵器片が散乱しており、数基の窯の存在が予想された。

谷は竹・雑木等の繁茂が著しく足を踏入れることも困難な状況であり、伐採に約二週間費やした。地形測量後、丘陵裾部にトレンチ設定し窯・灰原の検出作業を行なったが確認はできなかった。

谷の入口に散布していた須恵器の窯体・灰原はこの入口南側の急斜面に存在すると考えられる。路線外にあたるため伐採ができず、窯体の位置を確認するまでには至らなかった。

（池辺元明）

# 遺物一覽表

## 凡 例

1. 遺物番号は窯跡群ごとに通し番号とし、実測  
図番号・写真番号と共通である。
2. 観察欄のAは色調、Bは胎土、Cは焼成、D  
は残存率を示す。



A-1地区(井手窯跡群)

遺物番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態及び手法の特徴	観察
第10図 1	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 12.5 器高 2.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	焼け歪で、変形する。口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
2	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 12.7 器高 2.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部はほぼ平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
3	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 13.8 器高 1.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
4	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.3 器高 2.8 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は、ほぼ垂直下り、端部は丸い。 天井部は低く、平らに近い。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。外面に重ね焼痕あり。	A 内・外、灰色 B 細砂粒多含、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
5	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.7 器高 2.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、体部にかけて丸味をもつ。 器壁は荒れて、調整不明。	A 内・外、白黄色 B 細砂、粗砂多含、礫含 C 不良 D ほぼ完存
6	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.5 器高 2.8 つまみ径 3.4 つまみ高 0.8	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らに近い。内面口縁部に重ね焼痕あり。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
7	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.7 器高 1.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	焼け歪で変形する。 外面口縁部に重ね焼痕あり。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色～暗青灰色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
8	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.7 器高 2.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
9	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.6 器高 2.9 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は、内傾し、端部は丸い。外面に重ね焼痕あり。 天井部は、低く平らである。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
10	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.8 器高 2.4 つまみ径 2.7 つまみ高 0.3	口縁部は、垂直に下り、端部は丸味をもつ。 天井部は低く、平らである。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～茶褐色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
11	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 15.7 器高 2.4 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	やや変形する。口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は低く、平らに近い、外面体部との境に重ね焼痕。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。外面にヘラ記号あり。	A 内、緑灰色～茶褐色 外、茶褐色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
12	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 16.0 器高 1.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は、やや外傾し、端部は鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 $\frac{1}{2}$ 未調整。	A 内・外、灰色～茶色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
13	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 16.2 器高 1.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は、外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
14	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 16.5 器高 1.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	焼け歪で、口縁部が変形する。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
15	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 17.7 器高 2.4 つまみ径 3.0 つまみ高 1.1	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色 B 細砂少含、砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
16	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 20.1 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、やや外傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
17	蓋杯 (蓋)	1号窯 灰原	口径 20.3 器高 4.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、体部にかけて丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。重ね焼痕あり。	A 内・外、明灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存

## A-1地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
18	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 12.0 器高 3.7 高台径 7.0 高台高 0.5	体部・口縁部は、やや外反してのび、端部は丸い。 底部は、中央がやや下る。高台は内側につく。 底部内外面はナデ調整。	A 内・外、青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
19	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 11.5 器高 3.4 高台径 7.1 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、ほぼ平らである。内側に高台がつく。 底部外面はナデ調整。内側は回転ナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
20	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 11.5 器高 3.5 高台径 8.0 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、中央がやや上る。やや内側に高台がつく。 底部内外面は、ナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
21	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 11.7 器高 3.7 高台径 6.8 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反し上外方へのび、端部はやや鋭い。 底部は中央がやや下り、内側に高台がつく。	A 内・外、青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
22	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 12.6 器高 4.0 高台径 8.2 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方へのび、端部はやや鋭い。底部は 中央がやや下る。内側に高台がつく。 底部外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
23	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 13.0 器高 4.1 高台径 9.0 高台高 0.4	体部・口縁部は、やや外反してのび、端部は丸い。 底部は、中央がやや下る。内側に高台をもつ。 外面下端、回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青灰色 外、青灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
24	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 13.4 器高 3.9 高台径 8.9 高台高 0.5	体部・口縁部は、やや外反気味にのび、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、内側に高台をもつ。 底部内外面はナデ調整。	A 内、青灰色 外、灰色～暗灰色(自然釉) B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
25	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 13.5 器高 4.3 高台径 8.6 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部はやや鋭い。 底部は、中央部がやや窪む、高台は内側につく。 底部内外面はナデ調整。	A 内、黄灰色 外、黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
26	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 13.6 器高 4.1 高台径 8.6 高台高 0.5	体部・口縁部はやや外反してのび、端部は鋭い。 底部は、中央がやや上る。高台は内側につく。	A 内、青灰色～明茶色 外、灰色～明茶色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
第11図 27	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.0 器高 3.8 高台径 8.4 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部にやや鋭い。 底部は、中央がやや高い。高台は内側につく。	A 内・外、緑灰色 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
28	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 13.9 器高 4.4 高台径 9.5 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反してのび、端部は内傾する。 底部は中央部が高い。高台は内側につく。 底部内外面ナデ調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 精良 C 普通 D ほぼ完存
29	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.0 器高 6.2 高台径 9.7 高台高 0.7	体部深い、口縁部は上外方にのび、端部は丸味をもつ。 底部は凹凸がある。	A 内・外、暗黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
30	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.2 高台径 9.0 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、中央部がやや低い。高台は内側につく。 底部内外面、ナデ調整。	A 内、黄灰色 外、黒灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
31	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.1 器高 4.1 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は、やや外反してのび、端部は丸い。 底部は、平らである。高台は底部端につく。 底部外面端は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
32	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.2 器高 4.2 高台径 9.0 高台高 0.7	体部・口縁部は、外反してのび、端部は丸い。 底部は、中央が低い。高台は内側につく。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
33	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.4 器高 4.1 高台径 8.5 高台高 0.5	体部・口縁部は、やや外反してのび、端部は丸い。 底部は、中央がやや窪む。高台は内側につく。 底部外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、白灰色 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
34	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.7 器高 4.2 高台径 10.3 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らである、高台は底部端につく。 体部外面下位は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
35	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.7 器高 4.2 高台径 9.7 高台高 0.3	体部・口縁部は、上外方にのび、端部やや鋭い。 底部は中央がやや低い。高台はやや内側につく。	A 内、茶灰色 外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
36	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 14.8 器高 4.5 高台径 10.3 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反気味にのび、端部はやや鋭い。 底部は中央がやや高い。底部端に高台がつく。 底部内外面ナデ調整。	A 内、黄灰色～灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
37	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 15.0 器高 4.2 高台径 9.9 高台高 0.5	焼け歪で、底部にヒビ割れが入り、変形する。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
38	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 15.0 器高 4.0 高台径 10.3 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反気味にのび、端部は丸い。 底部は凹凸がある。高台は内側につく。 底部端は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
39	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 18.5 器高 6.0 高台径 11.0 高台高 0.6	体部・口縁部は、やや内弯気味にのび、端部は丸い。 底部はほぼ平らである。高台は内側につく。 底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色～褐色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
40	蓋杯 (身)	1号窯 灰原	口径 18.8 器高 6.3 高台径 12.4 高台高 0.4	体部・口縁部は、外反気味にのび、端部は丸い。 底部は平らである。高台はやや内側につく。 底部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、明灰色 外、灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
41	盤	1号窯 灰原	口径 26.2 器高 4.6 高台径 18.9 高台高 0.6	体部・口縁部は、外反してのび、端部は丸い。 底部は平らで、高台は内側につく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
42	盤	1号窯 灰原	口径 26.5 器高 5.0 高台径 19.3 高台高 0.7	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らである。高台は内側につく。 底部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、褐色～暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
43	皿	1号窯 灰原	口径 13.2 器高 2.1 底径 10.3	体部・口縁部は、短く、やや外反してのび、端部は丸味をもつ。 底部は凹凸がある。底部外面ナデ調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色 B 細砂多含 C 普通 D ほぼ完存
44	皿	1号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.0 底径 12.5	体部は丸味をもち、口縁部にやや外反する。端部は丸い。 底部は、ほぼ平らである。 底部内外面はナデ調整。	A 内、黄灰色 外、紫灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
45	皿	1号窯 灰原	口径 19.7 器高 1.9 底径 16.8	体部・口縁部は短く、外反する。端部は丸い。 底部は平らである。 外底部に板状圧痕あり。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
46	皿	1号窯 灰原	口径 19.4 器高 2.4 底径 16.0	焼け歪で変形する。 外底部に板状圧痕あり。	A 内、白灰色 外、黄灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
第12図 47	高杯	1号窯 灰原	口径 21.7	杯部は浅く、口縁部はやや内傾して立上る。 端部は内傾する。 杯底外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 杯部残 $\frac{1}{2}$
48	高杯	1号窯 灰原	口径 22.0 器高 7.8 脚部径 11.2 脚部高 5.8	杯部は浅く、口縁部はやや外傾し、端部は平坦面をなす。 杯部底外面、一部回転ヘラ削り調整。 脚部は短く、大きく開く。シボリ痕が残る。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
49	高杯	1号窯 灰原	口径 28.3	杯部は浅く、口縁部は内傾し、短く立上る。 杯底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 $\frac{1}{2}$ 未調整。	A 内、緑灰色～黒色 外、緑灰色～褐色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 杯部残 $\frac{1}{4}$
50	高杯	1号窯 灰原	口径 20.8	杯部は浅く、口縁部は、短く立上り、端部は内傾する。 杯底外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、緑灰色～茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D 杯部残 $\frac{1}{2}$
51	高杯	1号窯 灰原	口径 19.8 器高 8.6 脚部径 10.7 脚部高 6.6	杯部は焼け歪で大きく変形する。 杯部底は、一部回転ヘラ削り調整。 脚部は短く、大きく開く。裾部は変形する。	A 内・外、灰色～茶褐色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

## A-1地区

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
52	高杯	1号窯 灰原		長い脚部片である。 外面にシボリ痕が残る。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 脚部残 $\frac{1}{2}$
53	蓋	1号窯 灰原	口径 16.3 器高 4.2 つまみ径 3.0 つまみ高 1.7	体部・口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は内傾する。 天井部は平坦で、中央につまみをもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
54	短頸壺	1号窯 灰原	口径 10.8 頸部径 10.8 最大径 21.2	焼け歪で、口縁部が下る。 胴部外面中位以下は、回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
55	長頸壺	1号窯 灰原	口径 13.0 頸部径 7.0	頸部は外反しながら大きく開く。口縁部は斜外方に屈出させ、端部は丸い。 内外面にシボリ痕が残る。頸部中央に二条の沈線がある。	A 内、暗緑灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 頸部ほぼ完存
56	鉢	1号窯 灰原	口径 27.8 器高 18.8	体部・口縁部は、斜外方にほぼ直にのび、端部は平坦面をなす。底部は平坦である。 底部・胴部中位以下は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黒灰色～紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

## A-2地区 (井手窯跡群)

第15図 57	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.0 器高 3.5 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁端部内面に身受けのかえりがつくものであり、かえりは短く、端部水平面より内側におさまる。天井部は回転ヘラ削りし、中央部に扁平な擬宝珠様つまみがつく。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
58	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 16.0	口縁端部内面に身受けのかえりがつき、かえりは短くて、端部水平面より内側におさまる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。つまみを欠損する。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
59	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 10.0 器高 1.0	口縁端部は平坦面を有する。つまみのつかない天井部は回転ヘラ削り調整している。内面に身との重ね焼き痕跡が残る。小形品である。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
60	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 11.8 器高 2.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は垂直に屈曲させ、端部は丸い。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は稜が入る。扁平なつまみがつく。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 不良 D ほぼ完存
61	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.3 器高 3.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に屈曲し、口唇部に凹線が入る。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。頂部をおさえた扁平なつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
62	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.3 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、端部はとがり気味となる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、暗灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 口縁部残 $\frac{1}{2}$
63	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.4 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に屈曲し、口唇部中央部が凹む。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。全体に厚手づくりである。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
64	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は内傾気味に屈曲する。天井部外面は回転ヘラ削りし、体部との境は焼け歪もあって丸い。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、暗青灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
65	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.8 器高 2.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部はとがる。天井部に近い体部の一部にのみ回転ヘラ削りする。台状のつまみがつく。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
66	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.8 器高 3.0	口縁部は垂直に近く屈曲し、端部は丸い。天井部はつまみがつかず、未調整の平坦面を有す。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 普通 D $\frac{1}{4}$
67	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.9 器高 2.7 つまみ径 3.2 つまみ高 0.5	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部から体部上位にかけて回転ヘラ削りする。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
68	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.2 器高 3.5 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は段がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、淡褐色 外、淡灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
69	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.3 器高 3.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は内傾し、端部は丸味をもつものややとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は丸くつくられている。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 不良 D ほぼ完存
70	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.3 器高 3.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は丸くつくられている。頂部をわずかに突出させた扁平なボタン状のつまみがつく。	A 内・外、緑灰色 B 細砂、粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
71	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.3 器高 3.0 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲し、口縁部に沈線が入る。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒、粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
72	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.4 器高 3.1 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部を垂直に屈曲し、端部はややとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境はわずかに稜がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、緑灰色 外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
73	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 14.8 器高 3.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は明瞭である。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
74	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.7 器高 3.2 つまみ径 3.3 つまみ高 0.7	口縁部は若干内傾し、端部は丸い。天井部は器壁が厚く、外面は回転ヘラ削りする。体部との境は段がつく。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、明茶灰色 外、灰色～黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
75	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.6 器高 2.4 つまみ径 3.5 つまみ高 0.8	口縁部は若干内傾し、端部は丸い。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に稜がつく。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含、礫少含 C 良好 D 1/2
76	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.7 器高 3.3 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	口縁部は内傾端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は丸味をもっていて不明瞭である。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、黄白色 外、白灰色 B 粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
77	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.9 器高 3.2 つまみ径 3.4 つまみ高 0.8	口縁部は垂直に屈曲し、口唇部を凹弯する。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に稜がつく。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
78	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 15.8 器高 2.9 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、内面には鋭段がつく。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は不明瞭である。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、黄褐色 外、橙褐色～灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
79	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 16.0 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は垂直に屈曲し、体部との境に鋭稜がつく。天井部は広範囲を回転ヘラ削りし、体部との境に稜がつく。頂部を凹ませた扁平なつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 粗砂少含 C 良好 D 1/2
80	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 16.0 器高 2.3 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く屈曲し、端部は丸い。天井部の広範囲を回転ヘラ削りし、体部との境に稜線が入る。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
81	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 16.1 器高 3.1 つまみ径 3.3 つまみ高 1.0	口縁部は内傾し、端部はとがる。天井部は異常なほど器壁が厚く、外面は回転ヘラ削りする。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂、粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
82	蓋杯 (蓋)	3号窯 灰原	口径 16.4 器高 2.6 つまみ径 3.5 つまみ高 0.8	口縁部は垂直に屈曲し、端部は丸い。天井部から体部にかけて回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
第16図 83	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 8.3 器高 3.6 高台径 6.0 高台高 0.3	小形器である。口縁部は外反気味に開き、端部は丸い。底部外端近くに、内面を接地した高台がつく。底部はナデ調整である。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
84	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 11.4 器高 3.7 高台径 7.5 高台高 0.5	体部、口縁部は外反する。底部の内側に高台を貼付する。底部はナデ調整である。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存

## A-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
85	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 13.8 器高 5.4 高台径 9.8 高台高 0.6	体部は緩く外反し、口縁部は外反度を強める。 底部内側に、ハの字状に開く高台がつく。 底部はナデ調整である。	A 内、茶灰色 外、黄灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
86	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 14.4 器高 6.3 高台径 9.5 高台高 0.5	体部は外反し、口縁部は強く外反して、口径をひろげる。 底部にはハの字状に開く高台がつく。 底部はナデ調整である。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～白灰色 B 細砂少含 C 普通 D %
87	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 14.4 器高 6.2 高台径 9.5 高台高 0.7	体部、口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。 底部の内側に内面を接地させてハの字状にひろく丈の長い高台がつく。底部は未調整である。	A 内、灰味茶色 外、明茶灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
88	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 14.4 器高 5.7 高台径 10.3 高台高 0.7	体部、口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。 底部外端部に、内面を接地させた四角形の高台がつく。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
89	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 14.6 器高 5.7 高台径 9.8 高台高 0.6	体部、口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。 底端部は一部回転ヘラ削りし、内側近くに四角形で太目の高台がつく。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
90	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 14.6 器高 6.0 高台径 9.8 高台高 0.7	体部、口縁部は直線的に外反し、端部内面は平坦面を有し稜がつく。体部下位に一条の沈線が入る。 底部内側に丈の長い細目の高台がつく。	A 内、青灰色 外、黄灰色～青灰色 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
91	蓋杯 (身)	3号窯 灰原	口径 14.9 器高 4.4 高台径 11.1 高台高 0.6	口径に比して器高の低いものであり、体部は外反し、口縁部は丸い。底部の外側近くに断面四角形の高台がつく。 底部外周は回転ヘラ削りする。	A 内、黒色 外、黒灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
92	盤	3号窯 灰原	口径 18.9 器高 2.9 高台径 13.7 高台高 0.3	皿に高台のついたものである。体部は外反し、口縁部内面は平坦面を有し稜がつく。底部内側に四角形で丈の低い高台がつく。	A 内、黄灰色 外、茶灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
93	皿	3号窯 灰原	口径 13.9 器高 1.9	体部、口縁部は外反度が強く、端部は丸い。 底部全面と体部下位に回転ヘラ削りする。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D %
94	皿	3号窯 灰原	口径 17.4 器高 2.7	体部は底部との境いに鋭く稜をなして外反しており口縁部で再び強く外反する。底部は静止ヘラ削りする。	A 内・外、灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D %
95	高杯	3号窯 灰原	口径 19.0	無蓋高杯である。口縁部は体部から垂直に屈曲して立ち、端部は平坦で内傾する。杯部中ほどに段がつく。脚裾部を欠損する。	A 内・外、黄土色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D %
96	高杯	3号窯 灰原	脚部径 11.2 脚部高 5.6	脚部のみである。脚端部近くに段を有する。 内外面とも横ナデ調整である。	A 内、黄灰色 外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 脚部ほぼ完存
97	蓋	3号窯 灰原		短頸壺の蓋と思われる。口縁部は短く外反し、端部は平坦で外傾する。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は鋭く段がつく。つまみがつくと思われる。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D %
98	短頸壺	3号窯 灰原	口径 9.9 頸部径 9.8	胴部上位以上のみである。頸部は外反気味に立ち口縁部は平坦で肥厚する。	A 内、茶灰色 外、暗灰色 B 精良 C 良好 D 口縁部残 $\frac{1}{2}$
99	短頸壺	3号窯 灰原	最大径 20.8	口縁部を欠損する。胴部最大径は上位にあり丸くつくられている。胴部下半は回転ヘラ削りする。高台は内側を接地するが焼き歪により傾く。	A 内、暗灰色 外、灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
第17図 100	長頸壺	3号窯 灰原	口径 13.0 頸部径 8.0 最大径 21.5	脚部近くを欠損する。頸部は外反し、口縁部は外反度を強めて口径を大きくしている。胴部と肩部の境は上方に位置し、鋭くとがって稜がつく。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 頸部ほぼ完存
101	長頸壺	3号窯 灰原	最大径 19.0	胴部のみである。胴部と肩部の境は上方に位置し、鋭くとがって稜がつく。高台はハの字状に開く。 胴部下半は回転ヘラ削りする。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 胴部残 $\frac{1}{2}$

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
102	長頸壺	3号窯 灰原	最大径 21.0	胴部のみである。胴部と肩部の境は上方に位置し、鋭くとがって稜がつく。高台はハの字状に開く。胴部下半は回転ヘラ削りする。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 胴部残½
103	長頸壺	3号窯 灰原	口径 12.0 頸部径 7.3	口頸部のみである。頸部は緩く外反し、口縁部は外反度を強め、端部近くで口径を大にする。頸部中位に二条の平行沈線が入り、基部に工具痕がつく。	A 内、灰色～黒色 外、暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 頸部残½
104	長頸壺	3号窯 灰原	口径 12.4 頸部径 6.3	頸部は緩く外反し、口縁部は外反度を強め端部近くで口径を大にする。頸部内外面にしぼり痕が残る。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部ほぼ完存
105	長頸壺	3号窯 灰原	口径 13.4	頸部中位に二条の平行沈線が入る。口縁部は外反し、端部は屈曲して平坦面をなす。	A 内、灰色～黒色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部残½
106	長頸壺	3号窯 灰原	最大径 22.0	口頸部を欠損する。肩部と胴部の境はやや上方に位置し、鋭くとがって稜が入る。胴部下半は回転ヘラ削りする。底部外端部にハの字状に開く高台がつく。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 胴部残½
107	長頸壺	3号窯 灰原	最大径 21.3	肩部と胴部の境はやや上方に位置し、境部は鋭くとがって稜が入る。胴部下半の広範囲を回転ヘラ削りする。断面四角形の高台を貼付する。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 胴部残½
第18図 108	鉄鉢	3号窯 灰原	口径 19.1 器高 12.0	口縁部を急激に内弯させ、端部は平坦で内傾する。胴部下半は回転ヘラ削りし、底部は尖る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D %
109	鉄鉢	3号窯 灰原	口径 21.8	口縁部を急激に内弯させ、端部は平坦で内傾する。胴部下半は回転ヘラ削りする。尖り底の底部を欠損する。	A 内、暗灰色 外、黒色～暗灰色 B 粗砂少含 C 良好 D ¼
110	瓶	3号窯 灰原	口径 8.2 頸部径 4.0 最大径 16.1	外反する頸部は口径が小さく、口縁部は屈曲して立ってくる。長胴の胴部下面を欠損している。胴部は広範囲を回転ヘラ削りする。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 微砂、細砂少含 C 良好 D ½

## A-3地区

第22図 111	蓋杯 (蓋)	4号窯 煙道	口径 14.9 器高 2.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲し、口唇部は凹む。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に甘い稜がつく。扁平なボタン状のつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
112	蓋杯 (蓋)	4号窯 煙道	口径 15.7 器高 1.2 つまみ高 0.6	焼き歪が著しい。口縁部は垂直に屈曲し、口唇部は凹む。天井部は回転ヘラ削りする。中央部に扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、青灰色～黒灰色 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
113	蓋杯 (蓋)	4号窯 煙道	口径 16.0 器高 1.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	若干焼き歪んでいる。口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。中央部に扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ½
114	蓋杯 (蓋)	4号窯 排水溝	口径 15.8 器高 1.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。天井部は外周部のみ回転ヘラ削りする。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。焼き歪む。	A 内、青灰色～茶灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
115	蓋杯 (蓋)	4号窯 排水溝	口径 20.2 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.9	口縁部は垂直に屈曲し、端部は丸い。口唇部は凹む。天井部は広範囲に回転ヘラ削りしている。中央部に擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、黄灰色 B 精良 C 普通 D ほぼ完存
116	蓋杯 (身)	4号窯 排水溝	口径 13.8 器高 4.0 高台径 8.4 高台高 0.5	体部は外弯して口縁部へのび、端部は丸い。底部の内側に高台を貼付する。底部に板状圧痕が残る。	A 内・外、灰色 B 砂粒、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
117	蓋杯 (身)	4号窯 排水溝	口径 15.2 器高 4.3 高台径 10.6 高台高 0.3	体部は外反し、口縁端部近くで外反気味に開く。底部外側に丈の低い高台がつく。底部はナデ調整である。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存

## A-3地区

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
118	蓋杯 (身)	4号窯 煙道	口径 18.3 器高 5.0 高台径 11.6 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。 体部と底部の境は角張って稜がつき、底部内側に断面四角 形の高台がつく。	A 内・外、青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
119	蓋	4号窯 煙道	口径 15.2 器高 3.9 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	短頸壺の蓋と思われる。口縁部は外反気味にのび、端部は 平坦で外傾する。天井部は広範囲を回転ヘラ削りし、体部 との境は段がつく。中央部につまみがつく。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
120	高杯	4号窯 煙道	脚部径 10.4 脚部高 4.1	脚部のみである。脚は丈が低く、外面にしぼり痕がつく。 脚裾部は折れて裾をひろげている。内外面とも横ナデ調整 である。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 脚部完存
121	高杯	4号窯 煙道	口径 20.7 器高 8.7 脚部径 9.5 脚部高 6.0	無高台の高杯である。口縁部は屈曲して直立する。口縁端 部上面を平坦に近い。杯底部は回転ヘラ削りする。脚は裾 部で垂直に近く屈曲する。内面に沈線が入る。	A 内・外、白灰色 B 細砂、粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
第28回 122	蓋杯 (蓋)	7号窯 堆積土	口径 15.8 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがり気味となる。口唇部 は凹湾する。天井部と体部の境は段がつく。焼き歪んでいる。	A 内・外、青灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
123	蓋杯 (身)	7号窯 焚口部	口径 12.8 器高 4.0 高台径 8.4 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。 底部の外側近くに内面を接地した低い高台がつく。底部は ナデ調整である。	A 内、紫灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
124	皿	7号窯 焚口部	口径 20.8 器高 1.7	焼き歪んでいる。体部は外反し、口縁端部は丸い。底部と 体部下面に回転ヘラ削りする。	A 内、暗灰色 外、緑灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
125	盤	7号窯 灰原	口径 21.0	高台がつくものと思われる。体部・口縁部は緩く外反する。 体部と底部の境は鋭く稜がつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 杯部残 $\frac{1}{2}$
126	壺	7号窯 灰原		上半部を欠損するが壺の胴部下半と思われる。 胴部外面は回転ヘラ削りし、底部はナデ調整で板状圧痕が つく。	A 内・外、黄灰色 B 精良 C 良好 D 体部ほぼ完存
127	蓋杯 (蓋)	7号窯 灰原	口径 16.2 器高 4.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	焼き歪んでいる。口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。 天井部は回転ヘラ削りする。体部との境は段がつく。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
128	蓋杯 (蓋)	7号窯 灰原	口径 19.8 器高 3.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は内傾しており、端部はとがる。口唇部を凹ませる。 天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は段がつく。擬宝珠 つまみがつく。	A 内・外、黄灰色 B 粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
129	蓋杯 (身)	7号窯 灰原	口径 14.3 器高 4.1 高台径 9.8 高台高 0.3	体部は外反気味にのび、口縁部で大きく外反する。底部や 内側に丈の低い高台がつく。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
130	蓋杯 (身)	7号窯 灰原	口径 13.9 器高 4.7 高台径 9.8 高台高 0.5	体部・口縁部は緩く外反し、口縁部は器壁がうすくなる。 高台は丈の低いもので、内面のみ接地する。	A 内・外、黄灰色 B 精良 C 普通 D %
131	長頸壺	7号窯 灰原	最大径 19.6	口頸部を欠損する。胴部と肩部との境はやや上方に位置し ており、鋭くとがって稜がつく。胴下部は回転ヘラ削りす る。ハの字状に開く高台がつく。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 胴部残 $\frac{1}{2}$
132	蓋杯 (身)	8号窯	口径 14.8 器高 4.0 高台径 10.3 高台高 0.4	体部・口縁部は外反し、端部は丸い。底部の外側近くに幅 広く、丈の低い高台がつく。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
133	蓋杯 (蓋)	9号窯 床面	口径 14.4 器高 1.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。天井部は回転ヘラ 削りする。焼き歪んでいる。	A 内・外、暗青灰色～黒色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
第29回 134	蓋杯 (蓋)	5号窯 灰原	口径 13.0 器高 2.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は内傾しており、端部はとがる。口唇部は凹み稜が つく。天井部は平坦で、回転ヘラ削り調整し、体部との境 は段がつく。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
135	蓋杯 (蓋)	5号窯 灰原	口径 17.6 器高 4.4 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は内傾しており、端部は若干とがる。天井部は回転ヘラ削り調整である。扁平なつまみがつく。焼き歪んでいる。	A 内、暗灰色 外、青灰色～灰色 B 粗砂多含 C 普通 D ほぼ完存
136	蓋杯 (蓋)	5号窯 灰原	口径 15.0 器高 2.2 つまみ高 0.4	口縁部は内傾しており、端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は段がつく。中央部に扁平なボタン状のつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、礫少含 C 普通 D ほぼ完存
137	蓋杯 (身)	5号窯 灰原	口径 14.0 器高 4.6 高台径 9.5 高台高 0.5	体部中位と口縁部近くの2カ所に凹線が入る。口縁部は器壁がうすく、とがり気味となる。底部の外側近くに、四角形の高台がつく。	A 内、茶褐色 外、灰色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
138	蓋杯 (蓋)	6号窯 東一括	口径 15.0 器高 2.8 つまみ径 3.2 つまみ径 0.5	口縁部は内傾し、端部はとがる。天井部はシャープな回転ヘラ削り痕を残す。体部との境はとがって稜をなす。扁平な擬宝珠様つまみがつく。	A 内、緑灰色 外、茶灰色～緑灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ⅔
139	蓋杯 (蓋)	6号窯 東一括	口径 15.7 器高 3.3 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に屈曲し、端部、口唇部は丸い。天井部は広範囲を回転ヘラ削りし、体部との境はあまり明瞭でない。扁平な擬宝珠様つまみがつく。	A 内・外、白灰色 B 粗砂多含 C 不良 D ⅔
140	蓋杯 (蓋)	6号窯 東一括	口径 16.1 器高 3.1 つまみ径 3.3 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。中央部に擬宝珠様つまみがつく。	A 内・外、灰色 B 細砂、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
141	蓋杯 (蓋)	6号窯 東一括	口径 16.5 器高 2.7 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部は丸味をもつ。天井部から体部の一部にかけて回転ヘラ削りし、体部との境は段がつく。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
142	蓋杯 (蓋)	6号窯 上面	口径 20.1 器高 2.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に近く屈曲し、端部はとがり気味である。口唇部を凹湾させる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に稜がつく。焼き歪んでいる。	A 内・外、青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
143	蓋杯 (身)	6号窯 東一括	口径 14.6 器高 5.7 高台径 9.5 高台高 0.7	体部、口縁部は緩く外反している。底部の外側近くにハの字状に開く丈の長い高台がつく。体部下位は回転ヘラ削りする。底部は横ナデである。	A 内、緑灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
144	盤	6号窯 上面	口径 24.7 器高 4.9 高台径 20.1 高台高 0.9	体部、口縁部はわずかに外反する。底部内側に丈の長い高台がつく。底部の広範囲に回転ヘラ削りする。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
145	蓋杯 (身)	6号窯 東一括	口径 13.2 器高 4.2	無高台杯である。体部は緩く外反し、口縁部との境はくびれて、再び外反する。口縁部のみ器壁がうすい。マメツのため底部調整法は不明である。	A 内・外、白灰色 B 粗砂少含 C 不良 D ほぼ完存
146	皿	6号窯 東一括	口径 19.3 器高 2.8	焼き歪んでいる。体部、口縁部は外反し、端部は丸い。底部は外周部分まで広範囲に回転ヘラ削りする。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
147	蓋	6号窯 東一括	口径 13.8 器高 3.0 つまみ高 0.5	焼き歪んでいる。短頸壺の蓋と思われる。口縁部はわずかに外反し、端部は平坦である。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は段がつく。	A 内・外、灰色 B 砂粒粗砂少含 C 良好 D ほぼ完存
148	高杯	6号窯 上面	口径 21.5 器高 7.5 脚部径 4.3 脚部高 9.4	無蓋高杯である。口縁部は直角に近く屈曲し、鋭く稜がつく。口縁部上面は平坦である。脚柱は外面にしぼり痕がつく。焼き歪んでいる。	A 内・外、青灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
149	高杯	6号窯 東一括	脚部径 11.6 脚部高 7.1	脚部はやや丈が高い。脚裾部は外反して裾をひろげており、端部は垂直に屈曲しとがる。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 脚部ほぼ完存
第30回 150	蓋杯 (蓋)	9号窯 灰原	口径 16.3 器高 2.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に屈曲し、口唇部に段がつく。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は稜がつく。扁平な擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、茶褐色～緑灰色 外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D ⅔
151	蓋杯 (身)	4～9号 窯斜面 採	口径 13.1 器高 5.2 高台径 9.3 高台高 0.4	体部は緩く外反気味にのび、口縁端部を短く外反させる。底部の外側近くに高台がつく。底部はナデ調整し、ヘラ記号を有する。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存

A-3 地区

遺番 物号	器種	出土 地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観 察
152	蓋 杯 (身)	4~9 号 窯 灰 原	口 径 14.8 器 高 4.2 高台径 11.0 高台高 0.4	体部、口縁部は外反し、器壁が厚い。底部の外側近くに丈の低い高台がつく。底部外面は未調整である。	A 内・外、黄褐色 B 粗砂少含 C 普通 D ¼
153	鉢	4~9 号 窯 灰 原	口 径 21.8	底部を欠損する。体部は直線的に外反し、口縁端部直下を凹弯させる。体部の広範囲を回転へら削りする。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 体部残½
154	高 杯	4~9 号 窯 灰 原	脚部径 11.7 脚部高 7.2	脚部のみである。脚部は緩く外反して裾をひろげ端部は平坦面を有する。脚柱部外面はしぼり痕が残る。	A 内・外、灰色~暗灰色~黒色 B 細砂少含 C 良好 D 脚部ほぼ完存
155	高 杯	4~9 号 窯 灰 原	口 径 31.4 器 高 14.4 脚部径 14.0 脚部高 12.9	無蓋杯であり、脚部の丈が長い、口縁部は直角に近く屈曲し、鋭く稜が入る。口縁部は内傾する平坦面を有す。脚柱外面はしぼり痕が残る。	A 内・外、白灰色~黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ¼

B-2 地区 (井手窯跡群)

第37号 1	杯	23号 窯 内	口 径 12.8 器 高 3.8 底 径 8.0	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。天井部は低く、平坦である。 内体部と底部との境は不明瞭。 外底部はへら切りのみで、未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色~暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D ½
2	蓋 杯 (蓋)	23号窯 土 壇	口 径 15.9 器 高 2.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。 外天井部は回転へら削り調整。 縁部に、重ね焼き時に付着した、杯の口縁部が付着している。	A 内、紫灰色~黒白 外、灰色~暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
3	蓋 杯 (身)	23号窯 土 壇	口 径 11.8 器 高 4.9 高台径 6.9 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。内体部と底部とは不明瞭ながら境界を成す。高台は断面四角形に近く、底部端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部 ¼、底部¼
4	皿	23号窯 土 壇	口 径 11.0 器 高 2.3 底 径 8.3	体部と口縁部との境は屈曲し、口縁部は外反する。内体部と底部との境界は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色~灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
5	皿	23号窯 土 壇	口 径 19.1 器 高 2.5 底 径 16.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、白灰色~褐色 外、黄灰色~淡褐色 B 細砂少含 C 良好 D ½
6	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 12.3 器 高 2.8 つまみ径 2.2 つまみ高 1.0	口縁部と体部との境は不明瞭である。天井部はやや低く丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
7	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 13.7 器 高 2.9 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部はやや垂直に近く、端部は丸い。口縁部と体部との境は不明瞭。天井部は丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 微細砂多含 C 良好 D 完存
8	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 13.5 器 高 2.7 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部はやや外傾し、端部は丸い。天井部は狭く、平坦である。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 普通 D ¼
9	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 13.7 器 高 2.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。口縁部の器肉は他に比して薄い。縁部は若干屈曲する。天井部はやや低く、平坦である。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色~暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
10	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 13.8 器 高 2.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。口縁部と体部との内面は不明瞭な凹線により境界を成す。天井部は低く、やや丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄灰色~暗灰色 B 微砂、細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
11	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 13.8 器 高 3.0 つまみ径 1.7 つまみ高 0.6	口縁部と体部との境は不明瞭である。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂多含 C 不良 D ¼
12	蓋 杯 (蓋)	23号窯 前 面	口 径 13.8 器 高 3.2 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有する。口縁部と体部との内面境界は不明瞭ながら分かれる。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂多含 C 不良 D ¼

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
13	蓋杯 (蓋)	23号窯 前面	口径 16.5 器高 2.3 つまみ径 1.8 つまみ高 1.0	口縁部は垂直に近い。天井部は低く、平坦である。 外天井部は未調整。 外天井部に板状圧痕がみられる。	A 内・外、青灰色 B 細砂多含 C 良好 D 完存
14	蓋杯 (身)	23号窯 前面	口径 15.2 器高 4.0 高台径 9.4 高台高 0.4	体部は若干内弯しながら外上方へのびる。体部と底部の境界は不明瞭。断面四角形を呈する高台は底部端部のやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗青灰色～黒色 外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
15	杯	23号窯 前面	口径 12.8 器高 8.1 底径 3.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部の境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
16	杯	23号窯 前面	口径 12.8 器高 4.2 底径 7.5	体部は若干内弯しながら外上方へのびる。体部と底部との境は明瞭である。底部はやや丸味を有する。 外底部は未調整。 外底部に板状圧痕がみられる。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
17	杯	23号窯 前面	口径 12.9 器高 3.8 底径 8.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。 外底部に板状圧痕がみられる。	A 内、青灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
18	杯	23号窯 前面	口径 12.9 器高 3.8 底径 7.6	体部はやや内弯ぎみに上方へのび、口縁部は若干反する。体部と底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。 外底部に板状圧痕がみられる。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
19	杯	23号窯 前面	口径 13.0 器高 4.1 底径 7.3	体部・口縁部ともに若干内弯し、その境は不明瞭ながら境界を成す。体部と底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 微細砂多含 C 良好 D 1/2
20	杯	23号窯 前面	口径 13.1 器高 3.9 底径 8.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。体部と底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、灰色～茶褐色 外、黄灰色 B 微細砂多含 C 普通 D ほぼ完存
21	杯	23号窯 前面	口径 13.4 器高 3.1 底径 8.3	体部・口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。体部と底部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
第39図 22	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.0 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は垂直近く、端部は丸い。天井部は丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
23	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.1 器高 3.8 つまみ径 1.8 つまみ高 0.9	口縁部は若干内傾し、端部は丸い。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
24	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.2 器高 3.2 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、体部との境は不明瞭である。 天井部は丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
25	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.3 器高 2.6 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部を外方へ引き出しているため、外側面は凹む。体部はやや内弯し、天井部は若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
26	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.4 器高 2.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.9	口縁部は垂直近く、端部は丸い。口縁部と体部との内面境は不明瞭ながら区分けできる。天井部は丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、茶褐色 B 細砂多含 C 不良
27	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.5 器高 2.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直近く、端部は丸い。内面の口縁部と体部との境は若干凹みによって分かれたる。天井部は丸味を有する。 外天井部はヘラ切り離しの上から、ナデによって調整されている。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
28	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.5 器高 3.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有し、端部は丸い。口縁部と体部との境界を凹すことにより、口縁部と体部とをわかつ。 天井部は丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄茶灰色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
29	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.6 器高 3.6 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	口縁部は外下方へのび、また体部への移行がスムーズのため境界は不鮮明である。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 不良

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
30	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.7 器高 2.9 つまみ径 1.1 つまみ高 1.1	口縁部は丸味を有する。天井部は低く、丸味を有する。外天井部は磨滅のため不鮮明であるが、ヘラ切り未調整のようである。	A 内、白灰色～橙褐色 外、白灰色～灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 不良 D 完存
31	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.8 器高 3.2 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部はやや垂直に近く、端部は丸い。内面の口縁部と体部との境は不明瞭である。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D 完存
32	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.8 器高 3.4 つまみ径 1.7 つまみ高 1.0	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 不良
33	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.8 器高 3.0 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、やや内傾する。天井部は丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色～灰色(口縁部) B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
34	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 14.9 器高 2.8 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有する。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内・外、褐色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
35	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 15.0 器高 2.9 つまみ径 1.7 つまみ高 0.9	口縁部は断面三角形に近い。内面の口縁部と体部との境は不鮮明ながらわかる。天井部は丸味を有する。外天井部はヘラ切り未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
36	蓋杯 (蓋)	24号窯 窯内	口径 18.7 器高 2.5 つまみ径 3.4 つまみ高 0.8	口縁部はやや外傾する。器高は低く、天井部はやや丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内、黄土色 外、暗黄土色 B 細砂多含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
37	蓋杯 (身)	24号窯 窯内	口径 15.6 器高 6.2 高台径 7.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外反ぎみに外上方へのびる。平坦な底部端部に高台が付されている。外底部は未調整。	A 内、茶色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 不良 D 底部 $\frac{1}{2}$ 、口縁部 $\frac{1}{4}$
38	杯	24号窯 窯内	口径 13.3 器高 4.5 底径 8.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部は若干丸味を有する。外底部は未調整。	A 内・外、白茶色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
39	杯	24号窯 窯内	口径 13.6 器高 4.2 底径 8.7	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部は丸味を有する。外底部は未調整。	A 内・外、白黄褐色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
40	皿	24号窯 窯内	口径 14.4 器高 2.0 底径 11.8	体部・口縁部は連続的に外上方へのび、端部は丸い。底部は平坦である。外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 良好
41	皿	24号窯 窯内	口径 14.5 器高 1.7 底径 10.7	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部は若干凹む。外底部は未調整。外底部に板状圧痕を伴う。	A 内・外、暗茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
42	皿	24号窯 窯内	口径 18.0 器高 2.4 底径 14.6	体部は若干反する。底部は若干丸味を有する。外底部は未調整。	A 内・外、 白黄褐色～暗灰色(口縁部) B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
43	高杯	24号窯 窯内	口径 21.0 器高 10.5 脚部径 13.0 脚部高 8.6	口縁部は面を成し、平坦に近い。脚端部は丸味を有し、外傾する。脚部は若干高く、内外に成形時のシボリ目を残す。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～濁赤褐色 B 砂粒少含 C 良好
44	鉄鉢形鉢	24号窯 窯内	口径 21.8	尖り底を有すると考えられる底部から、体部はやや直線的に外上方へのび、上位で内側に屈曲し、口縁部にいたる。端部は平坦な面をなす。体部上位から下部にかけて回転ヘラ削り調整をしている。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰～黒色 B 細砂多含 C 良好
第40図 45	蓋杯 (蓋)	24号窯 灰原	口径 14.0 器高 3.0 つまみ径 1.8 つまみ高 0.7	口縁部は断面三角形に近く、内傾する。天井部は比較的高く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内、灰色～茶灰色 外、茶褐色～暗灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
46	蓋杯 (蓋)	24号窯 灰原	口径 16.3 器高 2.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は断面三角形に近く、端部は若干尖る。天井部は低く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D $\frac{1}{2}$

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
47	蓋杯 (身)	24号窯 灰原	口径 12.0 器高 4.5 高台径 8.2 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底部の端部に貼付されている。 外天部は未調整。	A 内・外、青灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
48	蓋杯 (身)	24号窯 灰原	口径 12.7 器高 4.3 高台径 8.0 高台高 0.4	体部は外反し、口縁端部は丸味を有する。高台は細く、比較的高い。端部より0.4cm程内側に貼付されている。 外底部は未調整	A 内・外、灰色～白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
49	蓋杯 (身)	24号窯 灰原	口径 13.2 器高 4.1 高台径 10.0 高台高 0.4	体部は若干丸味を有し、口縁部は他に比して器肉は薄い。端部に貼付された高台は断面四角形に近いが、端部は若干凹む。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好
50	蓋杯 (身)	24号窯 灰原	口径 15.7 器高 5.3 高台径 10.0 高台高 0.6	体部・口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。細くて低い高台は端部から0.4cm程内側に貼付されている。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白黄色～白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ¼
51	杯	24号窯 整地層	口径 12.3 器高 4.0 底径 8.7	体部は若干丸味を有し、口縁部はやや外反する。体部と底部との境界はやや明瞭である。底部は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白黄色～白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
52	杯	24号窯 灰原	口径 13.0 器高 3.9 底径 7.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い平坦な底部と体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 不良
53	杯	24号窯 灰原	口径 13.6 器高 4.1 底径 7.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、口縁部は肥厚する。体部と底部との境界は不明瞭。 外底部は未調整。	A 内・外、白味褐色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
54	杯	24号窯 灰原	口径 13.1 器高 4.3 底径 9.1	体部・口縁部は直線的に外上方へのびるが、直立に近い。平坦な底部と体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、白茶灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 不良
55	杯	24号窯 灰原	口径 13.2 器高 3.9 底径 8.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部と体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¾
56	蓋杯 (蓋)	24号窯 整地層	口径 13.1 器高 2.9 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	断面三角形に近い口縁部はやや内傾する。天井部は若干高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
57	蓋杯 (蓋)	24号窯 整地層	口径 15.8 器高 3.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は丸味を有し、若干内傾する。縁部は若干屈曲する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
58	蓋杯 (蓋)	24号窯 整地層	口径 21.4 器高 3.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は若干高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ¼
59	蓋杯 (身)	24号窯 整地層	口径 11.2 器高 3.8 高台径 6.7 高台高 0.5	体部は直線的に外上方へのびるが、上位は強いヨコナデにより若干内弯する。高台は底部端から0.4cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好
60	蓋杯 (身)	24号窯 整地層	口径 18.0 器高 5.8 高台径 10.9 高台高 0.5	体部・口縁部直線的に外上方へのびる。細くて低い高台は端部から0.5cm内側に貼付される。全体に器肉は薄い。 外底部は未調整。 外底部に板状圧痕を伴う。	A 内、黄灰色 外、灰色～白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
61	杯	24号窯 整地層	口径 12.8 器高 3.7 底径 8.5	体部は若干丸味を有し、口縁部はやや外反する。平坦な底部と体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
62	杯	24号窯 整地層	口径 13.3 器高 3.8 底径 9.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。底部と体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
63	杯	24号窯 整地層	口径 13.1 器高 3.9 底径 8.0	体部・口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。底部は若干丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、白黄茶色 B 細砂少含 C 不良

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
64	皿	24号窯 整地層	口径 11.1 器高 2.1 底径 8.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は細く仕上げている。底部はややあげ底風である。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
65	高杯	24号窯 整地層	口径 20.9 器高 11.0 脚部径 13.0 脚部高 8.7	口縁端部は水平で、面を成す。脚部は比較的高く、シボリ目が顕著である。端部は外傾する。 杯外底面はヘラ削り調整。	A 内・外、 杯内部は赤褐色他は灰色 B 細砂多含 C 良好 D
第44号 66	杯	25号窯 窯中	口径 12.2 器高 4.2 底径 7.7	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部は平坦で、体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、明灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
67	杯	24号窯 窯中	口径 13.0 器高 3.8 底径 8.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部と体部との境は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
68	皿	25号窯 前庭土	口径 11.1 器高 2.4 底径 8.6	体部は直線的に外上方へのび、若干外反して、口縁部にいたる。底部はほぼ平坦である。全体に器肉は薄い。 外底部は未調整。	A 内、白灰色～灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
69	長頸壺	25号窯 前庭土	口径 11.2 頸高 13.7	口縁部は水平に近く、端部は丸味を有する。頸部はシボリ目が顕著である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
70	杯	25号窯 灰原	口径 12.3 器高 4.1 底径 7.7	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部と体部との境は不明瞭。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
71	皿	25号窯 灰原	口径 16.1 器高 1.8 底径 12.4	体部は外反し、口縁端部は丸い。底部はあげ底風である。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 不良
72	蓋杯 (蓋)	26号窯 窯内	口径 17.1 器高 2.9 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	口縁部は外傾し、端部は丸い。天井部は若干高く、やや丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 完存
73	蓋杯 (蓋)	27号窯 窯内	口径 21.8 器高 3.0 つまみ径 2.2 つまみ高 1.1	口縁部の器肉は厚く、外傾する。天井部は低く、やや平坦な面を成す。 外天井部はヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
74	皿	27号窯 窯内	口径 23.2 器高 2.8 底径 19.4	大形の皿で、体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部は若干あげ底になる。体部と底部との境は不明瞭。外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D 1/2
75	皿	27号窯 窯内	口径 23.7 器高 3.1 底径 19.5	大形の皿で、体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。底部は若干あげ底風になる。底部と体部との境は不明瞭。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
76	高杯	27号窯 窯内	口径 20.4 器高 8.6 脚部径 11.4 脚部高 7.1	直立ぎみの口縁部の端部はやや平坦な面を成す。脚端部は直立し、端部は丸い。脚部にはシボリ目が顕著である。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
77	高杯	27号窯 灰原	口径 21.0 器高 7.7 脚部径 11.0 脚部高 6.8	杯部は歪で、正確な口径値を出すのは困難である。口縁端部は平坦である。脚端部は外傾し、端部は丸い。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
78	短頸壺	27号窯 灰原	口径 18.0 器高 16.2 胴部最大径 24.0 高台径 12.0 高台高 1.3	口頸部は外傾し、端部は平坦である。中形の登で、胴部最大径は肩部上端から4.7cmのところにある。高台は断面四角形に近い。 外面回転ヘラ削りは胴部最大径より1cm上から始まる。	A 内、青灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
第46図 79	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 15.9 器高 2.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部はやや断面三角形に近く、内傾する。口縁部と体部の内側の境は明瞭である。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
80	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 16.2 器高 2.9 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	比較的大きな口縁部は若干内傾する。天井部は若干高く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
81	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 16.6 器高 2.1 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は直立気味に立ち、端部はやや丸い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
82	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 17.2 器高 2.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は若干内傾し、縁部は屈曲する。天井部は低い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
83	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 17.3 器高 1.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.9	口縁部は断面四角形に近いが、端部は丸い。天井部は低く、水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
84	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 18.4 器高 1.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は、外傾し、端部は丸い。天井部は低い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
85	蓋杯 (蓋)	28号窯 窯内	口径 20.1 器高 3.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は、断面三角形に近く、内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
86	蓋杯 (身)	28号窯 窯内	口径 14.3 器高 34.0 高台径 9.7 高台高 0.6	体部・口縁部は、外上方へ直線的にのびる。水平な底部と体部との境は明瞭である。断面四角形を呈する高台は端部から0.5cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
87	蓋杯 (身)	28号窯 窯内	口径 14.8 器高 4.0 高台径 9.4 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、端部を細く仕上げている。体部と底部の境は丸味を有し、不明瞭である。高台は底端部から1.0cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好
88	蓋杯 (身)	28号窯 窯内	口径 15.0 器高 4.4 高台径 10.4 高台高 0.5	体部は丸味を有し、外反しながら口縁部にいたる。断面四角形を呈する高台は底端部につく 外底部は未調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
89	蓋杯 (身)	28号窯 窯内	口径 15.2 器高 4.1 高台径 10.0 高台高 0.4	体部・口縁部はほぼ直接的に外上方へのびる。底部と体部との境は丸味を有する。高台は0.8cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
90	蓋杯 (身)	28号窯 窯内	口径 19.0 器高 6.1 高台径 12.5 高台高 0.5	体部・口縁部は弯曲しながら外上方へ立ちあがる。高台は底端部付近に貼付される。 外底部は未調整。	A 内・外、白黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
91	蓋杯 (身)	28号窯 窯内	口径 19.6 器高 4.8 高台径 13.0 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
92	杯	28号窯 窯内	口径 12.6 器高 3.8 底径 8.0	体部・口縁部は若干ふくらみを有し、端部は丸い。 外底部は未調整。 外底部に板状圧痕を伴う。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
93	瓶	28号窯 窯内	口径 5.1 器高 23.8 口頸高 10.6 高台径 8.8 高台高 1.1	口縁部は水平に近く、端部を上方へひき出す。頸部中位に2条の凹線を有する。胴部は丸味を有する。断面四角形に近い高台は若干外方へはねる。 胴部中位以下は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
94	皿	28号窯 窯内	口径 16.0 器高 2.8 底径 13.3	体部・口縁部は外上方へ直線的にのびる。底部は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、黄土色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D 1/2
95	皿	28号窯 窯内	口径 20.2 器高 2.0 底径 14.8	体部は直線的に外上方へのびるが、口縁部は外方へ屈曲する。 外底部は未調整。 外底部は板状圧痕を伴う。	A 内、白灰色～褐色 外、白灰色～褐色～暗灰色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
96	皿	28号窯 窯内	口径 22.3 器高 2.9 底径 17.0	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境は丸味を有し、不明瞭。 外底部は未調整。	A 内・外、黄褐色～茶褐色 B 細砂多含 C 不良 D ほぼ完存
97	高杯	28号窯 窯内	口径 20.2	短い体部は直立気味で、口縁端部は水平に近い。 底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第50図 98	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 12.3 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は若干内側に傾く。天井部は低い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
99	蓋杯 (蓋)	灰原 5 e	口径 12.4 器高 1.6 つまみ径 1.7 つまみ高 0.5	口縁部の外側面は若干凹む。縁部は少し屈曲する。天井部は低い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色、 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
100	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 12.4 器高 1.9 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は内側に傾く。天井部は低い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
101	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 12.6 器高 2.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.8	口縁部は薄く、外側面は凹む。やや高い天井部は丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ⅓
102	蓋杯 (蓋)	灰原 4 a	口径 12.7 器高 2.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は丸味を有する。比較的高い天井部は丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～暗紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
103	蓋杯 (蓋)	灰原 4 e	口径 12.7 器高 2.5 つまみ径 1.7 つまみ高 0.8	口縁部は断面三角形を呈し、端部は尖り気味である。 天井部は丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
104	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 13.4 器高 1.9 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は断面三角形に近いが、外側面は若干凹む。 天井部は低く、平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
105	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 13.4 器高 2.2 つまみ径 1.4 つまみ高 0.7	口縁部は短く、垂直に近い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は未調整だが、若干のナデがみられる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
106	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 13.4 器高 2.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は断面三角形に近いが、外側面は若干凹む。 縁部は屈曲するが、さほどではない。天井部は水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
107	蓋杯 (蓋)	灰原 4 b	口径 13.4 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は丸味を有し、端部は丸い。天井部は直線的に上方へのび、あまり高くない。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
108	蓋杯 (蓋)	灰原 4 b	口径 13.4 器高 3.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部は若干鋭い。天井部は比較的高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
109	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 13.4 器高 3.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、外側面は凹む。天井部は比較的高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
110	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 13.4 器高 3.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、断面三角形に近い。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内、灰色～黄灰色 外、紫灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
111	蓋杯 (蓋)	灰原 3 e	口径 13.3 器高 2.5 つまみ径 2.1 つまみ高 1.0	口縁部はわずかに内傾し、端部は丸味を有する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好
112	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 13.6 器高 2.0 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は外傾し、スムーズに縁部へ移行し、境界は明瞭でない。天井部は低く、若干丸味を有する。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
113	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 13.6 器高 2.0 つまみ径 2.2 つまみ高 1.6	口縁部は丸味を有し、縁部との境界は不明瞭である。 天井部は低く、若干丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
114	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.9 器高 1.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.5	口縁部は丸味を有する。天井部は低く、若干丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白黄色～灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
115	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 13.5 器高 2.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、端部は尖り気味である。天井部は若干高く、丸味を有する。 外天井部はヘラ切り未調整。	A 内、緑灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
116	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 14.0 器高 3.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は外傾し、内側面は凹み、境界を成す。天井部は比較的高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、淡黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
117	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 14.2 器高 2.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は外傾し、丸味を有する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
118	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 14.1 器高 3.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は高く、丸味を有する。歪に焼きあがっている。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色～灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
119	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.2 器高 1.5 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近いが、やや内傾する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
120	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 14.4 器高 1.7 つまみ径 3.2 つまみ高 1.1	口縁部は薄く、垂直近くになつ。天井部は低く、水平である。 外天井部は未調整。 外天井部に板状圧痕をわずかに伴う。	A 内、灰色～紫灰色 外、灰色～紫灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
121	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 14.2 器高 2.0 つまみ径 2.2 つまみ高 1.1	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部はヘラ削り未調整。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
122	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.2 器高 1.9 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に近く、端部は尖り気味である。天井部は低く、歪である。 外天井部は未調整。	A 内、暗灰色～灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
123	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.2 器高 2.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有し、端部はやや丸い。天井部は低く、やや水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良
124	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 14.2 器高 2.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、断面三角形に近い。天井部はやや高く、若干丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
125	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 14.2 器高 3.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は高く、内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
126	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.3 器高 2.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は垂直近く立ち、端部は丸い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
第51回 127	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 14.6 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は外傾し、端部は丸い。縁部は若干屈曲する。 天井部は低く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
128	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 14.6 器高 2.6 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部の器肉は薄く、端部は丸い。天井部は低く、若干丸い。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
129	蓋杯 (蓋)	灰原 4 e	口径 14.5 器高 2.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有する。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部はヘラ切り未調整。 外天井部に板状圧痕を伴う。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
130	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 14.5 器高 2.9 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は高く、垂直に近い。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶褐色～暗灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
131	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 14.5 器高 3.6 つまみ径 2.2 つまみ高 1.0	口縁部は高く、わずかに内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色～暗灰色 外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓

## B-2 地区

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
132	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 g	口径 14.6 器高 2.6 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、丸味を有する。天井部は低く丸味を有する。 外天井部はヘラ切り未調整。	A 内・外、黄灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
133	蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 14.7 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.9	口縁部は丸味を有し、縁部との境は不明瞭である。 天井部は若干高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内、茶褐色 外、茶灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
134	蓋杯 (蓋)	灰	原 3 e	口径 15.4 器高 2.7 つまみ径 2.1 つまみ高 0.6	口縁部は高く、若干内傾する。天井部はやや高く丸味を有する。 外天井部は未調整。 外天井部に板状圧痕を伴う。	A 内・外、暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
135	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 f	口径 14.7 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 1.0	口縁部は低く、丸味を有する。天井部はやや高く丸味を有する。 外天井部は未調整。 外天井部に板状圧痕を伴う。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
136	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 14.8 器高 3.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.9	口縁部は高く、垂直近くに立つ。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
137	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、断面三角形に近い。縁部は若干屈曲する。天井部は低く、ほぼ水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
138	蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 14.8 器高 2.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部は高く、若干内傾する。天井部はやや高く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好
139	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 f	口径 14.8 器高 3.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、外側面は若干凹む。天井部は高く、丸味を持つ。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
140	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 14.8 器高 3.7 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は高く、端部は若干外反する。縁部は屈曲し、高く、丸味を有する天井部につづく。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
141	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 15.0 器高 1.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	歪なため口縁部は外反するが、本来は直立すると考えられる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、明灰色 B 細砂多含 C 良好
142	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 a	口径 15.0 器高 1.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は低く、水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色～暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
143	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 15.0 器高 1.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。歪なため天井部の高さは明らかでないが、さほど高くはないと考えられる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
144	蓋杯 (蓋)	包含層	6 g	口径 14.8 器高 2.0 つまみ径 1.5 つまみ高 0.4	口縁部は垂直に近いが、丸味を有する。天井部は低く若干丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内、灰色～黒色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
145	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 e	口径 15.0 器高 2.2 つまみ径 1.8 つまみ高 0.4	口縁部は高く、側面は若干凹む。天井部は低く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
146	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 15.0 器高 2.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は高く、縁部は屈曲する。天井部は高く、若干丸味を有するが、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
147	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 f	口径 14.7 器高 3.0 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は高く、若干丸味を有する。縁部はわずかではあるが屈曲する。天井部は高く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
148	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 15.1 器高 2.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は高く、縁部は丸味を有する。天井部は若干高い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
149	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.1 器高 3.1 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は若干内傾し、断面三角形に近い。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部はヘラ削り調整。	A 内、紫灰色～黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
150	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.1 器高 3.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は薄く、外側面は凹む。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
151	蓋杯 (蓋)	包含層 8 d	口径 14.8 器高 3.5 つまみ径 2.3 つまみ高 1.1	口縁部は高く、縁部は若干屈曲する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
152	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 15.2 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は低く、若干内傾する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
153	蓋杯 (蓋)	灰原 包含層	口径 15.2 器高 2.1 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は薄く、比較的高い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ⅓
154	蓋杯 (蓋)	包含層	口径 15.2 器高 2.8 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部は高く、端部を外に引き出しているため、外側面は凹む。天井部は比較的高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色～青灰色 外、暗灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
第52図 155	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.2 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 1.7	口縁部はわずかに内傾する。天井部は水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
156	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.2 器高 3.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は高く、外側面は若干凹む。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 不良
157	蓋杯 (蓋)	灰原 5 e	口径 15.3 器高 1.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.5	口縁部は高く、直立気味である。歪なため天井部の高さは明らかでない。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色～青灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
158	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 15.3 器高 1.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は丸味を有し、小さい。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、紫灰色～白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
159	蓋杯 (蓋)	灰原 5 d	口径 15.3 器高 1.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は若干高く、やや外傾する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、黄灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
160	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.3 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は高く、内傾する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
161	蓋杯 (蓋)	灰原 5 e	口径 15.3 器高 2.2 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は高く、やや内傾する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
162	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.3 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 1.8	口縁部は垂直に立ち、器肉は薄い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
163	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 15.3 器高 2.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部はほぼ垂直で、外側面は若干凹む。天井部はやや低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
164	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.1 器高 2.8 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、器肉は薄い。外側面は凹む。 天井部はやや低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～赤灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
165	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.3 器高 2.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は高く、内傾し、外側面は凹む。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好

## B-2地区

遺番	物号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
166		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.3 器高 3.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁端部は外方へ、はねているため、外側面は1条の沈線様に仕上げている。天井部は比較的高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C %
167		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.3 器高 3.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は高く、垂直に近い。端部は尖り気味である。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D %
168		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.3 器高 1.5 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は断面三角形に近く、内傾する。天井部は低く、平坦に近い。外天井部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
169		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.4 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は高く、垂直に近い。天井部は低く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～黒色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
170		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 2.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.9	口縁部は低く、やや内傾する。天井部は低く、やや丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 完存
171		蓋杯 (蓋)	包含層	3	d 口径 15.4 器高 2.6 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は高く、内傾する。天井部はやや低く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
172		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.2 器高 2.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は高く、端部をはねるため、外側面は凹む。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D %
173		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.4 器高 3.1 つまみ径 2.0 つまみ高 0.9	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。外天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
174		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.4 器高 3.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁端部を外方へひき出したため、外側面は凹む。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
175		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.4 器高 3.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は高く、内傾する。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
176		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 1.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有する。歪なため天井部の有様は明らかでない。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
177		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 1.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は比較的高く、垂直に近い。天井部は低く、水平に近い。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶灰色～暗灰色 外、暗灰色～黄灰色 B 細砂少含、砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
178		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 1.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形に近く、内傾する。天井部は低く、やや平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～茶灰色 外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
179		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 1.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は断面三角形に近い。縁部に杯の口縁部が付着している。天井部は低く、水平に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内 灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
180		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 2.0 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、縁部は屈曲する。天井部は低く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
181		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.5 器高 2.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部の器肉は厚く、内傾する。天井部は高く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
182		蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.6 器高 1.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部はやや外傾する。天井部は低く、平坦である。外天井部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
183	蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.6 器高 1.9 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は低く、やや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
184	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 15.6 器高 2.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、垂直に近い。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
185	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 f	口径 15.6 器高 2.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.9	口縁部は内傾し、端部は尖り気味である。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
第53図 186	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 15.6 器高 2.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は高く、端部を外反させているため、外側面は凹む。天井部はやや低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
187	蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.6 器高 2.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に立ち、端部は丸い。天井部は若干高く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
188	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 f	口径 15.7 器高 1.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.4	口縁部はやや高く、端部は丸い。天井部は低く、平坦である。 外天井部は未調整。 外天井部に板状圧痕を伴う。	A 内、紫灰色 外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
189	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 d	口径 15.7 器高 1.6 つまみ径 1.9 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に近く、端部は尖り気味である。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
190	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 b	口径 15.7 器高 1.9 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は断面三角形を呈し、端部は尖る。天井部は低く、やや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
191	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 f	口径 15.2 器高 2.3 つまみ径 1.9 つまみ高 0.6	口縁部は丸味を有し、端部は丸い。天井部はやや低く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内・外、白黄色～緑灰色 B 細砂多含 C 良好
192	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 15.7 器高 2.4 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は高く、端部は丸い。天井部は低く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
193	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 g	口径 15.7 器高 2.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、内傾する。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D 完存
194	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 15.8 器高 1.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.3	口縁部は高く、垂直に近い。天井部は低く、平坦である。 外天井部は未調整。	A 内、紫灰色～灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ⅔
195	蓋杯 (蓋)	灰	原 7 e	口径 15.8 器高 1.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は垂直で、低い。天井部は低く、水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色～黄灰色 外、紫灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
196	蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 15.8 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は低く、水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
197	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 15.8 器高 1.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部はやや内傾し、外側面は凹む。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
198	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 f	口径 15.8 器高 1.8 つまみ径 1.9 つまみ高 0.7	口縁部は垂直で、縁部は若干屈曲する。天井部は低く、やや平坦である。 外天井部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良
199	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 d	口径 15.8 器高 1.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は未調整。	A 内、白灰色～灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓

## B-2地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
200	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 15.8 器高 1.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.9	口縁部は高く、外傾する。天井部は低く、平坦に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
201	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.6 器高 2.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は断面三角形に近く、内傾する。天井部は丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
202	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.8 器高 2.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有する。天井部は低く、丸味を有する。内外面に重ね焼きの際に付着した口縁部片が残存している。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
203	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.8 器高 2.7 つまみ径 2.2 つまみ高 1.0	口縁部は高く、やや内傾する。天井部はやや高く、水平に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色～暗灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂多含 C 普通 D ほぼ完存
204	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.8 器高 2.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、縁部との境は不明瞭。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂多含 C 普通 D ½
205	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.6 器高 3.4 つまみ径 2.0 つまみ高 1.0	口縁部は直立気味で、端部は丸味を有する。天井部は高く、水平に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色～暗灰色 外、黄褐色～紫灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¾
206	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 15.9 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。縁部は屈曲し、低く水平な天井部にいたる。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ½
207	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.9 器高 1.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は低く、直立する。天井部は低く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
208	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.9 器高 2.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部はやや高く、直立する。天井部は低く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内、紫灰色～白灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
209	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 15.9 器高 2.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は断面三角形に近く、内傾する。天井部は丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
210	蓋杯 (蓋)	灰原 3 d	口径 15.9 器高 3.6 つまみ径 2.0 つまみ高 1.0	口縁部は内傾し、外側面は若干凹む。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は未調整。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
211	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 14.2 器高 1.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、外側面は若干凹む。天井部は低い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色～暗灰色 外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ½
212	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.0 器高 1.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	器形が歪なため詳細には記しえないが、口縁部は内傾し、天井部は水平になると考えられる。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
213	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 16.0 器高 1.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.4	口縁部は比較的高く、外傾する。天井部は低く、若干丸味を有する。縁部に重ね焼きの際付着した杯の口縁部片が付着している。外天井部は未調整。	A 内、暗灰色 外、白灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
214	蓋杯 (蓋)	灰原 5 e	口径 16.0 器高 1.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部はやや内傾する。縁部は若干屈曲する。天井部は低く、やや丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
215	蓋杯 (蓋)	灰原 8 e	口径 16.0 器高 1.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は器肉は薄く、高く直立する。歪なため明らかでないが、天井部は水平に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
216	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 16.0 器高 1.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は断面三角形に近い。他は歪なため明らかでない。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
217	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.0 器高 2.0 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部の器肉は薄く、丸い端部は外反させているため、外側面は凹む。天井部は低く、水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ¼
218	蓋杯 (蓋)	包含層 8 d	口径 16.0 器高 2.1 つまみ径 0.7 つまみ高 2.2	口縁部は垂直に近く、外側面は若干凹む。縁部はやや屈曲し、低い天井部にいたる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
第54図 219	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 16.0 器高 2.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は縁部に比して器肉は厚く、端部は丸い。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
220	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.0 器高 2.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部の端部は屈曲し、丸い。天井部は低く、やや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
221	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 16.0 器高 2.5 つまみ径 2.4 つまみ高 1.0	口縁部は高く、垂直である。わずかに屈曲する縁部から低い天井部いたる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
222	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.0 器高 3.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は断面三角形を呈する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ⅓
223	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 16.0 器高 3.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部の器肉は比較的厚く、内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
224	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.0 器高 3.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は高く、端部は丸く、外側面は凹む。縁部は屈曲し、高く丸味を有する天井部へ続く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色～黒色 外、暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ⅓
225	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.1 器高 1.8 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部の外側面は凹み、端部は丸い。天井部は低く平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黒灰色 外、黒灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
226	蓋杯 (蓋)	灰原 6 d	口径 15.9 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は断面三角形に近く、外側面は若干凹む。天井部は低く、やや平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整である。	A 内、紫灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
227	蓋杯 (蓋)	灰原 3 f	口径 16.1 器高 3.3 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は垂直に近く、高い。縁部はわずかに屈曲し、高く水平に近い天井部に続く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
228	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 16.2 器高 1.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.4	口縁部の器肉は比較的厚く、丸味を有する端部は外反する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
229	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 16.2 器高 1.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は外傾する。天井部は低く、平坦に近い。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色～茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
230	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 16.2 器高 1.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有する。天井部は低い、他は歪なため、あまり明らかでない。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
231	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 16.2 器高 1.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸味を有する。天井部は低く、平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰茶色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
232	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 15.8 器高 1.5 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有する。縁部は若干屈曲する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
233	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.2 器高 2.5 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部はやや内傾する。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓

## B-2 地区

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
234	蓋杯 (蓋)	灰	原 7 e	口径 16.2 器高 1.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部の器肉は薄く、高い。天井部は歪なため、さがっているが、本来は水平に近いと思われる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
235	蓋杯 (蓋)	灰	原 4 d	口径 16.2 器高 2.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
236	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 d	口径 15.7 器高 2.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は断面三角形に近いが、端部は丸味を有する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 堅緻 D ほぼ完存
237	蓋杯 (蓋)	灰	原 7 e	口径 16.2 器高 2.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.9	口縁部は断面四角形に近く、比較的高い。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¾
238	蓋杯 (蓋)	灰	原 e	口径 16.2 器高 2.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は高く、垂直に近い。天井部は比較的高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 不良
239	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 f	口径 16.2 器高 3.1 つまみ径 2.2 つまみ高 0.5	口縁部は若干高く、内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整であるが、その範囲は非常に狭い。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ¾
240	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 16.2 器高 1.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	口縁部の器肉は薄く、外傾する。天井部は低く、水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
241	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 d	口径 16.3 器高 2.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は外反し、外側面は凹む。縁部は屈曲し、低く、水平な天井部に続く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
242	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 16.3 器高 2.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.9	口縁部の器肉は薄く、垂直に近い。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～紫灰色 外、緑灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
243	蓋杯 (蓋)	灰	原 7 e	口径 16.3 器高 2.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は高く、断面四角形に近いが、端部は丸味を有する。天井部は比較的高く、平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¾
244	蓋杯 (蓋)	灰	原	口径 16.4 器高 1.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁端部は丸味を有し、若干外反する。天井部は低く、水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
245	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 16.4 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色 外、灰色～紫灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
246	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 16.4 器高 1.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は垂直で、端部は丸味を有する。天井部は低く水平である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
247	蓋杯 (蓋)	灰	原 5 e	口径 16.4 器高 1.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
248	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 d	口径 15.9 器高 1.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は若干高く、やや内傾する。天井部は平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
249	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 e	口径 16.1 器高 2.5 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は比較的高く、外側面は若干凹む。天井部は平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂多含 C 普通 D ½
第55図 250	蓋杯 (蓋)	灰	原 6 f	口径 16.4 器高 2.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.6	口縁部は垂直に立つ。天井部はやや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼



遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
251	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 16.4 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は断面三角形に近い。縁部は若干屈曲する。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗茶灰色 外、暗茶灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
252	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.5 器高 1.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、先端は尖り気味である。天井部は低く平坦である。縁部に重ね焼き時の蓋の口縁部片が付着している。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好
253	蓋杯 (蓋)	灰原 6 d	口径 16.5 器高 1.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸い。天井部は低く、平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、茶灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
254	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.5 器高 2.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部の器肉は厚く、内傾する。天井部は平坦に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 普通 D $\frac{1}{2}$
255	蓋杯 (蓋)	包含層 7 e	口径 15.9 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は垂直に近く、端部は丸味を有する。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
256	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.6 器高 1.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形に近い。天井部は低く、水平である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
257	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 16.6 器高 1.2 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は垂直で、端部は丸い。天井部は低く、平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
258	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.4 器高 1.5 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近いが、若干内傾する。天井部は低く水平である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
259	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.6 器高 1.6 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に近い。天井部は低く、平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
260	蓋杯 (蓋)	灰原 6 d	口径 16.6 器高 1.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、外側面は凹みが巡る。天井部は低く、平坦である。外天井部は平坦である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
261	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.6 器高 2.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は比較的、内傾し、端部は丸味を有する。天井部は低く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～黒色 外、暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
262	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 16.6 器高 2.4 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は若干内傾する。天井部は低く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
263	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.2 器高 2.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は内傾する。天井部は比較的高く、やや平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
264	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 16.6 器高 2.7 つまみ径 2.4 つまみ高 2.6	口縁部は高く、端部は若干外反する。天井部はやや高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
265	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.6 器高 3.1 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は若干内傾し、外側面はやや凹む。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、黄灰色～灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
266	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.5 器高 1.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近いが、やや内傾する。天井部は低く、平坦である。外天井部は水平である。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
267	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 16.7 器高 2.1 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部はやや高く、内傾する。天井部は水平に近いが、やや凹む。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

## B-2 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
268	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.7 器高 2.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.9	口縁部は高く、垂直に近い。天井部は平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂多含 C 普通 D ⅓
269	蓋杯 (蓋)	灰原 6 d	口径 16.8 器高 1.3 つまみ径 2.0 つまみ高 0.7	口縁部は直立気味である。天井部は低く、平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
270	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 16.6 器高 1.3 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は断面三角形に近い。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
271	蓋杯 (蓋)	灰原 4 e	口径 16.9 器高 2.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は小さく、内傾する。天井部は平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
272	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.9 器高 2.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、端部は丸味を有する。天井部はやや高く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄褐色 B 砂粒多含 C 良好 D ⅓
273	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.8 器高 1.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、先端は尖り気味である。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
274	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 17.0 器高 3.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は若干高く、端部は丸い。天井部は高く、やや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
275	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.8 器高 3.1 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部はやや内傾し、端部は丸味を有する。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色～暗灰色 外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
276	蓋杯 (蓋)	灰原 7 a	口径 17.0 器高 3.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は高く、端部は丸味を有する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色～灰色 外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
277	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 17.2 器高 2.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は丸味を有し、先端は尖り気味である。天井部は若干丸味を有するが、平坦に近い。 外天井部は未調整。	A 内、黄灰色～暗灰色 外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
278	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 17.2 器高 4.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。天井部は高く、丸味を有する。外縁部に口縁部片・内天井部には杯の高台が付着している。 外天井部は未調整。	A 内、白灰色～灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
279	蓋杯 (蓋)	灰原 6 d	口径 17.3 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部はやや内傾するが、垂直に近い。天井部は低く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
第56図 280	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 17.3 器高 3.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は比較的高く、端部は丸味を有し、外反する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D ⅓
281	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 17.4 器高 1.8 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部が低く、端部は尖る。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
282	蓋杯 (蓋)	包含層 8 e	口径 17.4 器高 1.9 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は垂直で、端部は丸味を有する。天井部は低く、平坦気味である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
283	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 17.4 器高 2.7 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部はやや高く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
284	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 17.4 器高 3.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部はやや高く、若干内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～青灰色～暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
285	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 17.5 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は若干内傾し、端部は丸い。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
286	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 17.5 器高 3.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色～灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
287	蓋杯 (蓋)	灰原 d	口径 17.6 器高 1.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は垂直で、端部は丸い。天井部は若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶灰色 外、茶灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
288	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 17.9 器高 2.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は高く、端部は丸い。縁部は若干屈曲する。 天井部は丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
289	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 18.0 器高 3.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は高く、やや内傾する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
290	蓋杯 (蓋)	灰原 d	口径 17.9 器高 1.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は垂直気味であるが、やや外傾する。縁部はやや屈曲する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、灰色～灰色 B 細砂多含 C 普通
291	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 17.6 器高 2.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.9	口縁部は丸味を有し、端部は丸い。天井部は狭く、低い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色～暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
292	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 18.1 器高 2.7 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は垂直気味であるが、若干内傾する。天井部は若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色～青灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
293	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 18.1 器高 3.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部はやや内傾し、端部は丸味を有する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
294	蓋杯 (蓋)	灰原 5 g	口径 18.2 器高 4.4 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。天井部は非常に高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
295	蓋杯 (蓋)	灰原 5 g	口径 18.3 器高 2.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は垂直気味で、端部は丸い。天井部は比較的高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
296	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 18.5 器高 3.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部はやや高く、若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、紫灰色 外、黄褐色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
297	蓋杯 (蓋)	灰原 5 d	口径 18.9 器高 2.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は外傾し、外側面は凹む。天井部はやや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
298	蓋杯 (蓋)	灰原 4 d	口径 19.0 器高 1.3 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は外傾し、端部は丸い。天井部は低く、やや平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
299	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 18.8 器高 3.6 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
300	蓋杯 (蓋)	灰原 5 d	口径 19.2 器高 1.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	口縁部はやや高く、端部は丸味を有する。天井部は低く、やや平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
301	蓋杯 (蓋)	灰原 5 c	口径 19.1 器高 2.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部の外側面はやや凹む。天井部は低く、直線的である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2

B-2 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
302	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 18.9 器高 3.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.9	口縁部は断面三角形に近く、端部は尖り気味である。天井部はやや高く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～青灰色 外、黄灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 普通
303	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 19.3 器高 2.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部は垂直で、端部は丸い。天井部は若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好
304	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 19.1 器高 3.5 つまみ径 2.1 つまみ高 0.7	口縁部はやや内傾し、端部は丸味を有する。縁部は若干屈曲する。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
305	蓋杯 (蓋)	灰原 4 b	口径 19.5 器高 2.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は高く、端部は外傾し、外側面は凹み気味である。天井部は低く、平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色～灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
306	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 19.9 器高 3.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は内傾する。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
第57図 307	蓋杯 (蓋)	灰原 4 g	口径 19.6 器高 2.5 つまみ径 1.0 つまみ高 1.0	口縁部は垂直で、端部は丸味を有する。縁部は若干屈曲する。外天井部は低く、やや丸味を有する。外天井部の調整は明らかでない。	A 内・外、白黄色 B 細砂多含 C 不良 D ¾
308	蓋杯 (蓋)	灰原 4 f	口径 19.6 器高 3.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、外側面はやや凹む。天井部は高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
309	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 19.5 器高 2.0 つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	口縁部は垂直気味であるが、やや内傾する。天井部は低く、平坦に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
310	蓋杯 (蓋)	包含層 f	口径 19.7 器高 2.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は垂直気味で、端部は丸い。天井部は比較的高く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄白灰色 外、白茶色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
311	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 19.8 器高 1.4 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は垂直で、端部は丸い。天井部は低く、平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
312	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 19.8 器高 1.5 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有する。歪なため詳細は明らかでないが、天井部は低く、平坦である。外天井部は未調整。	A 内・外、紫灰色 B 細砂多含 C 良好
313	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 19.8 器高 1.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.7	口縁部は高く、垂直気味である。天井部は低く、平坦である。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
314	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 19.8 器高 2.3 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は直立気味で、端部は若干外反する。天井部は低く、丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ½
315	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 19.9 器高 2.4 つまみ径 3.3 つまみ高 0.9	口縁部は垂直気味で、端部は丸味を有する。天井部は低く、若干丸味を有する。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通
316	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 20.0 器高 1.8 つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	口縁部は垂直気味で、端部は丸味を有する。天井部は低く、やや平坦に近い。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ½
317	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 20.0 器高 2.5 つまみ径 2.2 つまみ高 0.8	口縁部は垂直で、端部は丸い。縁部は若干屈曲する。天井部は低く、平坦である。天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
318	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 20.1 器高 2.4 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は全体に丸い。縁部は若干屈曲し、比較的低位平坦な天井部に続く。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
319	蓋杯 (蓋)	灰原 f	口径 19.9 器高 4.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.9	口縁部は内傾し、比較的高い。天井部は高く、丸みを有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
320	蓋杯 (蓋)	灰原 f	口径 20.3 器高 2.1 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は丸味、外側面は若干凹む。天井部は低く若干丸味をもつ。内面に重ね焼き時に生じた火ダスキ跡がある。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
321	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 20.3 器高 2.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は比較的高く、丸味を有する端部は外反する。 天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
322	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 20.3 器高 2.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は比較的高く、やや内傾する。天井部は低く、若干丸味をもつ。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
323	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 20.0 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部はシャープで、端部はやや外反する。天井部は低く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色～茶灰色 外、白灰色～茶灰色～青灰色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
324	蓋杯 (蓋)	包含層	口径 20.1 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 1.0	口縁部は内傾し、低い。天井部はやや丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 完存
325	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 19.9 器高 3.0 つまみ径 2.4 つまみ高 0.7	口縁部は垂直で、端部は丸味を有する。天井部は丸味を有し、若干高い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ほぼ完存
326	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 20.3 器高 1.9 つまみ径 2.9 つまみ高 1.0	口縁部は比較的高く、端部は丸味を有する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄褐色 B 砂粒多含 C 普通 D 1/2
327	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 20.8 器高 2.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は垂直気味で、端部は丸味を有する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好
328	蓋杯 (蓋)	灰原 b	口径 20.8 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。縁部はやや屈曲する。天井部は低く、平坦気味である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
329	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 21.0 器高 2.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は比較的高く、垂直である。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
330	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 20.8 器高 2.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は垂直気味で、端部は丸味を有する。天井部は水平に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ほぼ完存
331	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 20.1 器高 2.7 つまみ径 3.3 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、やや高い。天井部は平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
332	蓋杯 (蓋)	灰原 f	口径 21.0 器高 3.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、非常に小さい。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
333	蓋杯 (蓋)	灰原 e	口径 20.8 器高 3.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.9	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。天井部は比較的高く、平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
334	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 21.1 器高 2.1 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部はやや内傾し、端部は細くなる。天井部は歪さを元に戻すと、平坦になる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、褐色～茶褐色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
335	蓋杯 (蓋)	灰原 f	口径 20.8 器高 4.0 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部はやや内傾し、端部は丸味を有する。丸味を有する天井部は高い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2

B-2 地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
336	蓋杯 (蓋)	灰原 7 e	口径 21.5 器高 3.0 つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	口縁部は垂直気味で、器肉は比較的薄い。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ¼
337	蓋杯 (蓋)	灰原 6 f	口径 21.7 器高 3.3 つまみ径 2.9 つまみ高 0.9	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色～紫灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
338	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 21.6 器高 1.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.7	口縁部は若干丸味を有する。天井部は低く歪なため中央付近と下降する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
339	蓋杯 (蓋)	灰原 6 d	口径 21.7 器高 2.0 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は垂直気味で、端部は丸味を有する。天井部は低く、平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、褐色～灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
340	蓋杯 (蓋)	包含層	口径 21.8 器高 1.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.9	口縁部は比較的高く、丸味を有する端部はやや外反する。天井部は低く、平坦に近い。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～茶褐色～灰色 B 細砂多含 C 不良 D ¼
341	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 21.6 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部は断面三角形に近い。天井はやや高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 普通 D ½
342	蓋杯 (蓋)	灰原 5 f	口径 21.7 器高 2.8 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は丸味を有し、器肉は厚い。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ½
343	蓋杯 (蓋)	灰原 6 e	口径 22.0 器高 3.4 つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	口縁部は若干内傾し、端部は丸い。天井部は高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 普通 D ½
344	蓋杯 (蓋)	灰原 5 g	口径 24.1 器高 2.5 つまみ径 3.1 つまみ高 0.8	口縁部は直立気味で比較的高く、端部は丸味を有する。天井部はやや高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
345	蓋杯 (蓋)	灰原 4 e	口径 28.0 器高 3.3 つまみ径 2.6 つまみ高 1.1	口縁部は直立気味であるが、外側面は若干凹む。天井部は若干高く、丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 不良 D ½
346	蓋杯 (蓋)	灰原 4 e	口径 28.8 器高 3.3 つまみ径 2.6 つまみ高 1.5	口縁部は内傾し、端部は丸味を有する。天井部は低く、わずかながら丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ½
第58図 347	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 10.3 器高 2.9 高台径 7.0 高台高 0.6	体部・口縁部は大きく外上方へのびる。底部端に貼付された高台は断面四角形に近いが、底面は若干凹む。 外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
348	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 10.8 器高 3.7 高台径 7.3 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形に近い、高台は底端部につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好
349	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 11.6 器高 3.6 高台径 7.4 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は断面四角形に近いが、底面は凹み、底端部につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
350	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 11.8 器高 3.8 高台径 7.0 高台高 0.3	体部・口縁部はいくらか内弯しながら外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部より内側につく。 体部と底部との境界は明瞭である。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好
351	蓋杯 (身)	灰原	口径 12.0 器高 4.3 高台径 7.6 高台高 0.4	体部・口縁部は若干内弯しながら外上方へのびる。体部と底部の境界は明らかである。比較的器肉の薄い高台は底端付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
352	蓋杯 (身)	灰原 2	口径 12.4 器高 4.3 高台径 8.6 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびるが、口縁部はやや外反する。低い高台はやや外傾し、底端部につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白黄灰色 B 細砂少含 C 不良

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観 察
353	蓋 杯 (身)	灰	原 5 c	口 径 12.8 器 高 4.0 高台径 8.7 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅔
354	蓋 杯 (身)	灰	原	口 径 13.0 器 高 3.2 高台径 7.1 高台高 0.3	体部上位・口縁部は外反する。幅広の高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
355	蓋 杯 (身)	灰	原	口 径 13.0 器 高 4.2 高台径 8.1 高台高 0.3	体部・口縁部は若干内弯する。低く断面四角形に近い高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 普通
356	蓋 杯 (身)	灰	原 4 f	口 径 13.0 器 高 4.4 高台径 7.8 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は明らかである。高台は底端部につく。外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
357	蓋 杯 (身)	灰	原 5 e	口 径 13.2 器 高 4.2 高台径 8.3 高台高 0.4	体部は直線的に外上方へのびるが、口縁部は若干屈曲する。高台は底端部より内側につく。底端部付近に蓋が付着している。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
358	蓋 杯 (身)	灰	原 5 e	口 径 13.2 器 高 4.2 高台径 8.2 高台高 0.3	体部中位までは外上方へのびるが、上位が外反屈曲する。体部と底部と境界は丸味を有し、境界は不明瞭。断面四角形を呈する高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
359	蓋 杯 (身)	灰	原 5 e	口 径 13.4 器 高 4.1 高台径 9.5 高台高 0.6	体部上位で外反する。体部と底部の境界は丸味を有する。器内の薄い高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 普通
360	蓋 杯 (身)	灰	原 6 f	口 径 13.4 器 高 4.3 高台径 9.2 高台高 0.4	体部はやや内弯しながら外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は底端部につく。外底部は未調整。	A 内、暗青灰色～暗灰色 外、暗青灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ½
361	蓋 杯 (身)	灰	原 6 f	口 径 13.4 器 高 4.7 高台径 9.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭。断面四角形を呈する高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
362	蓋 杯 (身)	灰	原 6 f	口 径 13.5 器 高 4.4 高台径 9.5 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。細くて比較的高い高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、暗紫灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
363	蓋 杯 (身)	灰	原 6 e	口 径 13.7 器 高 4.2 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、黒色～灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ⅔
364	蓋 杯 (身)	灰	原 6 e	口 径 13.8 器 高 3.9 高台径 9.3 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は明瞭である。低く断面四角形に近い高台は底端部より1.0cm程内側につく。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ⅔
365	蓋 杯 (身)	灰	原 4 f	口 径 13.8 器 高 4.2 高台径 9.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。断面四角形に近い高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
366	蓋 杯 (身)	包含層	8 e	口 径 13.8 器 高 4.8 高台径 14.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は若干器肉は薄く直立し、底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
367	蓋 杯 (身)	灰	原 6 e	口 径 13.8 器 高 4.6 高台径 9.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は明瞭である。低い高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ⅔
368	蓋 杯 (身)	灰	原 7 e	口 径 13.9 器 高 3.7 高台径 9.4 高台高 0.5	体部は若干内弯しながら外上方へのびるが、口縁部は外反する。断面四角形の高台は底端部より内側につく。底底部は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
369	蓋 杯 (身)	灰	原 6 e	口 径 14.0 器 高 3.5 高台径 9.6 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は明瞭である。断面四角形の高台は底端部内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔

## B-2地区

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第59図 370	蓋杯 (身)	灰	原 d	口径 14.0 器高 3.2 高台径 9.0 高台高 0.4	体部・口縁部が直線的に大きく外上方へのびる。幅広の高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
371	蓋杯 (身)	灰	原 a	口径 14.0 器高 3.7 高台径 10.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭である。高台は底端部より若干内側につく。 外底部は未調整。	A 内、黄褐色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
372	蓋杯 (身)	灰	原 e	口径 14.0 器高 3.8 高台径 9.1 高台高 0.5	体部は外上方へのび、口縁部は外反する。断面四角形を呈するは底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
373	蓋杯 (身)	灰	原 d	口径 14.0 器高 3.8 高台径 9.8 高台高 0.4	体部は外上方へのび、口縁部は若干外反する。断面四角形を呈する高台は底端部より0.8cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
374	蓋杯 (身)	灰	原 e	口径 14.0 器高 3.9 高台径 8.9 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
375	蓋杯 (身)	灰	原 f	口径 14.0 器高 3.9 高台径 9.3 高台高 0.3	体部は内弯気味に立ち上がり、直線的な口縁部にいたる。断面四角形を呈する高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
376	蓋杯 (身)	灰	原	口径 14.0 器高 3.9 高台径 10.0 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。低い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D ½
377	蓋杯 (身)	灰	原 e	口径 14.0 器高 4.0 高台径 8.6 高台高 0.4	体部下位は丸味を有し、底部との境界は不明瞭。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
378	蓋杯 (身)	灰	原	口径 14.0 器高 4.0 高台径 9.0 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通
379	蓋杯 (身)	灰	原 d	口径 14.0 器高 4.0 高台径 9.2 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
380	蓋杯 (身)	灰	原 e	口径 14.0 器高 4.1 高台径 10.1 高台高 0.6	体部は外上方へのび、上位で外反する。体部と底部との境界は丸味を有する。比較的高い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
381	蓋杯 (身)	灰	原 f	口径 14.0 器高 4.2 高台径 8.9 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は明瞭である。断面四角形を呈する高台は底端部より1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
382	蓋杯 (身)	灰	原 f	口径 14.0 器高 4.2 高台径 9.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
383	蓋杯 (身)	灰	原 d	口径 14.0 器高 4.2 高台径 10.4 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのび、上位で若干屈曲する。高台は底端部につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
384	蓋杯 (身)	灰	原 e	口径 14.0 器高 4.3 高台径 9.0 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
385	蓋杯 (身)	灰	原 e	口径 14.0 器高 4.5 高台径 9.5 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は底端部につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
386	蓋杯 (身)	灰	原	口径 14.0 器高 4.5 高台径 9.8 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。比較的高い高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好



遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
387	蓋杯 (身)	灰原 5 e	口径 14.1 器高 4.0 高台径 9.5 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのび、口縁部付近で器肉は薄くなる。体部と底部との境界は若干丸味を有する。断面四角形を呈する高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
388	蓋杯 (身)	灰原 5 e	口径 14.1 器高 4.1 高台径 10.2 高台高 0.6	体部下方位は丸味と有し、以上は直線的に外上方へのびる。比較的高い高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
389	蓋杯 (身)	包含層	口径 14.2 器高 4.4 高台径 9.3 高台高 0.5	体部は外上方へのび、口縁部は若干外反する。断面四角形を呈する高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
390	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 14.1 器高 4.5 高台径 9.7 高台高 0.6	体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部にいたる。高台は底端部につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
第60図 391	蓋杯 (身)	灰原 4 b	口径 14.1 器高 4.6 高台径 9.5 高台高 0.7	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。器肉が薄く、比較的高い高台は底端より若干内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
392	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 14.2 器高 3.4 高台径 9.3 高台高 0.5	体部は直線的に外上方へのび、口縁部は若干外反する。体部と底部の境界は明瞭である。器肉の薄い高台は底端部より1.0cm程内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
393	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 14.2 器高 3.6 高台径 10.3 高台高 0.5	体部下方位は若干内弯するが、他は直線的に外上方へのびる。高台は底端部より0.5cm程内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
394	蓋杯 (身)	灰原	口径 14.2 器高 3.8 高台径 9.3 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へ若干そり気味にのびる。体部と底部との境界は明瞭である。高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
395	蓋杯 (身)	灰原 5 e	口径 14.2 器高 3.8 高台径 9.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
396	蓋杯 (身)	灰原	口径 14.2 器高 3.9 高台径 9.8 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は若干丸味を有する。断面四角形を呈する高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
397	蓋杯 (身)	灰原	口径 14.2 器高 4.5 高台径 9.6 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
398	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 14.2 器高 4.6 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界はやや丸味を有する。高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、緑黄色 外、緑黄色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
399	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 14.5 器高 3.7 高台径 9.8 高台高 0.4	体部は直線的に外上方へのび、口縁部は若干外反する。高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
400	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 14.3 器高 3.9 高台径 10.4 高台高 0.4	体部はやや内弯し、口縁部は外反する。断面四角形を呈する高台は底端部より0.5cm程内側につく。外底部は未調整。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
401	蓋杯 (身)	灰原	口径 14.3 器高 4.5 高台径 9.4 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端部につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
402	蓋杯 (身)	灰原 7 d	口径 14.4 器高 3.7 高台径 10.0 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
403	蓋杯 (身)	灰原 4 g	口径 14.4 器高 3.9 高台径 9.7 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は断面四角形に近いが、底面は若干凹み、底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓

## B-2 地区

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
404	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.2 器高 4.3 高台径 9.6 高台高 0.5	全体に器肉は厚く、体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含、砂粒少含 C 良好 D ほぼ充存
405	蓋杯 (身)	灰 5	原 f	口径 14.4 器高 4.2 高台径 10.2 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部より0.5cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
406	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.6 器高 4.5 高台径 9.5 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へ延びる。低い高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、黒色～暗青灰色 B 細砂少含 C 良好
407	蓋杯 (身)	灰 6	原 f	口径 14.2 器高 4.5 高台径 10.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
408	蓋杯 (身)	灰 7	原 e	口径 14.4 器高 4.6 高台径 10.2 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
409	蓋杯 (身)	灰 6	原 b	口径 14.0 器高 4.2 高台径 9.3 高台高 0.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ充存
410	蓋杯 (身)	灰 4	原 d	口径 14.5 器高 5.8 高台径 8.8 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのび、傾斜は急である。高台は底端部につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
第61図 411	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.5 器高 4.2 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は底端部に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色～茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
412	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.5 器高 4.3 高台径 10.4 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形を呈する。高台は底端部より内側につく。全体に器肉は薄い。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
413	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.5 器高 4.5 高台径 8.0 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのび、若干丸味を有する。高台は底端部から1.0cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 3/4
414	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.5 器高 4.5 高台径 9.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、黄褐色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
415	蓋杯 (身)	灰 6	原 f	口径 14.4 器高 4.9 高台径 10.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。全体に器肉は厚い。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好
416	蓋杯 (身)	灰 4	原 b	口径 14.6 器高 4.0 高台径 10.0 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
417	蓋杯 (身)	灰 7	原 e	口径 14.6 器高 4.2 高台径 10.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。幅広の高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
418	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.6 器高 4.6 高台径 9.2 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は底端部に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ充存
419	蓋杯 (身)	灰 6	原 e	口径 14.3 器高 4.6 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良
420	蓋杯 (身)	灰 6	原 f	口径 14.7 器高 4.3 高台径 9.6 高台高 0.5	体部は外反しながら外上方へのび、口縁部に到る。高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色～暗青灰色 外、白灰色～暗青灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/4

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
421	蓋杯 (身)	灰原 4 d	口径 14.9 器高 4.4 高台径 9.5 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
422	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 14.7 器高 4.9 高台径 9.1 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。細くて低い高台は底端部より1.0cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
423	蓋杯 (身)	灰原	口径 14.8 器高 4.0 高台径 10.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
424	蓋杯 (身)	灰原 5 e	口径 14.8 器高 4.2 高台径 9.6 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
425	蓋杯 (身)	灰原 5 d	口径 15.0 器高 3.9 高台径 10.1 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
426	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.0 器高 4.1 高台径 9.5 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は低く、底端部より0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
427	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 15.0 器高 4.0 高台径 10.0 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.9cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
428	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 15.0 器高 4.2 高台径 9.2 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形に近い。高台は底端部から0.8cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
429	蓋杯 (身)	灰原	口径 15.0 器高 4.6 高台径 10.8 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部に貼付される。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
430	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.1 器高 4.1 高台径 9.9 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのび、口縁部は若干外反する。高台は底端部から0.6cm内側につく。外底部に板状圧痕を伴う。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
第62図 431	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 15.1 器高 4.1 高台径 10.3 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境は不明瞭で、丸味を有する。高台は底端部から1.5cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
432	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 15.1 器高 4.1 高台径 9.5 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境は丸味を有し不明瞭である。高台は底端部から約1.0cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
433	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.1 器高 4.8 高台径 10.9 高台高 0.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
434	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 15.2 器高 3.9 高台径 10.5 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
435	蓋杯 (身)	灰原 5 d	口径 15.2 器高 4.2 高台径 10.4 高台高 0.5	体部はやや内湾しながら外上方へのび、口縁部は若干外反する。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
436	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.2 器高 4.4 高台径 9.0 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭である。高台は底端部から1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
437	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 15.2 器高 4.4 高台径 10.0 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境は不明瞭で丸味を有する。高台は底端部から約0.8cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
438	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 15.2 器高 3.4 高台径 10.5 高台高 0.2	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭である。細く低い高台は底端部から1.3cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
439	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.2 器高 4.2 高台径 9.2 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。低い高台は底端部より1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～緑灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ¾
440	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 15.3 器高 4.2 高台径 10.2 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より0.8cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ¾
441	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.3 器高 4.3 高台径 10.2 高台高 0.4	体部は直線的に外上方へのび、やや外反する口縁部にいたる。高台は底端部から0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ½
442	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 15.4 器高 3.9 高台径 9.3 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのび、口縁部は若干外反する。高台は底端部付近に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
443	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 15.4 器高 4.1 高台径 9.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より0.9cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
444	蓋杯 (身)	灰原 5 c	口径 15.5 器高 3.7 高台径 10.9 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ¾
445	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 15.5 器高 4.0 高台径 10.4 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
446	蓋杯 (身)	灰原 4 b	口径 15.5 器高 4.2 高台径 9.2 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より0.9cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
447	蓋杯 (身)	灰原	口径 15.6 器高 4.1 高台径 10.0 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、茶白色 B 細砂少含 C 不良
448	蓋杯 (身)	包含層 6 f	口径 15.6 器高 4.1 高台径 11.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
449	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.6 器高 4.5 高台径 10.3 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、白灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ¾
450	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 15.6 器高 4.5 高台径 10.3 高台高 0.5	体部は内湾しながら外上方へのび、若干外反する口縁部にいたる。幅広い高台は底端部から0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
第63図 451	蓋杯 (身)	灰原	口径 15.6 器高 4.5 高台径 11.2 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部より若干内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良
452	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 15.7 器高 3.6 高台径 10.9 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭である。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ½
453	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.7 器高 4.0 高台径 9.2 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭である。高台は底端部より1.5cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、茶灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
454	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 15.7 器高 4.3 高台径 10.3 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾

遺物番号	器種	出地	土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観 察
455	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 15.8 器 高 3.8 高台径 10.2 高台高 0.6	体部は若干内湾しながら外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。 高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好
456	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 15.8 器 高 4.1 高台径 9.4 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭。低い高台は底端部から1.0cm以上内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/2
457	蓋 杯 (身)	灰	原 f	口 径 15.8 器 高 4.3 高台径 9.7 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.0cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
458	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 15.8 器 高 4.3 高台径 10.3 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。低い高台は底端部から1.2cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、黄白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
459	蓋 杯 (身)	灰	原 f	口 径 15.8 器 高 4.4 高台径 9.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.0cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
460	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 15.9 器 高 4.1 高台径 9.7 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。断面四角形を呈する高台は底端部から0.5cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/4
461	蓋 杯 (身)	灰	原	口 径 15.9 器 高 4.4 高台径 9.9 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
462	蓋 杯 (身)	灰	原	口 径 15.9 器 高 4.6 高台径 9.1 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有し、不明瞭。高台は底端部から1.0cm以上内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通
463	蓋 杯 (身)	灰	原 f	口 径 16.0 器 高 3.5 高台径 11.4 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から0.8cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通
464	蓋 杯 (身)	灰	原 b	口 径 16.0 器 高 3.8 高台径 10.5 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭。断面四角形に近い高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
465	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 16.0 器 高 3.9 高台径 10.6 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭。高台は底端部から1.0cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
466	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 16.0 器 高 4.2 高台径 9.6 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から1.0cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
467	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 16.0 器 高 4.2 高台径 10.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。断面四角形に近い高台は底端部から0.6cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、白灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
468	蓋 杯 (身)	灰	原 e	口 径 16.0 器 高 4.4 高台径 11.3 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
469	蓋 杯 (身)	灰	原 b	口 径 16.0 器 高 4.5 高台径 9.9 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
470	蓋 杯 (身)	灰	原 f	口 径 16.2 器 高 4.4 高台径 9.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
第64図 471	蓋 杯 (身)	灰	原 f	口 径 16.4 器 高 3.4 高台径 10.6 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から0.8cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好

## B-2地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
472	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 16.4 器高 3.8 高台径 11.0 高台高 0.4	体部は中位で若干外反し、口縁部にいたる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から0.7cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
473	蓋杯 (身)	包含層	口径 16.4 器高 4.5 高台径 11.3 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～茶褐色 B 細砂多含 C 良好
474	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 16.1 器高 4.5 高台径 10.1 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。断面四角形に近い高台は底端部から1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¾
475	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 16.4 器高 4.6 高台径 10.0 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
476	蓋杯 (身)	灰原	口径 16.5 器高 3.7 高台径 10.5 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。断面四角形に近い高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
477	蓋杯 (身)	灰原 4 b	口径 16.6 器高 3.8 高台径 10.6 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭である。高台は底端部から1.2cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
478	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 16.6 器高 3.8 高台径 11.0 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭。高台は底端部から0.7cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
479	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 16.8 器高 3.8 高台径 10.8 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭。高台は底端部から1.0cm以上内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ¾
480	蓋杯 (身)	灰原 6 b	口径 16.7 器高 5.8 高台径 11.9 高台高 0.6	体部は外上方へのび、若干外反する口縁部にいたる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
481	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 16.9 器高 3.6 高台径 10.8 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭。断面四角形を呈する高台は底端部から1.5cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、黄灰色～青灰色～灰色 B 砂粒少含 C 普通 D ¾
482	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 16.9 器高 4.1 高台径 11.3 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～茶灰色～青灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
483	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 17.0 器高 5.0 高台径 9.7 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へ大きくのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.0cm以上内側に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¾
484	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 17.0 器高 5.1 高台径 11.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.7cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～紫灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
485	蓋杯 (身)	灰原	口径 17.0 器高 5.7 高台径 11.5 高台高 0.5	体部・口縁部は大きく外上方へのびる。高台は底端部につく。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良
486	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 17.0 器高 5.9 高台径 10.3 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は不明瞭。高台は底端部から1.2cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色 B 細砂少含 C 普通 D ¾
487	蓋杯 (身)	灰原・ 包含層 5 g	口径 17.2 器高 6.0 高台径 11.4 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり、その傾斜角度は急である。高台は底端部から0.5cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
488	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 17.4 器高 5.6 高台径 12.2 高台高 0.7	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¾

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
489	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 17.5 器高 5.5 高台径 11.8 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端部付近に貼付される。外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 1/2
第65図 490	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 17.6 器高 4.8 高台径 11.8 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
491	蓋杯 (身)	灰原 5 e	口径 17.8 器高 5.3 高台径 10.6 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は若干丸味を有する。高台は底端部から0.6cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
492	蓋杯 (身)	灰原 5 e	口径 17.7 器高 5.7 高台径 11.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形に近い。高台は底端部から0.8cm内側に貼付されている。外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好
493	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 17.8 器高 6.1 高台径 11.7 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へ高く立つ。体部と底部との境界は若干丸味を有する。高台は底端部に貼付される。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
494	蓋杯 (身)	包含層 6 f	口径 18.0 器高 5.3 高台径 11.9 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部付近につく。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
495	蓋杯 (身)	灰原	口径 18.0 器高 5.4 高台径 12.0 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
496	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 18.1 器高 5.1 高台径 11.5 高台高 0.5	体部は外上方へのび、若干外反する口縁部にいたる。体部と底部との境界は丸味を有する。細くて低い高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好
497	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 18.2 器高 5.5 高台径 11.2 高台高 0.7	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端部からやや内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
498	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 18.3 器高 6.0 高台径 11.9 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
499	蓋杯 (身)	灰原	口径 18.4 器高 5.0 高台径 12.8 高台高 0.6	体部は外上方へのび、若干外反する。口縁部にいたる。高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、暗茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
500	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 18.4 器高 5.7 高台径 13.6 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。低い高台は底端部につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好
501	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 18.4 器高 5.8 高台径 11.1 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
502	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 18.4 器高 4.8 高台径 13.3 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部に貼付される。外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
503	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 18.4 器高 5.9 高台径 11.0 高台高 0.4	体部は外反しながら外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。断面四角形を呈する高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
504	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 18.4 器高 6.1 高台径 11.5 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
505	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 18.5 器高 5.5 高台径 11.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内、暗紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第66図 506	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 18.5 器高 5.2 高台径 12.0 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.7cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒多含 C 普通 D ⅓
507	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 18.6 器高 5.2 高台径 12.2 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ⅓
508	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 18.6 器高 5.3 高台径 12.8 高台高 0.5	体部は直線的に外上方へのび、やや外反する口縁部にいたる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
509	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 18.6 器高 5.6 高台径 5.6 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内、緑黄色 外、緑黄色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
510	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 18.6 器高 5.9 高台径 11.8 高台高 0.7	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界はやや丸味を有する。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
511	蓋杯 (身)	包含層	口径 18.8 器高 6.0 高台径 11.3 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部よりやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
512	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 18.8 器高 6.2 高台径 11.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
513	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 19.0 器高 5.4 高台径 12.3 高台高 0.5	体部は外上方へのび、若干屈曲する口縁部にいたる。断面四角形に近い高台は底端部から0.5cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、茶褐色～緑褐色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
514	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 19.0 器高 5.6 高台径 12.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部付近につく。 体部下位から下底部にかけて回転ヘラ削り調整をしている。	A 内、暗灰色 外、暗黒色～緑灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D ⅓
515	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 19.0 器高 5.7 高台径 11.6 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.6cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、橙灰色～白灰色 外、茶灰色～白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
516	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 19.0 器高 6.1 高台径 11.2 高台高 0.7	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.7cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
517	蓋杯 (身)	包含層 8 d	口径 19.0 器高 6.4 高台径 12.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
518	蓋杯 (身)	灰原 5 g	口径 19.0 器高 6.4 高台径 11.6 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から1.0cm程内側につく。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
519	蓋杯 (身)	包含層	口径 19.0 器高 6.4 高台径 11.6 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部にヘラ記号あり。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
520	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 19.0 器高 6.5 高台径 11.6 高台高 0.6	体部・口縁部は外反しながら外上方へのびる。高台は底端部より内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅓
521	蓋杯 (身)	灰原 6 d	口径 19.0 器高 5.8 高台径 11.3 高台高 0.3	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部付近につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 堅緻 D ⅓
第67図 522	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 19.0 器高 5.8 高台径 12.3 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部からやや内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓



遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
523	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 19.0 器高 5.9 高台径 11.5 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から0.8cm内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
524	蓋杯 (身)	灰原	口径 19.0 器高 5.9 高台径 11.7 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.7cm内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
525	蓋杯 (身)	灰原 6 f	口径 19.1 器高 6.1 高台径 12.3 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部に貼付される。外底部は未調整。	A 内、茶褐色～暗灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
526	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 19.3 器高 5.4 高台径 11.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.5cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
527	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 19.3 器高 5.6 高台径 12.4 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
528	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 19.3 器高 6.0 高台径 12.6 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から1.2cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、白灰色～灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/2
529	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 19.4 器高 5.6 高台径 13.4 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形に近い高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
530	蓋杯 (身)	灰原	口径 19.4 器高 5.7 高台径 11.6 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部からやや内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 普通
531	蓋杯 (身)	包含層	口径 19.7 器高 6.0 高台径 12.3 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側につく。外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～茶灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
532	蓋杯 (身)	包含層 7 f	口径 19.8 器高 6.2 高台径 11.0 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
533	蓋杯 (身)	灰原	口径 19.8 器高 5.9 高台径 11.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭。外側に踏んばる高台は底端部から1.0cm以上内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 不良
534	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 20.0 器高 5.0 高台径 10.0 高台高 0.4	体部・口縁部は外反しながら外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭、高台は底端部から1.6cm程度内側につく。外底部は未調整。	A 内、緑黄色 外、緑黄色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
535	蓋杯 (身)	灰原	口径 20.4 器高 5.3 高台径 13.8 高台高 0.6	体部は外上方へのび、口縁部は若干外反する。高台は底端部付近につく。外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好
536	蓋杯 (身)	灰原	口径 20.0 器高 5.4 高台径 12.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は若干丸味を有する。断面四角形を呈する高台は底端部よりやや内側につく。外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
537	蓋杯 (身)	灰原 5 f	口径 20.2 器高 5.6 高台径 11.7 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端からやや内側につく。外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
538	蓋杯 (身)	灰原	口径 20.0 器高 6.0 高台径 12.8 高台高 0.5	体部・口縁部はやや外反しながら立ち上がる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端から1.0cm以上内側に貼付される。外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
539	蓋杯 (身)	灰原	口径 20.0 器高 6.2 高台径 12.7 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部より内側につく。外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2

B-2地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
540	蓋杯 (身)	灰原	口径 20.0 器高 6.3 高台径 12.0 高台高 0.5	体部・口縁部は外反しながら外上方へ立ち上がる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.1cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂多含 C 普通 D 1/2
541	蓋杯 (身)	灰原 7 d	口径 20.3 器高 6.5 高台径 12.7 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
542	蓋杯 (身)	灰原 7 e	口径 20.2 器高 5.5 高台径 11.4 高台高 0.4	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から1.2cm内側につく。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好
543	蓋杯 (身)	灰原 6 e	口径 20.2 器高 6.3 高台径 11.2 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近に貼付される。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
第68図 544	杯	灰原 3 d	口径 10.3 器高 2.3 底径 7.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
545	杯	灰原 6 d	口径 11.7 器高 2.7 底径 8.2	体部・口縁部は外上方へのびる。外体部に火ダスキの痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
546	杯	灰原 6 f	口径 11.8 器高 2.8 底径 8.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は若干丸味を有する。外底面に火ダスキの痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
547	杯	灰原 4 d	口径 11.9 器高 3.5 底径 8.5	体部・口縁部は外上方へのびる。外底部に板状圧痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内、青灰色～灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
548	杯	灰原 4 b	口径 12.0 器高 2.8 底径 8.8	体部・口縁部は外上方へのびる。外面に火ダスキの痕が顕著である。 外底部はヘラナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
549	杯	灰原	口径 12.0 器高 3.6 底径 8.0	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。外底面には板状圧痕を伴う。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
550	杯	灰原 4 d	口径 12.0 器高 3.7 底径 7.9	体部は若干内弯しながら外上方へ立ち上がり、口縁部に到る。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
551	杯	灰原 6 e	口径 12.1 器高 2.9 底径 9.3	体部・口縁部は外上方へのびる。外底面に火ダスキの痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内、紫灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
552	杯	灰原	口径 12.0 器高 3.3 底径 7.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
553	杯	灰原	口径 12.2 器高 3.7 底径 8.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 微細砂少含 C 良好 D 1/2
554	杯	灰原	口径 12.3 器高 8.3 底径 3.8	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部はヘラ切り後、ヘラナデをするだけである。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好
555	杯	灰原 4 f	口径 12.4 器高 3.2 底径 8.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。外底部には板状圧痕を伴う。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
556	杯	灰原	口径 12.4 器高 3.3 底径 8.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出土地	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
557	杯	灰原 4 f	口径 12.2 器高 3.5 底径 7.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
558	杯	灰原 4 d	口径 12.7 器高 3.9 底径 8.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
559	杯	灰原 4 f	口径 12.5 器高 3.8 底径 8.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
560	杯	灰原 7 e	口径 12.6 器高 2.6 底径 8.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。 口径に比して器高が低いため、あるいは皿とした方が良いかもしれない。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
561	杯	灰原 e	口径 12.6 器高 3.3 底径 8.1	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
562	杯	灰原 3 d	口径 12.6 器高 3.9 底径 8.0	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 普通 D $\frac{1}{2}$
563	杯	灰原	口径 12.6 器高 4.3 底径 8.4	体部・口縁部は外上方へのびる。丸味を有する底部には板状圧痕を伴なう。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
564	杯	灰原 4 d	口径 12.7 器高 4.1 底径 8.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのび、口縁部は若干肥厚する。 外底部は未調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
565	杯	灰原 7 e	口径 12.7 器高 6.0 底径 9.3	体部・口縁部は外上方へのび、その傾斜は急である。 外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好
566	杯	灰原 4 e	口径 12.8 器高 2.9 底径 8.5	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
567	杯	灰原	口径 12.8 器高 3.0 底径 8.0	体部・口縁部は外上方へのびる。外底部には板状圧痕を伴なう。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
568	杯	灰原	口径 12.8 器高 3.5 底径 7.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
569	杯	灰原 4 b	口径 12.8 器高 3.7 底径 8.6	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
570	杯	灰原 4 d	口径 12.8 器高 4.4 底径 7.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{3}{4}$
571	杯	灰原 6 a	口径 12.9 器高 3.6 底径 8.9	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部はヘラ切り後ヘラナデだけである。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D $\frac{3}{4}$
572	杯	灰原 5 g	口径 13.0 器高 3.5 底径 8.4	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
573	杯	灰原	口径 13.0 器高 3.7 底径 8.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
574	杯	灰原	口径 13.0 器高 3.8 底径 8.2	体部・口縁部は小さく上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
575	杯	灰原 3 d	口径 13.0 器高 4.0 底径 8.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～灰色 B 細砂少含、金雲母多含 C 不良 D 1/2
576	杯	灰原 4 f	口径 13.0 器高 4.5 底径 9.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、白灰色～黒色 外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 3/4
577	杯	灰原 3 d	口径 13.1 器高 4.0 底径 7.5	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、白灰色～黄灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
578	杯	灰原 4 k	口径 13.2 器高 3.7 底径 9.1	体部・口縁部は外上方へのびる。外底部には板状圧痕を伴なう。 外底部は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/4
579	杯	灰原 6 e	口径 13.3 器高 3.6 底径 10.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部はヘラ切り離し後、ヘラナデ調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂、砂粒少含 C 不良 D 1/2
第69図 580	杯	灰原 4 f	口径 13.3 器高 4.2 底径 8.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、灰色～茶褐色～暗灰色 外、明茶色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D 3/4
581	杯	灰原	口径 13.3 器高 4.4 底径 8.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、白黄色 外、白黄色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 3/4
582	杯	灰原 4 d	口径 13.4 器高 3.1 底径 7.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
583	杯	灰原 5 f	口径 13.4 器高 3.8 底径 8.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、茶灰色 外、暗灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/2
584	杯	灰原	口径 13.4 器高 4.1 底径 8.8	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 不良
585	杯	灰原 4 e	口径 13.6 器高 4.0 底径 8.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、白黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
586	杯	灰原 5 d	口径 13.9 器高 3.6 底径 11.2	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。外底部にはヘラ記号を伴なう。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
587	杯	灰原	口径 15.2 器高 4.1 底径 8.3	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 不良 D 3/4
588	皿	灰原 6 e	口径 13.0 器高 2.4 底径 10.0	口縁部、体部は外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
589	皿	灰原 4 e	口径 14.8 器高 1.9 底径 11.9	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。外底部に板状圧痕を伴なう。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
590	皿	灰原 3 f	口径 15.8 器高 2.1 底径 13.2	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内、紫灰色 外、紫灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
591	皿	灰原 6 e	口径 16.0 器高 2.5 底径 12.8	体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
592	皿	包含層	口径 16.0 器高 3.0 底径 13.0	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、不明瞭。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良
593	皿	灰原 6 f	口径 17.0 器高 2.9 底径 14.2	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
594	皿	灰原 4 e	口径 17.8 器高 2.5 底径 14.0	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 不良 D 1/2
595	皿	灰原 4 f	口径 18.0 器高 2.2 底径 13.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D 3/5
596	皿	灰原	口径 18.8 器高 2.7 底径 15.0	体部は外反し、口縁部にいたる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好
597	皿	灰原 7 e	口径 18.8 器高 2.8 底径 14.9	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
598	皿	灰原	口径 19.1 器高 2.7 底径 14.8	体部・口縁部は内弯しながら立ち上がる。体部と底部との境界は不明瞭。 外底部は未調整。	A 内、暗灰色～茶褐色 外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
599	皿	灰原 7 e	口径 20.4 器高 2.2 底径 16.5	体部は外反しながら立ち上がる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
600	皿	灰原	口径 20.0 器高 2.3 底径 17.2	体部は外上方へのび、若干外反する口縁部にいたる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 不良
601	皿	灰原 7 e	口径 20.0 器高 2.7 底径 17.0	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。外底部には板状圧痕を伴う。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
602	皿	灰原 6 d	口径 20.0 器高 3.1 底径 17.5	体部は若干外反しながら立ち上がる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～暗紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
603	皿	灰原 6 e	口径 20.0 器高 3.3 底径 17.3	体部は若干外反しながら立ち上がる。体部と底部との境界は不明瞭。外底部に火ダスキの痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内・外、暗紫灰色～茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
604	皿	灰原 6 d	口径 20.1 器高 2.5 底径 17.2	体部は外上方へのび、口縁部にいたり外反する。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色～灰色 外、緑灰色～茶灰色～白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/5
605	皿	灰原 5 e	口径 20.4 器高 2.4 底径 17.3	体部・口縁部は外上方へ立ち上がる。内外面に火ダスキの痕が認められる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、白灰色～茶灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D 1/2
第70図 606	皿	灰原 6 e	口径 20.4 器高 2.7 底径 16.8	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内、黒色～暗青灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 3/5
607	皿	灰原 6 e	口径 20.8 器高 2.5 底径 17.1	体部はやや外反しながら外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好

## B-2地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
608	皿	灰原 5 f	口径 20.9 器高 2.0 底径 17.5	体部は外上方へのび、口縁部はやや外反する。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
609	皿	灰原	口径 21.0 器高 2.3 底径 18.2	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通
610	皿	灰原	口径 21.0 器高 2.1 底径 17.8	体部はやや外反しながら外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
611	皿	灰原 6 e	口径 21.0 器高 2.7 底径 17.4	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
612	皿	灰原	口径 21.0 器高 2.8 底径 17.3	体部は外上方へのび、口縁部は若干外反する。 外底部は未調整。	A 内・外、暗茶灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
613	皿	灰原 5 e	口径 21.0 器高 2.9 底径 16.2	体部は外上方へのび、上位で外反する。体部と底部との境は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内、灰色～黒色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 1/4
614	皿	灰原 6 e	口径 21.0 器高 2.9 底径 17.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。体部と底部との境は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
615	皿	灰原 6 f	口径 21.0 器高 3.0 底径 16.1	体部・口縁部は外上方へのびる。外底部に板状圧痕を伴なう。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色～白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
616	皿	灰原 6 f	口径 21.0 器高 3.1 底径 15.8	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
617	皿	灰原 6 f	口径 21.0 器高 3.1 底径 18.1	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/4
618	皿	灰原 6 f	口径 21.0 器高 2.5 底径 16.6	体部は中位で外反する。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/4
619	皿	灰原 6 d	口径 21.2 器高 3.2 底径 17.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色～灰色～白灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/2
620	皿	灰原 6 f	口径 21.6 器高 3.3 底径 18.0	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
621	皿	灰原	口径 21.8 器高 2.4 底径 17.0	体部・口縁部は外上方へのびる。体部内面に火ダスキの痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好
622	皿	灰原 6 e	口径 21.8 器高 2.8 底径 18.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有し、この部分に火ダスキ痕がみられる。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～青灰色 B 細砂多含 C 良好
623	皿	灰原 6 f	口径 21.9 器高 2.8 底径 18.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は不明瞭。 外底部は未調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/4
624	皿	灰原 4 b	口径 22.0 器高 2.8 底径 16.4	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色～白灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
625	皿	灰原f6	口径 22.4 器高 2.8 底径 18.4	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
626	皿	灰原e6	口径 22.2 器高 2.5 底径 19.0	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D 1/2
627	皿	灰原e7	口径 22.2 器高 3.1 底径 19.0	体部・口縁部は外上方へのびる。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
628	皿	灰原e7	口径 22.8 器高 2.8 底径 17.4	体部・口縁部は外上方へのびる。内外に火グスキの痕が認められる。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
第71図 629	盤	灰原f7	口径 20.4 器高 3.1 高台径 14.0 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端部から20cm程内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
630	盤	包含層5C	口径 22.5 器高 4.2 高台径 16.4 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。断面四角形を呈する高台は底端部から0.9cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、黄白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
631	盤	包含層	口径 24.0 器高 4.2 高台径 17.4 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から1.3cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
632	盤	灰原f6	口径 24.3 器高 4.2 高台径 18.2 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近に貼付される。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
633	盤	灰原	口径 24.9 器高 4.8 高台径 17.5 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側につく。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
634	盤	灰原d6	口径 25.1 器高 4.6 高台径 18.6 高台高 6.7	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部付近につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗黄褐色 外、暗茶色 B 砂粒少含 C 普通 D 1/2
635	盤	灰原f4	口径 25.6 器高 4.3 高台径 19.6 高台高 0.6	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.5cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
636	盤	灰原b4	口径 26.2 器高 4.8 高台径 20.4 高台高 0.6	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部付近に貼付される。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
637	盤	灰原f6	口径 26.3 器高 5.0 高台径 19.9 高台高 0.8	体部・口縁部は直線的に外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 1/2
638	盤	灰原g5	口径 27.0 器高 3.9 高台径 20.0 高台高 0.6	体部は若干内湾しながら外上方へのびる。体部と底部との境界は丸味を有する。高台は底端部から1.0cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
639	盤	灰原f5	口径 27.0 器高 3.9 高台径 20.6 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。高台は底端部から0.8cm内側に貼付される。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
640	盤	灰原f5	口径 28.0 器高 4.2 高台径 20.8 高台高 0.5	体部・口縁部は外上方へのびる。体部と底部の境界は丸味を有する。高台は底端部から1.2cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、茶褐色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
641	盤	灰原f4	口径 29.0 器高 4.6 高台径 24.2 高台高 0.7	体部・口縁部は外上方へのび、その傾斜は急である。高台は底端部から0.7cm内側につく。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2

## B-2 地区

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
642	盤	灰原 6 e	口径 30.0 器高 4.2 高台径 22.6 高台高 0.4	体部上位口縁部付近で外反する。体部と底部の境界は、丸味を有する。高台は底端部付近に貼付される。外底部回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
第72図 643	高杯	灰原 7 e	口径 20.0	口頸部は直立し、端部はやや平坦である。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂多含 C 良好
644	高杯	灰原 7 e	口径 20.0	口頸部はやや外傾し、端部は平坦である。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好
645	高杯	灰原 6 e	口径 20.2	口頸部は直立し、端部はやや内傾し面を成す。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色～紫灰色 B 細砂多含 C 良好
646	高杯	灰原 7 e	口径 22.0	口頸部は直立し、端部は面を成す。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 普通
647	高杯	灰原 6 f	口径 27.0	口頸部はやや外傾する。端部は面を成す。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好
648	高杯	灰原 4 b	脚底径 12.6 脚部高 5.1	脚部にシボリ目がみられる。	A 内、黄灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
649	高杯	包含層 7 f	脚底径 11.4 脚部高 5.6	脚部にシボリ目がみられる。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
650	高杯	包含層 8 d	脚底径 11.0 脚部高 6.7	脚部にシボリ目がみられる。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通
651	高杯	包含層	脚底径 9.6 脚部高 4.6	脚部にシボリ目がみられる。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好
652	高杯	包含層 8 d	脚底径 12.0 脚部高 5.2	脚部にシボリ目がみられる。	A 内、灰色 外、白灰色～灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
653	高杯	灰原 4 g	脚底径 11.6 脚部高 5.7	脚部にシボリ目がみられる。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好
654	高杯	灰原 4 f	脚底径 10.0 脚部高 5.2	脚部にシボリ目がみられる。 杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
655	高杯	灰原	脚底径 11.8 脚部高 5.0	脚部にシボリ目がみられる。	A 内、黄灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好
656	高杯	包含層 8 d	脚底径 11.6 脚部高 6.1	脚部にシボリ目がみられる。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
657	高杯	包含層 8 d	脚底径 12.0 脚部高 6.3	脚部にシボリ目がみられる。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好
658	高杯	灰原	脚底径 16.6 脚部高 11.2	脚部にシボリ目がみられる。	A 内、黄灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
659	高杯	灰原	脚底径 14.8 脚部高 10.2	脚部にシボリ目がみられる。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好
660	高杯	包含層 8 d	脚底径 20.6 脚部高 14.9	脚部にシボリ目がみられる。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
第73図 661	高杯	灰原 6 e	口径器高 21.3 6.4 脚底径 11.8 脚部高 4.8	口頸部は直立きみで、端部は面を成す。脚端部は断面三角形に近い。脚部にシボリ目が観察される。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
662	高杯	灰原 7 e	口径器高 21.2 5.9 脚底径 12.0 脚部高 5.2	口頸部はやや外傾し、端部は面を成す。脚端部は若干外傾する。脚部にはシボリ目がある。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
663	高杯	灰原 6 e	口径器高 21.5 7.5 脚底径 10.9 脚部高 5.5	口縁部は直立し、端部は若干面を成し、内傾する。脚端部の外側面は若干凹む。脚部のシボリ目はあまり顕著でない。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色～灰色 外、暗灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ½
664	高杯	灰原 6 d	口径器高 21.2 6.4 脚底径 10.6 脚部高 5.2	口頸部は本来直立すると考えられる。脚端部は外傾する。脚部のシボリ目は顕著でない。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色～茶灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好
665	高杯	灰原 6 b	口径器高 19.8 8.2 脚底径 11.0 脚部高 5.4	口頸部は本来直立気味である。脚端部の側面は若干凹む。脚部のシボリ目はあまり顕著でない。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
666	高杯	灰原 6 e	口径器高 21.1 7.1 脚底径 11.2 脚部高 5.6	頸部は直立し、口縁部外側面は外方へ水平に引き出される。脚端部はやや外傾する。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
667	高杯	灰原 6 e	口径器高 21.4 7.5 脚底径 11.2 脚部高 5.9	口頸部は直立に近く、端部は面を成す。脚端部は外傾する。脚部にはシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
668	高杯	灰原 6 e	口径器高 20.1 8.0 脚底径 10.7 脚部高 6.0	口頸部はやや外傾し、端部は面を成す。脚端部はやや外傾する。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
669	高杯	灰原 6 e	口径器高 21.2 8.6 脚底径 9.8 脚部高 5.9	頸部は直立し、口縁部外側は外方へ引き出される。脚端部は直立する。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色～黄灰色 外、明灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
670	高杯	灰原 6 e	口径器高 21.5 9.9 脚底径 11.5 脚部高 6.5	やや歪なため、口頸部は内傾する。脚端部は小さく、直立きみである。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
671	高杯	灰原 7 e	口径器高 21.4 8.4 脚底径 11.0 脚部高 6.3	口頸部は直立する。脚端部はやや外傾する。脚部にシボリ目がみられる。杯部の外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ½
672	高杯	灰原 6 f	口径器高 21.9 7.7 脚底径 13.0 脚部高 6.2	頸部は直立し、口縁部はやや外傾する。脚端部の器肉は薄く外傾する。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D ¼
第74図 673	高杯	III-E 東隅 包含層	口径器高 20.2 9.0 脚底径 11.6 脚部高 6.7	口頸部はやや外傾し、端部は面を成す。脚端部は直立する。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
674	高杯	灰原 6 e	口径器高 22.9 7.7 脚底径 12.4 脚部高 6.0	杯部が歪なため口頸部は外傾するが、端部は面を成す。脚端部は外傾する。脚部にはシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
675	高杯	灰原 6 e	口径器高 20.8 8.3 脚底径 13.0 脚部高 7.1	頸部は直立し、口縁部側面は外方へ引き出される。脚部外側面は凹み、端部は外方へ跳る。脚部にシボリ目がみられる。杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼

## B-2地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
676	高杯	灰原 5 e	口径 25.6 器高 15.0 脚底径 14.2 脚部高 12.9	頸部は直立ぎみであり、口縁部は丸味を有するが、端部は面を成す。脚端部は若干内傾し、側面は凹む。脚部にシボリ目がみられる。 杯部外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
677	短頸壺 (蓋)	灰原 7 e	口径 13.4	口縁端部はやや凹み、内側に稜線を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶灰色 外、茶灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
678	短頸壺 (蓋)	灰原 6 f	口径 13.8 器高 3.1 つまみ径 2.4 つまみ高 0.8	口縁部は外反し、端部は丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～茶灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
679	短頸壺 (蓋)	灰原 6 f	口径 14.8 器高 3.4 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は外反し、端部は面を成し、内面は稜線を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
680	短頸壺 (蓋)	灰原 6 d	口径 15.5	口縁端部は面を成す。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
681	短頸壺 (蓋)	灰原 5 d	口径 15.8	口縁端部は面を成す。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好
682	短頸壺 (蓋)	灰原 4 f	口径 15.6	口縁部端部は凹み、外側面は外に出る。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
683	短頸壺 (蓋)	灰原 6 e	口径 16.0	口縁端部は丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
684	短頸壺 (蓋)	灰原 6 f	口径 16.8 器高 4.0 つまみ径 2.9 つまみ高 1.1	口縁端部は面を成す。火ダスキがみられる。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
685	短頸壺 (蓋)	灰原 7 e	口径 18.0	口縁端部は若干丸味を有する。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、白灰色～灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好
686	短頸壺 (蓋)	灰原 4 f	口径 22.0	口縁端部は凹む。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
第75図 687	短頸壺 (身)	灰原 5 e	口径 9.2 器高 13.1 高台径 11.6 高台高 1.4 胴部最大径 18.6	口頸部は直立し、端部は面を成す。胴部最大径はやや上位にある。断面四角形を呈する高台は若干外方へ跳る。 胴部最大径より下位は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
688	短頸壺 (身)	灰原 6 e	口径 11.4 器高 15.3 高台径 11.4 高台高 1.0 胴部最大径 20.6	口頸部は直立し、端部は面を成す。胴部最大径は中位よりやや上位にある。 回転ヘラ削り調整は脚端から7.3cmから始まる。	A 内、緑灰色 外、白灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
689	短頸壺 (身)	灰原 27-e	口径 12.7 器高 20.6 高台径 14.7 高台高 1.4 胴部最大径 25.5	口頸部は直立し、口縁端部は面を成し、内傾し、やや不明瞭ながら内面に稜線を有する。胴部最大径は中位よりやや上位にある。高台は外傾する。 回転ヘラ削り調整は胴部最大径から始まる。	A 内・外、紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
690	短頸壺 (身)	灰原 6 f	口径 15.4 器高 26.1 高台径 15.3 高台高 1.0 胴部最大径 31.4	口頸部は直立ぎみで、端部はやや凹む。高台はやや外反する。 胴部最大径は中位よりやや上位にはある。 回転ヘラ削り調整は胴部最大径より下位に始まる。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好 D ⅓
691	短頸壺 (身)	包含層 8 d	口径 10.6 器高 5.8 高台径 6.9 高台高 0.8 胴部最大径 12.0	口頸部は若干外反しながら立ち上がる。胴部最大径は上位にある。 体部中位から以下は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通
第76図 692	瓶	灰原	口径 4.2	口縁部は外上方へのび、先端部は上方へ立ち上がる。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
693	瓶	包含層 8 e	口径 6.0	口縁部は外傾し、端部は面を成す。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
694	瓶	灰原	口径 7.0	口縁部は中位で屈曲し、先端部は外方につまみ出される。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好
695	瓶	灰原 7 e	口径 5.2	口縁部は水平近く外方へ折れ、先端部は上方へ屈曲する。頸部中位に二条の沈線様凹みが巡る。	A 内・外、灰色～灰黒色 B 細砂少含 C 良好
696	瓶	灰原 7 e 包含層 8 d	最大胴径 13.0	体部中位以下は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好
697	瓶	包含層 6 g	口径 9.2 最大胴径 19.2	一对の耳を有する双耳瓶である。口縁部は水平に近く、端部は面を成す 耳の下端付近から回転ヘラ削り調整が始まる。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好
698	鉄鉢形鉢	灰原 6・7 e	口径 19.6 器高 12.0 最大径 21.5	口縁部の端部は面を成し、外側面を若干上方へ引き出している。 底端部から6.8cm上から以下にかけて回転ヘラ削り調整。尖った底部は横ナデ。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好
699	鉄鉢形鉢	灰原 4 e	口径 21.3 器高 12.7 最大径 23.0	口縁端部は若干丸味を有する。 底端部から上9.4cmから3.6cmまでは回転ヘラ削り、それ以下は横ナデ調整である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
700	鉄鉢形鉢	灰原 6 e	口径 22.2 最大径 24.5	口縁端部は若干面を成す。 体部外面上位から回転ヘラ削り調整が始まる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
701	鉄鉢形鉢	灰原 4 e	口径 25.1 最大径 27.2	口縁端から6.0cm下った部分から回転ヘラ削り調整が始まる。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好
第77図 702	鉢	灰原 5 f	口径 24.0 器高 13.9 底径 17.2	口縁端部はやや面を成す。 底部から4.2cm上位部分から外底部にかけて回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良
703	鉢	包含層 3 d e 9 d e	口径 25.0	口縁端外側面を若干外方へ引き出している。 口縁端から11.2cm下方から回転ヘラ削り調整が始まる。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～灰色 B 細砂少含 C 不良
704	鉢	包含層 8 e	口径 25.6 器高 18.9 底径 15.3	口縁端はやや丸味を有する。 底部から8.2cm上位から底部にかけて回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅔
705	鉢	包含層 13 d	口径 26.0	口縁部は若干面を成す。 口縁部から下方9.3cmの部分から以下にかけて回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含 C 良好
706	鉢	灰原 6 f	口径 26.0	口縁端部は面を成す。 口縁部から下方12.5cmの部分から回転ヘラ削り調整が始まる。	A 内、灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好
707	鉢	灰原 5 f 7 e	口径 27.8 器高 17.8	口縁端部は若干凹む。 底部から10.3cm上位の縁から底部にかけて回転ヘラ削り調整が始まる。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
708	鉢	灰原 4・6 f	口径 39.0 器高 17.2 底径 21.7	口頸部は外反し、端部は若干面を成す。外面は格子の叩き目、内面は青海波状の当て具痕がある。	A 内・外、灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
709	鉢	灰原 6 e	口径 38.6 器高 23.6	頸部は外傾し、口縁部は外上方へ屈曲し、端部は面を成す。外目格子の叩き目、内面は青海波状の当て具痕がある。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好 D ⅓

C地区（足洗川窯跡群）

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第86図 1	蓋杯 (蓋)	34号窯 床面	口径 14.1	口縁部は低く、端部は丸い。体部と境はわずかに屈曲し、体部は直線的である。 天井部は低く平坦である。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
2	蓋杯 (蓋)	34号窯 床面	口径 14.3 器高 2.8 つまみ径 3.3 つまみ高 0.8	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。内側の稜に沈線が巡る。体部は内弯気味。 天井部は低く平坦で、中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
3	蓋杯 (蓋)	34号窯 床面	口径 15.3 器高 2.6 つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	口縁部は低く、側面は内傾する。端部は丸い。体部は直線的。 天井部は低く平坦で、中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
4	蓋杯 (蓋)	34号窯 床面	口径 15.0 器高 2.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部は鋭い。体部は内弯気味に下降し、口縁部との境はわずかに屈曲する。天井部は低く平坦で中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰白色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
5	蓋杯 (蓋)	34号窯 床面	口径 15.4 器高 3.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は低く、側面が内弯気味に内傾する。体部は内弯気味で、天井部との境は明瞭。天井部は低く平坦で、中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D 1/2
6	蓋杯 (蓋)	34号窯 窯内	口径 20.9 器高 3.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は高く垂直に立つ。側面は内弯気味。体部は内弯気味で、口縁部との境は屈曲する。 天井部は低く、中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D 完存
7	蓋杯 (身)	34号窯 煙道 上部	高台径 8.8 高台高 0.3	体部は内弯気味にのびる。底部には低い高台が貼り付き、体部との境は不明瞭。調整は磨滅し不明。	A 内・外、黄灰色 B 微砂少含 C 不良
8	蓋杯 (身)	34号窯 床面	口径 12.9 器高 4.3 高台径 8.8 高台高 0.5	口縁部は直線的にのびる。体部の下方にやや丸味を有す。底部には低い高台が貼り付き、体部との境は不明瞭。底部と体部下方の二ヶ所に穿孔あり。外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色～暗灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/2
9	蓋杯 (身)	34号窯 埋土	口径 18.0 器高 5.9 高台径 9.8 高台高 0.5	体部・口縁部は直線的に開く。底部と体部の境は不明瞭。断面四角形の低い高台が、内側に付く。外底部の調整は磨滅し不明。	A 内・外、白緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
10	皿	34号窯 埋土	口径 20.4 器高 2.6 底径 17.6	体部は直線的に開き、口縁部はさらに屈曲して開く。底部と体部の境は不明瞭。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰白色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
11	高杯	34・35号窯 前面 堆積土	口径 23.6	口縁部は上方へ立ち上る。側面は内弯気味。上端部は水平。体部外面は一部回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/4
12	長頸壺	34号窯 煙道 上部	高台径 12.0 高台高 0.8	口頸部を欠失する。体部は直線的に外上方へのび、屈曲して肩部となる。底部は平らで、底端部に外へ開く高台が付く。器表は磨滅し調整不明。	A 内・外、明橙色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 1/2
13	甗	34・35号窯 前面 堆積土	口径 50.0	口縁部は内弯気味に大きく開く。外傾する端部は平坦である。外端部に二条の三角凸線が巡る。頸部内面に指頭圧痕が顕著である。	A 内、黒灰色 外、黒灰色～黒色 B 砂粒少含、礫1個含 C 良好 D 口縁部残1/2
14	甗	34号窯 内埋土	口径 57.6	口縁部は内弯気味にのび、上方で反転して屈曲する。端部の上面は平坦である。外端部に三条の凸線が巡る。	A 内・外、黒灰色～黒色 B 砂粒少含、礫1ヶ含 C 良好 D 口縁部残1/2
15	甗	34号窯 煙道 上部		口縁部は屈曲し、外傾する端部は平坦である。外端部に二条の凸線が巡る。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 破片
第90図 16	蓋杯 (蓋)	36号窯 窯内	口径 14.3 器高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	口縁部は高く垂直に近いが、側面は内弯する。体部は直線的で、口縁部との境は不明瞭。 天井部は低く、平坦で、中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。外天井部は未調整。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 完存
17	蓋杯 (蓋)	36号窯 窯内	口径 17.3 器高 2.3 つまみ径 2.8 つまみ高 1.2	口縁部は外傾し、側面が内弯する。天井部は平坦だが、体部は丸味を有す。つまみは高く中央が凹む。外天井部は未調整。体部近く1/2は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～黒色、 外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
18	蓋杯 (蓋)	36号窯 窯内	つまみ径 2.0 つまみ高 0.3	体部下半を欠失する。 天井部の中央付近に穿孔が一ヶ所あり。 外天井部は未調整。	A 内、黒灰色 外、黒色 B 砂粒少含 C 良好 D %
19	蓋杯 (蓋)	36号窯 窯内	口径 25.8	口縁部は短かく突出し、端部は丸い。 体部は直線的に開く。 残存する外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 微砂多含、砂粒少含 C 良好 D 1/2
20	蓋杯 (蓋)	36号窯 窯内	口径 27.4	口縁部は大きく屈曲し高い。端部は鋭く側面はやや内湾する。 内面の稜は沈線が巡る。 天井部と体部の境は不明瞭でなめらかに丸味を有す。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、青灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
21	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 10.2 器高 3.5 高台径 7.1 高台高 0.4	口縁部はゆるく外反し、端部は丸い。 体部と底部の境は不明瞭で、口縁部より内側に低い高台が貼り付く。底部の中央に穿孔が1ヶ所有り。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
22	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 10.8 器高 3.5 高台径 7.5 高台高 0.4	口縁部は大きく外反して開く。端部は尖り気味。 体部と底部の境は丸味を持ち、細く低い高台が底端部やや内側に貼り付く。 底部中央に穿孔が1ヶ所有り。外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶灰色 外、黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 完存
23	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 14.0 器高 3.7 高台径 8.7 高台高 0.6	体部は沈線状の段を持って直線的に外上方へのびる。 口縁部先端はやや尖り気味。 断面四角形の高台は底端部より内側に入った位置に貼り付く。外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
24	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 13.7 器高 4.2 高台径 9.2 高台高 0.6	口縁部はゆるく外反して立ち上り、端部は丸い。 体部と底部の境はやや不明瞭。 底端部より内側に断面四角形の高台が貼り付く。 外底部は未調整。	A 内、黒色 外、紫灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
25	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 14.0 器高 4.2 高台径 10.0 高台高 0.6	口縁部・体部はほぼ直線的に外上方へのびる。端部は丸い。 断面四角形の高台が底端部近くに貼り付く。 器内は全体的に厚目。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 普通 D %
26	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 14.8 器高 5.8 高台径 8.7 高台高 0.6	口縁部・体部は直線的に外上方へのびる。端部は丸い。 底部は深く、断面四角形の高台が底端部近くに貼り付く。 外底部は未調整。	A 内・外、暗緑灰色～黒灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
27	蓋杯 (身)	36号窯 窯内	口径 19.8 器高 5.4 高台径 12.5 高台高 0.6	口縁部・体部はほぼ直線的に外上方へのびる。端部は丸い。 断面四角形の高台が底端部近くに貼り付く。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
28	甕	36号窯 窯内 灰原	口径 46.6	口縁部はゆるやかに外反し、平坦は上端部は外傾する。 外端部に二条の凸線を巡らす。 外面正位の正格子叩き痕。 内面青海波の当具痕。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部完存
第91図 29	蓋杯 (蓋)	36号窯 前面 堆積土	口径 13.3 器高 3.2 つまみ径 2.1 つまみ高 0.8	口縁部は短かく突出し、端部は丸い。 天井部と体部の境は不明瞭で、全体に丸味を有す。 天井部はやや高く、中央に擬宝珠様のつまみが付く。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗青灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D %
30	蓋杯 (蓋)	37号窯 前面崩 壊土中	口径 14.8 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は短かく突出し、端部は丸い。 天井部と体部の境は不明瞭で、全体に丸味を有す。 中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。 外天井部は未調整。	A 内・外、明緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D %
31	蓋杯 (蓋)	36・37 号窯 前面 堆積土	口径 19.8 器高 3.4 つまみ径 2.7 つまみ高 1.0	口縁部は垂直に突出し、側面は内傾する。 口縁部と体部の境はやや屈曲し、天井部と体部は丸味を有す。 中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
32	杯	36・37 号窯 前面 堆積土	口径 12.3 器高 3.6 底径 8.2	口縁部・体部は直線的に外上方へのびる。 体部と底部の境は明瞭。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
33	蓋杯 (身)	36・37 号窯 前面 堆積土	高台径 20.0 高台高 0.9	体部は直線的に外上方へのびる。 断面四角形の高台が底端部のやや内側に貼り付く。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
34	蓋杯 (身)	36・37 号窯 前面 堆積土	口径 26.4 器高 4.6 高台径 21.4 高台高 0.8	口縁部・体部は直線的に外上方へのび、端部は丸い。 体部と底部の境は明瞭で、底端部のやや内側に高台が付く。 外底部は未調整。	A 内、灰色 外、黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2

## C地区

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
35	皿	36・37号窯前面堆積土	口径 17.6 器高 2.2 底径 14.4	口縁部は外反気味にのび、端部の丸い。 体部と底部の境は明瞭。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 微砂少含 C 良好 D ½
36	皿	36・37号窯前面堆積土	口径 19.7 器高 2.4 底径 15.8	口縁部は外反気味に立ち上り、端部は丸い。 体部と底部の境は丸味を持つ。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 微砂少含 C 良好 D ほぼ完存
37	高杯	36・37号窯前面堆積土	口径 23.6	口縁部は短かく直立し、端部が外側に肥厚する。 杯部外底面は½を回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 普通 D ½
38	高杯	36・37号窯前面堆積土		口縁部は短かく直立し、端部が外側に肥厚する。杯部外底面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 微砂少含 C 良好 D ½
39	高杯	36・37号窯前面堆積土	脚底径 16.0 脚部高 13.6	杯部を欠失する。 裾部はなだらかに広がり、端部は短かく突出する。 裾端部は丸い。	A 内・外、明緑灰色 B 微砂少含 C 良好 D ½
40	細頸壺	36・37号窯前面堆積土	口径 12.8	頸部以下を欠失する。 口縁部は上半で大きく開き、上端部は強く屈曲する。 上面は平坦で端部は丸い。 一条の沈線が巡る。	A 内・外、灰白色 B 砂粒少含 C 普通 D 頸部完存
41	壺	36・37号窯前面堆積土	高台径 10.2	体部と骨部の境は丸味を持ち、上位½に最大径を有す。 体部、外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰褐色 B 精良 C 普通 D 胴部完存
42	把手付鉢	36・37号窯前面堆積土	口径 32.0	体部は丸味を有し、口縁部はくの字に反転する。 体部の中程に上方に彎曲する把手が付く。 体部外面は正位の正格子叩き。 内面の弧状の当具痕は荒くナゲ消す。	A 内・外、明茶色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D ½
第93図 43	蓋杯(蓋)	37号窯窯内	口径 13.2 器高 3.2 つまみ径 2.0 つまみ高 0.9	口縁部は垂直に下り、端部は丸い。 天井部、体部の境は不明瞭で全体に丸味を有す。 中央のつまみは内側が凹む。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
44	蓋杯(蓋)	37号窯窯内	口径 13.7 器高 2.8 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は短かく突出し、端部は丸い。 天井部と体部の境は不明瞭でやや丸味を有す。 天井部中央に扁平な擬宝珠様のつまみが付く。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色～暗灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
45	蓋杯(蓋)	37号窯窯内	口径 13.6 器高 2.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.8	口縁部は短かく突出し、端部は丸い。 体部と口縁部の境はやや屈曲する。 全体にやや丸味を有す。 外天井部は未調整。	A 内、暗灰色 B 外、灰色～黒灰色 C 細砂少含 D 良好 ほぼ完存
46	蓋杯(身)	37号窯窯内	口径 12.4 器高 4.3 高台径 7.6 高台高 0.4	口縁部・体部はやや丸味を持って外上方にのび、端部は丸い。 断面四角形の低い高台が底端部近くに貼り付く。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 微砂少含 C 普通 D ほぼ完存
47	蓋杯(身)	37号窯窯内	口径 13.6 器高 4.0 高台径 9.8 高台高 0.5	口縁部は体部からやや外反気味にのび、端部は丸い。 高台は底端部よりはなれて貼り付く。 外底部½を未調整で、他は横ナゲ。	A 内・外、灰褐色 B 砂粒少含 C 普通 D ½
48	皿	37号窯窯内	口径 22.2 器高 2.1 底径 19.0	口縁部は短かく外上方にのび、端部は丸い。 体部と底部の境は丸味を有す。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、明緑灰色 B 微砂少含 C 普通 D ½
49	双耳鉢	37号窯窯内		体部はわずかに丸味を持つ。 下位の把手は断面隅丸方形、半環状の耳を呈す。 内外面とも横ナゲ。	A 内・外、青灰色 B 砂粒多含 C 普通
第95図 50	蓋杯(蓋)	灰原	口径 10.1 器高 1.5 つまみ径 0.8 つまみ高 0.9	口縁部は短かく突出し、端部は尖り気味。 天井部・体部はほぼ水平で低い。 天井部中央のつまみは小さく器高に比べて高い。 外天井部は回転ヘラ削り。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
51	蓋杯(蓋)	灰原	口径 11.4 器高 1.5	口縁部は断面三角形で、端部は尖り気味。 天井部は平坦で、中央につまみは付かない。 外天井部の調整は磨滅著しく不明。	A 内・外、灰色 B 微砂少含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
52	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.1 器高 2.1	口縁部は短かく断面三角形に突出し、端部は尖る。 天井部・体部はやや丸味を持つ。つまみは付かない。 外天井部は未調整で灰をかぶる。	A 内、暗青灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
53	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 13.7 器高 2.4 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は長目に突出し端部は尖がる。 内面の稜は鋭い。 平坦な天井部から屈曲して、中央に扁平なつまみが付く。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
54	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.2 器高 1.8 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部はほぼ垂直に下り、側面はやや内弯する。 平坦な天井部から屈曲して、体部は直線的に下りる。 天井部中央のつまみは扁平な擬宝珠様。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
55	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.3 器高 2.3 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部はほぼ垂直に突出する。端部はやや尖り気味。 体部は直線的に下りる。 天井部は低く中央に扁平な凹んだつまみが付く。 外天井部の調整は不明。	A 内、暗灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
56	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 14.7	口縁部は短かく厚目。 天井部は低く、平坦である。中央寄りに穿孔有り。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
57	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 17.9 器高 3.2 つまみ径 1.4 つまみ高 0.9	口縁部はわずかに突出し、内面の稜にもぶい。 体部と口縁部の境はやや屈曲する。 天井部と体部の境は不明瞭で全体に丸味を持つ。天井部中央のつまみは他に比べて小さい。外天井部の調整は不明。	A 内・外、明緑灰色 B 微砂少含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
58	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 17.5 器高 3.2 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は短かく突出し、端部は丸い。 体部は内弯気味に下り、天井部もやや傾斜する。 天井部中央には扁平なつまみが付く。 外天井部は未調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
59	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 19.8 器高 3.4	口縁部は外傾して突出し、側面はややくぼむ。体部は直線的に下り、天井部との境には段がつく。 外天井部は未調整。	A 内・外、褐色～白灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
60	杯	灰原	口径 11.0 器高 2.7 底径 6.3	口縁部・体部は直線的で、やや開き気味、底部との境は丸味を帯びる。 底部は浅く、中央に穿孔有り。 外底部は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
61	杯	灰原	口径 15.5 器高 3.0 底径 13.7	口縁部は直立気味に立ち、端部は丸い。 底部と体部の境は丸味を持つ。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
62	杯	灰原	口径 16.0 器高 5.2 底径 11.2	口縁部・体部はゆるく内弯して立ち、端部は丸い。 体部と底部の境は丸味を持つ。 底部は深く、外底部は回転ヘラ削り調整。 内側に多量のスラッグが付着する。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{3}{4}$
63	蓋杯 (身)	灰原	高台径 9.4 高台高 0.4	体部と底部の境は明瞭である。 底端部より中央寄りに低い断面四角形の高台を付す。 外底部は未調整。板状圧痕有り。	A 内・外、暗青灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{3}$
64	蓋杯 (身)	灰原	口径 15.4 器高 4.6 高台径 10.2 高台高 0.4	口縁部・体部はほぼ直線的に外上方へのび、端部は丸い。 体部と底部の境は丸味を持ち、底端部近くに高台を付す。 外底部は未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{3}{4}$
65	皿	灰原	口径 26.0 器高 4.4 高台径 20.6 高台高 0.6	口縁部・体部は丸味を持って、上方へのび、端部は丸い高台は底端部より内側寄りに付す。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{3}$
66	皿	灰原	口径 26.6 器高 4.4 高台径 20.2 高台高 0.6	口縁部・体部はほぼ直線的にのび、端部は丸い。 底端部より内側に幅広の高台が付く。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 砂粒少含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
67	皿	灰原	口径 16.8 器高 2.2 底径 14.2	口縁部・体部は直線的に開き、端部は丸い。 体部と底部の境に段がつく。 外底部は未調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
68	皿	灰原	口径 18.6 器高 2.3 底径 15.2	口縁部は丸味を持つ体部からやや反転して開き、端部は丸い。 体部と底部の境は不明瞭。 外底部は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存

## C地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
69	高杯	灰原	口径 21.3 器高 6.8 脚底径 10.6 脚部高 5.1	杯部は浅く、口縁部は短かく直立する。端部は肥厚し内傾する。 脚部は短かく、大きく屈曲する裾部は、水平に開き、端部は断面三角形に突出する。脚部内面に重ね焼きの痕跡あり。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
70	長頸壺	灰原	口径 13.2	口縁部は大きく開き、屈曲する端部の器肉は厚い。 外面の焼おくれが著しい。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部残 $\frac{1}{2}$
71	長頸壺	灰原	口径 13.2	口縁部は中位で屈曲し、外上方に開く。 端部は薄く引き出し、上端はやや内傾する。 中位に一条の沈線が巡る。 内外面にシボリ痕あり。	A 内・外、青灰色 B C 普通 D
第96図 72	長頸壺	灰原	口径 14.1	ほぼ直線的は肩部から口縁部は内傾気味に立ち上る。 中位で屈曲し、端部は水平に折れる。 口縁部の中位に沈線が二条巡る。 内外面にシボリ痕有り。	A 内・外、青灰色 B 砂粒少含 C 普通 D 頸部ほぼ完存
73	長頸壺	灰原	口径 12.6 高台径 10.0 高台高 1.0	口縁部はゆるく内湾して立ち上り、上端部が水平に屈曲する。 肩部は丸味を持ち、体部は強く屈曲して直線的に底部へ至る。水平な底部にはハの字に開く高台を付す。 外底部は未調整。口頸部は焼け歪が著しい。	A 内・外、青灰色 B C 普通 D
74	短頸壺 (蓋)	灰原	口径 15.1	口縁部は直線的でやや開く。端部はやや肥厚し、水平な面をつくる。 天井部と体部の境は不明瞭。 外天井部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 微砂、細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
75	短頸壺 (蓋)	灰原	つまみ径 2.7 つまみ高 1.9	天井部と体部の境は不明瞭。 天井部は水平で、中央に擬宝珠様の大きいつまみが付く。 外天井部は、 $\frac{1}{2}$ を回転ヘラ削り調整。他を横ナデ。	A 内、薄赤茶色 外、黒緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
76	壺	灰原	高台径 10.3 高台高 1.0	体部と底部は丸味を持つ。 高めの高台はハの字に付く。 外底部の調整は不明。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 普通 D 底部残 $\frac{1}{2}$
77	壺	灰原	高台径 10.2 高台高 0.8	体部は丸味を持ち、底部との境は不明瞭。 底端部に低い高台が付く。 体部外面にヘラ研磨を加える。	A 内・外、橙褐色 B 細砂、赤褐色粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
78	鉄鉢	灰原	口径 21.0 器高 11.1	口縁部は内傾し、端部は内傾する。 体部はやや丸味を持って下降する。 底部は尖り気味となる。 体部中位以下は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
第97図 79	甕	灰原	口径 14.8	口縁部の開きは弱く、端部を下方に肥厚する。肩部から体部にかけては丸味を持つ。 器表は磨減著しい。	A 内、暗灰色 外、緑灰色 B 微砂少含 C 良好 D
80	甕	灰原	口径 25.8	口縁部は大きく反転して開き、端部が上方に屈曲する。 外端部の下面は凸線状に段がつく。 体部外面正位の正格子。内面弧状の当具痕。	A 内、緑灰色 外、灰色～松葉色(釉) B 砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
81	甕	灰原	口径 37.8	厚みのある頸部から、口縁部はやや外反気味に立ち上る。 端部近くでさらに屈曲し、上面は平坦に外傾する。 外端部に三条の凸線が巡る。 体部外面は下位の正格子。内面は弧状の当具痕。	A 内・外、黒灰色～紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D 口縁部残 $\frac{1}{4}$
82	甕	灰原	口径 45.0	口縁部は外反し、器肉を減じつつ外に開く。 端部近くは内面がややくぼみ、上端は強く外傾する。 口端部外面に凸線が二条巡る。 体部内面に弧状の当具痕。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 細砂多含 C 良好 D 口縁部残 $\frac{1}{2}$
83	甕	灰原	口径 50.0	口縁部は外反気味に開き、端部近くが内側に肥厚する。平坦は端部は強く外傾する。 口端部に二条の凸線が巡る。 体部外面正位の正格子。内面弧状の当具痕。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 口縁部残 $\frac{1}{2}$
84	甕	灰原	口径 56.0	口縁部は外反して大きく開き、平坦な端部は外傾する。 口端部に二条の凸線が巡る。	A 内、暗灰色～黒色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 口縁部残 $\frac{1}{2}$
85	甕	灰原		体部外面は平行叩き、内面は弧状の当具痕。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 礫少含 C 良好 D



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
86	甕	灰原		口縁部は直線的に外上方へのびる。端部は平坦で外傾する。 口縁部に二条の凸線が巡る。	A 内、暗灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好
87	甕	灰原		丸底の底部は外面正位の正格子。 内面はこまかい弧状の当具痕。 外底面には砂が輪状に付着する。	A 暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好
第98図 88	皿	灰原	口径 21.0 器高 3.2	口縁部・体部は丸味をもって立ち、端部は丸い。 全体に器肉が厚い。 外底部は未調整。	A 内・外、褐色～橙褐色 B 細砂、赤褐色粒少含 C 良好 D 1/2
89	皿	灰原	口径 20.6 器高 3.8	口縁部・体部は丸味を持ち、端部は丸い。 体部と底部の境は不明瞭で、底部の器肉は厚い。外底部は未調整。	A 内、橙褐色 外、黄褐色～褐色 B 細砂、赤褐色粒少含 C 良好 D 1/2
90	甕	灰原	口径 22.9	頸部の屈曲は弱く、口縁部は丸味を持って外反する。体部にくらべ口縁部の器肉が厚い。 体部外面縦の刷毛目、内面へら削り。	A 内・外、橙褐色 B 砂粒多含 C 良好
91	甕	灰原		口縁部は内弯気味に開き、端部は丸い。 体部は丸味を持つが張りは弱い。 外面は磨滅し、内面はへら削り。	A 内、黄褐色 外、黒色 B 細砂多含、砂粒、 赤褐色粒少含 C 良好
第99図 92	蓋杯 (蓋)	表土	口径 14.1 器高 2.3 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は断面三角形に小さく突出する。 体部は直線的に下りる。 天井部は低く、ほぼ平坦で中央に扁平なつまみが付く。 外天井部は1/2を回転へら削り、他は未調整。	A 内、茶灰色 外、茶灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
93	蓋杯 (蓋)	表土	口径 14.3 器高 2.3 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は下方に突出するが、内面の稜は非常ににおい。 天井部と体部の境は不明瞭で、中央に扁平なつまみが付く。 外天井部は未調整。	A 内、黒灰色～黒色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
94	蓋杯 (蓋)	表土	口径 14.8 器高 2.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は小さく下方に突出し、端部は丸い。 天井部から口縁部まで、ながらかに丸味を持って下降する。 外天井部は未調整。	A 内・外、灰色～明緑灰色 B 微砂少含 C 普通 D ほぼ完存
95	蓋杯 (蓋)	表土	口径 15.3 器高 1.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は小さく下方に突出し、端部は丸い。 天井部から体部までほぼ水平で、極めて低く中央部は接地している。 中央に扁平なつまみが付く。外天井部は未調整。	A 内・外、明緑灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
96	蓋杯 (蓋)	表土	口径 15.8 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.6	口縁部は小さく、丸く突出する。 天井部と体部の境は不明瞭で、ほぼ直線的に下降する。 中央に扁平なつまみが付く。 外天井部は未調整。	A 内、暗緑灰色 外、緑灰色～黒灰色 B 微砂少含 C 普通 D 1/2
97	蓋杯 (蓋)	表土	口径 15.9 器高 2.5 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は小さく下方に突出し、端部は丸い。 天井部、体部は境が不明瞭で、なだらかに下降する。 外天井部は未調整。	A 内・外、緑灰色～暗灰色 B 微砂少含 C 普通 D 1/2
98	蓋杯 (蓋)	表土	口径 27.6 器高 つまみ径 つまみ高	口縁部は、体部からやや屈曲して下方に突出する。 天井部・体部は境が不明瞭で、丸味を持つ。 外天井部は1/2を回転へら削り、他は未調整。	A 内・外、茶褐色～暗緑灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 良好 D 1/2
99	杯	表土	口径 12.0 器高 3.0 底径 8.8	口縁部はほぼ直線的に上方へのびる。 体部の下半は丸味を持つ。 外底部は未調整で中央に1ヶ所穿孔がある。	A 内・外、黒灰色～紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
100	杯	表土	口径 12.6 器高 4.0 底径 9.0	口縁部は直線的にのび、端部は丸い。 体部と底部の境は丸味を帯びている。 器肉は厚い。 外底部は未調整。	A 内・外、茶灰色～黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
101	蓋杯 (身)	表土	口径 13.1 器高 4.8 高台径 8.8 高台高 0.6	口縁部・体部はやや丸味を持って立ち上る。端部は鋭い。 底部は深く、底端部近くにハの字に開く高台が付く。 外底部は未調整。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 微砂少含 C 良好 D 1/2
102	蓋杯 (身)	表土	口径 17.6 器高 4.8 高台径 13.2 高台高 0.6	口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。端部は丸い。 底端部近くに低い高台が貼り付く。 器面は磨滅しており調整不明。	A 内・外、白灰色 B 微砂、細砂少含 C 不良 D 1/2

## C地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
103	蓋杯 (身)	表土	口径 19.1 器高 6.4 高台径 13.0 高台高 0.6	体部から口縁部にかけて直線的に開く。 底端部に接して低い高台が貼り付く。 外底部は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ⅓
104	壺	表土	器高 高台径 13.0 高台高 0.5	底端部近くに低い高台が貼り付く。 外底部は⅓を回転ヘラ削り、他は未調整。	A 内、茶色 外、暗緑灰色～茶色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
105	甕	表土	口径 27.0	張りのない体部から、明瞭な稜をつくらずに口縁部は外反する。 内外面とも横ナデ。	A 内・外、茶灰色～緑灰色 B 微砂多含、細砂少含 C 普通 D ⅓
106	甕	表土	口径 23.8	口縁部は強く外反する。口端部に鋭い一条の凸線を下向きに巡らす。 外面正位の正格子叩き。 内面弧状の当具痕。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 精良 C 良好
107	甕	表土	口径 46.4	口縁部は先端近くで内湾する。 端部は平坦で内傾する。 口端に三条の凸線が巡る。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒多含 C 良好 D 口縁部残⅓
第100図 108	甕	表土	口径 49.8	口縁部は外反気味に大きく開き、先端部近くで屈曲する。 平坦な端部は外傾する。 外面に三条の凸線が巡る。	A 内・外、 暗灰色～灰色～黒色(自然釉) B 砂粒少含 C 良好 D 口縁部残⅓
109	甕	表土	口径 50.0	口縁部は徐々に外反の度合を強めてゆき、先端部近くで、やや屈曲する。端部は外側に肥厚し、上面は平坦で外傾する。 外面に二条の凸線が巡る。	A 内・外、灰色～黒色 B 礫少含 C 良好 D 口縁部残⅓
110	甕	表土	口径 50.6	口縁部は外反気味に開き、端部はやや丸い。 肩部は強く張る。 口縁部に二条の幅広い凸線が巡る。 外面は正位の正格子叩き、内面弧状の当具痕。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 口縁部残⅓
111	甕	表土	口径 56.0	口縁部は直線的に外上方へのび、先端部は直立するように屈曲する。端部は水平である。 口端部に三条の凸線が巡る。	A 内、灰色 外、明茶灰色 B 砂粒多含、礫少含 C 良好 D 口縁部残⅓
112	甕	表土		口縁部は外傾してのび、端部を下方に肥厚する。 端部上面は外傾する。	A 内、灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 破片
113	甕	表土		口縁部は外傾してのび、端部を斜下方に肥厚する。 口端部に一条の凸線が巡る。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 破片
114	甕	表土		口縁部はやや外反しつつ外傾する。端部は外傾し、凹面をつくる。 口端部に一条の凸線が巡る。	A 内・外、黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 破片
115	甕	表土		口縁部は外反してのび、端部はやや丸い。 口端部に一条の凸線が巡る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 砂粒少含、礫1ヶ含 C 良好 D 破片
116	甕	表土		口縁部は直線的にのび、端部は外傾し、凹面をつくる。 口端部に二条の凸線が巡る。	A 内、灰色 外、黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 破片
117	甕	表土		口縁部は外反してのび、端部をやや下方に肥厚する。 その直下に二条の凸線が巡る。	A 内、茶灰色 外、黒色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 破片
118	甕	表土		口縁部は外反気味にのび、先端部近くで、直線的となる。 端部はやや丸い。 口端部に二条の凸線が巡る。	A 内、暗灰色～黒色 外、黒色 B 砂粒少含 C 良好 D 破片

G地区 (道ノ下窯跡群)

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第105図 1	蓋杯 (蓋)	11号窯 床 面	口径 12.2 器高 2.4 つまみ径 1.75 つまみ高 0.65	口縁部は屈曲面がなく、体部から一様につくられている。天井部は横ナデであり、体部との境に段がつく。頂部をわずかにとがらせた扁平なつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
2	蓋杯 (蓋)	11号窯 窯 内	口径 12.4 器高 2.2 つまみ径 1.8 つまみ高 0.6	口縁部は屈曲面がなく、体部から一様につくられている。内面は沈線状の段がつく。天井部はナデであり、体部との境に段がつく。扁平な擬宝珠様つまみがつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
3	蓋杯 (蓋)	11号窯 窯 内 焚 口	口径 12.7 器高 2.1 つまみ径 1.7 つまみ高 0.65	口縁部と体部との境に凹みを有し、内面に段がつく。天井部は横ナデ調整であり、体部との境は丸い。扁平なつまみがつく。天井部に板状圧痕がつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
4	蓋杯 (蓋)	11号窯 窯 内	口径 12.7 器高 3.4 つまみ径 2.0 つまみ高 0.85	口縁部は垂直気味につくられ、内側に段がつく。天井部は横ナデ調整し、体部との境は丸い。擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
5	蓋杯 (蓋)	11号窯 窯 内	口径 14.2 器高 2.7 つまみ径 1.7 つまみ高 0.7	口縁部は屈曲面がなく、内面にのみ段を有する。天井部は横ナデするが、板状圧痕が残る。体部との境に段がつく。台状のつまみがつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
6	蓋杯 (蓋)	11号窯 窯 内	口径 17.2 器高 2.7 つまみ径 2.0 つまみ高 1.0	口縁部は垂直気味にわずかに屈曲し、内面に段がつく。天井部は自然袖付着のため調整法は不明。中央部に、頂部をわずかにとがらせた台状のつまみがつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
7	蓋杯 (蓋)	11号窯 窯 内	口径 17.4 器高 3.4 つまみ径 1.95 つまみ高 1.05	口縁部は垂直気味にわずかに屈曲し、内面に段がつく。天井部は未調整のようであり、体部との境は凹湾する。台状のつまみがつく。	A 内・外、黄灰色～黒色 B 細砂多含、金雲母含 C 普通 D ほぼ完存
8	蓋杯 (蓋)	11号窯 床 面	口径 17.6 器高 3.4 つまみ径 2.0 つまみ高 1.1	口縁部は体部から一様につくられ、内面に沈線状の段がつく。天井部はマメツのため調整法は不明。頂部を高くした台状のつまみがつく。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
9	蓋杯 (蓋)	11号窯 床 面	口径 18.0 器高 3.4 つまみ径 2.1 つまみ高 1.1	口縁部と体部の境はわずかに凹湾する。口縁部内面に沈線状の段がつく。天井部はマツメのため調整法は不明。丈の高い台状のつまみがつく。	A 内・外、白灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
10	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内	口径 12.8 器高 3.8 高台径 8.0 高台高 0.4	体部・口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。底部に内側を接地した高台がつき、底部はへら切り離し未調整である。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 微妙多含 C 良好 D ほぼ完存
11	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内 焚 口	口径 12.5 器高 4.4 高台径 7.8 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外反し、口縁部を外傾する。丈の低い高台を底部外面近くに貼付する。底部に板状圧痕がつく。	A 内・外、灰色～青灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
12	蓋杯 (身)	11号窯 床 面	口径 15.2 器高 5.6 高台径 9.3 高台高 0.3	体部・口縁部は直線的に外反し、器高が高い。底部の外面近くに丈の低い高台がつく。	A 内、黄味灰色 外、白灰色～暗灰色 B 微砂少含 C 良好 D ほぼ完存
13	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内	口径 12.0 器高 3.4	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反する。底部はへら切り離し、未調整であり、板状圧痕が残る。	A 内・外、黄灰色～灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
14	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内 焚 口	口径 12.2 器高 3.8	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反する。底部はへら切り離し、未調整であり、板状圧痕が残る。	A 内・外、白灰色 B 微砂少含 C 良好 D ほぼ完存
15	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内	口径 12.4 器高 3.7	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反する。底部はへら切り離し、未調整であり、板状圧痕が残る。底部中央が膨む。体部下半は回転へら削り。	A 内・外、暗灰色 B 礫多含 C 良好 D ほぼ完存
16	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内 床 面	口径 12.4 器高 3.6	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反する。底部はナデ調整するが、板状圧痕が残る。体部下半は回転へら削りする。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
17	蓋杯 (身)	11号窯 窯 内 口	口径 12.6 器高 3.3	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反し、外面に横ナデの凹凸がつく。底部はへら切り離し未調整である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存

## G地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
18	蓋杯 (身)	11号窯 焚口埋土	口径 12.8 器高 3.6	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反し、口縁端部を外反する。外面は横ナデの凹凸が著しい。底部は未調整である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
19	蓋杯 (身)	11号窯 窯内	口径 13.0 器高 3.3	無高台杯である。体部は直線的に外反し、口縁部を外反する。底部はヘラ切り離し未調整である。焼き歪んでいる。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
20	蓋杯 (身)	11号窯 窯内	口径 13.0 器高 3.7	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反する。底部は未調整であり、板状圧痕を残す。	A 内・外、灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
21	蓋杯 (身)	11号窯 窯内	口径 13.4 器高 4.0	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反する。底部は未調整であり、格子目の板状圧痕が残る。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
22	皿	11号窯 焚口埋土	口径 17.0 器高 2.6	体部は短く、外反し、口縁部を外反する。底部外周部は回転ヘラ削りする。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
第108図 23	蓋杯 (蓋)	12号窯 窯内	口径 16.0	口縁部を垂直に屈曲させ、端部はとがる。天井部は未調整であり、体部との境は凹湾させる。つまみ部分を欠損する。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/4
24	蓋杯 (蓋)	12号窯 窯内	口径 15.0	口縁部は内傾気味に短く屈曲させる。天井部は未調整であり、体部との境は不明瞭である。中央部のつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/4
25	蓋杯 (身)	12号窯 窯内	口径 12.9 器高 3.95	無高台杯である。体部・口縁部は外反し、端部は丸い。底部はナデ調整し、体部との境は鋭く稜がつく。	A 内、白灰色 外、黒色～白灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
26	皿	12号窯 窯内	口径 14.0 器高 1.9	体部・口縁部は短く、外反度が強い。底部は未調整であり、板状圧痕が残る。	A 内・外、白灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
27	皿	12号窯 窯内	口径 16.0 器高 2.4	体部・口縁部は外反し、口縁端部上面は平坦に近い。底部はヘラ切り離し未調整である。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
28	皿	12号窯 窯内	口径 17.0	口径に比し、器高が低い。体部・口縁部は直線的に外反する。底部はヘラ切り離し未調整である。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
29	皿	12号窯 窯内	口径 18.0	体部・口縁部は外反し、口縁端部は外反度を強める。底部は未調整である。	A 内・外、緑灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/4
30	蓋杯 (蓋)	13号窯 窯内	口径 13.6 器高 2.15 つまみ径 1.9 つまみ高 0.4	口縁部は垂直に屈曲させ、体部との境は凹む。天井部は未調整である。中央部に扁平なボタン状のつまみがつく。天井部外面に板状圧痕が残る。	A 内・外、青灰色～暗灰色～黒色 B 細砂多含、小砂少含 C 良好 D ほぼ完存
31	蓋杯 (身)	13号窯 窯内	口径 12.7 器高 3.6	無高台杯である。体部・口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。底部は未調整であり、板状圧痕が残る。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
32	蓋杯 (身)	13号窯 窯内	口径 12.8 器高 4.3 高台径 8.3 高台高 0.4	体部は直線的に外反し、口縁部は内湾気味に外傾する。底部の外側近くに内側を接地した高台がつく。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 砂粒多含 C 良好 D 1/2
33	蓋杯 (身)	13号窯 窯内	口径 17.5 器高 5.8 高台径 10.9 高台高 0.3	大形品である。体部・口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。底部の内側に丈の低い高台がつく。体部外面は黒変している。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
34	短頸壺	11～12号 窯の間	口径 19.0 頸部径 10.9 最大径 20.5	短く、直立する口頸部を有し、口縁部上面は平坦である。胴部上位に最大径部が位置し、丸味をもつ。胴部下半の上位は回転ヘラ削りする。高台を欠損する。	A 内、暗青灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 3/8

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
第110図 35	蓋杯 (蓋)	10号窯 灰原上層	口径 11.2 器高 1.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲させ、端部はとがる。天井部はナデ調整し、体部との境に段がつく。中央部には扁平なつまみがつく。器高が低い。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
36	蓋杯 (蓋)	12号窯 灰原下層	口径 13.4 器高 2.7 つまみ径 1.8 つまみ高 0.8	口縁部は内傾させ、丸味を有する。天井部は横ナデし、体部との境に段がつく。頂部をわずかにとがらせたつまみがつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
37	蓋杯 (蓋)	12号窯 灰原	口径 13.8 器高 2.3 つまみ径 1.2 つまみ高 0.6	口縁部は垂直に近く屈曲させる。つまみ周辺は横ナデし、体部はナデ調整する。中央部に台状のつまみがつく。	A 内・外、緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
38	蓋杯 (蓋)	12号窯 灰原	口径 13.8 器高 2.5 つまみ径 1.8 つまみ高 0.9	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部は横ナデし、体部は横ナデし、体部との境は段がつく。頂部をわずかに突出させたつまみがつく。	A 内・外、灰色～黄灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
39	蓋杯 (蓋)	12号窯 灰原上層	口径 13.7 器高 1.9 つまみ径 1.7 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部は横ナデ調整し、体部との境は段がつく。頂部をわずかに突出させた、台状のつまみがつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
40	蓋杯 (蓋)	10号窯 灰原上層	口径 13.8 器高 2.3 つまみ径 1.6 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く屈曲させ、体部との境は凹穹する。天井部は横ナデ調整し、体部との境は若干稜がつく。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
41	蓋杯 (蓋)	10号窯 灰原上層	口径 13.9 器高 2.8 つまみ径 2.0 つまみ高 1.0	口縁部は垂直に近く屈曲させる。天井部は横ナデ調整し、体部との境は段がつく。頂部をわずかに突出させた擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白灰色～灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
42	蓋杯 (蓋)	10号窯 灰原上層	口径 14.2 器高 2.1 つまみ径 2.1 つまみ高 0.9	口縁部は丸味をもち、内面に段がつく。天井部は回転ヘラ削りしており、体部との境はわずかに稜がつく。扁平な器形であり、頂部をおさえた擬宝珠様のつまみがつく。	A 内、白灰色 外、白灰色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
43	蓋杯 (蓋)	10号窯 灰原上層	口径 14.2 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.7	口縁部は垂直に近く、短く屈曲させ、内面に段がつく。天井部はマメツのため調整法は不明。中央部に台状のつまみがつく。	A 内・外、白灰色～灰色 B 微砂少含 C 良好 D ほぼ完存
44	蓋杯 (蓋)	12号窯 灰原下層	口径 14.5 器高 1.4 つまみ径 1.8 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に屈曲させ、端部は丸い。天井部は平坦面をなし、体部との境に段がつく。扁平なつまみがつく。	A 内・外、灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
45	蓋杯 (蓋)	12号窯 灰原上層	口径 14.8 器高 2.9 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は体部から一様につくられており端部は丸い。天井部から体部にかけては丸くつくられ、横ナデ調整する。頂部をおさえた擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
46	蓋杯 (蓋)	12号窯 西側面 斜土中 表土中	口径 16.9 器高 2.9 つまみ径 2.2 つまみ高 0.9	口縁部は体部から一様につくられており端部は丸い。天井部は横ナデ調整し、平坦であり、体部との境に段がつく。頂部をおさえた擬宝珠様のつまみがつく。	A 内・外、白茶色～暗灰色 B 砂粒多含、礫少含、 金雲母、角閃石含 C 良好 D ほぼ完存
47	蓋杯 (身)	12号窯 灰原下層	口径 10.7 器高 2.9	無高杯である。体部は外反気味となり、口縁部は器壁を薄くする。底部はヘラ切り離し未調整であり、体部との境は鋭く稜がつく。	A 内・外、暗灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存
48	蓋杯 (身)	灰原	口径 11.2 器高 3.6 高台径 8.0 高台高 0.4	体部、口縁部は直線的に外反する。底部の外端部近くに、高台を貼付しており、高台内側のみを接地する。底部は未調整である。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
49	蓋杯 (身)	灰原	口径 11.0 器高 3.2 高台径 7.0 高台高 0.3	体部、口縁部は直線的に外反し、端部はとがり気味となる。底部の内側に丈の低い高台を貼付する。底部は未調整である。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
50	蓋杯 (身)	11号窯 灰原下層	口径 12.0 器高 4.0 高台径 8.0 高台高 0.25	体部、口縁部は直線的に外反し、端部近くの器壁は薄い。底部外端部に幅広で丈の低い高台を貼付する。高台は内側を接地する。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
51	蓋杯 (身)	12号窯 灰原	口径 12.2 器高 3.4 高台径 8.2 高台高 0.25	体部、口縁部は直線的に外反する。底部外端部近くに丈の低い高台を貼付する。底部はナデ調整である。焼き歪のため口縁部は楕円形を呈している。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存

## G地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
52	蓋杯 (身)	10号窯 灰原 上層	口径 13.0 器高 4.4 高台径 9.0 高台高 0.3	体部、口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。底部と体部の境はとがり、鋭く稜がつく。底部外面近くに内側を接地した高台がつく。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
53	蓋杯 (身)	12号窯 灰原 上層	口径 15.2 器高 5.0 高台径 8.9 高台高 0.3	体部、口縁部は直線的に外反し、口縁部は器壁が薄くなる。底部の外端部に丈の低い高台がつく。外面は自然釉の付着が著しい。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
54	蓋杯 (身)	12号窯 左	口径 15.3 器高 5.5 高台径 9.4 高台高 0.5	体部は外反し、口縁部はわずかに外反気味に開く。底部内側に外面を接地した丈の長い高台がつく。底部は横ナゲ調整である。	A 内、白灰色 外、白黄色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
55	蓋杯 (身)	12号窯 灰原 下層	口径 18.0 器高 5.5 高台径 11.7 高台高 0.5	体部、口縁部は外反気味に開き、口縁端部は丸い。底部の外面近くに四角形の高台を貼付する。底部は未調整である。	A 内、黄灰色 外、白灰色～灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
56	皿	12号窯 灰原 上層	口径 14.8 器高 1.7	体部、口縁部は短く、外反し、端部内面は平坦面を有し稜がつく。底部はヘラ切り離し、未調整である。	A 内・外、緑灰色～茶褐色 B 砂粒、礫多含 C 良好 D ほぼ完存
57	皿	12号窯 灰原 上層	口径 18.0 器高 1.8	体部、口縁部は短く、外反し、端部内面は平坦面を有し稜がつく。底部はヘラ切り離し、未調整であり、工具痕がつく。	A 内・外、暗灰色～茶灰色 B 砂粒多含 C 良好 D ほぼ完存

## J地区 (道ノ下窯跡群)

第115図 1	蓋	50号窯 前庭部	口径 11.4 器高 2.2 つまみ径 2.2 つまみ高 0.95	口縁部は、外傾し、端部はほぼ平坦。 天井部は、低く平らで、体部との境は明瞭である。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。焼き歪あり。	A 内・外、黒灰色 B 礫若干含 C 良好 D ほぼ完存
2	蓋杯 (蓋)	50号窯 前庭部	口径 15.4 器高 2.2 つまみ径 2.3 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、低く平らである、外面に窯内の砂付着。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 礫若干含 C 良好 D ほぼ完存
3	皿	50号窯 焚口 右側	口径 22.2 器高 3.45	体部・口縁部は、短く上方外にのび端部は丸い。 底部は浅く丸味をもつ。底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整 $\frac{1}{2}$ は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～黒色 B 砂粒若干含 C 不良 D $\frac{3}{4}$
4	皿	50号窯 焚口 右側	口径 22.6 器高 2.8	体部・口縁部は、短く上方外にのび端部は丸い。 底部は浅く平らである。 底部外面は未調整。	A 内、白灰色 外、白灰色～黒色 B 砂粒若干含 C 不良 D ほぼ完存
5	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 11.8 器高 1.2	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は低く平らである。 天井部外面は未調整。焼き歪あり。	A 内、灰色 外、白灰色～黒色 B 砂粒若干含 C 良 D $\frac{1}{2}$
6	蓋杯 (蓋)	灰原 上部	口径 14.1 器高 1.35	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低くほぼ平らである。 天井部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂若干含 C 良好 D ほぼ完存
7	蓋杯 (蓋)	灰原 下部	口径 12.1 器高 2.2 つまみ径 2.3 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は鋭い。 天井部は低く平らである。 天井部外面はヘラ切り。	A 内・外、灰色～黒色 B 礫若干含 C 良好 D ほぼ完存
8	蓋杯 (蓋)	灰原 下部	口径 13.1 器高 2.4 つまみ径 2.05 つまみ高 0.6	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く平らである。 天井部外面はヘラ切り。内外面に重ね焼き痕あり。	A 内、暗青灰色 外、灰色～黒色 B 砂粒若干含 C 良 D ほぼ完存
9	蓋杯 (蓋)	灰原 下部	口径 14.9 器高 2.5 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は低く平らである。 天井部外面 $\frac{2}{3}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒若干含 C 普通 D ほぼ完存
10	蓋杯 (蓋)	灰原 下部	口径 15.05 器高 1.75 つまみ径 2.45 つまみ高 0.55	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く平らで、おされて変形する。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 $\frac{1}{2}$ は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒若干含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
11	蓋杯 (蓋)	灰原上層	口径 15.6 器高 2.3 つまみ径 1.95 つまみ高 0.8	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く平らである。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒若干含 C 良好 D ほぼ完存
12	蓋杯 (蓋)	50号窯 灰原下部	口径 16.4 器高 3.25 つまみ径 2.7 つまみ高 0.65	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部はやや高く、体部にかけやや丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒、礫若干含 C 良好 D ほぼ完存
13	蓋杯 (蓋)	50号窯 灰原下部	口径 16.4 器高 2.75 つまみ径 2.55 つまみ高 0.75	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部はおされて変形する。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 $\frac{1}{4}$ は未調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒若干含 C 良好 D ほぼ完存
14	蓋杯 (蓋)	50号窯 灰原下部	口径 20.3 器高 2.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は、内傾し、中央部がやや窪み、端部は鋭い。 天井部は、やや高い。 天井外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～黒色 外、灰色 B 砂粒若干含 C 良好 D ほぼ完存
15	蓋杯 (蓋)	50号窯 灰原下部	口径 17.8 器高 2.6 つまみ径 3.15 つまみ高 0.8	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は、おされて変形し、ヒビが入る。 天井外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶灰色～暗灰色 B 砂粒若干・礫 1～2ヶ含 C 良好 D ほぼ完存
16	蓋杯 (蓋)	50号窯 灰原下部	口径 20.25 器高 2.7 つまみ径 2.25 つまみ高 0.85	口縁部は、丸味をもって、内傾し、端部も丸い。 天井部は、低く平らである。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 礫若干含 C 良好 D ほぼ完存
17	蓋杯 (身)	灰原上部	口径 12.6 器高 3.75 高台径 8.6 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は変形し、やや内側に高台をもつ、外面は未調整。 高台端部は、平面をなし、全面で接地する。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒 B 砂粒若干含 C 良好 D ほぼ完存
18	蓋杯 (身)	灰原下部	口径 13.95 器高 4.05 高台径 10.6 つまみ高 0.7	体部・口縁部は、やや外方し、上外方にのび、端部は丸い。 底部は変形する、やや内側に短いハの字の高台をもつ。 高台端部は、ほぼ平面をなし、内側で接地。底部外面は、未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂若干含 C 良好 D ほぼ完存
19	蓋杯 (身)	灰原下部	口径 14.4 器高 4.15 高台径 10.6 高台高 0.6	体部・口縁部は、やや外反し、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に高台をもつ。 底部外面は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～茶灰色 B 砂粒若干含 C 普通 D ほぼ完存
20	蓋杯 (身)	灰原北側	口径 15.0 器高 4.7 高台径 10.7 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、ほぼ平らで、やや内側に高台をもつ。 底部外面は、未調整。	A 内・外、白灰色 B 微砂若干含 C 良好 D ほぼ完存
21	蓋杯 (身)	灰原	口径 15.4 器高 4.1 高台径 11.1 高台高 0.4	体部・口縁部は、短く上外方にのび、端部は丸い。 底部は、中央がやや下がる。やや内側に高台をもつ。 底部外面は、未調整。	A 内・外、明緑灰色 B 微砂若干含 C 良好 D ほぼ完存
22	蓋杯 (身)	灰原下部	口径 16.6 器高 3.65 高台径 12.6 高台高 0.4	体部・口縁部は、短く上外方にのび、端部近くで、やや外反する。底部中央がやや上がる。 底部外面中央は未調整。	A 内、黄灰色 外、黄灰色～茶灰色 B 砂粒若干含 C 普通 D ほぼ完存
23	蓋杯 (身)	灰原下部	口径 18.0 器高 6.2 高台径 12.25 高台高 0.6	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 体部は深く、底部は中央がやや上がる。 底部外面 $\frac{1}{2}$ 未調整、 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、青灰色 外、青灰色～黒 B 砂粒、礫若干含 C 良好 D ほぼ完存
24	蓋杯 (身)	灰原下部	口径 20.3 器高 6.05 高台径 13.7 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らで、やや内側に高台をもつ。 底部外面 $\frac{1}{2}$ は未調整。体部との境付近は、回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～茶灰色 B 砂粒若干含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
第116図 25	盤	灰原下部	口径 23.1 器高 3.2 高台径 16.6 つまみ高 0.6	体部は、やや内弯気味に短く、口縁部はやや外反する。 底部は中央が下がる。やや内側に高台をもつ。 底部外面は、中央の一部が未調整で、他は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～茶灰色 B 砂粒若干含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
26	盤	灰原下部	口径 24.0 器高 3.25 高台径 18.1 高台高 0.4	体部は、内弯気味に、上外方にのび、口縁部は外反する。 底部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、 茶灰色～暗灰色～黄灰色 B 微砂多含 C 良好 D ほぼ完存
27	盤	灰原下部	口径 25.6 器高 3.8 高台径 19.4 高台高 0.6	体部、口縁部は、短く外反気味にのび、端部は丸い。 底部は、ほぼ平らで、やや内側に高台をもつ。 底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶褐色～灰色 B 砂粒若干含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

## J地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
28	盤	灰原 下 部	口径 26.4 器高 3.5 高台径 19.85 高台高 0.7	体部は、短く上外方にのび、口縁部は外反し、端部は丸い。底部は平らで内側に高台をもつ。底部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、褐色 外、黄土色～茶褐色 B 砂粒若干含 C 良好 D 1/2
29	盤	灰原 下 部	口径 27.0 器高 4.0 高台径 20.6 高台高 0.6	体部は、短く上外方にのび、口縁部はやや外反し、端部は丸い。底部外面中央は、未調整で他は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄褐色 B 砂粒少含、赤褐色粒含 C 不良 D ほぼ完存
30	盤	灰原 下 部	口径 31.45 器高 4.9 高台径 23.7 高台高 0.7	体部は、やや内弯気味にのび、口縁部は外反する。底部外面中央は未調整、他は体部の境まで回転ヘラ削り調整。	A 内、白黄褐色～灰色 外、白黄褐色 B 砂粒少含、赤褐色粒含 C 不良 D 1/2
31	盤	灰原 下 部	口径 37.95 器高 6.05 高台径 30.0 高台高 0.95	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は、やや平らである。底部外面中央は未調整、体部の境まで回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 礫少含 C 普通 D ほぼ完存
32	高杯	灰原 上 部	口径 20.0 器高 6.5 脚部径 10.6 脚部高 4.7	杯部は、浅く上外方にのび、口縁部は外方へ屈曲する。脚部は短く、大きくハの字に開く、裾部は、水平で、端部は、断面三角形に突出する。杯底外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒褐色 B 砂粒少含 C 良好 D ほぼ完存
33	高杯	灰原 上 部	口径 30.5	杯部は浅く、口縁部は、やや外傾し、端部は平らである。杯底外面は回転ヘラ削り調整。内面も一部回転ヘラ削り調整される。	A 内・外、暗緑灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2
34	高杯	灰原 上 部	口径 31.9	杯部は浅く、口縁部は、やや内傾する。杯底外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 砂粒少含 C 不良 D 1/2
35	高杯	灰原	口径 26.6 器高 23.0 脚部径 13.0 脚部高 9.4	杯部はやや深く、口縁部は垂直にのび、端部は平らである。脚部はやや長く、外面にシボリ痕が残る。杯部外底部は、回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色～灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
第117図 36	壺	灰原 下 部	口径 5.0 頸部径 4.2 最大径 16.6	頸部は、垂直にのび、口縁部は、外傾する。肩部中央に沈線がある。内・外面ともに横ナデ調整。	A 内、紫灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
37	把手付壺	灰原 下 部	最大径 22.1	頸部は、内弯気味で、二本の沈線を施す。把手の下に沈線が一本ある。胴下半部は一部制止のヘラ削り調整。他は横ナデ。	A 内・外、暗灰色 B 礫少含 C 良好 D 1/2
38	壺	灰原	最大径 19.9	頸部でやや屈曲し、底部に向ってすぼまる。胴部中位は、格子タタキ後ナデ、下部は回転ヘラ削りの後ナデ、底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色～灰色 B 礫少含 C 良好 D 1/2
39	長頸壺	灰原	最大径 19.0	頸部は外反気味に立上る。肩部と胴部の境は鋭く屈曲する。体部外面は、回転ヘラ削り調整。他は横ナデ、内面底部中央は未調整。	A 内、灰色～黒灰色 外、灰色～暗灰色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 1/2
40	鉢	灰原		口縁部は内弯し、端部は内傾する。体部はやや丸味をもつ。体部中位以下は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 砂粒、礫少含 C 良好 D 口縁部片
41	甕	灰原 下 部		外面は格子タタキ 内面は弧状当具痕。	A 内・外、白灰色 B 2mm大小石2、3ヶ含 C 不良 D 胴部片
42	甕	灰原 下 部	口径 43.0 頸部径 38.4 最大径 40.0	口縁部は外反気味に開く。端部は平らである。胴部外面は、平行タタキ、内面は弧状の当具痕。	A 内・外、黒灰色～灰色 B 砂粒少含 C 良好 D 1/2

## K地区 (道ノ下窯跡群)

第122図 1	蓋杯 (蓋)	14灰窯 道 一 括	口径 15.0 器高 1.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。天井部、体部は焼け至む。外面天井部に重ね焼痕あり。内面口縁部に重ね焼きによる色違いあり。	A 内、暗青灰色～黒色 外、暗灰色～灰色 B 細砂、砂粒少含 C 良好 D 1/4
------------	-----------	---------------------	---	---	--



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
2	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 15.2 器高 3.4 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部は、丸味をもち内傾し、端部は丸い。 天井部は丸味をもつ。 焼きがあまく全体に磨滅している。	A 内・外、白橙色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D ⅔
3	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 15.2 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部は丸い。天井部は低い。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄土色～褐色 B 細・粗砂少含 C 不良 D ほぼ完存
4	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 15.5 器高 2.6 つまみ径 3.4 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部は丸い。天井部は低くやや平坦。 体部は歪む。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 内面口縁部に重ね焼きによる違いあり。	A 内、茶褐色～暗灰色 外、茶褐色～茶色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
5	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 15.8 器高 3.2 つまみ径 3.6 つまみ高 0.8	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。天井部、体部の境は やや丸みをもつ。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 全体に磨滅気味。	A 内・外、白橙色 B 細砂少含、赤褐色粒少含 C 不良 D ⅔
6	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 16.5 器高 2.8 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	口縁部は内傾し、端部は丸い。天井部は低く、平坦。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白橙色 B 細砂多含、赤褐色粒含 C 不良 D ほぼ完存
7	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 16.7 器高 3.8 つまみ径 3.2 つまみ高 0.8	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。天井部は高く、体部に かけて丸味をもつ。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。外面磨滅気味。	A 内・外、白橙色 B 細砂少含 C 不良 D ⅔
8	蓋杯 (蓋)	14号窯 煙道括	口径 17.3	口縁部はやや内傾し、端部はやや丸い。つまみを欠く体部 は丸味をもつ、天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。 外面磨滅。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含、赤褐色粒少含 C 不良 D ほぼ完存
9	蓋杯 (蓋)	14号窯 窯内	口径 14.5 器高 2.7 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し、丸味をもつ。天井部は低く、体部との境 界に一段をつくる。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。焼 きがあまく全体磨滅。	A 内・外、淡茶色 B 細砂少含 C 不良 D ⅔
10	蓋杯 (身)	14号窯 窯内	口径 13.1 器高 4.6 高台径 7.8 高台高 0.3	体部は上外方にのび、口縁部はやや外反する。端部は丸い。 底部は平らで、内側に高台をもつ。 高台端部は内傾し、内面で接地。底部外面は未調整。	A 内・外、緑灰色～黒灰色 B 微砂含 C 良好 D 完存
11	蓋杯 (身)	14号窯 窯内	口径 12.2 器高 4.6 高台径 7.2 高台高 0.3	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、内側に高台をもつ。 高台端部は、平らで全面で接地する。外面体部に、工具痕 あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
12	蓋杯 (身)	14号窯 窯内	口径 16.3 器高 6.3 高台径 10.0 高台高 0.4	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部はほぼ平坦で、内側に高台をもつ。 高台端部は、やや内傾し、内傾で接地する。 底部外面は未調整。	A 内、灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
13	蓋杯 (身)	14号窯 窯内	口径 12.9 器高 4.0 底径 9.3	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近い。 底部外面は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
14	皿	14号窯 窯内	口径 14.5 器高 2.3 底径 12.4	体部・口縁部は短く上外方にのび、端部は丸い。 底部は、やや膨む。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
15	皿	14号窯 窯内	口径 14.5 器高 2.2 底径 12.7	体部・口縁部は短く上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近い。 底部外面は未調整。工具痕あり。	A 内・外、灰色 B 微砂、礫少含 C 良好 D ほぼ完存
第125図 16	蓋杯 (蓋)	16号窯 焚口	口径 13.3 器高 2.6 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は内傾し端部は丸い。天井部外面は回転ヘラ削りし、 外部との境にわずか段がつく。 扁平で中央部をわずかに突出させたつまみがつく。	A 内、緑灰色 外、黒灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
17	蓋杯 (蓋)	16号窯 焚口	口径 14.3 器高 2.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は垂直に、短く屈曲させ端部は丸い。 天井部は回転ヘラ削りし、体部の境はわずかに段がつく。 天井部外面にヘラ記号を有す。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅔
18	蓋杯 (蓋)	16号窯 窯内	口径 16.2 器高 2.6 つまみ径 2.5 つまみ高 0.7	口縁部は外反気味に屈曲し、口唇部は凹弯する。 天井部は回転ヘラ削りし、平坦で体部との境界は明瞭に段 がつく。頂部をわずかにとがらせた台状のつまみがつく。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 普通 D ⅔

K地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
19	蓋杯 (蓋)	16号窯 窯内	口径 20.4 器高 3.9 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、丸味を有して体部へのびる。体部4カ所に焼成前に丸く穿孔している。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
20	皿	16号窯 焚口	口径 20.7 器高 3.0 底径 16.6	体部、口縁端部は短く外反し、口縁部は丸い。底部は、中心部を除く全面を回転ヘラ削りし、平坦である。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
21	皿	16号窯 焚口	口径 21.7 器高 2.8 底径 18.5	体部、口縁部は短く、外反度が大である。底部はヘラ切り離しのままで未調整。底部は平坦であり、体部との境いは丸味をもつ。	A 内・外、 白灰色～黒色～灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/4
22	皿	16号窯 焚口	口径 21.8 器高 2.1 底径 18.0	体部、口縁部は短く、外反度が大であり、口縁部内面に平坦面を有する。底部は未調整であり器表がマメツしている。	A 内・外、白灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
23	皿	16号窯 窯内	口径 22.2 器高 3.3 底径 19.3	体部は外反し、口縁端部は外反し丸味を有する。底部は中央部を除き全面に回転ヘラ削りする。体部との境は短い稜がつく。	A 内・外、白灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
24	皿	16号窯 焚口	口径 22.8 器高 2.4 底径 20.8	体部、口縁部は短く、外反し、端部は丸い。底部は中央を除き、全面に回転ヘラ削りする。	A 内、白灰色～灰色 外、白灰色～灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
25	皿	16号窯 焚口	口径 23.5 器高 3.3 底径 20.0	体部は外反度が小さく、口縁部内面は平坦面を有し稜がつく。底部は中心部を除き回転ヘラ削りする。	A 内・外、 白灰色～灰色～黒色～黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D 3/4
26	皿	16号窯 焚口	口径 23.6 器高 2.6 底径 20.1	体部は外反し、口縁部はややとがり気味となる。底部はマメツしているが未調整のようである。底部と体部の境は丸い。	A 内、白灰色～黒色 外、黒色 B 細砂少含 C 不良 D 2/3
27	長頸壺	16号窯 焚口	頸部径 7.2 最大径 20.8 底径 10.5	口縁部を欠損する。頸部は、外反気味に大きく開く。胴部中央よりやや上方にとがった肩部を有する。断面四角形で内面を接地する高台がつく。	A 内、黒灰色 外、暗灰色～緑灰色～茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
第127図 28	蓋杯 (蓋)	17号窯 窯内	口径 21.3 器高 4.5 つまみ径 3.5 つまみ高 1.4	口縁部は垂直に屈曲させ、端部は丸い。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境に段がつく。中央部に太い擬宝珠様のつまみがつく。盤の蓋になると思われる。	A 内、黄土色 外、灰色～淡黄褐色 B 細砂少含、赤褐色粒少含 C 不良 D ほぼ完存
29	蓋杯 (蓋)	17号窯 窯内	口径 21.5 器高 3.5 つまみ径 3.5 つまみ高 1.6	口縁部は内傾気味に屈曲させ、端部はとがらせる。天井部は回転ヘラ削りし、体部との境は丸味をもつ中央部に太い擬宝珠様のつまみがつく。盤の蓋になると思われる。	A 内、淡黄褐色 外、白黄褐色～淡黄褐色 B 細砂少含、赤褐色粒少含 C 不良 D ほぼ完存
30	蓋杯 (蓋)	17号窯 窯内	口径 21.7 器高 3.2 つまみ径 3.2 つまみ高 1.6	口縁部は垂直に屈曲し、端部はとがる。天井部は回転ヘラ削りし、歪んで全体に扁平である。中央部に太い擬宝珠様のつまみがつく。盤の蓋になると思われる。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
31	蓋杯 (身)	17号窯 窯内	口径 16.3 器高 4.2 底径 13.5	体部、口縁部は外反し、端部は丸い。底部は中央部を除いて回転ヘラ削りし、体部との境に稜がつく。	A 内、淡黄褐色 外、淡黄褐色～暗橙色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D ほぼ完存
32	盤	17号窯 窯内	口径 19.3 器高 3.1 高台径 15.8 高台高 0.5	体部、口縁部は短く、外反し端部は丸い。底部外方近くに外面を接地した高台がつく。底部は回転ヘラ削りする。	A 内、白黄色 外、白灰色～白褐色 B 微砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D 1/2
33	盤	17号窯 窯内	口径 20.3 器高 3.0 高台径 15.9 高台高 0.8	体部、口縁部は短く、外反し端部は丸い。底部のやや内側近くに、外面を接地した高台がつく。底部は回転ヘラ削りする。口縁部は焼き歪む。	A 内・外、黄灰色 B 細砂多含、赤褐色粒含 C 不良 D 1/4
34	盤	17号窯 窯内	口径 20.7 器高 2.8 高台径 16.3 高台高 0.6	体部、口縁部は短く、外反し端部は丸い。底部のやや内側近くに、外面を接地した高台がつく。底部は回転ヘラ削りし、体部との境に稜がつく。	A 内・外、黄灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D 1/4
35	盤	17号窯 窯内	口径 23.2 器高 2.6 高台径 18.8 高台高 0.6	体部、口縁部は丈が低く、外反度が強い。底部のやや内側に外面を接地した高台がつく。底部は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白褐色～黒色 B 微、細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D 1/2

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
36	盤	17号窯 窯内	口径 28.8	高台がつくものと思われる。体部は外反し、口縁部は内弯気味に立つ。端部は内側に段がつき稜が入る。体部下半以下は回転ヘラ削りする。	A 内、黄灰色～黒色 外、黄白灰色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D ¼
37	高杯	17号窯 窯内	口径 21.2 器高 6.7 脚部径 12.0 脚部高 4.1	無蓋高杯である。口縁部は外反気味に立つが鋭く稜はつかない。杯部底面は回転ヘラ削りする。脚部は丈が低く、脚裾部は屈曲し、広範囲を接地する。	A 内・外、淡黄褐色～暗褐色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D ほぼ完存
38	高杯	17号窯 窯内	口径 21.5 器高 7.1 脚部径 12.3 脚部高 5.0	無蓋高杯である。口縁部は短く屈曲し、甘い稜がつく。杯部底面は回転ヘラ削りする。脚裾部は大きく屈曲し、広範囲を接地する。脚柱内外面にしぼり痕がつく。	A 内、橙灰色 外、白橙色～黄土色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D ほぼ完存
39	高杯	17号窯 窯内	口径 23.8 器高 9.8 脚部径 12.9 脚部高 6.1	無蓋高杯である。口縁部が大となる分だけ脚の高さも大となる。口縁部はわずかに屈曲させている。杯部底面は回転ヘラ削りする。脚柱内外面にしぼり痕が著しい。	A 内・外、淡黄褐色～暗褐色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D ほぼ完存
第129図 40	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 14.2 器高 3.3 つまみ径 3.4 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し端部は丸い。天井部はやや高く丸味をもつ。天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白橙色 B 細砂少含 C 不良 D ½
41	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 14.5 器高 3.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.4	口縁部は、内傾し端部はやや鋭い。天井部はやや高く丸味をもつ。天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄土色 B 細砂少含 C 不良 D ¾
42	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 14.4 器高 2.6 つまみ径 3.0 つまみ高 0.8	口縁部は、やや垂直に下り、端部は丸い。天井部は低く平らに近い。天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡黄褐色～白黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ¾
43	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 14.4	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。天井部はやや高い。天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、橙色 B 精良 C 不良 D ½
44	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 14.9 器高 3.2 つまみ径 2.9 つまみ高 0.4	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。天井部はやや高く、平らに近い。天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
45	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 14.6 器高 3.1 つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。天井部は高く、丸味をもつ。天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄色 B 細砂少含 C 良好 D ½
46	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 15.6 器高 3.1 つまみ径 3.4 つまみ高 0.6	口縁部はやや内傾し、端部はやや鋭い。天井部はやや高い。天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ¾
47	蓋杯 (蓋)	18号窯 焚口	口径 15.0 器高 2.6 つまみ径 3.1 つまみ高 0.4	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。天井部は、やや低い。天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡茶褐色 B 細砂少含 C 不良 D ½
48	蓋杯 (身)	18号窯 焚口	口径 13.8 器高 5.0 高台径 8.7 高台高 0.6	体部は、内弯気味にのび、口縁部は外傾する。底部は、ほぼ平らでやや内側に高台をもつ。底部外面は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
49	蓋杯 (身)	18号窯 焚口	口径 13.6 器高 4.4 高台径 9.0 高台高 0.3	体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部中央は下り、高台はやや内側につく。焼け歪で口縁部がヒビ割れる。底部外面中央は未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
50	蓋杯 (身)	18号窯 焚口	口径 13.3 器高 5.3 高台径 9.3 高台高 0.4	体部、口縁部は上外方にのび、端部は丸い。底部は中央が上る。やや内側に高台をもつ。焼きはあまく変形する。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
51	底部	18号窯 焚口	高台径 7.8 高台高 0.5	底部内面は、剝離。底部外面は、未調整。ヘラ記号あり。	A 内、灰色 外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D 底部残½
52	底部	18号窯 焚口	高台径 9.4 高台高 0.5	内面剝離。外面器壁は磨滅する。底部外面にヘラ記号あり。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D 底部残½

K地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
53	底部	18号窯 焚口	高台径 9.6 高台高 0.6	底部端に、ハの字の高台をもつ。端部は、平面で全体で接地する。 底部外面は未調整、内面はナデ調整。ヘラ記号あり。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～黒灰色 B 精良 C 不良 D 底部残 $\frac{1}{4}$
54	底部	18号窯 焚口	高台径 9.7 高台高 0.4	内面剝離。 底部外面は未調整。ヘラ記号あり。	A 内・外、黄褐色 B 精良 C 不良 D 底部ほぼ完存
第131回 55	蓋杯 (蓋)	灰原 2 G	口径 10.0 器高 1.5	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、やや丸味をもつ。 天井部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～暗黒色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
56	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 10.3 器高 1.7	口縁部は内傾し、端部は鋭い。 天井部は低く、平らで、体部との境界は明瞭である。 天井部上面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
57	蓋杯 (蓋)	灰原 7 G	口径 10.5 器高 1.6	口縁部は内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らで体部との境界は明瞭である。 天井部上面は、未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
58	蓋杯 (蓋)	灰原 14 G	口径 10.5 器高 1.5	口縁部は、垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、低く、やや丸味をもつ。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
59	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 10.6 器高 1.9	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は、未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
60	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 10.7 器高 1.5	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、ほぼ平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
61	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 10.9 器高 2.0	口縁部は、やや内弯気味に下り、端部は鋭い。 天井部は低く、丸味をもつ。 天井部上面は、未調整。	A 内、緑灰色～暗灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
62	蓋杯 (蓋)	灰原 15 G	口径 10.9 器高 1.4	口縁部は、内傾し丸味をもつ。 天井部は低く、ほぼ平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、青灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
63	蓋杯 (蓋)	灰原 7 G	口径 11.4 器高 2.1	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は低く、丸味をもつ。 天井部上面は、ナデ調整。	A 内、黄褐色～暗灰色 外、黄褐色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
64	蓋杯 (蓋)	灰原 7 G	口径 13.6 器高 2.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部中央に凸部あり、つまみの未完成か。 体部と天井部の境界は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 砂粒少含 C 普通 D $\frac{1}{2}$
65	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 13.7 器高 2.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部上面は、未調整。	A 内・外、黄褐色 B 微砂多含 C 普通 D ほぼ完存
66	蓋杯 (蓋)	6 G 灰原	口径 13.8 器高 2.5	口縁部は、垂直に近い。端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、平らに近い。 天井部上面は、未調整。	A 内、黄褐色～褐色 外、黄褐色～褐色 B 微砂多含、金雲母含 C 不良 D ほぼ完存
67	蓋杯 (蓋)	灰原 14 G	口径 14.6 器高 3.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は高く、平らである。 天井部上面は、未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
68	蓋杯 (蓋)	灰原 5 G	口径 14.7 器高 2.9	口縁部は、ほぼ垂直に下る。端部は丸い。 天井部はやや高く、平らに近い。 天井部上面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
69	蓋杯 (蓋)	灰原 5 G	口径 11.6 器高 2.5 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は、垂直に下り、端部は丸い。 天井部は低い。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D $\frac{1}{4}$

遺物番号	器種	出地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
70	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 13.1 器高 1.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は、やや内湾気味に下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D ⅓
71	蓋杯 (蓋)	灰原 3 G	口径 13.2 器高 2.1 つまみ径 2.5 つまみ高 0.5	口縁部は、やや内湾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、褐色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
72	蓋杯 (蓋)	灰原 14 G	口径 13.4 器高 3.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部はやや高い。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青灰色 外、暗青灰色～暗黒灰色 B 細砂少含、微粒多含 C 良好 D ⅓
73	蓋杯 (蓋)	灰原 3 G	口径 13.5 器高 2.7 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部上面は回転ヘラ削り調整、ヘラ記号あり。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ⅓
74	蓋杯 (蓋)	灰原 11 G	口径 13.6 器高 2.3 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は低く、平らに近い。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
75	蓋杯 (蓋)	15号窯 灰原	口径 13.8 器高 1.7 つまみ径 2.5 つまみ高 0.4	口縁部は、垂直に下り、端部は鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、暗緑灰色～茶灰色 外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
76	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 13.8 器高 3.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部上面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗緑灰色 外、暗緑灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
77	蓋杯 (蓋)	灰原 3 G	口径 13.9 器高 3.0 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部はやや高く丸味をもつ。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ記号あり。	A 内、暗青灰色～灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
78	蓋杯 (蓋)	表土 11 G	口径 14.1 器高 2.1 つまみ径 2.8 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は低く、平らである。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 普通 D ほぼ完存
79	蓋杯 (蓋)	灰原 3 G	口径 14.1 器高 2.9 つまみ径 2.6 つまみ高 0.8	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部はやや高く、丸味をもつ。 天井部上面、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
80	蓋杯 (蓋)	灰原 11 G	口径 14.2 器高 3.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.4	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、丸味をもつ。 天井部外面は、回転ヘラ削り調整。ヘラ記号あり。	A 内、褐色～白橙色 外、褐色～白黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
81	蓋杯 (蓋)	灰原 7 G	口径 14.3 器高 2.9 つまみ径 2.4 つまみ高 0.6	口縁部は、ほぼ垂直に下る。端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、黄白色 外、黄白灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
第132図 82	蓋杯 (蓋)	灰原 14 G	口径 14.4 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部外面はヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂多含 C 良好 D ⅓
83	蓋杯 (蓋)	15号窯 灰原	口径 14.5 器高 2.8 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、平らで、体部は丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
84	蓋杯 (蓋)	灰原 7 G	口径 14.5 器高 2.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は低く、平らに近い。体部との境付近に段を有す。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ⅓
85	蓋杯 (蓋)	灰原 2 G	口径 14.5 器高 2.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、やや高く、平らに近い。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。ヘラ記号あり。	A 内・外、灰色 B 細砂少含、礫少含 C 良好 D ⅓
86	蓋杯 (蓋)	灰原 5 G	口径 14.5 器高 2.9 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、丸味をもつ。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、茶褐色～褐色 外、黒褐色～茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存

## K地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
87	蓋杯 (蓋)	11 G 表土	口径 14.5 器高 3.2 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、高く、やや丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
88	蓋杯 (蓋)	灰原 11 G	口径 15.0 器高 3.2 つまみ径 2.7 つまみ高 0.6	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、高く、やや丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。外面口縁部に重ね焼き痕。	A 内、緑灰色 外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
89	蓋杯 (蓋)	灰原 2 G	口径 15.0 器高 3.2 つまみ径 3.1 つまみ高 0.5	口縁部は、やや内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、高く、丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶褐色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
90	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 15.0 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
91	蓋杯 (蓋)	灰原 9 G	口径 15.0 器高 4.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は、高く、体部にかけて丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白黄灰色 B 砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
92	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 15.1 器高 2.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、低く、平らに近い。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～褐色 B 砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
93	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 15.2 器高 4.1 つまみ径 3.3 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、高く、平らで、体部は丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、白灰色～黄褐色～黒色 外、褐色～黒色 B 砂粒少含 C 不良 D ほぼ完存
94	蓋杯 (蓋)	灰原 14～15	口径 15.2 器高 2.8 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は丸い。 天井部は、やや高く、平らに近い。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色～褐色 外、暗緑灰色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
95	蓋杯 (蓋)	灰原 3 G	口径 15.3 器高 3.2 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、高く平らで、体部は丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白橙色 B 細砂少含、赤褐色粒含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
96	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 15.5 器高 4.5 つまみ径 1.8 つまみ高 2.5	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はやや鋭い。 天井部中央に、二段重ねのつまみをもつ。 天井部は、低く平らである。外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、暗黒緑色～暗緑灰色 外、緑灰色 B 細砂少含、砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
97	蓋杯 (蓋)	灰原 3 G	口径 15.6 器高 2.7 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部は鋭い。 天井部は、やや高く、体部は丸味をもつ。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、茶褐色～褐色 外、茶褐色～灰褐色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
98	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 15.4 器高 3.0 つまみ径 3.1 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、高く、体部は丸味をもつ。 天井部外面は $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
99	蓋杯 (蓋)	灰原 2 G	口径 15.5 器高 2.2 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 焼け歪で変形する。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、茶褐色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
100	蓋杯 (蓋)	灰原 1 G	口径 15.6 器高 2.6 つまみ径 3.0 つまみ高 0.5	口縁部は、内傾し、端部はやや丸い。 焼け歪、天井部に重ね焼き痕あり。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、褐色～茶褐色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{4}$
101	蓋杯 (蓋)	灰原 1 G	口径 16.0 器高 2.9 つまみ径 3.4 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部はやや丸い。 天井部は、やや高く、平らである。 器壁が磨滅し、調整不明。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
102	蓋杯 (蓋)	灰原 5 G	口径 15.9 器高 3.0 つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、平らである。 天井部上面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗橙色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{4}$
103	蓋杯 (蓋)	灰原 6 G	口径 16.2 器高 3.0 つまみ径 3.1 つまみ高 0.6	口縁部は、内傾し、端部はやや鋭い。 天井部は、高く、体部にかけて丸味をもつ。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
104	蓋杯 (蓋)	灰原	口径 16.2 器高 2.8 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部は低く、平らである。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 未調整、 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
105	蓋杯 (蓋)	灰原 15 G	口径 16.3 器高 2.2 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は、やや外傾し、端部は丸い。 天井部は焼け歪で、変形する。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
106	蓋杯 (蓋)	灰原 11 G	口径 20.7	口縁部は、やや内傾し、端部は丸い。 天井部は高く、平らである。焼け歪で全体に変形する。天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、黄灰色～黄茶灰色 外、黄灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
107	蓋杯 (蓋)	灰原 14 G	口径 21.1 器高 2.1 つまみ高 0.6	焼け歪で、天井部おちる。 口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸味をもつ。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
108	蓋杯 (蓋)	灰原 11 G	口径 21.7 器高 3.3 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	焼け歪で、やや変形している。 口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は丸い。 天井部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
第133図 109	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 8.6 器高 3.8 高台径 6.0 高台高 0.6	体部・口縁部は、外反気味に、上外方にのび、端部やや尖る。 底部は中央がくぼみ、端に高台がつく。 底部内外面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、暗茶灰色～暗灰色 外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
110	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 8.8 器高 3.8 高台径 6.2 高台高 0.3	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は中央部がやや低く、内側に高台がつく。 底部内外面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
111	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 8.9 器高 3.6 高台径 6.7 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、やや内側に高台がつく。 底部内外面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、暗茶灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
112	蓋杯 (身)	灰原 2 G	口径 9.4 器高 3.9 高台径 6.6 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、平らに近く、内側に高台がつく。 底部内外面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、灰色～黒灰色 外、暗灰色～紫灰色 B 精良 C 良好 D $\frac{1}{2}$
113	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 9.4 器高 4.3 高台径 6.4 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部端に高台をもつ。 底部外面は、回転ヘラ削り調整。内面はナデ調整。	A 内・外、褐色 B 微砂少含、粗砂少含 C 普通 D ほぼ完存
114	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 9.5 器高 3.8 高台径 6.6 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反気味にのび、端部はやや尖る。 底部は平らで、端に高台がつく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
115	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 9.6 器高 3.8 高台径 6.7 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。底部やや内側に高台がつく。底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整、 $\frac{1}{2}$ は未調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
116	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 9.9 器高 3.9 高台径 6.7 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反気味に上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に高台がつく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。内面ナデ調整。	A 内、黒灰色 外、灰色～黒灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
117	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 10.0 器高 4.8 高台径 7.0 高台高 0.4	体部は深く、口縁部はやや外反し、端部は丸い。 底部は丸味をもち、やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。内面はナデ調整。	A 内、灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
118	蓋杯 (身)	灰原 14 G	口径 10.3 器高 4.5 高台径 7.2 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部やや内側に高台がつく。底部外面 $\frac{1}{2}$ 未調整。 体部との境近くは回転ヘラ削り調整。	A 内、黒灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含、礫少含 C 良好 D ほぼ完存
119	蓋杯 (身)	灰原 3 G	口径 11.9 器高 5.2 高台径 6.9 高台高 0.4	体部・口縁部は、上外方に大きく開く。端部は丸い。 底部は丸味をもち、内側に高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
120	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 12.9 器高 5.0 高台径 8.5 高台高 0.5	体部・口縁部は、やや外反気味にのび、端部は丸い。 底部は中央が低くなる。やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

K地区

遺物番号	器種	出土点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観 察
121	蓋杯 (身)	灰原 2 G	口径 12.4 器高 4.6 高台径 9.2 高台高 0.6	体部は浅く、口縁部は、やや外反する。端部は外傾する。 底部はほぼ平らで、やや内側に高台がつく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。ヘラ記号あり。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
122	蓋杯 (身)	灰原 3 G	口径 12.4 器高 5.0 高台径 9.0 高台高 0.6	体部・口縁部は外反気味にのび、端部はやや尖る。 底部は中央が低く、やや内側に高台がつく。 底部内外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
123	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 12.6 器高 4.6 高台径 8.4 高台高 0.4	体部・口縁部はやや外反し、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、緑灰色 外、灰色～暗灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
124	蓋杯 (身)	灰原 14 G	口径 12.7 器高 4.6 高台径 8.9 高台高 0.3	口縁部はやや外反し、端部は丸い。底部は中央がやや高い。 やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
125	蓋杯 (身)	灰原 3 G	口径 12.8 器高 4.6 高台径 8.4 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、やや内側に高台がつく。 底部内外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、暗青灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
126	蓋杯 (身)	灰原 3 G	口径 12.8 器高 4.6 高台径 9.3 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。底部はほぼ平らで、やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、黄褐色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
127	蓋杯 (身)	灰原 15 G	口径 13.1 器高 5.0 高台径 8.8 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は丸味をもち、やや内側に高台がつく。 底部内外面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、灰色 B 精良 C 良好 D 1/2
128	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 13.4 器高 5.1 高台径 9.9 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に高台がもつ。 底部外面は未調整。内面はナデ調整。	A 内、茶青灰色 外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
129	蓋杯 (身)	灰原 2 G	口径 13.4 器高 5.0 高台径 8.9 高台高 0.5	体部・口縁部は、外反気味にのび、端部は丸い。 底部は中央が低く、内側に高台がつく。 底部外面は、未調整。内面はナデ調整。	A 内、灰色 外、白黄色～灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
130	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 13.6 器高 5.6 高台径 9.7 高台高 0.5	体部は深く、口縁部はやや外反する。端部は丸い。 底部は中央が低く、体部にかけて丸味をもつ。 高台はやや内側につく。底部1/2未調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
131	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 13.6 器高 6.1 高台径 9.1 高台高 0.7	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、中央がやや高い。体部にかけて丸味をもつ。 高台はやや内側につく。底部外面は未調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
132	蓋杯 (身)	灰原 14 G	口径 13.6 器高 5.1 高台径 9.2 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は、ほぼ平らで、端に高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
133	蓋杯 (身)	灰原 14 G	口径 13.6 器高 4.8 高台径 9.4 高台高 0.4	体部は上外方にのび、口縁部はやや外反する。 底部は中央がやや下がる。やや内側に高台がつく。 底部内外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、白橙色 外、白橙色～灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2
134	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 13.8 器高 5.7 高台径 9.5 高台高 0.6	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は中央がやや上がる。やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。内面はナデ。他は回転ナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂多含 C 良好 D ほぼ完存
135	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 13.8 器高 5.8 高台径 9.3 高台高 0.7	体部・口縁部は、外反する。端部は丸い。 底部は体部にかけて丸味をもち、高台はやや内側につく。 底部内外面はナデ調整。	A 内・外、明灰色 B 精良 C 不良 D 1/2
第134図 136	蓋杯 (身)	灰原 1 G	口径 13.8 器高 5.7 高台径 9.0 高台高 0.5	体部・口縁部は上外方にのび、端部は外傾する。 底部は平らで、内側に高台がつく。 底部内外面はナデ調整。	A 内・外、灰色 B 微、細砂少含 C 良好 D 1/2
137	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 14.0 器高 5.8 高台径 9.4 高台高 0.5	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は中央が下がる。やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。	A 内・外、暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2



遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
138	蓋杯 (身)	灰原 5 G	口径 14.1 器高 6.1 高台径 9.7 高台高 0.3	体部・口縁部は、やや外反する。端部は丸い。 底部は中央がやや上がる。やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、緑灰色 外、青灰色～暗灰色～灰色 B 細砂少含、赤褐色粒少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
139	蓋杯 (身)	灰原 2 G	口径 14.2 器高 5.4 高台径 10.2 高台高 0.4	体部・口縁部はやや外反する。端部は丸い。 底部は中央がやや高く、高台はやや内側につく。 底部外面は未調整。内面ナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
140	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 14.3 器高 5.0 高台径 9.3 高台高 0.5	体部は浅く、上外方にのび、口縁端部は丸い。 底部は凹・凸があり、低い高台がやや内側につく。 底部外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
141	蓋杯 (身)	灰原 3 G	口径 14.5 器高 5.0 高台径 10.1 高台高 0.6	体部は浅く、上外方にのび、口縁端部は丸い。 底部は中央がやや上がる。やや内側に高台がつく。 底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{2}{3}$
142	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 14.8 器高 6.3 高台径 9.7 高台高 0.7	体部・口縁部はやや外反気味で、端部は丸い。 底部は中央がやや下がる。やや内側に高台がつく。 底部外面は未調整。内面ナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内、緑灰色 外、白灰色～暗緑灰色 B 微・細砂少含 C 良好 D $\frac{2}{3}$
143	蓋杯 (身)	灰原 8 G	口径 14.9 器高 4.6 高台径 11.1 高台高 0.5	体部は浅く、口縁部にかけてやや外反する。端部は丸い。 底部はほぼ平らで、やや内側に高台がつく。 底部外面 $\frac{1}{2}$ 未調整、 $\frac{1}{2}$ はナデ調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色 B 微・細砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
144	蓋杯 (身)	灰原 6 G	口径 15.5 器高 6.0 高台径 10.7 高台高 0.6	体部・口縁部は、やや外反気味にのび、端部はやや尖る。 底部は中央がやや下がる。やや内側に高台がつく。 底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
145	蓋杯 (身)	灰原 15 G	口径 18.3 器高 6.1 高台径 13.3 高台高 0.8	体部・口縁部は、やや内弯気味にのび、端部は丸い。 底部は中央がやや上がる。端に高台がつく。 底部外面 $\frac{2}{3}$ ナデ調整。	A 内・外、灰色～暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
146	蓋杯 (身)	灰原 8 G	口径 18.3 器高 5.4 高台径 13.5 高台高 0.6	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らで、やや内側に高台がつく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、緑灰色 外、緑灰色～暗緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{2}{3}$
147	蓋杯 (身)	灰原 7 G	口径 19.3 器高 6.7 高台径 13.0 高台高 0.5	体部は深く、口縁部はやや外反気味で、端部は丸い。 高台は底部のやや内側につく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
148	盤	灰原 14 G	口径 13.6 器高 3.1 高台径 10.8 高台高 0.4	体部は浅く、口縁部はやや外反し、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、内側に高台がつく。 底部外面 $\frac{2}{3}$ 回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色 外、灰色～暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{2}{3}$
149	盤	表土 2 G	口径 15.0 器高 2.9 高台径 10.5 高台高 0.5	体部は浅く、口縁部はやや外反し、端部は丸い。 底部は平らで、体部にかけて丸味をもつ。内側に高台がつく。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗緑灰色 外、暗緑灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
150	盤	灰原 2 G	口径 20.2 器高 3.1 高台径 15.7 高台高 0.6	体部・口縁部は短く、上外方にのび、端部は丸い。底部は平らで、内側に高台がつく。高台は黒化する。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含、礫赤褐色粒含 C 不良 D $\frac{1}{2}$
151	盤	灰原 14 G	口径 33.9 器高 5.8 高台径 26.4 高台高 1.0	体部・口縁部は短く、上外方にのび、端部は平坦。底部内側に長い高台がつく。 外面体部下位は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含、微砂多含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
第135図 152	杯	灰原 7 G	口径 9.5 器高 3.8	体部・口縁部は外反し、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、体部にかけて丸味をもつ。 底部外面は工具になるナデ調整。内面ナデ調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$
153	杯	灰原 6 G	口径 12.4 器高 4.7 底径 10.5	体部・口縁部は、やや外反する。端部は丸い。 底部はほぼ平ら、外面は未調整。	A 内、黄茶灰色 外、黄茶灰色～黒色 B 砂粒少含 C 良好 D $\frac{2}{3}$
154	杯	灰原 6 G	口径 11.9 器高 5.1 底径 10.05	体部・口縁部は、やや外反し、端部は丸い。 底部は中央部がやや下がる。 底部内外面はナデ調整。	A 内・外、暗灰色～暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D $\frac{1}{2}$

## K地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
155	杯	灰原 7 G	口径 12.5 器高 4.9 底径 10.4	体部・口縁部は、上外方にのび、端部は丸い。 底部は丸味をもつ。 底部内外面は、ナデ調整。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～黒色 B 細砂少含 C 普通 D ¼
156	杯	灰原 6 G	口径 12.7 器高 4.0 底径 10.9	体部浅く、口縁端部は丸い。 底部は平らに近い。 底部外面は未調整。	A 内、黄褐色 外、黄褐色～黒色 B 細砂少含 C 不良 D ¼
157	杯	灰原 6 G	口径 12.8 器高 4.9 底径 10.0	体部・口縁部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は平らに近い。 底部外面は未調整。	A 内・外、淡黄褐色～茶褐色 B 微砂多含 C 普通 D ほぼ完存
158	杯	灰原 5 G	口径 13.1 器高 5.2 底径 10.8	体部・口縁部は上外方にのび、端部やや外反する。 底部は平らに近い。 底部外面は未調整。	A 内、灰色 外、灰色～暗灰色～黄灰色 B 精良 C 良好 D ¼
159	杯	灰原 6 G	口径 13.0 器高 4.8	体部を・口縁部は、内弯気味にのびる。 端部は内側に稜線が入る。 底部は平らで、外面は工具によるナデ調整。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ½
160	杯	灰原 6 G	口径 15.8 器高 5.2 底径 11.5	体部・口縁部は、やや内弯気味にのびる。端部は平らに近い。 底部は平らである。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内・外、淡緑灰色 B 細砂多含 C 普通 D ほぼ完存
161	杯	灰原 5 G	口径 16.2 器高 7.3 底径 9.5	体部は深く、口縁部端部は丸い。 底部は中央がやや上がる。 底部外面は未調整。体部との境は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色～黒色 外、暗灰色～暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D ½
162	杯	灰原 6 G	口径 16.1 器高 6.3 底径 12.5	体部・口縁部は内弯する。端部は丸い。 底部はほぼ平らである。 底部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、暗青緑灰色 外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
163	杯	灰原 6 G	口径 16.4 器高 6.3 底径 10.5	体部は上外方にのび、口縁部はやや内弯し、端部は丸い。 底部はほぼ平らである。 底部外面½は未調整。¼回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
164	杯	灰原 6 G	口径 19.2	体部・口縁部は上外方にのび、端部は平坦。	A 内・外、緑灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
165	皿	灰原 3 G	口径 17.5 器高 3.1 底径 11.6	体部・口縁部は短く、やや外反する。 底部はほぼ平らである。 底部外面は未調整。内面はナデ調整。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色 B 砂粒少含 C 良好 D ¼
166	皿	灰原 6 G	口径 19.2 器高 3.0 底径 12.2	焼け歪で変形する。 器壁が磨滅し、調整不明。	A 内・外、黄灰色 B 細砂少含 C 不良 D ほぼ完存
167	皿	灰原 6 G	口径 25.7 器高 5.7 底径 22.1	焼け歪で、底部中央が下がる。 底部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内、暗灰色～褐色 外、灰色～茶灰色 B 微、細砂少含 C 良好 D ½
第136図 168	高杯	灰原 3 G	口径 19.8 器高 5.9 脚部径 11.2 脚部高 4.2	杯部は浅い。口縁端部は丸い。 脚部は短く、大きく開く。 器壁は磨滅し、調整は不明。	A 内・外、白黄褐色 B 砂粒少含、赤褐色粒含 C 不良 D ½
169	高杯	灰原 14 G	口径 22.8 器高 6.8 脚部径 11.3 脚部高 5.0	杯部は浅い。口縁端部は、平らでやや外傾する。 端部外側に段を有す。杯底部外面は、回転ヘラ削り調整。 脚部は短く、大きく開く。端部は高台状に突出する。	A 内・外、 暗灰色～暗黒灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
170	蓋	灰原 3 G	口径 7.8 器高 2.8	体部・口縁部は短く、下外方にのび、端部は気味をもつ。 天井部はほぼ平坦である。 天井部外面は不定方向の削り、内面はナデ調整。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D ¼
171	蓋	灰原 5 G	口径 8.1 器高 1.9	体部・口縁部は短く、下外方にのび、端部は丸い。 天井部は平らである。 天井部内外面はナデ調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂多含 C 不良 D ¼

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
172	蓋	灰原 14 G	口径 9.8	焼き歪で変形する。 口縁端部は丸い。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。	A 内、灰色 外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
173	蓋	灰原 6 G	口径 12.8	体部は、内湾気味にのび、端部を外方へつまみ出す。	A 内・外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
174	蓋	灰原 1 G	口径 15.5 器高 4.6 つまみ径 4.1 つまみ高 0.8	体部・口縁部は、外反気味に下り、端部は平面をなす。 天井部は平らで、中央につまみをもつ。 天井部外面1/2回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
175	短頸壺	灰原 6 G	口径 5.2 頸部径 4.9	外傾する短い口頸部をもつ。 肩部付近は、静止ヘラ削り。	A 内、黒色～灰色 外、灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
176	短頸壺	16号窯 灰原	口径 5.2 最大径 11.0	内傾する短い口頸部をもつ。 胴部は丸い。 回転ナデ調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 精良 C 良好 D 1/2
177	短頸壺	灰原 6 G	口径 9.8 頸部径 9.5 最大径 13.6	口頸部は短く、肩部と胴部の境で屈曲する。 胴部外面はナデ調整。他は回転ナデ。	A 内・外、灰色～暗灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
178	長頸壺	灰原 14 G	口径 12.8 頸部径 6.8	口頸部は外反し、大きく開く、端部は丸い。 頸部中位に一条、上位に三条のにおい沈線を施す。 頸部下位内外面にシボリ痕が残る。	A 内・外、白灰色～褐色～茶色 B 細砂多含、砂粒少含 C 不良 D 頸部残1/2
179	長頸壺	16号窯 灰原	口径 8.7	口縁部は外反し、大きく開く、端部は平面をなす。 外面にシボリ痕が残る。	A 内、暗黒灰色 外、黒色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部残1/2
180	長頸壺	灰原 5 G	口径 10.0 頸部径 5.8	口縁部は大きく開き、上外方にのび、端部は丸い。 回転ナデ調整。	A 内・外、灰色～黒色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部残1/2
181	長頸壺	灰原 3 G	口径 12.5	頸部は外反し、大きく開く、口縁は外方にのび、端部は丸い。 外面にシボリ痕が残る。	A 内、暗灰色 外、暗灰色～暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部残1/2
182	長頸壺	灰原 5 G	口径 12.6	口頸部片で、口縁は屈曲し、外方へのび、端部は丸い。	A 内・外、褐色 B 細、微砂少含 C 良好 D 頸部残1/2
183	長頸壺	灰原 15 G	最大径 18.8 高台径 11.3 高台高 0.8	肩部と胴部の境で鋭く屈曲する。 底部は中央がやや下がる。端にハの字の高台をもつ。 底部外面回転ヘラ削り調整。	A 内、黒灰色 外、灰色～黒色 B 細砂多含、砂粒少含 C 良好 D 胴部残1/2
184	長頸壺	灰原 7 G	最大径 19.6 高台径 11.0 高台高 0.5	肩部と胴部の境で鋭く屈曲する。 底部は中央がやや上がる。やや内傾にハの字の高台をもつ。 底部外面はナデ調整。胴部外面回転ヘラ削り調整。	A 内、暗黒灰色 外、灰色～暗黒灰色～黒色 B 細砂多含 C 良好 D 胴部残1/2
第137図 185	壺	灰原 14 G	口径 17.6 器高 8.9	口頸部は上外方へ大きく開き、口縁端部は上方へつまみ出す。 胴部は扁球形をなし、底部は丸味をもつ。 底部内外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、灰色～黒色～紫灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
186	鉢	灰原 5 G	口径 20.7	胴部は内湾し、丸味をもつ、口縁端部は、上方へつまみ出す。 胴部外面中位以下は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、灰色 B 微砂少含 C 良好 D 1/4
187	瓶	表土	口径 3.7	頸部は外反し、口縁端部は、斜上方へつまみ出される。 回転ナデ調整される。	A 内・外、灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部残1/2
188	瓶	灰原	口径 5.7 器高 18.5 最大径 15.0 底径 8.3	口縁部は外反し、端部は内傾し、上部をわずかにつまみ出す。 肩部は丸味をもち、底部、中央がやや上底である。 沈線を施すがいずれもにぶい。底部はナデ。底部端・胴部下位は回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	A 内・外、白黄色～白橙色 B 細砂少含 C 不良 D 完存

K地区

遺物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態及び手法の特徴	観察
194	甕	灰原 5 G	口径 25.0 頸部径 21.2	口頸部は短く外反し、端部は肥厚する。 肩部外面は格子タタキ、内面は弧状の当具痕が残る。	A 内・外、灰色～暗灰色～黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 頸部ほぼ完存
195	甕	灰原 5 G	口径 24.0 頸部径 20.2 最大径 44.0	口頸部は外反し、端部は肥厚する。 胴部外面は格子タタキ、内面は弧状の当具痕が残る。	A 内、灰色～暗灰色 外、灰色～暗黒灰色 B 細砂少含 C 良好 D 1/2
第139回 198	蓋杯 (蓋)	円形 土壇	口径 13.7 器高 3.0 つまみ径 2.8 つまみ高 0.5	焼け歪で変形する。口縁部は内傾し、端部は鋭い。 天井部外面は、回転ヘラ削り調整。	A 内・外、暗灰色 B 細砂少含 C 良好 D ほぼ完存
199	蓋杯 (身)	円形 土壇	口径 14.6 器高 6.2 高台径 9.8 高台高 0.4	焼け歪で変形する。体部・口縁部は外反し、端部は丸い。 底部外面は、未調整。	A 内・外、白灰色 B 細砂少含 C 不良 D 1/2

# 版 圖

A-1地区



1. A-1地区伐採後全景（南から）



2. A-1地区1号窯発掘前（南から）

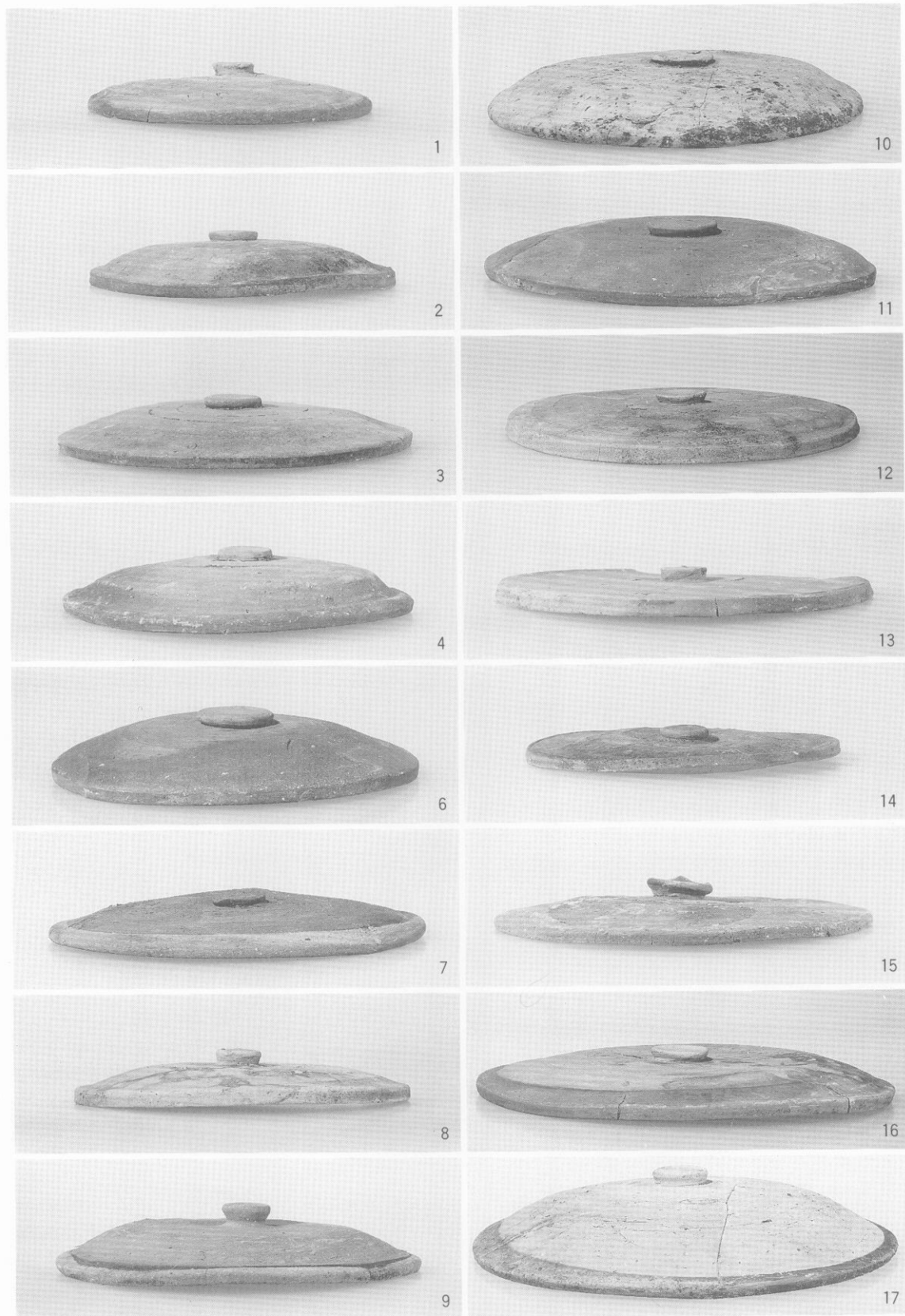


1. 1号窯遺構・灰原検出状態



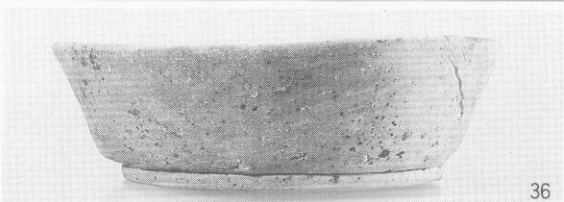
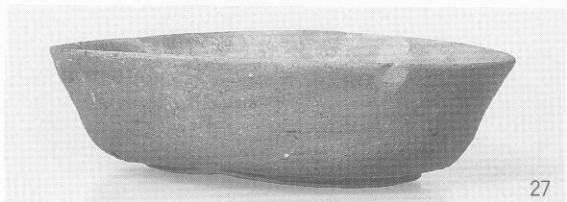
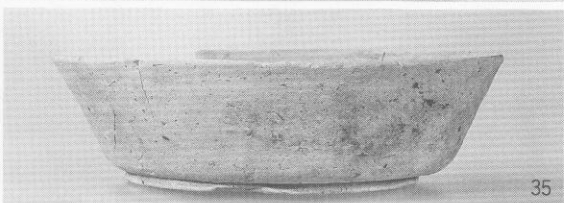
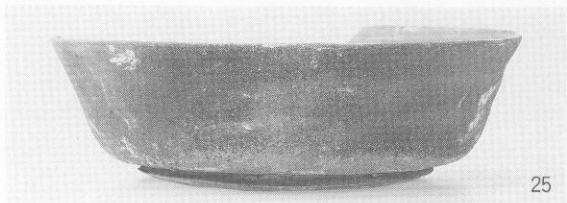
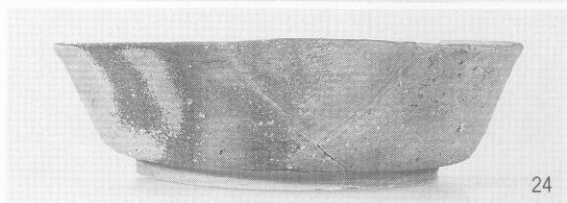
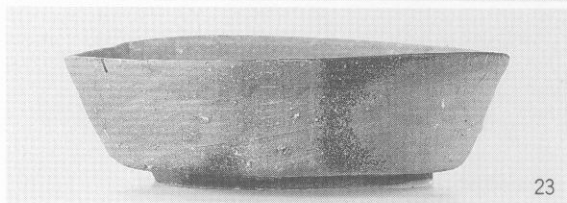
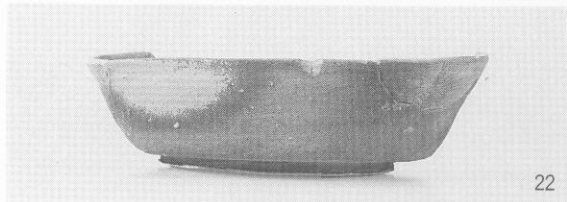
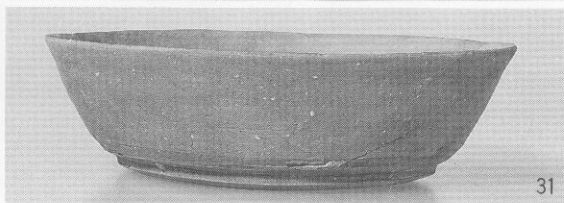
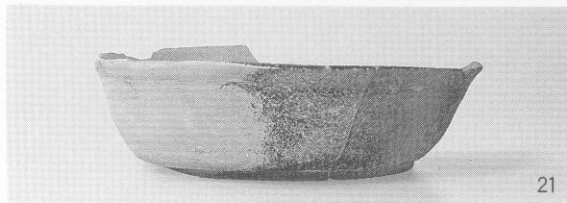
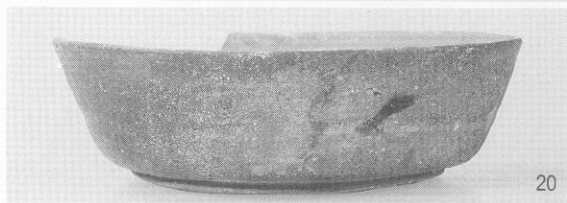
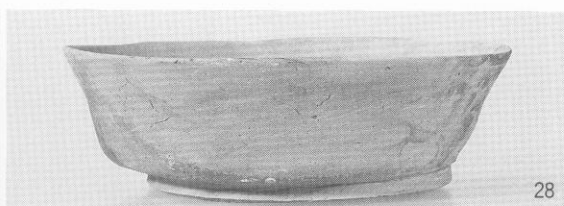
2. 1号窯発掘後

## A-1 地区

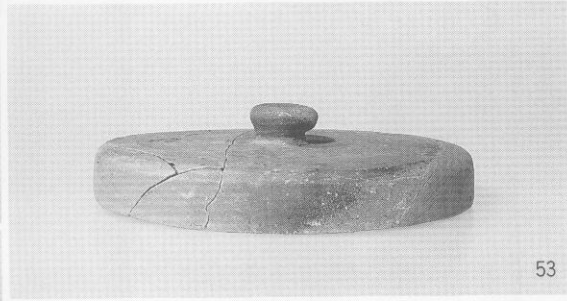
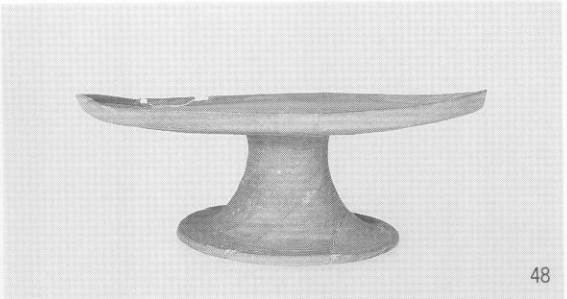
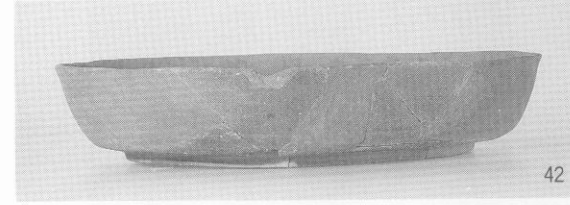
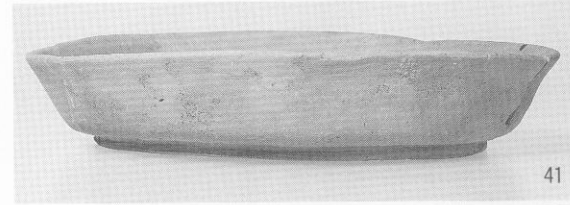
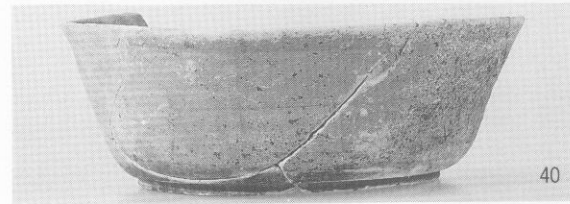
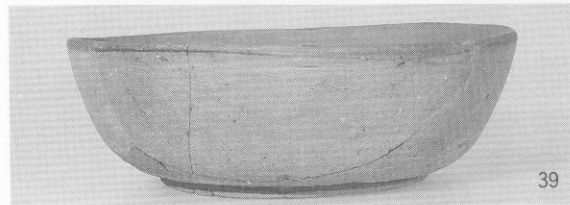
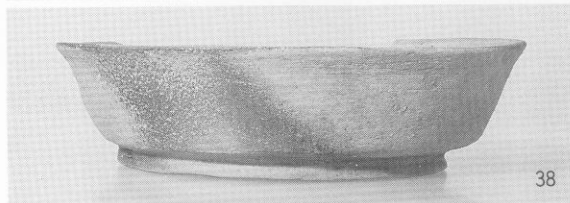


A-1 地区出土土器 1





A-1 地区



A-1 地区出土土器 3



1. A-2 地区伐採後全景 (北から)



2. A-2 地区裾部確認調査状況 (北から)

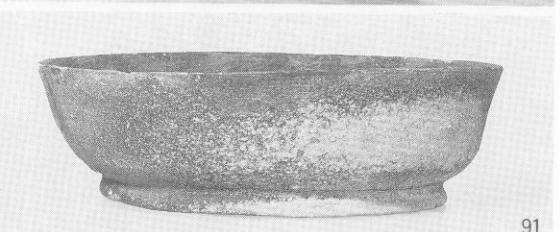
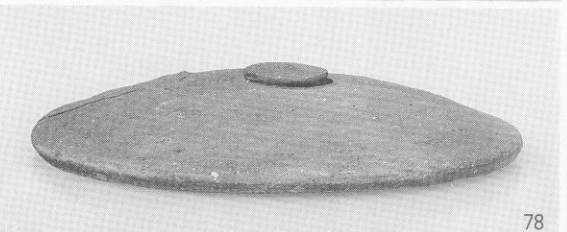
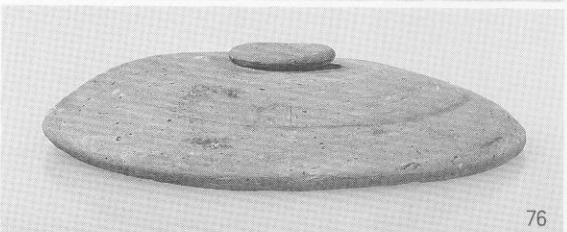
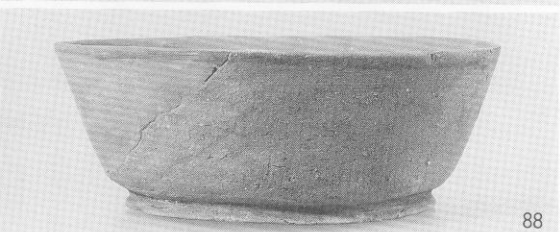
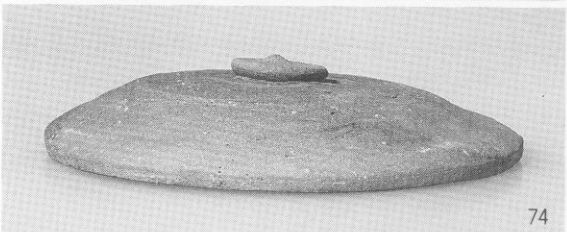
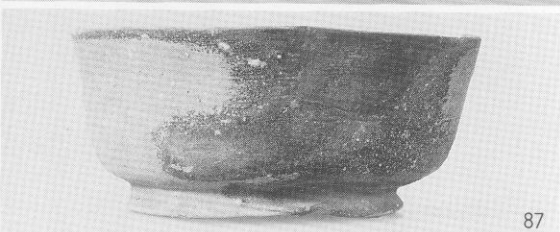
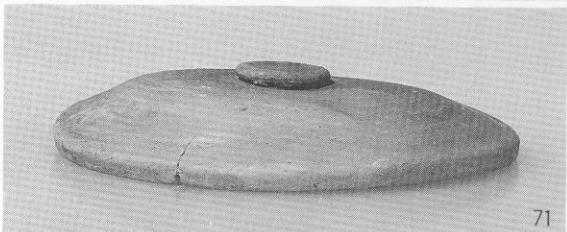
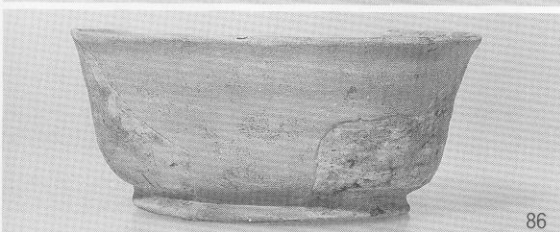
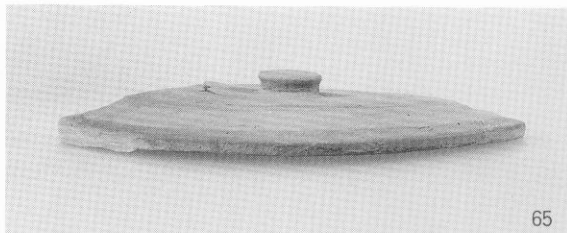
A—2地区



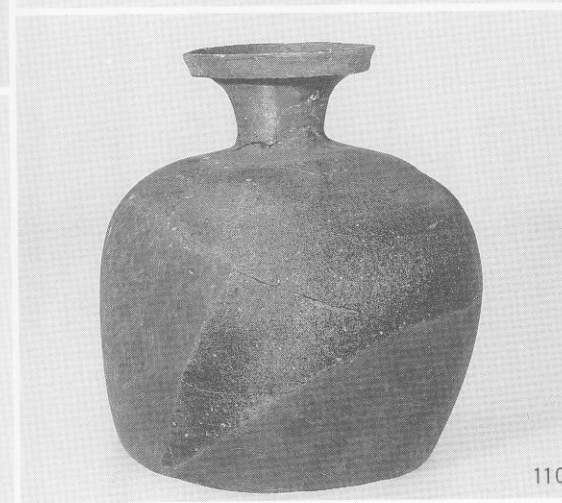
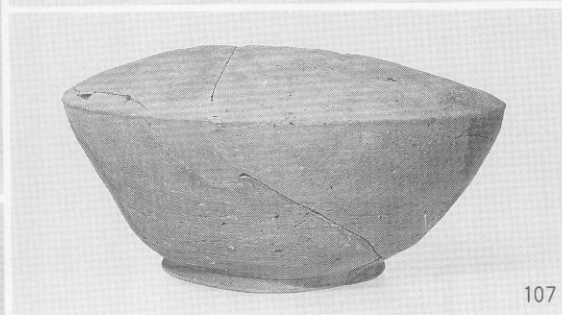
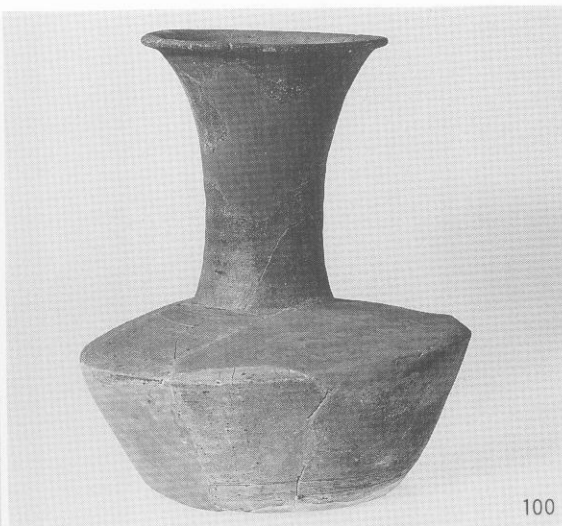
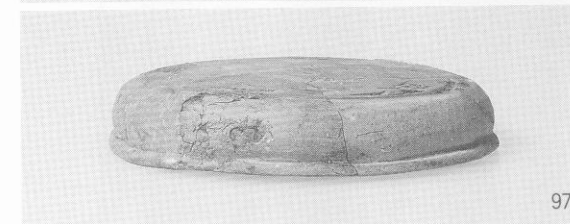
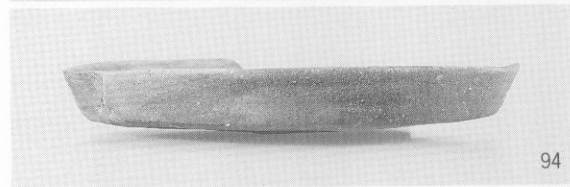
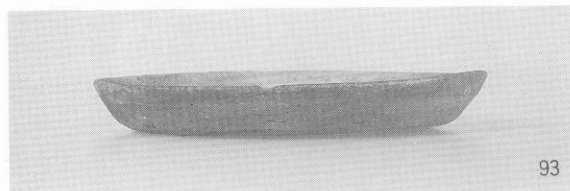
1. 3号窯灰原檢出狀態



2. 3号窯灰原土器出土狀態



A-2 地区



A-2区出土土器

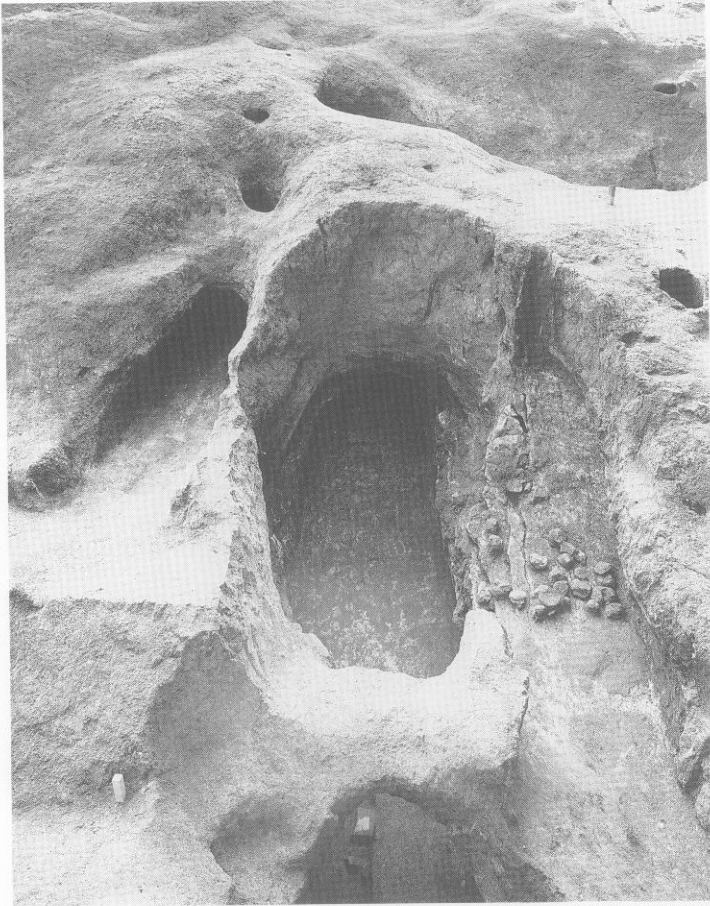


1. A-3地区調査前全景（北から）

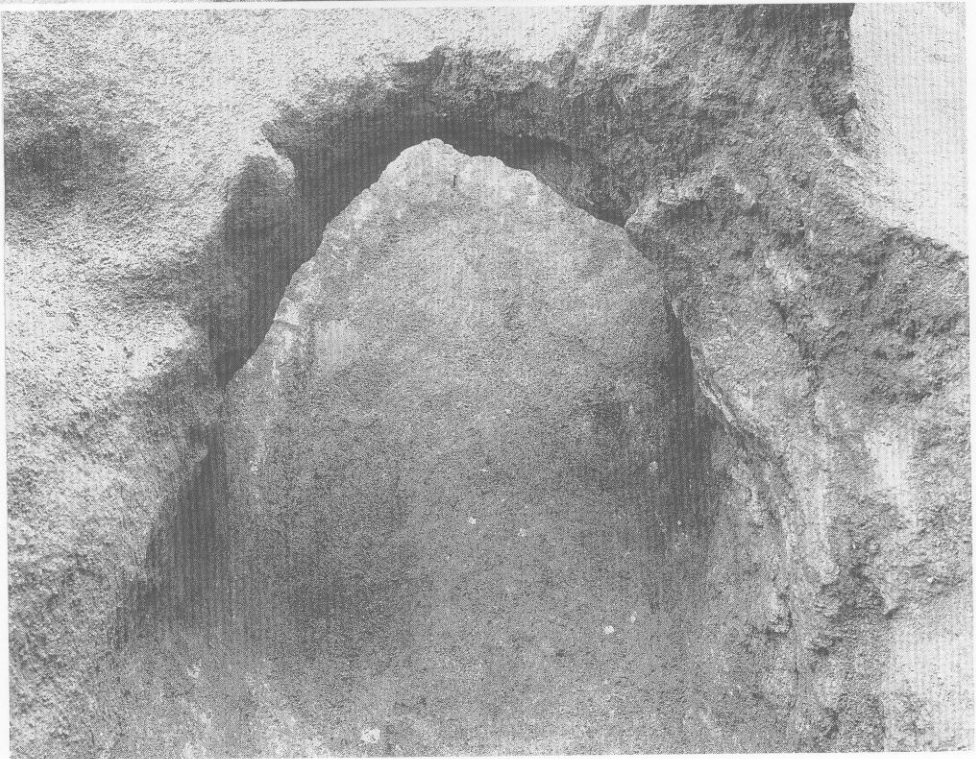


2. 4号窯跡陥没状態

A-3地区



1. 4号·5号·7号窑迹



2. 4号窑迹焚口



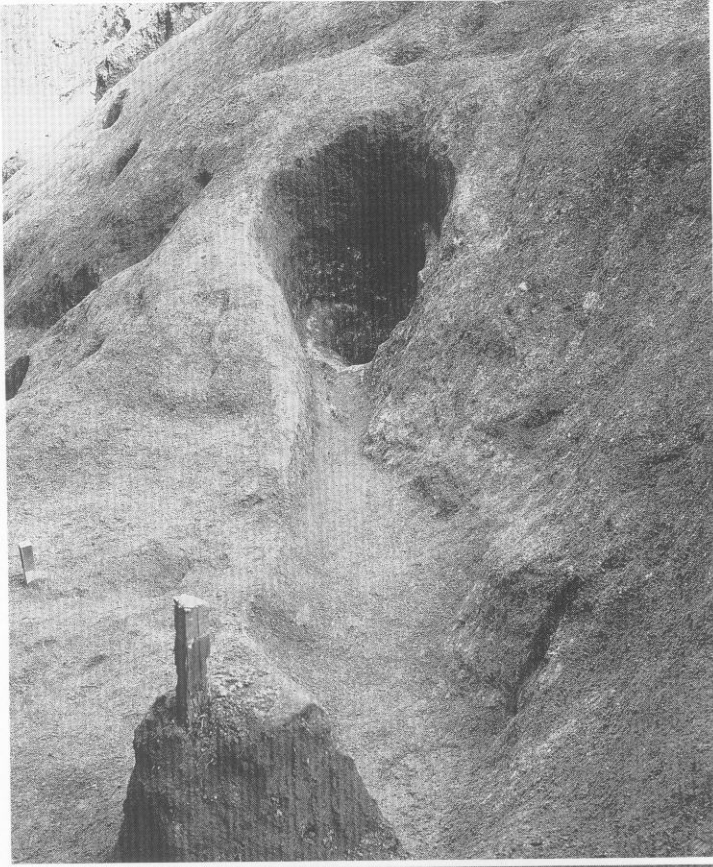


1. 4号窑迹天井部補修状态

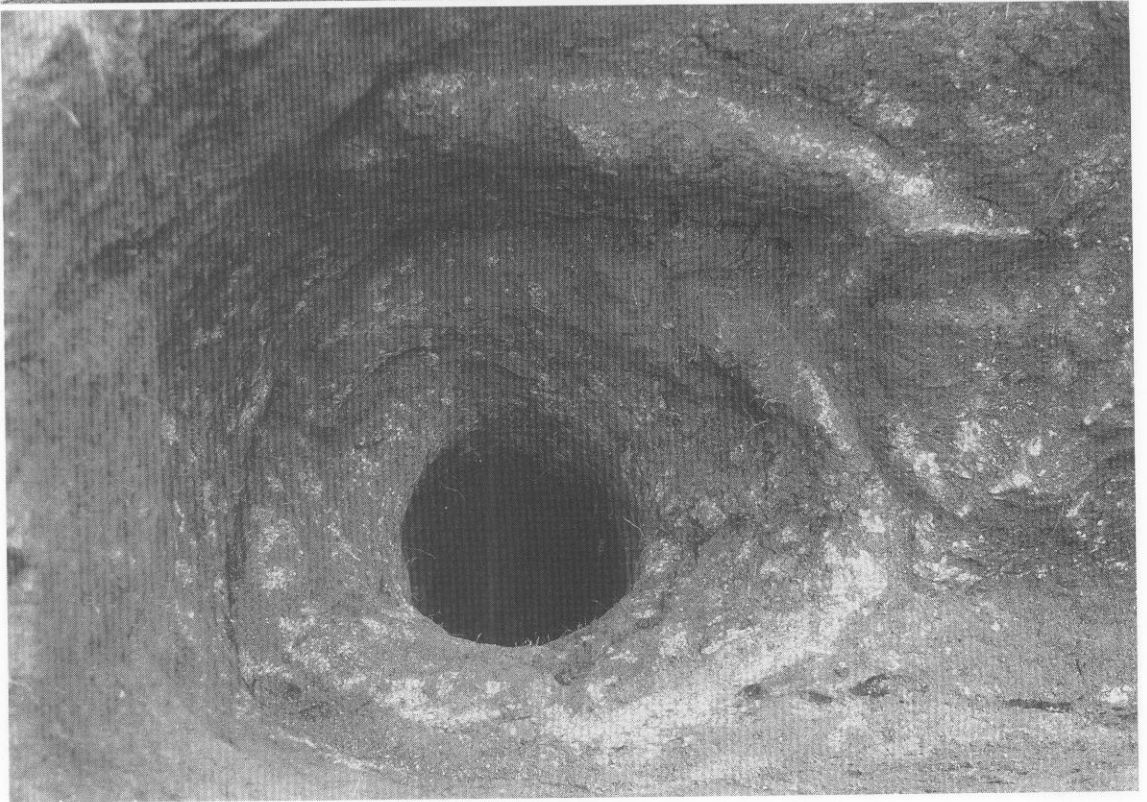


2. 4号窑天井部補修部分拡大

A—3地区



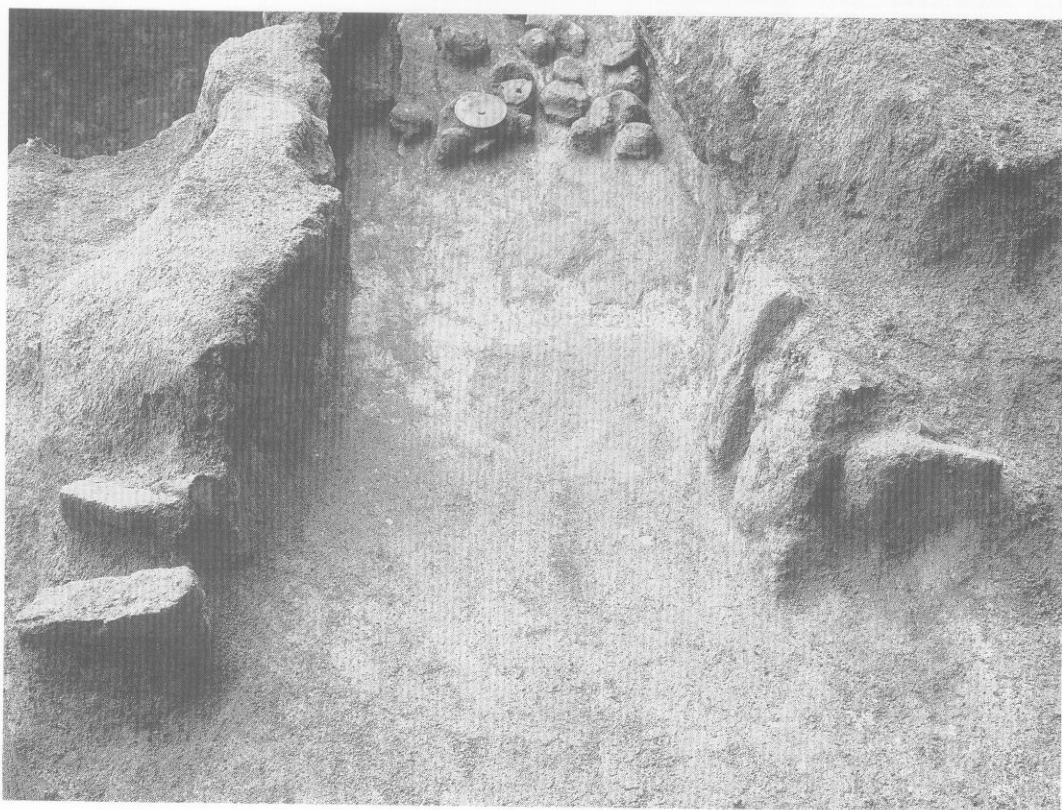
1. 4号窑迹排水沟



2. 4号窑迹烟道部

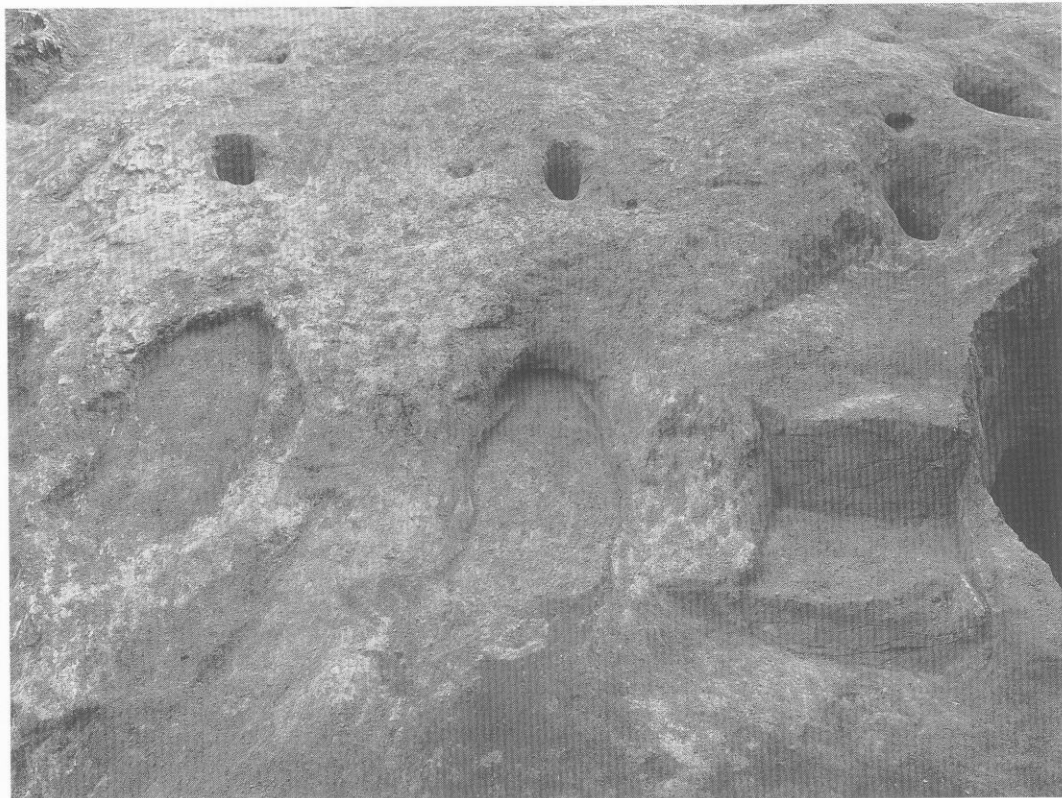


1. 5号窑迹

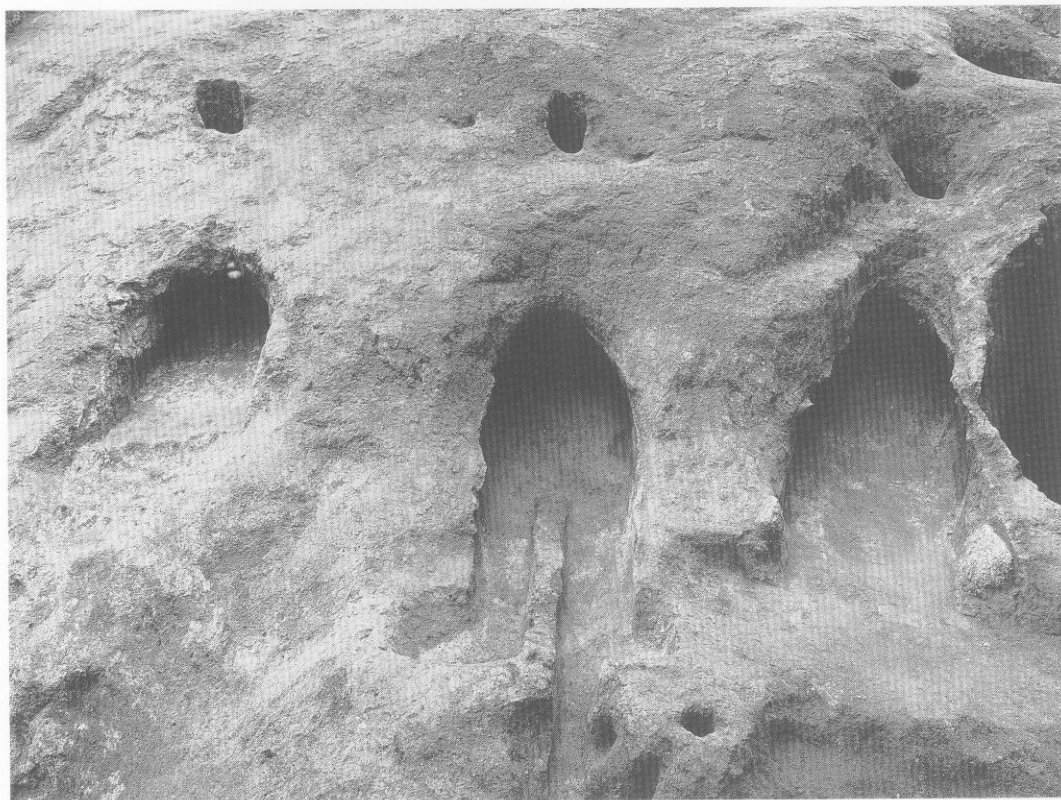


2. 5号窑迹燃烧部

A—3地区



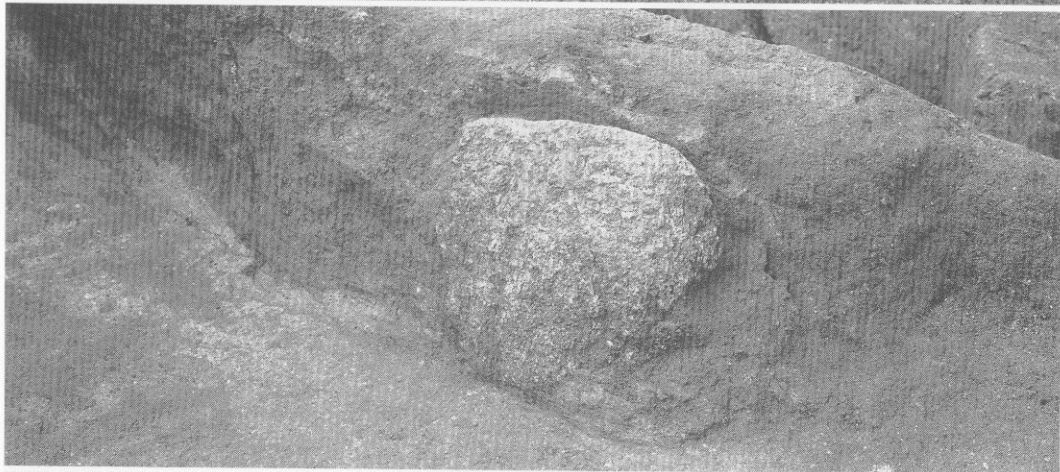
1. 7号·8号·9号窑迹



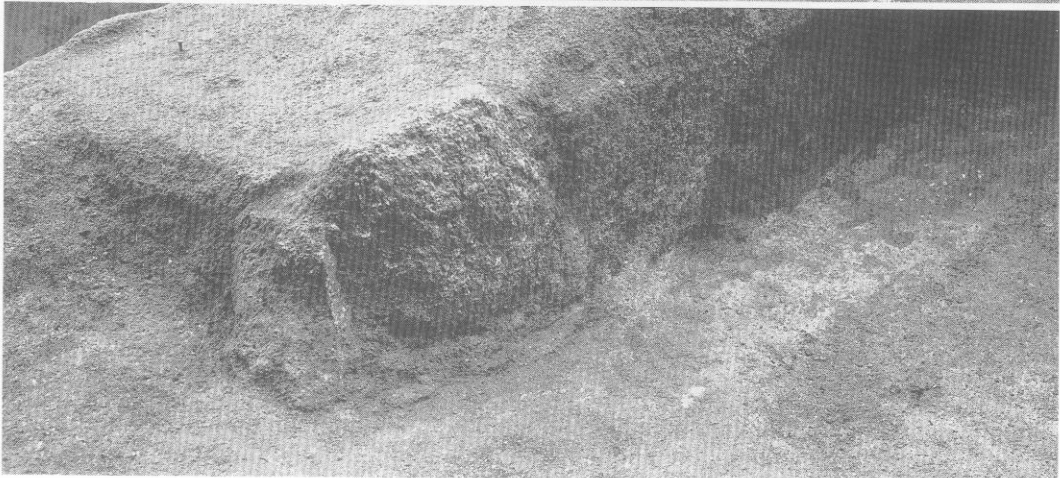
2. 7号·8号·9号窑迹



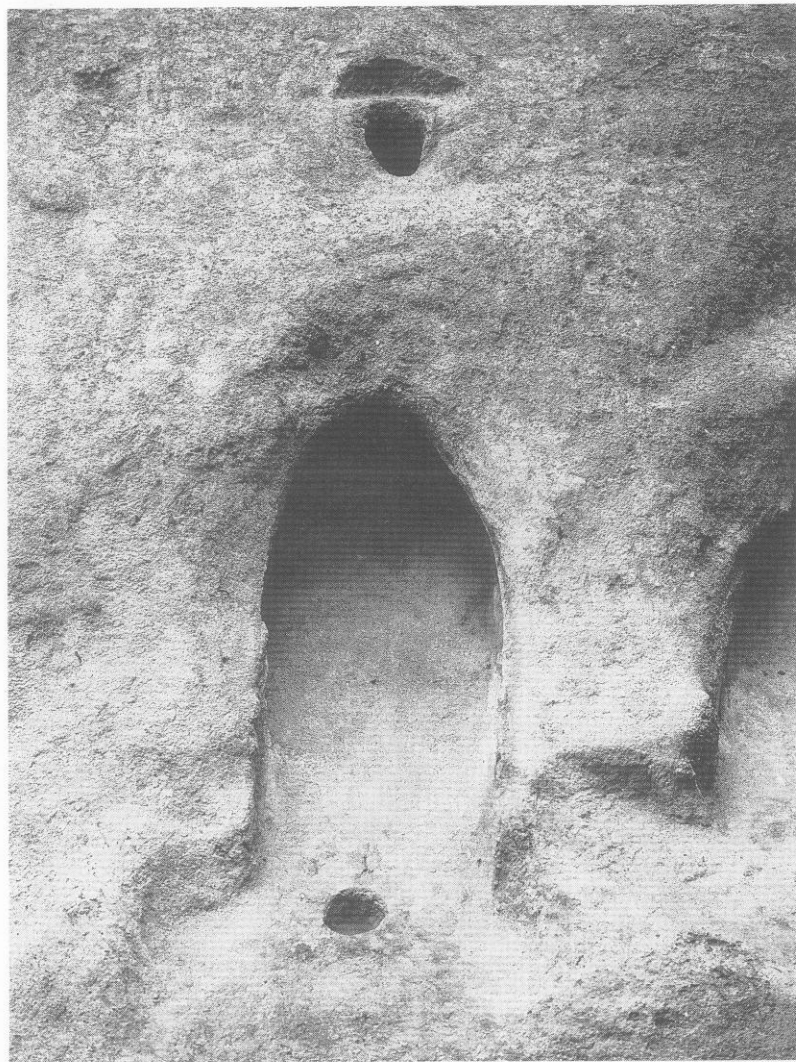
1.  
7号窑跡



2.  
燃烧部右侧立石



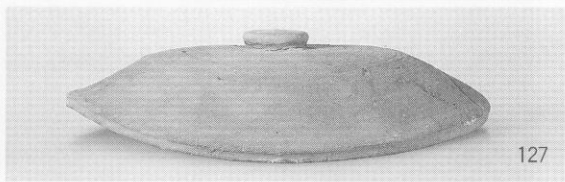
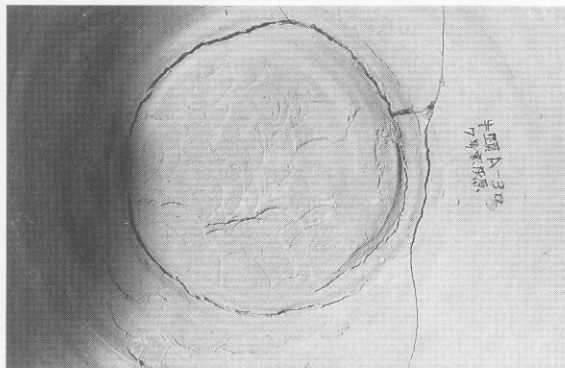
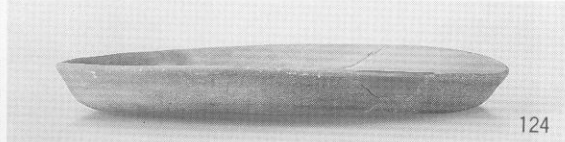
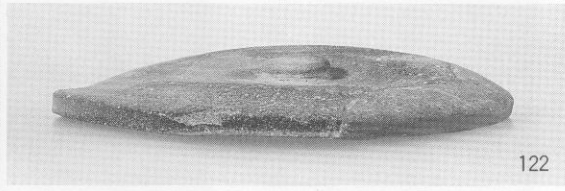
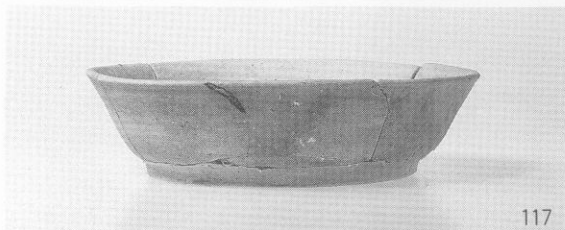
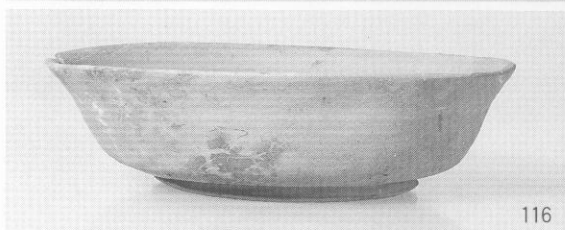
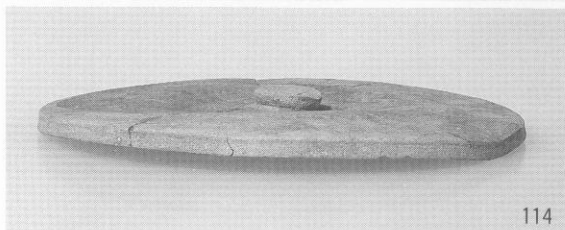
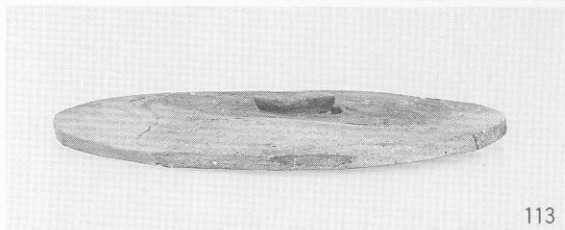
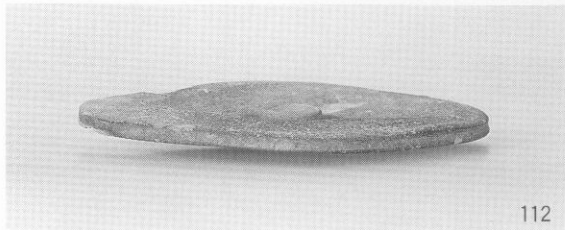
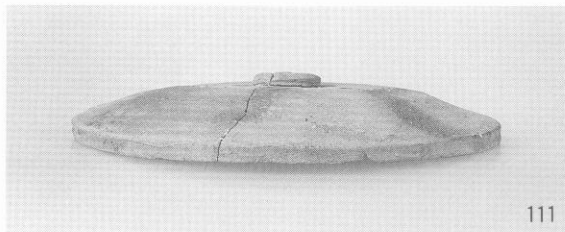
3.  
燃烧部左侧立石



1. 8号窑迹

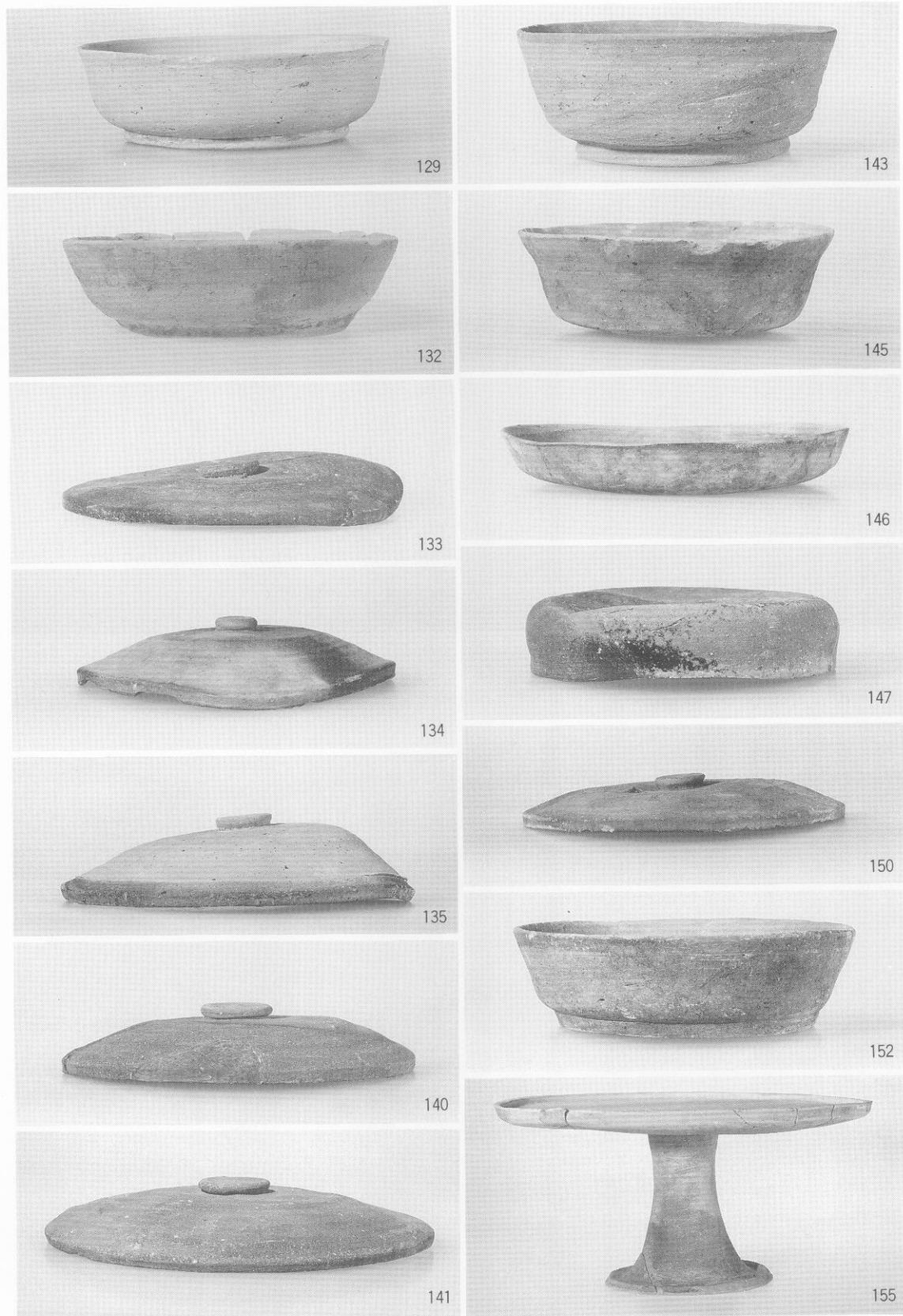


2. 9号窑迹



A-3地区出土土器 1

## A-3地区



A-3地区出土土器 2





1. B-2地区全景 (空中写真)

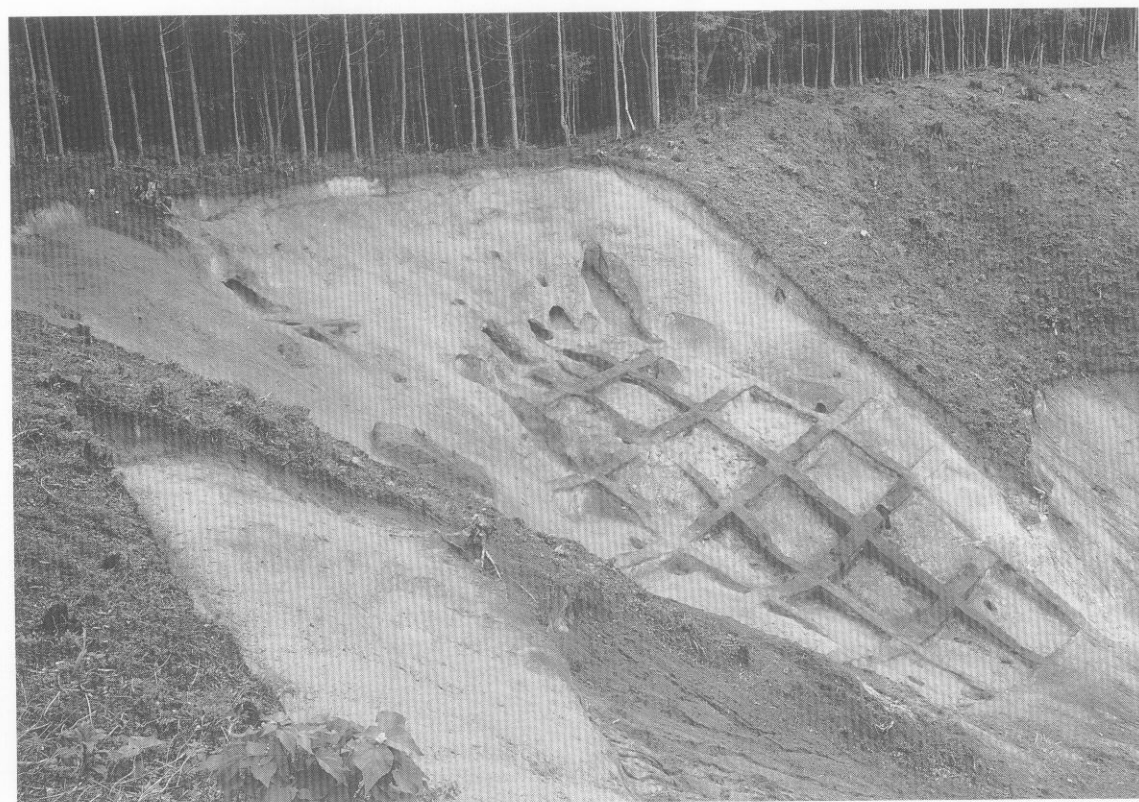


2. B-2地区発掘区近景 (空中写真)

B-2地区



1. 23~28号窯全景（東から）



2. 23~28号窯全景（東南から）



23~28号窯全景（空中写真）



2. 23~28号窯全景（東から）

B-2地区



1. 23~26号窑 (空中写真)



2. 23~25号窑近景 (空中写真)



1. 23号窯全景（東から）

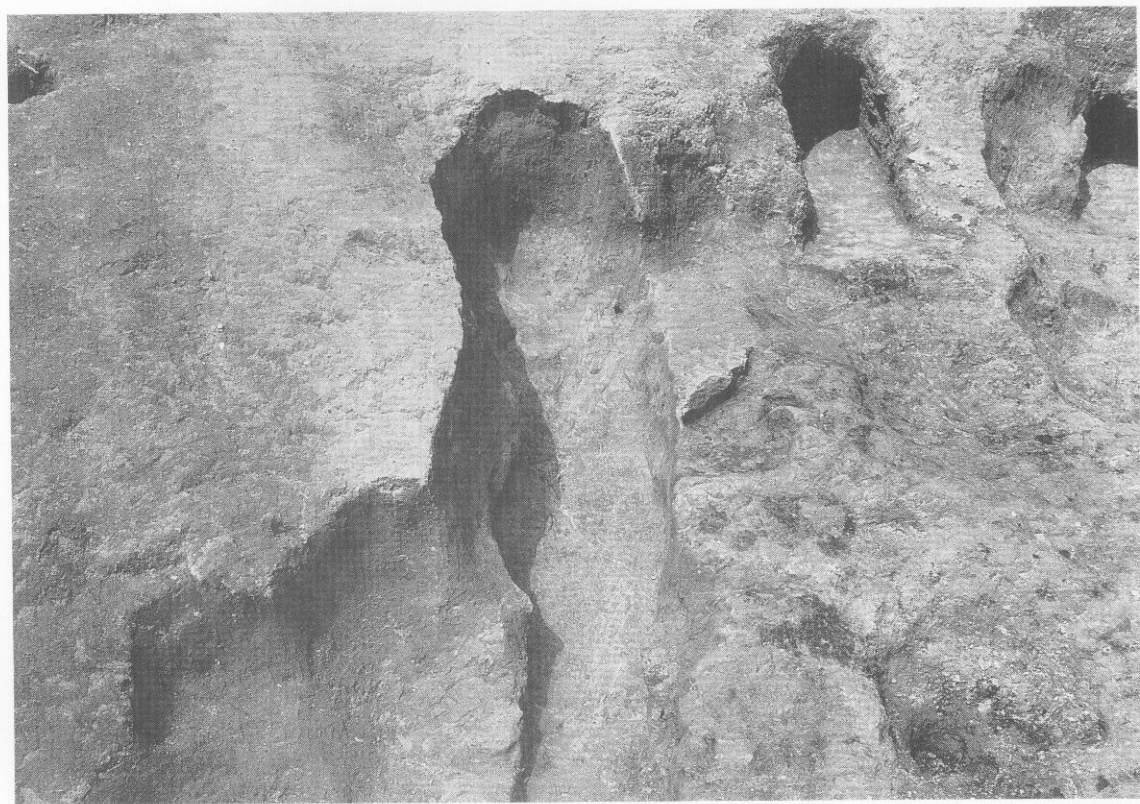


2. 25号窯全景（東から）

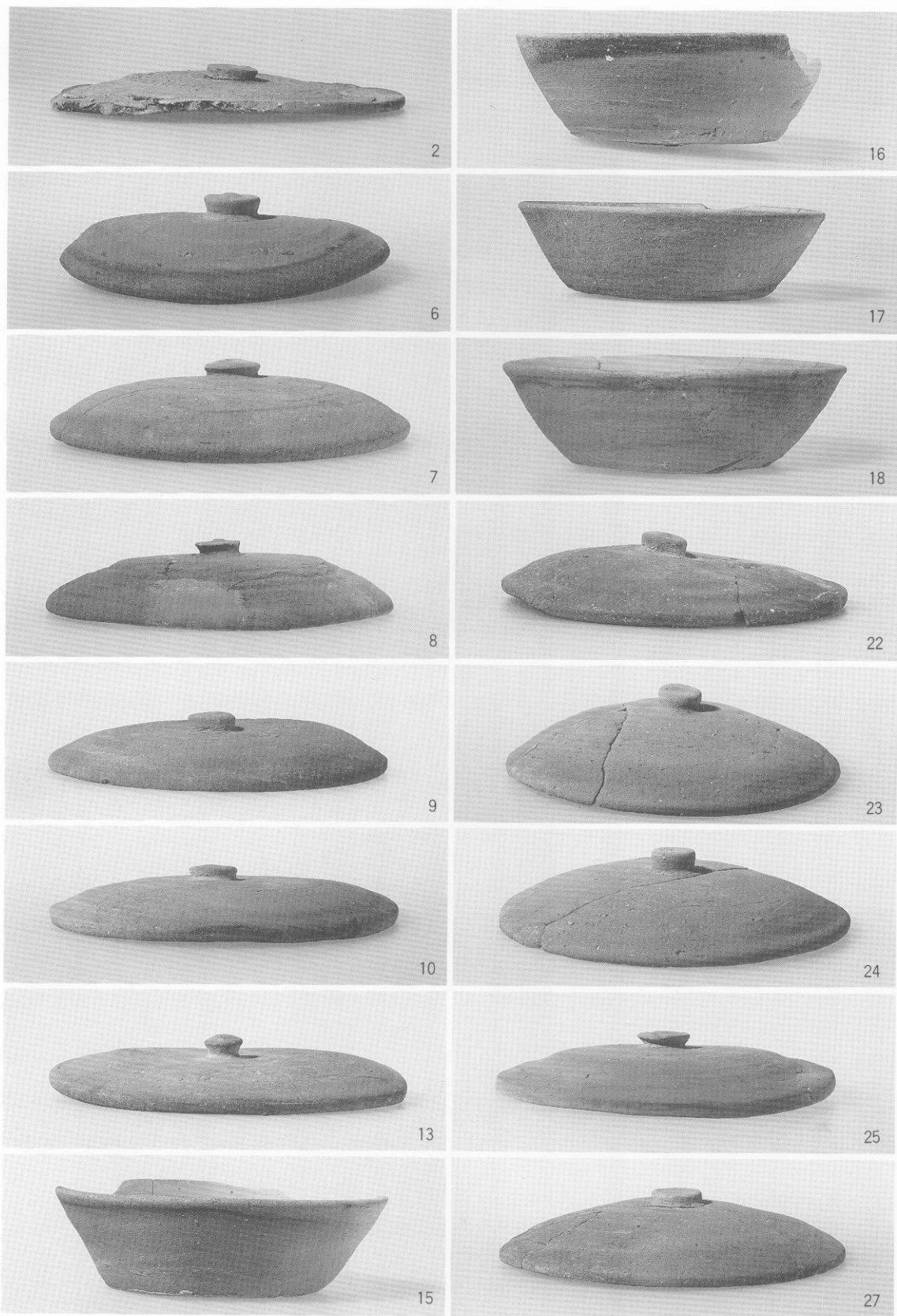
B-2地区



1. 27号窑全景 (空中写真)

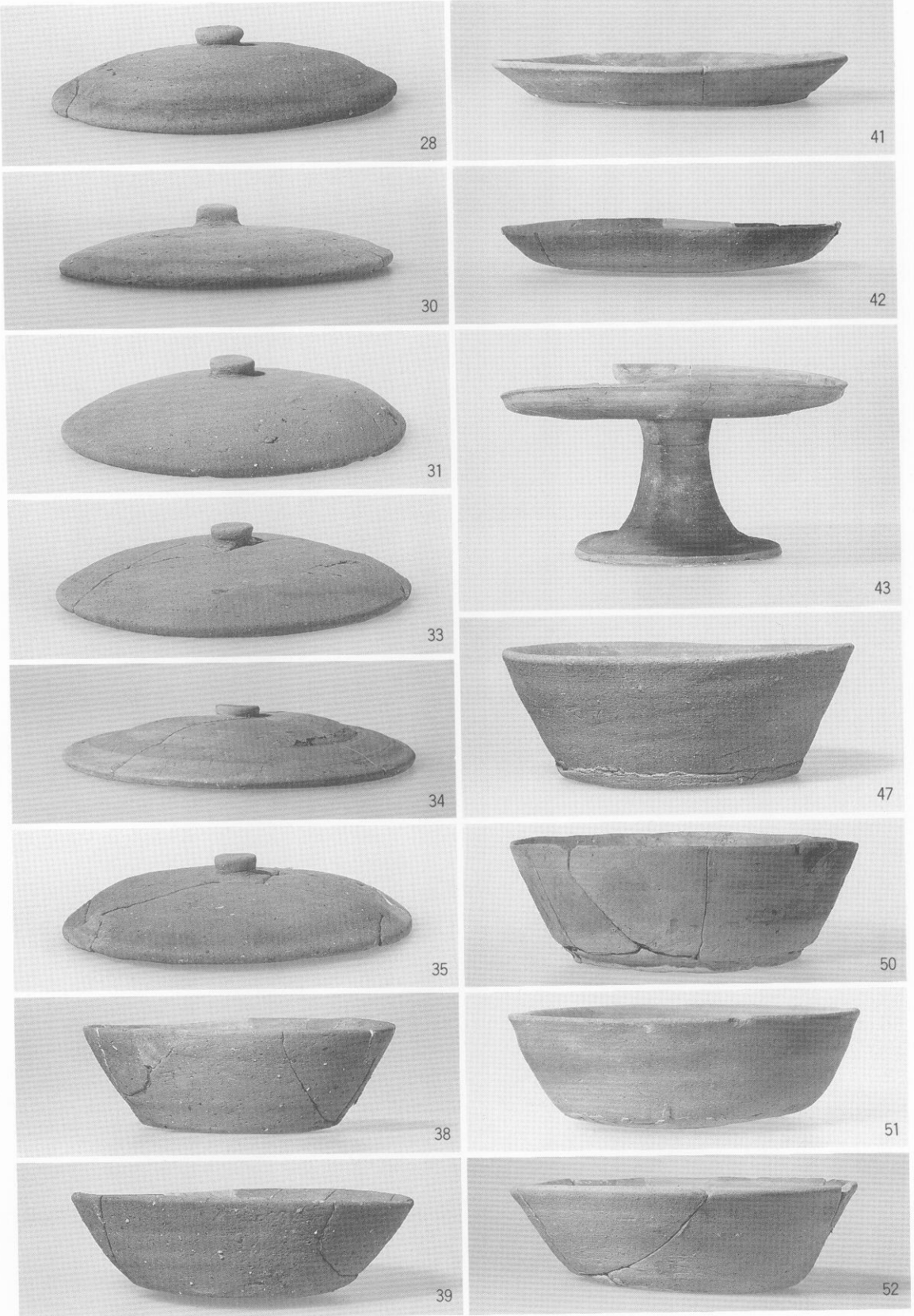


2. 28号窑全景 (空中写真)



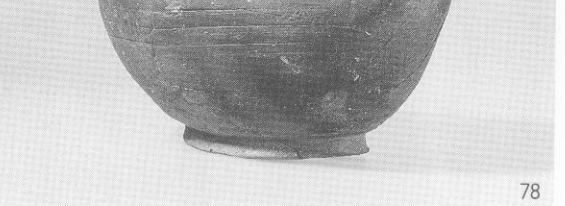
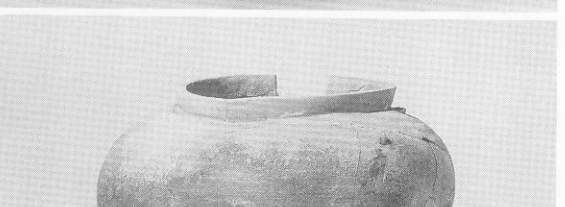
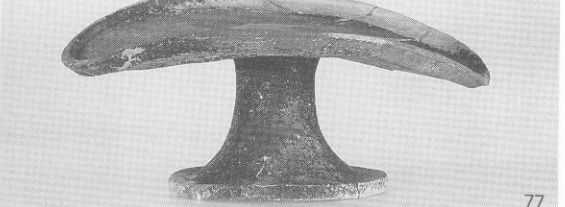
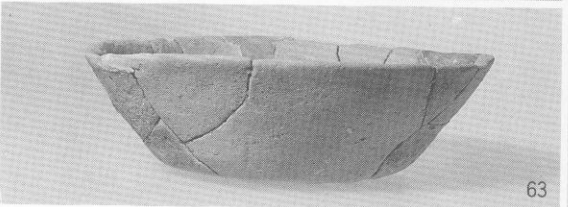
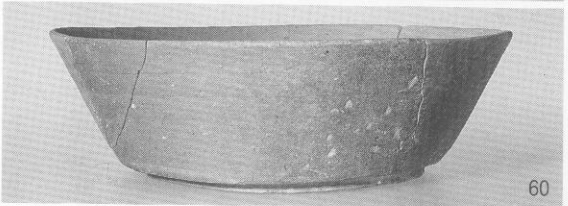
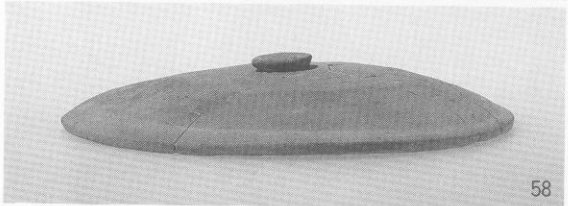
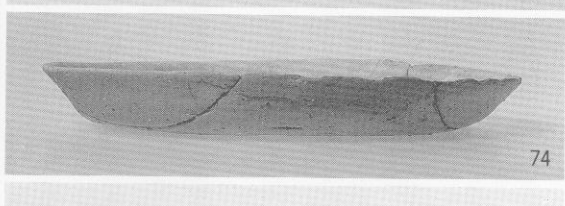
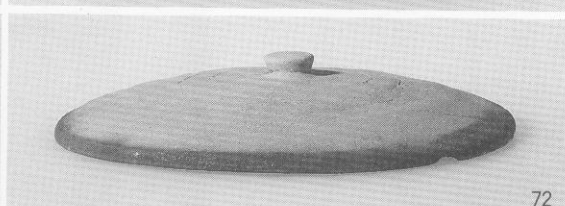
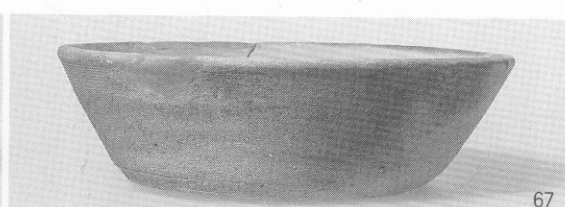
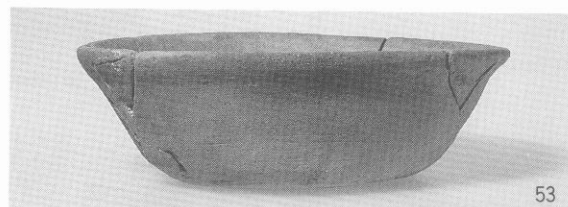
B-2地区出土土器 1

B-2地区

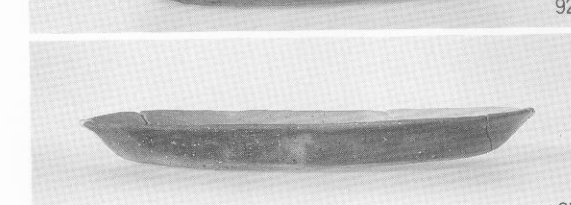
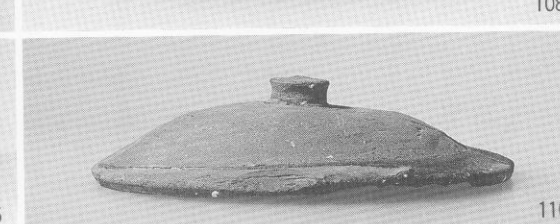
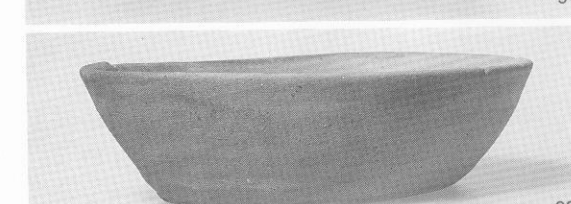
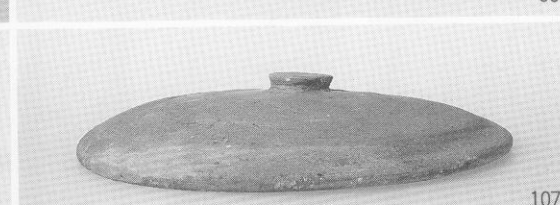
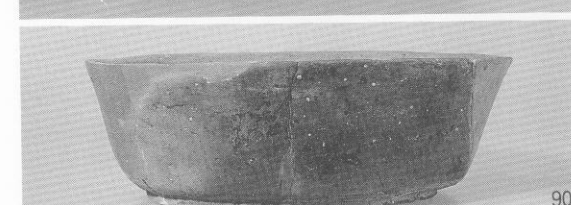
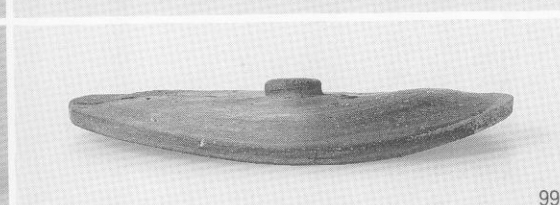
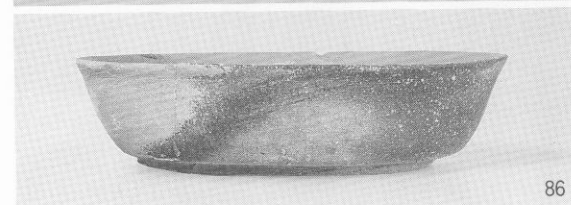
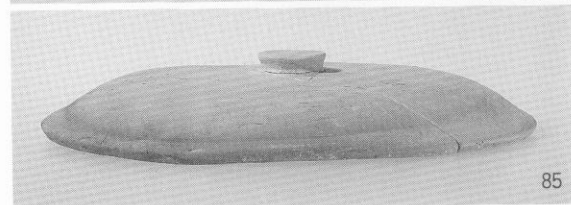
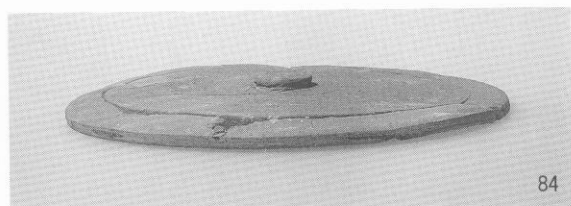


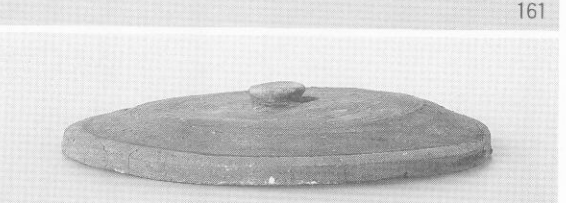
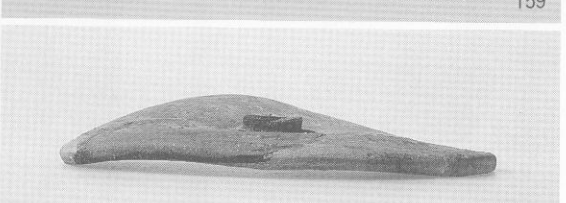
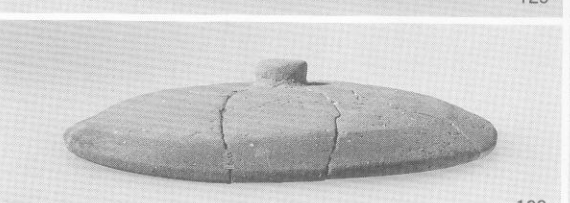
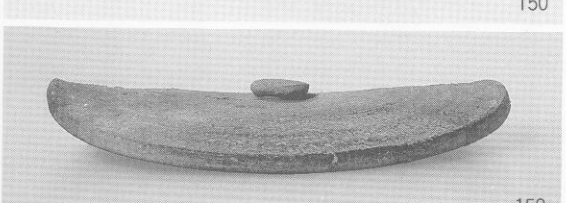
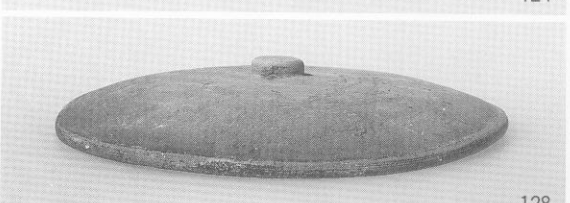
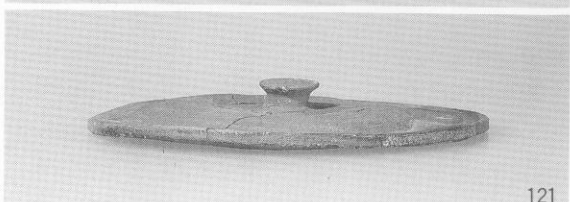
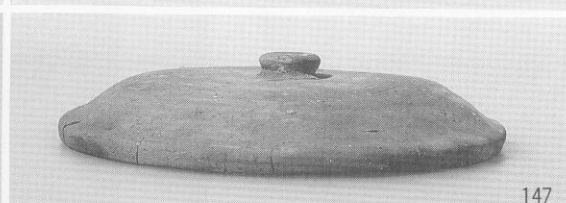
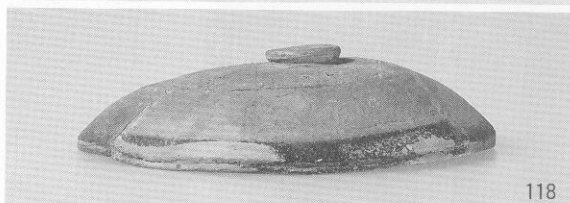
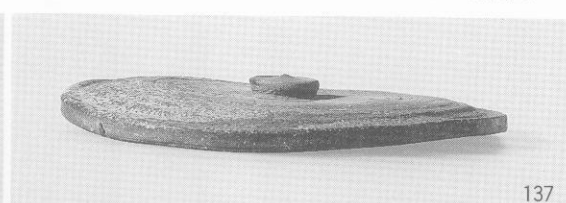
B-2地区出土土器 2



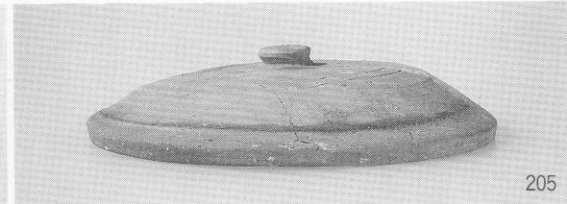
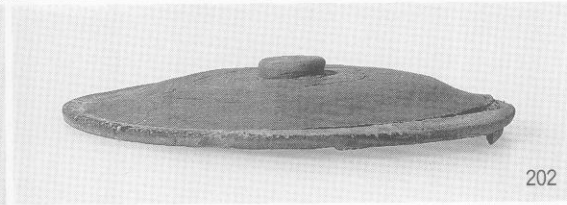
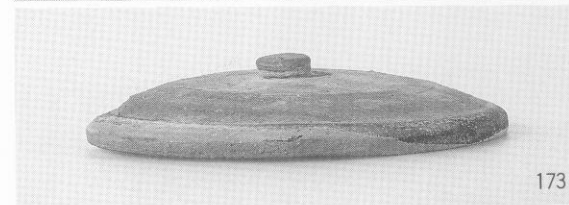
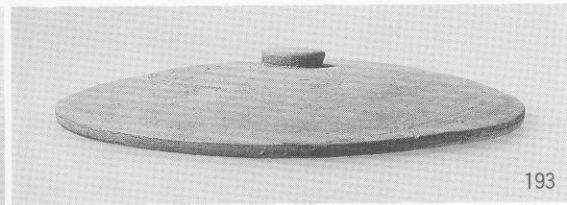
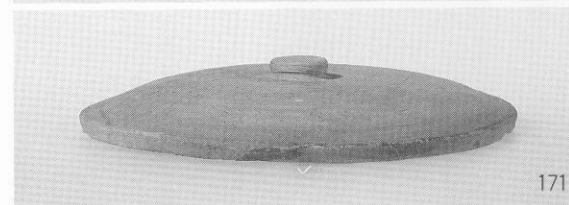
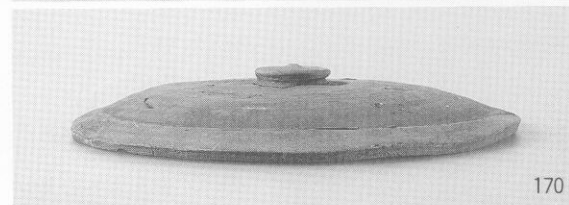
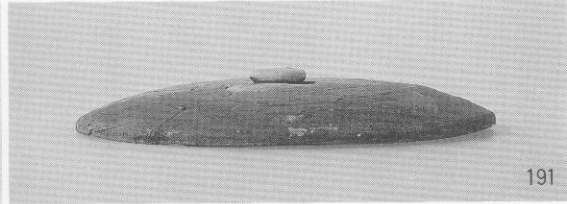
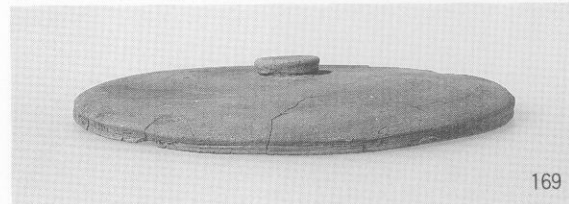
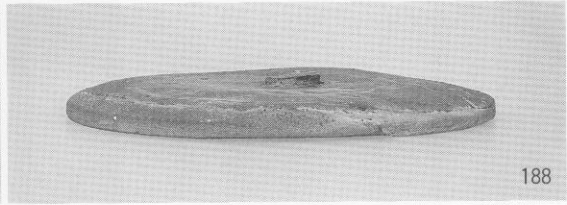
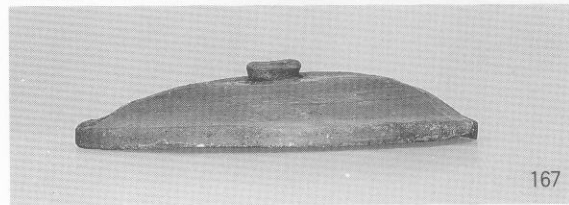
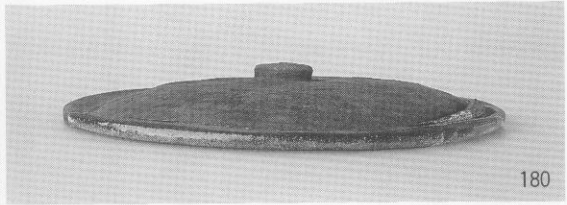
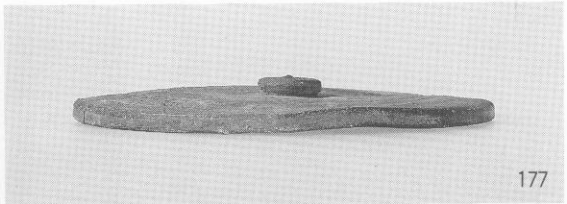
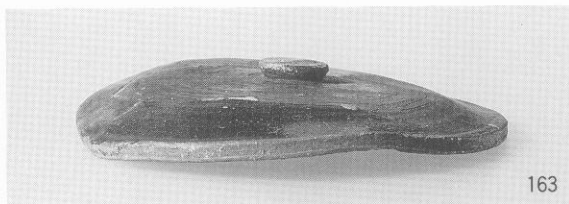


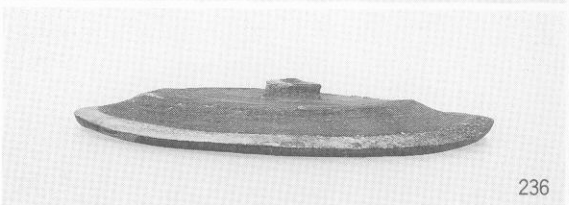
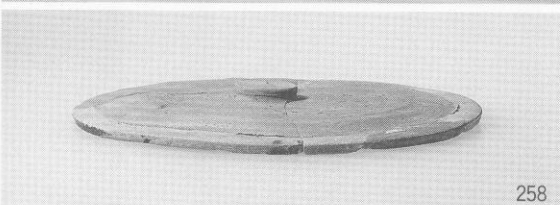
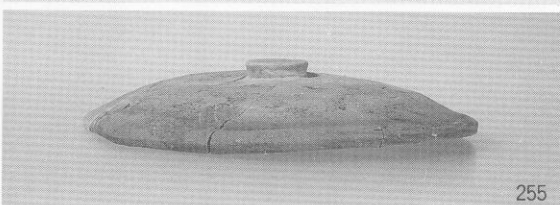
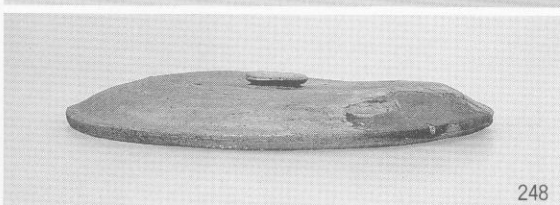
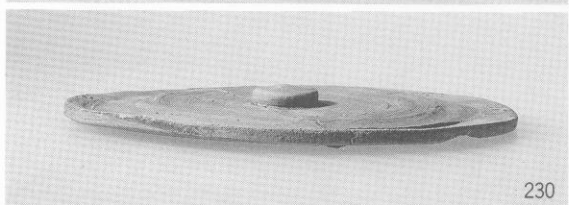
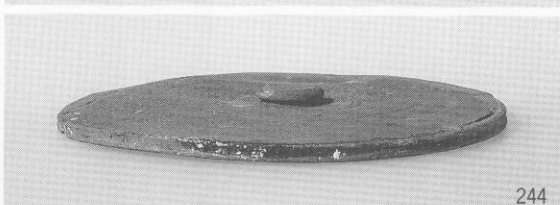
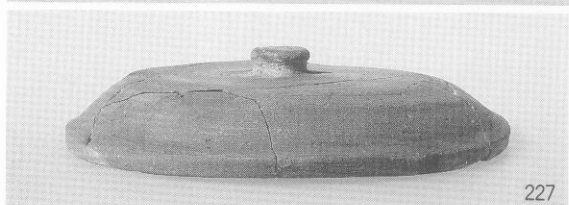
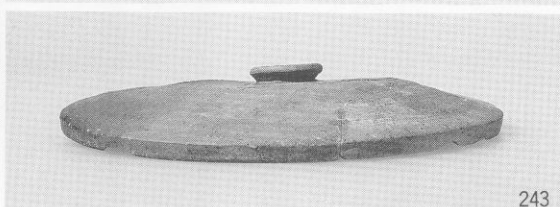
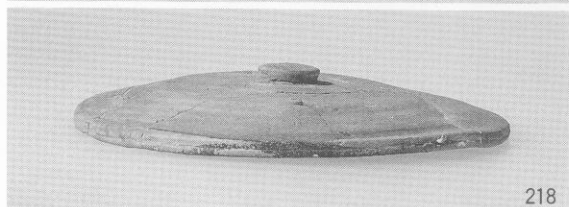
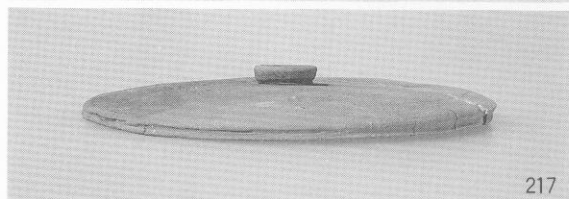
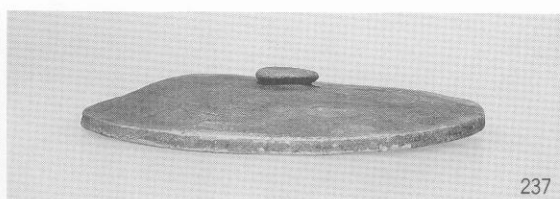
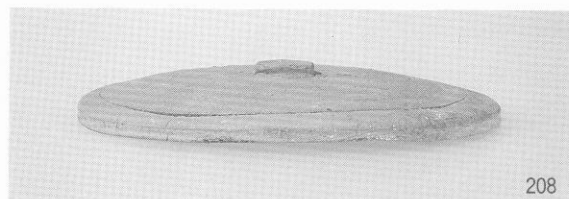
B-2 地区



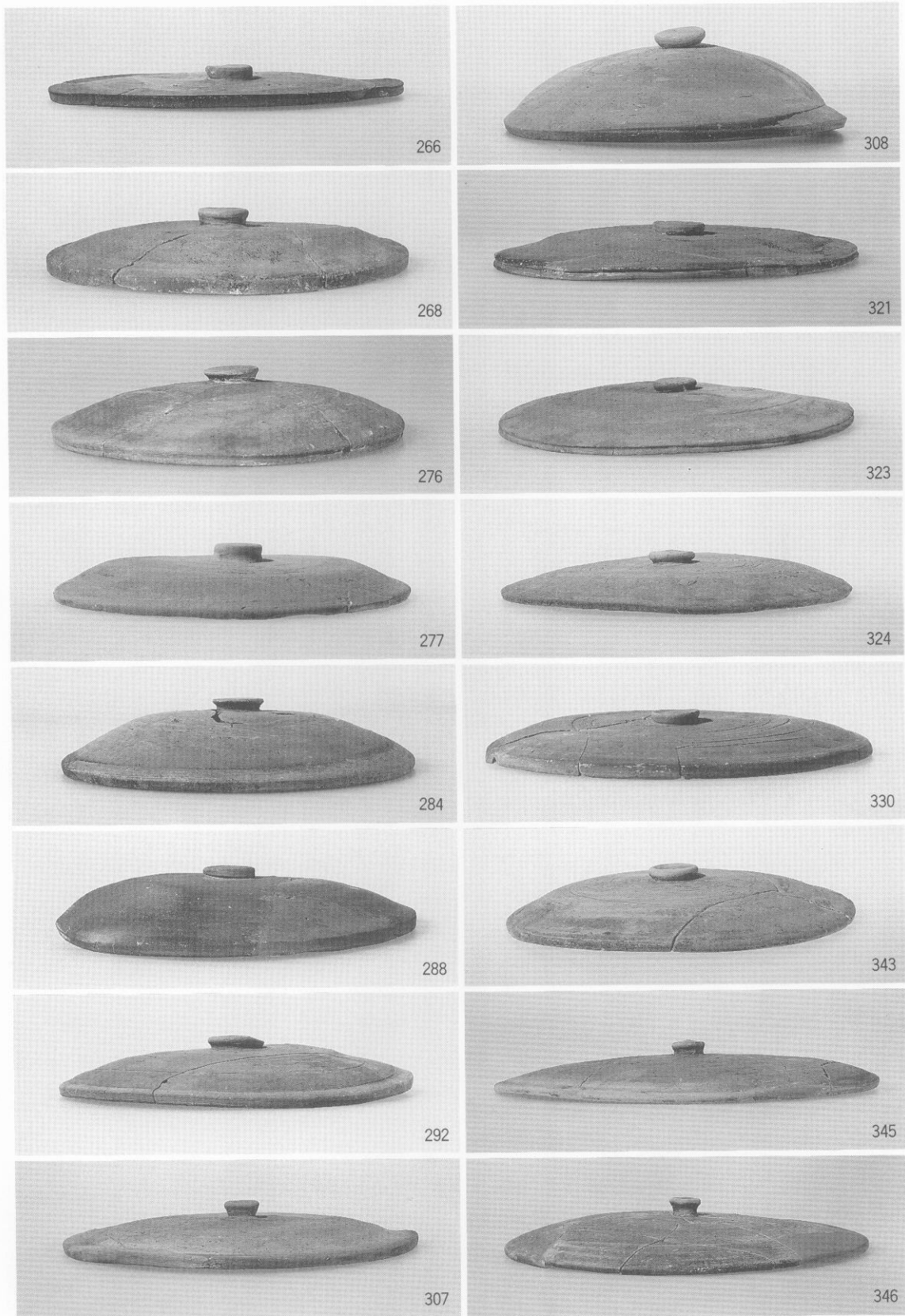


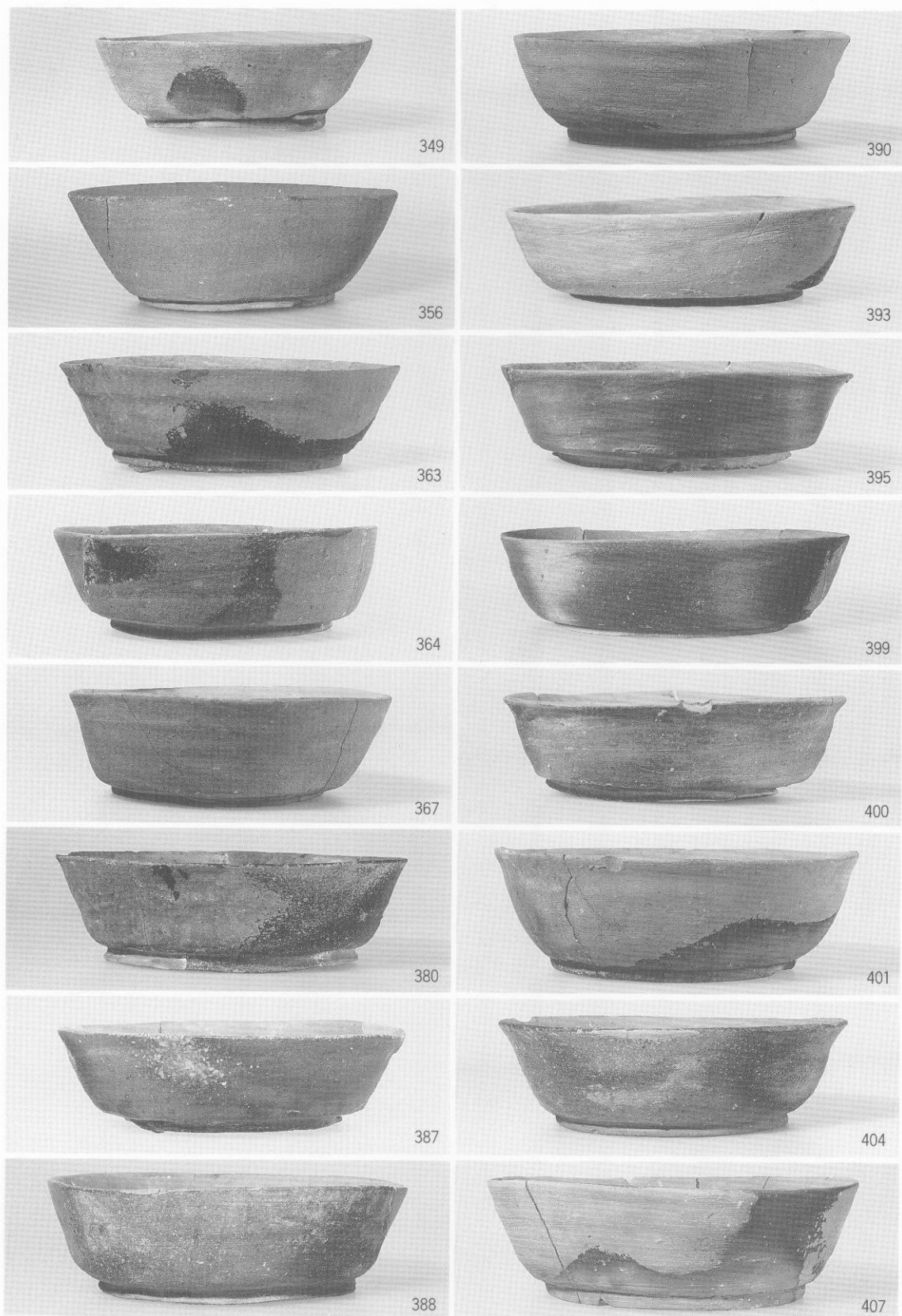
B-2 地区



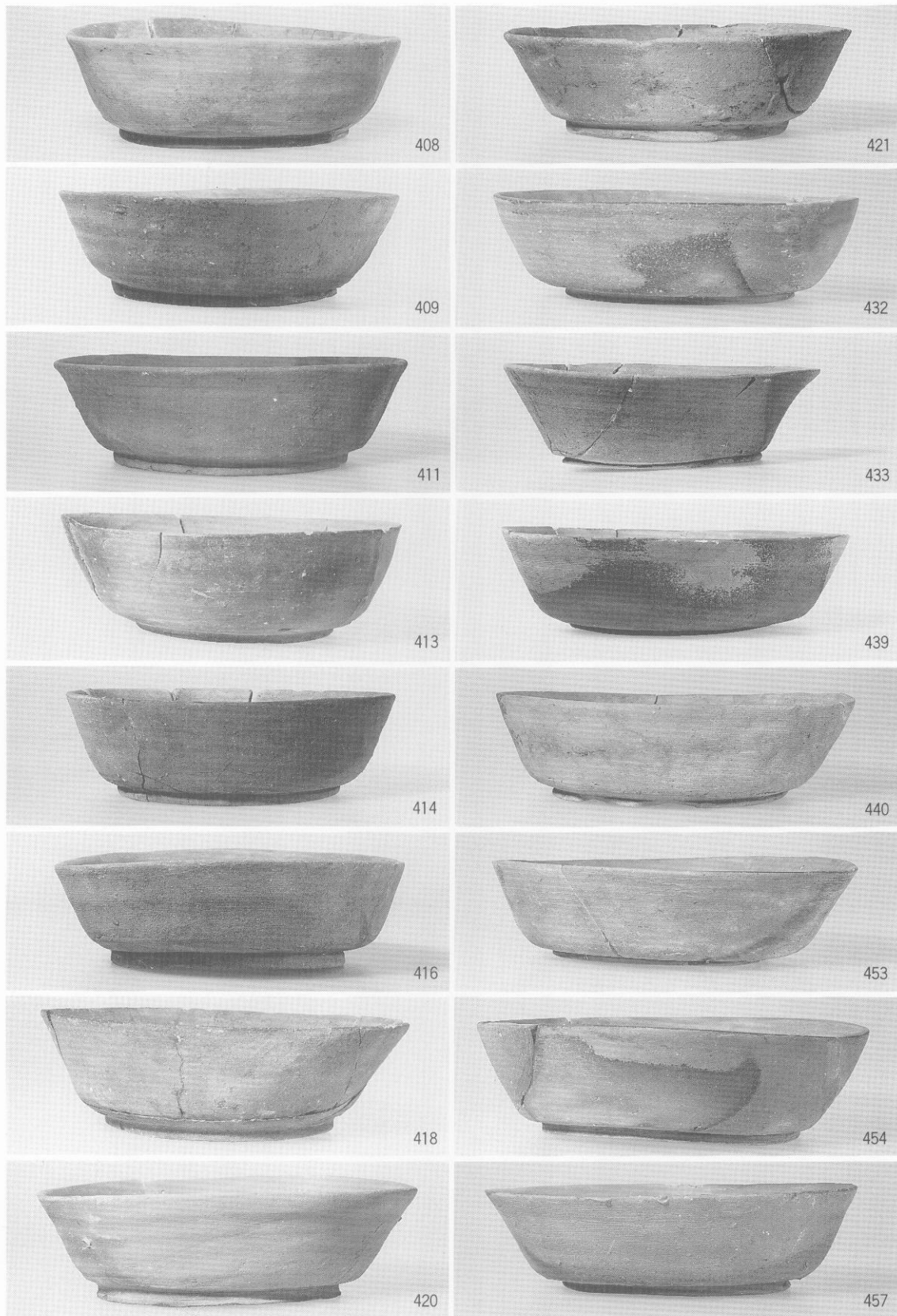


B-2地区



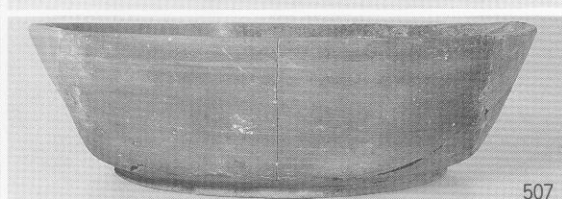
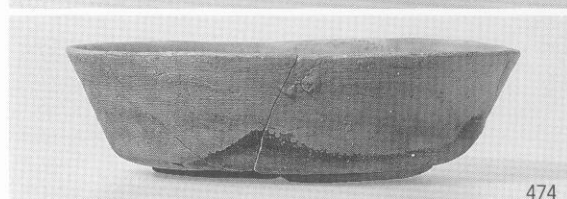
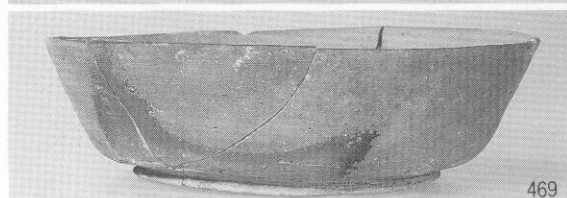
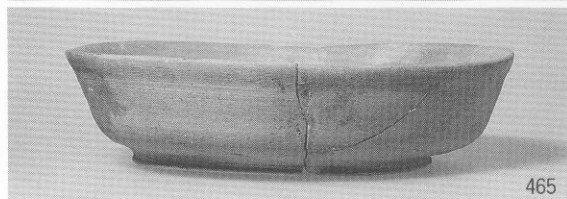
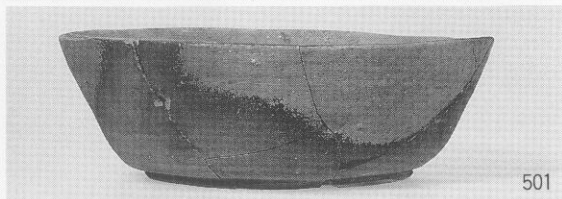
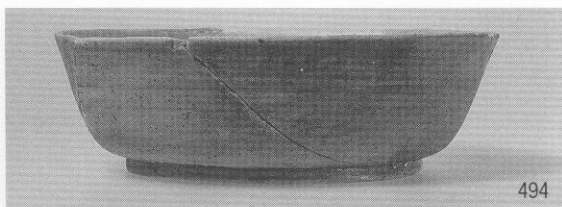


B-2地区

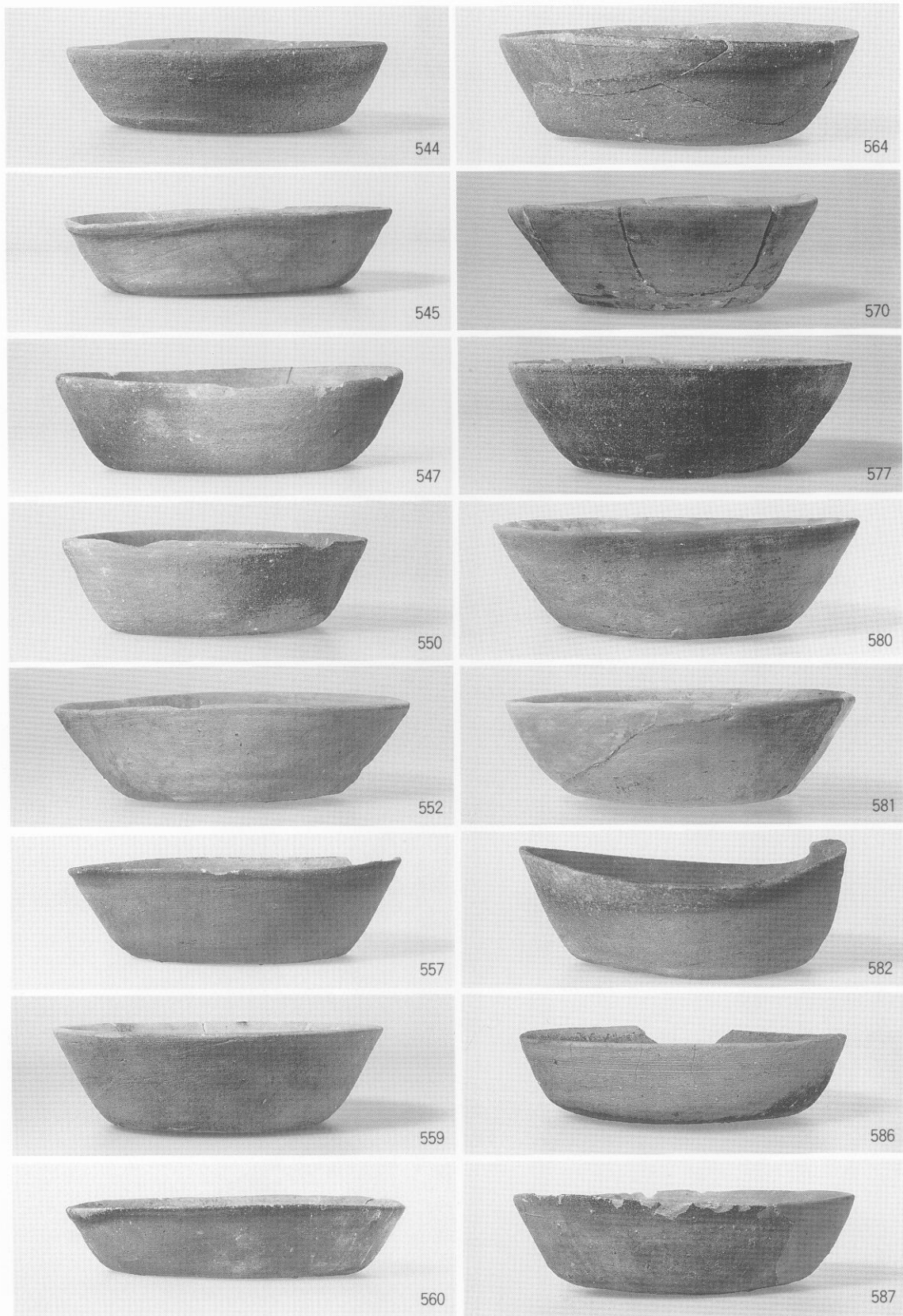


B-2地区出土土器 10

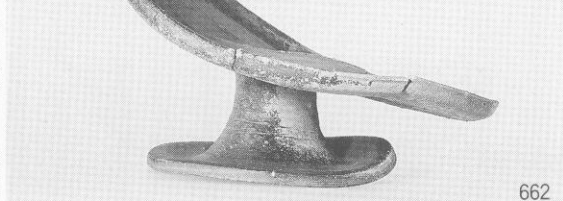
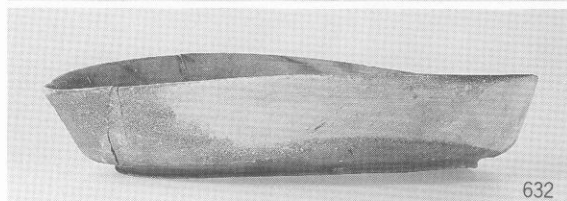
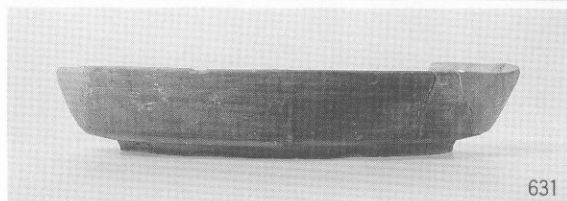
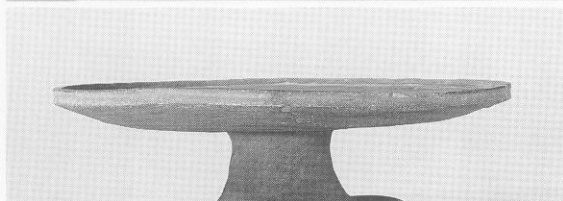
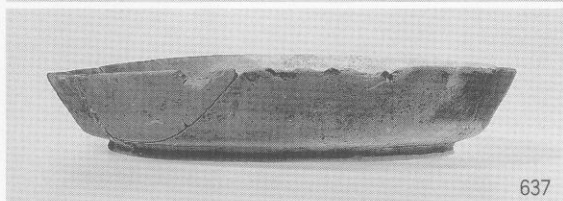
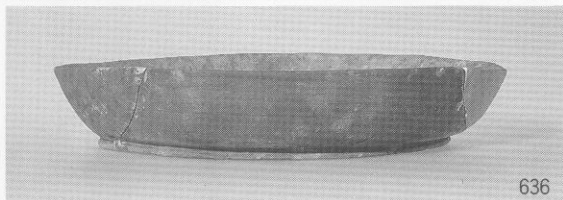
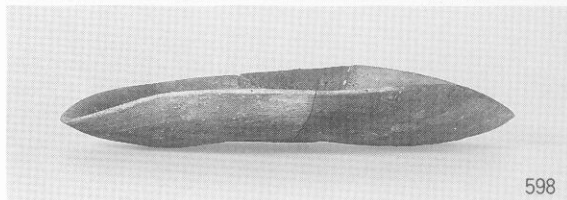
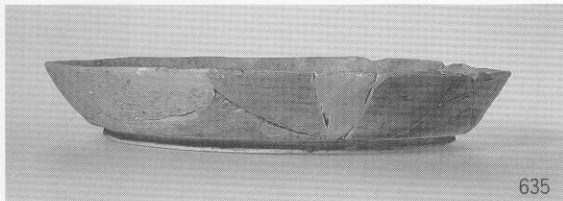
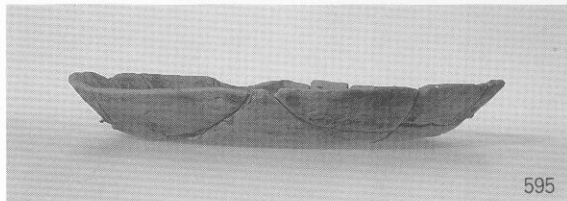
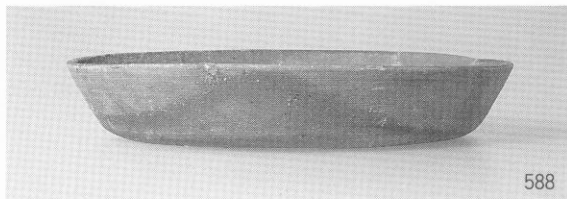




B-2地区



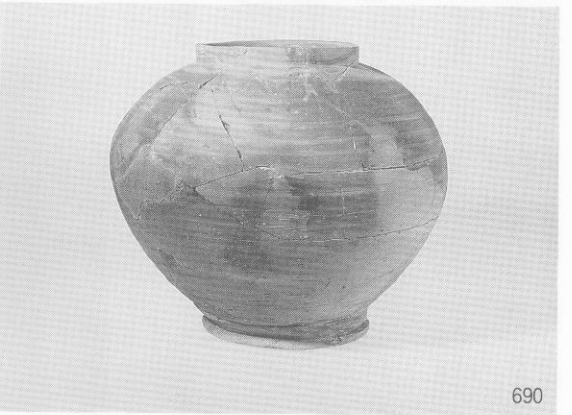
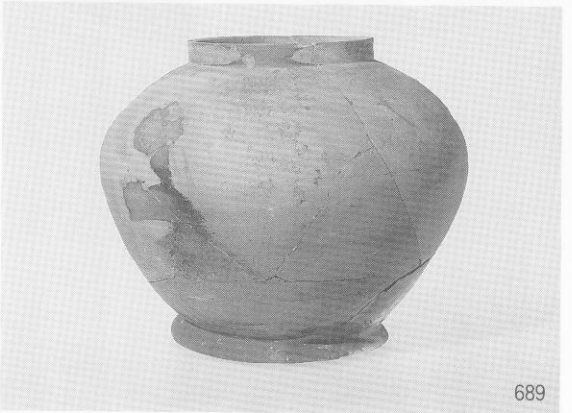
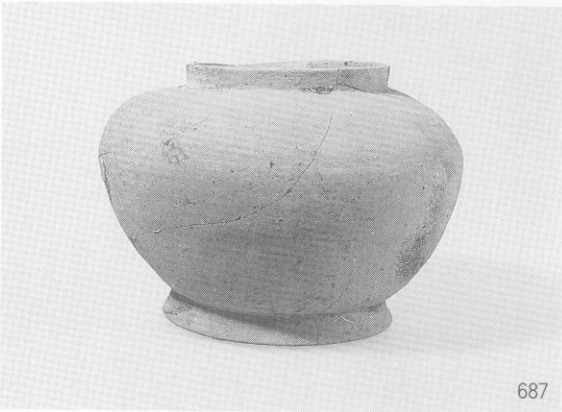
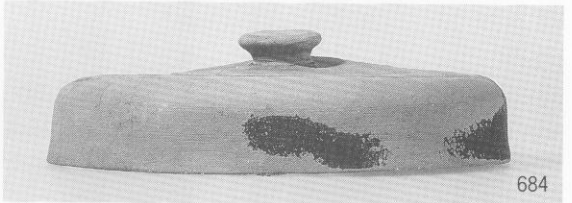
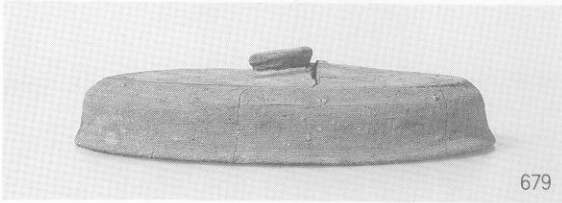
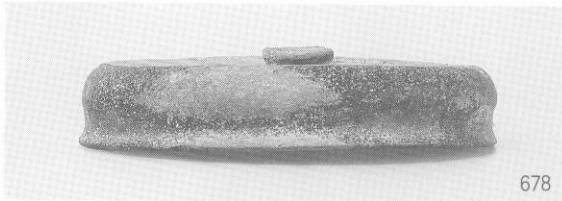
B-2地区出土土器 12



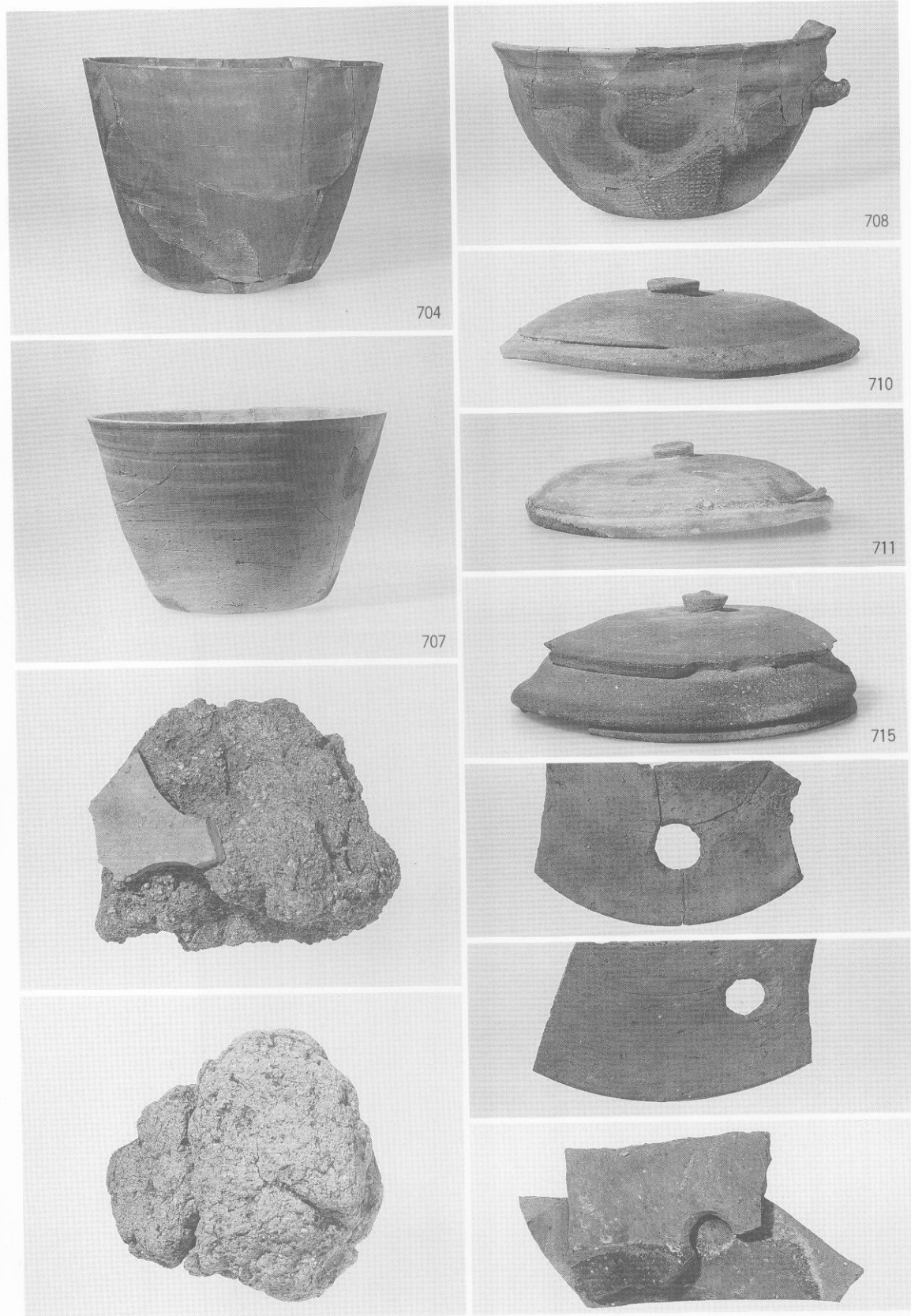
B-2 地区



B-2 地区出土土器 14



B-2地区



B-2地区出土土器 16



1

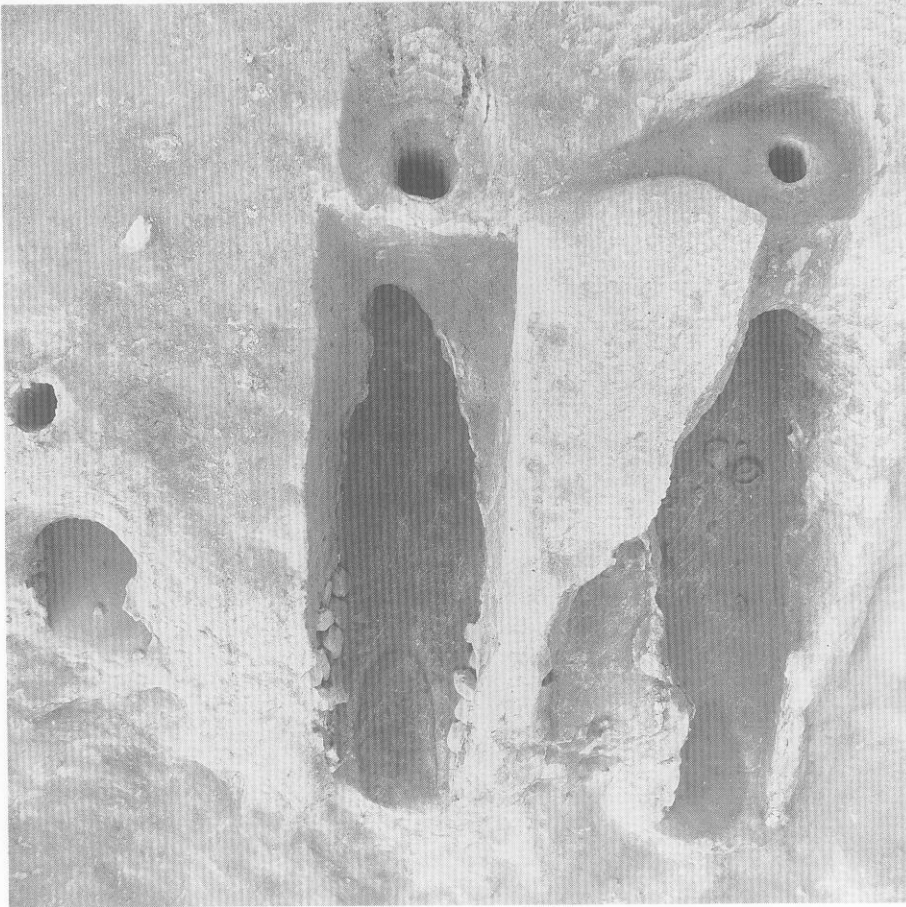


2. 1. C地区伐採後全景(南から)  
C地区全景(空中写真)

2



1



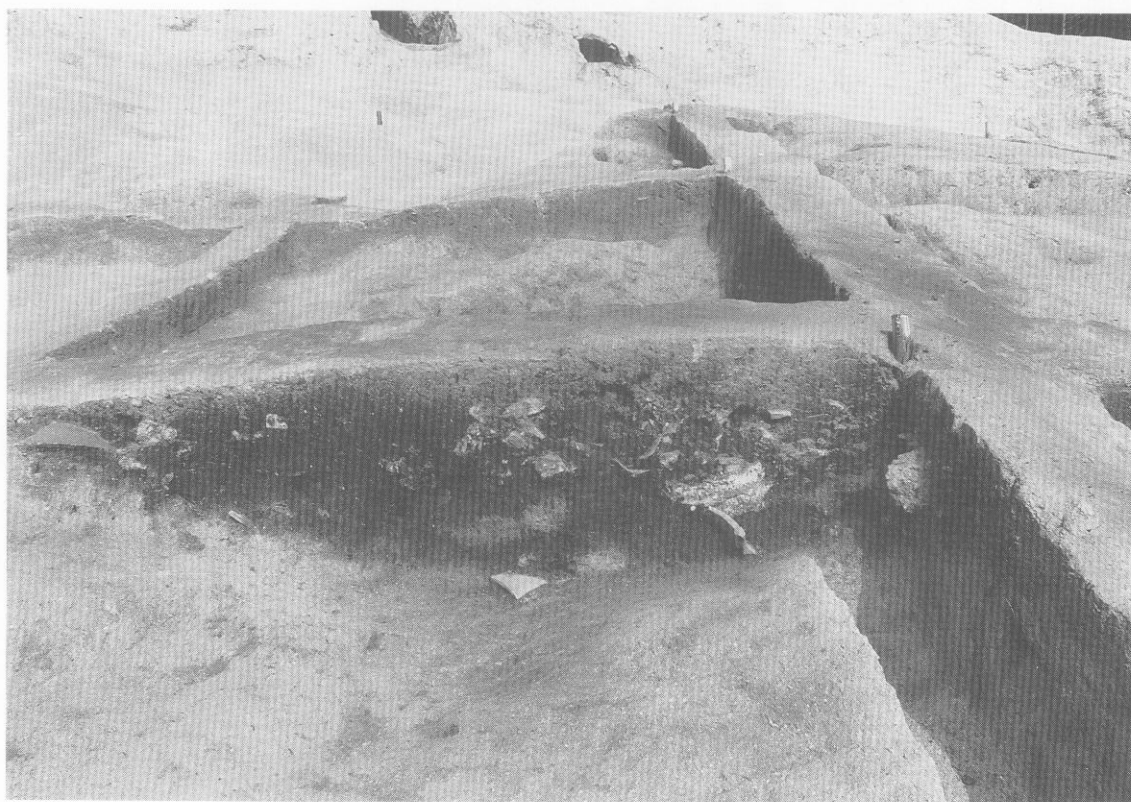
2. 1.  
 34 ~ 34  
 37号窯跡 (空中写真)

2



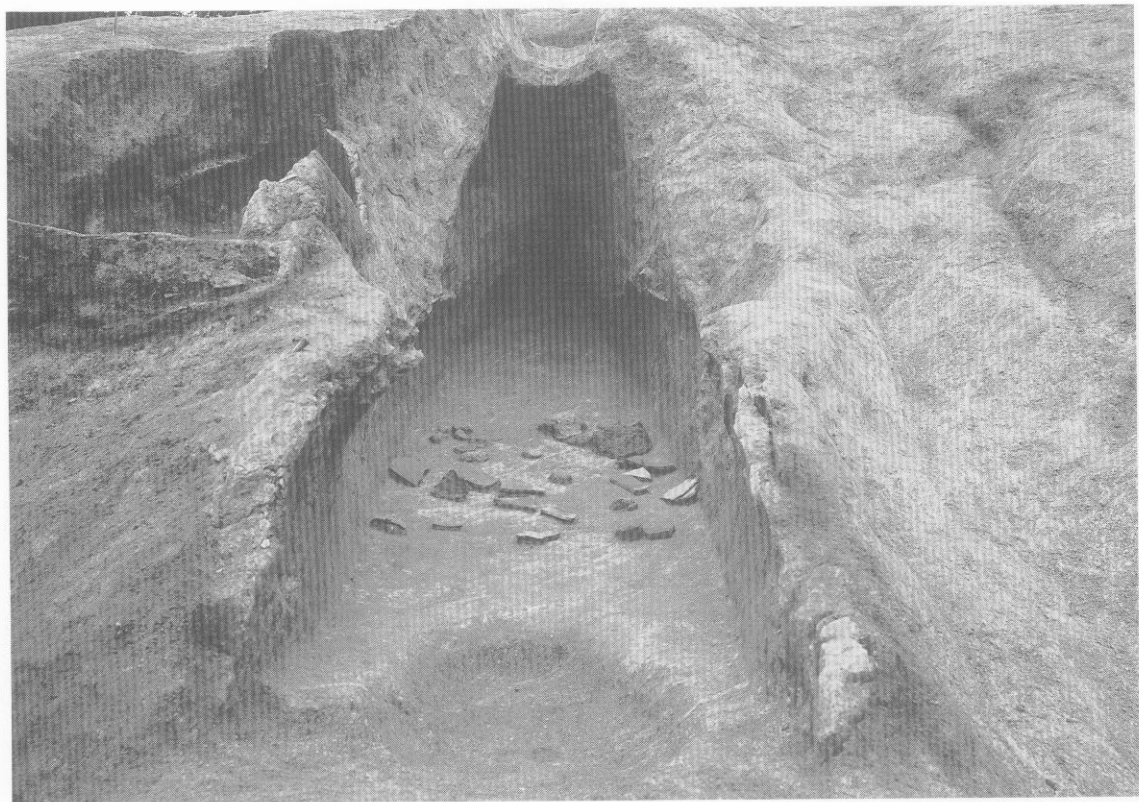


1. 灰原調査状態

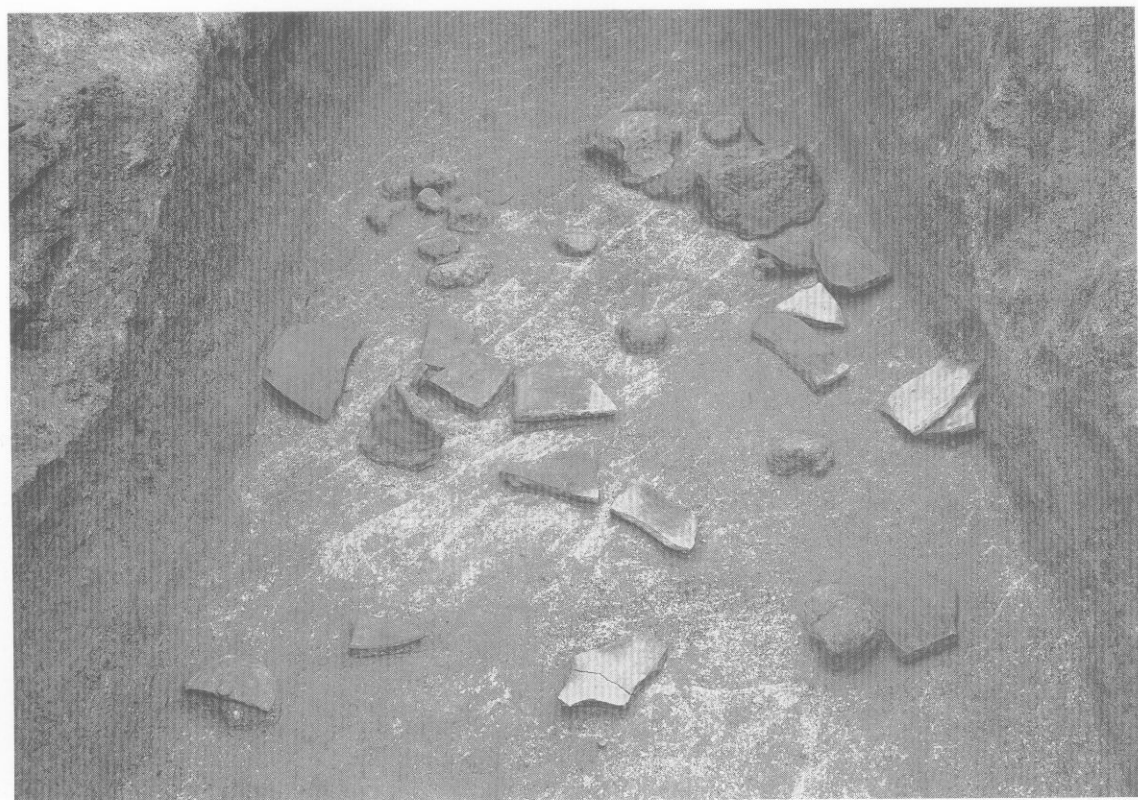


2. 灰原堆積状態

B-2地区



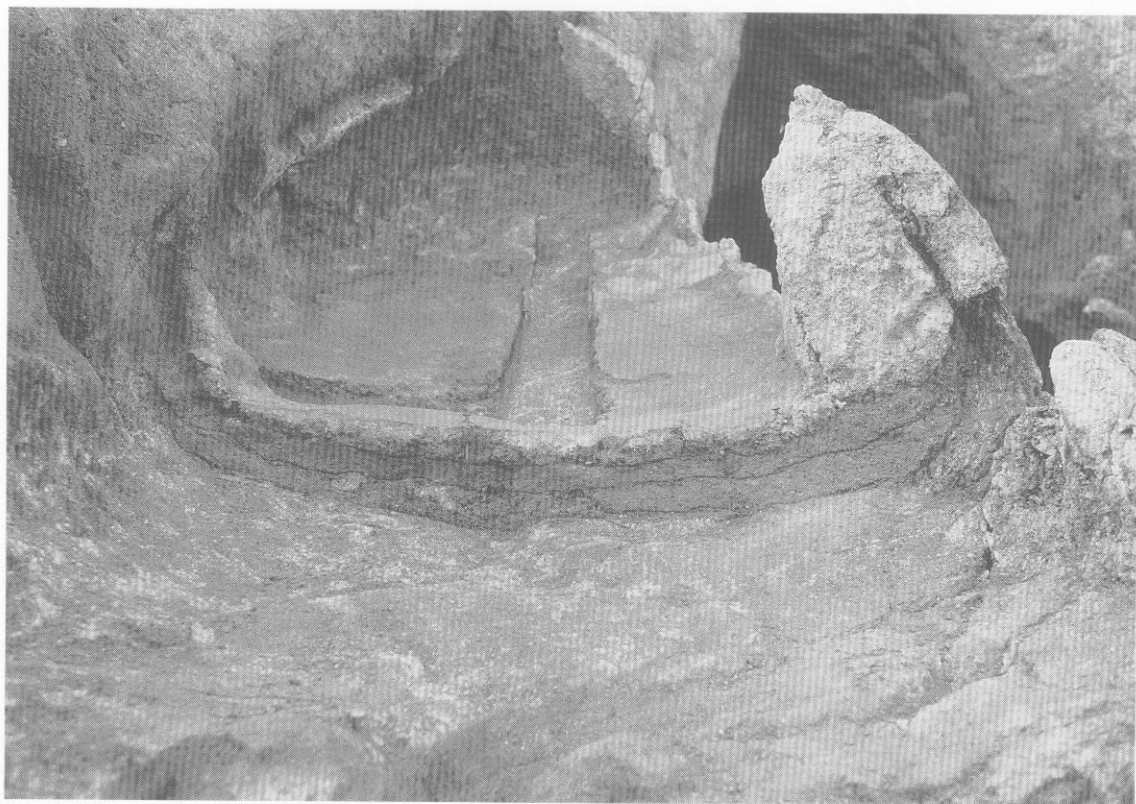
1. 34号窯跡



2. 34号窯床面遺物出土状態

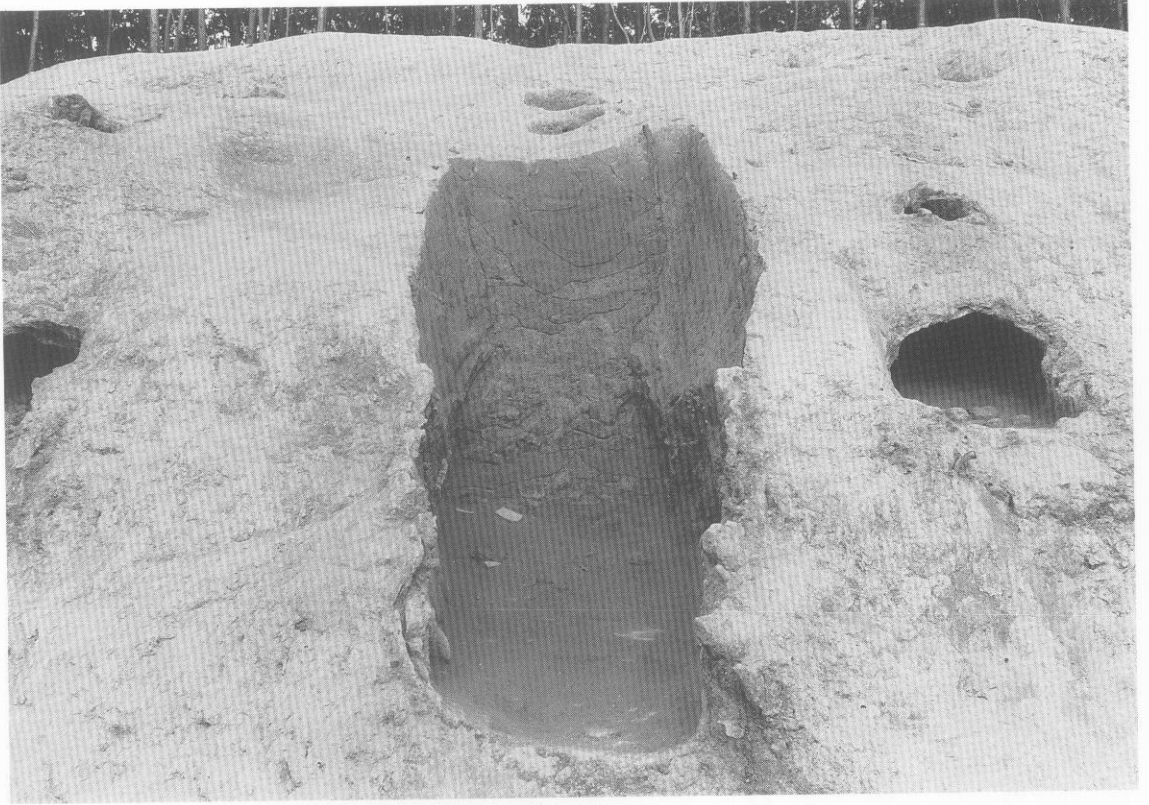


1. 35号窑迹



2. 35号窑燃烧部断面

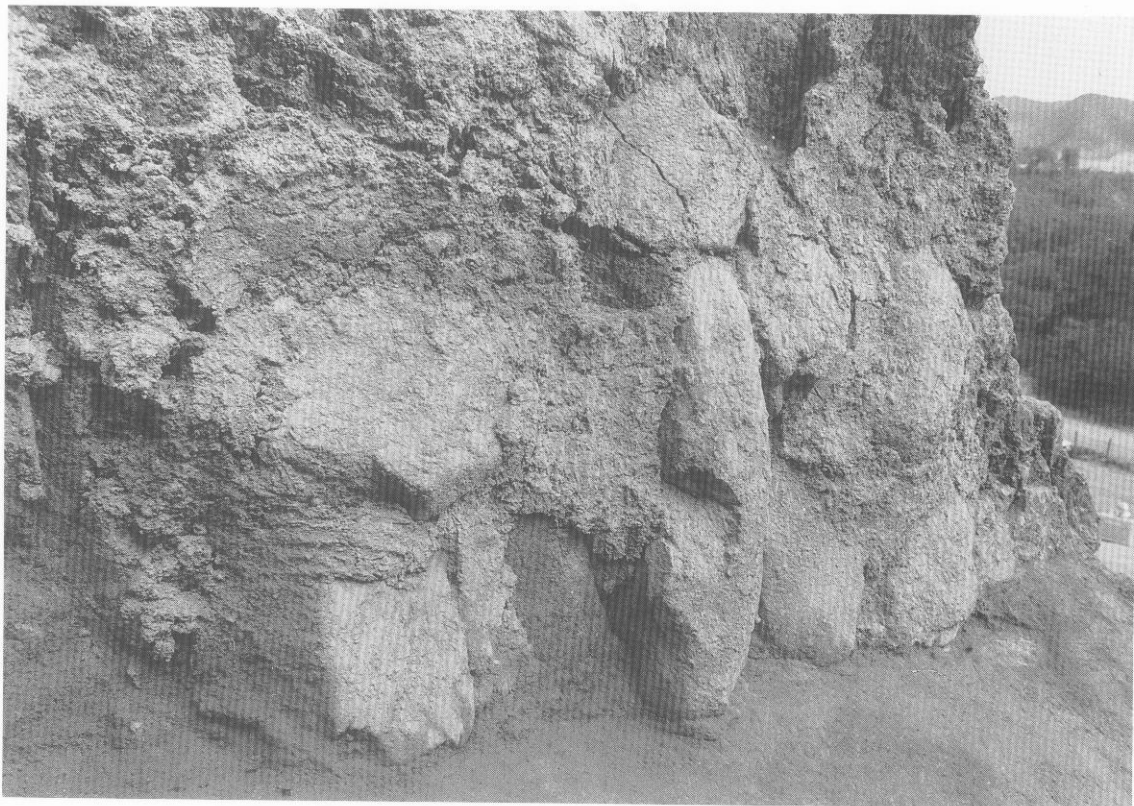
C地区



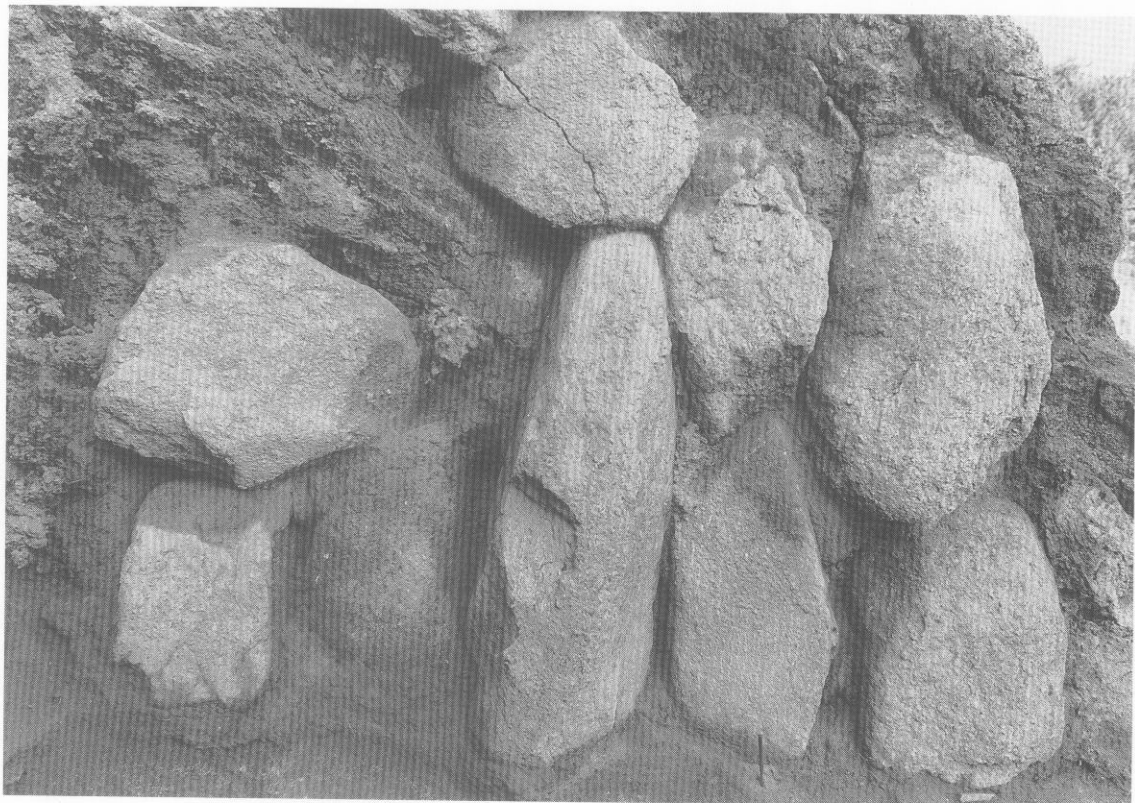
1. 36号窯 横断面



2. 36号窯跡

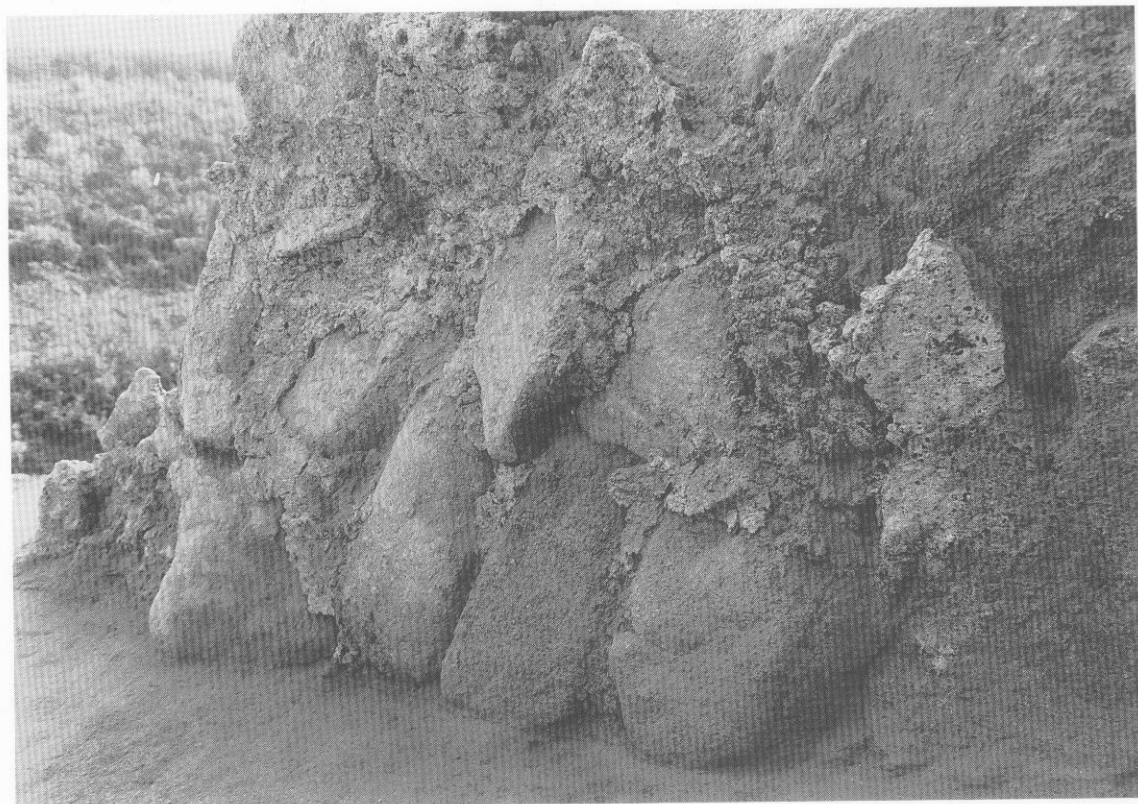


1. 36号窯 燃焼部右側石組 1



2. 36号窯 燃焼部右側石組 2

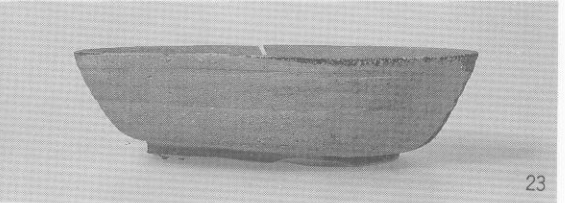
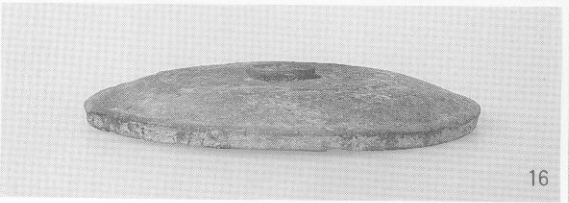
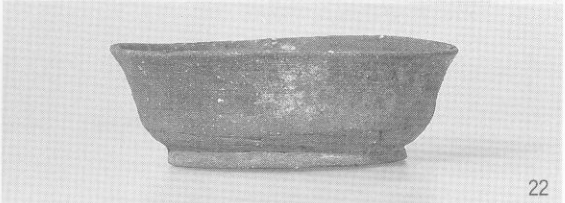
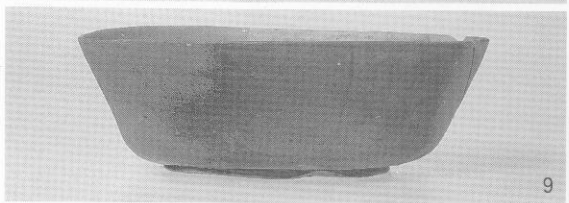
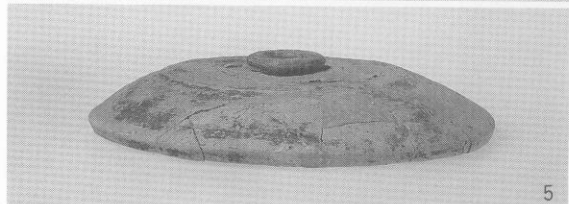
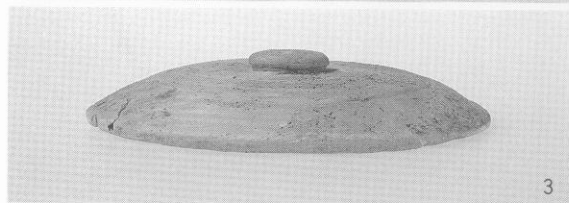
C地区



1. 36号窯 燃烧部左側石組 1

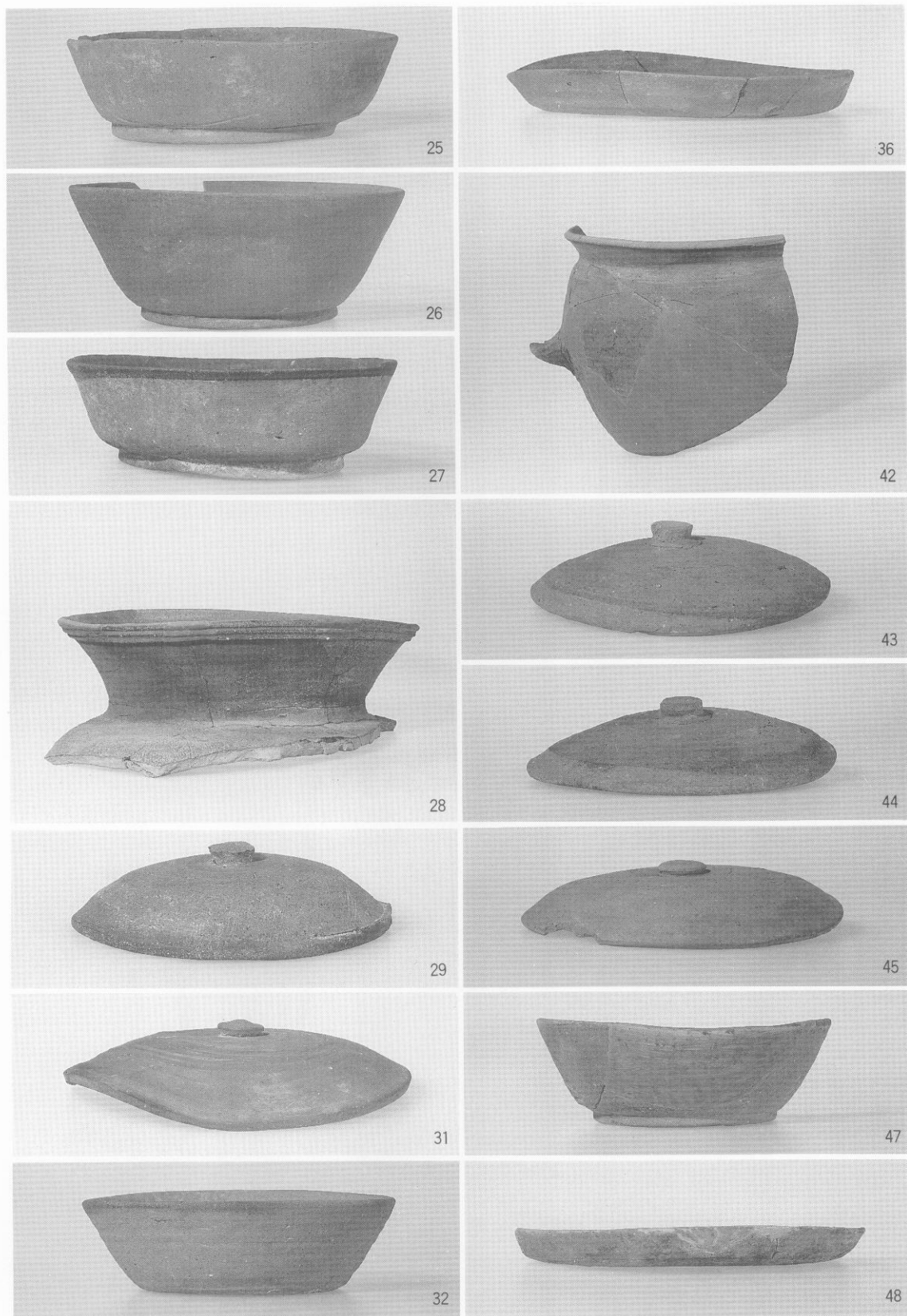


2. 36号窯 燃烧部左側石組 2



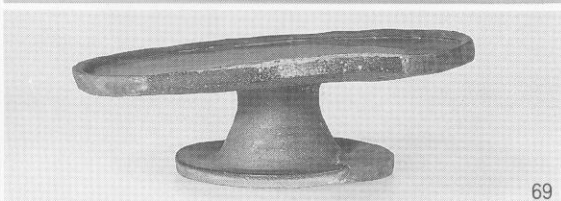
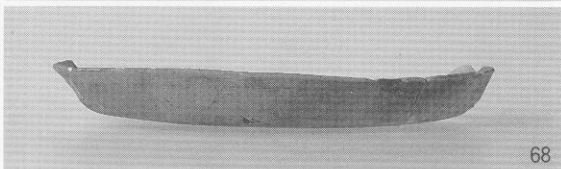
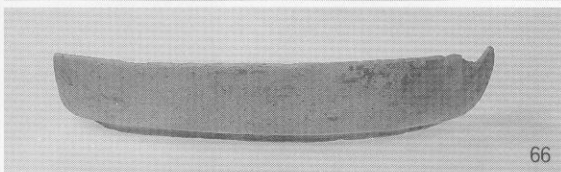
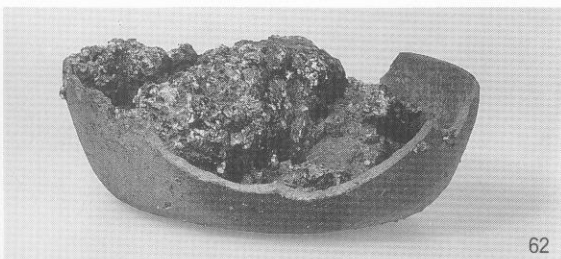
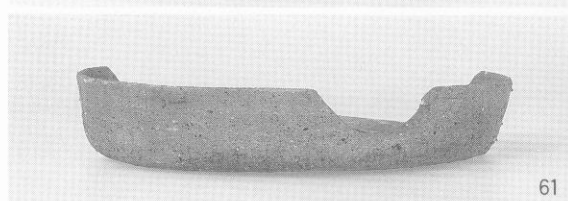
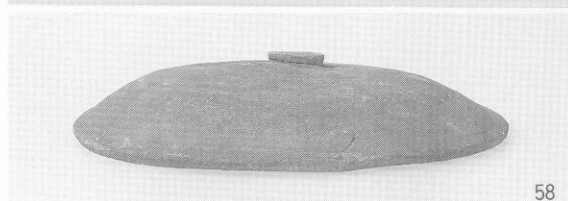
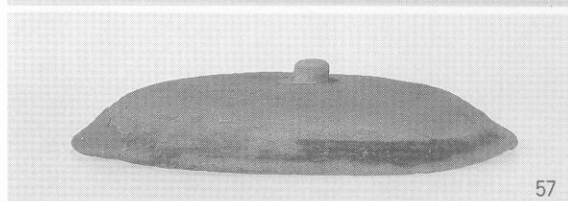
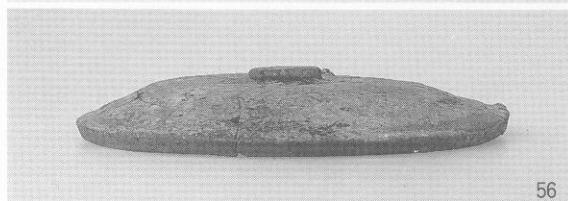
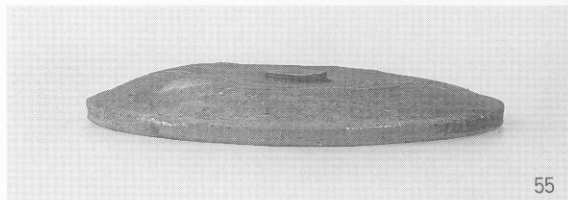
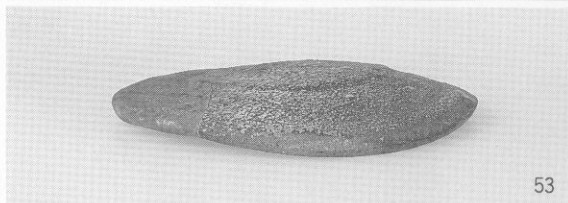
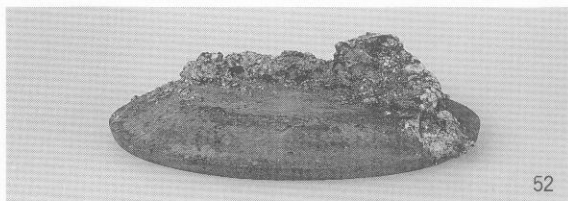
C地区出土土器 1

C 地区

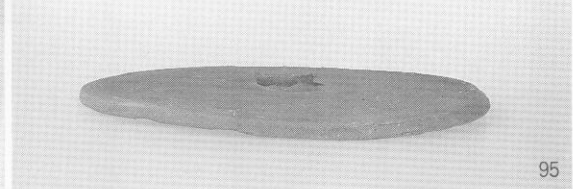
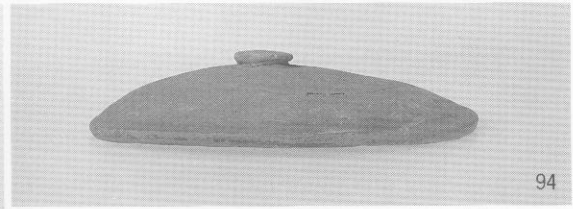
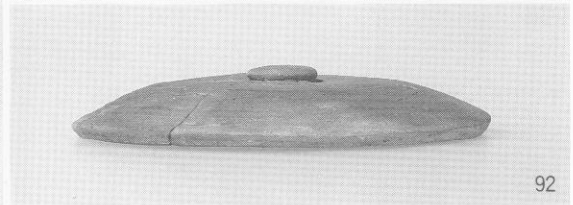
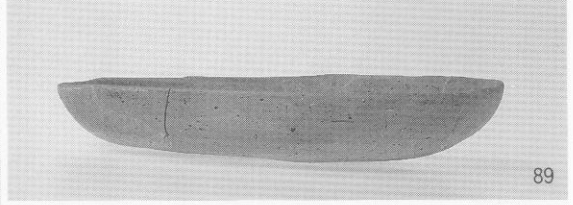


C地区出土土器 2

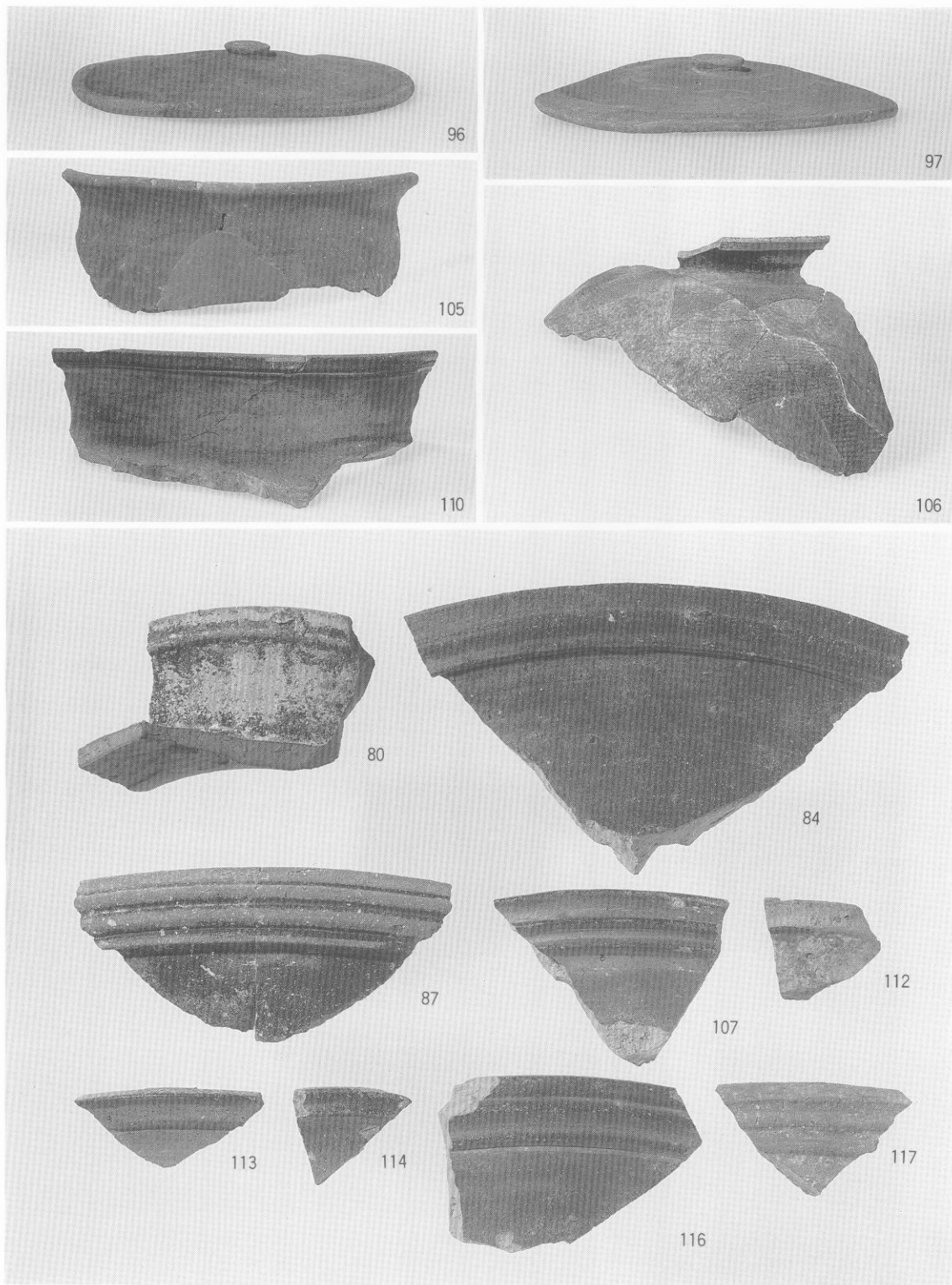




C 地区



C地区出土土器 4



C地区出土土器 5

G地区



1. G地区伐採後全景（南西から）



2. G地区裾部確認調査全景（西から）



1. G地区調査前全景 (南西から)



2. G地区灰原検出状態 (南から)

G地区



1. 10号窯跡



2. 10号窯 置台検出状態



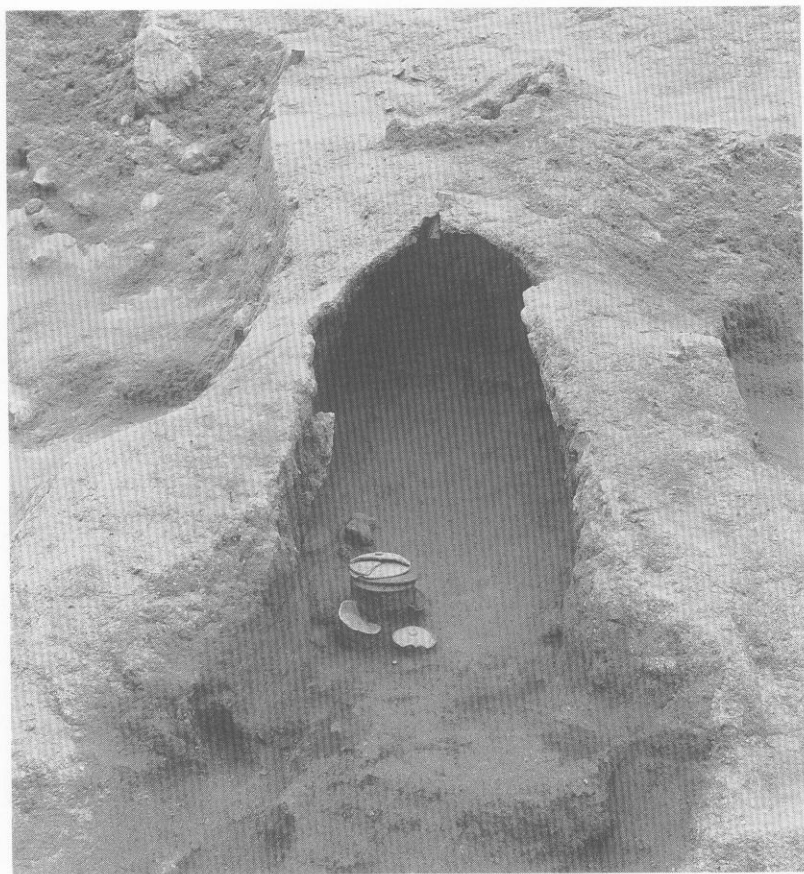
1. G地区発掘後全景



2. 11号・12号窯跡

G地区

1.  
11号窯跡



2. 11号窯 須惠器出土状態





1. 11号窑迹

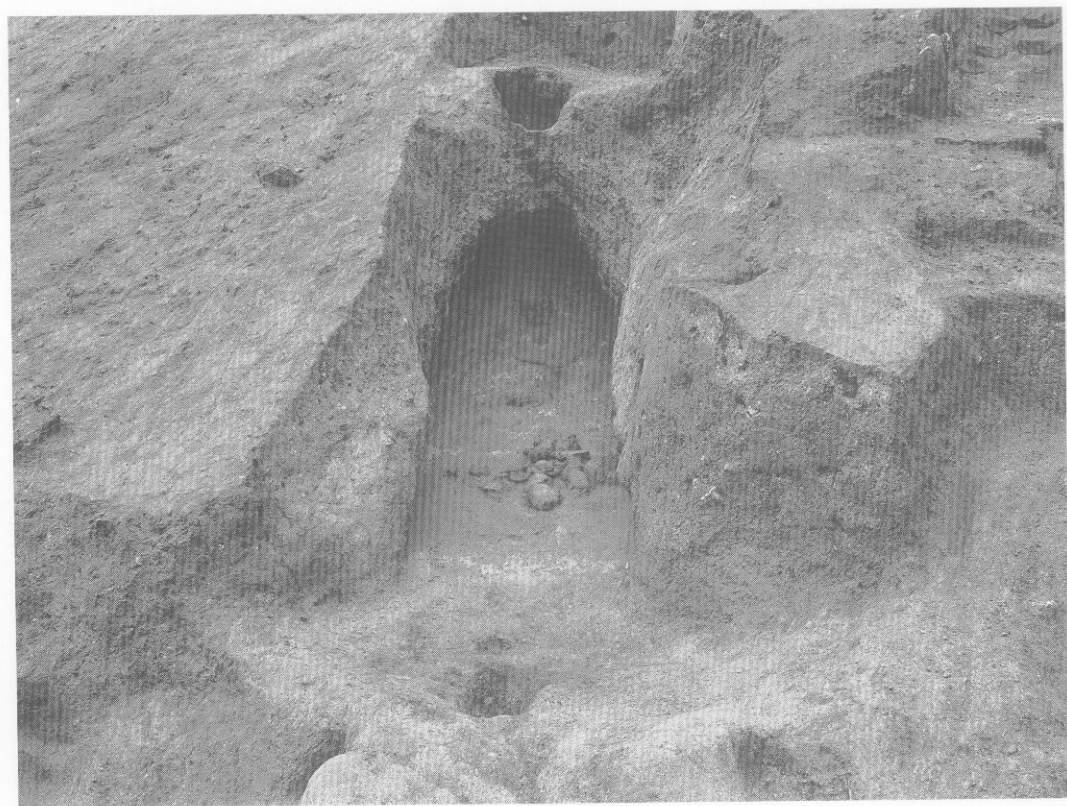


2. 12号窑迹

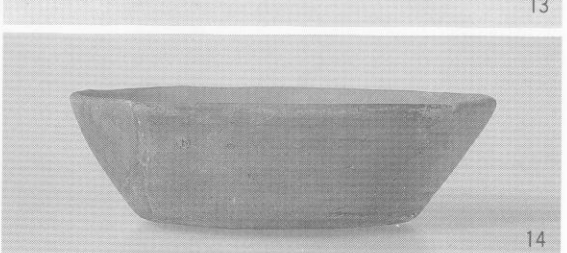
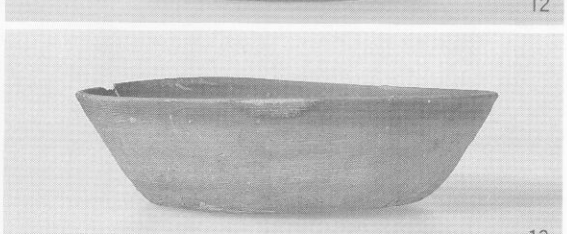
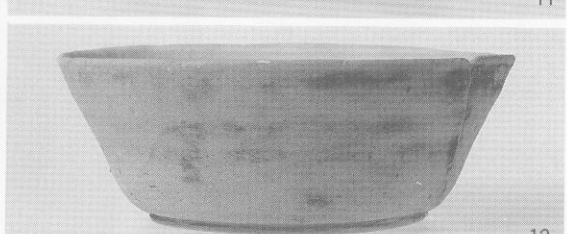
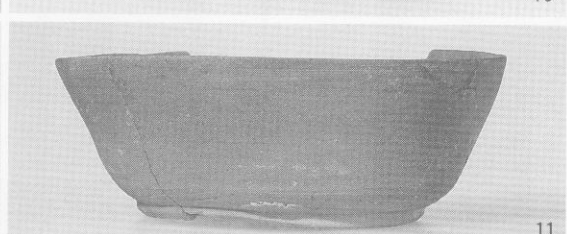
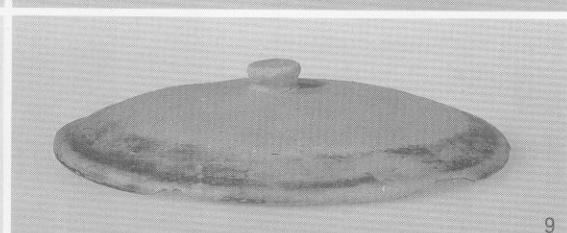
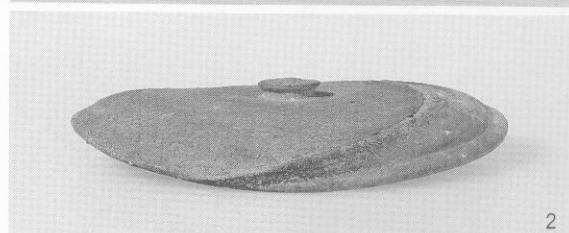
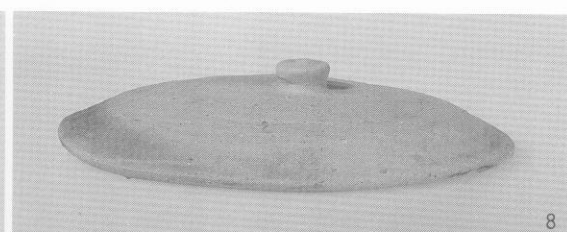
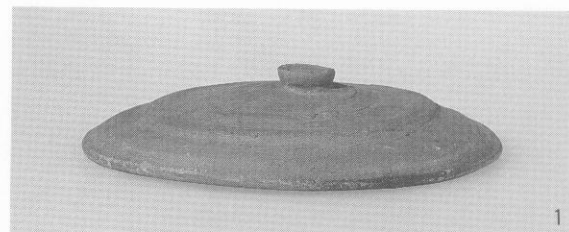
G 地区



1. 12号窯 置台・須恵器出土状態

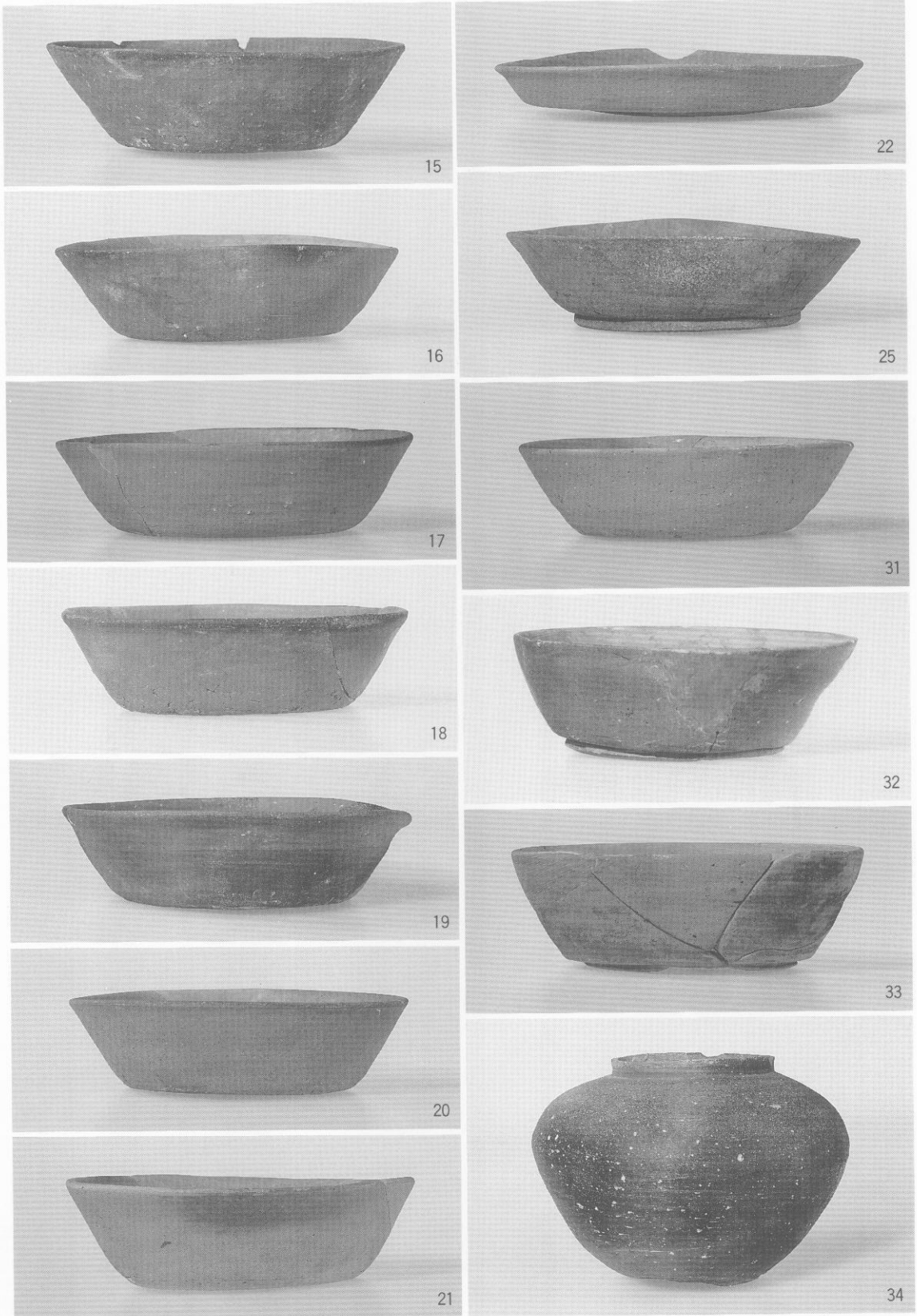


2. 13号窯跡

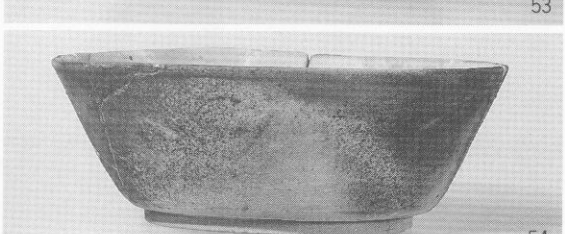
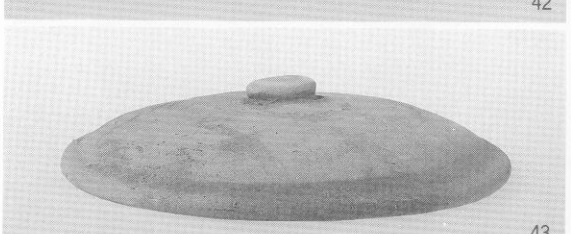
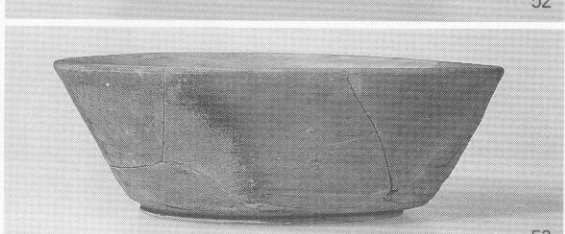
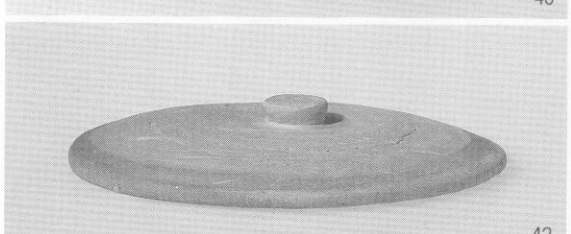
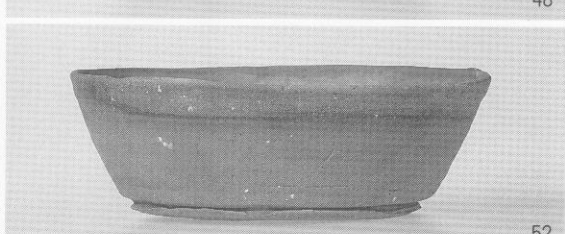
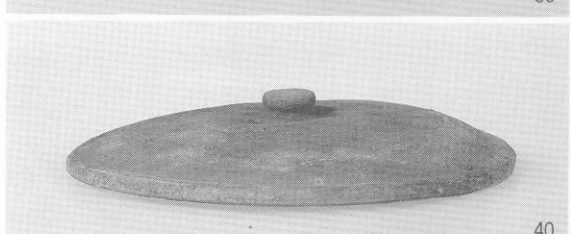
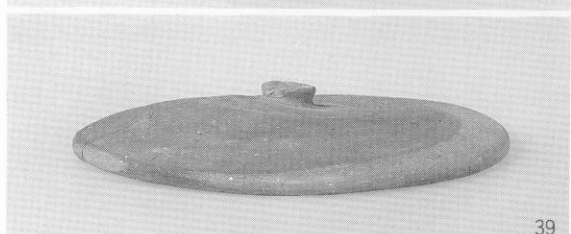
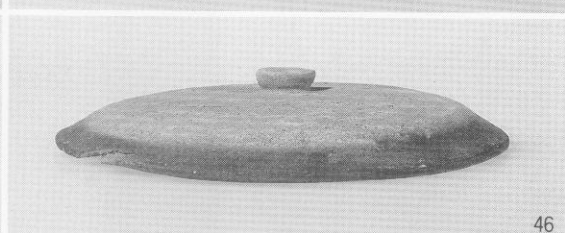
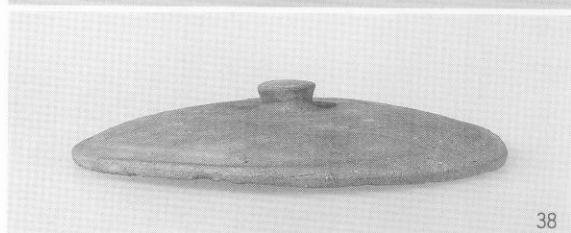
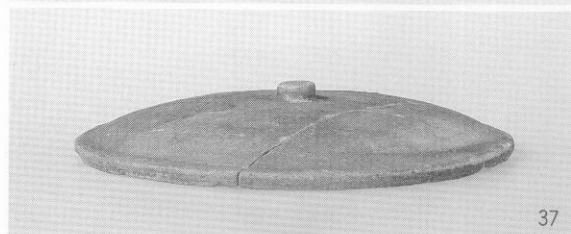
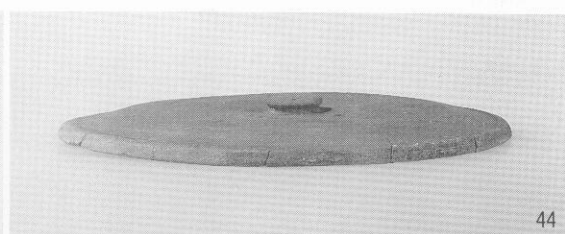


G地区出土土器 1

G 地区



G地区出土土器 2



J地区



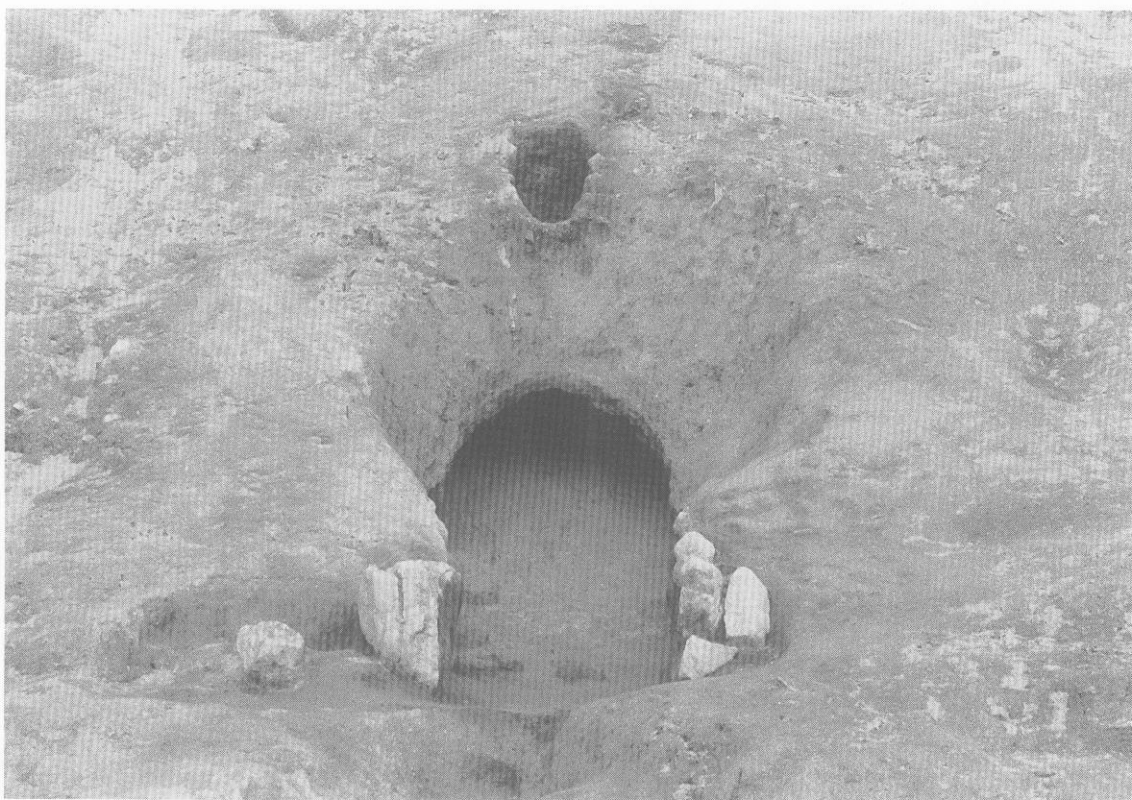
1. J地区調査前全景（西から）



2. J地区50号窯検出状態（西から）

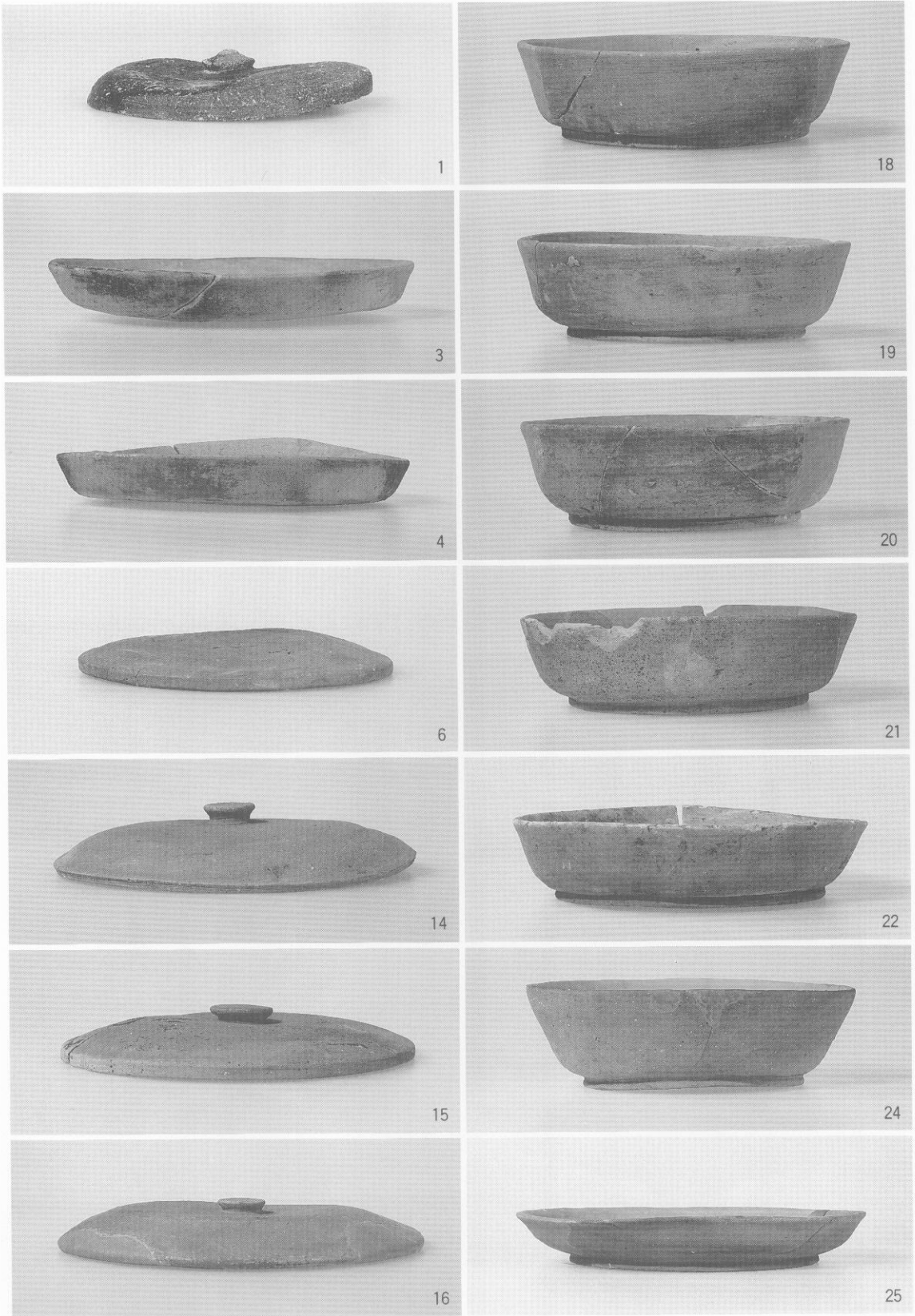


1. J地区50号窯跡 灰原除去後（西から）



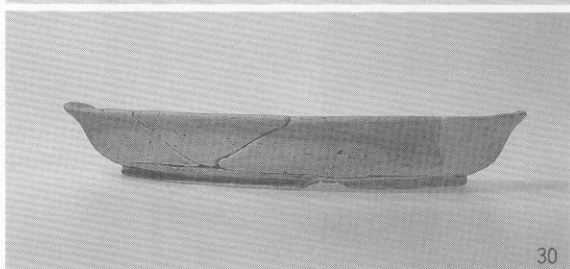
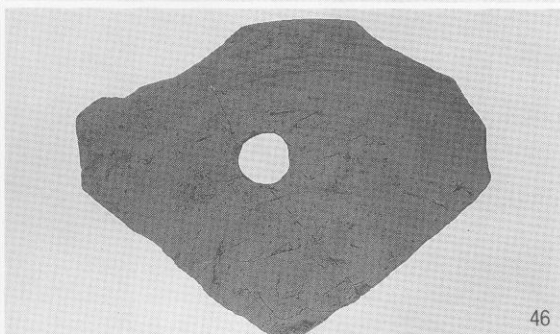
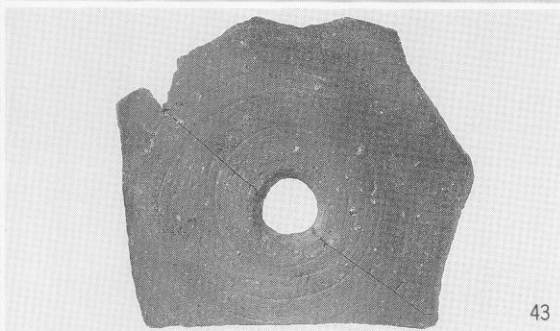
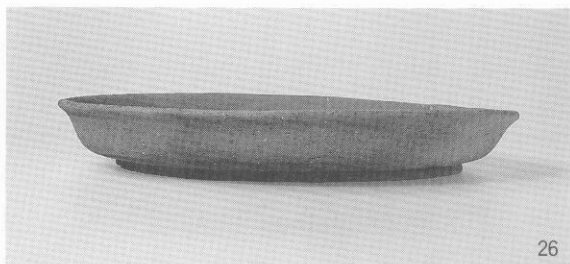
2. J地区50号窯跡

J 地区



J 地区出土土器 1





K 地区



1. K地区発掘前全景（南西から）



2. K地区発掘後全景（南から）



1. K地区灰原検出状態



2. 灰原縦断土層

K 地区



1.  
14号窑跡檢出狀態



2. 14号窑跡



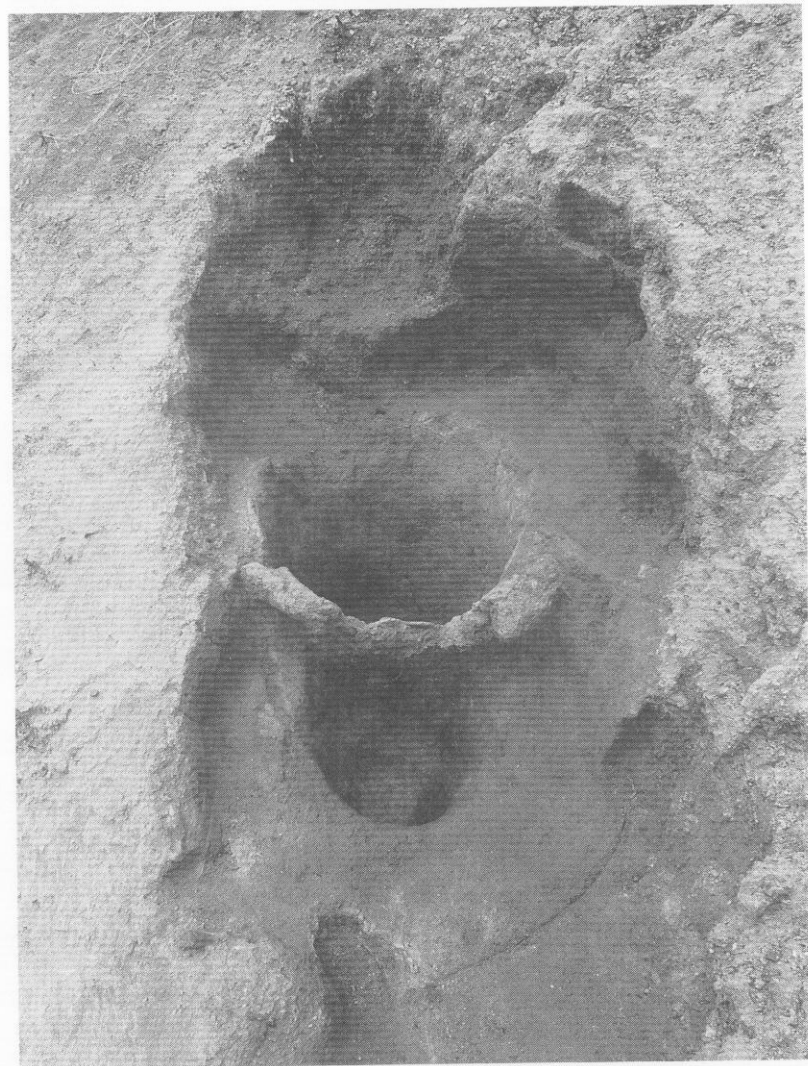
1. 14号窯 煙道部



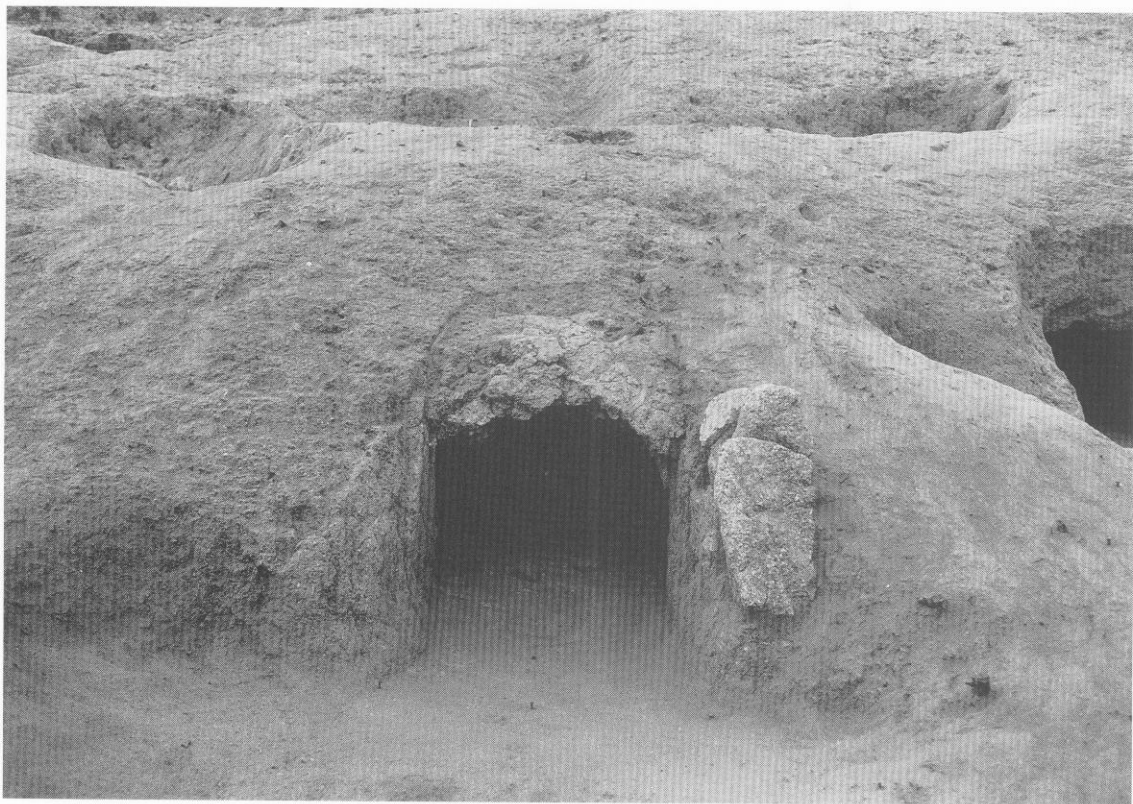
2. 14号窯 煙道部須恵器出土状態



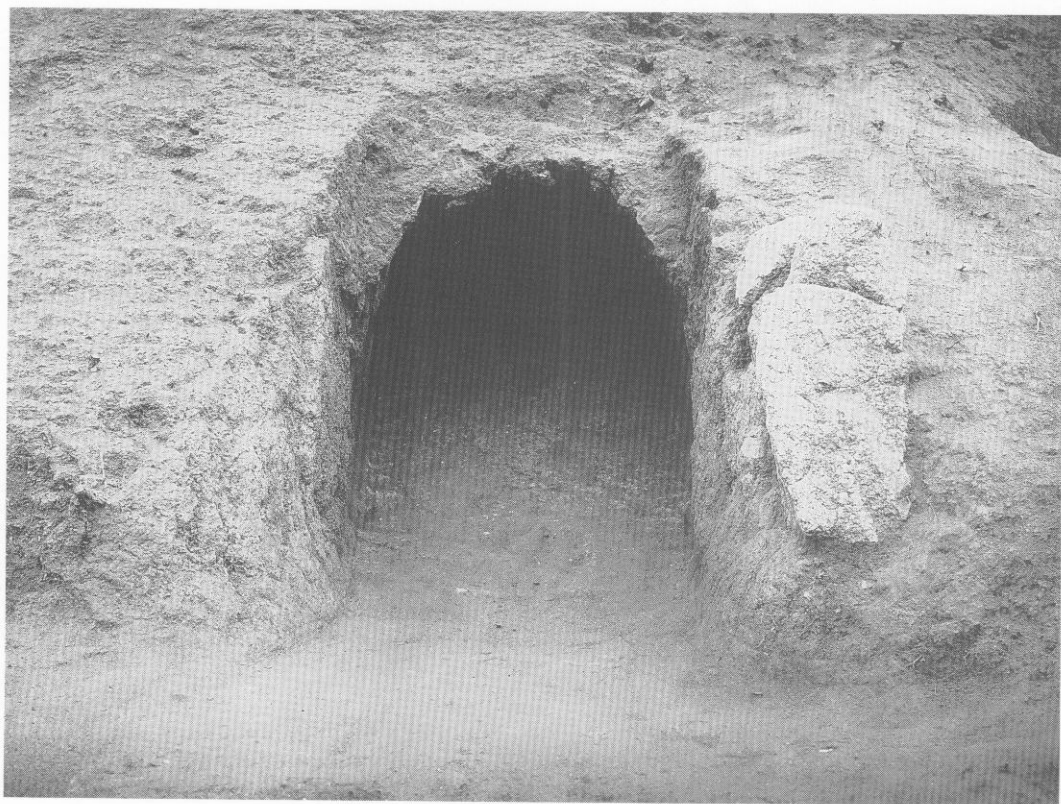
1. 14号窯 B 煙道部内の焼台



2. 14号窯 B 煙道部検出状態



1. 15号窑迹



2. 15号窑迹焚口

K 地区



1. 16号窯跡

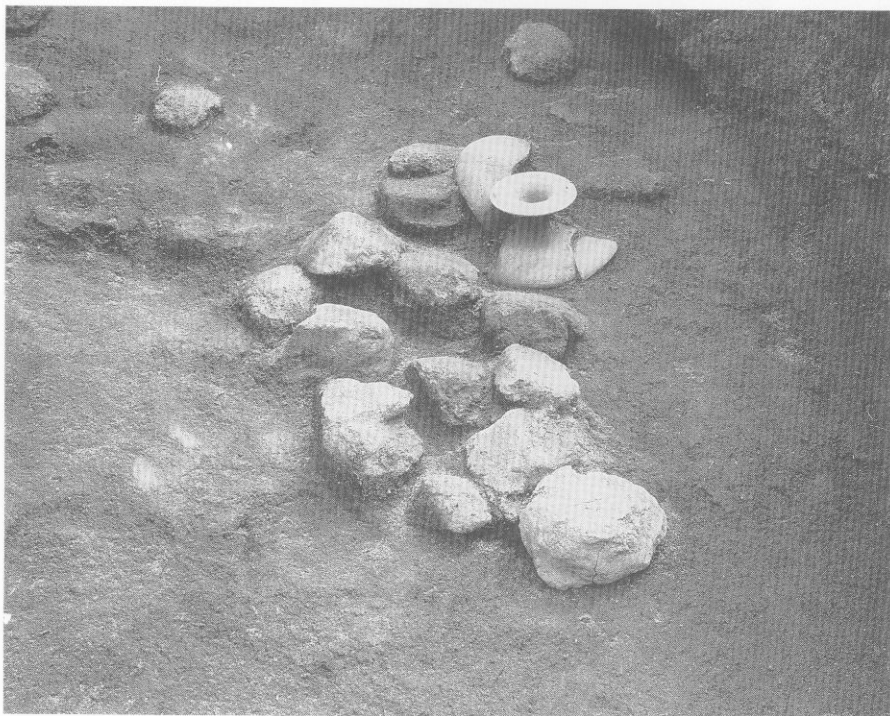


2.  
16号窯跡煙道部





1. 17号窯跡

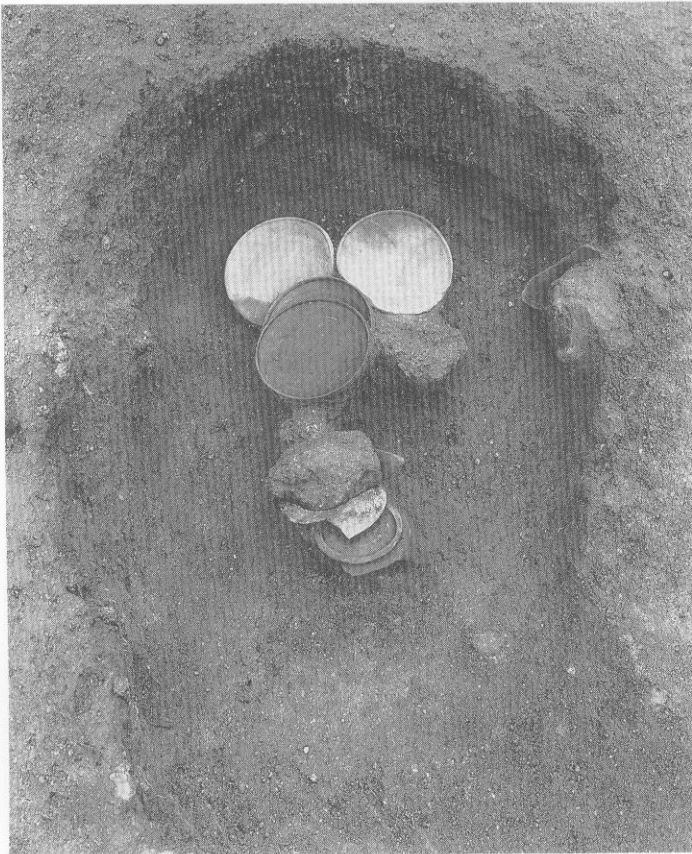


2. 17号窯跡 焼台・須恵器出土状態

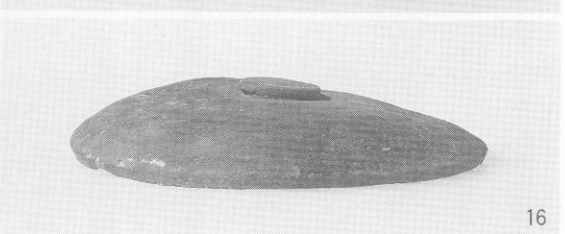
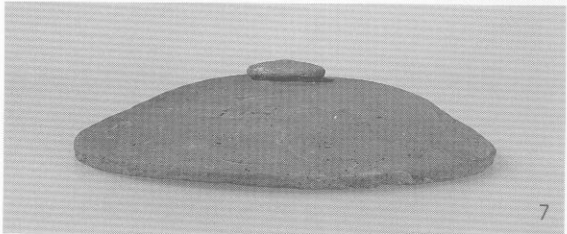
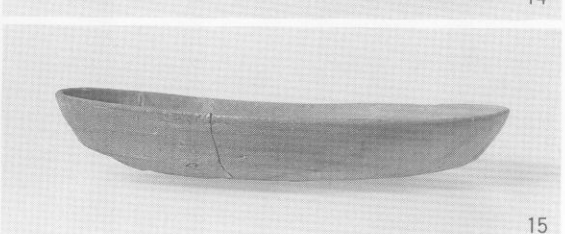
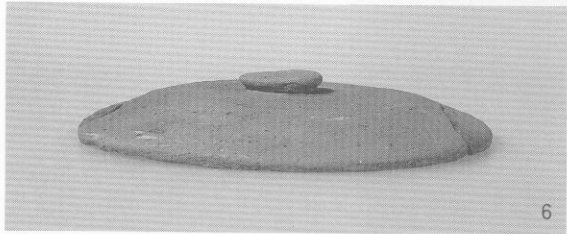
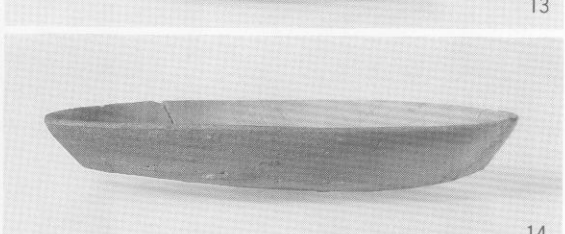
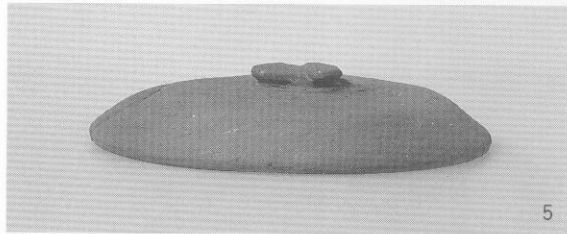
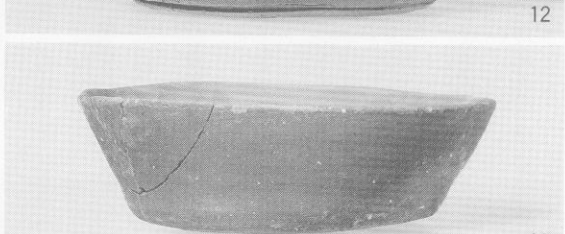
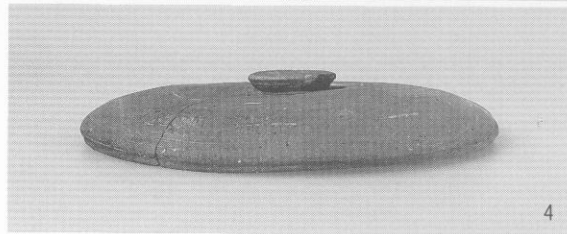
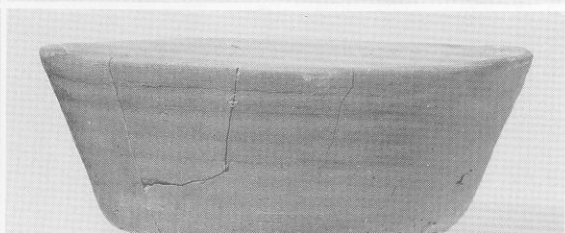
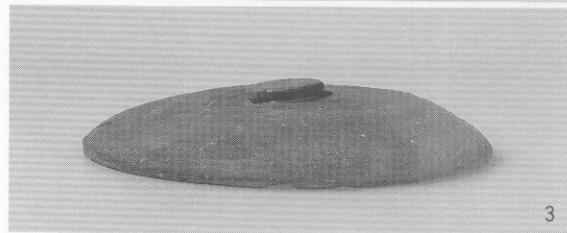
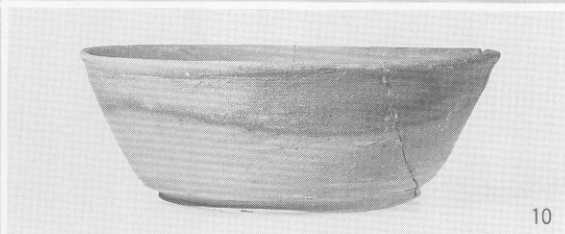
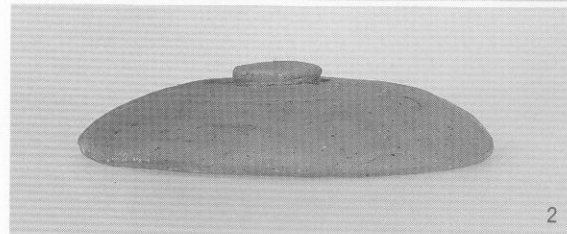
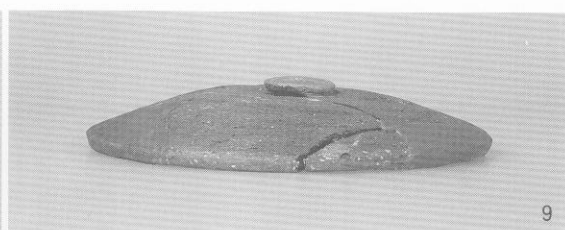
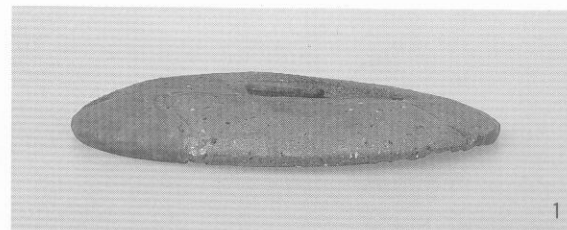
K 地区



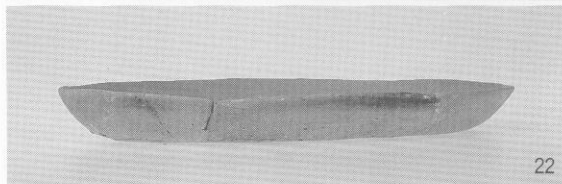
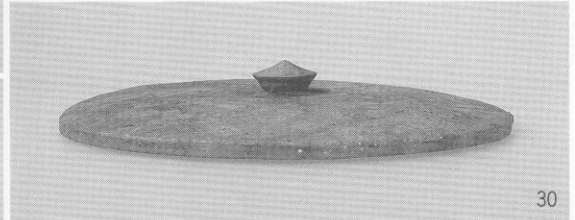
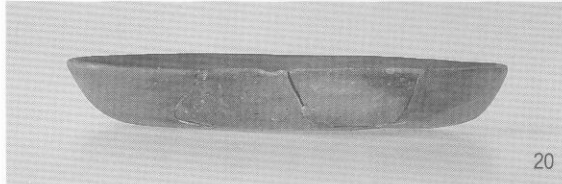
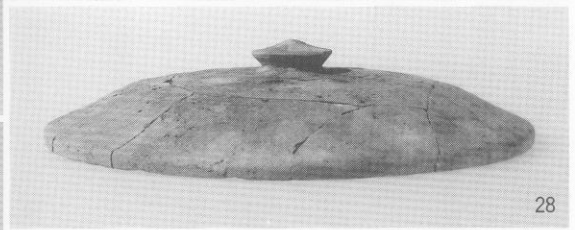
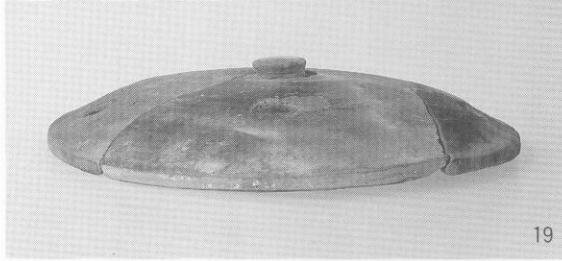
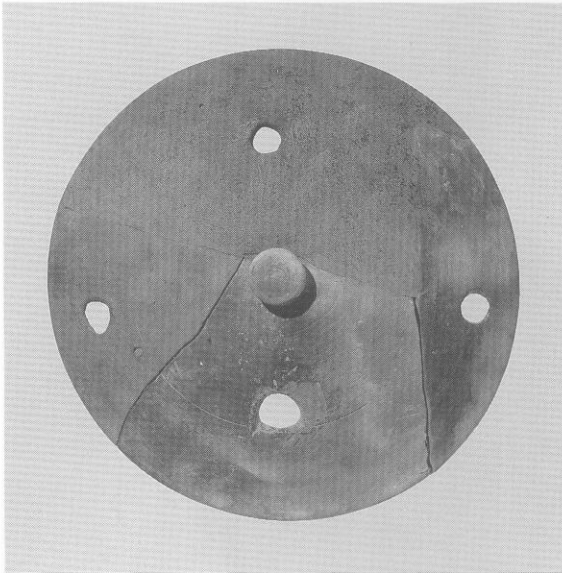
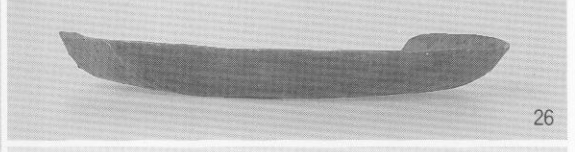
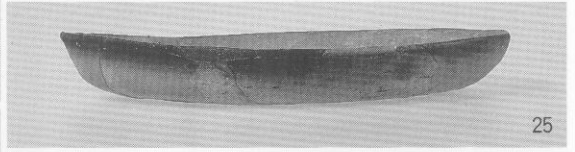
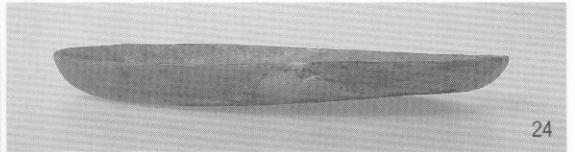
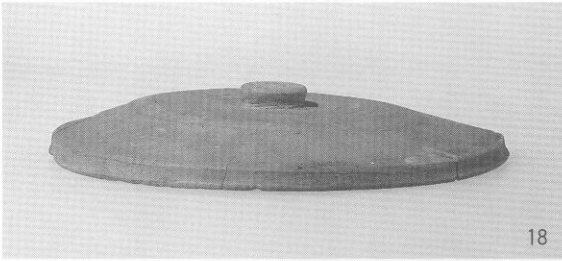
1. 18号窯跡

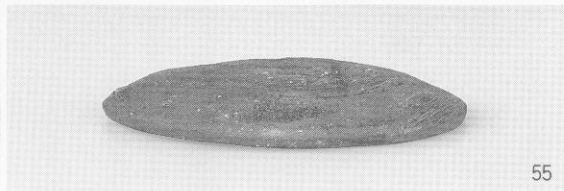
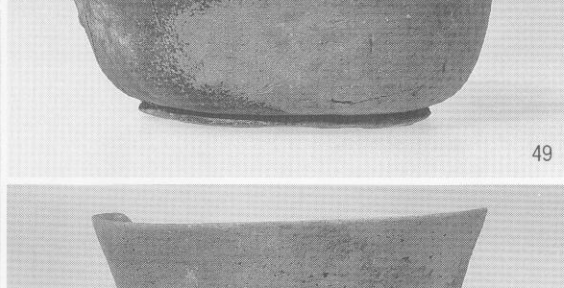
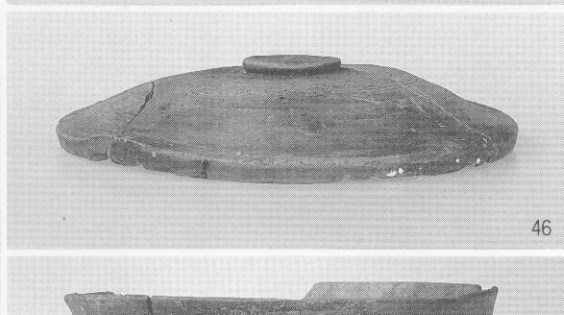
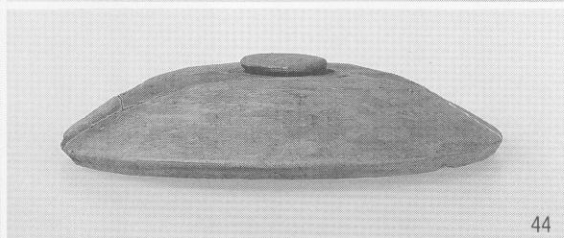
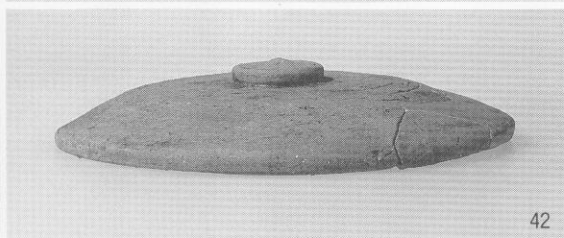
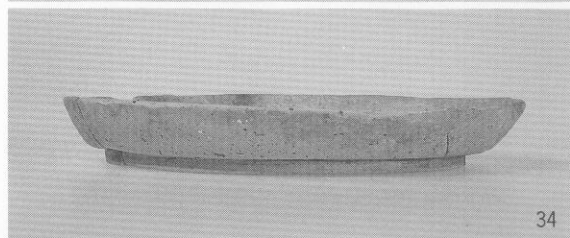
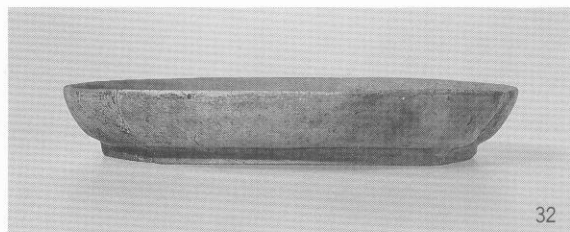


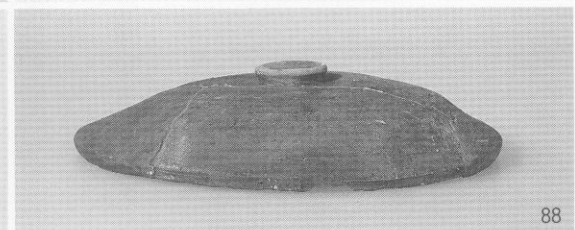
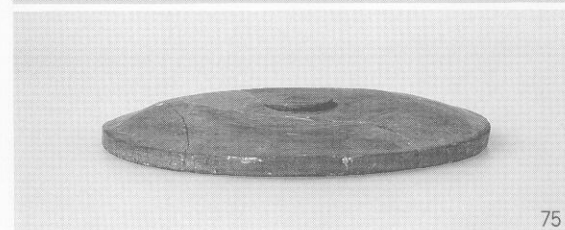
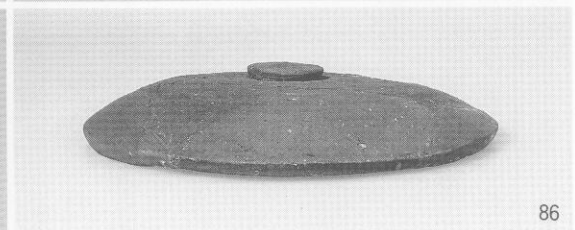
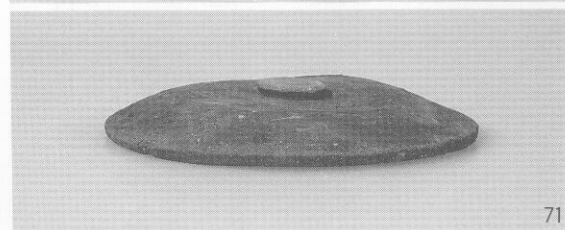
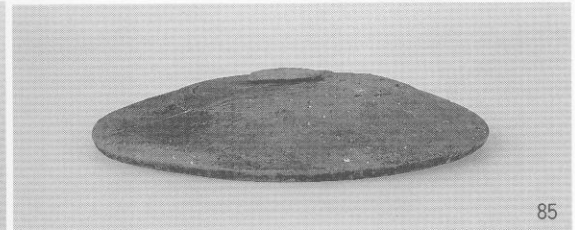
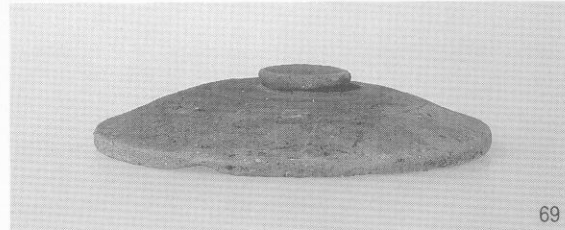
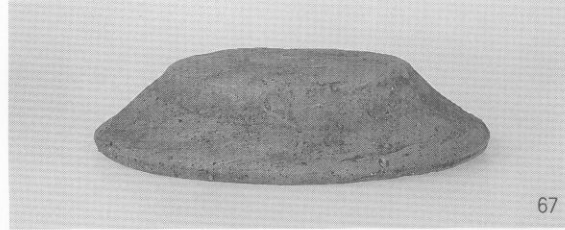
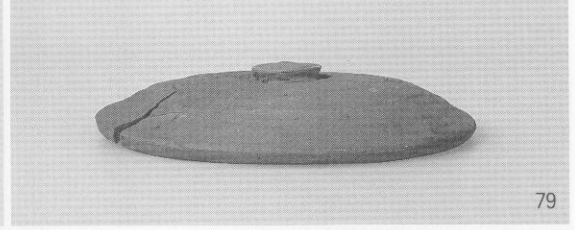
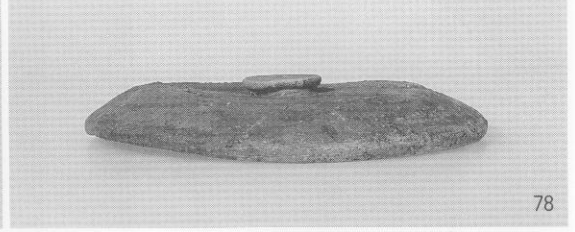
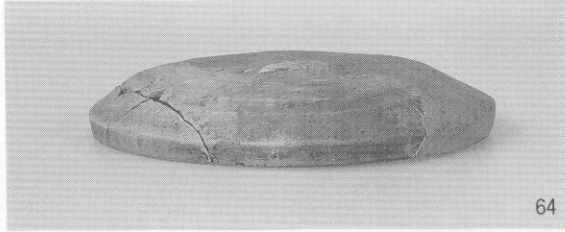
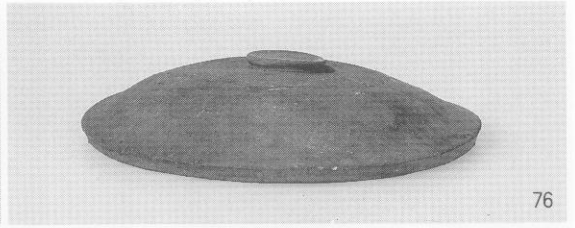
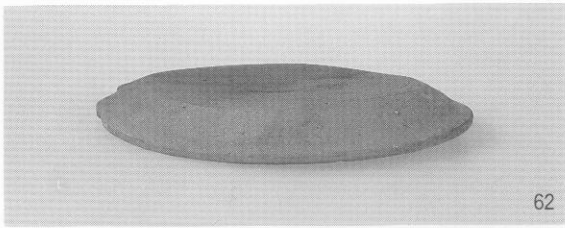
2. 槽形土坑

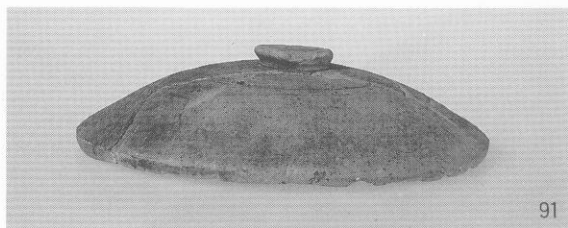


K 地区出土土器 1

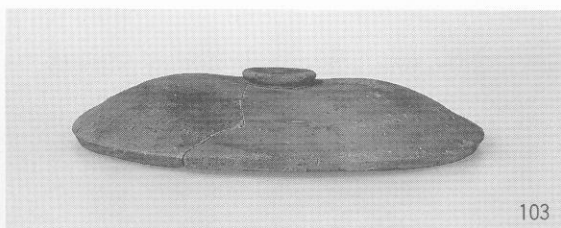








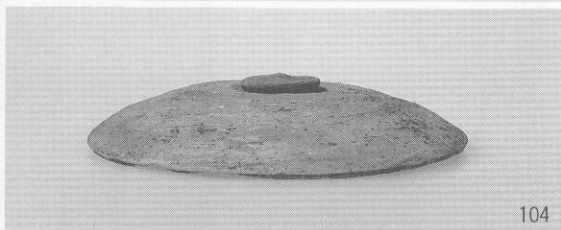
91



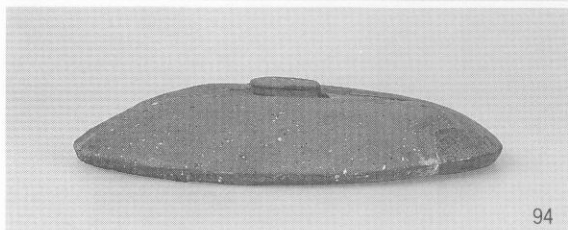
103



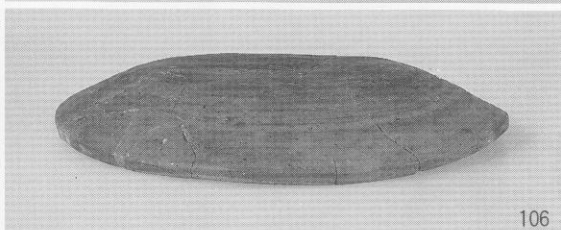
93



104



94



106



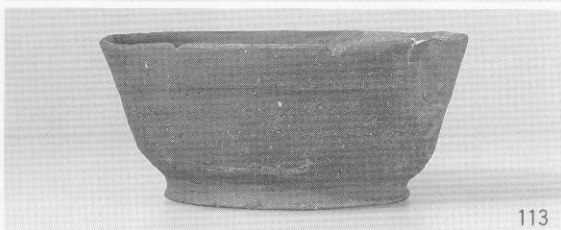
96



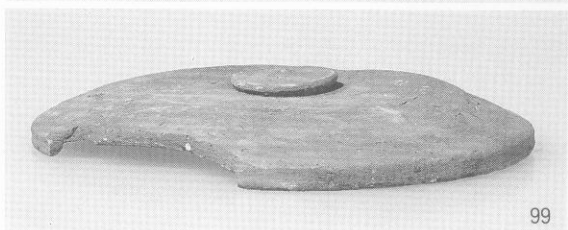
112



98



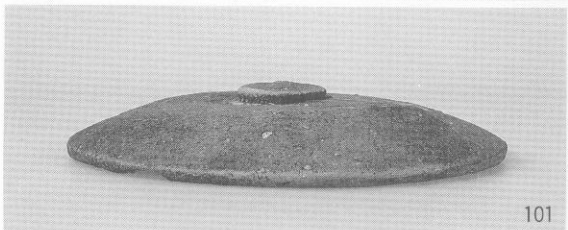
113



99



115

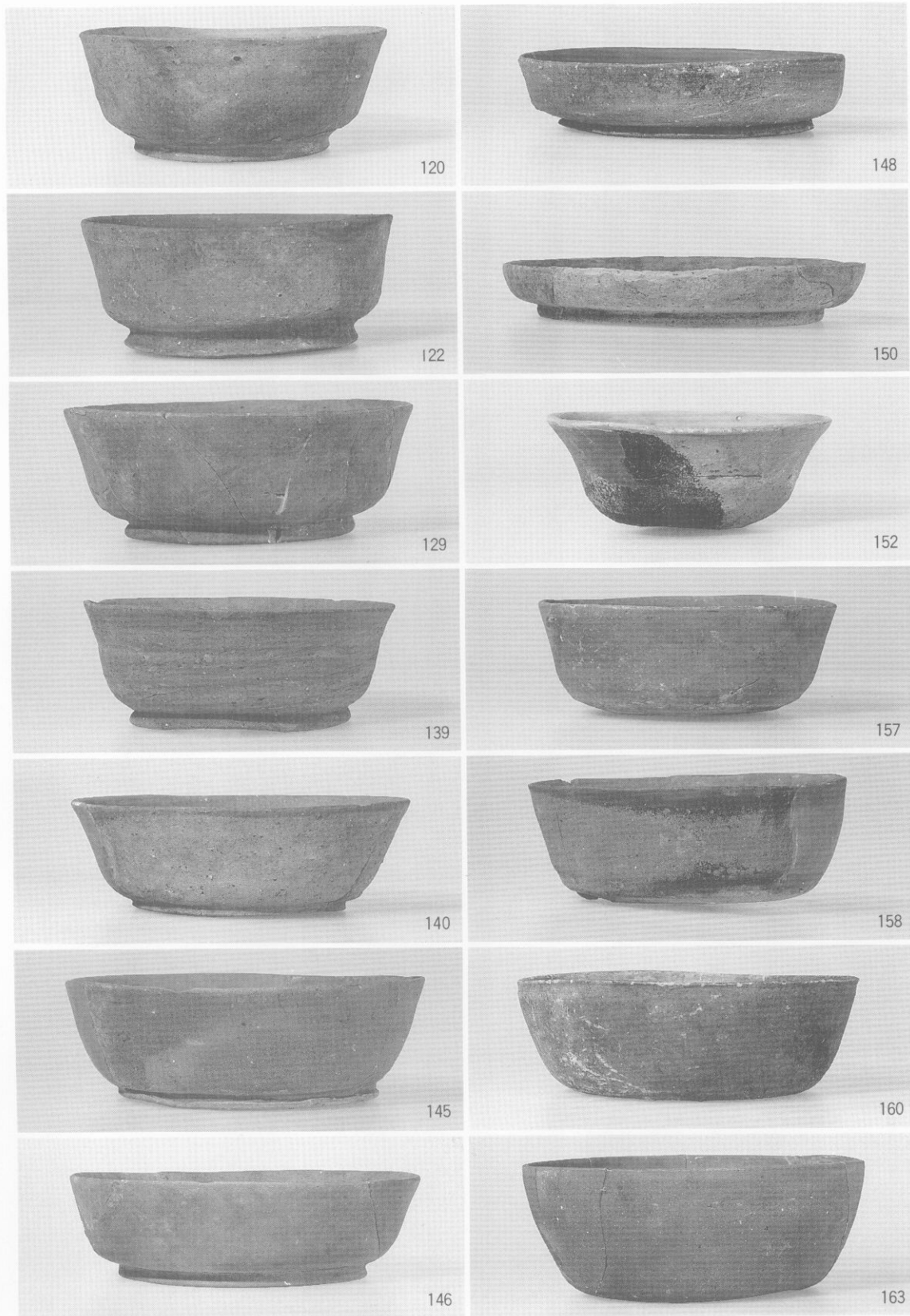


101



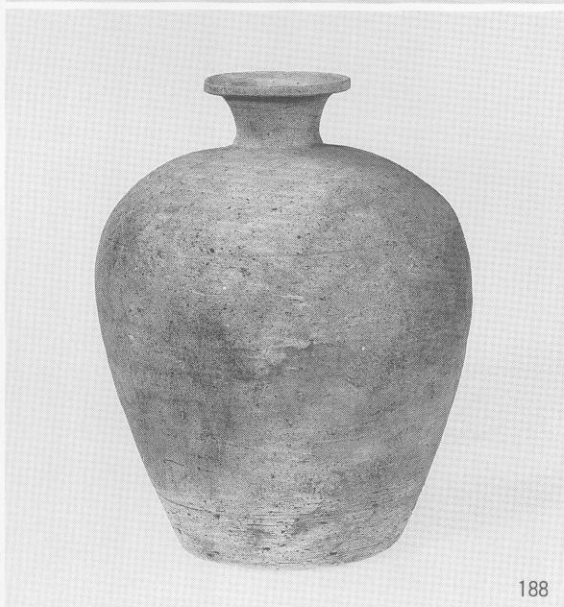
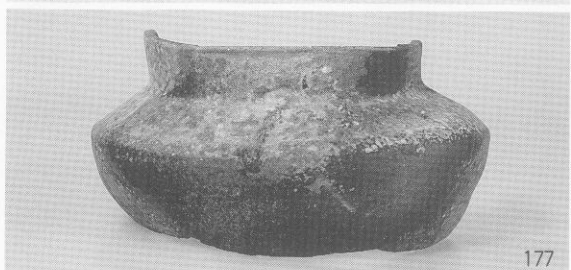
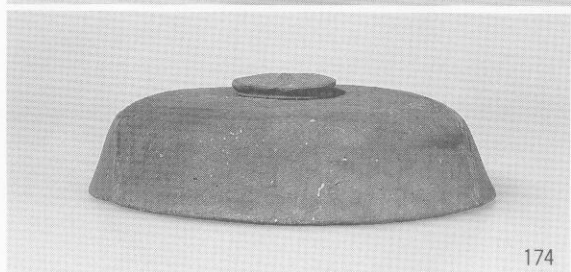
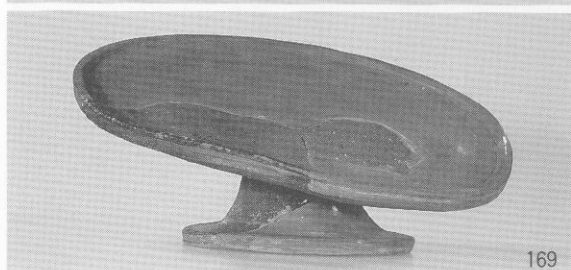
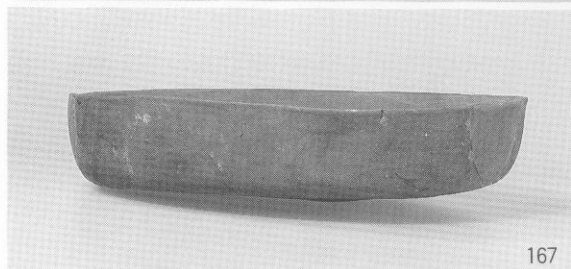
119

## K 地区



K地区出土土器 6





L 地区



1. L地区調査前全景（西から）



2. L地区調査前全景（東南から）



1. L地区確認調査北斜面全景



2. L地区確認調査南斜面全景

# 牛頸窯跡群 I

福岡県文化財調査報告書

第 80 集

昭和 63 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 (株) 天地堂印刷製本所

北九州市小倉北区大手町 10 番 18 号

## 福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 6 2	登録番号 10